一般国道170号西石切立体交差事業に伴う

鬼虎川遺跡第58・60次発掘調査報告

2006. 3

東大阪市教育委員会

一般国道170号西石切立体交差事業に伴う

鬼虎川遺跡第58・60次発掘調査報告

2006. 3

東大阪市教育委員会

はしがき

本調査地周辺は、国道170号および308号の敷設、国道308号の拡幅、近鉄東大阪線・阪神高速道路東大阪線・第二阪奈有料道路の開通により、それまでの田園風景は一変し、住宅・工場・会社などが建ち並ぶ都市化へと変容しました。その後、西石切交差点での渋滞現象もおこり、南北方向に貫く国道170号の立体交差事業を含む道路整備の必要性をもたらしました。

鬼虎川遺跡は、これまでの発掘調査によって、弥生時代中期の代表的な拠点集落としてよく知られています。しかし、本遺跡は後期旧石器時代以降現在に至るまで、食物の獲得地・集落・生産域として、ほとんど人跡の途絶えたことはありません。

今回の調査では、弥生時代の集落状況を確認するとともに、中期前半の地震跡や貝塚、中期中葉の遺構から土偶を検出し、古代から近世にわたる耕作状況なども知ることができました。

本書の内容は地域史解明の一助になるものと思っています。

現地調査および遺物整理・報告書作成にあたってご協力・ご教示を賜った関係諸機関・諸氏に感謝するとともに、今後一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成18年３月

東大阪市教育委員会

例　　言

1．本書は一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第58・60次発掘調査と第61次発掘調査の概要報告書である。

2．調査地は大阪府東大阪市宝町1510－８、1513－４、1530－１、1666－８である。

3．第58・60次調査は大阪府八尾土木事務所、付載の第61次調査は大阪府水道部東部水道事業所の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。

4．調査にかかる費用は全額大阪府八尾土木事務所が負担・用意した。

5．第58次調査は平成16年１月８日から６月15日まで、第60次調査は平成16年８月５日から11月29日まで発掘調査を行ない、第61次調査は大阪府水道部東部水道事業所・大阪府八尾土木事務所との協定に基づき平成16年12月24日から17年１月17日まで掘削土内より遺物を採取し、遺物整理および報告書作成作業は平成18年３月31日まで実施した。

6．第58・60次調査は若松博恵・影山（井筒）美智与・市田英介、第61次調査は菅原章太が担当し、遺物整理については主に才原金弘・影山・市田が行なった。

7．動物遺体の同定については大阪市立大学大学院医学研究科分子生体医学大講座器官構築形態学（解剖学第2）の安部みき子氏に依頼し、報文を賜った。

8．基本杭・調査杭打設は株式会社イシヤマエンジニアリング、株式会社アスカ、写真測量は株式会社アコード、木製品の保存処理・樹種同定、植物遺体同定・魚介類の同定および土壌分析は株式会社吉田生物研究所、遺物写真は株式会社毎日映画社に委託して実施した。

9．本書はⅠ～Ⅲ－１・２およびⅤ－２を若松、Ⅲ－３・４を影山・市田・才原、Ⅴ－１を市田、Ⅳ－１を安部、Ⅳ－２～５を株式会社吉田生物研究所が執筆し、若松が編集した。付は菅原・才原が執筆した。遺物の記述にあたっては、土器・石器・木製品・骨角牙製品については第58・60・61次を掲載順に通し番号を、鑑定・同定資料としての動物遺体・植物遺体は同様に資料番号として別の通し番号、資１・資２……を付した。

10．現地の土色及び土器等の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』（2000年版）に準拠し、記号表記もこれに従った。

11．調査及び報告書作成にあたっては下記の方々のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表します（敬称略・順不同）。

大阪府八尾土木事務所、大阪府水道部東部水道事業所、関西巴建設株式会社、亀山建設株式会社、安西工業株式会社、大阪府立弥生文化博物館、大阪府文化財センター、金関恕、小山田宏一、三木弘、大野薫、水野正好、秋山浩三、亀井聡、菊井佳弥、木下密運、岡崎晋明、松田順一郎、中西克弘、金村浩一、井上伸一、池崎智詞、別所秀高、魚矢聖子、田中龍男、松井章

12．現地調査及び遺物整理・報告書作成には下記の方々の参加を得た。

釜田有里絵、山内政治、土橋淳志、六島正貴、三嶋政行、幸田哲郎、妹尾裕介、正木敬之、内藤隆、利田恵美、溝口真紀、倉橋美圭、西村慶子、石割典子、西尾さつき、八田美代子、山口誠子、大高康正、西川美奈子、西川由里子、加藤正子、野口達也、内田（遠藤）友希

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経過 ……1
Ⅱ．位置と環境 ……2
Ⅲ．調査の概要 ……5
1．調査の方法と経過 ……5
2．基本層位 ……8
3．第58次調査－10工区－ ……11
a．層位 ……11
b．遺構 ……16
c．遺物 ……61
4．第60次調査－11工区－ ……139
a．層位 ……139
b．遺構 ……140
c．遺物 ……152
Ⅳ．自然科学 ……171
1．動物遺存体について ……171
2．貝遺体の同定 ……183
3．魚類遺体の同定 ……184
4．植物遺体の同定 ……185
5．木製品の樹種同定 ……187
6．花粉化石群集 ……188
7．植物珪酸体分析 ……192
Ⅴ．調査の総括 ……194
1．第56・58次調査出土の土偶について ……194
2．第58・60次調査のまとめ ……205
付．鬼虎川遺跡第61次調査 ……210

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺図 ……3
第２図　各次数調査地位置図 ……4
第３図　調査トレンチ位置および地区割図 ……5
第４図　掘り上げ田状況と国道170号および関連調査トレンチ位置図 ……6
第５図　現地説明会開催状況写真 ……6
第６図　第58次・第60次層位概念図 ……9
第７図　第58次層位断面図 ……13・14
第８図　第58次第25層上面遺構平面図 ……17

第９図　第58次第25層上面遺構断面図…… 18
第10図　第58次第22層上面遺構平面図…… 20
第11図　第58次第21層上面遺構平面図…… 20
第12図　第58次第22層上面遺構断面図…… 20
第13図　第58次第21層上面遺構断面図…… 20
第14図　第58次第20層上面遺構平面図…… 21
第15図　第58次第19層上面遺構平面図…… 22
第16図　第58次第18層上面遺構断面図…… 24
第17図　第58次第18層上面遺構平面図（折り込み）－写真測量図－……25・26
第18図　第58次第18層上面土坑46・47平面図…… 27
第19図　第58次第18層上面土坑46・47断面図…… 27
第20図　第58次第17層上面遺構平面図……29・30
第21図　第58次第17層上面遺構断面図…… 33
第22図　第58次第17層上面遺構断面図…… 35
第23図　第58次第17′層上面遺構平面図……36
第24図　第58次第17′層上面遺構断面図……36
第25図　第58次第16層上面遺構平面図…… 38
第26図　第58次第16層上面遺構断面図…… 40
第27図　第58次第13層上面土坑８平面・断面図…… 41
第28図　第58次第12層上面落ち込み16、足跡平面図……41
第29図　第58次第11層上面遺構平面図…… 43
第30図　第58次第10層上面遺構平面図…… 45
第31図　第58次第９層上面遺構平面図…… 47
第32図　第58次第８層上面遺構平面図…… 49
第33図　第58次第８′層上面遺構平面図…… 50
第34図　第58次第７層上面遺構平面図…… 52
第35図　第58次第７′層上面遺構平面図…… 53
第36図　第58次第６層上面遺構平面図…… 54
第37図　第58次第６′層上面遺構平面図…… 55
第38図　第58次第５層上面遺構平面図…… 56
第39図　第58次第４層上面遺構平面図…… 59
第40図　第58次第30層上面地震痕跡検出状況平面図…… 60
第41図　第58次第30層上面地震痕跡検出状況写真…… 60
第42図　第58次西壁地震痕跡断面図…… 60
第43図　第58次西壁地震痕跡断面写真…… 60
第44図　第58次縄文土器実測図…… 61
第45図　第58次縄文土器実測図…… 62
第46図　第58次縄文土器実測図…… 63
第47図　第58次大溝１・２出土土器実測図…… 65
第48図　第58次大溝２出土土器実測図…… 66

第49図　第58次大溝２出土土器実測図…… 68
第50図　第58次大溝３出土土器実測図…… 70
第51図　第58次大溝３・４出土土器実測図…… 71
第52図　第58次大溝４・５出土土器実測図…… 73
第53図　第58次溝93・94・96・97出土土器実測図…… 75
第54図　第58次溝95出土土器実測図…… 76
第55図　第58次溝95出土土器実測図…… 77
第56図　第58次溝106出土土器実測図…… 79
第57図　第58次土坑10～13・17・19・22出土土器実測図…… 81
第58図　第58次土坑21・25～28出土土器実測図…… 83
第59図　第58次土坑34・36・41出土土器実測図…… 84
第60図　第58次土坑43出土土器実測図　…… 86
第61図　第58次土坑42・44～46出土土器実測図…… 88
第62図　第58次土坑49出土土器実測図…… 89
第63図　第58次土坑49・51・53・73出土土器実測図…… 91
第64図　第58次ピット53・61・87・120・135・297、土器溜り出土土器実測図…… 93
第65図　第58次第14・14b・15層出土土器実測図…… 95
第66図　第58次第16層出土土器実測図…… 97
第67図　第58次第16層出土土器実測図…… 98
第68図　第58次第16層出土土器実測図…… 99
第69図　第58次第16層出土土器実測図…… 100
第70図　第58次第16層出土土器実測図…… 102
第71図　第58次第16層出土土器実測図…… 103
第72図　第58次第16層出土土器実測図…… 104
第73図　第58次第16層出土土器実測図…… 105
第74図　第58次第16e層出土土器実測図…… 106
第75図　第58次第17層出土土器実測図…… 107
第76図　第58次第17層出土土器実測図…… 108
第77図　第58次第17層出土土器実測図…… 110
第78図　第58次第17層出土土器実測図…… 111
第79図　第58次第18層出土土器実測図…… 113
第80図　第58次第14～18層出土土器実測図…… 115
第81図　第58次第14～18層出土土器実測図…… 116
第82図　第58次第14～18層出土土器実測図…… 117
第83図　第58次第14～18層出土土器実測図…… 118
第84図　第58次落ち込み４・５・11・16、流路１・４、溝15、第６～８層出土土器実測図…… 119
第85図　第58次第９～11・11b・12・13層、層位不明出土土器実測図…… 122
第86図　第58次土製品実測図…… 124
第87図　第58次土製品実測図…… 126
第88図　第58次土製品実測図…… 127

第89図　第58次石器実測図…… 129
第90図　第58次石器実測図…… 130
第91図　第58次石器実測図…… 131
第92図　第58次石器実測図…… 133
第93図　第58次石器実測図…… 134
第94図　第58次石器実測図…… 135
第95図　第58次木製品実測図…… 136
第96図　第58次骨・角・牙製品実測図…… 137
第97図　第58次銭貨拓影…… 138
第98図　第60次層位断面図……141・142
第99図　第60次第18・19層上面遺構平面図…… 143
第100図　第60次第16上層上面遺構平面図…… 144
第101図　第60次第16上層上面溝11内遺物出土状況平面図……144
第102図　第60次第16層上面遺構平面（部分）・断面図…… 145
第103図　第60次第14層上面遺構平面図…… 146
第104図　第60次第11層上面遺構平面図…… 147
第105図　第60次第４・５・９層上面遺構平面図…… 148
第106図　第60次第９層上面溝２アゼ断面図…… 148
第107図　第60次第１・２層上面遺構平面図…… 150
第108図　第60次溝２・３・５・７・９・10出土土器実測図…… 153
第109図　第60次溝11出土土器実測図…… 155
第110図　第60次溝11・12出土土器実測図……156
第111図　第60次溝13・19・20、土坑８出土土器実測図…… 157
第112図　第60次第13・14層出土土器実測図……159
第113図　第60次第16a・16b・17・18層出土土器実測図…… 160
第114図　第60次第13～18層出土土器実測図……162
第115図　第60次第３・４層出土土器実測図…… 163
第116図　第60次土製品実測図…… 164
第117図　第60次石器実測図…… 165
第118図　第60次石器実測図…… 166
第119図　第60次木製品実測図…… 168
第120図　第60次木製品実測図…… 169
第121図　第60次木製品実測図…… 170
第122図　第60次溝11内出土貝遺体写真…… 183
第123図　第60次溝11内出土魚類遺体写真…… 184
第124図　第60次溝11内出土植物遺体同定写真…… 186
第125図　第60次溝11内出土木製品樹種同定顕微鏡写真…… 187
第126図　第58・60次花粉化石分布図…… 190
第127図　第58・60次機動植物珪酸体分布図…… 193
第128図　第56次出土　土偶１…… 195

第129図　第58次出土　土偶２…… 195
第130図　土偶・土製品出土遺跡分布図…… 195
第131図　近畿地方における終末期土偶の変遷…… 197
第132図　台式土偶の分類…… 197
第133図　土偶１・２の分類…… 199
第134図　分銅形土製品…… 201
第135図　人形土製品…… 201
第136図　土偶に表される人面表現…… 201
第137図　第56次・第58次出土土偶写真…… 204
第138図　第56次（８・９工区）・58次・60次弥生時代中期前半・中半平面図…… 207・208
第139図　遺物検出作業風景…… 210
第140図　工事掘削断面図…… 210
第141図　第61次出土遺物実測図(１)…… 212
第142図　第61次出土遺物実測図(２)…… 213
第143図　第61次出土円面硯実測図…… 214
第144図　第61次出土土製品実測図…… 214

表　目　次

第１表　第58次・第60次層位対比表…… 10
第２表　第60次検出ピット計測値・埋土表…… 151
第３表　出土動物遺存体の学名…… 172
第４表　第58次における遺構別出土表…… 173～179
第５表　第58次における各時代の出土数と最小個体数…… 179
第６表　第58次におけるシカの下顎骨の計測値…… 179
第７表　第60次における弥生時代中期の遺構別出土表…… 180～182
第８表　第60次における弥生時代中期の出土数と最小個体数…… 182
第９表　第60次におけるイノシシの計測値…… 182
第10表　第60次溝11内出土貝遺体分類表…… 183
第11表　第60次溝11内出土魚類遺体分類表…… 184
第12表　第60次溝11内出土植物遺体同定表（木本）…… 185
第13表　第60次溝11内出土植物遺体同定表（草本）…… 185
第14表　第60次溝11内出土その他の植物遺体表…… 186
第15表　第58・60次花粉化石産出一覧表…… 189
第16表　第58・60次試料1ｇ当たりの機動細胞珪酸体個数…… 192

図　版　目　次

図版１　遺構　1. 調査地周辺航空写真（1950年ごろ）
　　2. 調査地周辺航空写真（1980年ごろ）
図版２　遺構　1. 調査地遠望（東より）
　　2. 調査地近景（北より）
図版３　遺構　1. 第58次11地区付近西壁断面（１）
　　2. 第58次11地区付近西壁断面（２）
図版４　遺構　1. 第58次11地区付近西壁断面（３）
　　2. 第58次11地区付近西壁断面（４）
図版５　遺構　1. 第58次11地区付近西壁断面（５）
　　2. 第58次第27層上面地震痕跡検出状況　11地区　西より
図版６　遺構　1. 第58次第25層上面遺構（１）１～３地区　南より
　　2. 第58次第25層上面遺構（２）１地区　東より
図版７　遺構　1. 第58次第25層上面遺構（３）12～15地区　北より
　　2. 第58次第25層上面遺構（４）13地区　東より
図版８　遺構　1. 第58次第25層上面　溝113断面　15地区　南より
　　2. 第58次第22層上面遺構　１～３地区　南より
図版９　遺構　1. 第58次第21層上面遺構　１～３地区　南より
　　2. 第58次第21層上面　ピット434断面　３地区　南より
図版10　遺構　1. 第58次第20層上面遺構　４～７地区　南より
　　2. 第58次第19層上面遺構　10～11地区　東より
図版11　遺構　1. 第58次第19層　縄文土器（深鉢）出土状況　２地区　南より
　　2. 第58次第19層　土坑59　５～６地区　北より
図版12　遺構　1. 第58次第18層上面遺構（１）　１～３地区　北より
　　2. 第58次第18層上面遺構（２）　４～７地区　南より
図版13　遺構　1. 第58次第18層上面遺構（３）　９～15地区　北より
　　2. 第58次第18層　土坑46・47内土器出土状況　２地区
図版14　遺構　1. 第58次第17層上面遺構（１）　１～４地区　北より
　　2. 第58次第17層上面遺構（２）　４～７地区　南より
図版15　遺構　1. 第58次第17層上面遺構（３）　９～15地区　北より
　　2. 第58次第17層上面遺構（４）　13～15地区　北より
図版16　遺構　1. 第58次第17層上面遺構（５）　13地区　東より
　　2. 第58次第17層　土坑42内土器出土状況　13～14地区　東より
図版17　遺構　1. 第58次第17層　土坑36内遺物出土状況　11地区
　　2. 第58次第17層　土坑49内土器出土状況　９地区
図版18　遺構　1. 第58次第17層　ピットｅ断ち割り状況　11地区　西より
　　2. 第58次第17層　ピットｃ断ち割り状況　10地区　西より
図版19　遺構　1. 第58次第17層　大溝３北壁断面　１地区　南より

2. 第58次第17′層上面遺構　4～6地区　南より
図版20　遺構　1. 第58次第16層上面遺構検出状況　9～15地区　北より
2. 第58次第16層　土坑14断面　11地区　南より
図版21　遺構　1. 第58次第16層　土坑12～14　10～11地区　東より
2. 第58次第16層上面遺構　9～15地区　南より
図版22　遺構　1. 第58次第16層　大溝1　4～5地区　東より
2. 第58次第16層　大溝1断面　4～5地区　東より
図版23　遺構　1. 第58次第16層　大溝2内木製品出土状況　13～15地区　西より
2. 第58次第16層　大溝2　13～15地区　北より
図版24　遺構　1. 第58次第13層　土坑8　12地区　西より
2. 第58次第12層上面遺構　9～12地区　南より
図版25　遺構　1. 第58次第11層上面遺構（1）　1～3地区　南より
2. 第58次第11層上面遺構（2）　12～15地区　北より
図版26　遺構　1. 第58次第9層上面遺構（1）　9～11地区　北より
2. 第58次第9層上面遺構（2）　12～14地区　東より
図版27　遺構　1. 第58次第8層上面遺構　9～12地区　南より
2. 第58次第8層上面　溝27断面　9地区　東より
図版28　遺構　1. 第58次第8′層上面遺構　10～11地区　東より
2. 第58次第7層　水田状遺構　14～15地区　東より
図版29　遺構　1. 第58次第7′層上面遺構（1）　13～15地区　西より
2. 第58次第7′層上面遺構（2）　13～15地区　西より
図版30　遺構　1. 第58次第5層　溝5・6　14～15地区　東より
2. 第58次第4層　自然流路1　2～3地区　東より
図版31　遺構　1. 第58次第4層上面遺構（1）　9～15地区　北より
2. 第58次第4層上面遺構（2）　9～15地区　南より
図版32　遺物　第58次　縄文土器　深鉢　大溝2出土弥生土器　甕
図版33　遺物　第58次　大溝2・3出土弥生土器　甕蓋・高杯・甕・壷
図版34　遺物　第58次　大溝4・5、溝93・95出土弥生土器　壷・鉢・高杯・甕蓋
図版35　遺物　第58次　溝95・106、土坑25・36・41出土弥生土器　甕・高杯・壷・脚部
図版36　遺物　第58次　土坑42～44・46出土弥生土器　細頸壷・壷蓋・高杯・壷・甕
図版37　遺物　第58次　土坑46・49出土弥生土器　壷・細頸壷・甕
図版38　遺物　第58次　土坑49・53・73、ピット53、第16層出土弥生土器　水差形土器・甕・壷・高杯・細頸壷
図版39　遺物　第58次　第16層出土弥生土器　壷・高杯・壷蓋
図版40　遺物　第58次　第16・16e・17層出土弥生土器　鉢・甕・高杯・壷
図版41　遺物　第58次　第17・18・14～18層出土弥生土器　壷・鉢・甕・壷蓋・甕蓋
図版42　遺物　第58次　第14～18層出土弥生土器　甕・壷・鉢
図版43　遺物　第58次　第14～18層出土弥生土器　壷蓋・甕・高杯
図版44　遺物　1. 第58次　縄文土器　深鉢・浅鉢
2. 第58次　縄文土器　深鉢・浅鉢

図版45　遺物　1. 第58次　縄文土器　深鉢
　　2. 第58次　縄文土器　深鉢
図版46　遺物　1. 第58次　縄文土器　深鉢
　　2. 第58次　縄文土器　深鉢
図版47　遺物　1. 第58次　縄文土器　深鉢
　　2. 第58次　大溝１出土弥生土器　壷・甕・甕蓋・脚部
図版48　遺物　1. 第58次　大溝２出土弥生土器　壷
　　2. 第58次　大溝２出土弥生土器　壷
図版49　遺物　1. 第58次　大溝２出土弥生土器　壷・無頸壷・甕
　　2. 第58次　大溝２出土弥生土器　甕
図版50　遺物　1. 第58次　大溝２出土弥生土器　甕
　　2. 第58次　大溝２出土弥生土器　甕
図版51　遺物　1. 第58次　大溝２出土弥生土器　甕・鉢・高杯
　　2. 第58次　大溝２出土弥生土器　鉢・高杯
図版52　遺物　1. 第58次　大溝３出土弥生土器　壷
　　2. 第58次　大溝３出土弥生土器　壷・細頸壷・甕
図版53　遺物　1. 第58次　大溝３出土弥生土器　甕・高杯
　　2. 第58次　大溝３出土弥生土器　高杯・鉢・甕蓋
図版54　遺物　1. 第58次　大溝４出土弥生土器　壷
　　2. 第58次　大溝４出土弥生土器　壷・甕・壷蓋・鉢
図版55　遺物　1. 第58次　大溝５出土弥生土器　壷・鉢・壷蓋・水差形土器・高杯
　　2. 第58次　大溝５出土弥生土器　高杯・鉢・甕
図版56　遺物　1. 第58次　溝93・94・96・97出土弥生土器　壷・甕
　　2. 第58次　溝95出土弥生土器　壷
図版57　遺物　1. 第58次　溝95出土弥生土器　壷・水差形土器・細頸壷・鉢・壷蓋
　　2. 第58次　溝95出土弥生土器　甕蓋・甕
図版58　遺物　1. 第58次　溝95出土弥生土器　甕
　　2. 第58次　溝95出土弥生土器　甕・高杯
図版59　遺物　1. 第58次　溝106出土弥生土器　壷・鉢・甕・高杯
　　2. 第58次　溝106出土弥生土器　壷
図版60　遺物　1. 第58次　土坑10・11・13出土弥生土器　甕・壷・高杯・鉢
　　2. 第58次　土坑12・17・19出土弥生土器　壷・甕・鉢・高杯
図版61　遺物　1. 第58次　土坑22出土弥生土器　壷・鉢・甕
　　2. 第58次　土坑21・25～28出土弥生土器　壷・鉢・甕
図版62　遺物　1. 第58次　土坑28・34・36・41出土弥生土器　鉢・甕・壷
　　2. 第58次　土坑36出土弥生土器　壷・甕
図版63　遺物　1. 第58次　土坑36出土弥生土器　甕
　　2. 第58次　土坑43出土弥生土器　壷・甕
図版64　遺物　1. 第58次　土坑43出土弥生土器　甕
　　2. 第58次　土坑43出土弥生土器　甕・高杯・鉢・甕蓋

図版65　遺物　1. 第58次　土坑42・44・45出土弥生土器　甕・壷・鉢・高杯
2. 第58次　土坑49出土弥生土器　壷・甕・甕蓋・鉢
図版66　遺物　1. 第58次　土坑49出土弥生土器　甕・鉢
2. 第58次　土坑51・53・73出土弥生土器　壷・甕・細頸壷
図版67　遺物　1. 第58次　土坑73出土弥生土器　壷・甕・鉢・壷蓋
2. 第58次　ピット53・61・87・120・135・297、土器溜り出土弥生土器　壷・甕・鉢
図版68　遺物　1. 第58次　第14層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第14層出土弥生土器　壷・細頸壷
図版69　遺物　1. 第58次　第14・15層出土弥生土器　高杯・甕・壷
2. 第58次　第16層出土弥生土器　壷
図版70　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第16層出土弥生土器　壷
図版71　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第16層出土弥生土器　壷
図版72　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第16層出土弥生土器　壷
図版73　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第16層出土弥生土器　壷・無頸壷
図版74　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　壷・無頸壷・細頸壷
2. 第58次　第16層出土弥生土器　水差形土器・甕蓋・壷蓋
図版75　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　高杯
2. 第58次　第16層出土弥生土器　高杯
図版76　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　高杯
2. 第58次　第16層出土弥生土器　高杯
図版77　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　高杯
2. 第58次　第16層出土弥生土器　鉢
図版78　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　鉢
2. 第58次　第16層出土弥生土器　鉢
図版79　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　甕
2. 第58次　第16層出土弥生土器　甕
図版80　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　甕
2. 第58次　第16層出土弥生土器　甕
図版81　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　甕
2. 第58次　第16層出土弥生土器　甕
図版82　遺物　1. 第58次　第16層出土弥生土器　甕
2. 第58次　第16ｅ層出土弥生土器　鉢・甕・壷
図版83　遺物　1. 第58次　第17層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第17層出土弥生土器　壷
図版84　遺物　1. 第58次　第17層出土弥生土器　壷

2. 第58次　第17層出土弥生土器　壷・細頸壷・水差形土器・壷蓋
図版85　遺物　1. 第58次　第17層出土弥生土器　鉢
2. 第58次　第17層出土弥生土器　鉢
図版86　遺物　1. 第58次　第17層出土弥生土器　高杯・甕蓋
2. 第58次　第17層出土弥生土器　甕
図版87　遺物　1. 第58次　第17層出土弥生土器　甕
2. 第58次　第17層出土弥生土器　甕
図版88　遺物　1. 第58次　第17層出土弥生土器　甕
2. 第58次　第17層出土弥生土器　甕
図版89　遺物　1. 第58次　第17層出土弥生土器　甕
2. 第58次　第18層出土弥生土器　甕・高杯
図版90　遺物　1. 第58次　第18層出土弥生土器　甕
2. 第58次　第18層出土弥生土器　壷・鉢
図版91　遺物　1. 第58次　第14～18層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第14～18層出土弥生土器　壷
図版92　遺物　1. 第58次　第14～18層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第14～18層出土弥生土器　壷
図版93　遺物　1. 第58次　第14～18層出土弥生土器　壷
2. 第58次　第14～18層出土弥生土器　無頸壷・水差形土器・壷蓋
図版94　遺物　1. 第58次　第14～18層出土弥生土器　鉢
2. 第58次　第14～18層出土弥生土器　高杯
図版95　遺物　1. 第58次　第14～18層出土弥生土器　高杯
2. 第58次　第14～18層出土弥生土器　甕
図版96　遺物　1. 第58次　第14～18層出土弥生土器　甕
2. 第58次　落ち込み４・５・11・16出土須恵器　杯、土師器　皿・甕、白磁　椀、黒色土器　椀
図版97　遺物　1. 第58次　流路１・４、溝15出土土師器　皿、須恵器　甕・底部、瓦器　椀
2. 第58次　第６・７層出土土師器　皿、瓦器　椀、緑釉陶器　椀、須恵器　甕・底部
図版98　遺物　1. 第58次　第８層出土土師器　皿・竈、須恵器　杯・擂鉢・底部、白磁　椀、瓦器　椀
2. 第58次　第９層出土土師器　皿、瓦器　椀、須恵器　杯・器台
図版99　遺物　1. 第58次　第10・11ｂ層出土須恵器　杯
2. 第58次　第11～13層・層位不明出土須恵器　甕・底部、土師器　甕・壷・椀・皿、瓦器　擂鉢、緑釉陶器　椀
図版100　遺物　第58次　土製品
図版101　遺物　1. 第58次　土製品
2. 第58次　土製品
図版102　遺物　1. 第58次　土製品（表）
2. 第58次　同上（裏）

図版103　遺物　1. 第58次　土製品（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版104　遺物　1. 第58次　土製品（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版105　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版106　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版107　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版108　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版109　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版110　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版111　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版112　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版113　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版114　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版115　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版116　遺物　1. 第58次　石器（表）
2. 第58次　同上（裏）
図版117　遺物　第58次　木製品
図版118　遺物　第58次　木製品、骨・角・牙製品、銭貨
図版119　遺構　1. 第60次　調査地近景　北より
2. 第60次４地区付近西壁断面（１）
図版120　遺構　1. 第60次４地区付近西壁断面（２）
2. 第60次４地区付近西壁断面（３）
図版121　遺構　1. 第60次第19層上面　溝14～16　５・６地区　北より
2. 第60次第19層上面　溝17・18　７地区　南より
図版122　遺構　1. 第60次第18層上面　溝19　１地区　北より
2. 第60次第18層上面　溝19内柄状木製品出土状況　１地区　南より
図版123　遺構　1. 第60次第16層上面　溝12　１地区　西より
2. 第60次第16層　溝12断面　１地区　東より

図版124　遺構　1. 第60次第16層上面遺構（1）　1～4地区　南より
2. 第60次第16層上面遺構（2）　1・2地区　西より
図版125　遺構　1. 第60次第16層上面遺構（3）　4地区　東より
2. 第60次第16層上面遺構（4）　6地区　東より
図版126　遺構　1. 第60次第16層上面遺構（5）　4～6地区　北より
2. 第60次第16層　溝11断面　2地区　北より
図版127　遺構　1. 第60次第16層　溝13内木製品出土状況　4地区　北より
2. 第60次第16層　溝13内鍬出土状況　4地区　北より
図版128　遺構　1. 第60次第16層　溝13内長柄鋤未成品出土状況　4地区　南より
2. 第60次第16層　溝13西壁断面　4地区　南より
図版129　遺構　1. 第60次第16層　杭3断ち割り状況　2地区　東より
2. 第60次第16層　杭6断ち割り状況　2地区　東より
図版130　遺構　1. 第60次第16層　溝11内貝塚検出状況　4・5地区　東より
2. 第60次第16層　溝11内遺物出土状況（1）　4地区　東より
図版131　遺構　1. 第60次第16層　溝11内遺物出土状況（2）　3地区　東より
2. 第60次第16層　溝11内木製品出土状況　4地区　東より
図版132　遺構　1. 第60次第16層　溝11内ヘラ状木製品出土状況　5地区　南より
2. 第60次第16層　溝11内鍬出土状況　4地区　北より
図版133　遺構　1. 第60次第14層上面遺構（1）　3地区　北より
2. 第60次第14層　溝9断面　3地区　東より
図版134　遺構　1. 第60次第14層上面遺構（2）　4地区　東より
2. 第60次第14層上面遺構（3）　5地区　東より
図版135　遺構　1. 第60次第14層上面遺構（4）　1～5地区　南より
2. 第60次第14層　高まり断面　5地区　東より
図版136　遺構　1. 第60次第14層上面遺構（5）　5・6地区　東より
2. 第60次第14層　溝10断面　6・7地区　東より
図版137　遺構　1. 第60次第11層上面　溝6　2・3地区　北より
2. 第60次第11層上面　土坑5、溝7　4地区　北より
図版138　遺構　1. 第60次第11層上面　ピット5・6　5地区　南より
2. 第60次第11層上面　溝5　6・7地区　南より
図版139　遺構　1. 第60次第11層　溝5断面　6・7地区　東より
2. 第60次第11層　溝5内弥生土器出土状況　7地区　北より
図版140　遺構　1. 第60次第11層　石鏃出土状況　6地区　南より
2. 第60次第11層　自然流路、土坑4、足跡　1・2地区　西より
図版141　遺構　1. 第60次第9層上面　土坑3　6地区　南より
2. 第60次第9層上面　ピット1～5、土坑2　7地区　南より
図版142　遺構　1. 第60次第8層上面　足跡　7地区　南より
2. 第60次第5層上面　溝4、落ち込み3　3・4地区　北より
図版143　遺構　1. 第60次第4層上面　溝1　2地区　南より
2. 第60次第4層上面　溝3、落ち込み2　3～5地区　南より

図版144　遺構　1. 第60次第４層　溝２断面　４地区　西より
　　2. 第60次第４層　溝３断面　５地区　東より
図版145　遺構　1. 第60次第２層上面　落ち込み１　４・５地区　南より
　　2. 第60次第１層上面　井路１　１～３地区　南より
図版146　遺構　1. 第60次第１層上面　井路２　６・７地区　北より
　　2. 第60次第１層　井路１断面　３地区　東より
図版147　遺物　第60次　溝５・７・12・13・20、第16ａ層出土弥生土器　壷・甕蓋・鉢・甕・高杯
図版148　遺物　第60次　第16ａ・13～18層出土弥生土器　甕蓋・壷蓋・無頸壷・細頸壷・甕
図版149　遺物　1. 第60次　溝２・３・９出土弥生土器　壷・甕
　　2. 第60次　溝５出土弥生土器　壷・甕・高杯・甕蓋
図版150　遺物　1. 第60次　溝７・10出土弥生土器　高杯・鉢・甕
　　2. 第60次　溝11出土弥生土器　壷
図版151　遺物　1. 第60次　溝11出土弥生土器　無頸壷・鉢・高杯・甕
　　2. 第60次　溝11出土弥生土器　甕
図版152　遺物　1. 第60次　溝11出土弥生土器　甕
　　2. 第60次　溝12・19・20出土弥生土器　壷・甕
図版153　遺物　1. 第60次　溝13出土弥生土器　壷・甕・鉢
　　2. 第60次　溝13・土坑８出土弥生土器　甕・鉢・細頸壷
図版154　遺物　1. 第60次　第13層出土弥生土器　壷・甕・鉢・高杯・細頸壷
　　2. 第60次　第14層出土弥生土器　壷・甕
図版155　遺物　1. 第60次　第15～18層出土弥生土器　壷・甕
　　2. 第60次　第13～18層出土弥生土器　壷
図版156　遺物　1. 第60次　第13～18層出土弥生土器　壷・鉢
　　2. 第60次　第13～18層出土弥生土器　甕・高杯
図版157　遺物　1. 第60次　第３・４層出土瓦器　椀
　　2. 第60次　土製品
図版158　遺物　1. 第60次　石器（表）
　　2. 第60次　同上（裏）
図版159　遺物　1. 第60次　石器（表）
　　2. 第60次　同上（裏）
図版160　遺物　1. 第60次　石器（表）
　　2. 第60次　同上（裏）
図版161　遺物　1. 第60次　石器（表）
　　2. 第60次　同上（裏）
図版162　遺物　第60次　木製品
図版163　遺物　第60次　木製品
図版164　遺物　第60次　木製品
図版165　遺物　第60次　木製品
図版166　遺物　第58次　動物遺体
図版167　遺物　第58次　動物遺体

図版168　遺物　1. 第58次　動物遺体
　　2. 第60次　動物遺体出土状況
図版169　遺物　1. 第58次　人骨
　　2. 第58次　人骨
図版170　遺物　第60次　動物遺体
図版171　遺物　第60次　動物遺体
図版172　遺物　1. 第60次　動物遺体
　　2. 第60次　溝11内貝塚検出状況
図版173　遺物　第58・60次　花粉化石群集顕微鏡写真
図版174　遺物　第58・60次　植物珪酸体顕微鏡写真
図版175　遺物　1. 第61次　弥生土器　壷、須恵器　円面硯、土製品
　　2. 第61次　弥生土器　壷
図版176　遺物　1. 第61次　弥生土器　壷
　　2. 第61次　弥生土器　壷・細頸壷・鉢
図版177　遺物　1. 第61次　弥生土器　鉢
　　2. 第61次　弥生土器　甕
図版178　遺物　1. 第61次　弥生土器　高杯
　　2. 第61次　弥生土器　甕

Ⅰ．調査に至る経過

調査は一般国道170号の西石切立体交差事業に伴う発掘調査の一貫として平成16年に実施した。国道170号と国道308号とが交叉する「被服団地前」は交通渋滞をきたす場所として早くからその解消が求められてきた。平成９年４月の第二阪奈有料道路の開通によりその混雑は増し、平成10年に西石切立体交差事業は国庫補助事業として採択された。国道308号の中央分離帯には阪神高速道路東大阪線･第二阪奈有料道路連絡道および近畿日本鉄道東大阪線の橋脚が存立し、これらは国道170号の上部に位置することから、立体交差事業はアンダーパス工法が選択された。

「被服団地前」交叉点付近は弥生時代中期の拠点集落として周知されている鬼虎川遺跡が広がり、1975年以降、60次におよぶ発掘調査が行なわれている。これまでの調査で東北部域（第18・25・29・32・33次など）から縄文時代前期の縄文海進による海食崖を検出し、その付近からは前期～中期の土器・石器や魚介類などの動物遺体が出土した。弥生時代の遺構・遺物は多数確認している。前期は遺跡北西部に長原式土器と前期土器を伴う貝塚（第21・27次）、ほぼ中央部に前期土器を多量に含む大溝（第40・45・46次など）などが見られるが、集落状況は不明である。遺跡北側からは（北端部付近は希薄）中期の大溝、井戸などの土坑、柱穴などのピット群、貝塚、そして方形周溝墓・土坑墓・土器棺墓などの遺構と多量の弥生土器・石器・木製品などが検出され、複数の大溝を伴う大集落（環濠集落）が形成されていた。後期になると集落は縮小化した。古墳時代前期には集落の中心は南部へ（第36次など）、後期には東北部へと移行していったようである（第23次など）。飛鳥時代以降の遺構・遺物は希薄で、西部域を中心に生産域と化す。奈良から平安時代前半には条里制に伴う遺構が見られるようになり、中世にはその坪境などに道・溝が設けられ、近世になると掘り上げ田に伴う井路が形成されていた。

立体交差計画域が遺跡中央部を縦断することから、事業者である大阪府（大阪府八尾土木事務所）と調査主体者の東大阪市（東大阪市教育委員会文化財課）は協議に入り、調査域の確認（特に北部）と国道170号現道下埋設管等の移設・埋設先である両側拡幅箇所の発掘調査を実施することで合意し、平成６年度以降道路拡幅域の確保に伴い随時調査を続行している。

平成６年度に調査対象の北限および遺跡の北端を確定した国道308号以北の国道170号北西側部の調査（第38次）、８年度に同北東側部の調査（第42次）を行ない、中・近世の溝および自然流路と近世から近代の掘り上げ田の井路などを検出し、弥生時代前・中期の遺物包含層をも確認したが出土遺物は希薄であった。第44次調査は新川以南の国道170号の西側で、古代の墨書土器や弥生時代中期遺物包含層から大量の弥生土器などとともにヒスイ製獣形勾玉が出土し、弥生中期前半から中半の大溝と２基の土坑墓を検出した。第49次調査は国道308号以北の国道170号の西側で、弥生時代中期の自然流路、中・近世の溝および近世から近代の掘り上げ田の井路などを検出した。第52次調査は第49次の北およびその東対面で、弥生時代前期から中期の溝・ピット・自然流路、中・近世の溝および自然流路と近世から近代の掘り上げ田の井路、弥生土器や中世末の板卒塔婆などを検出した。第53次調査は新川以南の国道170号の東側で、条里制に伴う東西方向の道・溝を確認し、弥生時代中期遺物包含層からは多量の弥生土器と細形銅剣型磨製石剣などが出土し、弥生時代前期から中期末の土坑墓、土器棺墓、柱穴・土坑群や大溝を検出した。第56次調査は第52次の西南および南に位置し、弥生時代中期遺物包含層から大量の弥生土器などとともに土器棺墓・土偶が出土し、弥生時代前期から中期末の大溝、ピット・土坑群などと、平安時代までの南北方向の坪境遺構を確認した。

Ⅱ．位置と環境

鬼虎川遺跡は生駒山の西麓、標高４～８ｍの扇状地末端部から沖積平野にかけて広がり、現在の東大阪市弥生町・西石切町・宝町・新町一帯に位置する旧石器時代から江戸時代にわたる複合遺跡である。北端中央部から南東部にかけて国道170号（外環状線）がほぼ南北に走り、北部にはこれに直行するように東西方向の国道308号が延び、その中央分離帯域には近畿日本鉄道東大阪線および阪神高速道路東大阪線と第二阪奈有料道路連絡道が内包されている。西部には南から北方向に流れる恩智川があり、東からそれに注ぎ込む新川などの川がある。現在は住宅・工場・会社・病院などが建ち並び、水田・畑地はほとんど見ることはできない。しかし、50年ほど前までは小集落が点在し、掘り上げ田などの田園が拡がるのどかな地域であった。

本遺跡は弥生時代中期を中心とした大集落跡としてよく知られているが、人跡は後期旧石器時代にまで遡る。この時期の遺跡としては東接する西ノ辻遺跡をはじめ、千手寺山・正興寺山・山畑遺跡などがあり、ナイフ型石器・翼状剥片が出土している。

縄文時代の遺跡は山麓部から段丘・扇状地上などに点在し、まずは有舌尖頭器が出土した草香山・貝花遺跡と本遺跡がある。早期では多くの押型文土器とともに石器・土偶と炉跡・集石遺構を検出した神並遺跡があり、この土器は西ノ辻・日下・山畑遺跡からも出土している。前期は温暖化がピークに達し（縄文海進）、本遺跡東部などからこの時期の海食崖が検出され、前・中期の土器や魚介類などの動物遺体が出土している。中期の遺跡としては善根寺・縄手・馬場川遺跡があるが、それほど顕著ではない。しかし後期には多くの土器・石器などとともに住居跡・配石遺構などが見られる縄手遺跡があり、日下・芝ヶ丘・神並・鬼塚・馬場川遺跡とともに本遺跡からもこの時期の土器が出土している。そして晩期になると貝塚・墓地や多量の土器・石器が確認されている日下遺跡をはじめ、鬼塚・馬場川・宮ノ下などの遺跡で集落が営まれていた。

弥生時代になると集落形成は主に平野部に移り、本遺跡の西端に長原式土器と前期土器を包含した貝塚があり、本遺跡中央部や植附・中垣内遺跡、本市中南部の山賀遺跡などから前期土器が出土している。中期には本遺跡において数条の大溝を伴う大集落が営まれ、土器・石器・木製品などの大量の遺物と方形周溝墓や貝塚などを検出しており、これに近い状況は本市中央部の瓜生堂遺跡でも見られる。やや遅れて中期後半から後期前半には西ノ辻遺跡で集落が形成された。後期になると集落は小規模化するものの、本遺跡や段上・上六万寺・北鳥池遺跡などの平野部の集落と、山畑・岩滝山遺跡などの高地性集落が営まれていた。

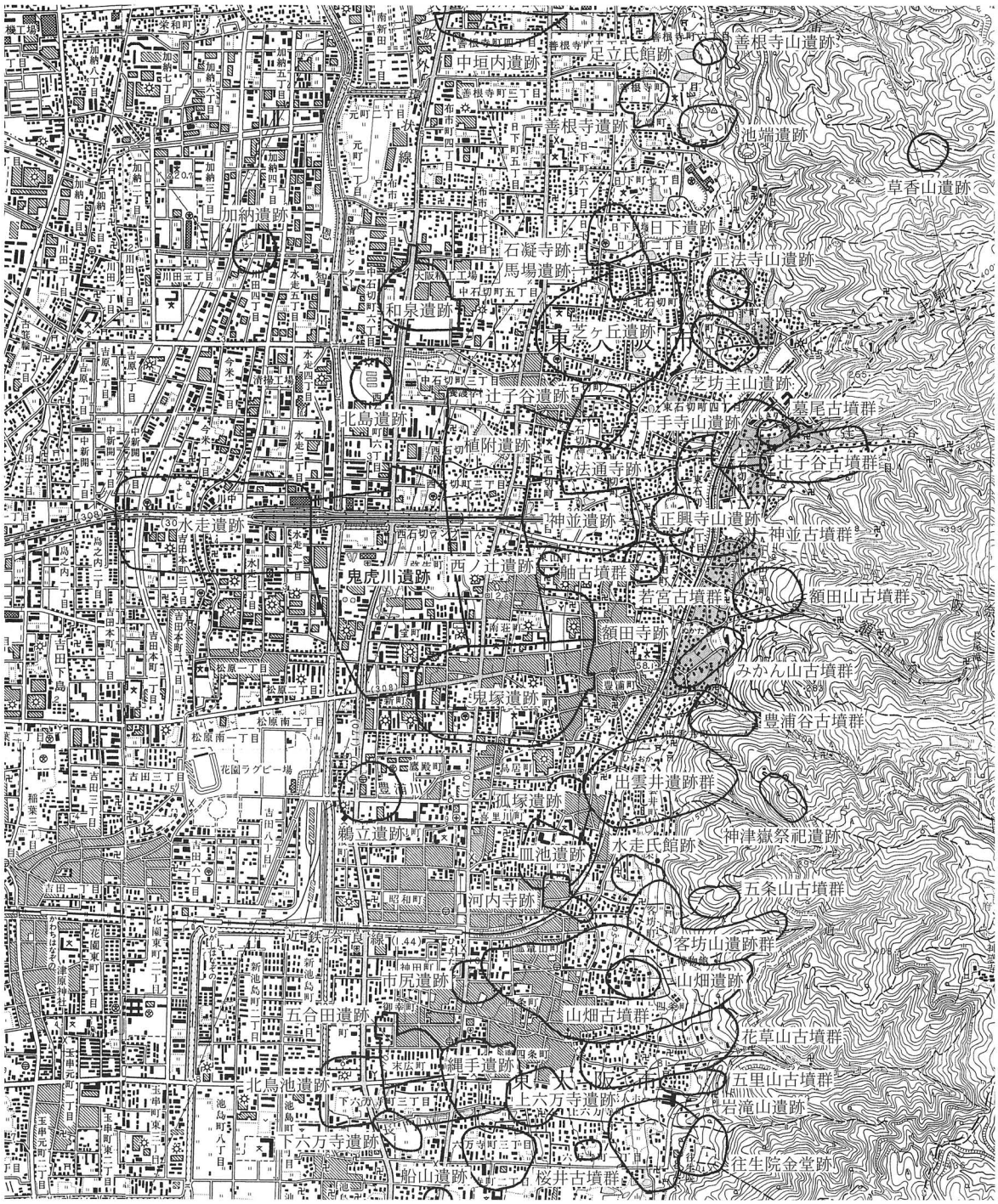
古墳時代前期には本遺跡南部および五合田・西岩田遺跡などから多くの土師器が出土し、集落が点在して形成されていた。中・後期になると植附・芝ヶ丘・神並・西ノ辻・山畑・市尻遺跡などとともに本遺跡北部でも集落が営まれていたが、いずれもそれほど大きくない。本市には前期の大型古墳は見られないが、塚山・えの木塚・客坊山１号墳など中期以降古墳は築かれるようになり、山畑古墳群・花草山古墳群・客坊山古墳群・神並古墳群・出雲井古墳群などの群集墳、植附・段上・巨摩廃寺などに小型低丘墳と、小規模ではあるが後期古墳が山麓部を中心に数多く築造された。

飛鳥・奈良時代以降は仏教の受容を反映するかのように若江寺・河内寺・法通寺・石凝寺、やや後出する客坊廃寺などの寺院が建立された。本遺跡や西ノ辻・神並・鬼塚遺跡などからは掘立柱建物・井戸・溝、須恵器・土師器や墨書土器などが出土し、この時期の集落・耕作関連の遺構が検出されている。

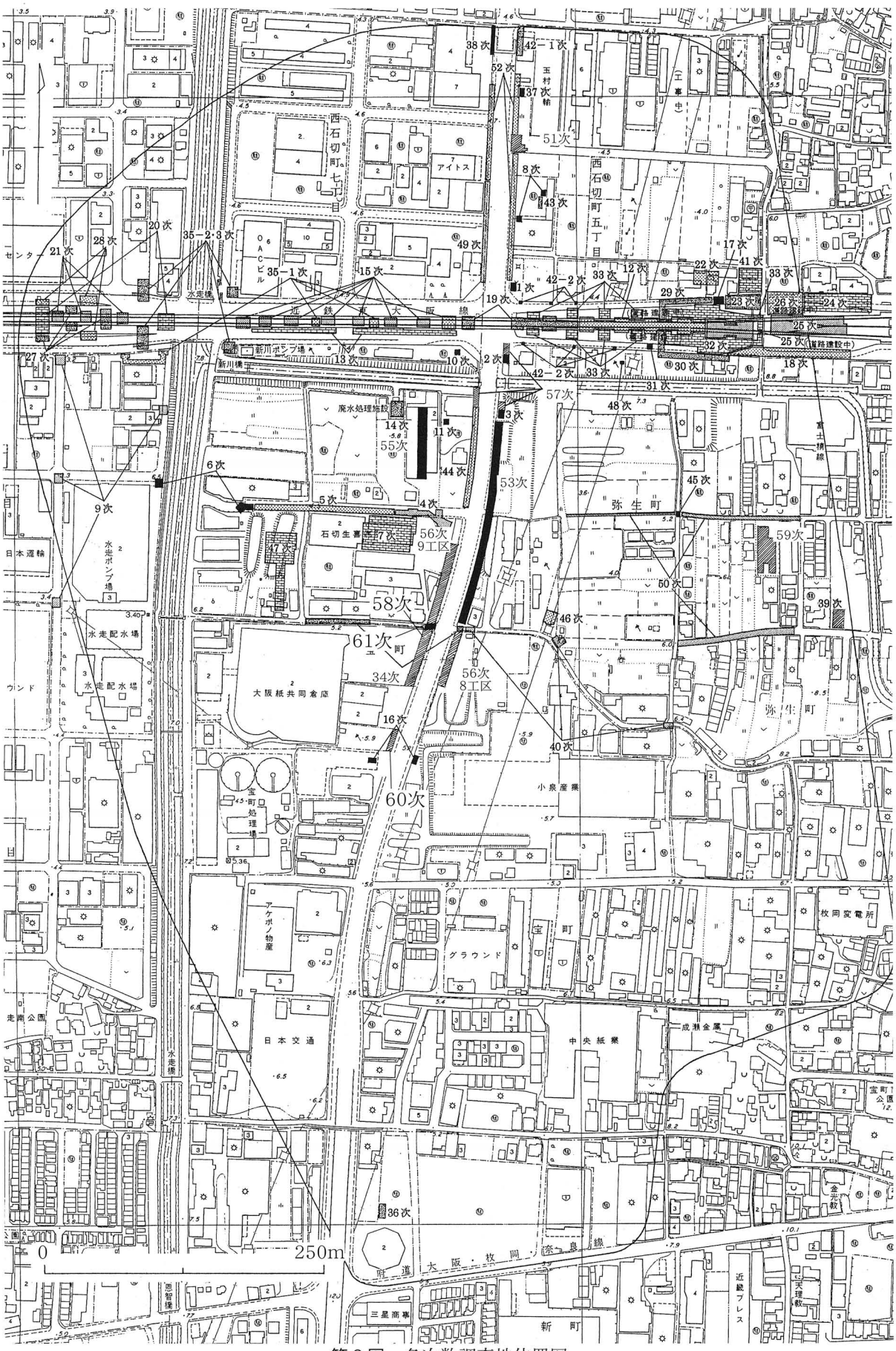
平安時代前半からは条里制に伴う東西・南北方向の溝・畔などの遺構、平安時代後半から鎌倉時代

には広い範囲にわたり整地活動が見られ、西ノ辻・神並遺跡などで掘立柱建物跡などの集落遺構とともに客土層や耕作跡が確認されている。また、西接する水走遺跡ではこの時期に堰・堤防を設けて大掛かりな開発を行なうとともに、大溝を伴う集落も形成された。

南北朝期を含む室町時代には西ノ辻遺跡をはじめ、のちの暗峠越奈良街道・東高野街道などの道路沿いなどに村落が営まれ、その状況はほとんど江戸時代以降まで存続した。またこの時期、平野部の若江城を中心として客坊城・往生院城などの城が数多く築造されたが、安土・桃山時代までには廃絶または城としての機能をなくしてしまった。江戸時代になると大和川の付け替え工事が行なわれ、平野部における生産域の状態を一変させた。旧の河川・池は埋め立てられてその周辺を含め田畑が整備され、本遺跡西部域ではいわゆる掘り上げ田が形成された。



第１図　遺跡周辺図（1/25000）



第２図　各次数調査地位置図

Ⅲ. 調査の概要

1. 調査の方法と経過

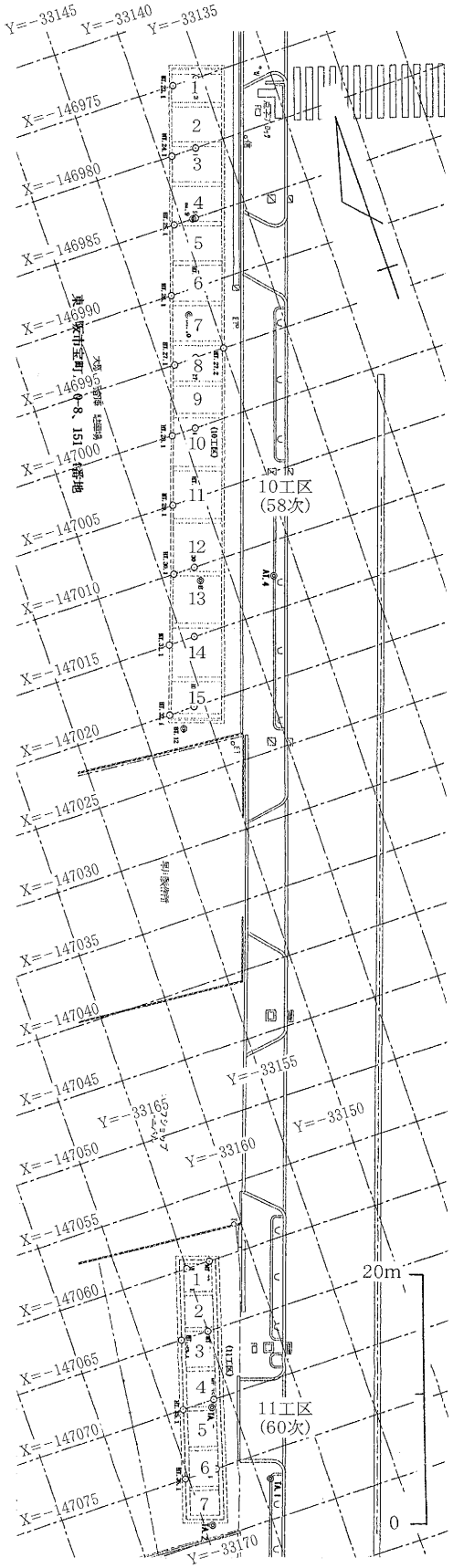
調査の方法

今回の両調査地は国道170号拡張予定地でその西歩道と拡幅域にあたるが、工事箇所および工事工程（発掘調査と終了後の水道管等の埋設など）の相違によって２つの工区－10工区・11工区－に分かれ、前者を第58次、後者を第60次として調査を実施した（工区名は平成10年度－1工区、平成11年度－２工区……に順じている）。調査期間は 第58次が平成15年１月８日から16年６月15日まで、 第60次が８月５日から11月29日までであった。各調査工区は東西幅約４～３ｍで南北方向に細長く、第58次は約50m、第60次は約20m、計約260㎡であった。調査区は会社などの営業、車輌の通行、掘削残土の搬出箇所の確保などから覆工板を布設した場所もあった。とくに第60次はほぼ全面で、第58次は北側に敷設された。両調査地は現地表（GL）下約1.5～２ｍの道路舗装・盛土などを機械掘削し、以下一部機械・人力併用掘削部を設けながらGL約－６ｍまで人力掘削による調査を実施した。

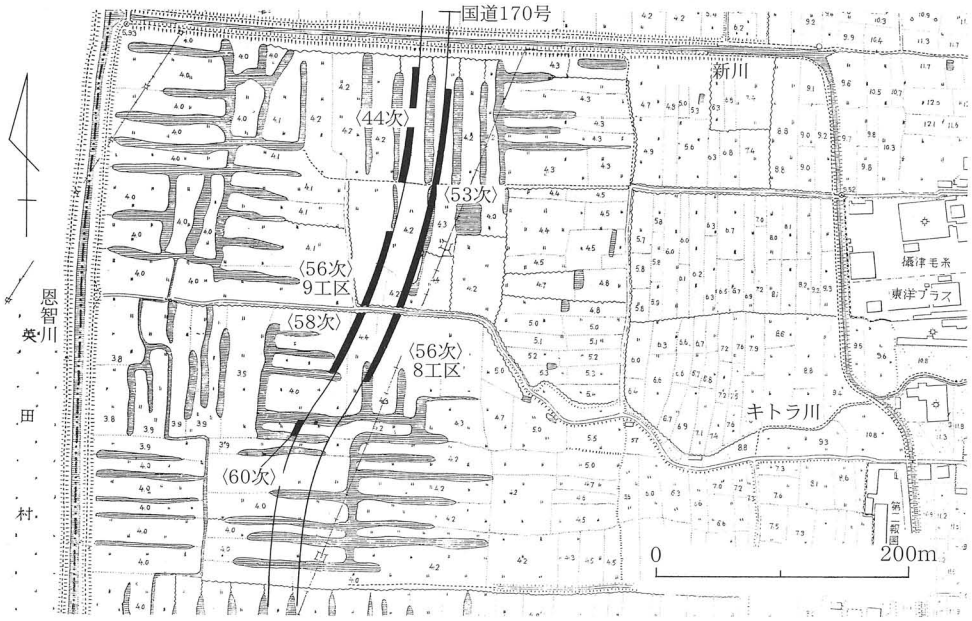
調査にあたっては、道路敷き隣接地で掘削深度が６ｍ近くになることなどから、調査区域は土留め鋼矢板を打設するとともに２段の支保工が架設された。南北方向の腹起に対する東西方向の切梁によって生じた小区画を利用して地区割とし、それに基づいて遺物の取り上げなどを行なった。また遺構・断面図の製作にあたっても国土座標値と併行して用いた（第３図参照）。

第58次は西接する会社・工場への車輌等の通行と残土搬出箇所・通路の確保のため、調査地の北側に覆工板が敷設された。平成15年12月初旬から花壇等の上部構造物の撤去と鋼矢板の打設、12日よりGL－1.8mまで立会しながらの機械掘削を行ない、15年内に覆工板敷設と１段目支保工を架設し、16年１月から人力掘削による調査に入った。残土置き場が全く確保できなかったことから７地区を残土置き場とし、この地区は機械掘削を優先させ、先行して調査を行なった。

第60次は西接する資材および廃材置き場への車輌等の通行と残土搬出通路の確保のため、調査地全域に覆工板が敷設された。40年ほど前は調査地の南・北それぞれ



第３図　調査トレンチ位置および地区割図



第４図　掘り上げ田状況と国道170号および関連調査トレンチ位置図

に掘り上げ田に伴う東西方向の井路が存した（第４図）。調査時の北部域には国道170号を挟んで東に現存する井路（池状化している）からの排水用立坑桝（東西約４m、南北約4.5m、深さ約3.4m）と管があり、元の東西方向の井路が道路建設で中断され、その水路を確保するために設けられたものであった。この立坑桝等を確認して除去したのち、排水用のエンビ管を仮設して土留め鋼矢板を打設した。その後、覆工板敷設と1段目支保工架設に伴いGL－1.6mまで立会しながらの機械掘削を行ない、人力による発掘調査に入った。鋼矢板打設は平成16年８月中旬から開始し、機械掘削を行なった後、９月から人力掘削による調査を実施した。

以下、日誌より調査経過を抄録する。

＜調査日誌抄＞

第58次（10工区）

１月８日　人力掘削による調査開始。
１月15日　第３層上面遺構検出および掘削。
２月９日　第６層以下の掘削と第８層遺構の検出・掘削。
２月25日　第11層上面遺構掘削、写真撮影。
３月９日　第13層掘削。
３月17日　第16層上面遺構掘削、写真撮影・実測図作成。
４月１日　第17層上面遺構の写真撮影と写真測量実施。
　　土坑43内出土遺物洗浄中、土偶確認。
４月16日　土偶および現地説明会の新聞発表。
４月16日　第18層上面遺構の写真撮影と写真測量実施。
４月17日　現地説明会開催。
４月28日　第20層上面遺構完掘、写真撮影・実測図作成。
５月７日　第21層上面遺構完掘、写真撮影・実測図作成。
５月12日　第22層上面遺構完掘、写真撮影・実測図作成。
５月28日　第26層上面遺構完掘、写真撮影・実測図作成。

第５図　現地説明会開催状況写真

６月２日　最後の断面の検討、写真撮影・実測図作成開始。
６月15日　調査終了。

第60次（11工区）

９月９日　人力掘削による調査開始。
９月13日　南・北に掘り上げ田の井路検出し、掘削。
９月21日　第４層上面の溝・落ち込みを検出・掘削。
10月７日　第11層上面遺構の溝・流路・足跡を検出。
10月16日　第13層上面遺構の写真撮影・実測図作成。
10月21日　基本杭設置完了。
10月22日　溝９・10完掘、写真撮影。
10月25日　第14層上面遺構の写真撮影と写真測量実施。
10月29日　溝11内で貝塚を確認。
11月８日　溝11完掘、溝13・高まり掘削。
11月10日　第16層上面遺構の写真撮影と写真測量実施。
11月22日　西・南断面の写真撮影・断面図作成。
11月29日　調査終了。

この間、
８月１日、東大阪市立埋蔵文化財センターにおいて第58次調査の概要を発表。
９月18日、財団法人大阪府文化財センター主催の大阪府埋蔵文化財研究会第49回において第56・58次の調査成果を中心に発表。

整理等作業経過

発掘調査にほぼ平行して出土遺物の洗浄とその登記作業をしていったが（出土遺物台帳作成）、調査終了後、同作業を本格的に行なうとともに注記、接合作業を実施した。その後、遺物による遺構・層位の時期を確認しながら、報告書刊行に向けて必要な遺物をセレクトし、石膏復元および実測図（拓影を含む）の作成を行なった。

動物遺体は洗浄・クリーニングしたのち、安部みき子氏に同定を依頼した。また、木製品の使用樹状況を確認するため木製品の樹種同定と保存処理および食生活状況を確認するため貝塚から出土した貝遺体・魚類遺体・種実の同定を、調査時に採取した土壌分析を株式会社吉田生物研究所に委託して実施した。

報告書の体裁は、昨年度の『鬼虎川遺跡第56次発掘調査報告』の項目を基に執筆分担を確認した。

土器・石器・木製品・土製品・骨角牙製品の実測図は工区別に、主に層位・遺構ごとにレイアウトし、原稿執筆しながら割付を行ない、トレースして遺物版下を作成した。

層位図・遺構図は張り合わせ作業をはじめ図面の整理・検討を行ない、アコード株式会社に委託して実施した写真測量図の校正を行なった。層位・遺構図は工区別にレイアウトし、原稿執筆しながら割付を行ない、トレースして遺構版下を作成した。

上記の遺物（土器・石器・木製品・土製品・骨角牙製品および動物遺体など）の写真撮影は株式会社毎日映画社に委託して実施し、選択した遺構写真を含め、焼付けしたのち写真版下を作成した。

遺構・遺物等の主要原稿・版下等の完成後、委託原稿等をも集成して、目次・総括・報告書抄録等を加えて編集し、印刷へ渡した。

報告書原稿・版下類校了後、資料管理のための遺物・図面等の登録に着手した。

2. 基本層位（第６図・第１表）

調査地周辺は、大幹線道路の国道170号・大阪外環状線の舗装面に合わせ厚く盛土されていた。第58次調査地と第60次調査地には同一または相当層がいくつか見られたが、距離が約50m離れ、第60次の掘り上げ田井路、第58次の弥生時代中期末から後期初頭の整地層など、層位状況に違いが見られ、調査時点で層位をあえて統一することはしなかった。本報告書においてもそれに従った。そのため、いくつかのキーとなる層をもとに基本層位を記しておく。

第Ａ層　盛土　国道170号（外環状線）に合わせて埋められたものおよび撹乱土。

第Ｂ層　近・現代の耕作土。第60次で掘り上げ田の井路を検出した。

第Ｃ層　江戸時代ないし近代初頭の耕作土。土師器・須恵器・陶磁器の小・細片などが出土し、第58次で溝・土坑・ピットと流路を検出した。

第Ｄ層　砂混じりシルト質土・シルトを主体としていた江戸時代以降の整地・耕作土。土師器・須恵器などの小･細片が出土し、上面で溝・土坑・ピット・流路を検出した。

第Ｅ層　シルトを含む砂混じり砂質土の整地土。土師器・須恵器・瓦器などの小･細片が出土し、溝・ピット・足跡と流路を検出した。

第Ｆ層　砂混じり粘土質土で、シルトを多く鎌倉時代以降の整地土。土師器･須恵器などの小･細片が出土し、第58次の７・８層両上面で流路・溝・ピットを検出した。

第Ｇ層　砂混じり粘土で、平安時代以降の整地土。須恵器・土師器・瓦器などの小･細片が出土し、上面で溝・落ち込みを検出した。

第Ｈ層　砂混じり粘質土・シルト質粘土と粘土の奈良から平安時代の整地土。土師器・須恵器の小･細片などが出土し、第58次で溝・落ち込み・ピットを検出した。

第Ｉ層　砂混じりシルト質粘土の古墳時代後半から奈良時代相当期の整地土で、土師器・須恵器・石器が出土し、第58次で溝・落ち込み・ピット・足跡を検出した。

第Ｊ層　シルトと粘土の互層で古墳時代後半の自然堆積層。須恵器が出土し、第58次で落ち込み・足跡を検出した。

第Ｋ層　砂の少し混じる粘土で古墳時代後半の整地土。弥生土器・土師器が出土し、第60次では土坑とピットを検出した。

第Ｌ層　粘土を主体とする古墳時代前半に相当する堆積土。石器・弥生土器・土師器小片が出土し、第60次で溝・流路・ピットを検出した。

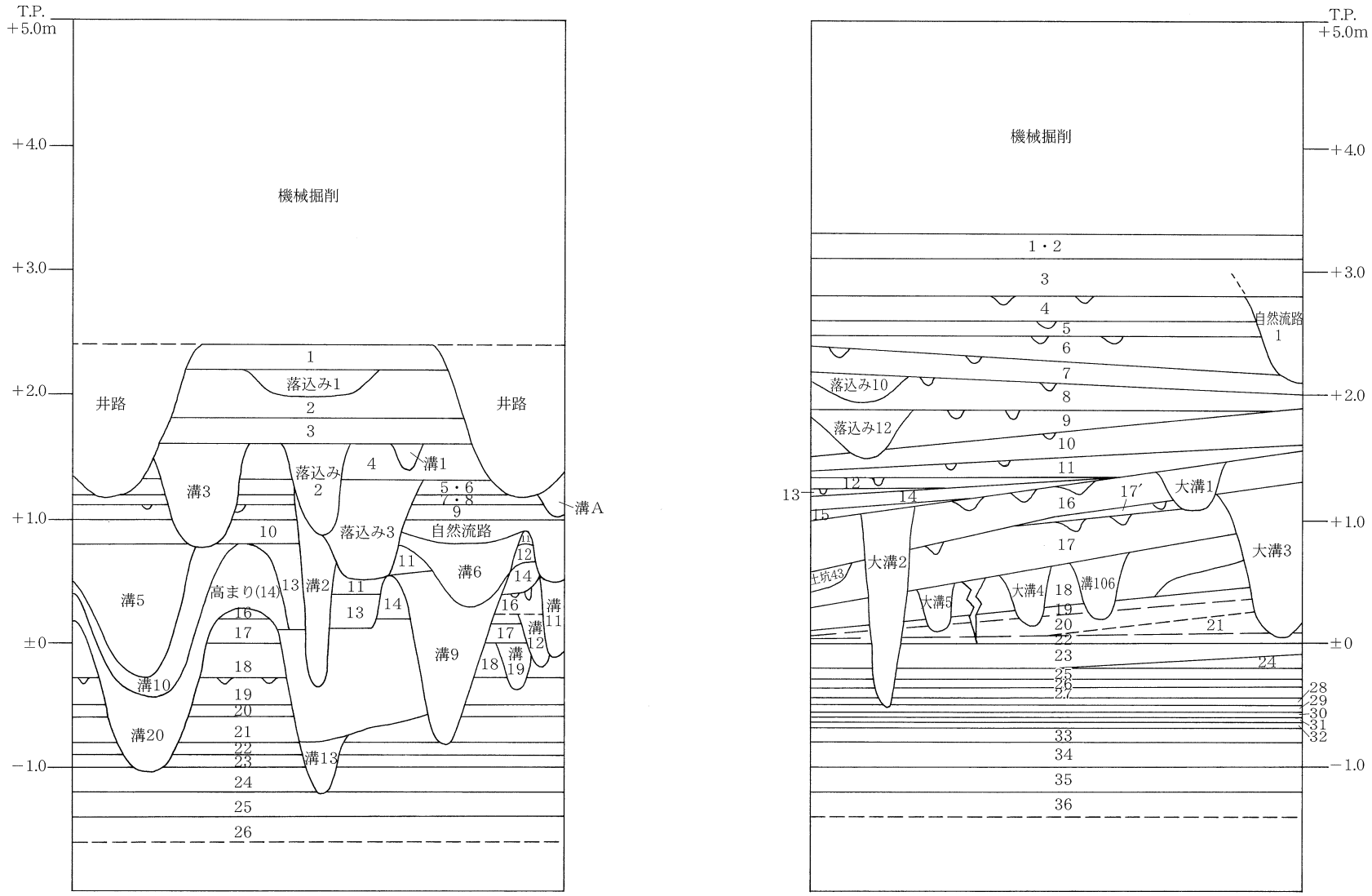
第Ｍ層　炭・植物遺体を含む砂混じり粘質土で大きく３層に分かれる。弥生土器・石器・土製品・動物遺体などの遺物を多量に包含した弥生時代中期末から後期の整地土で、第58次では上面で大溝・土坑を検出した。

第Ｎ層　砂混じり粘質土主体の弥生時代中期中葉から後半の整地土。弥生土器が出土し、上面で土坑・ピットを検出した。

第Ｏ層　砂まじりシルト質粘土主体の弥生時代前期末から中期前半の整地土で、２～３層に区分できた。縄文土器・弥生土器・石器・骨角牙製品などの遺物が出土した。第58次では大溝、溝、土坑、ピット、第60次では大溝・高まりを検出した。

第Ｐ層　シルトを含む砂混じり土の弥生時代前期後半から中期初頭の整地土。縄文土器、弥生土器、土製品、石器が出土し、第58次で大溝、溝、落ち込み、土坑、ピットを、第60次で土坑、溝、ピットを検出した。

第Ｑ層　砂の自然堆積層。弥生時代前期後半の洪水に伴うもので弥生土器とともに縄文土器・弥生



第６図　第58次・第60次層位概念図

第１表　第58次・第60次層位対比表

時代・時期	基本層位名等		第58次（主な遺構）	第60次（主な遺構）
現代	Ａ層	盛土	盛土・１・２層	盛土
近代	Ｂ層	耕作土・床土	３層	１層（井路）
江戸	Ｃ層	整地土	４層(流路・溝・土坑・ピット)	２層（落ち込み）
	Ｄ層	整地土	５層(流路・土坑・溝・ピット)	３層
室町	Ｅ層	耕作・整地土	６層(流路・溝・ピット・足跡)	４層（溝・落ち込み）
鎌倉	Ｆ層	整地土・堆積層	７・８層(溝・流路・ピット)	
平安	Ｇ層	整地土	９層（溝）	５層（溝・落ち込み）
奈良～平安	Ｈ層	整地土	10層(溝・落ち込み・ピット)	６層
古墳後半～奈良	Ｉ層	整地土	11層(溝・落ち込み・ピット)	７層
古墳後半	Ｊ層	堆積層	12層（落ち込み・足跡）	８層（足跡）
古墳後半	Ｋ層	整地土	13層	９・10層（土坑・ピット）
古墳前半	Ｌ層	堆積土	14・15層	11・12層（溝・流路・ピット）
弥生中期末～後期	Ｍ層	整地土	16層（大溝・土坑）	13層
弥生中期中葉～後半	Ｎ層	整地	17′層（土坑・ピット）	
弥生前中期中葉～後半	Ｏ層	整地土	17層(大溝・溝・土坑・ピット)	14・15層（溝・高まり）
弥生前期末～中期前半	Ｐ層	整地土	18層(大溝・溝・土坑・ピット)	16層（土坑・溝・ピット）
弥生前期後半～末	Ｑ層	堆積砂・粘土	19・20層（ピット・溝・土坑）	17層
弥生前期後半～	Ｒ層	堆積層	21層（溝・土坑・ピット）	18層（溝）
弥生前期前半～	Ｓ層	堆積層	22～24層（溝・土坑）	
弥生前期前半以前	Ｔ層	堆積層	25層（溝・ピット）	19層（溝）
縄文晩期以前	Ｕ層	堆積層	26～28層	20層
	Ｖ層	堆積層	29・30層	21・22層
	Ｗ層	堆積層	31・32層	23・24層
	Ｘ層	堆積層	33～36層	25・26層

土器が出土した。第58次北部に厚く見られ、南部および第60次では薄く堆積していた。第58次北部のみ両層上面で、それぞれピット、溝、土坑を検出した。

第Ｒ層　シルト質粘土を主体とする３層に分層できる弥生時代前期中葉ごろの堆積層。縄文土器、弥生土器が出土し、第58次で溝、ピット、土坑を検出した。

第Ｓ層　オリーブ黒色粘土。縄文土器、弥生土器が出土し、上面で溝・土坑を検出した。

第Ｔ層　黒色粘土。遺物は出土しなかったが、上面で溝・土坑を検出した。

第Ｕ層　黒色粘土。

第Ｖ層　暗緑灰色黒色粘土。

第Ｗ層　黒色粘土。

第Ｘ層　オリーブ黒色粘土。

第Ｔ層以下は、いわゆる河内湖・潟期の無遺物の自然堆積層。

上述したように、以下の第58次・第60次の遺構・遺物の概要では、調査時の層名を優先させ、あえて統一していない。その関連・対称についてはこの基本層位を参照願いたい。本文などで基本層位を使用する場合、上記の大文字のアルファベットで表記する。

3. 第58次調査－10工区－

a．層位（第７図　図版３～５）

第１層　近・現代の盛土。

第２層　オリーブ灰色（10Y4/2）砂混じり粘質土層。細粒砂を多く含む。層厚は10～20cm。15地区に堆積する。

第３層　オリーブ灰色（2.5GY5/1）砂質土層。砂混じり土からシルトを含む。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。

第４層　暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘質土を部分的に含む、砂質土層。層厚は約20cm。調査区全体に堆積し、北に向かって層厚が増す。近世末から近代の整地・耕作土。上面において南北方向の流路・溝・落ち込み・土坑・ピットを検出した。

第５層　オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂質土と緑灰色(10GY5/1)粘土の混層。層厚は約20cm。調査区全体に堆積し、南に向かって層厚が増す。上面において流路・溝・土坑・ピットを検出した。

第６層　灰オリーブ色（5Y4/2）砂混じり土層。シルトを多く含む。層厚は10～30cm。調査区全体に堆積し、北に向かって層厚が増す。上面において、流路・溝・落ち込み・ピット・足跡群を検出した。層内からは土師器・須恵器が出土した。

第７層　黄灰色（2.5Y4/1）砂混じり粘質土層。シルトを部分的に多く含む。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。上面において、浅い落ち込み状の溝が方形の棚状の地形を形成する水田状遺構や流路・溝・ピット・足跡を検出した。層内からは土師器・須恵器・瓦器・緑釉陶器が出土した。

第８層　オリーブ黒色（7.5Y3/2）砂混じり粘質土層。細粒砂を多く含む。層厚は10～30cm。５～13地区にわたって堆積する。上面において、時期差をもって切り合う溝群・落ち込み・ピットを検出した。層内からは土師器・須恵器・瓦器・白磁・竈が出土した。

第９層　暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘土層。中粒砂を多く含む。層厚は10～20cm。３～15地区にわたって堆積する。上面において溝・落ち込みを検出した。層内からは土師器・須恵器・瓦器が出土した。

第10層　暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質粘土層。中粒砂～粗粒砂を多く含む。層厚は10～30cm。調査区全体に堆積し、北に向かって層厚が増す。上面において溝・落ち込み・ピットを検出した。層内からは須恵器が出土した。

第11層　黒褐色（10YR2/2）砂質土層。シルトを多く含む。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。上面において東西方向の溝群・落ち込み・ピット・足跡を検出した。層内からは土師器・須恵器・石器が出土した。第10・11層は攪乱、盛土が繰り返し行われており、両層とも整地層と思われる。

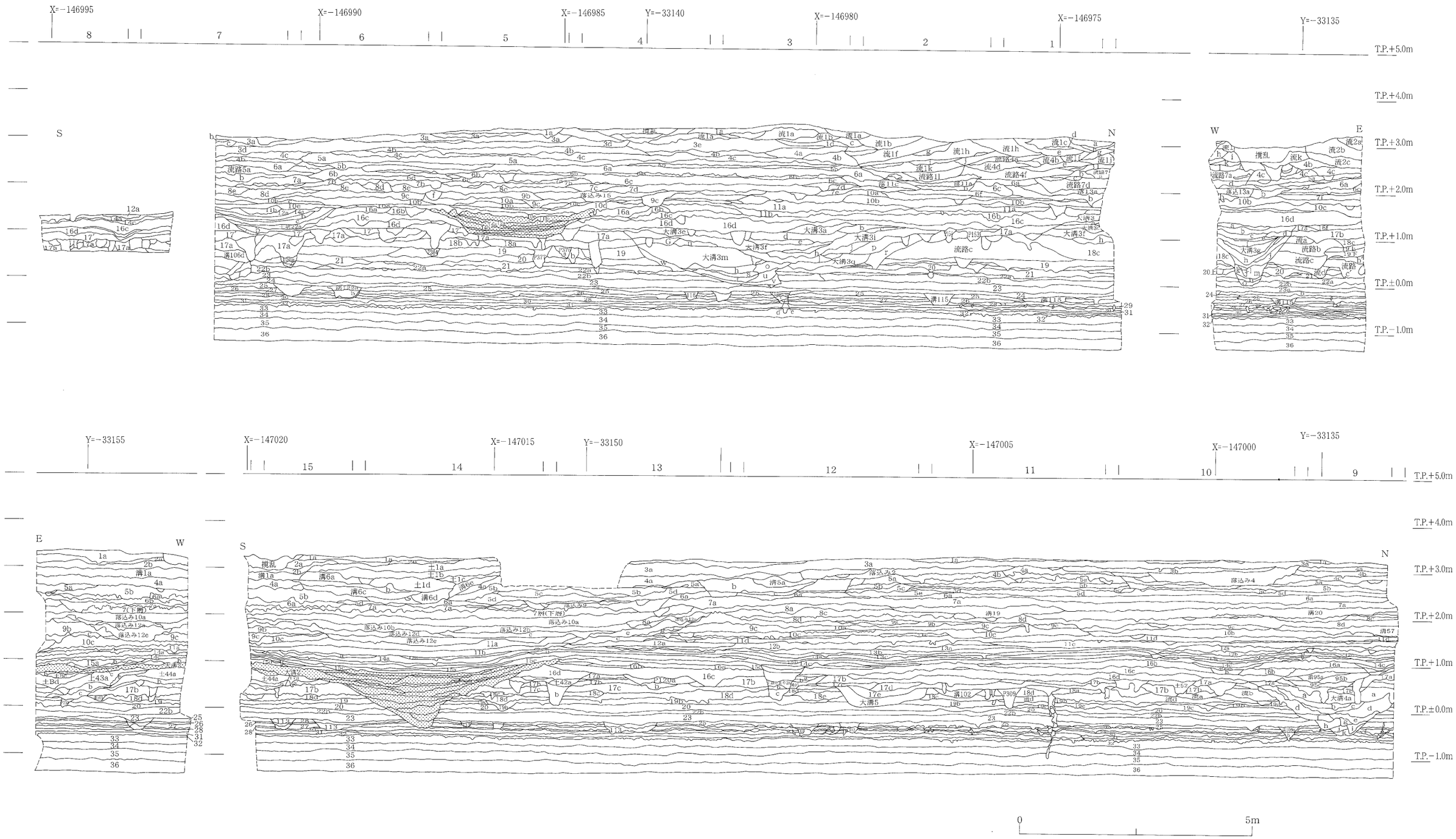
第12層　暗緑灰色（7.5GY4/1）シルトと暗緑灰色（10GY4/1）粘土の互層。層厚は約10cm。９～15地区では全体にわたって堆積するが、１～７地区では薄く部分的になる。上面において落ち込み・足跡を検出した。層内からは須恵器が出土した。

第13層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルトを主体とした砂混じり粘土層。層厚は10～20cm。10～13地区にわたって堆積する。上面において土坑を検出した。層内からは土師器が出土した。

第14層　オリーブ黒色（5GY2/1）粘土層。層厚は約20cm。南に向かって層厚が増すが、１～７地区においては薄く部分的である。層内からは弥生土器・石器が出土した。

第15層　黒色(10Y2/1)粘土と黒色(2.5Y2/1)シルトの互層。層厚は10～20cm。13～15地区にわたっ

10工区層位一覧
第1層　10Y4/2　オリーブ灰色　砂混じり土（細～粗粒砂を全体に少量含む）
第2a層　10Y4/2　オリーブ灰色　砂混じり粘質土（細～粗粒砂全体に少量含む）
第2b層　10GY4/1　暗緑灰色　砂混じり粘質土（細～粗粒砂全体に少量含む）
第3a層　7.5Y3/2　オリーブ黒色　砂混じり土（細～粗粒砂を全体に少量含む）
第3b層　7.5Y5/2　灰オリーブ色　砂混じり粘質土（細～粗粒砂を全体に少量含む）
第3c層　10Y6/2　オリーブ灰色　砂質土（シルト～細粒砂を含む）
第3d層　7.5GY6/1　緑灰色　砂質土（シルト～細粒砂を多く含む）
第3e層　2.5GY5/1　オリーブ灰色　砂混じり土（細～粗粒砂を少量含む）
第4a層　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂質土（細粒砂を全体に含む）
第4b層　5Y4/3　暗オリーブ色　細粒砂と2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　粘質土が混ざる
第4c層　5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂質土（細粒砂を全体に含む）
第5a層　2.5GY5/1　オリーブ灰色　砂質土（細粒砂を全体に含む）
第5b層　10GY5/1　緑灰色　砂混じり粘質土（細粒砂を全体に含む）
第5c層　10Y4/1　灰色　砂混じり土（シルト～極細粒砂を含む）
第5d層　7.5G Y4/1　暗緑灰色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂を全体に含む、土器混じる）
第6a層　5Y4/2　灰オリーブ色　砂混じり土（シルト～細粒砂を全体に少量含む）
第6b層　5Y4/2　灰オリーブ色　砂混じり土（シルト～粗粒砂を全体に多く含む）
第6c層　2.5Y4/1　黄灰色　砂混じり土（シルト～細粒砂を全体に多く含む）
第6d層　2.5Y4/1　黄灰色　粘質土（細粒砂を少量含む）
第7a層　2.5Y4/1　黄灰色　砂混じり粘質土（細～中粒砂を全体に含む）
第7b層　2.5Y4/1　黄灰色　砂混じり粘質土（シルト～極細粒砂を全体に含む）
第7c層　5Y4/3　暗オリーブ色　砂混じりシルト質土（極細～細粒砂を全体に含む）
第7d層　5Y4/2　灰オリーブ色　砂混じり土（中粒砂を含む）
第7e層　10Y4/2　オリーブ灰色　砂混じり粘質土（中粒砂を含む）
第8a層　10Y4/1　灰色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂を全体に含む）
第8b層　10Y4/1　灰色　砂混じり粘質土（細～中粒砂を全体に含む）
第8c層　7.5Y3/2　オリーブ黒色　砂混じり土（細～中粒砂を全体に含む）
第8d層　10Y3/1　オリーブ黒色　砂混じり土（シルト～細粒砂を含む、やや粘質）
第9a層　5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり粘質土（細～中粒砂を全体に少量含む）
第9b層　10Y3/2　オリーブ黒色　砂混じり土（細～中粒砂を全体に含む）
第9c層 2.5GY3/1　暗オリーブ灰色　砂混じり粘土（シルト～中粒砂を含む）
第10a層　10GY4/1　暗緑灰色　砂混じり粘質土（細粒砂を少量含む）
第10b層　7.5GY4/1　暗緑灰色　シルト質土（やや粘質）
第10c層　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり土（中～粗粒砂を全体に多く含む）
第10d層　7.5GY4/1　暗緑灰色　シルト質粘土（シルトをブロック状に含む）
第11a層　2.5Y4/1　黄灰色　砂質土（細粒砂を少量含む）
第11ｂ層　10YR2/2　黒褐色　粘質土（細粒砂を少量含む）
第11c層　2.5Y3/1　黒褐色　砂混じり粘土（シルト～細粒砂を全体に含む）
第11d層　7.5GY4/1　暗緑灰色　シルト質粘土
第11e層　5GY4/1　暗オリーブ灰色　シルト質土（細粒砂をブロック状に含む）
第12a層　7.5GY4/1　暗緑灰色　シルト
第12b層　10GY4/1　暗緑灰色　粘土
第13a層　7.5GY4/1　暗緑灰色　シルト質土
第13b層　7.5Y3/1　オリーブ黒色　砂混じりシルト質土（細粒砂～中粒砂を全体に少量含む）
第13c層　7.5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（シルトをブロック状に含む）
第14a層　2.5GY3/1　暗オリーブ灰色　粘土
第14b層　5GY2/1　オリーブ黒色　粘土
第14c層　N3/　暗灰色　粘土
第15a層　10Y2/1　黒色　粘土（中粒砂を少量含む）
第15b層　2.5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（細～中粒砂を全体に少量含む、炭・土器混じる）
第15c層　5Y2/1　黒色　粘土（細粒砂を少量含む）
第16a層　2.5Y3/1　黒褐色　砂混じり土（細粒砂を少量含む）
第16ｂ層　2.5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（極細粒砂を全体に含む）
第16c層　7.5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（細粒砂を全体に含む）
第16d層　2.5GY2/1　黒色　砂混じり粘土（中～粗粒砂を含む、炭混じる）
第17層　5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（シルト～中粒砂を全体に多く含む）
第17a層　2.5Y3/1　黒褐色　砂混じり粘質土（細粒砂を少量含む、炭・土器混じる）
第17b層　5GY2/1　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（シルト～中粒砂全体多く含む）
第17c層　5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂全体少量含む、炭・土器・礫混じる）
第18a層　7.5Y2/1　黒色　シルト質土（細粒砂を少量含む）
第18b層　7.5Y3/1　オリーブ黒色　砂混じり土（シルト～中粒砂全体多く含む）
第18c層　7.5Y2/2　オリーブ黒色　シルト質土（細粒砂を少量含む）
第18d層　5Y2/2　オリーブ黒色　砂混じりシルト質土（細～中粒砂全体含む、17層ブロックを全体に含む）
第19層　7.5Y2/2　オリーブ黒色　砂混じり粘土（シルトを少量含む）
第19上層　7.5GY3/1　暗緑灰色　砂混じり土（シルト～中粒砂全体多く含む）
第19下層　7.5GY3/1　暗緑灰色　シルト（シルト～細粒砂）
第20層　5Y3/1　オリーブ黒色　シルト質粘土（細粒砂を少量含む）
第21層　7.5Y2/2　オリーブ黒色　粘土（シルトを少量含む）
第22層　2.5Y2/1　黒色　粘土（粘性高い）
第23層　10YR1.7/1　黒色　粘土（粘性高い）
第24層　2.5Y2/1　黒色　粘土（10GY5/1緑灰色粘土を帯状に含む、粘性高い）
第25層　10Y2/1　黒色　粘土（粘性強い）
第26層　5Y2/1　黒色　粘土
第27層　2.5GY3/1　暗オリーブ灰色　粘土
第28層　10GY4/1　暗緑灰色　粘土
第29層　10Y3/1　オリーブ黒色　粘土
第30層　5Y2/1　黒色　粘土（植物遺体含む）
第31層　2.5Y2/1　黒色　粘土（植物遺体含む、10Y4/2オリーブ灰シルト質粘土を含む）
第32層　10Y2/1　黒色　粘土（植物遺体を全体に多く含む）
第33層　5Y3/2　オリーブ黒色（植物遺体を全体に多く含む）
第34層　5Y3/2　オリーブ黒色（植物遺体・シルトを多く含む）
第35層　7.5Y3/2　オリーブ黒色（植物遺体・シルトを含む）
第36層　10Y4/1　灰　粘土（シルトを全体にブロック状に含む）
遺構土色
P153　5GY2/1　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（極粗粒砂全体に含む）
P154　5GY2/1　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（中～粗粒砂含む）
P120a　10YR1.7/1　黒色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂を全体に含む、炭・土器多く混じる）
P120b　2.5Y3/1　黒褐色　砂混じり土（シルト～細粒砂を全体少量含む、炭が混じる）
P309　2.5Y3/1　黒褐色　砂質土（細～粗粒砂を全体に多く含む、同色の粘土をブロック状に含む）
P376a 5Y2/1　黒色　砂混じり土（細～中粒砂を全体に含む、炭混じる）
P376b　5Y3/1　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（中～粗粒砂を全体少量含む）
P377　5Y3/1 オリーブ黒色　砂混じり粘質土（シルト～粗粒砂を全体に含む）
P384　2.5Y2/1黒色　砂混じり土（細粒砂全体に含む、19層ブロック含む）
溝1　7.5GY5/1　緑灰色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂を全体に少量含む）
溝5a　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり土（シルト～細粒砂を全体に含む）
溝5b　10Y5/2　オリーブ灰色　砂質土（細粒砂を全体に多く含む）
溝5c　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり土（中～粗粒砂を全体に少量含む）
溝19　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり土（細～中粒砂を全体に含む）
溝6a　10Y5/2　オリーブ灰色　砂質土（細～粗粒砂を全体に少量含む）
溝6b　10GY4/1　暗緑灰色　砂混じり土（細～中粒砂を全体に含む）
溝6c　7.5Y5/1　灰色　砂質土（細～中粒砂を全体に少量含む）
溝6d　7.5Y3/2　オリーブ黒色　細～粗粒砂（層状に入る）
溝6e　7.5Y4/1　灰色　砂質土（細～中粒砂を全体に多く含む）
溝20　10Y4/2　オリーブ灰色　砂混じり土（細～中粒砂を少量含む）
溝95a　2.5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（シルトを全体に含む、炭・土器・焼土混じる）
溝95b　10YR1.7/1　黒色　砂混じり粘質土（シルトを全体に少量含む、炭・焼土混じる）
溝95c　2.5Y2/1　黒色　砂混じり土　（細～粗粒砂を少量含む）
溝102　2.5Y2/1　黒色　砂混じり土（細～中粒砂を全体に含む、炭・土器・植物遺体混じる）
溝103　2.5GY2/1　黒色　砂混じり粘質土（細～中粒砂少量混じる、炭・土器含む）
溝106a　5Y2/2　オリーブ黒色　砂混じり土（シルトを多く含む、土器混じる）
溝106b　7.5Y2/1　黒色　シルト質土（やや粘質、17層ブロック含む）
溝106c　10Y3/2　オリーブ黒色　シルト質土（やや粘質、17層ブロック含む）
溝106d　7.5Y3/1　オリーブ黒色　シルト質土（シルトを全体に多く含む、粗粒砂を少量含む）
溝113　7.5Y2/1　黒色　粘土（28層ブロックを少量含む、シルト～極細粒砂含む）
溝115　5Y2/1　黒色　粘土（シルトをブロック状に含む、26・27層をブロック状に含む）
溝116　5Y2/1　黒色　粘土（26・27層をブロック状に含む、下層に細粒砂を層状に含む）
溝119a　5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂を層状に含む、27層をブロック状に含む）
溝119b　5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（シルト～細粒砂を少量含む28・29層ブロックを含む）
溝122 5Y2/2　オリーブ黒色　粘土（26・27層をブロック状に全体に含む）
土坑1a　5Y5/2　灰オリーブ色　砂質土（中～粗粒砂を全体に多く含む）
土坑1b　5Y5/3　灰オリーブ色　砂質土（細～粗粒砂を全体に多く含む）
土坑1c　7.5Y5/1　灰色　砂質土（細粒砂を全体に多く含む）
土坑1d　5Y4/2　灰オリーブ色　砂質土（細粒砂をブロック状に含む、粗粒砂を少量含む）
土坑22a　7.5Y2/1　黒色　粘土（細粒砂含む、植物遺体混じる）
土坑22b　10Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（極細粒砂を全体に含む）
土坑22c　5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（細粒砂含む、炭混じる）
土坑42a　10YR1.7/1　黒色　砂混じり土（シルト～細粒砂を全体に含む、炭・土器多く混じる）
土坑42b　2.5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂を全体に含む、炭・土器・18層ブロックを含む）
土坑43a　10YR1.7/1　黒色　砂混じり粘土（細粒砂を全体に少量含む、炭・土器混じる）
土坑43b 10YR2/1　黒色　砂混じり粘土（炭・土器混じる）
土坑43c　7.5Y2/1　黒色　砂混じり土（極細～細粒砂全体多く含む、炭・土器混じる）
土坑44a　2.5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（細粒砂含む、炭・土器を全体に含む）
土坑44b　10YR7/1　黒色　砂混じり粘土（細粒砂を全体に少量含むシルトを少量含む、炭・土器全体に混じる）
土坑44c　7.5Y2/2　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（細～粗粒砂少量含む、焼土をブロック状に含む）
土坑52　2.5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（シルト～粗粒砂全体少量含む、炭・土器混じる）
流路1a　5GY5/1　オリーブ灰色　細粒砂
流路1b　10Y5/2　オリーブ灰色　中～粗粒砂
流路1c　7.5Y5/2　灰オリーブ色　極細粒砂
流路1d　7.5Y4/2　灰オリーブ色　細粒砂
流路1e　7.5Y6/3　オリーブ黄色　細～中粒砂
流路1f　7.5Y3/2　オリーブ黒色　中～極粗粒砂、3cm大の礫含む
流路1g　7.5Y5/2　灰オリーブ色　細～中粒砂を層状に含む
流路1h　7.5Y3/2　オリーブ黒色　中～極粗粒砂
流路1i　2.5GY5/1　オリーブ灰色　シルト～細粒砂
流路1j　10Y5/2　オリーブ灰色　細～中粒砂
流路1k　7.5Y3/1　オリーブ黒色　細～粗粒砂、10cm大の礫含む
流路1l　7.5Y4/1　灰色　極粗粒砂
流路Ba　7.5Y5/1　灰色　砂混じり粘土（中粒砂～粗粒砂を含む）
流路Bb　10GY5/1　緑灰色　砂質土（細粒砂を多く含む）
流路Bc　5GY4/1　暗オリーブ灰色　細～中粒砂
流路Bd　7.5GY4/1　暗緑灰色　シルト～細粒砂
流路Be　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり土（細～粗粒砂を全体少量含む）
流路Bf　7.5GY5/1　緑灰色　砂混じり土（細～中粒砂を全体多く含む）
流路Bg　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり粘質土（細～粗粒砂を少量含む）
流路Bh　5GY5/1　オリーブ灰色　オリーブ灰色　砂混じり土（細～粗粒砂を含む、3cm大の礫が全体に多く混じる）
流路2a　7.5Y4/3　暗オリーブ色　砂質土（細～粗粒砂を全体に含む、20cm大の礫が混じる）
流路2b 2.5Y4/1　黄灰色　粘質土（細～粗粒砂を含む、5cm大の礫が層状に混じる）
流路2c　7.5Y5/3　灰オリーブ色　極粗粒砂（極粗粒砂を含む、10cm大の礫が混じる）
流路4a　7.5Y5/2　灰オリーブ色　シルト～細粒砂
流路4b　7.5Y6/3　オリーブ黄色　細～中粒砂
流路4c　5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂質土（細～粗粒砂を全体に少量含む）
流路4d　5GY5/1　オリーブ灰色　シルト質土
流路4e　10Y5/2　オリーブ灰色　細～中粒砂
流路4f　5Y5/2　灰オリーブ色　粗～極粗粒砂（10cm大の礫含む）
流路5a　7.5Y3/2　オリーブ黒色　砂混じり土（細～粗粒砂）
流路5b　7.5Y4/2　灰オリーブ色　細粒砂～中粒砂
流路7a　5Y4/2　灰オリーブ色　中～粗粒砂（5～10cm大の礫）
流路7b　10Y3/2　オリーブ黒色　シルト～中粒砂を層状に含む
流路7c　10Y4/1　灰色　シルト～細粒砂を層状に含む
流路7d　7.5Y3/2　オリーブ黒色　砂混じり土（中～粗粒砂を含む、5～10cm大の礫が混じる）
流路a 5Y2/1　黒色　砂混じり土（細～粗粒砂を全体に含む）
流路b　5Y3/2　オリーブ黒色　砂混じり土（中～極粗粒砂を全体に含む、下方に粘土をブロック状に含む）
流路c　5Y2/2　オリーブ黒色　砂混じり土（細～粗粒砂全体に層状に含む）
流路Ⅰa　2.5GY3/1　暗オリーブ灰色　砂（細粒砂を全体に含む、礫を少量含む）
流路Ⅰb　7.5 Y3/1　オリーブ黒色　砂（細粒砂全体に多く含む、粗粒砂を層状に含む）
流路Ⅰc　10Y4/1　灰色　シルト（極細粒砂少量含む）
流路Ⅰd　5Y4/1　灰色　砂（中～極粗粒砂全体に多く含む）
大溝3a　5GY2/1　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（細～中粒砂含む、炭混じる）
大溝3b　7.5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（中～粗粒砂混じる、炭・植物含む）
大溝3c　5GY2/1　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（中～粗粒砂全体に多く含む）
大溝3d　10Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（細～粗粒砂含む、礫・焼土混じる）
大溝3e　5GY2/1　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（細～中粒砂含む、炭混じる）
大溝3f　7.5GY2/1　緑黒色　砂混じり粘質土（粗粒砂を全体に少量含む）
大溝3h　5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（シルト～粗粒砂を少量含む、土器・炭混じる）
大溝3i　5GY2/1　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（細～中粒砂含む、炭混じる）
大溝3ｊ　7.5Y2/2　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（細～粗粒砂全体含む）
大溝3ｌ　2.5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（シルト～細粒砂を全体に含む、炭・土器・骨混じる）
大溝3p　5Y2/2　オリーブ黒色　砂混じり粘質土（細～中粒砂全体に含む、炭混じる）
大溝3q　7.5Y2/2　オリーブ黒色　砂混じり土（細～粗粒砂を全体に含む）
大溝3r　5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（細～中粒砂層状に含む）
大溝3s　7.5Y3/1　オリーブ黒色　砂混じり粘土（シルト～細粒砂を含む）
大溝3t　5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂全体に含む）
大溝3u　5Y2/1　黒色　砂質土（中～粗粒砂を層状に含む）
大溝3v　2.5Y2/1　黒色　砂混じり土（細～中粒砂を全体に多く含む）
大溝3w　10Y3/1　オリーブ黒色　砂混じり土（シルト～細粒砂を含む）
大溝3x　10Y2/1　黒色　粘土
大溝4a　2.5Y2/1　黒色　砂混じり土（細～粗粒砂を全体に少量含む、5cm大の礫含む）
大溝4b　10YR1.7/1　黒色　砂混じり粘質土（細～中粒砂を含む、炭・土器混じる）
大溝4c　5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（中粒砂を少量含む）
大溝4d　5Y3/1　オリーブ黒色　砂混じり土（中～粗粒砂を全体に含む）
大溝4e　7.5YR2/1　黒色　砂混じり粘土（中粒砂少量含む）
大溝4f　2.5Y3/1　黒褐色　砂混じり粘土（細～中粒砂多く含む）
大溝4g　2.5Y3/1　黒褐色　砂混じり粘土（シルト～細粒砂多く含む）
大溝4h　2.5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（細～粗粒砂全体少量含む）
大溝4i　5Y2/1　黒色　砂混じり粘質土（シルト～中粒砂を全体に多く含む）
大溝4j　5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（細粒砂を含む）
大溝4k　5Y3/1　オリーブ黒色　砂混じり粘土（シルト～中粒砂を全体に多く含む）
大溝5a　5Y2/1　黒色　砂混じり粘土（中粒砂を少量含む）
大溝5b　5Y3/1　オリーブ黒色　砂混じり土（中～粗粒砂を全体に含む）
大溝5c　2.5Y3/1　黒褐色　砂混じり粘土（シルト～細粒砂多く含む）
落ち込み2　10Y4/2　オリーブ灰色　砂混じり土（極細～細粒砂を全体に多く含む）
落ち込み4　7.5Y5/2　灰オリーブ色　砂混じり土（細粒砂を全体に多く含む、鉄分の染み込みがみられる）
落ち込み9　10GY5/1　緑灰色　粘土（シルトを少量含む）
落ち込み10a　10Y3/2　オリーブ黒色　砂混じり土（細～粗粒砂を含む）
落ち込み10b　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色　粘土（シルトを少量含む）
落ち込み11a　5GY4/1　暗オリーブ灰色　粘質土（シルト～細粒砂を含む）
落ち込み11b　10Y4/2　オリーブ灰色　砂混じり土（シルト～細粒砂を全体に含む）
落ち込み11c　7.5Y4/2　灰オリーブ色　細粒砂～粗粒砂（シルトをブロック状に含む）
落ち込み12a　10Y4/1　灰色　砂質土（シルト～細粒砂を全体に多く含む）
落ち込み12b　7.5Y4/1　灰色　砂混じり粘質土（シルト～細粒砂を層状に含む）
落ち込み12c　10Y4/1　灰色　粘土（シルトを少量含む）
落ち込み12d　7.5Y3/2　オリーブ黒色　砂混じり粘土（シルトをブロック状に含む）
落ち込み12e　10Y4/1　灰色　砂混じり粘質土（細～粗粒砂を全体に少量含む）
落ち込み12f　7.5Y3/2　オリーブ黒色　シルト質土（細粒砂を少量含む）
落ち込み12g　10Y4/2　オリーブ色　砂混じり粘土（細粒砂を少量含む）
落ち込み13a　5Y4/2　灰オリーブ色　シルト質土（細粒砂を全体に含む）
落ち込み13b　5GY4/1　暗オリーブ灰色　砂混じり土（シルト～極細粒砂を全体に多く含む）
落ち込み15　7.5GY3/1　暗緑灰色　粘質土（細粒砂を少量含む）



第７図　第58次層位断面図

って堆積する。層内からは弥生土器が出土した。

第16層　黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘土層。遺物・炭を多く含む。層厚は約30cm。３層に分かれ、調査区全体に堆積する。上面において大溝・弥生時代後期の土坑群を検出した。層内からは縄文土器・弥生土器・土製品・石器が出土した。

第17′層　黒色（5Y2/1）砂混じり粘質土層。細粒砂を多く含む。層厚は約10cm。５～７地区にわたって堆積する。上面において土坑・ピットを検出した。層内からは弥生土器が出土した。

第17層　オリーブ黒色（5GY2/1）粘質土層。細粒砂を多く含む。層厚は10～30cm。調査区全体に堆積し、北に向かって層厚が増す。上面において弥生時代中期中～後半の遺構を検出した。層内からは縄文土器・弥生土器・土製品・石器・骨角牙製品が出土した。

第18層　黒色（7.5Y2/1）シルトを主体とした砂混じり土。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。上面において弥生時代前期から中期前半の遺構を検出した。層内からは縄文土器・弥生土器・土製品・石器が出土した。

第19層　暗緑灰色（7.5GY3/1）細粒砂から粗粒砂を含む砂層。層厚は10～40cm。上下層に分かれ、下層は粘質土層である。北に向かって上層の層厚が増す。上面ではピット・土坑・溝を検出した。層内からは縄文土器・弥生土器が出土した。

第20層　オリーブ黒色（5Y3/1）シルトから細粒砂を含む砂層。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。上面ではピット・土坑を検出した。層内からは縄文土器・弥生土器が出土した。

第21層　オリーブ黒色（7.5Y2/2）粗粒砂を多く含む粘質土層。層厚は約20cm。１～７地区にわたって堆積する。上面ではピット・土坑・溝を検出した。層内からは縄文土器が出土した。

第22層　黒色（2.5Y2/1）粘土層。粘性は強い。層厚は５～10cm。上下層に分かれ、上層は粗粒砂を多く含む砂混じり粘土。上層は調査区全体に、下層は１～７地区にわたって堆積する。上面ではピット・土坑・溝を検出した。層内からは縄文土器・弥生土器が出土した。

第23層　黒色（10YR1.7/1）粘土層。粘性は強い。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。

第24層　黒色（2.5Y2/1）粘土層。緑灰色（10GY5/1）粘土を帯状に含む。粘性は強い。層厚は約10cm。１～７地区にわたって堆積する。

第25層　黒色（10Y2/1）粘土層。粘性は強い。層厚は約10cm。調査区全体に堆積する。上面において十字状に広がる溝群・土坑を検出した。遺構内・層内からは遺物は出土しなかった。

第26層　黒色（5Y2/1）粘土層。層厚は約５cm。調査区全体に堆積する。

第27層　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘土層。層厚は約10cm。調査区全体に堆積する。

第28層　暗緑灰色（10GY4/1）粘土層。層厚は約５cm。１～12地区にわたって堆積する。

第29層　オリーブ黒色（10Y3/1）粘土層。層厚は約５cm。１～２地区にわたって堆積する。

第30層　黒色（5Y2/1）粘土層。植物遺体を含む。層厚は５～10cm。調査区全体に堆積する。

第31層　黒色（2.5Y2/1）粘土層。オリーブ灰色（10Y4/2）シルト質粘土を含む。植物遺体を含む。層厚は約10cm。調査区全体に堆積する。

第32層　黒色（10Y2/1）粘土層。植物遺体を全体に多く含む。層厚は約５～10cm。調査区全体に堆積する。層内よりサカナ（資18・19）が出土した。

第33層　オリーブ黒色（5Y3/2）粘土層。植物遺体を全体に多く含む。層厚は約15cm。調査区全体に堆積する。

第34層　オリーブ黒色（5Y3/2）粘土層。植物遺体・シルトを多く含む。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。

第35層　オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘土層。植物遺体・シルトを含む。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。

第36層　灰色（10Y4/1）粘土層。シルトを全体にブロック状に含む。層厚は約20cm。調査区全体に堆積する。棒状木製品（951）が出土したが、矢板に押された可能性が高い。

第23層以下は無遺物層である。第33層以下は河内湖の堆積層である。

b．遺構

以下、各層の主要な遺構を下層より概観して記す。なお「検出長」と記した遺構は、その一部が調査範囲外、または他の遺構と切り合い関係にあることを示す。

〔弥生時代の遺構〕

＜弥生時代遺構面の傾斜について＞

弥生時代の遺構面（第16～20層）が北から南へ30～50cm傾斜しているのを確認した。第56次調査の８工区で同方向、第53次と第56次の９工区では南から北への傾斜が見られた。

今回の調査区北端において、弥生時代前期相当層（第19～21層）における顕著な砂の堆積を確認した。本調査区北側には旧鬼虎川が東西方向に流れていたことが知られており、この砂層は川の氾濫（土砂）の影響によるものと考えられる。前期においては最低３時期の氾濫を確認し、その間２期の整地が行われたと考えられる。１時期目（第21層）の氾濫は調査区全体に及ぶが、南方に向かって砂の堆積は薄くなり、南端ではほとんどみられない。２時期目（第20層）はそれほど大きなものではなく、すぐに整地が行われている。３時期目（19層）は北端を中心に自然堤防状の堆積をもたらした。

前期末～後期初頭に行われた整地は、この自然堤防状の砂の堆積を覆うように形成されたため、調査地の北端と砂の影響の少なかった南端とでは30cm以上の高低差がみられる。

＜前期以前＞

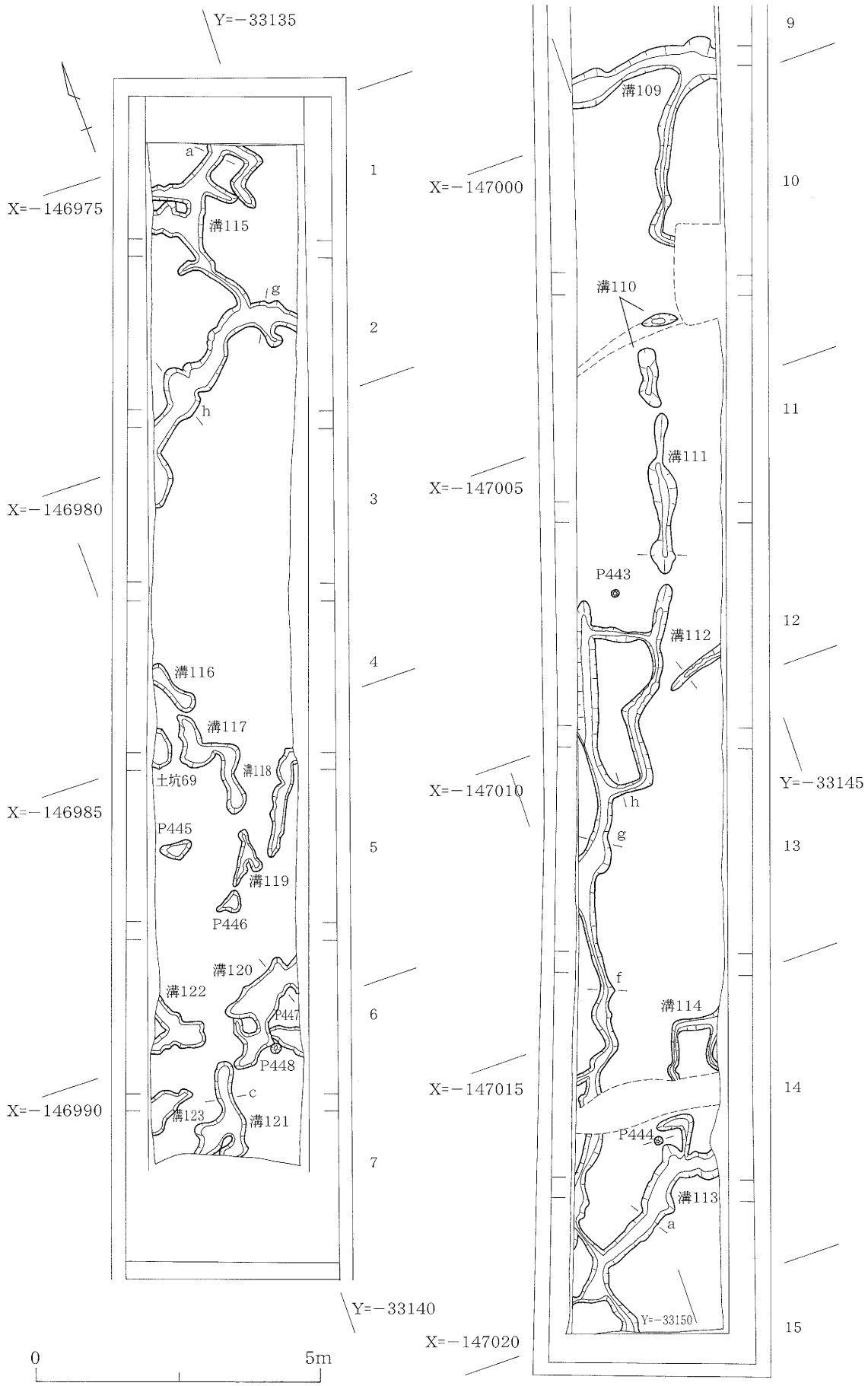
第25層上面遺構（第８・９図　図版６～８）

第25層上面において溝・土坑・ピットを検出した。遺構の検出高、規模や形状、埋土の状況は第52次調査５工区において確認された検出最終面（第17層）に相似する。第25・32・33次調査などで縄文土器・石器・動物遺体が出土しているが、遺構を確認した例は少ない。今回検出した遺構のうち、溝109について行った花粉分析および植物珪酸体分析でイネの珪酸体が検出され（Ⅳ、６・７参照）、前期以前におけるイネの存在が指摘される結果となった。これを踏まえて遺構の形状を鑑みた場合、小区画の水田遺構である可能性が考えられる。

溝109（９～10地区）は調査区東端より東西・南北方向に二股に分かれる。東西方向のものは検出長約２m50cm、幅約60cm、深さ約13cm、南北方向のものは検出長約３m、幅約30cm、深さ約10cmを測る。どちらも断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂、第24・25層をブロック状に含む黒色(5Y2/1)粘土である。

溝111（11～12地区）は南北方向の溝である。両端は丸く終わる。長さ約３m、幅約40cm、深さ約10cmを測り、断面形はU字状を呈する。埋土は黒色(5Y2/1)粘土と粘質土の上下２層に分かれる。

溝113（12～15地区）は数本に枝分かれし、十字状に広がる溝である。主軸は南北方向に延び、北端部分では方形に巡る。大きさに統一性はなく、幅は広い部分で約60cm、深さは約15cm、狭い部分の幅は約８cm、深さ約５cmを測る。全体の検出長約13m50cmである。断面形はV字もしくは皿状を呈する。埋土はオリーブ黒色（5Y2/2）砂混じり粘土を主体とし、数層に分かれる部分もある。



第８図　第58次第25層上面遺構平面図

溝115（1～3地区）は溝113と同じく十字状に広がる溝である。大きさに統一性はなく、広い部分の幅は約70cm、深さは約8cm、狭い部分の幅は約30cm深さ約15cmを測る。全体の検出長約6m50cmである。断面形は概ね皿状であるが、V字状を呈する部分もある。埋土はオリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土で、下方は第26層をブロック状に巻き上げる。

溝117（4～5地区）は南北方向に主軸を持つ不定形な溝である。端部は丸く終わる。検出長軸約2m、幅約30cm、深さ約5cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は下方に細粒砂を多く含む黒色（5Y2/1）粘土である。

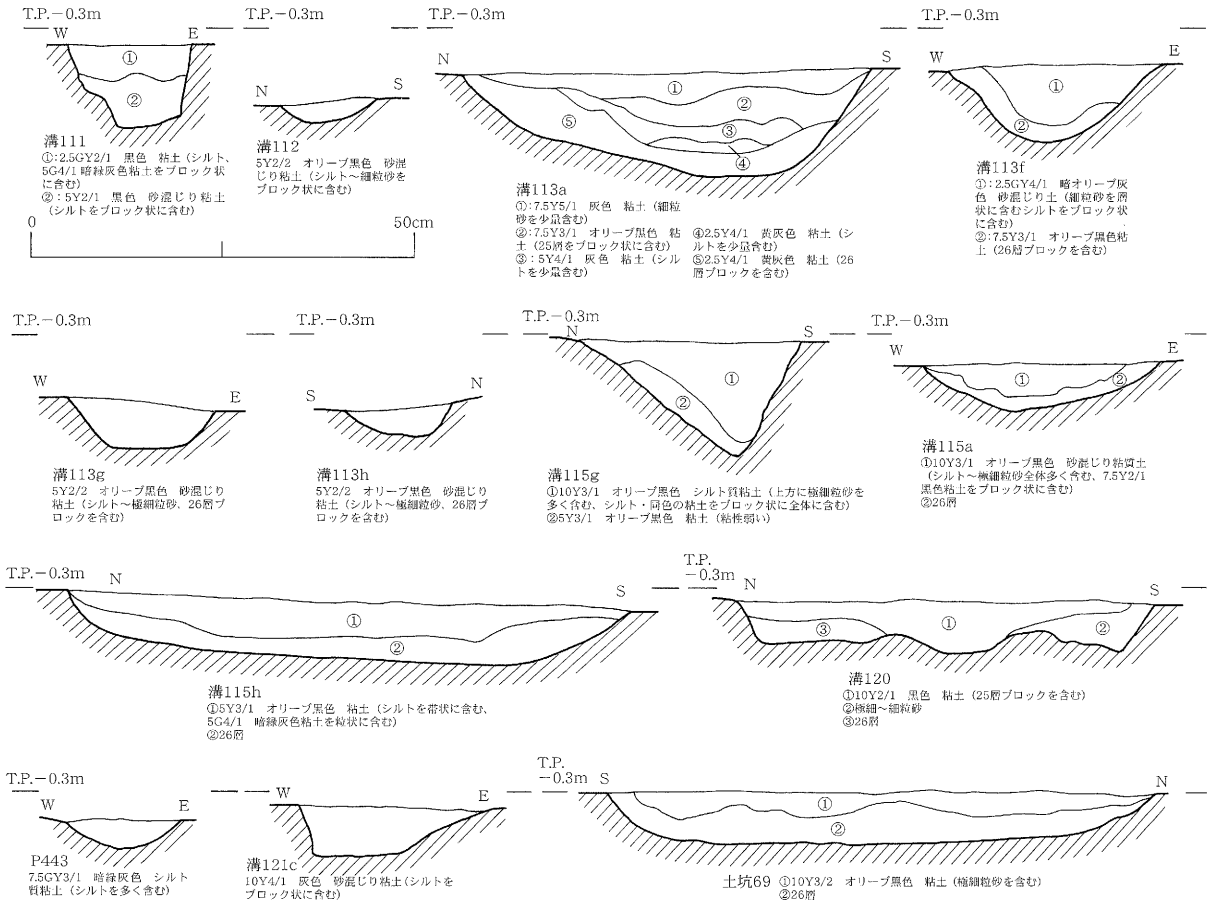
溝118（5地区）は調査区東端に位置する南北方向の溝である。北端は東に向かってくの字に曲がり、調査区外へ延びる。検出長約2m、幅約30cm、深さ約7cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は下方に細粒砂を多く含む黒色（5Y2/1）粘土である。

溝119（5地区）は南端が二股に分かれる南北方向の溝である。端部は丸く終わる。長さ約1m、幅約20cm、深さ約6cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒色（5Y2/1）粘土である。

溝120（6地区）は調査区の東端に位置し、南北方向に主軸を持つ不定形な溝である。北端は調査区外に延びる。検出長約2m40cm、幅約55cm、深さ約7cmを測る。断面形は浅く不定形である。埋土は黒色（10Y2/1）粘土と細粒砂の2層に分かれる。

溝121（6～7地区）は南北方向の溝である。南端は二股に分かれ、調査区外へ延びる。北端は丸く終わる。検出長約1m70cm、幅約25cm、深さ約7cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土はシルトをブロック状に含む灰色（10Y4/1）砂混じり粘土である。

溝123（7地区）は調査区の西端に位置する東西方向の溝である。西半は調査区外に延び、東端は丸く終わる。検出長約1m、幅約50cm、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシル



第9図　第58次第25層上面遺構断面図

トをブロック状に含む灰色（10Y4/1）砂混じり粘土で、シカ（資料20）が出土した。

土坑69（４地区）は平面が楕円形を呈する。北端が調査区外に延びるため、全形は不明である。長軸約65cm、短軸約40cm、深さ約８cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含むオリーブ黒色（10Y3/2）粘土である。

遺構の位置と埋土の状況から、溝群や土坑、一部のピットはそれぞれ繋がった遺構であったと思われる。時期決定の可能な遺物は出土しなかったが、周辺の調査から弥生時代前期以前のものと考えられる。

＜前期＞

第22層上面遺構（第10・12図　図版８）

第22層上面において溝・土坑・ピットを検出した。遺構は１～４地区にわたって検出した。遺構内・層内からは、縄文土器・Ⅰ様式に属する弥生土器が出土した。いずれも細片である。

溝108（１地区）は調査区の西端に位置し、東・北の二方向に分かれて延びる溝である。西端は調査区外に延び、全形は不明である。東西方向のものは南北方向のものに比べやや幅広である。東西方向は検出長約１m80cm、幅約50cm、南北方向は検出長約１m、幅約30cm、どちらも深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はオリーブ黒色（7.5Y2/2）砂混じり粘質土である。

土坑68（４地区）は調査区の西端に位置し、南北方向に長軸を持つ。形状は不定形で、西半分は調査区外に延び、全形は不明である。検出長軸約３m、検出短軸約50cm、深さ約40cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は中～粗粒砂を全体に多く含む暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）砂質土である。

この他、複数のピットを検出した（ピット427～442）。配置に規則性はなく、概ね直径20～30cm、深さ10～20cmのものである。埋土は単一で、中～粗粒砂を全体に多く含む暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）砂混じり粘質土である。遺物は出土しなかった。

＜前期後半～中期前半＞

第21層上面遺構（第11・13図　図版９）

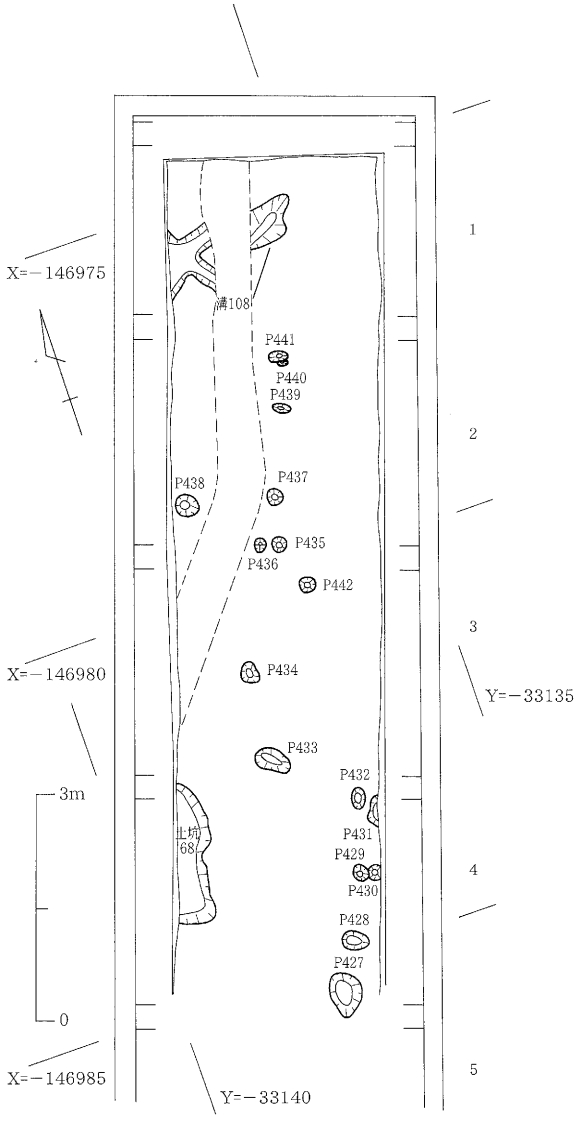
第21層上面において土坑・ピットを検出した。遺構は１～３地区にわたって検出した。遺構内・層内から縄文土器・Ⅰ～Ⅱ様式に属する弥生土器が出土したが、いずれも小片であり、時期決定は困難である。

溝107（１～２地区）は上層の大溝３とほぼ同位置の南北方向の溝である。大部分を大溝３に切られているため全形や規模は不明である。埋土は粗粒砂を含む黒色（7.5Y2/1）砂混じり土である。埋土からは縄文土器の深鉢（44・50・52）が出土した。

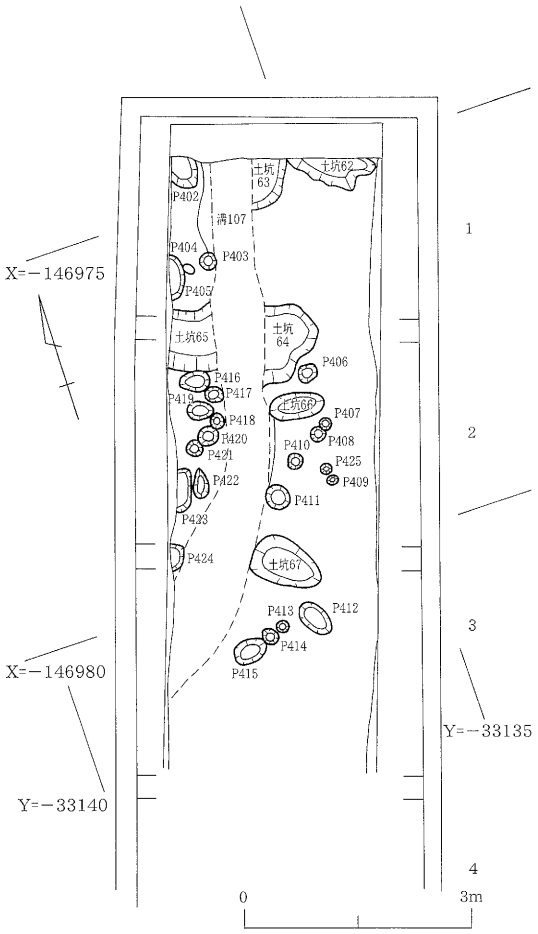
土坑62（１地区）は調査区の北端に位置し、東西方向に長軸を持つ。形状は不定形で、北端は調査区外に延びる。検出長軸約１m20cm、検出短軸約40cm、深さ約７cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含むオリーブ黒色（10Y3/1）砂混じりシルト質土である。

土坑63（１地区）は調査区の北端、土坑62に西接する。上層の大溝３により西半を切られているため全形は不明である。南北方向に長軸を持つ。検出長軸約70cm、検出短軸約40cm、深さ約８cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は細～中粒砂を少量含むオリーブ黒色（5Y2/2）砂混じりシルト質土である。

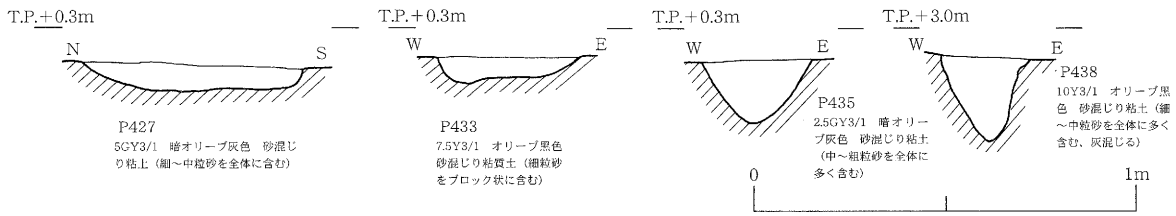
土坑64・65（１～２地区）は上層からの大溝３により分断されていたが、ふたつは位置や埋土の状況から同一の遺構と思われる。西端は調査区外に延びるため、全形は不明である。東西方向に長軸を持つ。検出長軸約２m、短軸約１m、深さ８cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細～中粒砂を少量含むオリーブ黒色（7.5Y3/1）砂混じり粘質土である。



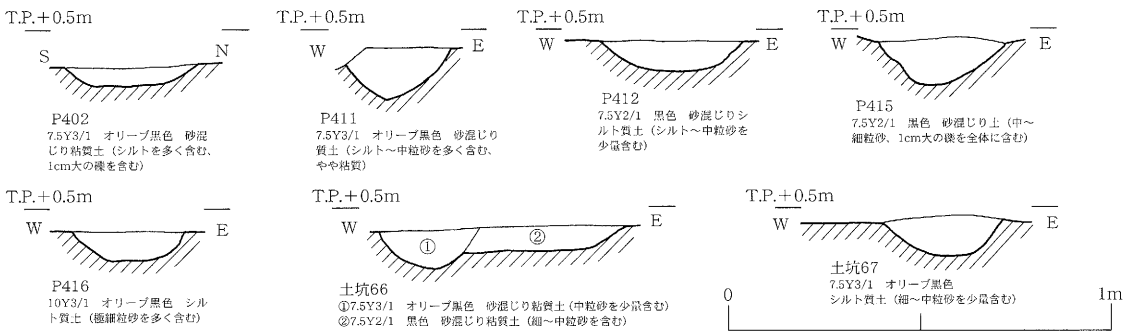
第10図　第58次第22層上面遺構平面図



第11図　第58次第21層上面遺構平面図



第12図　第58次第22層上面遺構断面図



第13図　第58次第21層上面遺構断面図

土坑66（２地区）東西方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約70cm、短軸約30cm、深さ約８cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は中粒砂を少量含むオリーブ黒色（7.5Y3/1）砂混じり粘質土である。

土坑67（２地区）は東西方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約１m、短軸約60cm、深さ約12cmを測る。断面形は皿状を呈する。細～中粒砂を全体に少量含むオリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト質土である。

この他複数のピットを検出した（ピット402～425）。配置に規則性は見いだせないものの、比較的密集した状況であった。概ね直径20～30cm、深さ10～20cmのものである。埋土は中粒砂を含むオリーブ黒色（7.5Y3/1）砂混じり粘質土の単一層である。遺物は出土しなかった。

第20層上面遺構（第14図　図版10）

第20層上面において土坑・ピットを検出した。遺構は４～７地区、11～12地区に分散してみられた。層内からはⅠ～Ⅱ様式の弥生土器の細片、縄文土器の浅鉢（10）、深鉢（40・45）が出土した。

土坑60（11地区）は東西方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約70cm、短軸約30cm、深さ約22cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細～中粒砂を全体に含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘質土である。

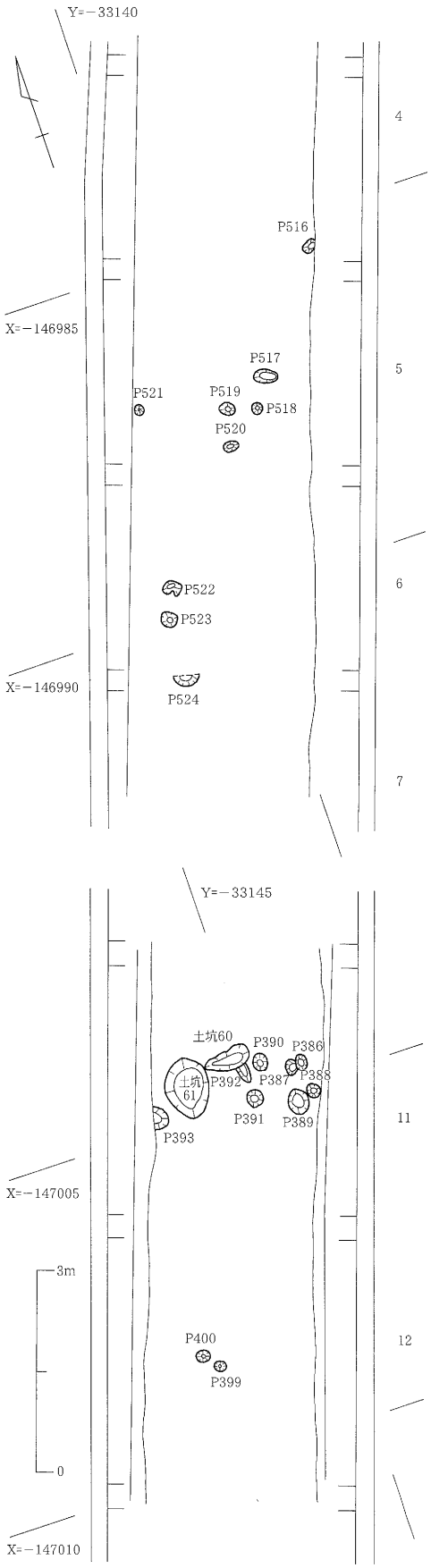
土坑61（11地区）は南北方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約90cm、短軸約60cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細～中粒砂を全体に含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘質土である。遺構内からは縄文土器の細片が出土した。

この他複数のピットを検出した。配置に規則性はなく、概ね直径20cm以下、深さ約10cmのものであった。埋土は単一で、中～粗粒砂を全体に多く含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘質土である。出土した土器は全て細片であり、時期の判別できるものはなかった。

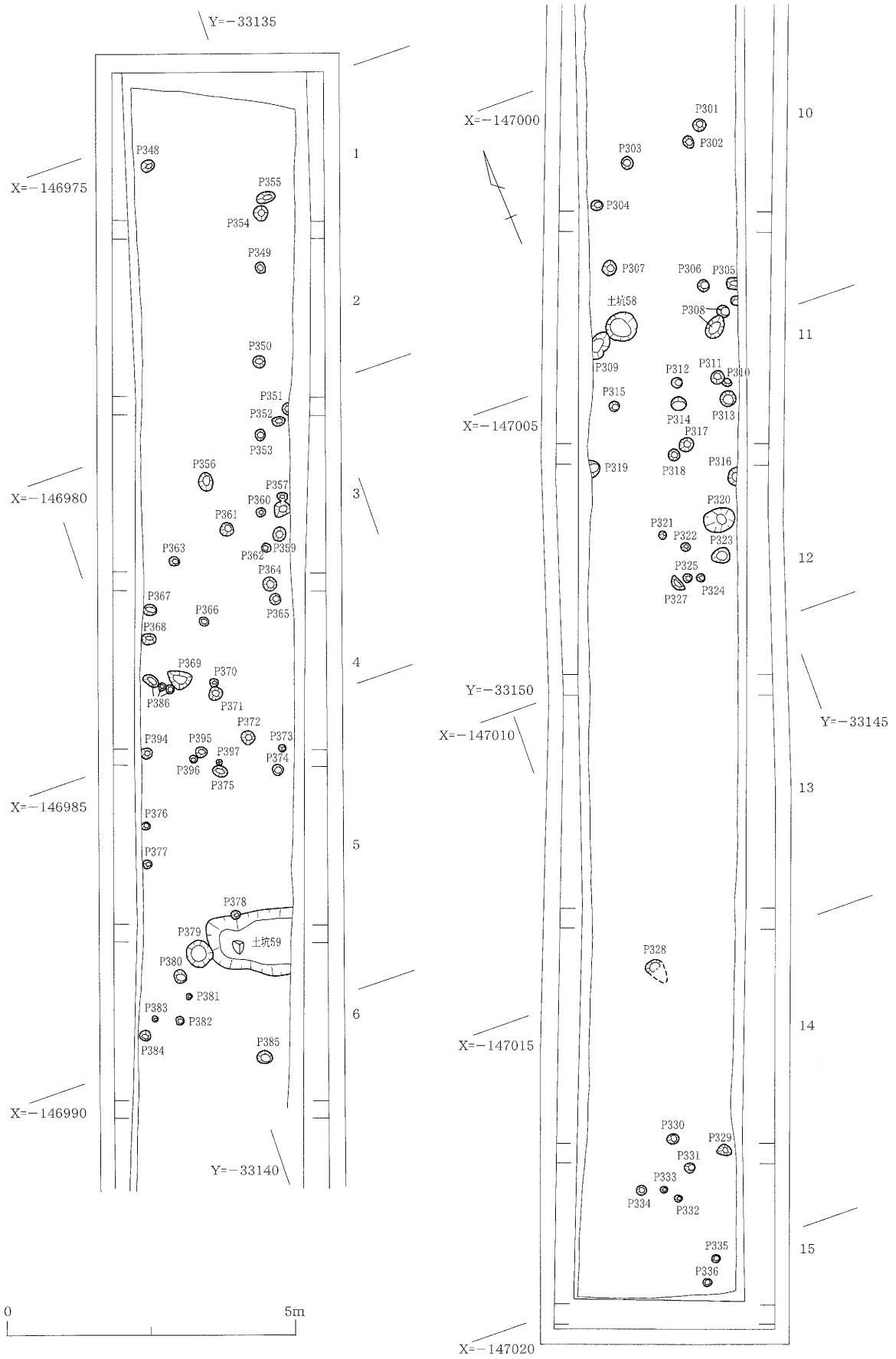
第19層上面遺構（第15図　図版10～11）

第19層上面において土坑・ピットを検出した。層内からは縄文土器およびⅠ様式のものと思われる弥生土器の細片、動物遺体の大型哺乳類（資料140）が出土した。

土坑58（11地区）は円形の土坑である。直径約50cm、深さ約23cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は中～粗粒砂を含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘質土である。



第14図　第58次第20層上面遺構平面図



第15図　第58次第19層上面遺構平面図

遺構内から縄文土器の深鉢（４・５・43)、骨角牙製品は加工痕の残る鹿角（957）が出土した。

土坑59（５～６地区）は調査区の東端に位置し、東西方向に長軸を持つ。遺構の東端が調査区外に延びるため、全形は不明である。底面は西にテラス状の部分をもち、東に向かって深くなる二段落ちを呈する。検出長約１m50cm、短軸約１m20cm、テラス部分で深さ約20cm、深い部分で約40cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は中～粗粒砂を含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘質土である。炭が混じる。直径約35cmを測る石がテラス部の底面部分から出土した。遺構内からは縄文土器の浅鉢（８)、深鉢（13、32、35)、動物遺体の哺乳類（資176）が出土した。

この他複数のピットを検出した。配置に規則性はなく、概ね直径20～30cm、深さ10～20cmのものである。埋土は中～粗粒砂を含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘質土の単一層である。出土した土器は全て細片であり、時期の判別できるものはなかった。

第18層上面遺構（第16～19図　図版12・13）

第18層上面において溝（大溝を含む)・土坑・ピットを検出した。遺構には最低２時期の切り合いが見られ、第17層もしくは第17′層の堆積によって完全に埋没している。出土したⅢ様式以降の土器は第17層のオリーブ黒色（5GY2/1）粘質土によってもたらされたものである。層内からはコンテナ３箱分の遺物が出土した。出土遺物から遺構は弥生時代前期末～中期初頭のものと考えられる。小片であるが縄文土器の深鉢（36）が出土した。弥生土器は壷（689・690)、高杯（691)、鉢（692・694)、甕（695～702)、があった。土製品は土錘（826)、石器は打製石剣（929)、動物遺体は大型哺乳類（資137)、哺乳類（資138・139）が出土した。

大溝４（９地区）は東西方向の溝である。北肩が調査区外に延びるため、正確な形状や幅は不明である。検出長約３m、残存幅約２m30cm、深さ約１mを測る。断面形はゆるいV字状を呈する。埋土は中～粗粒砂を含むオリーブ黒色（5Y3/1）砂混じり土を主体とし、砂混じり粘土を含む。遺物や炭、動・植物遺体が多く混じる。遺構内からはコンテナ２箱分の遺物が出土した。縄文土器は深鉢（26）があった。弥生土器はⅠ～Ⅱ様式の土器が主体であり、壷（144～150)、壷蓋（151)、甕（152・153)、鉢（154・155)、動物遺体のイノシシ・大型哺乳類（資63・64）が出土した。遺構の掘削・埋没時期もこれにあたると思われる。

大溝５（12～13地区）は南北方向の溝である。南に向かってわずかに幅広になる。両端は調査区外に延びる。検出長約３m50cm、幅約２m、深さ約50cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を多く含む黒褐色（2.5Y3/1）砂混じり粘土である。遺構内からはコンテナ２箱分の遺物が出土した。上層はⅢ～Ⅳ様式の土器を含む第17層のオリーブ黒色（5GY2/1）粘質土によって埋没しており、下層の埋土からはⅠ・Ⅱ様式に属する土器が出土した。遺構の機能時期も当該期に当たると思われる。弥生土器は壷（156～158)、甕（159～162)、鉢（163～165)、水差形土器（166)、高杯（167・168)、壷蓋（169）で、動物遺体はイノシシ・大型哺乳類（資65・66）が出土した。

溝101（３地区）は東西方向の溝である。上層の大溝３によって西端を切られている。東端は調査区外に延びる。検出長約２m30cm、幅約30cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を含む黒色（2.5GY2/1）粘土である。

溝102（12地区）は南北方向の溝である。大溝５の北側に位置し、並行に走る。北端は調査区外にのび、南端は丸く終わる。検出長約２m50cm、幅約80cm、深さ25cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細～粗粒砂を含む黒色（7.5YR1.7/1）砂混じり粘質土で、炭が混じる。Ⅰ様式の弥生土器細片、動物遺体の大型哺乳類・シカ・シカもしくはイノシシ（資191～193）が出土した。

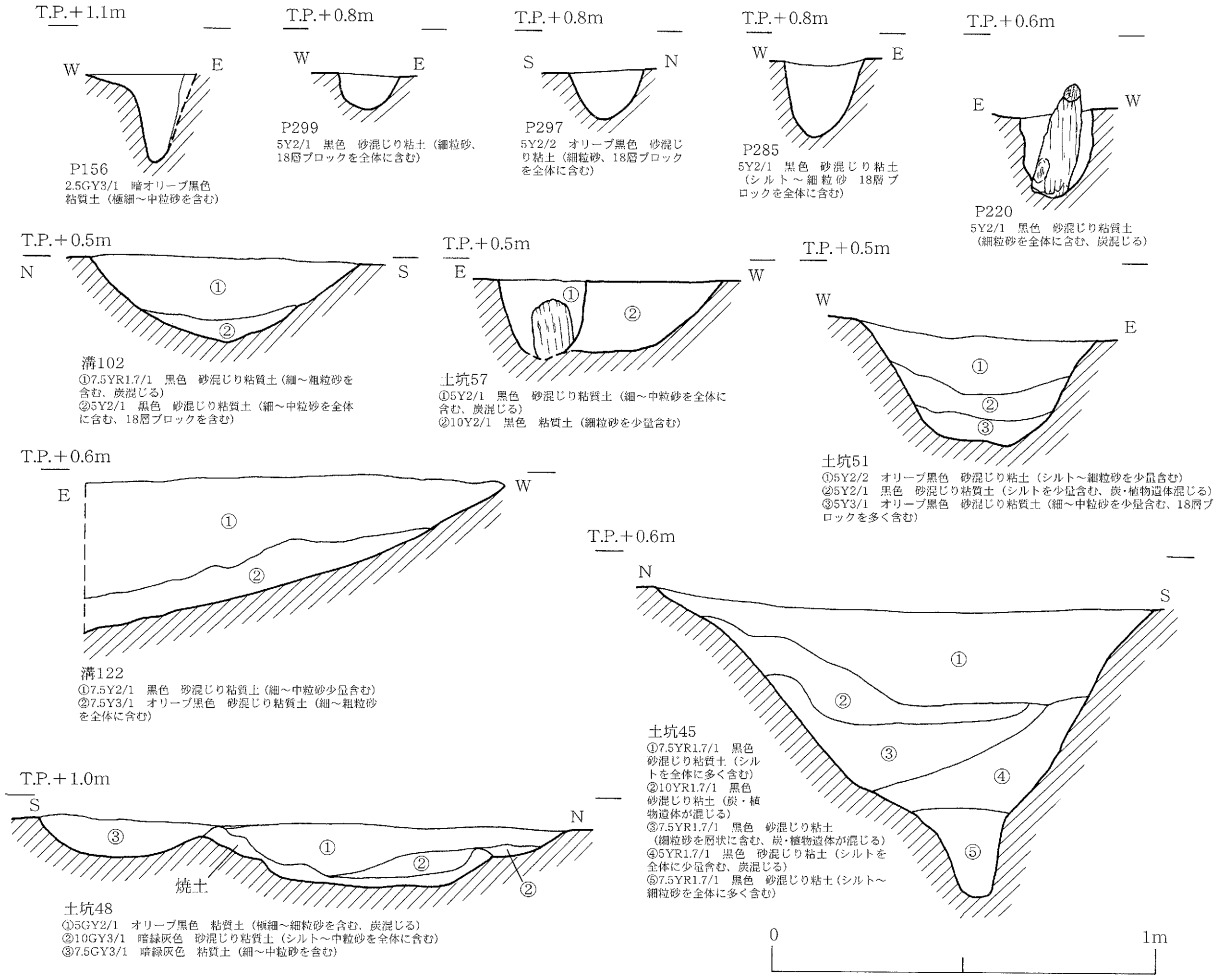
溝103（15地区）は南北方向の溝である。上層の大溝２に北端を切られている。南端は調査区外に

延びる。検出長約３m50cm、幅約50cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細～中粒砂を含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘土で、炭・土器が全体に混じる。

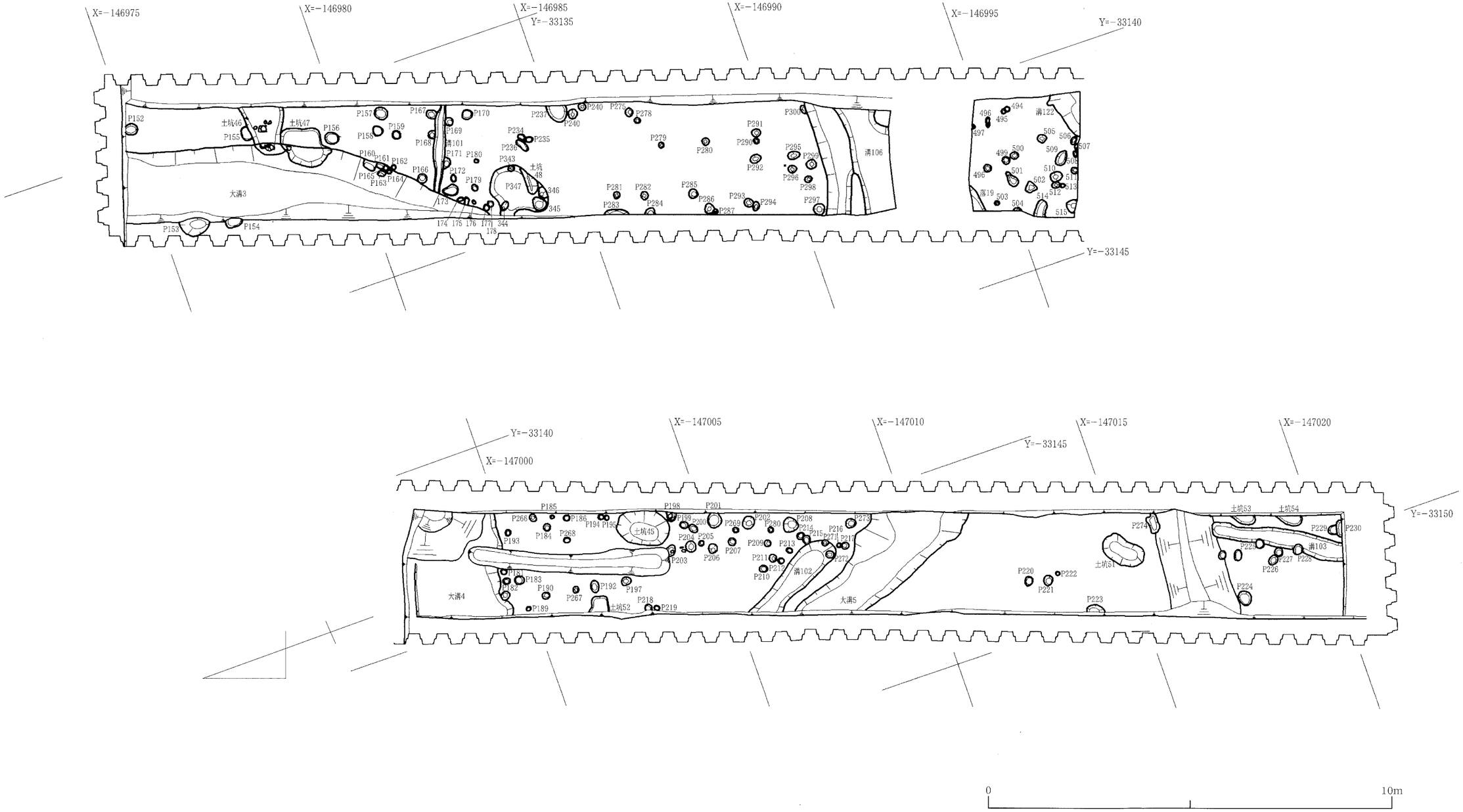
溝106（７地区）はひとつの遺構として検出したが、２本の溝が重なり合っていた。どちらも東西方向の溝である。北側の溝をa、南側の溝をｂとして記述する。溝aは南肩を溝ｂに切られ、溝ｂの南肩は調査区外に延びるため、形状や正確な幅は不明である。溝aは検出長約３m、検出幅約60cm、深さ約50cmを測る。断面形はU字状を呈する。北肩には焼土塊が帯状に貼り付いていた。溝ｂは検出長約３m、検出幅約１m、深さ約60cm。を測る。断面形はU字状を呈する。埋土は細～中粒砂を含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘質土で、炭・土器が多く混じる。出土した遺物はコンテナ２箱を数える。Ⅰ・Ⅱ様式の土器が出土した。遺構の機能時期も当該期に当たると思われる。この他のⅢ様式以降の土器は遺構に入り込んだ第17層によりもたらされたもので、小片であるが縄文土器の深鉢(49)が出土した。弥生土器は壷（220～228)、甕（229～232)、鉢（233・234)、高杯（235）があった。土製品は環状土製品（836)、動物遺体はイノシシ（資194～196)、大型哺乳類（資197）が出土した。

溝122（８地区）は遺構の北肩の一部を検出した。大部分が調査区外になるため、形状や規模は不明である。検出長約３m、検出幅約55cm、深さ約20cmを測る。位置や埋土の状況から大溝４の北肩の可能性がある。埋土は細粒砂～粗粒砂を含むオリーブ黒色（7.5Y3/1）砂混じり粘質土である。

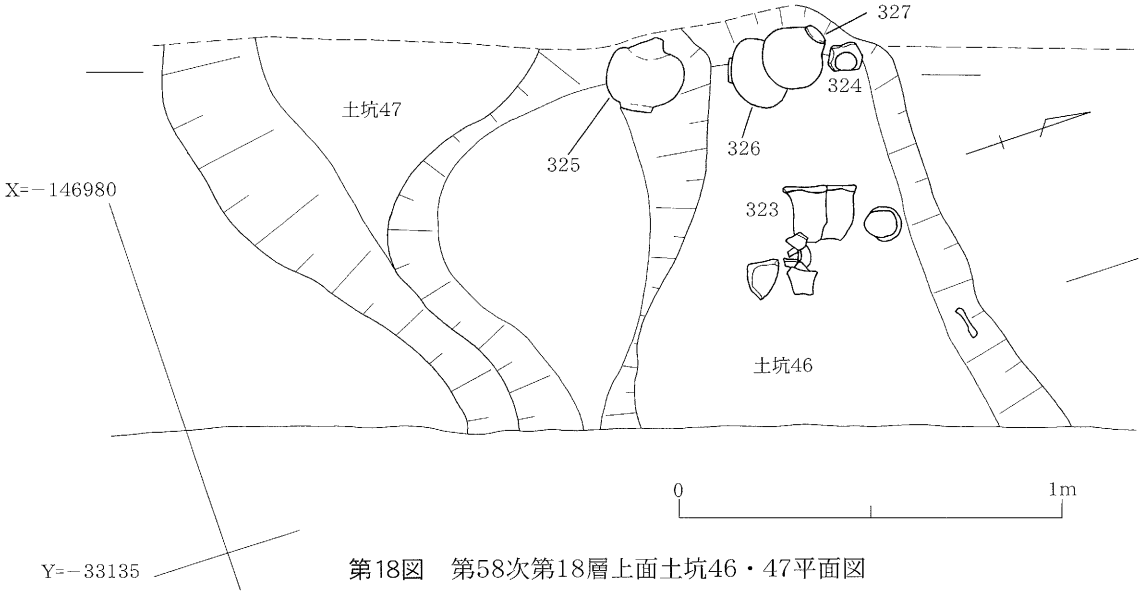
落ち込み19（８地区）は遺構の南肩の一部を検出した。大部分が調査区外に位置するため、全形や



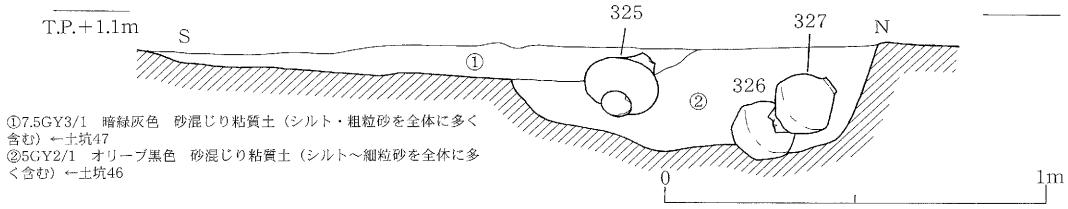
第16図　第58次第18層上面遺構断面図



第17図　第58次第18層上面遺構平面図



第18図　第58次第18層上面土坑46・47平面図



第19図　第58次第18層上面土坑46・47断面図

規模は不明である。検出長約80cm、検出幅約30cm、深さ約10cmを測る。埋土は細粒砂～粗粒砂を少量含む黒色（5Y2/1）砂混じり粘土である。形状や埋土から溝106の南肩の一部の可能性がある。

土坑45（10地区）は調査区の東端に接し、南北方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約１m40cm、短軸約90cm、深さ約80cmを測る。断面形はV字状を呈する。埋土は細～中粒砂を全体に含む黒色（10YR1.7/1）砂混じり粘質土で、炭・動植物遺体が混じる。遺構内からは甕（322）を含むⅠ～Ⅱ様式の弥生土器が出土した。遺構の時期も当該機と思われる。

土坑46（２地区）は調査区の東端に位置し、南北方向に長軸を持つ不定形な土坑である。大溝３に西端を切られ、東端は調査区外に延びるため、全形は不明である。隣り合う土坑47に南端の一部を切られている。検出長軸約１m30cm、検出短軸約１m、深さ約30cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に多く含むオリーブ黒色（5GY2/1）砂混じり粘質土である。遺構内からは口縁部や底部を打ち欠かれたⅠ様式の弥生土器（323～327）が出土しており、二次焼成を受けたものもみられた（326・327）。遺構も当該期に属すると思われる。縄文土器は小片であるが深鉢（23・28・31）があった。弥生土器は甕（323）、壷（324～327）。土製品は円板状土製品（856）が出土した。

土坑47（２地区）は調査区の東端に位置し、南北方向に長軸を持つ不定形な土坑である。大溝３に西端を切られ、東端は調査区外に延びるため、全形は不明である。隣り合う土坑46の南端を切り込む。検出長軸約１m40cm、検出短軸約１m、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルト～粗粒砂を全体に含む暗緑灰色（7.5GY3/1）砂混じり粘質土である。

土坑48（４地区）は調査区の西端に接し、南北方向に長軸を持つ不定形な土坑である。長軸約１m50cm、短軸約１m20cm、深さ約16cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は極細～細粒砂を

含むオリーブ黒色（5GY2/1）粘土である。炭が混じる。底面部付近に焼土が皿状に貼り付いた状態を検出した。土が固く焼け、鬆が入るほどの高熱を受けており、単なる屋外炉とは考えにくい。焼土塊を除去した底面から複数のピットを検出した。こぶし大の礫が入ったものもみられた。動物遺体の哺乳類（資料174）が出土した。

土坑51（14地区）は東西方向に長軸を持つ、楕円形の土坑である。長軸約１m20cm、短軸約70cm、深さ約30cmを測る。断面形はゆるいU字状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を少量含むオリーブ黒色（5Y2/2）粘土である。弥生土器は細頸壷（344）、甕（345）が出土した。

土坑52（10地区）は調査区の西端に位置し、東西方向に長軸を持つ土坑である。西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約40cm、短軸約40cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂を全体に含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘質土である。

土坑53（15地区）は調査区の東端に位置し、南北方向に長軸を持つ土坑である。東半が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約60cm、検出短軸約20cm、深さ約15cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～中粒砂を少量含むオリーブ黒色（5Y3/1）砂混じり粘土で、炭・土器が混じる。弥生土器は甕（346・347）が出土した。

土坑54（15地区）は調査区の東端に位置し、南北方向に長軸を持つ土坑である。東半が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約70cm、検出短軸約30cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を少量含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘土である。

土坑57（11地区)は円形の土坑である。直径約60cm、深さ約30cmを測る。断面形は深い皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を含む黒色（5Y2/1)砂混じり粘質土である。

この他複数のピットを検出した。このなかで遺物の出土したピットは以下のとおりである。

ピット152（１地区）は調査区の北端に位置する円形のピットである。検出長軸約30cm、短軸約25cm、深さ約30cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土はシルト～粗粒砂を全体に含む暗緑灰色（7.5GY3/1）砂混じり粘質土である。打製石剣（933)、動物遺体のイノシシ・哺乳類（資181・182）が出土した。

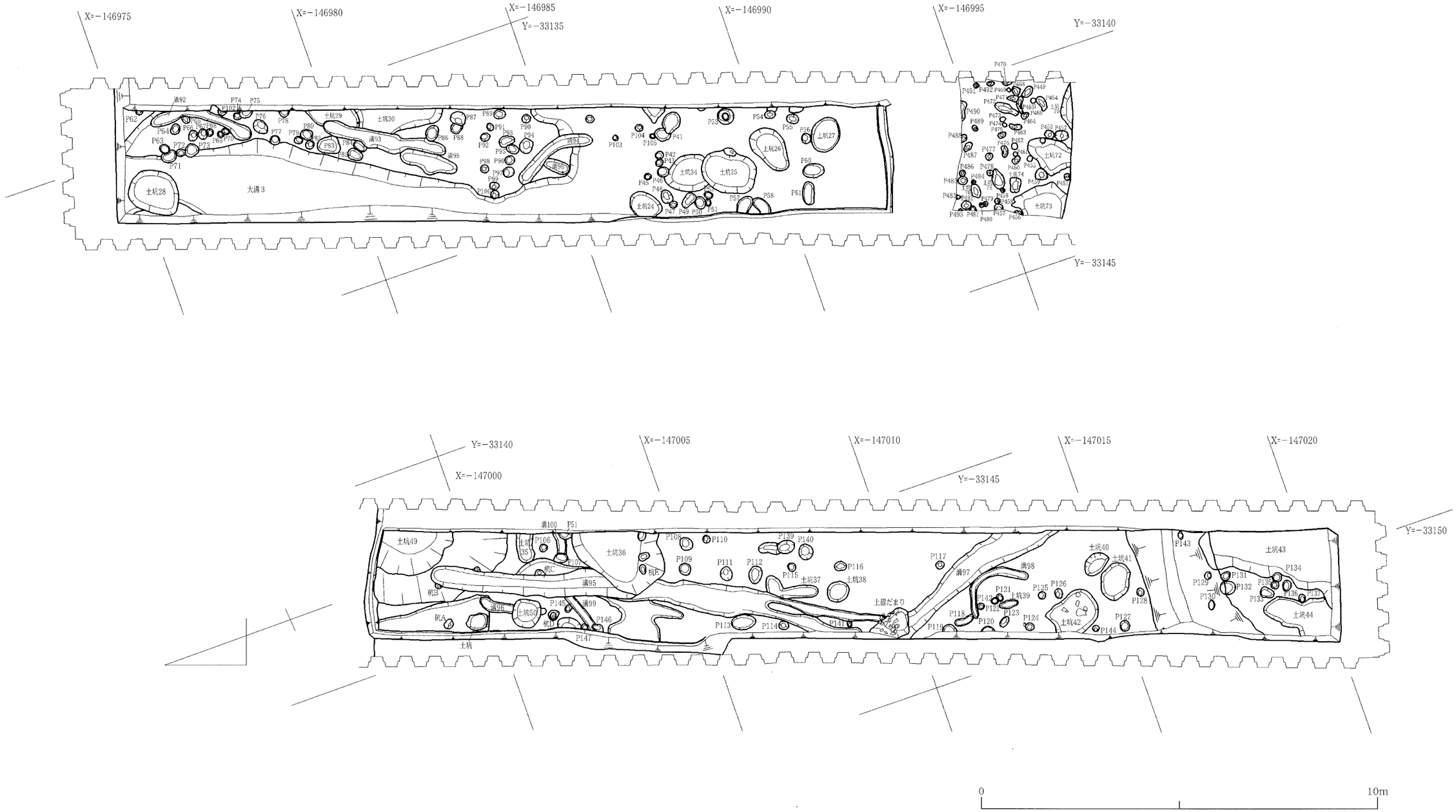
ピット297（７地区）はほぼ円形のピットである。直径約30cm、深さ約40cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は細～中粒砂を含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘質土である。炭・土器が多く混じる。埋土からはＩ様式の土器（360）が出土した。

この他のピットから出土した土器は全て細片であり、時期の判別できるものはなかった。概ね直径20～30cm、深さ10～20cmの円形である。配置に規則性は見られず、埋土は細～中粒砂を含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘質土の単一である。ピット153からイノシシ（資183)、ピット165から哺乳類（資184)、ピット197からシカ（資185)、ピット363から哺乳類（資189）の動物遺体が出土した。

＜中期中葉～後半＞

第17層上面遺構（第20～22図　図版14～19）

第17層上面において溝(大溝を含む)・土坑・ピットを検出した。遺構は少なくとも５時期の切り合いを確認した。層内からはコンテナ10箱分の遺物が出土した。出土遺物から第17層上面の遺構は中期中葉にあたると思われる。縄文土器は浅鉢（１)、深鉢（２・６・14・16・19・24・37・39・48・53)、弥生土器は壷（596～620・624)、細頸壷（621・622)、水差形土器（623)、壷蓋（625～627)、鉢（628～640)、高杯（641～646)、甕蓋（647～649)、甕（650～688）があった。土製品はミニチュ



第20図　第58次第17層上面遺構平面図

ア土器（828・829)、円板状土製品（851・865・876)、石器は石庖丁（885)、扁平片刃石斧（891)、用途不明石器（897)、石鏃（919)、削器（936・946)、骨角牙製品は刺突具（962)、動物遺体はシカ（資123～128)、イノシシ（資105～113)、シカもしくはイノシシ（資129～133)、大型哺乳類（資114～122)、哺乳類（資135・136)、不明（資134）が出土した。

大溝３（１～５地区）は南北方向の溝である。調査区北端から緩やかに西にカーブし、調査区外へ延びる。西肩が調査区外に位置するため、全形は不明である。検出長約12m、検出幅約１m40cm、深さ約１mを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に少量含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘土である。炭・土器が混じる。断面観察から少なくとも2回の掘り直しがあり、第18層においても機能していた可能性がある。遺構の南端部で東西方向の溝が合流する。南肩は第17′層の整地によって切られているため全形は不明である。埋土は細粒砂を多く含むオリーブ黒色（10Y3/1）砂混じり粘土である。遺構内からはコンテナ５箱分の遺物が出土した。上層ではⅢ～Ⅳ様式の土器が多くみられ、下層の埋土からは少量ではあるが、Ⅰ～Ⅱ様式の土器が出土した。縄文土器は深鉢（３・41・47)、弥生土器は壷（116～123)、細頸壷（124)、甕（125～134)、鉢（135・136)、高杯（137～141)、甕蓋（142・143）があった。土製品は円板状土製品（854・855・860・864)、動物遺体はシカ（資60～62)、イノシシ（資55～58)、大型哺乳類（資59）が出土した。

溝92（１～２地区）は南北方向に主軸をもつ溝である。両端は丸く終わる。全形は弧状を呈し、調査区の東端に一部が接する。長軸約２m50cm、幅約30cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を多く含む黒色（7.5YR1.7/1）砂混じり粘質土である。

溝93（３～４地区）は南北方向の溝である。南端の一部が同方向の溝93′によって切られている。長さ約３m50cm、幅約40cm、深さ約15cmを測る。断面は皿状を呈する。埋土は細粒砂を多く含む黒色（7.5YR1.7/1）砂混じり粘質土である。遺構内からは縄文土器は深鉢（34)、弥生土器は壷（170～172)、土製品は円板状土製品（849)、動物遺体は大型哺乳類・シカ（資料198・199）が出土した。

溝94（４～５地区）は南北方向に長軸を持つ溝である。東方にやや弧状を呈し、大溝３の東西方向の流れを切り込む。長軸約４m20cm、幅約50cm、深さ約20cmを測り、断面形はU字状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を多く含む黒色(7.5YR1.7/1)砂混じり粘土で、弥生土器の壷(173)が出土した。

溝95（９～12地区）はひとつの遺構として検出したが、ほぼ同位置で時期差をもって重なり合う、南北方向の2本の溝であった。９～10地区に延びる深い溝をa、これに切られている10～12地区に延びる浅い溝をｂとして記述する。溝aは南端を土坑36によって切られている。長さ約５m50cm、幅約70cm、深さ約60cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は細粒砂を全体に少量含む黒色（7.5YR1.7/1）砂混じり粘土で、炭・土器が混じる。溝ｂは11地区において二股に分かれ、並行に延びる。北端は丸く終わる。南端を土器溜りに切られているため、全形は不明である。溝aを含まない検出長は約10m、幅約70cm、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む黒色（5Y2/1）砂混じり粘質土で、炭が混じる。遺構内から出土した遺物はコンテナ５箱を数える。土器のほとんどはⅢ～Ⅳ様式の弥生土器であり、Ⅰ・Ⅱ様式のものが数点混じり込む。小破片であるが縄文土器の深鉢（38)、弥生土器は壷（181～191)、甕蓋（192・193)、水差形土器（194)、細頸壷（195)、壷蓋（196)、鉢（197～199)、甕（200～213)、高杯（214～219）があった。土製品は円板状土製品（859・872・875・877)、石器は大型石庖丁（886)、砥石（911)、用途不明石器（900)、動物遺体はシカ（資料202～208)、シカもしくはイノシシ（資料209～212)、スッポン（資料213)、ヒト（資料214)、大型哺乳類（資料200・201)、不明（資料215～217）が出土した。

溝96（10地区）は南北方向の溝である。両端は丸く終わる。長さ約１m50cm、幅約20cm、深さ

約３cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む黒色（5Y2/1）砂混じり粘土である。出土した弥生土器はⅢ様式の細片および甕（174）、壷（175・176）があった。

溝97（13地区）は南北方向の溝である。両端は調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長約4m、幅約50cm、深さ約20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を含む黒色（7.5YR1.7/1）砂混じり粘質土で、炭・植物遺体が混じる。出土した弥生土器は壷（177～179）、甕（180）があった。

溝98（13地区）は溝97の南肩に一部を接して位置する、南北方向に軸を持つ弧状の溝である。両端は丸く終わる。長軸約１m70cm、幅約20cm、深さ約８cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は黒色（2.5Y2/1）粘土で、炭が混じる。

溝99（10地区）は東西方向の溝である。東端を溝95に切られ、西端は調査区外に延びるため全形は不明である。検出長約１m、幅約18cm、深さ約３cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は粗粒砂・礫を少量含む暗緑灰色（7.5GY4/1）砂混じり粘質土である。植物遺体が混じる。

溝100（10地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端はピット107に切られているため全形は不明である。検出長約80cm、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は粗粒砂を少量含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘質土である。

土坑24（５地区）は調査区の西端に接し、南北方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約80cm、短軸約55cm、深さ約20cmを測る。断面形はＶ字状を呈する。埋土は中粒砂～粗粒砂を含む暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂混じり粘質土である。

土坑25（５～６地区）は南北方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。隣り合う土坑34の南端を切る。長軸約１m40cm、短軸約１m、深さ約15cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は粗粒砂を含む暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂混じり粘質土である。出土した遺物は縄文土器の深鉢（46）、弥生土器は壷（263）、鉢（264）、Ⅲ様式の土器の細片があった。土製品は円板状土製品（870）、動物遺体はシカ（資料145）が出土した。

土坑26（６地区）は東西方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約１m、短軸約80cm、深さ約20cmを測る。断面形は不定形である。埋土は極粗粒砂を含む暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂混じり粘質土である。弥生土器の甕（265）、動物遺体のイノシシ（資146）が出土した。

土坑27（６～７地区）は東西方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約１m、短軸約70cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂を全体に少量含む暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）砂混じり粘質土で、炭が混じる。弥生土器の壷（266）が出土した。

土坑28（１地区）はほぼ円形の土坑である。大溝３の上に位置する。直径約１m20cm、深さ約23cmを測る。埋土は細粒砂～中粒砂を全体に多く含む黒色（10YR1.7/1）砂混じり粘質土で、焼土・炭・動物遺体が混じる。遺構内から出土した弥生土器は壷（267・268）、甕（269）があった。石器は石庖丁（879）、動物遺体はイノシシ（資147・148）、シカもしくはイノシシ（資149・150）、哺乳類（資151・152）が出土した。

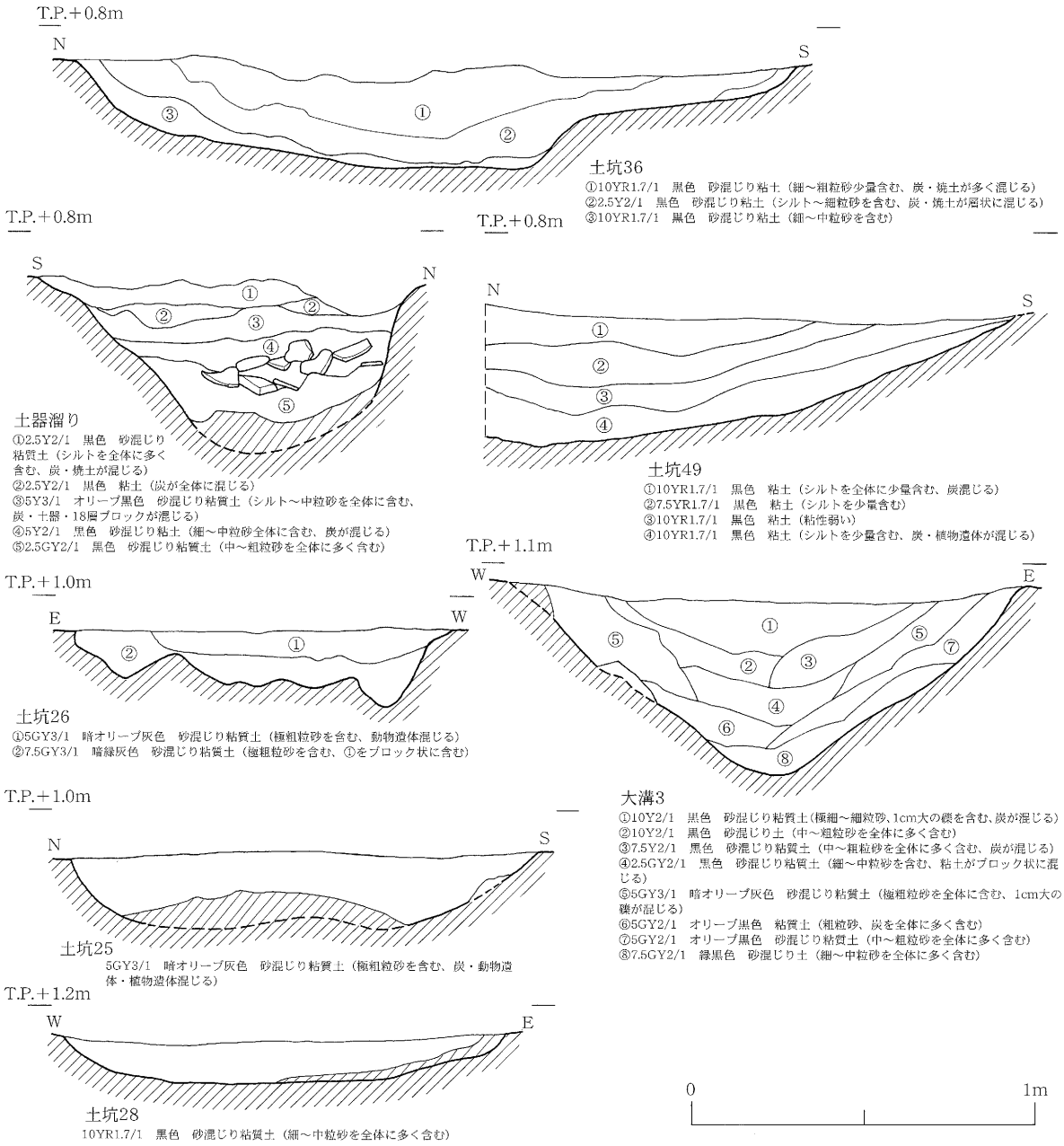
土坑34（５地区）はほぼ円形の土坑である。隣り合う土坑25に南端を切られている。検出直径約90cm、深さ約20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は粗粒砂を含む暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）砂混じり粘質土で、炭が混じる。遺構内から出土した縄文土器は深鉢（33）、弥生土器は甕（270）があった。動物遺体はイノシシ？（資154）が出土した。

土坑35（10地区）は調査区の東端に位置し、東西方向に長軸を持つ土坑である。西に向かって舌状に延びる。東端は調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約70cm、短軸約40cm、深さ

約10cmを測る。断面形は浅いU字状を呈する。中粒砂～粗粒砂を全体に含む黒色（7.5YR1.7/1）砂混じり土である。動物遺体、炭・土器が混じる。

土坑36（10地区）は調査区の東端に位置する不定形な土坑である。東西方向に長軸をもつ。東端は調査区外に向かって延びるため、全形は不明である。検出長軸約２m20cm、検出短軸１m70cm、深さ約30cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂を含む黒色（10YR1.7/1）砂混じり粘土で、炭・焼土が多く混じる。下層で検出した土坑45とほぼ同じ位置で検出したが、中心がずれることや、溝95を切ることなどから別遺構であると判断した。遺構内から出土した遺物はコンテナ２箱を数える。数点のⅠ様式土器が混じり込むものの、土器のほとんどはⅡ～Ⅲ様式のものである。弥生土器は壷（271～275）、甕（276～281）があった。石器は削器（945）、剥片（948）、木製品は木槽（955）、動物遺体は大型哺乳類（資171）、シカ（資172・173）が出土した。

土坑37（12地区）は東西・南北に延びるL字型の溝である。両端とも丸く終わる。溝95に切られている。東西方向は約60cm、南北方向は約１m、深さ約15cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は



第21図　第58次第17層上面遺構断面図

中粒砂～粗粒砂を全体に含む黒色（7.5YR1.7/1）砂混じり土である。遺構内からは土製品は円板状土製品（850）、石器は打製石剣（930）、動物遺体はイノシシ（資155）が出土した。

土坑38（12地区）はほぼ円形の土坑である。直径約50cm、深さ約５cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘土で、焼土･炭を多く含む。屋外炉の可能性が考えられる。

土坑39（13地区）南北方向に長軸をもつ、楕円形の土坑である。長軸約50cm、短軸約20cm、深さ約４cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む黒色（5Y2/1）粘土である。

土坑40（14地区）は南北方向に長軸をもつ、楕円形の土坑である。長軸約70cm、短軸約50cm、深さ約12cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を含む黒色（10YR1.7/1）砂混じり粘土である。遺構内からはⅡ様式の弥生土器の細片と共に縄文土器の深鉢（15・18・30）、動物遺体のシカ（資156）が出土した。

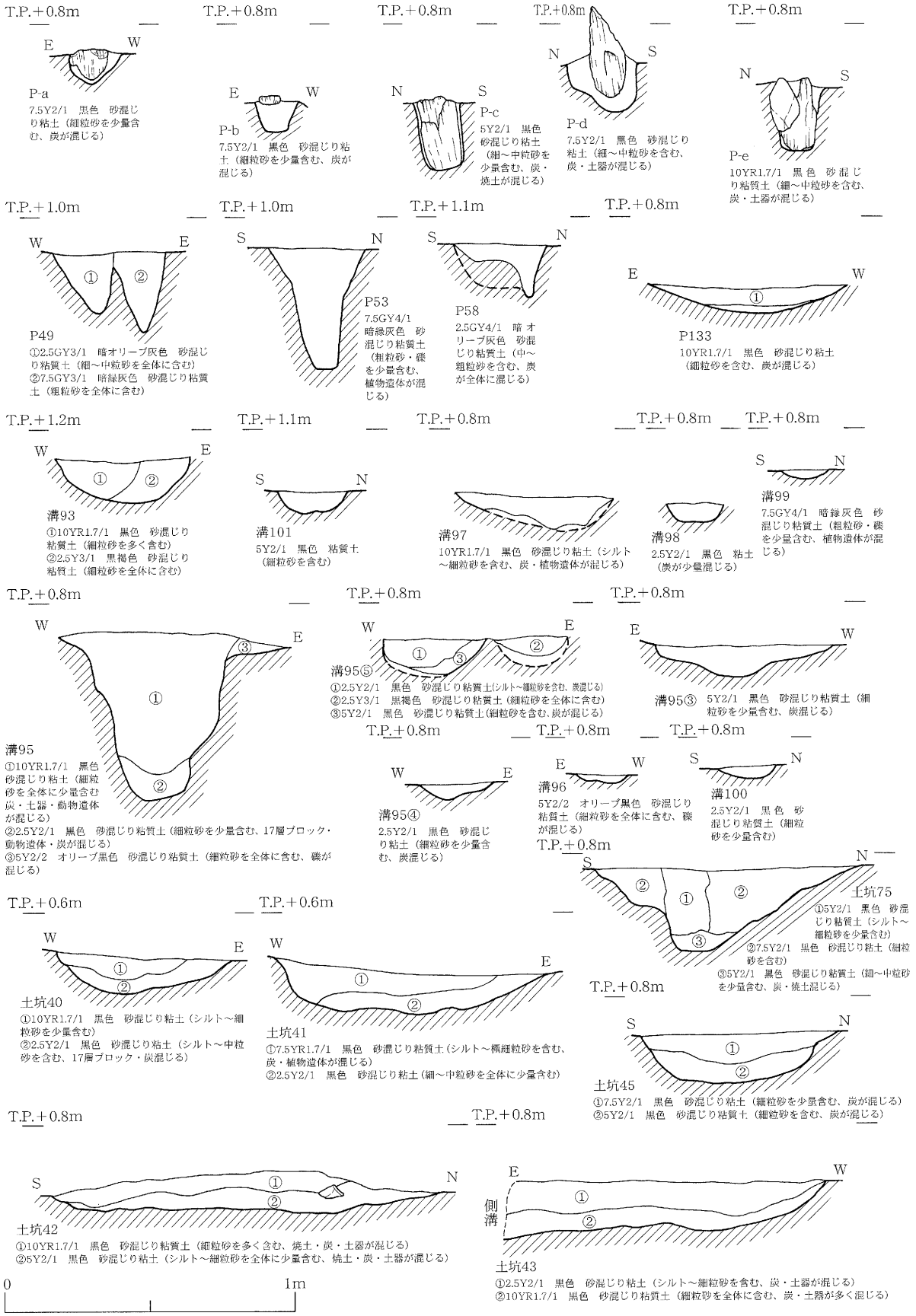
土坑41（14地区）は東西方向に長軸をもつ、楕円形の土坑である。長軸約1m、短軸約70cm、深さ約26cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を含む黒色（7.5YR1.7/1）砂混じり粘質土で、炭･植物遺体が混じる。遺構内からは弥生土器の脚部（283）、甕（282）が出土した。

土坑42（13～14地区）は調査区の西端に位置し、南北方向に長軸をもつ不定形な土坑である。西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。長軸約１m30cm、検出短軸約１m10cm、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に少量含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘土である。遺構内から出土した弥生土器はⅡ～Ⅲ様式のものが多く、甕（310）、壷（311）、細頸壷（312）、鉢（313）があった。動物遺体は哺乳類（資157）が出土した。

土坑43（15地区）は調査区の南端に位置し、南北方向に長軸をもつ不定形な土坑である。北端は大溝２に切られ、東・南端が調査区外に延びるため、全形は不明である。隣り合う土坑44の南端を切る。検出長軸約３m30cm、検出短軸約１m50cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘土で、炭が多く混じる。本遺構から出土した遺物はコンテナ３箱を数えた。Ⅱ・Ⅲ様式の土器が主であり、Ⅰ様式のものも少数ながら含まれていた。これらと共に土偶が出土した。弥生土器は壷（284～291）、甕（292～302）、壷蓋（303）、鉢（304）、高杯（305～307）、甕蓋（308･309）があった。土製品は土偶（824）、ミニチュア土器（832･835）、紡錘車（842）、円板状土製品（848）、石器は砥石（906）、動物遺体はシカ（資164）、イノシシ（資158～161）、シカもしくはイノシシ（資165・166）、大型哺乳類（資162・163）、哺乳類（資167）が出土した。

土坑44（15地区）は調査区の南端に位置し、南北方向に長軸をもつ不定形な土坑である。南・西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。南端の一部を隣り合う土坑43に切られている。検出長約１m70cm、検出短軸約90cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂を含む黒色（5Y2/1）砂混じり粘土で、炭・動物遺体が混じる。遺構内から出土した遺物はコンテナ１箱を数えた。Ⅰ様式の土器が数点見られたがⅡ～Ⅲ様式のものが主だって多く、遺構の時期はこれにあたると思われる。弥生土器は壷（314･315）、甕（316･317）、鉢（318）、高杯（319～321）があった。動物遺体はイノシシ（資168・169）、大型哺乳類（資170）が出土した。

土坑49（９地区）は調査区の東端に位置し、南北方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。北・東端が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長約３m30cm、検出短軸約２m、深さ約40cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルトを少量含む黒色（10YR1.7/1）粘土で、炭・植物遺体が混じる。遺構からはコンテナ１箱分の遺物が出土した。Ⅱ・Ⅲ様式の土器が主である。少数のⅠ様式の土器がみられるが、同位置に下層の遺構である大溝４が位置しており、巻き上げられている可能性



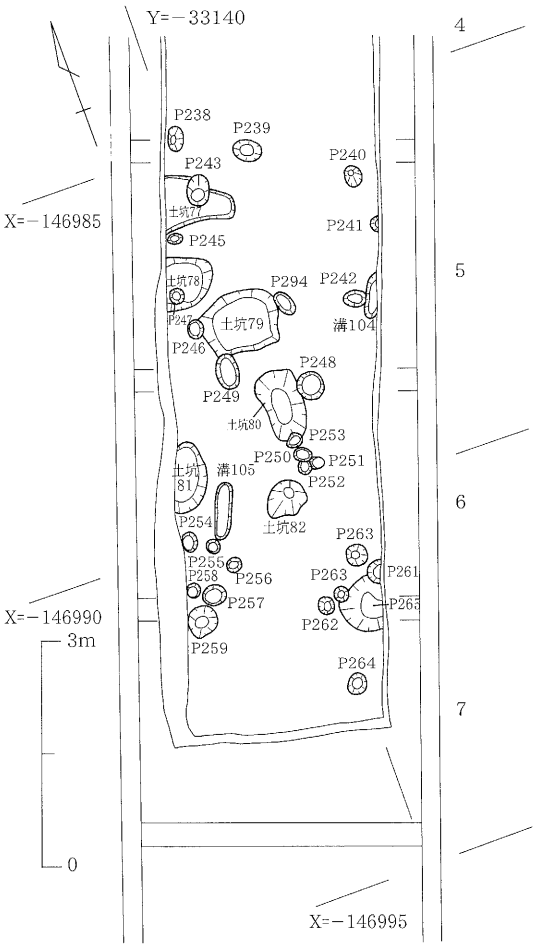
第22図　第58次第17層上面遺構断面実測図

がある。縄文土器は深鉢（22）があった。弥生土器は甕（328～334）、甕蓋（335）、壷（336・337）、細頸壷（338）、水差形土器（339）、鉢（340～343）があった。土製品は円板状土製品（958）、動物遺体は大型哺乳類（資175）が出土した。

土坑50（10地区）はほぼ円形の土坑である。直径約70cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルトをふくむ、黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘土である。

土坑70（８地区）は遺構の北肩の一部を検出した。大部分が調査区外に位置するため、全形や規模は不明である。東西方向に長軸を持つ。検出長約１m20cm、検出幅約30cm、深さ約10cmを測る。埋土は細粒砂を少量含む黒色（5Y2/1）砂混じり粘土で、炭が混じる。

土坑72（８地区）は南北方向に長軸を持つ、不定型な楕円形の土坑である。遺構の南端が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約１m10cm、短軸約90cm、深さ約20cmを測り、断面形はU字状を呈する。埋土は細粒砂を少量含むオリーブ黒色（5Y2/2）砂混じり粘土で、下方には炭が混じる。

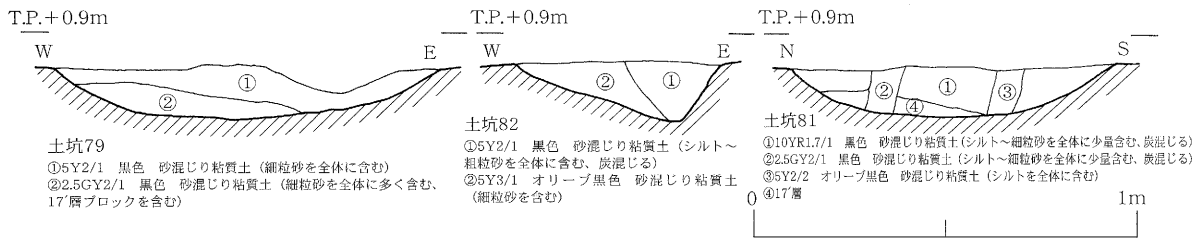


第23図　第58次第17′層上面遺構平面図

土坑73（８地区）は南北方向に長軸を持つ、不定形な楕円形の土坑である。遺構の西・南端が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約１m30cm、短軸約90cm、深さ約20cmを測る。埋土はシルト～細粒砂を少量含む黒色（2.5GY2/1）粘土である。土器・焼土・炭が混じる。遺構内から出土した弥生土器はⅢ～Ⅳ様式のものが多く、壷（348～350）、鉢（351～353）、高杯（354）、甕（355～358）、壷蓋（359）があった。

この他、遺物の出土したピットは以下の通りである。弥生土器はピット53（６地区）から壷（362）、ピット61（７地区）から壷（363）、ピット87（４地区）から壷（364）・細頸壷（365）、ピット120（13地区）から壷（361）、ピット135（15地区）から壷（366）、動物遺体はピット80からイノシシ（資190）、ピット118から不明（資177）、ピット119からイノシシ（資178）、ピット131から哺乳類（資179）、ピット143から大型哺乳類（資180）が出土した。いずれも埋土は細粒砂を全体に含む黒色（5Y2/1）粘土で炭が混じり、弥生土器はⅡ～Ⅲ様式のものが高い比率を占めた。

ピットa～e（９～10地区）は柱根の残るピットである。b、c、eは他の遺構に上部を削られてい



第24図　第58次第17′層上面遺構断面図

るため検出高がａ、ｄと異なるが元来同等であったと思われる。ピットの間隔は南北約２m50cm、東西約１mを測る２列の等間隔につくられており、ピットｅの西側に対応する遺構はないものの、掘立柱建物の柱穴である可能性がある。ピットｅの柱根には石が添えられていた。補強の意味があったと思われる。

土器溜り（12地区）は調査区の西端に位置し、南北方向に長軸をもつ不定形な土坑である。西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長約１m、短軸約90cm、深さ約44cmを測る。断面形はゆるいU字状を呈する。埋土は細粒砂を全体に含む黒色（2.5Y2/1）粘土で、炭が混じる。土器はⅠ様式のものがみられるが破片にはⅡ～Ⅲ様式のものが多く、溝95bを切る事や断面の検討から遺構自体は中期中頃に属すると思われる。弥生土器は壷（367）、甕（368）、鉢（369）があった。

第17′層上面遺構（第23・24図　図版19）

４～７地区にわたって17層を削平、整地して後に遺構がつくられる部分があった。第17′層として扱う。上面において溝・土坑、ピットを検出した。出土遺物はいずれも小片であり、Ⅲ～Ⅳ様式に属するものであった。遺構の時期も当該期であると思われる。

溝104（５地区）は、南北方向の溝である。調査区の東端に位置し、遺構の大半が調査区外に延びるため全形は不明である。検出長約60cm、幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を全体に含む黒色（2.5Y2/1）砂混じり粘質土である。

溝105（５～６地区）は南北方向の溝である。両端は丸く終わる。長さ約80cm、幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～粗粒砂を含む黒色（5Y2/1）砂混じり粘質土で、炭が混じる。

土坑77（５地区）は調査区の西端に位置し、東に舌状に延びる土坑である。西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約１m、短軸約70cm、深さ約５cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を全体に含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘土である。

土坑78（５地区）は調査区の西端に位置する土坑である。遺構の西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約70cm、検出短軸約60cm、深さ約７cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を全体に含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘土である。

土坑79（５地区）は東西方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。長軸約１m、短軸約80cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を全体に含む黒色(5Y2/1)砂混じり粘土である。

土坑80（６地区）は南北方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。長軸約１m、短軸約60cm、深さ約20cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を含む黒色（5Y2/1）砂混じり粘質土である。

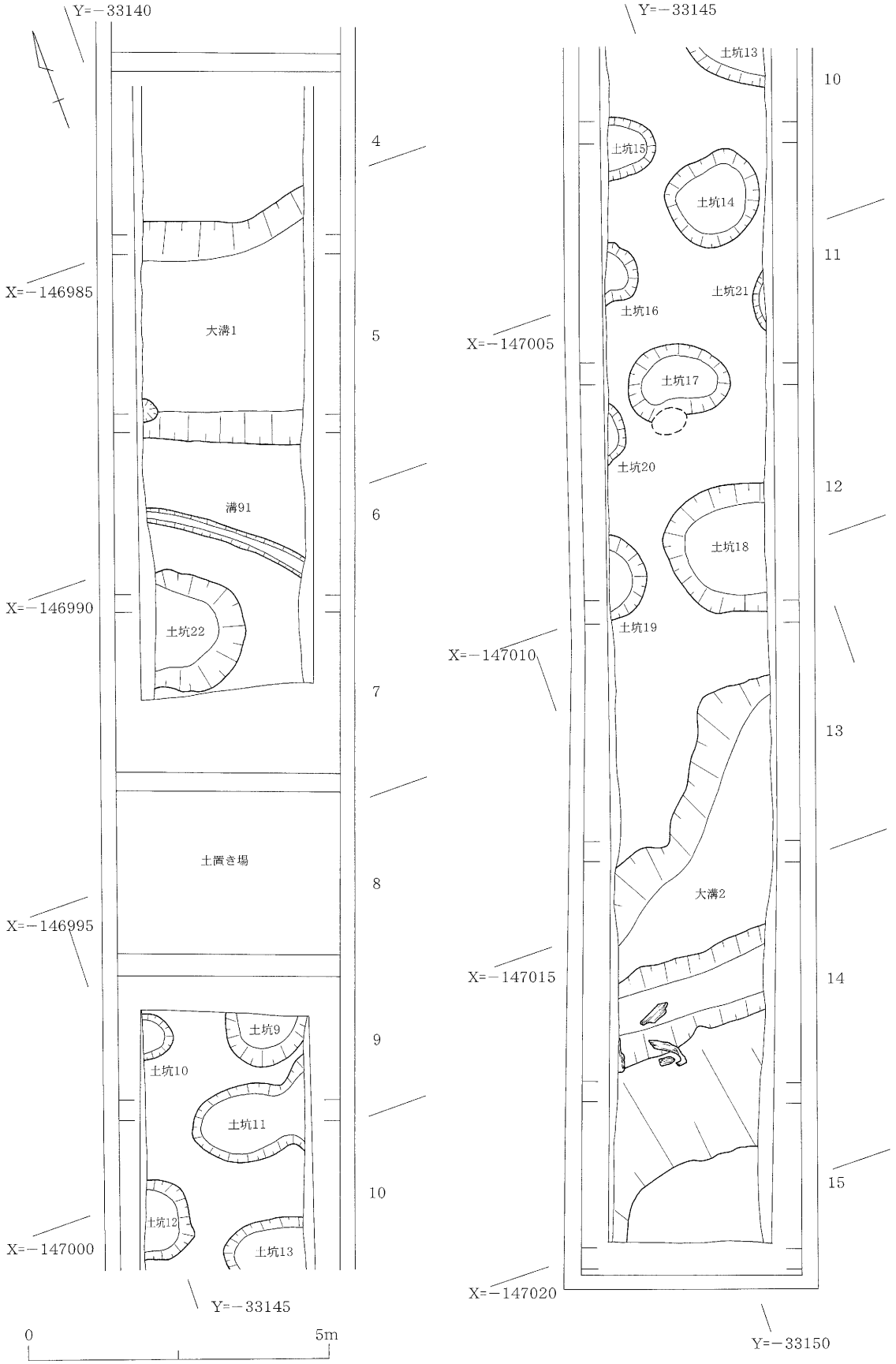
土坑81（６地区）は調査区の西端に位置し、南北方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。遺構の西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。長軸約１m、検出短軸約40cm、深さ約12cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土シルト～細粒砂を全体に少量含む黒色（10YR1.7/1）砂混じり粘質土で、炭が混じる。

土坑82（６地区）は東西方向に長軸をもつ、やや不定形楕円の土坑である。長軸約70cm、短軸約60cm、深さ約16cmを測り、断面形は緩いV字状を呈する。埋土はシルト～粗粒砂を含む黒色（5Y2/1）砂混じり粘質土で、炭が混じる。遺構内からは骨角牙製品の弭状角製品（961）が出土した。

＜弥生時代中期末～後期＞

第16層上面遺構（第25・26図　図版20～23）

第16層上面において溝（大溝を含む）・土坑・ピットを検出した。第16層は弥生時代の遺物・植物



第25図　第58次第16層上面遺構平面図

遺体を多量に含んだ黒色の砂混じり粘土層であり、主に鬼虎川遺跡南西部でみられる層である。大溝1・2に挟まれる形で土坑群を検出した。遺構には11～14層によって完全に埋まっており、人為的な埋土は希薄であった。長期にわたって窪地の状態であったと思われる。土坑はほぼ円形で、規模や間隔も似通っており、何らかの規則性が考えられる。上面においてドーナツ状の底部をもつV様式の甕が出土しており、これが最も新しい遺物であることから、遺構の時期は弥生時代後期以降と思われる。第16層内より出土した遺物はコンテナ20箱を数えた。Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器が最も多く出土した。縄文土器は深鉢の小片（12・21・25）、弥生土器は壷（394～463・592・593）、細頸壷（464・467）、水差形土器（468・469）、無頸壷（470～474）、壷蓋（475～478）、甕蓋（479～481）、高杯（482～516・595）、鉢（517～538・591）、甕（539～590・594）があった。土製品は土錘（825）、紡錘車（838・841・843）、紡錘車未成品（846）、円板状土製品（852・857・861～863・868・871・873・874）が出土した。石器は石包丁（881）、扁平片刃石斧（888・890）、大型蛤刃形石斧（893・894）、石鋸（898）、石錘（899）、砥石（904・907・910・913）、石鏃（916・918）、石錐（921～923）、打製石剣（927・931）、削器（940・943・947・949）、動物遺体はシカ（資84～86）、イノシシ（資75～80）、シカもしくはイノシシ（資87～96）、カメ？（資83）、スッポン（資97）、大型哺乳類（資81～83）、哺乳類（資99～104）、不明（資98）が出土した。

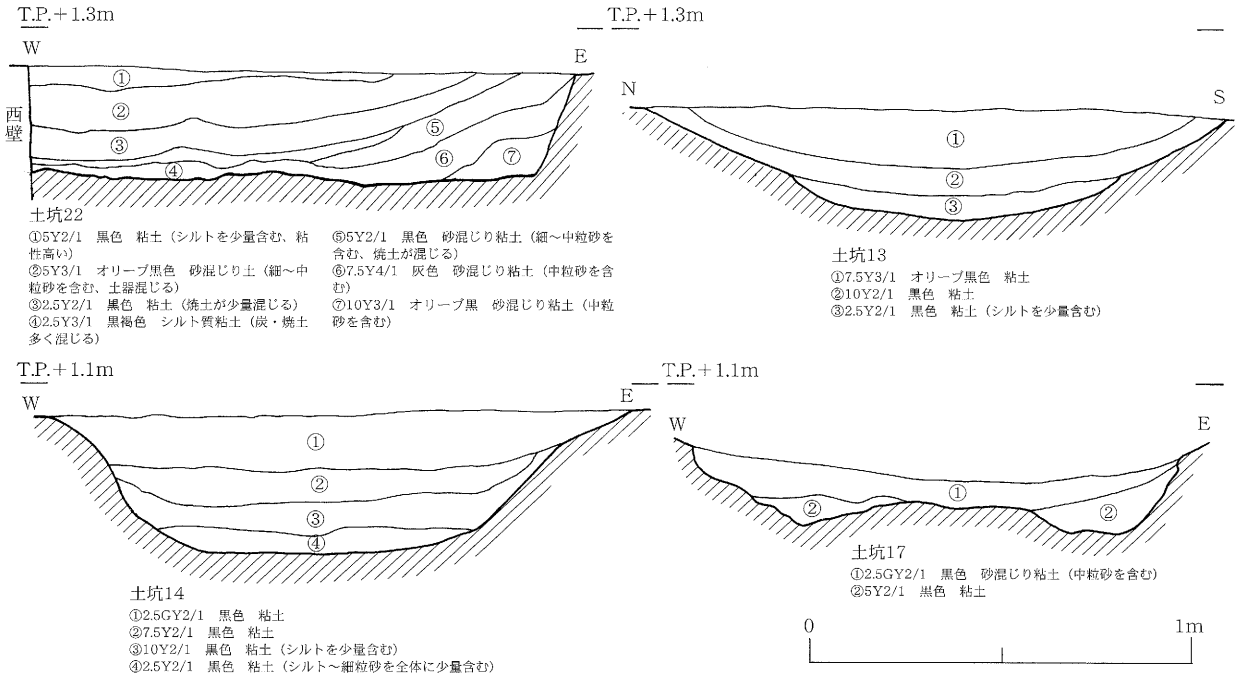
大溝1（4～5地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長約2m70cm、幅約4m50cm、深さ約60cmを測る。断面形はⅢ状を呈する。遺構内には第11・12・14層が入り込んでおり、埋土は黒色（7.5Y2/1）粘土を主体とする。炭が混じる。遺構内からはコンテナ2箱分の遺物が出土した。弥生土器はⅠ～Ⅳ様式まで幅広くみられ、壷（54～56）、甕（57）、甕蓋（58）、脚部（59）があった。動物遺体は大型哺乳類（資21）が出土した。

大溝2（13～15地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長約2m50cm、幅約5m30cm、深さ約1m20cmを測る。断面形はV字状を呈する。遺構内には第11・12・14層が入り込んでいた。埋土は上方にシルト～粗粒砂を多く含み、下方はシルトを含むオリーブ黒色(5Y2/2)砂混じり土である。遺構内からはコンテナ7箱分の遺物が出土し、Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器が最も高い割合を占める。縄文土器は深鉢(20)、弥生土器は壷（60～72）、無頸壷（73）、甕(74～100)、鉢(101～107)、高杯(108～113)、甕蓋(114)、壷蓋(115)があった。土製品は紡錘車(839・840)、紡錘車未成品(845・853・878)、石器は石庖丁(884・887)、柱状片刃石斧(889)、砥石(909)、打製石剣(924)、削器(935・942)、木製品は有頭棒(950)、有孔板(954)、骨角牙製品は加工痕の残る鹿角(958)が出土した。動物遺体はシカ(資32・33)、イノシシ(資22～28)、ヒト(資35～48)、スッポン(資34)、大型哺乳類(資29～31)、哺乳類(資49～54)が出土し、ヒトは散乱状態で他の遺物などと混在しており、遺構を埋める際に混入したと思われる。

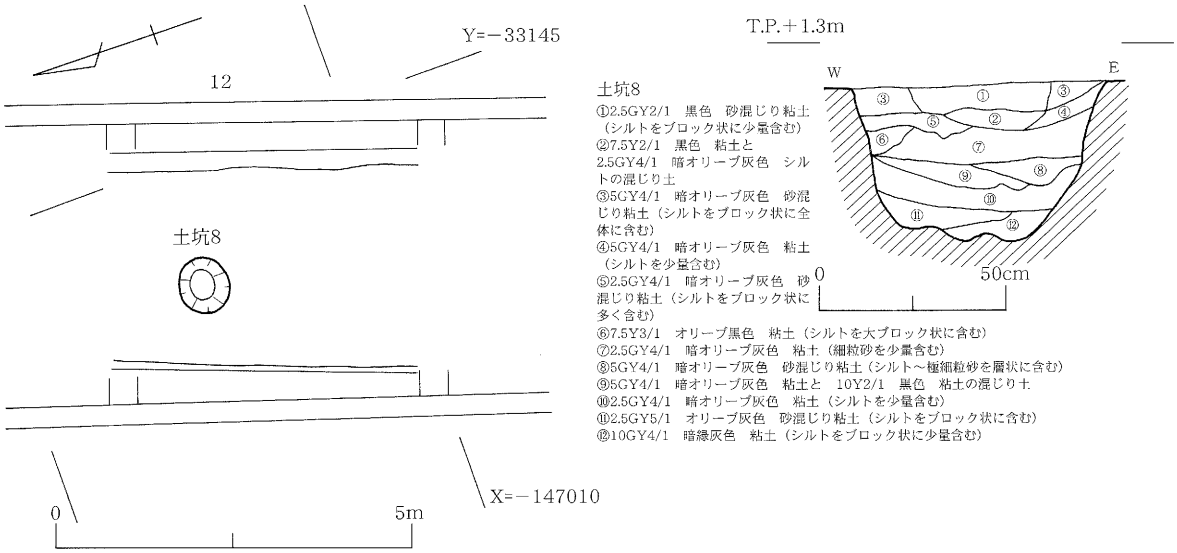
溝91（6地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びるため全形は不明である。検出長約2m80cm、幅約30cm、深さ約10cmを測る。断面形は浅いU字状を呈する。埋土は黒色（7.5Y2/1）粘土である。

土坑9（9地区）は調査区の東端に位置する土坑である。北半、東半が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約1m45cm、検出短軸約90cm、深さ約30cmを測る。断面形は浅いⅢ状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を含む黒色（5Y2/1）粘土で、焼土・炭を多く含む。上層には第14層が入り込む。土製品は紡錘車未成品（867）、石器は打製石剣（926）、削器（941）が出土した。

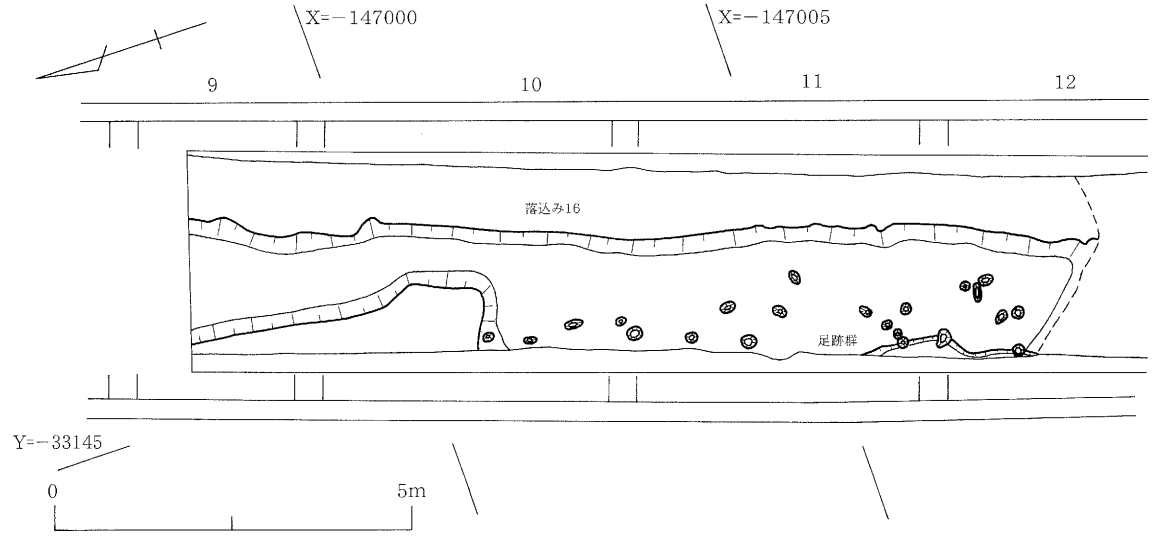
土坑10（9地区）は調査区の西端に位置し、西半が調査区外に位置する円形の土坑である。長軸約80cm、短検出軸約50cm、深さ約24cmを測り、断面形はⅢ状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む黒



第26図　第58次第16層上面遺構断面図



第27図　第58次第13層上面土坑８平面・断面図



第28図　第58次第12層上面落ち込み16、足跡群平面図

色（5Y2/1）粘土で、焼土・炭を含む。上層には第14層が入り込む。弥生土器の甕（236）が出土した。

土坑11（９～10地区）は調査区の東端に位置する不定形な土坑である。東端は調査区外に延びる。検出長軸約１m、短軸約１m30cm、深さ約35cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は中粒砂を含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘土で、炭・焼土を含む。上層には第14層が入り込む。弥生土器は壷（237～239）、高杯（240・241）、鉢（242）、動物遺体は哺乳類（資141・142）が出土した。

土坑12（10地区）は調査区の西端に位置し、西半が調査区外に位置する土坑である。検出長軸約１m30cm、検出短軸約80cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を含む黒色（2.5GY2/1）粘土で、焼土・炭を多く含む。遺構内からは弥生土器の壷（247）、甕（248）、鉢（249）が出土した。

土坑13（10地区）は調査区の東端に位置し、東西方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。東端が調査区外に延びる。検出長軸約１m50cm、短軸約１m40cm、深さ約26cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む黒色(2.5Y2/1)粘土で、焼土・炭層を含む。上層には第14層が入り込む。

土坑14（11地区）はほぼ円形の土坑である。直径約１m50cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に少量含む黒色（10YR1.7/1）砂混じり粘土である。炭・焼土を含む。上層には第14層が入り込む。

土坑17（12地区）は南北方向に長軸をもつ、楕円形の土坑である。長軸約１m70cm、短軸約１m50cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は中粒砂を含む黒色（2.5GY2/1）砂混じり粘土である。炭・焼土を含む。上層には第14層が入り込む。出土した弥生土器は壷（250）、甕（251）があった。石器は砥石（901）が出土した。

土坑19（12地区）は調査区の西端に位置し、西半が調査区外に位置する円形の土坑である。長軸約１m50cm、検出短軸約60cm、深さ約13cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂・粗粒砂を少量含む黒色（7.5Y2/1）粘土である。焼土･炭層を含む。上層には第14層が入り込む。遺構内からは弥生土器の甕（243）、高杯（244）、壷（245）が出土した。

土坑21（11地区）は調査区の東端に位置する土坑である。大部分が調査区外に延びるため全体形不明である。検出長軸約１m10cm、検出短軸約20cm、深さ約15cmを測る。断面形は不明である。埋土はシルトを少量含むオリーブ黒色（5Y3/1）砂混じり土である。炭・焼土を含む。上層には第14層が入り込む。遺構内からは弥生土器の甕（262）が出土した。

土坑22（７地区）は調査区の西端に位置し、南北方向に長軸をもつ土坑である。遺構の西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。長軸約２m、検出短軸約１m70cm、深さ約30cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルトを少量含むオリーブ黒色(5Y3/1)砂混じり土で、炭・焼土を含む。上層には第14層が入り込む。遺物は弥生土器の壷（252～255）、鉢（256・257）、甕（258～261）、土製品は紡錘車未成品（844）、円板状土製品（866）、動物遺体はシカ（資144）が出土した。

第14・15層

第14・15層は遺物包含層である。上面において、遺構は検出されなかった。第15層内からはコンテナ1/2箱分の遺物が出土した。弥生土器は壷（393）、動物遺体はイノシシ（資70～72）、大型哺乳類（資73）、哺乳類（資74）があった。第14層内からはコンテナ1箱分の遺物が出土した。弥生土器は高杯（370～374）・細頸壷（375）・壷（376・380～390）・甕（377～379・391・392）、石器は砥石（903）、動物遺体はシカもしくはイノシシ（資67～69）が出土した。

〔古墳時代の遺構〕

第13層上面遺構（第27図　図版24）

第13層上面において土坑を検出した。層内からは土師器の壷（815）が出土した。

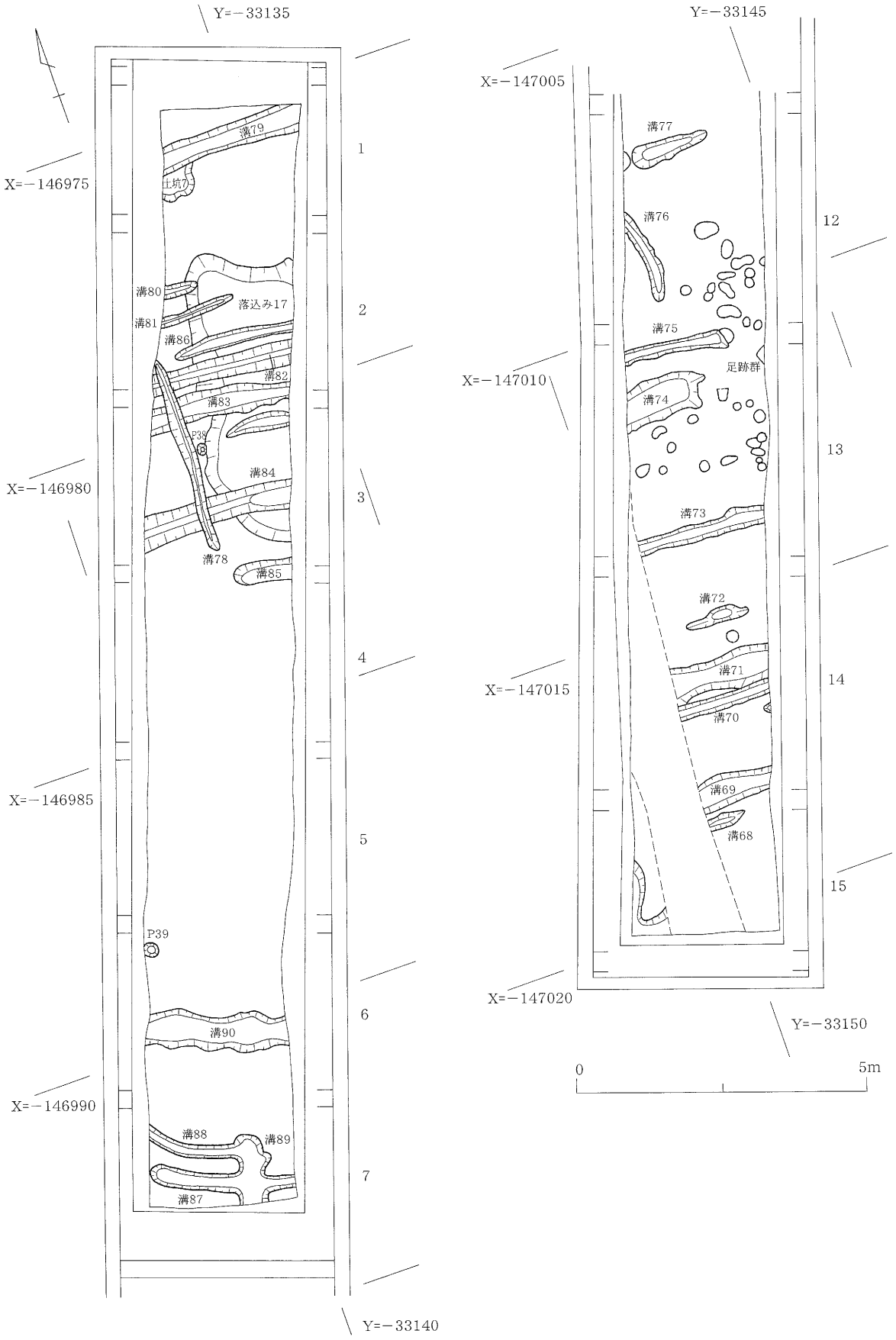
土坑８（12地区）はほぼ円形の土坑である。直径約70cm、深さ約40cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土とシルト～細粒砂が互層をなす。遺構内からはⅢ様式の弥生土器の細片と伴に土師器の細片が出土した。

〔奈良・平安時代の遺構〕

第12層上面遺構（第28図　図版24）

第12層上面において落ち込み・足跡群を9～12地区にわたって検出した。層内からは須恵器の壷（814）が出土した。

落ち込み16（９～12地区）は不定形な遺構である。南北方向に長軸をもつ。北・西端は調査区外に伸び、南端は整地によって切られているため全形は不明である。検出長軸は12m、検出短軸は１m80cm、深さ約６cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。上層の第11層によって埋まる。底面からは複数の足跡を検出したが、明確な方向性は見い出せなかった。須恵器の杯（780）が出土した。



第29図　第58次第11層上面遺構平面図

第11層上面遺構（第29図　図版25）

第11層上面において、溝・落ち込み・土坑・ピット・足跡群を検出した。遺構は最低３時期の切り合いが認められる。溝のほとんどが東西方向であり、南北方向のものも２条みられた。東西方向の溝群の中にも幅広のものと狭いものにも時期差があると思われる。層内からは土師器片とともに須恵器の杯（813）が出土した。

以下これより上層においては南北方向、または東西方向の同規模の溝群がほぼ等間隔に並ぶ状況が、何層にもわたって繰り返しみられた。畦などの明確な耕作に関わる遺構は検出されていないが、耕作もしくは開発が近世・近代にいたるまで連綿と続いていた事が考えられる。

溝69（15地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端を上層の落ち込み12に切られている。検出長約１m20cm、幅約60cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は中粒砂～粗粒砂と暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土の混じり土である。

溝70（14地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端を上層の落ち込み12に切られている。検出長約１m60cm、幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面形は浅いU字状を呈する。埋土はシルト～中粒砂を全体に多く含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘質土である。

溝71（14地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端を上層の落ち込み12に切られている。南肩の一部を溝70に切られている。検出長約１m70cm、幅約50cm、深さ約15cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗オリーブ灰色（5GY4/1）中粒砂～粗粒砂である。

溝73（13地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端を上層の落ち込み12に切られている。検出長約２m20cm、幅約30cm、深さ約10cmを測る。断面形は浅いU字状を呈する。埋土は暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）中粒砂～粗粒砂である。

溝74（13地区）は東西方向の溝である。西端は調査区外に延び、東端は丸く終わる。検出長約１m30cm、幅約70cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は中粒砂～粗粒砂を含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり土である。

溝76（12地区）は調査区の西端に位置する南北方向の溝である。北端は調査区外に延び、南端は丸く終わる。検出長約１m70cm、幅約20cm、深さ約20cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は中粒砂～粗粒砂を含む暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂混じり粘質土である。

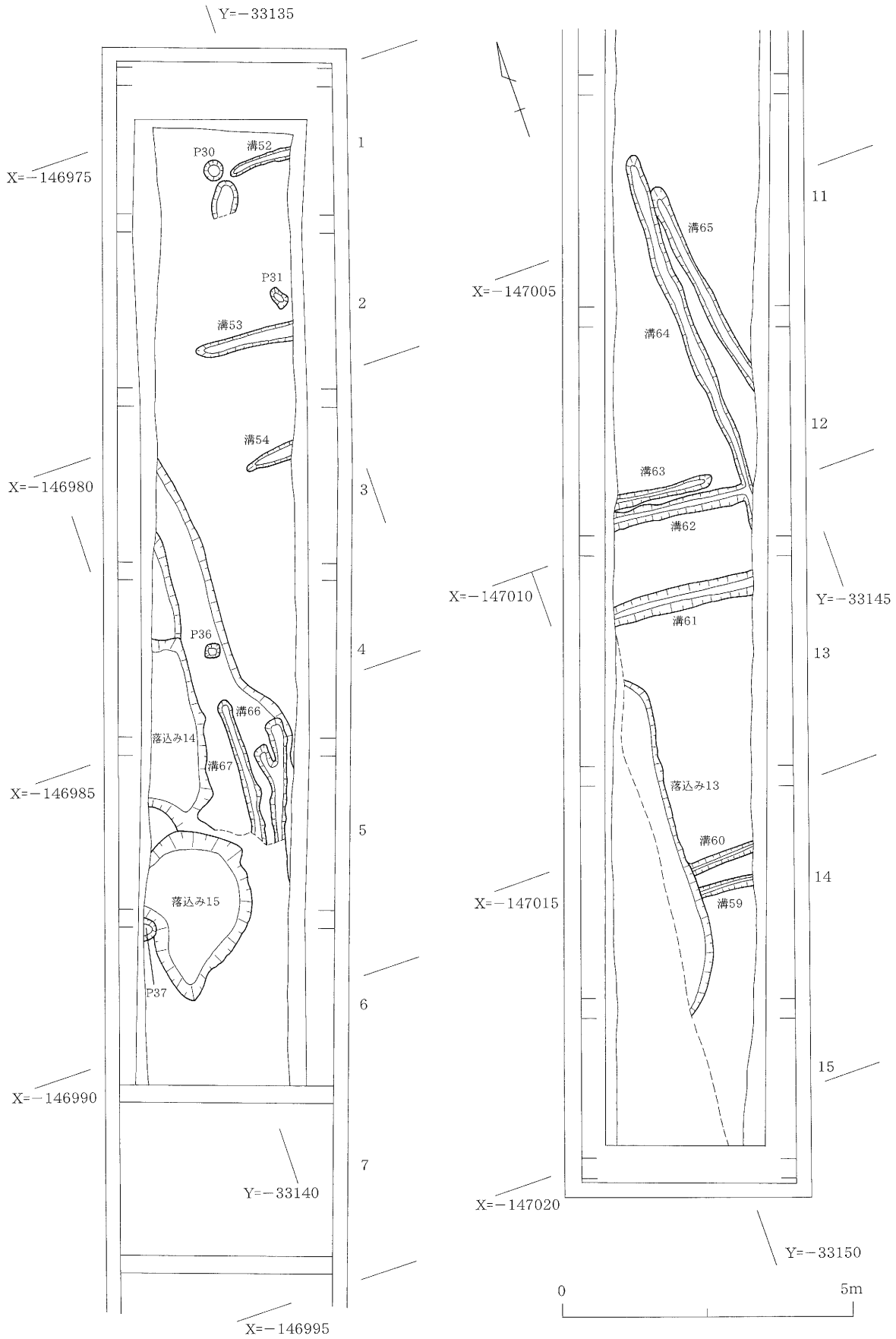
溝78（３地区）は調査区の西端に位置する南北方向の溝である。北端は調査区外に延び、南端は丸く終わる。検出長約３m50cm、幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を含む灰オリーブ色（7.5Y5/2）砂混じり粘質土である。

溝79（１地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。検出長約２m50cm、幅約50cm、深さ約25cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む暗緑灰色（10GY3/1）砂混じり粘質土である。

溝80（２地区）は調査区の西端に位置する東西方向の溝である。西端は調査区外に延び、東端は丸く終わる。検出長約60cm、幅約20cm、深さ約20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は鉄分・細粒砂を多く含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘質土である。

溝82（２地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。検出長約２m50cm、幅約50cm、深さ約15cmを測り、断面形はU字状を呈する。埋土はシルトを少量含むオリーブ灰色（2.5GY6/1）粘土である。

溝85（３地区）は調査区の東端に位置する東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は丸く終わる。検出長約１m、幅約40cm、深さ約20cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を



第30図　第58次第10層上面遺構平面図

多く含む灰色（10Y4/1）砂混じり粘質土である。

溝87（７地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。並行に走る溝88とは南北方向に走る溝89によってH状に合流する。検出長約２m50cm、幅約30cm、深さ約８cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト質粘土である。

落ち込み17（２～３地区）は調査区の東端に位置する。形状は不定形で南北方向に長軸をもつ。溝80～84が上を走る。長軸約５m、検出短軸約１m80cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む灰色（10Y4/1）砂混じり粘土である。

土坑７（１地区）は調査区の西端に位置する土坑である。遺構の西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長軸約50cm、検出短軸約50cm、深さ約３cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含むオリーブ灰色（2.5GY5/1）砂混じり粘土である。

ピット38（３地区）はほぼ円形を呈する。直径約20cm、深さ約３cmを測る。埋土は細粒砂を全体に含むオリーブ灰色（2.5GY6/1）砂混じり土である。

第10層上面遺構（第30図）

第10層上面において、溝・落ち込み・ピットを検出した。１～７地区にかけて整地・客土が繰り返し行なわれており、同一遺構面として検出したが、複数の時期差があることが考えられる。層内からは須恵器の蓋杯（806）、杯（807～812）が出土した。

溝52（１地区）は調査区の東端に位置する東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は丸く終わる。検出長約１m10cm、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を多く含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘質土である。

溝53（２地区）は調査区の東端に位置する東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は丸く終わる。検出長約１m70cm、幅約30cm、深さ約８cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を多く含む灰色（7.5Y4/1）砂混じり土である。

溝59（14地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は隣に並行して走る溝60とともに落ち込み13に切られている。検出長約１m50cm、幅約20cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を多く含む灰色（10Y4/1）砂混じり粘土である。

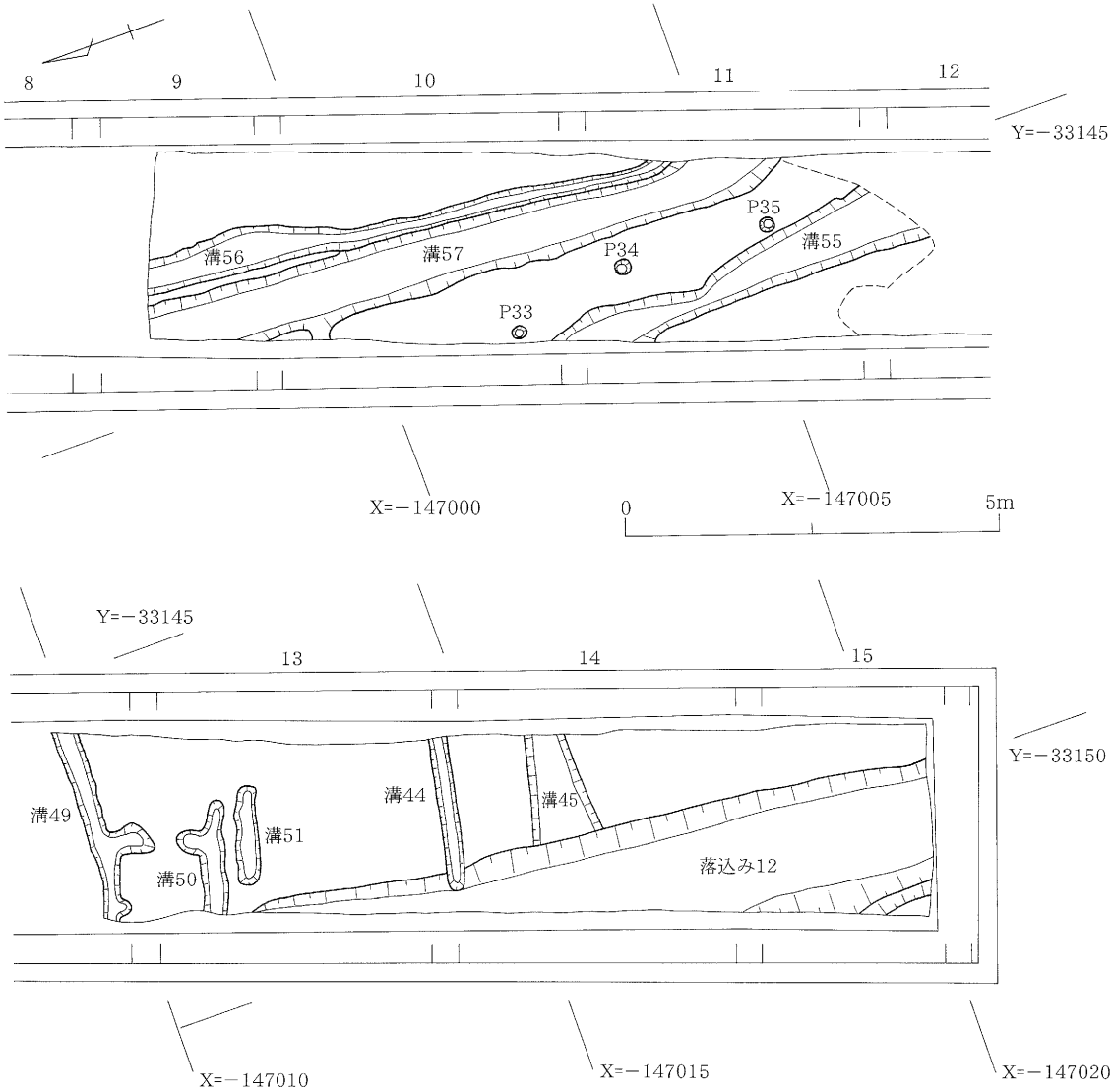
溝62（12地区）は東西方向の溝である。東端は溝64によって切られ、西端は調査区外に延びる。検出長約２m30cm、幅約20cm、深さ約３cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を多く含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘質土である。

溝64（11～12地区）は南北方向の溝である。南端は調査区外に延び、北端は丸く終わる。溝62の東端を切る。検出長約６m80cm、幅約30cm、深さ約７cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に少量含む暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土である。

溝66（４～５地区）は南北方向の溝である。南端は整地により切られ、北端は二股に別れて丸く終わる。検出長約２m10cm、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は極細粒砂を多く含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じりシルト質土である。

溝67（４～５地区）は溝66と並行に走る南北方向の溝である。南端は整地により切られ、北端は丸く終わる。検出長約２m50cm、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルトを多く含む灰色（10Y4/1）砂混じり土である。

落ち込み13（13～15地区）は落ち込み12に大部分を切られているため、全形は不明である。南北方向に長軸をもつ。検出長約６m、検出幅約50cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を多く含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘土である。



第31図　第58次第９層上面遺構平面図

落ち込み14（４～５地区）は調査地の西端に位置し、南北に長軸をもつ不定形な落ち込みである。整地により南端を切られている。検出長約３m40cm、検出幅約１m、深さ約３cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を全体に少量含む灰色（7.5Y4/1）粘質土である。

落ち込み15（６～５地区）は調査区の西端に接し、南北に長軸をもつ楕円形の土坑である。ピット37に西端の一部を切られている。長軸約３m、短軸約１m80cm、深さ約７cmを測る。断面形は不定形な皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘土である。

この他ピット30・31・36・37（１・２・４地区）を検出した。概ね直径約30cm、深さは約20cmを測る。規則性は見られず、遺物は出土しなかった。

〔平安末～鎌倉時代〕

第９層上面遺構（第31図　図版26）

第９層上面において、溝・落ち込み・ピットを検出した。遺構は９～15地区にわたって検出した。遺構は最低５時期の切り合いがあり、９～11地区、12～15地区においてはベースとなる土が異なっ

ていた。整地・客土の結果と思われる。層内からは須恵器の器台（800)、杯（801・802)、土師器の皿（803)、瓦器の皿（804)、動物遺体の大型哺乳類（資料８）が出土した。

溝44（14地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は丸く終わる。落ち込み12を切る。検出長約２m20cm、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルト～極細粒砂を全体に多く含む灰色（10Y4/1）粘質土である。

溝45（14地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は落ち込み12に切られている。検出長約１m50cm、幅約90cm、深さ約７cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に多く含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘質土である。礫を含む。

溝49（12地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。南肩の一部が溝50に向かって膨らむ部分があり、同一のH状の溝であったと思われる。検出長約２m60cm、幅約30cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は中粒砂を全体に多く含むオリーブ黒色（10Y3/2）砂混じり粘質土である。

溝50（13地区）は東西方向の溝である。西端は調査区外に延び、東端は丸く終わる。北肩の一部が溝49に向かって膨らむ。検出長約１m50cm、幅約30cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は極細粒砂～細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じり土である。

溝55（11地区）は南北方向の溝である。南端は整地により切られ、北端は調査区外に延びる。検出長約４m30cm、幅約90cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を全体に含む暗緑灰色（7.5GY4/1）砂混じり粘質土である。

溝56（９～11地区）は南北方向の溝である。両端は調査区外に延びる。並行に走る溝57の東肩を一部切る。北半は幅広で、南半は狭い。検出長約７m30cm、広い部分で幅約50cm、狭い部分で約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は中粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘質土である。

溝57（９～11地区）は南北方向の溝である。両端は調査区外に延びる。並行に走る溝57に東肩の一部を切られ、西肩の一部が調査区西端に向かって枝分かれする。検出長約８m50cm、幅約90cm、深さ約12cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘質土である。

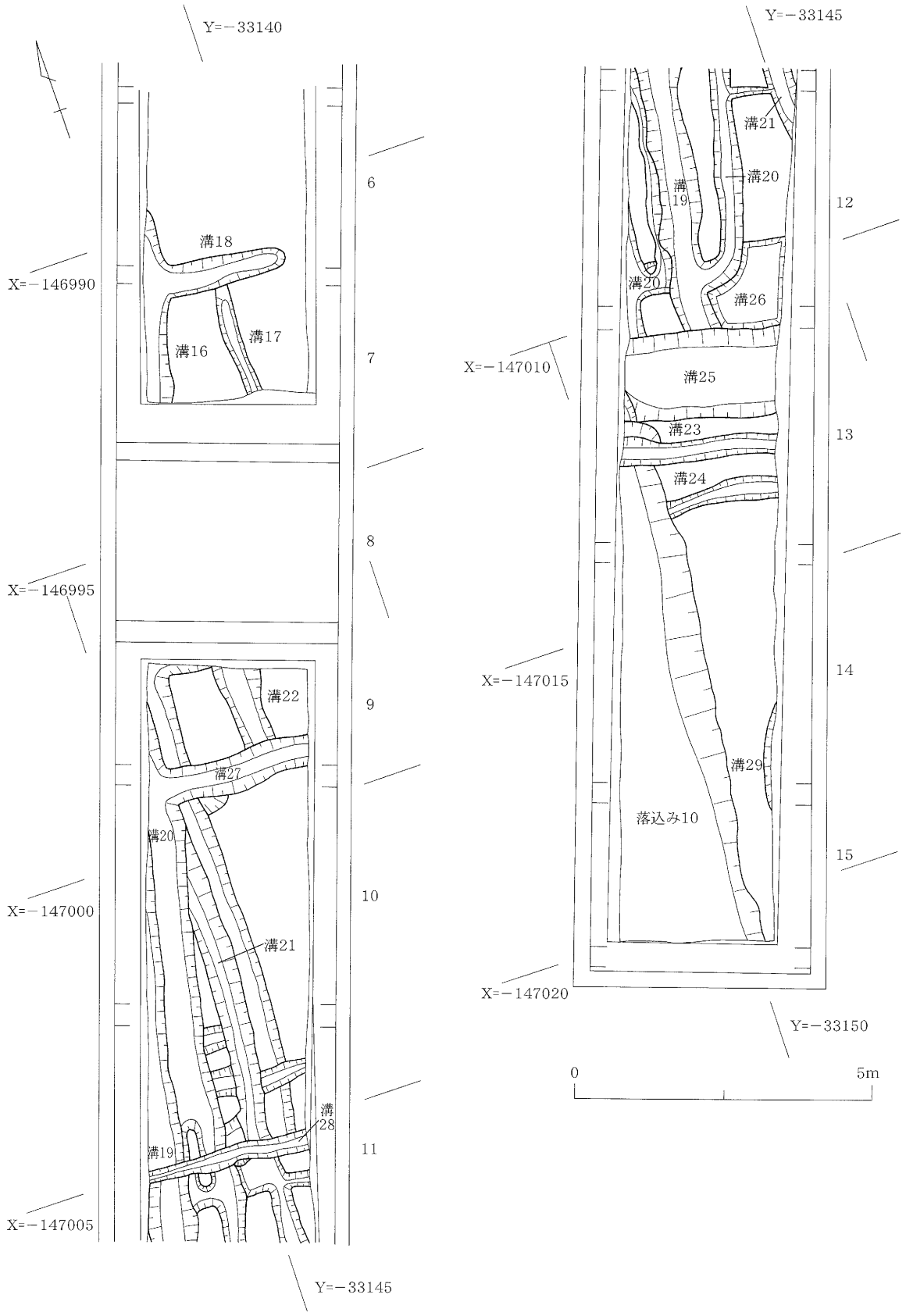
落ち込み12（13～15地区）は落ち込みとして検出したが、南北方向の溝である。両端は調査区外に延びる。東肩において溝44に切られ、溝45を切る。検出長約９m、幅約２m、深さ約35cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体にレンズ状に含む暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂混じり粘土である。堆積土の主体が粘土で、水溜めを目的とした遺構の可能性が考えられる。

この他ピット33～35(10～11地区)を検出した。これらはほぼ同じ大きさを呈し、溝群とほぼ同じ方向に主軸を持つ。遺物が出土したのはピット34のみであった。

ピット34（11地区）は直径20cmを測る円形のピットである。深さ10cm、断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘質土である。遺構内からはサヌカイト製の削器（937）が出土した。混入品である。

第８層上面遺構（第32図　図版27）

第８層上面において、溝・落ち込みを検出した。これらは時期差をもって複雑に切りあっており、最低５時期の切り合いを確認した。溝群はほぼ同位置に繰り返しつくられていた。層内から出土した遺物は須恵器の杯（792・794)、底部（793)、擂鉢（795）があった。この他白磁の椀（796)、瓦器の椀（797)、土師器の皿（798)、竈（799）が出土した。



第32図　第58次第８層上面遺構平面図

溝16（6～7地区）は調査区の西端に位置する南北方向の溝である。南端・西肩は調査区外に延びる。直交する溝18と西端で合流する。検出長約3m50cm、検出幅約40cm、深さ約5cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じり土である。

溝17（6～7地区）は南北方向の溝である。南端は調査区外に延び、北端は直交する溝18に切られている。検出長約1m80cm、幅約30cm、深さ約3cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じり土である。

溝18（6地区）は東西方向の溝である。西端は直交する溝16に合流し、東端は丸く終わる。検出長約2m50cm、検出幅約50cm、深さ約6cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は粘土をブロック状に含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト質土である。

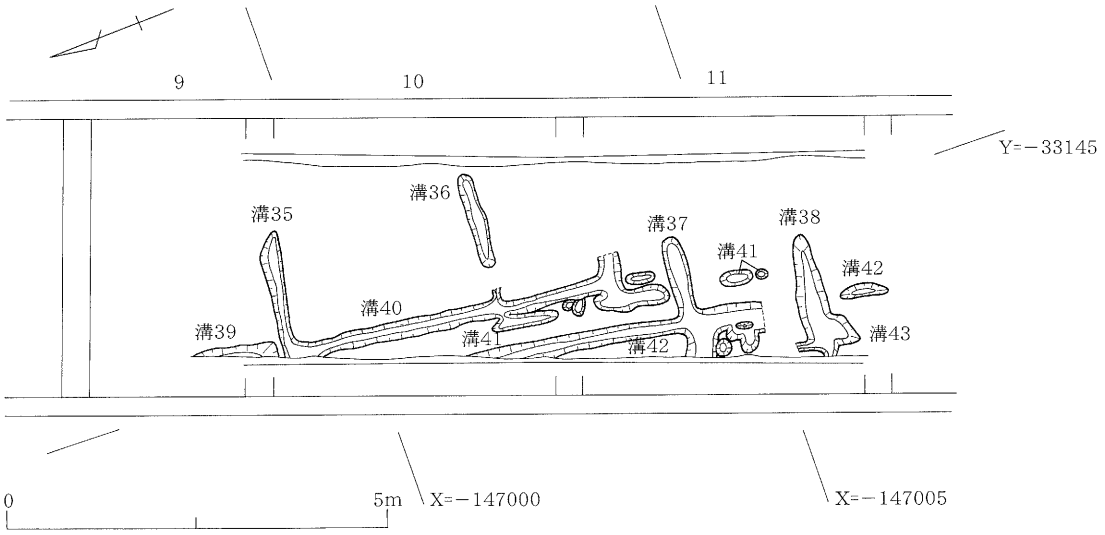
溝19（10～12地区）は南北方向の溝である。南肩は溝25に切られ、北肩は調査区外に延びる。東西方向の溝25・28に切られ、南北方向の溝20を切る。検出長約11m30cm、検出幅約70cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は極細粒砂～粗粒砂を全体に含むオリーブ黒色(10Y3/2)砂混じり土である。

溝20（9～12地区）は南北方向に主軸をもつ溝である。12地区において3本に分かれる。南端を溝25に切られ、並行する3本の北端はともに調査区外に延びる。北端付近で直交する溝27と合流する。並行して走る溝19に切られ、同じく並行する溝21を切る。検出長約11m30cm、検出幅約50cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は極細粒砂～粗粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり土である。

溝21（9～12地区）は枝分かれし、南北に主軸をもつ溝である。東端は調査区に延び、西端は並行して走る溝20に切られている。直交する溝27・28が上を走る。検出長約8m50cm、幅約50cm、深さ約15cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は粗粒砂を少量含む灰色（10Y4/1）砂混じりシルトである。

溝23（13地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。落ち込み10を切る。検出長約2m80cm、幅約30cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～中粒砂を少量含むオリーブ黒色（10Y3/2）砂混じり土である。

溝24（13地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延びる。西端は落ち込み10に切られる。検出長約1m90cm、幅約40cm、深さ約10cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～中粒



第33図　第58次第8′層上面遺構平面図

砂を少量含むオリーブ黒色（10Y3/2）砂混じり土である。

溝25（13地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。落ち込み10に切られる。検出長約２m60cm、幅約１m50cm、深さ約15cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～中粒砂を少量含むオリーブ黒色（10Y3/2）砂混じり土である。

溝26（13地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は溝20に切られている。南肩を溝25に切られている。検出長約２m30cm、検出幅約１m50cm、深さ約15cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～粗粒砂を少量含む暗緑灰色（7.5GY4/1）砂混じり土である。

溝28（11地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。検出長約２m70cm、幅約30cm、深さ約７cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は極細粒砂を全体に多く含む灰色（7.5Y5/1）砂混じりシルトである。

落ち込み10（13～15地区）は第９層のものと同じく、落ち込みとして検出したが、南北方向の溝である。西・南端は調査区外に延びる。東肩において溝24を切る。検出長約９m80cm、幅約２m50cm、深さ約35cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂をレンズ状に含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘土である。土層観察から、下層遺構である落ち込み12と本層の落ち込み10は、時間差をもって同じ場所につくられた遺構であると判断した。埋土の状況から同じ意図をもってつくられた事が考えられる。

第８′層上面遺構（第33図　図版28）

第８層を掘削した直下で遺構を検出した。第８′層とする。上面において溝・ピットを検出した。遺構はごく浅い。上層からの削平の結果と思われる。遺構は９～11地区にわたって検出した。

溝35（10地区）は東西方向の溝である。西端は調査区外に延び、東端は丸く終わる。直交する溝40に合流する。検出長約１m70cm、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルト～細粒砂を全体に含む灰色（7.5Y4/1）砂混じり土である。

溝36（10地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は上層からの遺構により切られている。位置や埋土の状況から溝40に直交して合流すると思われる。検出長約１m20cm、幅約20cm、深さ約２cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はシルトをブロック状に含み、極細粒砂～細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じり土である。

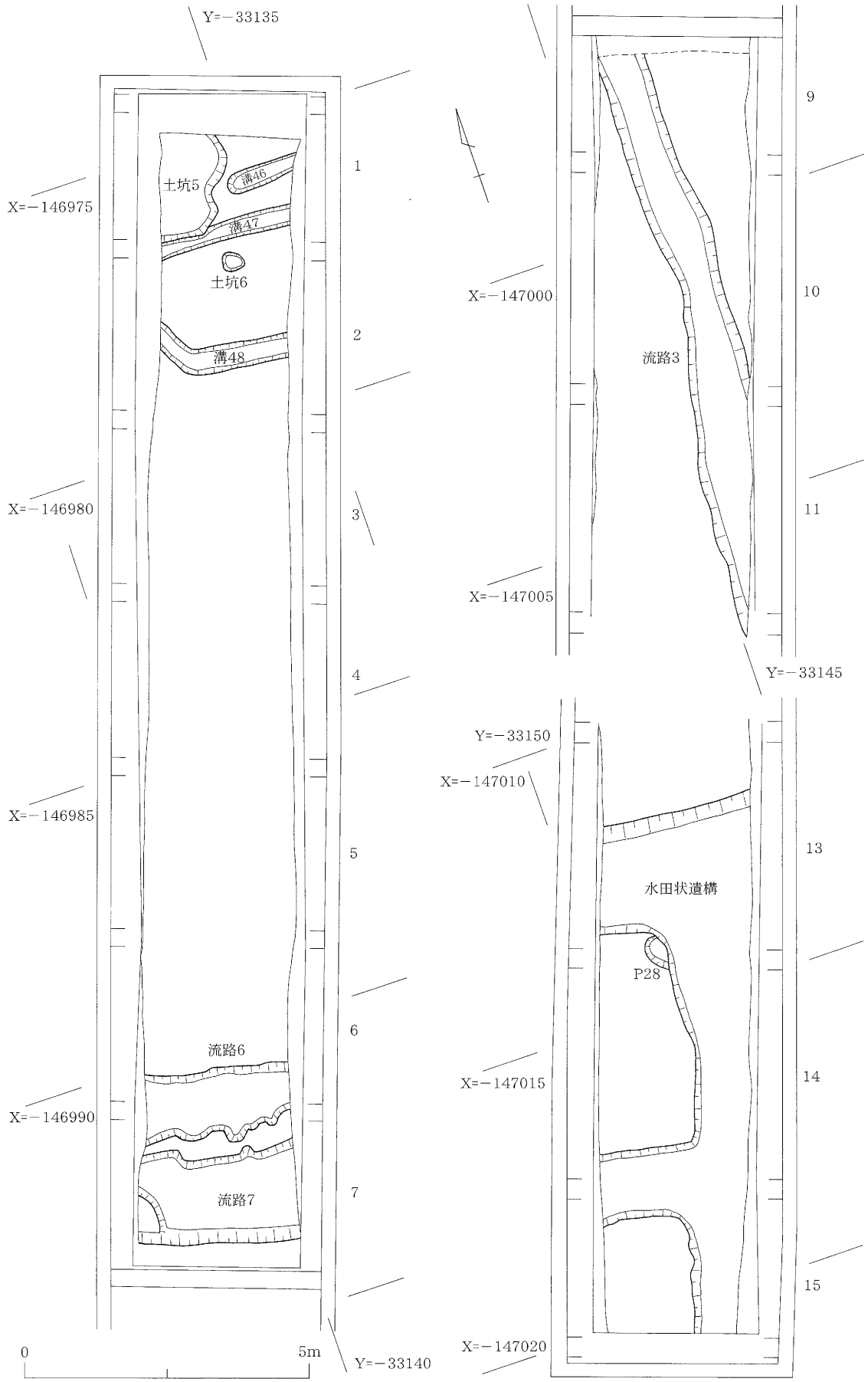
溝40（10～11地区）は南北方向の溝である。北端は溝35に合流し、南端は丸く終わる。枝分かれする部分は上層からの遺構によって切られている。溝36は直交して合流すると思われる。検出長約５m10cm、幅約20cm、深さ約３cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は極細粒砂～細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じり土である。

溝41（10～11地区）は南北方向に主軸をもち、断続的に続く溝である。並行して隣り合う溝40とは埋土が異なり、時期差があると思われる。検出長約３m70cm、幅約20cm、深さ約３cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じり土である。

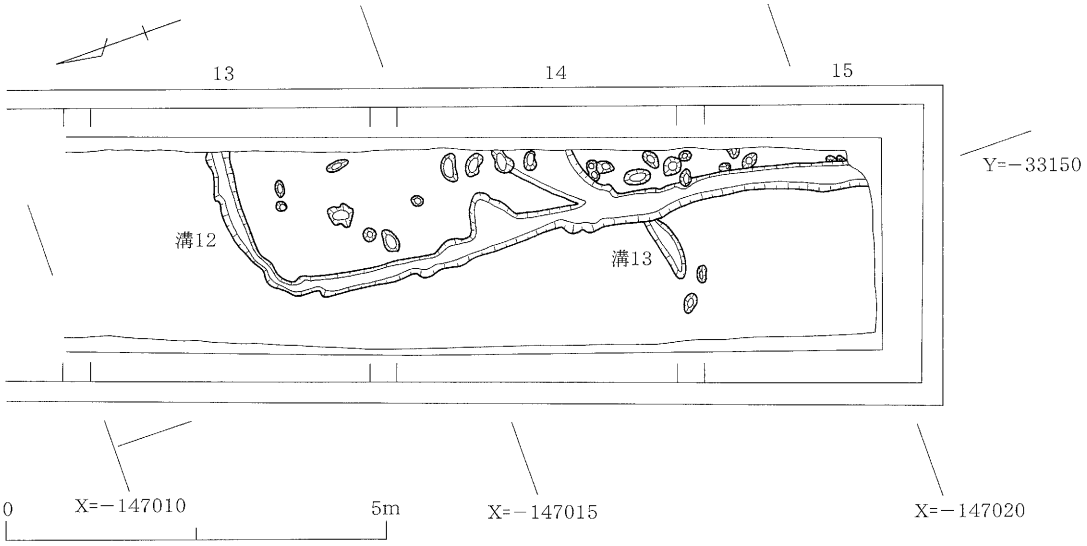
溝42（10～12地区）は南北方向の溝である。溝40と並行する。北肩は調査区外に延び、南肩は上層からの遺構によって切られている。検出長約４m、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルトをブロック状に極細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘質土である。

第７層上面遺構（第34図　図版28）

第７層上面において、流路・溝・落ち込み・土坑を検出した。層内から土師器の皿（787・788）、瓦器の椀（789）、緑釉陶器の椀（790）、須恵器の甕（791）、動物遺体のウマ（資７）が出土した。



第34図　第58次第７層上面遺構平面図



第35図　第58次第7′層上面遺構平面図

流路3（9～11地区）は南北方向の流路である。北端は土置き場に切られ、南端は調査区外に延びる。検出長約10m50cm、幅約1m、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰オリーブ色（7.5Y5/2）中粒砂～粗粒砂である。遺構内から瓦器の椀（783）、須恵器の甕（784）が出土した。

流路6（6～7地区）は東西方向の流路である。両端は調査区外に延びる。検出長約3m50cm、幅約1m20cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は灰オリーブ色（5Y5/2）中粒砂～極粗粒砂である。

流路7（7地区）は東西方向の流路である。流路6の南に位置し、並行に走る。両端は調査区外に延びる。検出長約3m50cm、幅約1m70cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は灰オリーブ色（5Y5/2）中粒砂～極粗粒砂である。

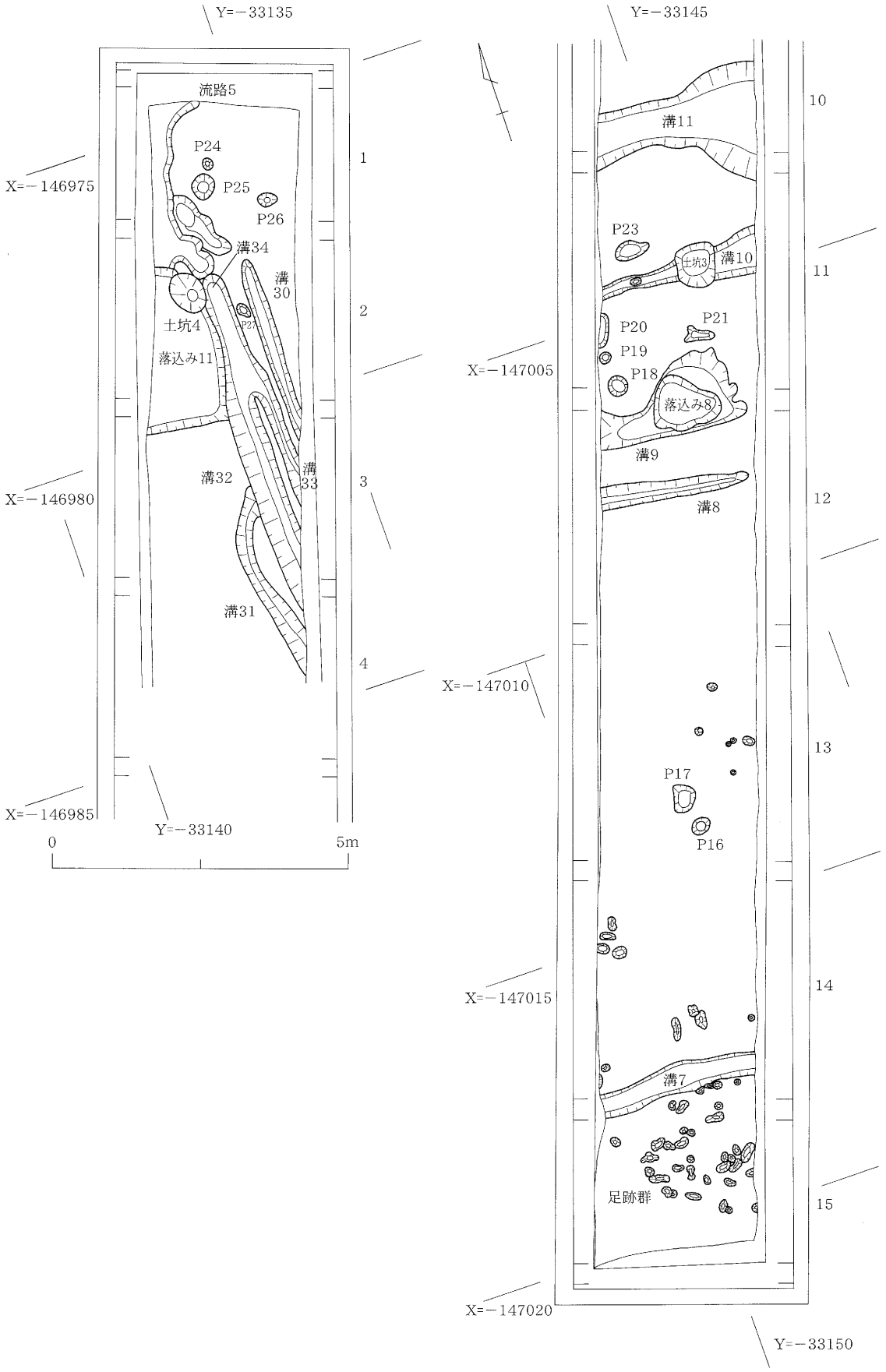
溝46（1地区）は東西方向の溝である。東端は調査区外に延び、西端は丸く終わる。検出長約1m20cm、幅約30cm、深さ約6cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂・鉄分を多く含む灰色（7.5Y4/1）砂混じりシルト質土である。

溝48（2地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延び、調査区中程で南に向かって「く」の字に曲がる。検出長約2m20cm、幅約30m、深さ約7cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂・鉄分を多く含むオリーブ灰色（10Y4/2）砂混じりシルト質土である。動物遺体のウマ（資料16）が出土した。

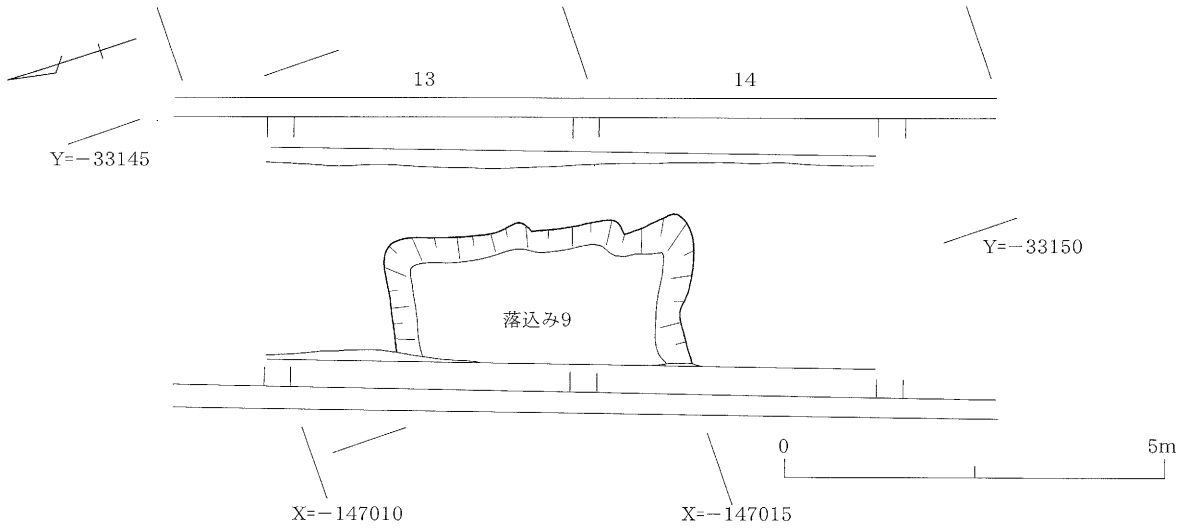
土坑5（1地区）は調査区の北西角に位置し、南北方向に長軸をもつ。検出長軸約1m90cm、検出短軸約1m20cm、深さ約15cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む灰オリーブ色（7.5Y4/2）砂混じりシルト質粘土である。動物遺体のカモ（資12）、スッポン（資13）が出土した。

土坑6（2地区）は円形の土坑である。検出直径約40cm、深さ約10cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は極細粒砂～細粒砂を少量含む灰オリーブ色（7.5Y4/2）砂混じりシルト質土である。動物遺体の大型哺乳類（資15）が出土した。

ピット28（14地区）は円形のピットである。検出直径50cm、深さ5cm、断面形は皿状を呈する。水田状遺構によって東半を切られている。埋土は細粒砂を全体に含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり土である。



第36図　第58次第6層上面遺構平面図



第37図　第58次第６′層上面遺構平面図

水田状遺構（13～15地区）は浅い落ち込みが２箇所の島畠状の地形を形成する。これ以北には同様のものはなかった。埋土は付近の流路３とは異なり、第６層によって埋まっていた。落差は最大10cmを測るごく浅いものであり、島畠部の上面は平坦であった。後世に削平されたものと思われる。動物遺体のウマ（資４）、大型哺乳類（資５・６）が出土した。

第７′層上面遺構（第35図　図版29）

第７層を掘削した直下で遺構を検出した。第７′層とする。上面において、溝・足跡群を検出した。遺構は13～15地区にわたって検出した。

溝12（13～15地区）は東方と南方に延びるL字型の溝である。南北に長く検出した。両端は調査区外に延びる。途中東に向かって枝分かれする部分をもつ。周囲には複数の足跡を検出した。南北方向の部分は検出長約８m、幅約30cm、深さ約７cmを測る。東西方向のものは検出長約２m30cm、幅約30cm、深さ約７cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂を多く含む暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じり粘土である。

溝13（14地区）は溝12と直交する東西方向の溝である。東端は溝12に切られ、西端は丸く終わる。検出長約90cm、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂をブロック状に含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じり粘土である。

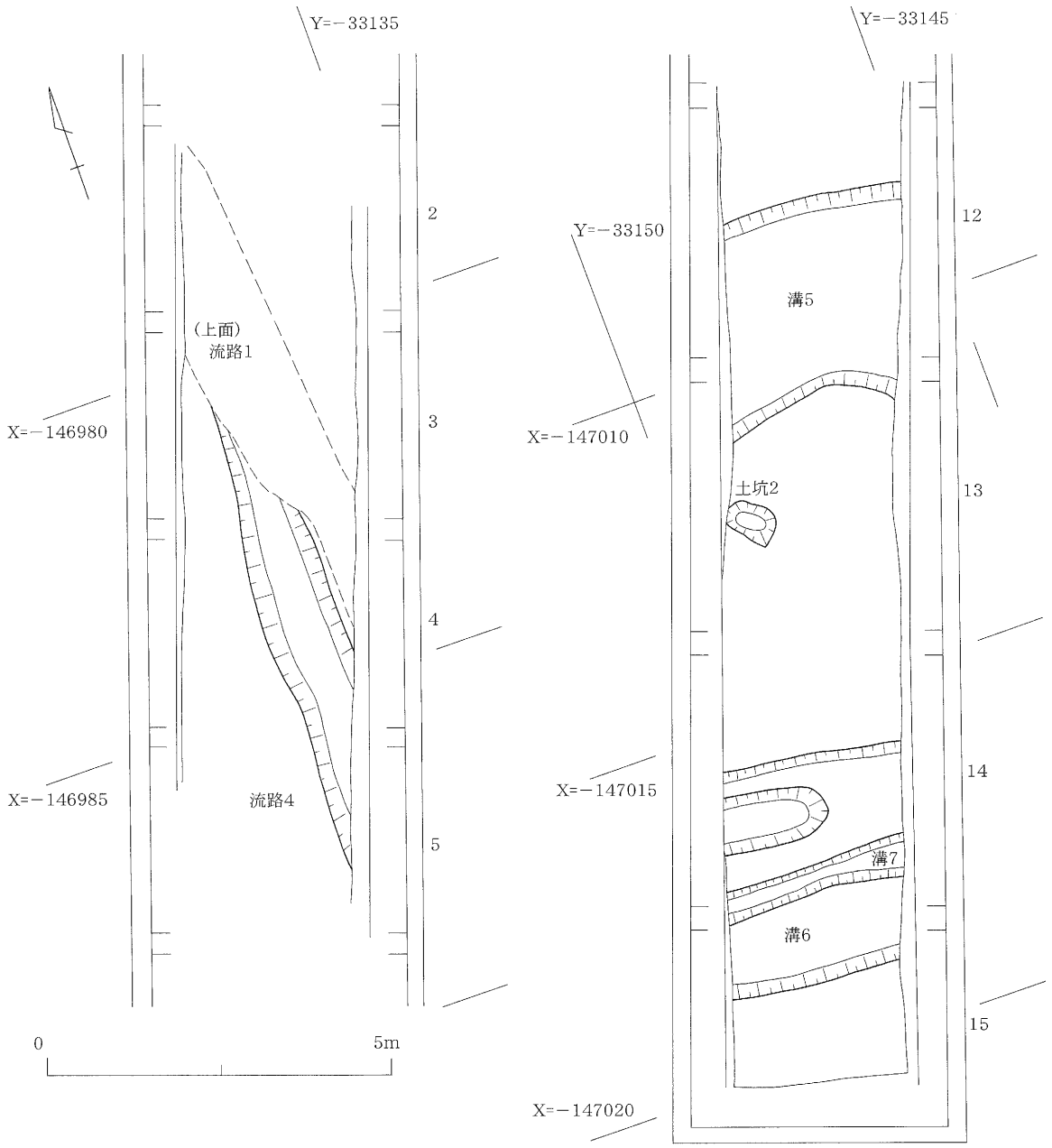
第６層上面遺構（第36図）

第６層上面において流路・溝・土坑・ピット・足跡群を検出した。層内からは土師器の皿（785）、須恵器の底部（786）が出土した。

流路５（１～２地区）は調査区の北端に位置しており、遺構の南端の一部を検出した。大部分は調査区外に位置するため、全形は不明である。検出長約３m、検出幅約30cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂・礫を多く含む灰オリーブ色（7.5Y4/2）砂混じりシルト質土である。動物遺体のヒト？（資17）が出土した。

溝７（15地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。検出長約２m50cm、幅約50cm、深さ約30cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂・鉄分を多く含むオリーブ灰色（10Y4/2）砂混じり粘質土である。周囲には多数の足跡がみられた。

溝11（10地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。西に向かって、ラッパ状に広く



第38図　第58次第５層上面遺構平面図

なる。検出長約２m70cm、最大幅は約２m、最小幅は約80cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を含むオリーブ灰色（5GY5/1）砂混じり土である。

溝30（２～３地区）は南北方向の溝である。南端は調査区外に延び、北端は丸く終わる。検出長約４m30cm、幅約30cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む灰色（10Y4/1）シルト質土である。

溝31（３・４地区）は南北方向に主軸をもつ溝である。南端は調査区外に延び、北端は溝32に切られている。調査区中程で弧状にカーブする。検出長約３m40cm、幅約40cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂を多く含む暗オリーブ色（5Y4/3）砂混じり土である。

溝32～34（２～３地区）は形状や埋土から一連の鋤溝と思われる。溝34が枝分かれして南に延びる部分をそれぞれ、溝32、33とした。南端は調査区外に延びる。溝34の北端は丸く終わる。検出長約

７m50cm、溝32は幅約70cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。溝33は幅約20cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～中粒砂を少量含む灰色（7.5Y4/1）砂混じり粘質土である。

落ち込み８（11～12地区）は南北方向に長軸をもつ不定形な遺構である。長軸約１m20cm、短軸約90cm、深さ約12cmを測る。断面形は不定形な皿状を呈する。埋土はシルトを全体に少量含む、暗緑灰色（7.5GY4/1）砂混じり粘質土である。

落ち込み11（２～３地区）は調査区西端に位置し、南北方向に長軸を持つ遺構である。西半は調査区外に位置するため、全形は不明。長軸約２m80cm、検出短軸約１m20cm、深さ約10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は細粒砂を少量含む灰色（10Y4/1）シルト質粘土である。遺構内からは土師器（772・773）、須恵器（774）が出土した。

土坑３（11地区）は東西方向に長軸をもつ円形の土坑である。直径約70cm、深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はシルト～中粒砂を全体に少量含むオリーブ灰色（5GY5/1）砂混じり土である。

土坑４（２地区）は南北方向に長軸を持つ楕円形の土坑である。長軸約70cm、短軸約50cm、深さ約40cmを測る。落ち込み11、溝34を切り込む。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂・礫を多く含む灰オリーブ色（7.5Y4/2）砂混じり土である。埋土からは匙形土製品（827）、動物遺体のシカ（資10）、イノシシ（資９）、哺乳類（資11）が出土した。

この他ピット16～27（１・２・11～13地区）を検出した。直径は約20cm～40cm、深さは概ね約10cmを測る。配置に規則性は見られない。遺構内から遺物は出土しなかった。

第６′層上面遺構（第37図）

第６層を掘削した直下で遺構を検出した。第６′層とする。上面において落ち込みを検出した。

落ち込み９（13～14地区）は、調査区の西端に位置し、南北方向に長軸をもつ。西端が調査区外に延びるため、全形は不明である。長軸約４m、検出短軸約１m90cm、深さ約30cmを測る。断面形は皿状を呈する。第５層によって埋まり、サヌカイト製の削器（934）が出土した。混入品である。

〔近・現代の遺構〕

第５層上面遺構（第38図　図版30）

第５層上面において流路・溝・土坑を検出した。

流路４（３～５地区）は南北方向の流路である。南端は調査区外に延び、北端は流路１に切られている。検出長約６m70cm、幅約１m10cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は暗オリーブ色（5Y4/3）細粒砂～粗粒砂である。断面観察から流路１の最初の流れであると思われる。以後大幅な方向の変化をせず、ほぼ同じ位置を通って流路が存在した事が考えられる。

溝５（12～13地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。検出長約２m40cm、幅約３m40cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂を少量含む暗オリーブ色（5Y4/3）砂混じり粘土である。

溝６（14～15地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。検出長約２m40cm、幅約３m30cm、深さ約30cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～中粒砂を多く含む暗オリーブ色（5Y4/3）砂混じり粘土である。

土坑２（13地区）は東西方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。検出長約80cm、検出幅約50cm、深さ約５cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は中粒砂～粗粒砂を多く含む黄灰色（2.5Y6/1）砂混じり土である。遺構内からは混入した石鏃（917）と動物遺体の大型哺乳類（資料３）が出土した。

第４層上面遺構（第39図　図版30～31）

第４層上面において流路・溝・落ち込み・土坑・ピットを検出した。並行して流路が２条走る１～４地区に対し、９地区以南の遺構はいずれも形状が不定形で規則性は見られない、土取の溝あるいは土坑と考えられる。中央部の先行トレンチなどにより遺構の性格を捉えることは困難である。

流路１（１～４地区）は南北方向の流路である。両端は調査区外に延びる。検出長約９m70cm、幅約１m80cm、深さ約70cmを測る。断面形はV字状を呈し、激しい水流により鋸歯状に側面が抉られる部分がみられた。埋土は暗オリーブ色（5Y4/3）粘土および３cm大の礫層を含む細粒砂～粗粒砂層である。断面観察から流路４を含み、長期にわたって断続的に機能していたことが考えられる。堀込み面は機械掘削で除去した第３層から続く可能性がある。遺構内からは土師器の皿（775）、瓦器の椀（776・777）、擂鉢（778）、銭貨（963）が出土した。

流路２（１地区）は調査区の北端に位置し大部分は調査区外に延びるため、全形は不明である。検出長約１m70cm、検出幅約１m80cm、深さ約20cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は３cm大の礫層を含む暗オリーブ色（5Y4/3）粘土と細粒砂～粗粒砂の互層である。

溝１（15地区）は東西方向の溝である。調査区南端に位置し南肩が調査区外に延びる。検出長約１m、幅約20cm、深さ約５cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂層を含む暗オリーブ色（5Y4/3）砂混じり粘質土である。遺構内から出土した遺物のなかには縄文土器の深鉢（51）があった。混入品である。

溝２（12地区）は東西方向の溝である。両端は調査区外に延びる。検出長約１m、幅約１m30cm、深さ約10cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は１～３cm大の礫を全体に多く含むオリーブ灰色（10Y4/2）細粒砂～粗粒砂である。

溝３（10～12地区）は南北方向の溝である。北端は落ち込み６に、南端は落ち込み２に切られている。検出長約９m80cm、幅約70cm、深さ約25cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は細粒砂～粗粒砂を多く含むオリーブ灰色（2.5GY5/1）粘質土である。

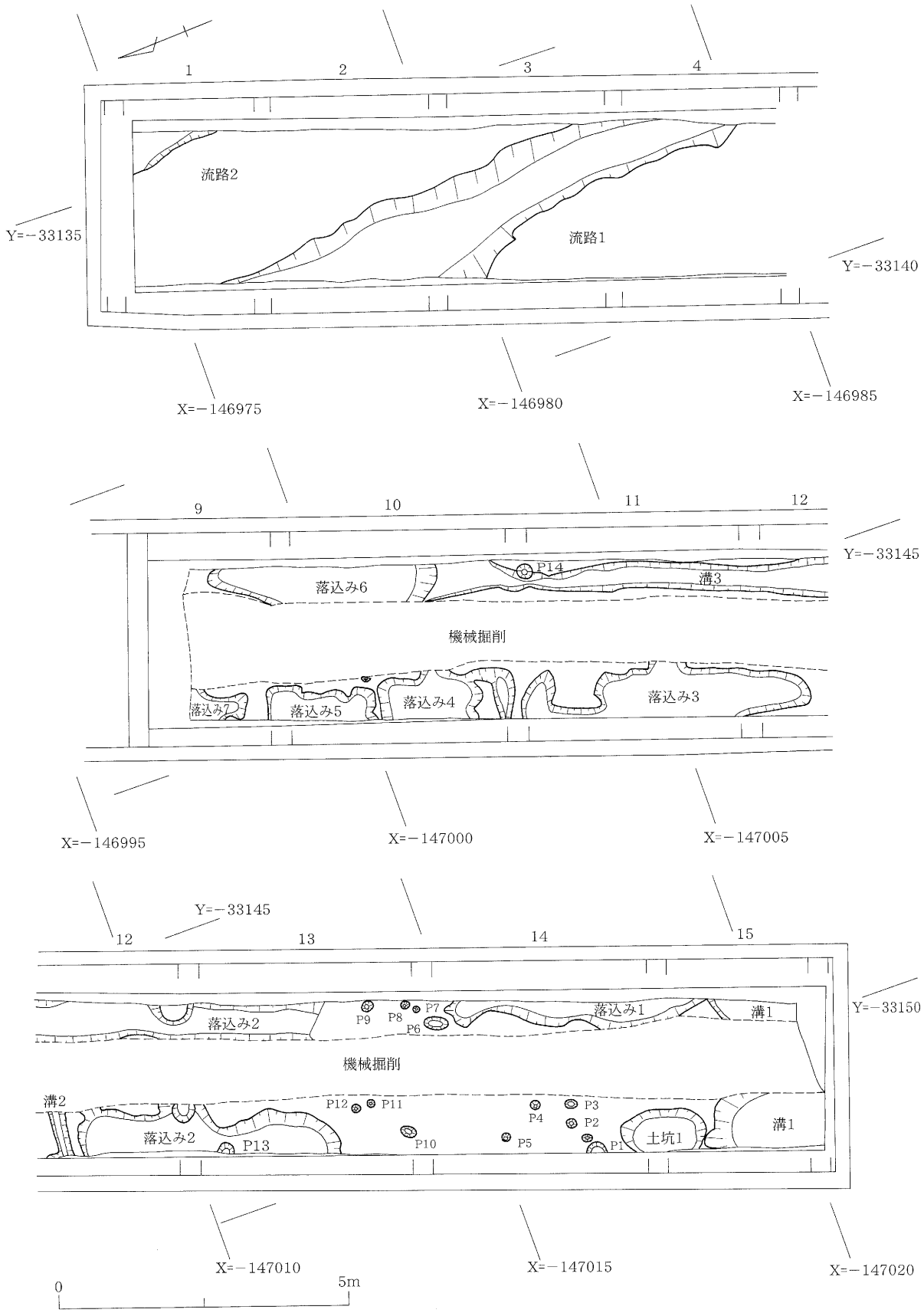
土坑１（14～15地区）は調査区の西端に位置し、南北方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。西端は調査区外に延びる。長軸約１m50cm、検出短軸約70cm、深さ約13cmを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は礫を少量含む暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂混じりシルト質土である。動物遺体のウマ（資１）が出土した。

落ち込み４（10地区）は調査区の西端に位置する不定形な遺構である。東端は機械掘削に切られ、西半は調査区外に延びるため全形は不明である。長軸約２m、検出短軸約80cm、深さ約30cmを測り、断面形は不成形な逆凸形を呈する。遺構内からは白磁の椀（779）が出土した。

落ち込み５（９～10地区）は調査区の西端に位置する不定形な遺構である。東端は機械掘削に切られ、西半は調査区外に延びるため全形は不明である。長軸約２m、検出短軸約70cm、深さ約15cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺構内からは黒色土器の椀（782）が出土した。

この他ピット１～14（11～14地区）を検出した。直径約20cmに満たないものが多く、深さも５cm程度のものであった。規則性は見られず、遺物は出土しなかった。

以上のように同規模の溝が一定の間隔をもって作られる状況は、周囲の調査においてもみられた。古墳時代以降、近・現代に至るまで近辺はもっぱら耕作地として利用されていたと思われる。



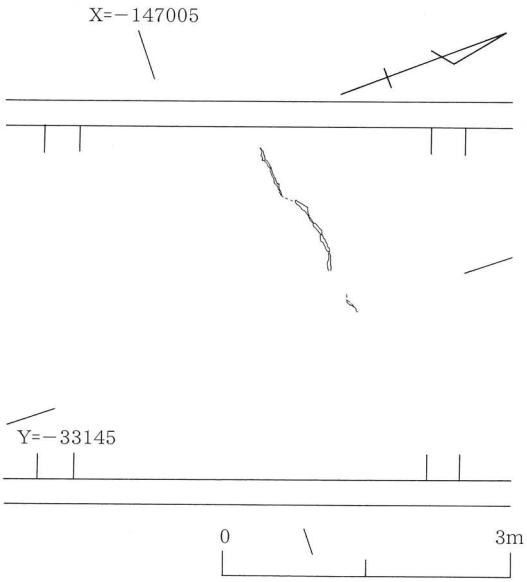
第39図　第58次第４層上面遺構平面図

弥生時代中期前葉の地震痕跡（第40～43図）

11地区において地震に伴う亀裂と断層を検出した。T.P.+0.5m付近を頂点に、東西方向の亀裂が生じていた。亀裂の最深部はT.P.－1.0mに達し、深さ1.5mを測った。断層はその北と南で約10cmの落差をなし、南方の地層が下に入り込み、北方の地層が押し上げられた形であった。亀裂内には第18・19層の生活層や堆積層が引き込まれており断層内のT.P.－0.6m付近から表面に直線文が施された2点の弥生土器片が出土した。土層断面の観察から、第18層の時点で発生した可能性が高く、地震発生時の生活面は中期前葉であると考えられる。

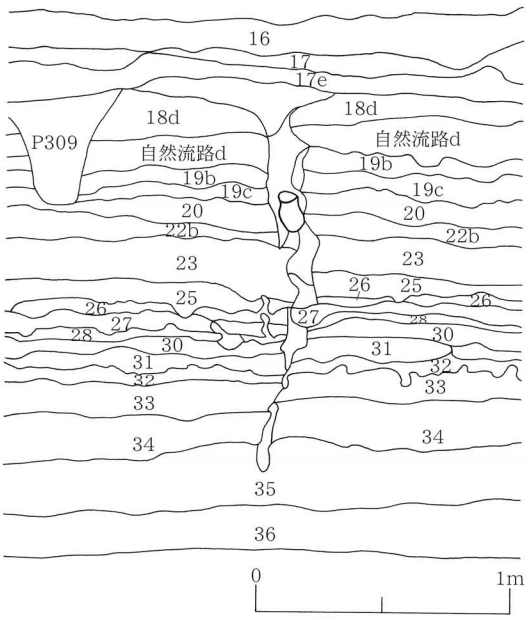
本遺跡における地震痕跡の報告は第35－2・3次、38次に複数期の報告がみられるが、本調査のものとは時期が異なる（鬼虎川遺跡第38次発掘調査報告書 1997　鬼虎川遺跡第35－2・3次発掘調査報告書 1998　共に財団法人東大阪市文化財協会）。同時期の地震痕跡として若江北遺跡で中期前半のものが確認されている（巨摩・若江北遺跡第4次発掘調査報告書　1995　大阪府文化財センター）。また、複数時期の痕跡が見られるのは瓜生堂・北島遺跡である。北島遺跡では縄文時代晩期～弥生時代前期、中期中頃、後期後半。（北島遺跡第１次発掘調査報告書 1996　財団法人東大阪市文化財協会）瓜生堂遺跡では弥生時代前期末、中期初頭、中期中頃、中期末、後期初頭、古墳時代初頭の痕跡が報告されている（瓜生堂遺跡第45次発掘調査報告書　1999　財団法人東大阪市文化財協会・瓜生堂遺跡第47次発掘調査報告書　2002　東大阪市教育委員会）。

第43図　第58次西壁地震痕跡断面写真



第40図　第58次第30層上面地震痕跡検出状況平面図

第41図　第58次第30層上面地震痕跡検出状況写真



第42図　第58次西壁地震痕跡断面図

c．遺物

遺物は土器、土製品、石器、木製品、骨角牙製品、銭貨などがある。以下、各項目ごとに分けて記す。

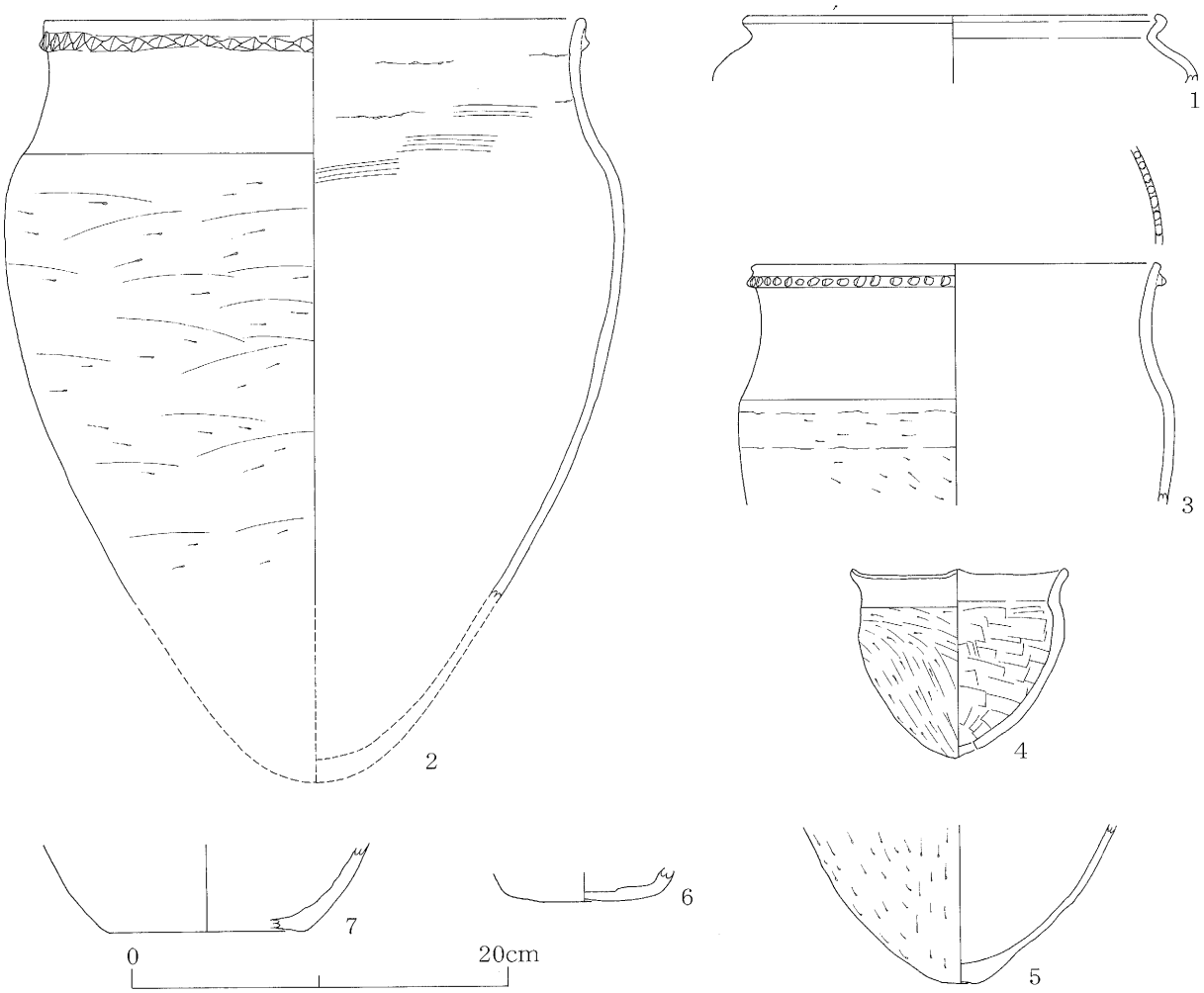
1）土器

縄文時代～近世期の土器が出土した。弥生時代の土器が特に多い。各時代の遺構及び遺物包含層に分けて記す。

縄文土器（第44～46図１～53）

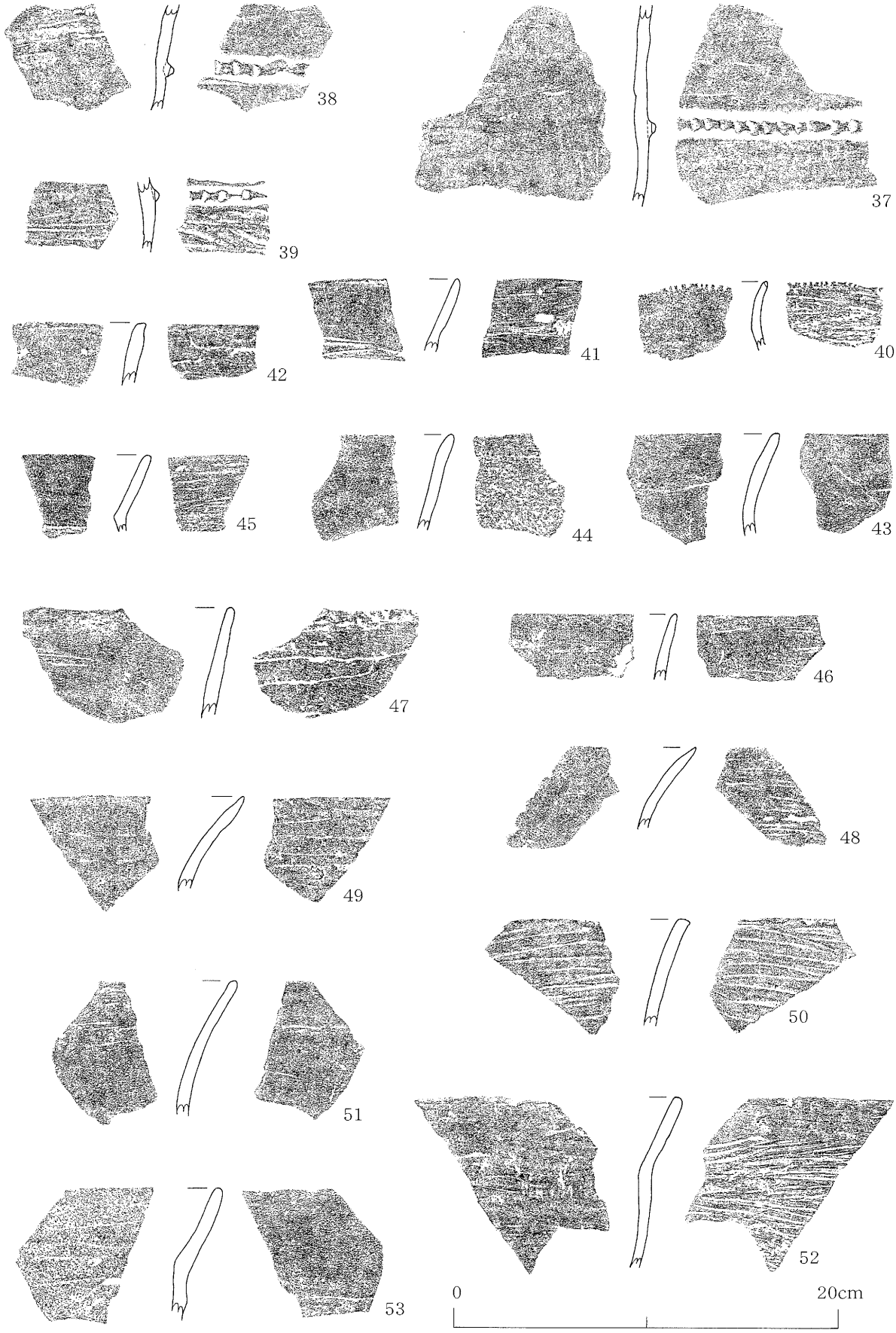
今回の調査では明確な縄文時代の遺物包含層や遺構は検出されていない。大部分は弥生時代の遺物包含層と遺構からである。すべて混入品と考えられる。縄文土器は晩期のものであり、浅鉢と深鉢がある。

１・８～10は浅鉢である。１は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へ肥厚する。体部外面はミガキ調整、内面はナデ調整する。８は口縁端部が内側へ肥厚する。内外面はミガキ調整する。９は口縁部が段を持ち、口縁端部が平坦に終わる。口縁端部と段に刻み目を施す。風化が著しく、調整法は不明である。10は椀状を呈する。口縁端部は丸く終わる。内外面はミガキ調整する。



第44図　第58次縄文土器実測図

第45図　第58次縄文土器実測図



第46図　第58次縄文土器実測図

２～７・11～53は深鉢である。２・３は凸帯文土器である。２は底部を欠損するが尖り気味の丸底と考えられる。体部は肩部で張り、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の直下に刻み目凸帯を廻らす。体部外面はケズリ調整、内面はナデ調整する。３は２と形態が類似するが口縁端部は面を持つ。口縁端部に刻み目、口縁端部の直下に刻み目凸帯を廻らす。体部外面はケズリ調整、内面はナデ調整する。４は底部が尖り気味の丸底である。体部は肩部で張る。口縁部は緩く外反し、波状口縁を呈する。口縁端部はやや面を持つ。底部に穿孔を施す。体部外面はケズリ調整、内面はナデ調整する。５～７は底部である。５は尖り気味の丸底である。外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。６・７は平底に近い丸底である。風化が著しく、調整法は不明である。11～39は凸帯文土器である。11～31は口縁部の破片である。口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものがある。口縁端部直下に凸帯を廻らす。凸帯の位置は上につくものとやや下につくものがある。11～27は凸帯に刻み目を加えるが、28～31は無文である。26は口縁端部にも刻み目を施す。内外面はナデ調整する。32～39は体部の破片である。口縁部と体部の境に刻み目凸帯を施す。体部外面はケズリ調整、内面はナデ調整する。40～53は口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わるものとやや尖り気味に終わるものがある。内外面はナデ調整するものが多い。40は口縁端部に刻み目を施す。

46は土坑25、33は土坑34、15・18・30は土坑40、23・28・31は土坑46、22は土坑49、８・13・32・35は土坑59、20は大溝２、３・41・47は大溝３、26は大溝４、51は溝１、34は溝93、38は溝95、49は溝106、12・21・25は第16層、１・２・６・14・16・19・24・37・39・48・53は第17層、36は第18層、４・５・43は第19層、10・40・45は第20層、44・50・52は第21層、７・９・11・17・27・29・42は弥生時代遺物包含層より出土。３・５・９・11・22・26・27・49は非河内産、他は生駒西麓産。

弥生土器

弥生土器はⅠ～Ⅴ様式に分類する。Ⅲ様式とⅣ様式の土器は明確に分類できないのでⅢ～Ⅳ様式として扱う。Ⅱ～Ⅳ様式に分けられない土器は中期と記す。また、Ⅱ様式の中にはⅠ様式の可能性がある甕や鉢も含まれる。本文中に調整法を記しているが、口縁部と裾端部のヨコナデ調整は普遍的なのであえて記さない。

遺構出土土器

大溝１（第47図54～59）

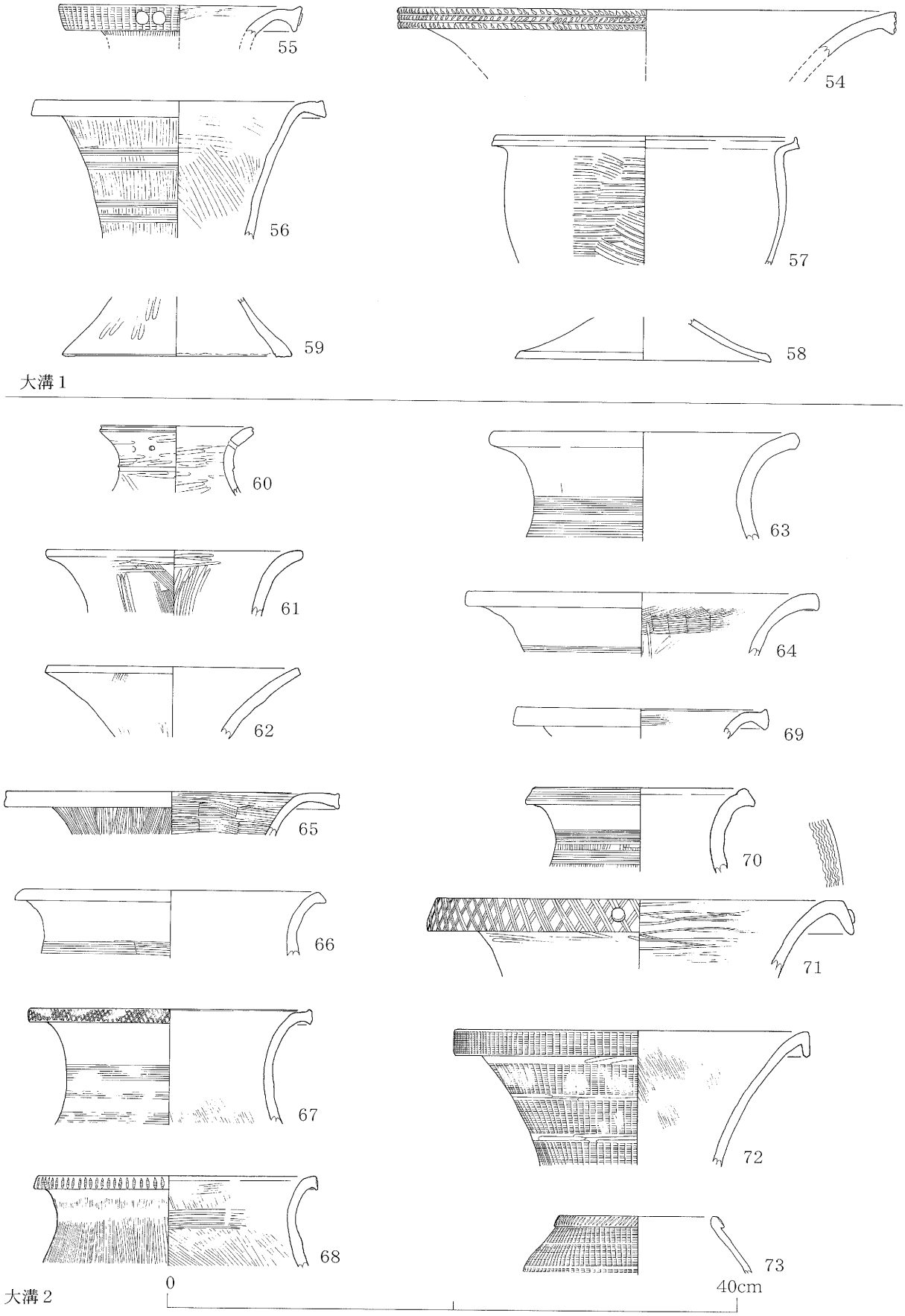
壷・甕・甕蓋・脚部の器種がある。

54～56は壷である。54は口縁部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部にヘラ描綾杉文を施す。55・56は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。55は口縁端部に櫛描簾状文を施した後、円形浮文を貼り付ける。内外面はハケメ調整する。56は頸部に櫛描直線文を施す。内外面はハケメ調整する。54はⅠ様式、55・56はⅢ～Ⅳ様式。54は生駒西麓産、他は非河内産。

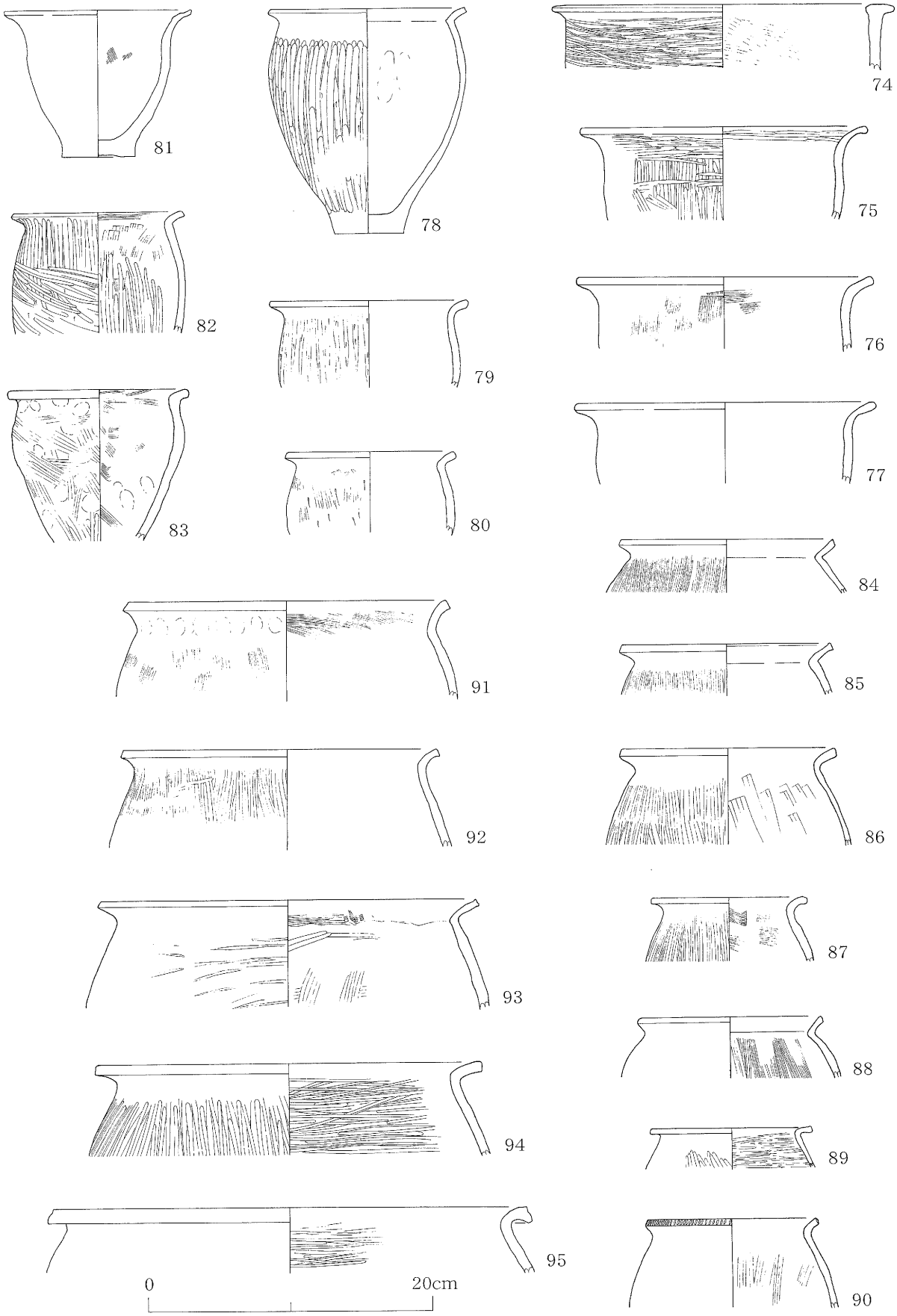
57は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部外面はタタキ調整する。内面の調整法は不明である。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

58は甕蓋である。体部が大きく立ち上がる。口縁端部はやや面を持つ。口縁部内面にリング状の煤が付着する。調整法は不明である。中期。生駒西麓産。

59は脚部である。器種は不明である。裾部が急に立ち上がり、裾端部が面を持つ。外面はヘラミガ



第47図　第58次大溝１・２出土土器実測図



第48図　第58次大溝２出土土器実測図

キ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

大溝２（第47～49図60～115）

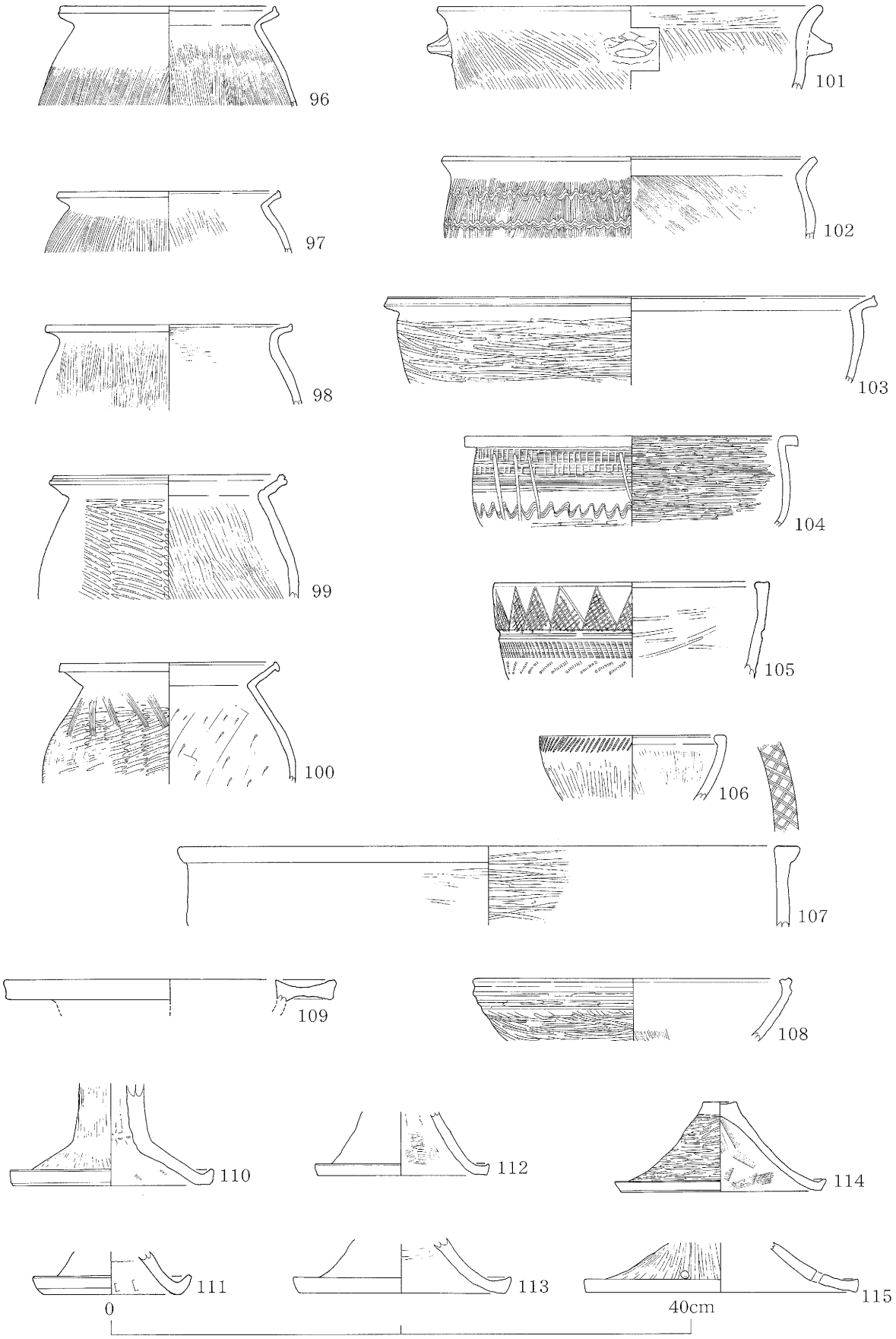
壷・無頸壷・甕・鉢・高杯・甕蓋・壷蓋の器種がある。

60～72は壷である。60は口頸部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。頸部と体部の境に削り出しの段がつく。口縁端部に１条のヘラ描沈線文を施す。頸部に２孔の小円孔を穿つ。内外面はヘラミガキ調整する。61～64は口頸部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つものと丸く終わるものがある。63・64は頸部に櫛描直線文を施す。頸部内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整するものが多い。65～68は頸部が筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。66・67は口縁端部や頸部に櫛描文様を施す。頸部内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。69・70は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。70は口縁端部と頸部に櫛描直線文を施す。頸部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。71は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ大きく拡張する。口縁端部と口縁部内面に櫛描文様を施す。口縁端部はさらに円形浮文を貼り付ける。頸部内外面はヘラミガキ調整する。72は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部と頸部に櫛描簾状文を施す。文様帯間は研磨する。頸部内面はハケメ調整する。60はⅠ様式、61～64はⅡ様式、65～72はⅢ～Ⅳ様式。63・67・68は非河内産、他は生駒西麓産。

73は無頸壷である。体部は大きく内傾する。口縁端部は段を持つ。口縁端部に刻み目、体部に櫛描簾状文を施す。体部内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

74～100は甕である。74は体部の張りが少なく、口縁部が逆Ｌ字形を呈する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はヘラミガキ調整、内面はハケメの後、ナデ調整する。75～83は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものがある。体部内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。84～94は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つものが多い。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。90は口縁端部に刻み目を施す。95は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は下方へ拡張する。体部外面の調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。96～98は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面はハケメ調整やナデ調整する。99は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方に摘み上げ気味に拡張する。口縁端部に1条の凹線文を施す。体部外面はタタキ調整、内面はハケメ調整する。100は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は面を持つ。体部外面はタタキの後、部分的にハケメ調整する。内面はヘラケズリ調整する。74はⅠ様式、75～83はⅡ様式、84～98はⅢ～Ⅳ様式、99・100はⅣ～Ⅴ様式。85・79・99・100は非河内産、他は生駒西麓産。

101～107は鉢である。101は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部に瘤状の握手を貼り付ける。体部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。102～103は体部の張りが少なく、口縁部が外折する。口縁端部は面を持つ。102は体部に櫛描波状文を施す。内外面はハケメ調整する。103は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。104は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。体部に櫛描文様を施す。内外面はヘラミガキ調整する。105・106は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。105は体部外面に櫛描列点文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。106は体部外面にヘラ描文様、櫛描文様、凹線文を施す。ヘラ描文様は山形の中に斜格子を入れる。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。壷の可能性もある。107は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。口縁端部に櫛描斜格子文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。101はⅡ様式、102～107はⅢ～Ⅳ様式。102は非河内産、他は生



第49図　第58次大溝２出土土器実測図

駒西麓産。

108～113は高杯である。108は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。外面に３条の凹線文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメの後、ナデ調整する。109は口縁部が水平方向へ伸び、口縁端部が面を持つ。口縁部と杯部の内面境に凸帯を廻らす。110～113は脚部である。裾部が緩く立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。110は柱状部が中空である。裾部内面にリング状の煤が付着しており、甕蓋に転用したと考えられる。内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

114は甕蓋である。体部が大きく立ち上がり、中央に円形の摘みが付く。口縁端部は上方に拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。中期。生駒西麓産。

115は壷蓋である。体部が緩く立ち上がる。口縁端部は面を持つ。口縁部に小円孔を穿つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

大溝３（第50・51図116～143）

壷・細頸壷・甕・鉢・高杯・甕蓋の器種がある。

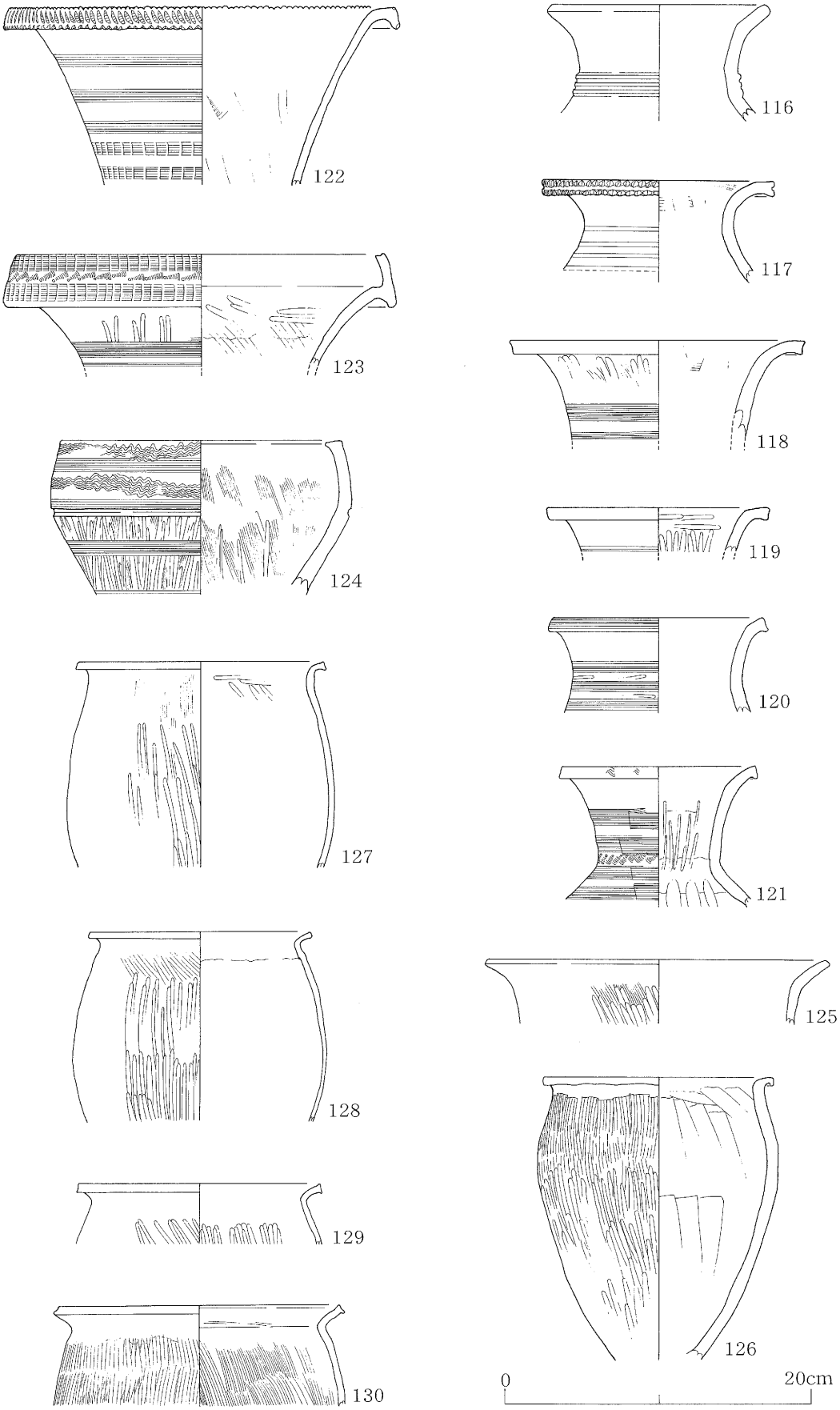
116～123は壷である。116は口頸部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。頸部と体部の境に凸帯を削り出し、その上に２条のヘラ描沈線文を施す。調整法は不明である。117は口頸部が短く外反し、口縁端部は面を持つ。口縁端部に１条のヘラ描沈線文とその上下に刻み目を施す。体部外面に櫛描直線文を施す。櫛原体は中央が幅広くあいており、その両端に２本の条溝を施す。原体の条溝は４本である。118～121は口頸部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。頸部に櫛描文様を施す。120・121は口縁端部にも文様を施す。頸部内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。122は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描列点文と刻み目、頸部に直線文と簾状文を施す。頸部外面の調整は不明である。内面はハケメの後、ナデ調整する。123は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部と頸部に櫛描文様を施す。内外面はヘラミガキ調整する。116はⅠ様式、117～121はⅡ様式、122・123はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

124は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部が面を持つ。口頸部外面に櫛描波状文と直線文を施す。焼成後に1条の幅広い線刻を廻らす。内外面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

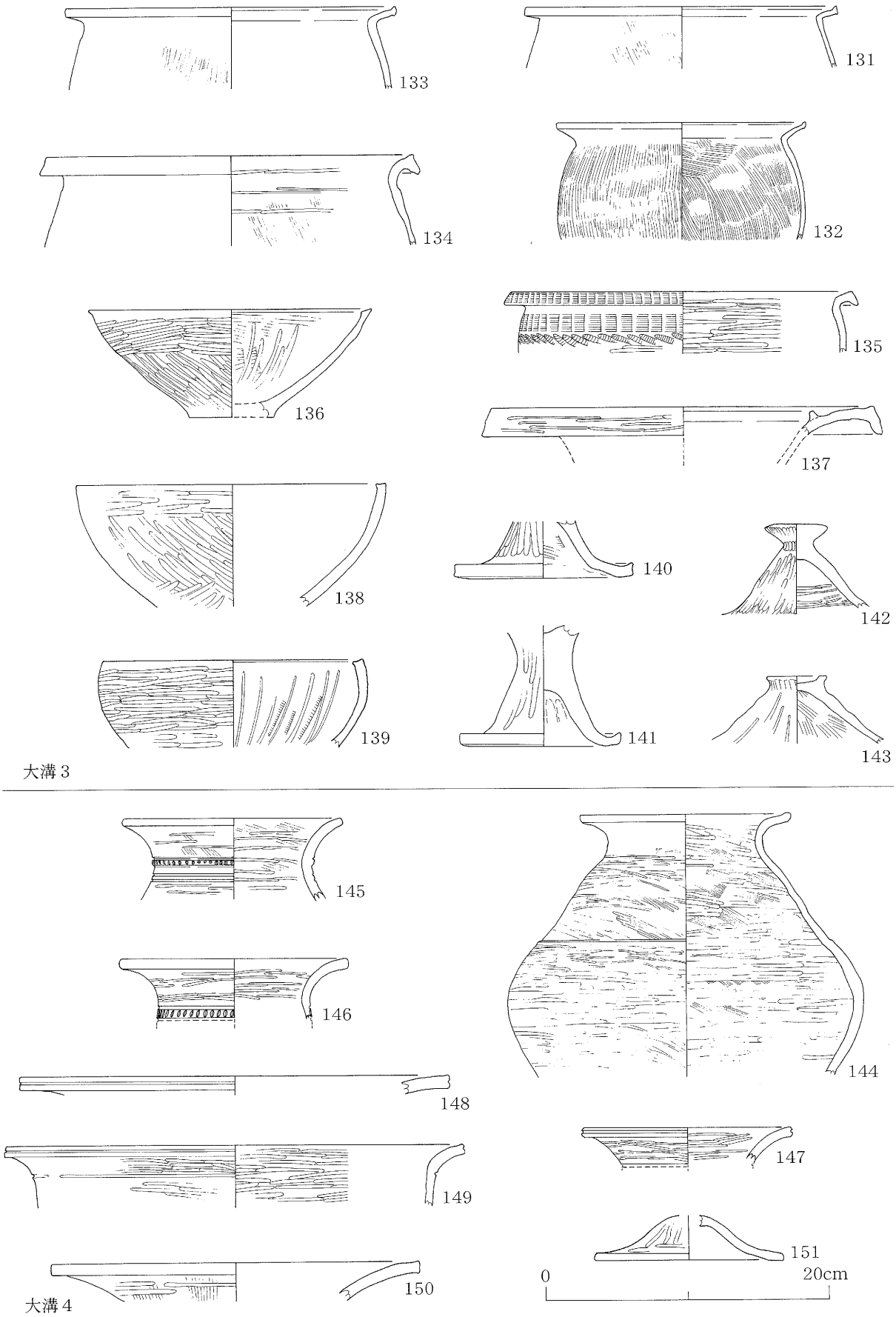
125～134は甕である。125は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。126は体部の張りがやや大きく、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。127～130は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。131～133は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面はハケメ調整やナデ調整する。134は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は下方へ拡張する。体部外面の調整法は不明である。内面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。125はⅡ様式、126～134はⅢ～Ⅳ様式。131～133は非河内産、他は生駒西麓産。

135・136は鉢である。135は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁部と体部に櫛描文様を施す。内外面はヘラミガキ調整する。136は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。135は生駒西麓産、136は非河内産。

137～141は高杯である。137は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部が水平方向へ伸びる。口縁端部



第50図　第58次大溝３出土土器実測図



第51図　第58次大溝３・４出土土器実測図

は下方へ大きく拡張する。口縁部と杯部の内面境に凸帯を廻らす。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。138・139は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。140・141は脚部である。裾部がやや急に立ち上がり、裾端部はやや上方へ拡張する。141は柱状部が中実である。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。137～139はⅢ～Ⅳ様式。140・141はⅡ様式。137は非河内産、他は生駒西麓産。

142・143は甕蓋である。体部が大きく立ち上がり、中央に円形の摘みが付く。142は内外面をハケメ調整する。143は外面をヘラミガキ調整、内面をハケメ調整する。中期。生駒西麓産。

大溝４（第51・52図144～155）

壷・壷蓋・甕・鉢の器種がある。

144～150は壷である。144は体部が下半で大きく張り、口頸部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部に削り出しの段がつく。体部内外面はヘラミガキ調整する。145～147は口頸部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。頸部と体部の境に削り出しの凸帯とヘラ描沈線文を施す。145・146は凸帯にヘラ描刺突文を廻らす。147は口縁端部に１条の沈線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。148は口縁部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部にヘラ描沈線文を施す。149は頸部が大きな筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。口縁端部と頸部にヘラ描沈線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。150は口縁部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。144～149はⅠ様式、150はⅡ様式。生駒西麓産。

151は壷蓋である。体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部はやや面を持つ。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。中期。生駒西麓産。

152・153は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面に２条のヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。152は体部外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。153は体部外面をハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。Ⅰ様式。生駒西麓産。

154・155は鉢である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部内外面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

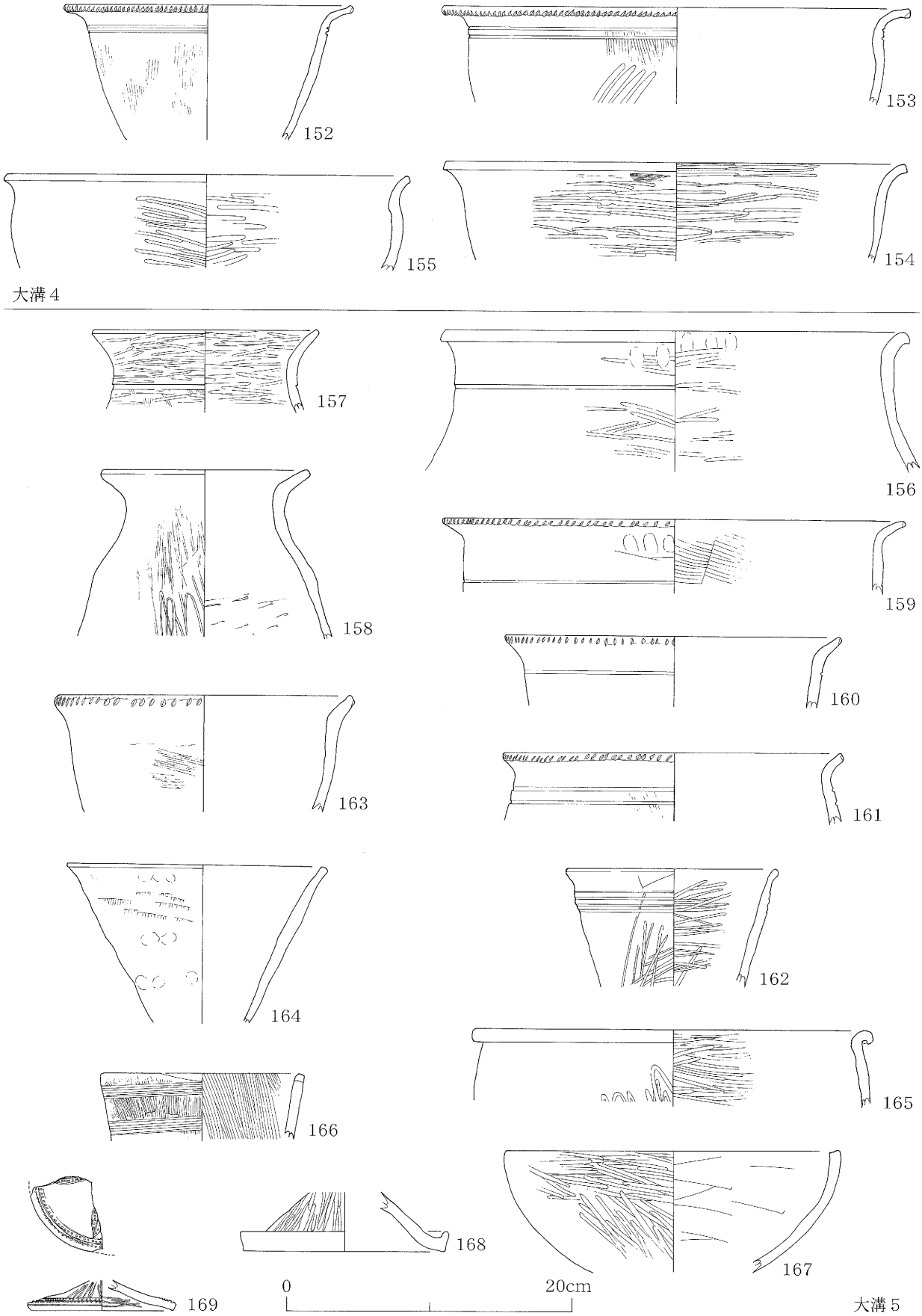
大溝５（第52図156～169）

壷・甕・鉢・水差形土器・高杯・壷蓋の器種がある。

156～158は壷である。156は頸部が大きな筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部はやや面を持つ。頸部と体部の境に削り出しの段がつく。内外面はヘラミガキ調整する。157は口頸部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。頸部と体部の境に削り出しの段がつく。内外面はヘラミガキ調整する。158は体部の張りが少なく、口頸部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はヘラミガキ調整する。内面はヘラケズリの後、ナデ調整する。156・157はⅠ様式、158はⅡ様式。生駒西麓産。

159～162は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面にヘラ描沈線文を施す。159～161は口縁端部に刻み目を施す。体部内外面はハケメ調整、ナデ調整、ヘラミガキ調整する。Ⅰ様式。生駒西麓産。

163～165は鉢である。163は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部に刻み目を施す。体部外面はハケメの後、ナデ調整する。内面はナデ調整する。164は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメの後、ナデ調



第52図　第58次大溝４・５出土土器実測図

整する。内面はナデ調整する。165は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部がやや面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。163・164はⅡ様式、165はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

166は水差形土器である。口頸部が外上方に伸び、口縁端部が丸く終わる。口縁部に半円形の切り込みを入れる。口頸部外面に櫛描直線文を施す。内外面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

167・168は高杯である。167は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。168は脚部である。裾部が緩く立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。裾部内面にリング状の煤が付着しており、甕蓋に転用したと考えられる。Ⅲ～Ⅳ様式。167は生駒西麓産、168は非河内産。

169は壷蓋である。体部の立ち上がりは緩い。口縁端部はやや丸く終わる。口縁部にはヘラ描の沈線文と刺突文を施す。体部には木葉状の線刻を描き、中に刺突文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅰ様式。生駒西麓産。

溝93（第53図170～172）

170～172は壷である。170は口頸部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。頸部に３条１単位のヘラ描沈線文を３帯施す。頸部外面はハケメ調整、内面は不明である。171は体部の張りが少なく、口頸部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面は不明である。172は体部である。算盤玉形を呈する。体部外面に櫛描直線文と簾状文を施し、その上に縦方向の磨きを入れる。体部外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。170はⅠ様式、171はⅡ様式、172はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

溝94（第53図173）

173は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面の調整法は不明である。内面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

溝95（第54・55図181～219）

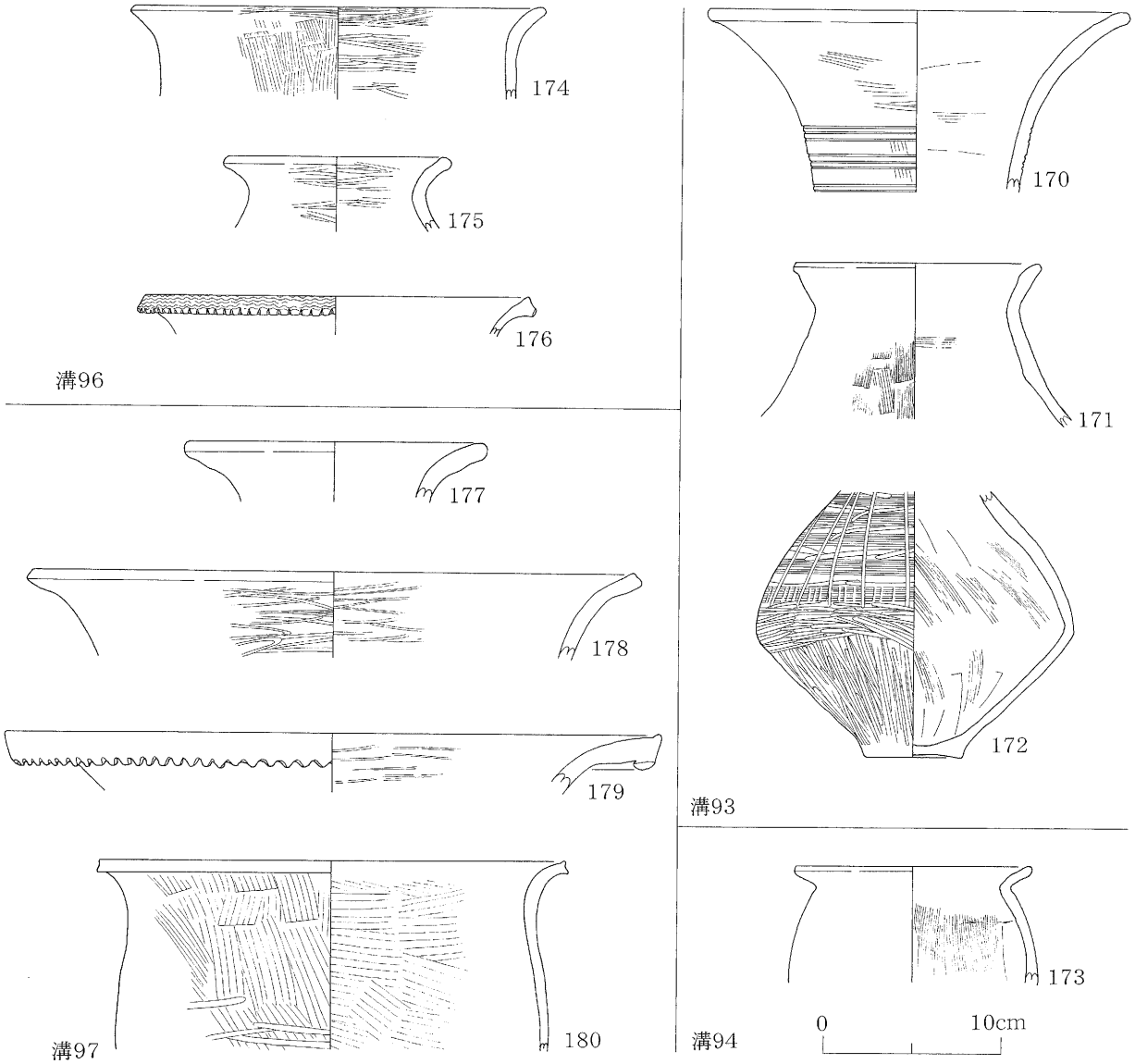
壷・甕蓋・水差形土器・細頸壷・壷蓋・鉢・甕・高杯の器種がある。

181～191は壷である。181は口頸部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。182～186は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描簾状文や刻み目を施す。183は口縁部内面に円形浮文の剥落痕が残る。内外面はハケメ調整やナデ調整が多い。187・188は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。187は口縁端部に櫛描波状文、口縁部内面に波状文と扇形文を施す。内外面はナデ調整する。189は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部に櫛描文様と刻み目を施す。内外面はハケメ調整する。190は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上方へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部と頸部に櫛描文様を施す。内外面はナデ調整する。191は底部が平底を呈し、体部が縦長の球形を呈する。体部上半に櫛描直線文と波状文を施す。体部外面はハケメ調整、内面の調整法は不明である。181はⅡ様式、182～191はⅢ～Ⅳ様式。181・182・187・191は非河内産、他は生駒西麓産。

192・193は甕蓋である。体部が大きく立ち上がり、中央に円形の摘みが付く。192は口縁端部を上方へ拡張する。内外面はハケメの後、ナデ調整する。193は内外面をヘラミガキ調整する。中期。192は生駒西麓産、193は非河内産。

194は水差形土器である。口頸部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。口頸部外面に櫛描波状文と直線文を施す。内外面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

195は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部がやや丸く終わる。口頸部外面に櫛描簾状文と波



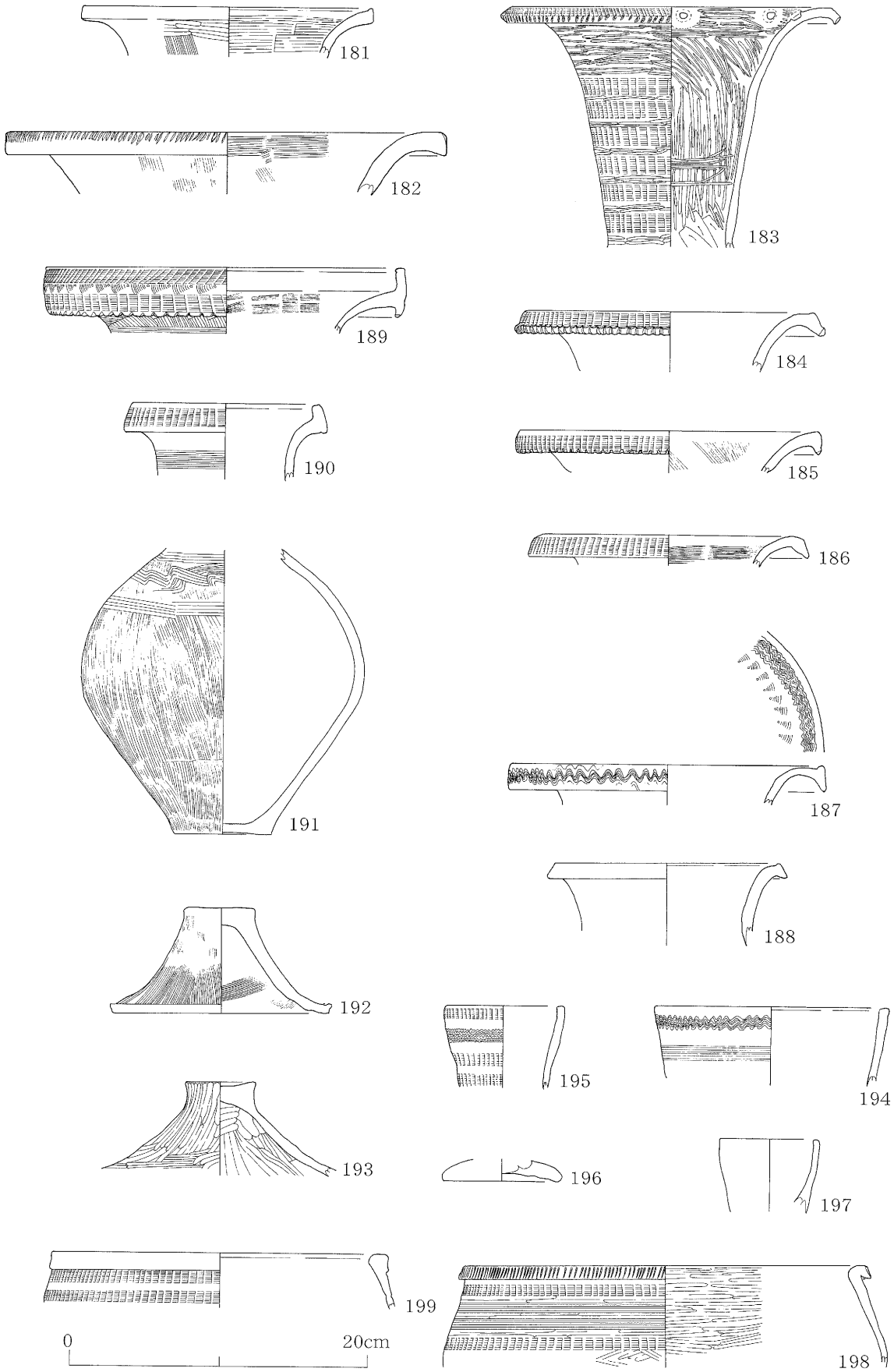
第53図　第58次溝93・94・96・97出土土器実測図

状文を施す。内外面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

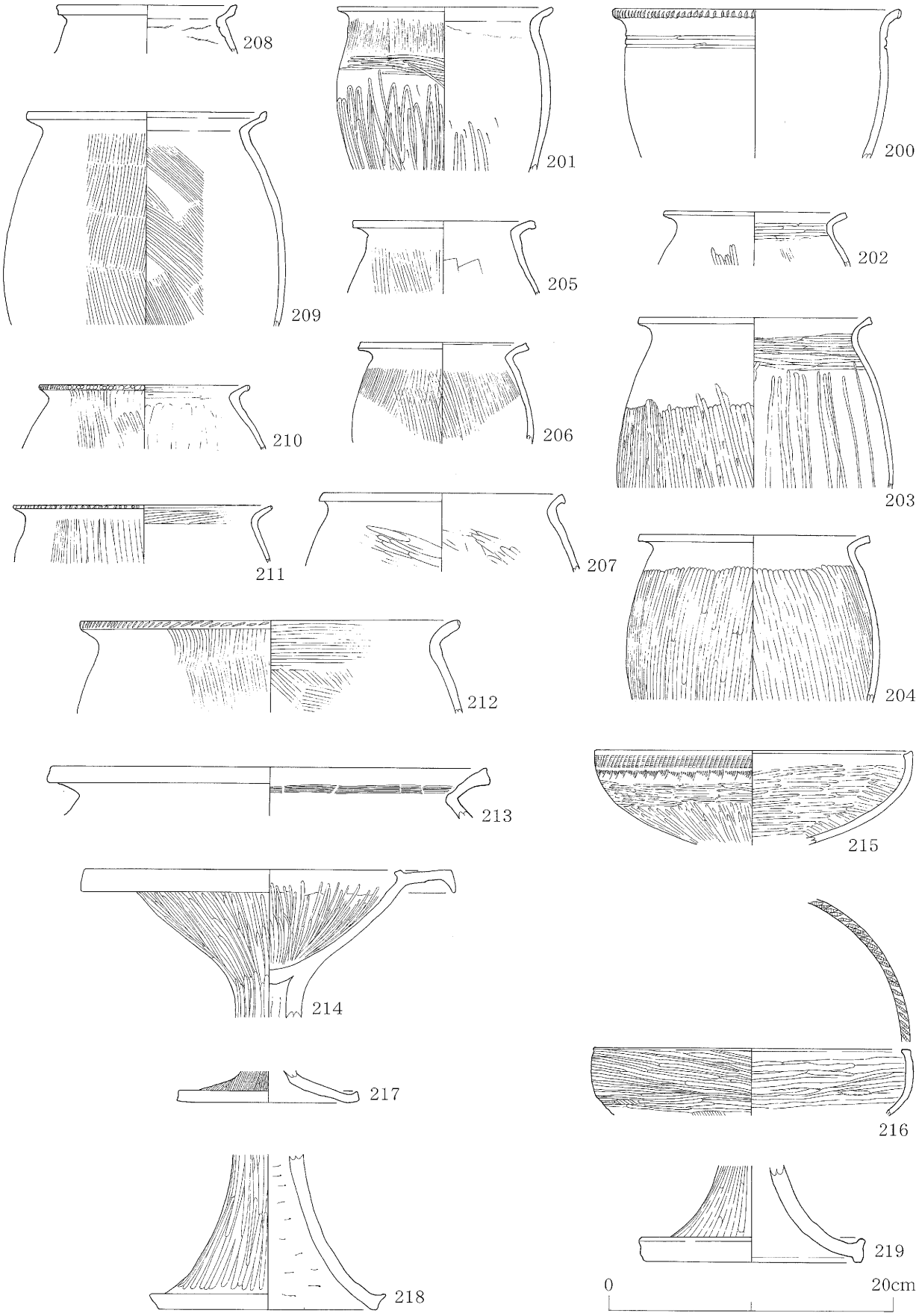
196は壷蓋である。体部が緩く内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。中期。生駒西麓産。

197～199は鉢である。197は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。198は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部と体部に櫛描文様を施す。内外面はヘラミガキ調整する。199は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。体部に櫛描簾状文を施す。内外面はナデ調整する。197はⅡ様式、198・199はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

200～213は甕である。200は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面の調整法は不明である。体部外面に２条のヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。201～207・213は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。体部内外面の調整法はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。208・209は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面は208がナデ調整、209がハケメ調整する。210～212は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁



第54図　第58次溝95出土土器実測図



第55図　第58次溝95出土土器実測図

端部は面を持つ。口縁端部に刻み目を施す。体部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。200はⅠ様式、201～213はⅢ～Ⅳ様式。209～212は非河内産、他は生駒西麓産。

214～219は高杯である。214は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部が水平方向へ伸びる。口縁端部は下方へ大きく拡張する。口縁部と坏部の内面境に凸帯を廻らす。柱状部は中空である。体部内外面はヘラミガキ調整する。柱状部内面に絞り痕が残る。215・216は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。215は外面に櫛描簾状文と扇形文、216は口縁端部に列点文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。217～219は脚部である。217は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部が面を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。218・219は裾部の立ち上がりが急である。218は裾端部を上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はヘラケズリ調整する。219は裾端部を上下へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。裾部内面にリング状の煤が付着しており、甕蓋に転用したと考えられる。217は中期、他はⅢ～Ⅳ様式。219は非河内産、他は生駒西麓産。

溝96（第53図174～176）

甕・壷の器種がある。

174は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

175・176は壷である。175は口頸部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はヘラミガキ調整する。176は口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描波状文と刻み目を施す。175はⅠ様式、176はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

溝97（第53図177～186）

壷・甕の器種がある。

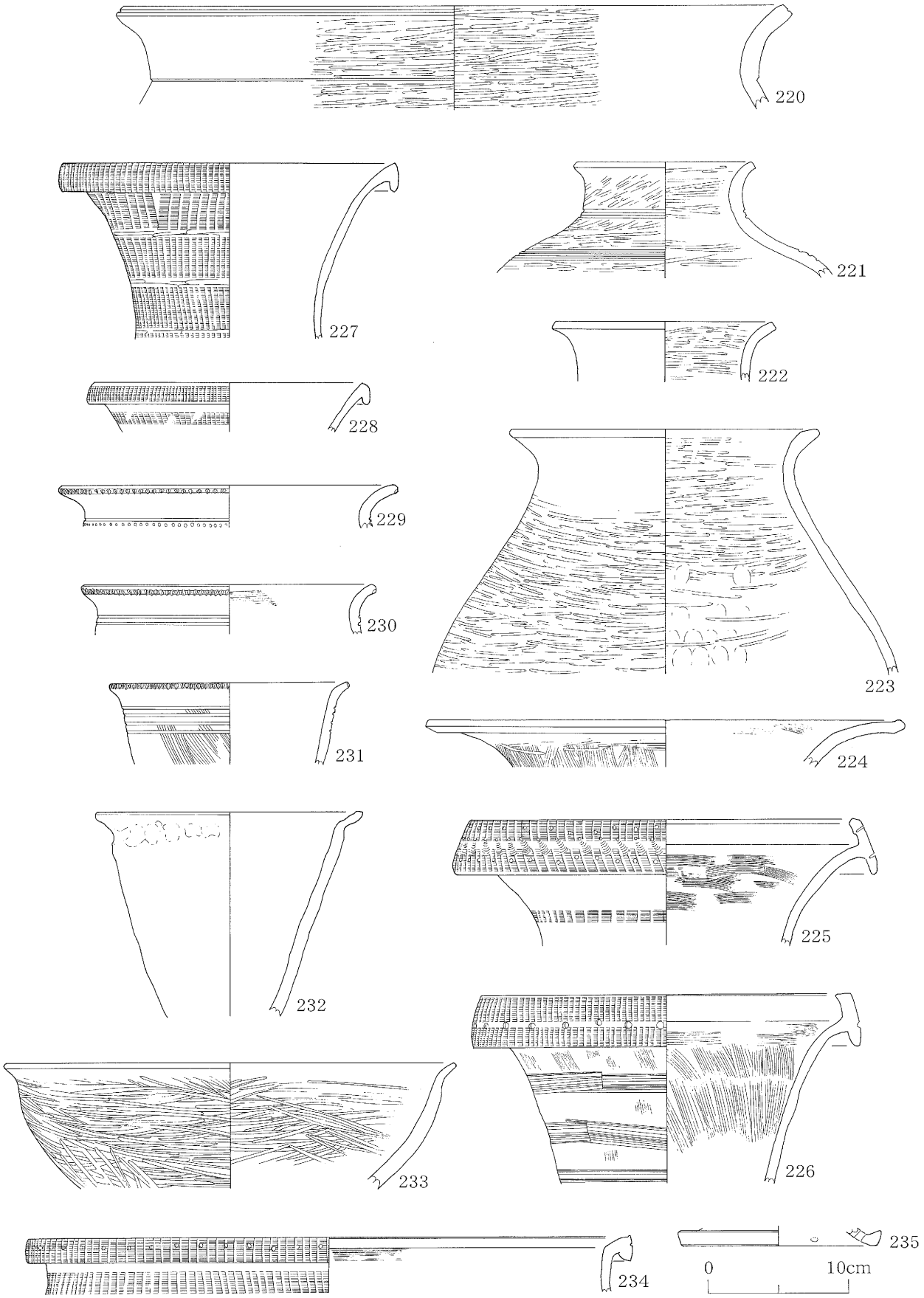
177～179は壷である。177は口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。178は口縁部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。179は口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。口縁端部に指による押圧を施す。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。177はⅠ様式、178・179はⅡ様式。生駒西麓産。

180は甕である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はハケメ調整する。Ⅱ様式。非河内産。

溝106（第56図220～235）

壷・甕・鉢・高杯の器種がある。

220～228は壷である。220は頸部が大きな筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。口縁端部にヘラ描沈線文、頸部と体部の境に削り出しの段を施す。内外面はヘラミガキ調整する。221・222は体部が大きく張り、口頸部が短く外反する。口縁端部はやや面を持つ。頸部と体部の境や体部にヘラ描沈線文を施す。221は体部内外面をヘラミガキ調整する。222は外面をナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。223は体部の張りが大きく、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキ調整する。224は口縁部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。225・226は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部に櫛描文様と円形刺突文を施す。内外面はハケメ調整する。225の外面は調整法が不明である。227・228は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部と頸部に櫛描簾状文を施す。文様帯間は研磨する。頸部内面はナデ調整する。220～222はⅠ様式、223・224はⅡ様式、225～228はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。



第56図　第58次溝106出土土器実測図

229～232は甕である。229～231は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面にヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。229は沈線文の下にさらに円形刺突文を加える。体部内外面はハケメ調整やナデ調整する。232は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。229～231はⅠ様式、232はⅡ様式。生駒西麓産。

233・234は鉢である。233は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキ調整する。234は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部と体部に櫛描簾状文を施す。口縁端部には円形刺突文を加える。内外面はナデ調整する。233はⅡ様式、234はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

235は高杯の脚部である。裾部を上方へ拡張する。裾部に小円孔を穿つ。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑10（第57図236）

236は甕である。口縁部が強く外反し、口縁端部は下方へ拡張する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑11（第57図237～242）

壷・高杯・鉢の器種がある。

237～239は壷である。237は頸部が筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。口縁端部に刻み目を施す。頸部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。238・239は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部と頸部に櫛描文様を施す。239は口縁部内面に円形浮文を貼り付ける。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

240・241は高杯の脚部である。裾部が急に立ち上がり、裾端部が面を持つ。調整法は不明である。中期。240は非河内産、241は生駒西麓産。

242は鉢である。体部は内傾する。口縁端部は面を持つ。口縁端部と体部に櫛描文様を施す。口縁端部には円形浮文を加える。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑12（第57図247～249）

壷・甕・鉢の器種がある。

247は壷である。口縁部が短く外反し、口縁端部が丸く終わる。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

248は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

249は鉢である。体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。体部に櫛描文様を施す。内外面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑13（第57図246）

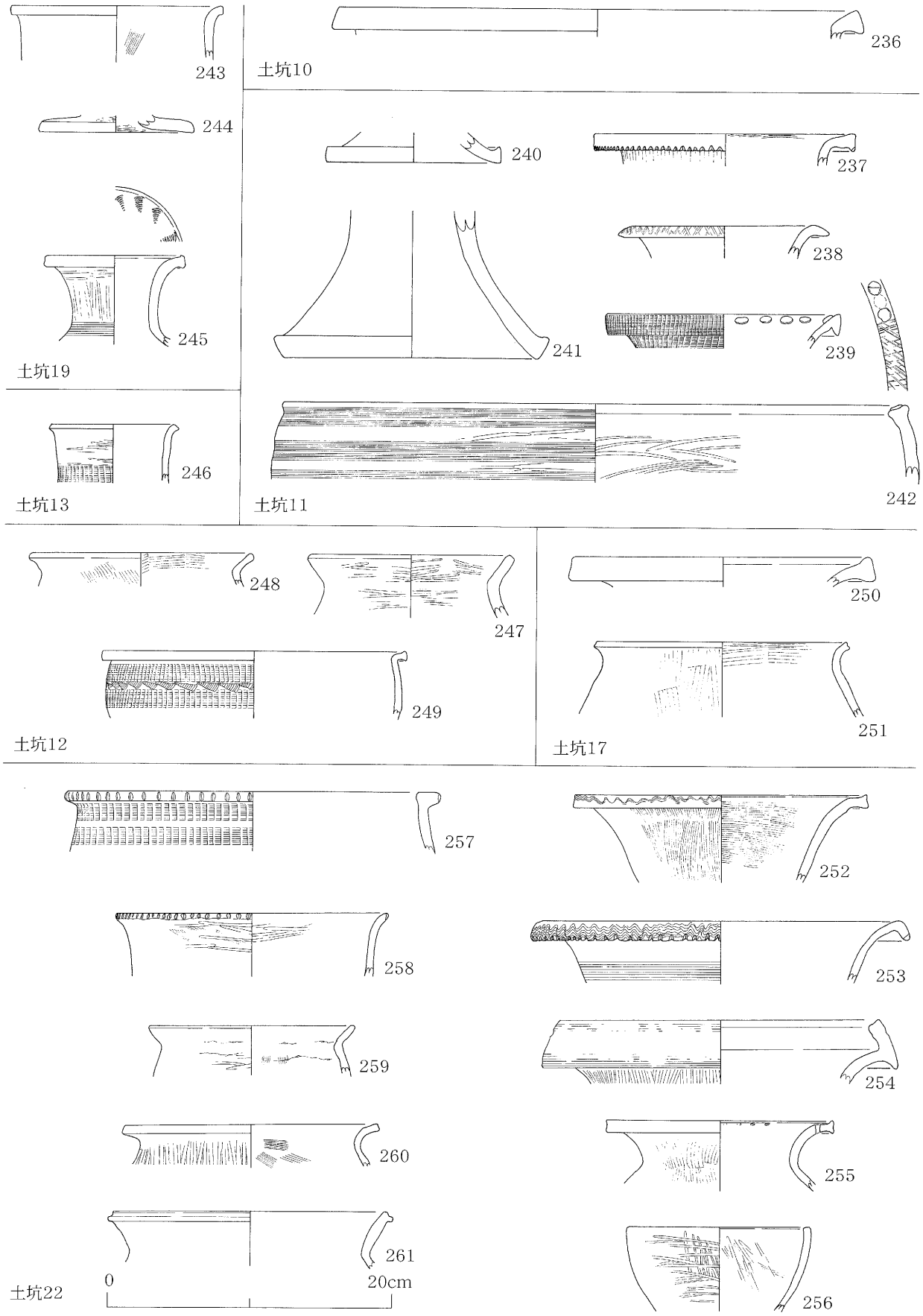
246は壷である。頸部が上方へ伸び、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は面を持つ。頸部外面に櫛描簾状文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑17（第57図250・251）

壷・甕の器種がある。

250は壷である。口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。調整法は不明である。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

251は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様



第57図　第58次土坑10～13・17・19・22出土土器実測図

式。生駒西麓産。

土坑19（第57図243～245）

甕・高杯・壷の器種がある。

243は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が短く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面はナデ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

244は高杯の脚部である。裾部が緩く立ち上がり、裾端部がやや丸く終わる。裾部内面にリング状の煤が付着しており、甕蓋に転用したと考えられる。中期。生駒西麓産。

245は壷である。口頸部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。頸部と口縁部内面に櫛描文様を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑21（第58図262）

262は甕である。口縁部が緩く外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部内面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

土坑22（第57図252～261）

壷・鉢・甕の器種がある。

252～255は壷である。252は口頸部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部に櫛描波状文を施す。内外面はハケメ調整する。253は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描波状文と刻み目、頸部に直線文を施す。内外面はナデ調整する。254は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部に櫛描文様を施すが風化が著しい。255は口頸部が短く外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。口縁部に２孔１対の小円孔を穿つ。頸部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。254は非河内産。他は生駒西麓産。

256・257は鉢である。256は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面はヘラミガキ調整する。257は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。口縁端部に刻み目、体部に櫛描簾状文を施す。内外面はナデ調整する。256はⅡ様式、257はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

258～261は甕である。258・259は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。258は体部外面をハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はヘラミガキ調整する。口縁端部に刻み目を施す。259は体部外面をヘラミガキ調整、内面をハケメ調整する。260・261は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。260は体部内外面をハケメ調整する。258・259はⅡ様式、260・261はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑25（第58図263・264）

壷・鉢の器種がある。

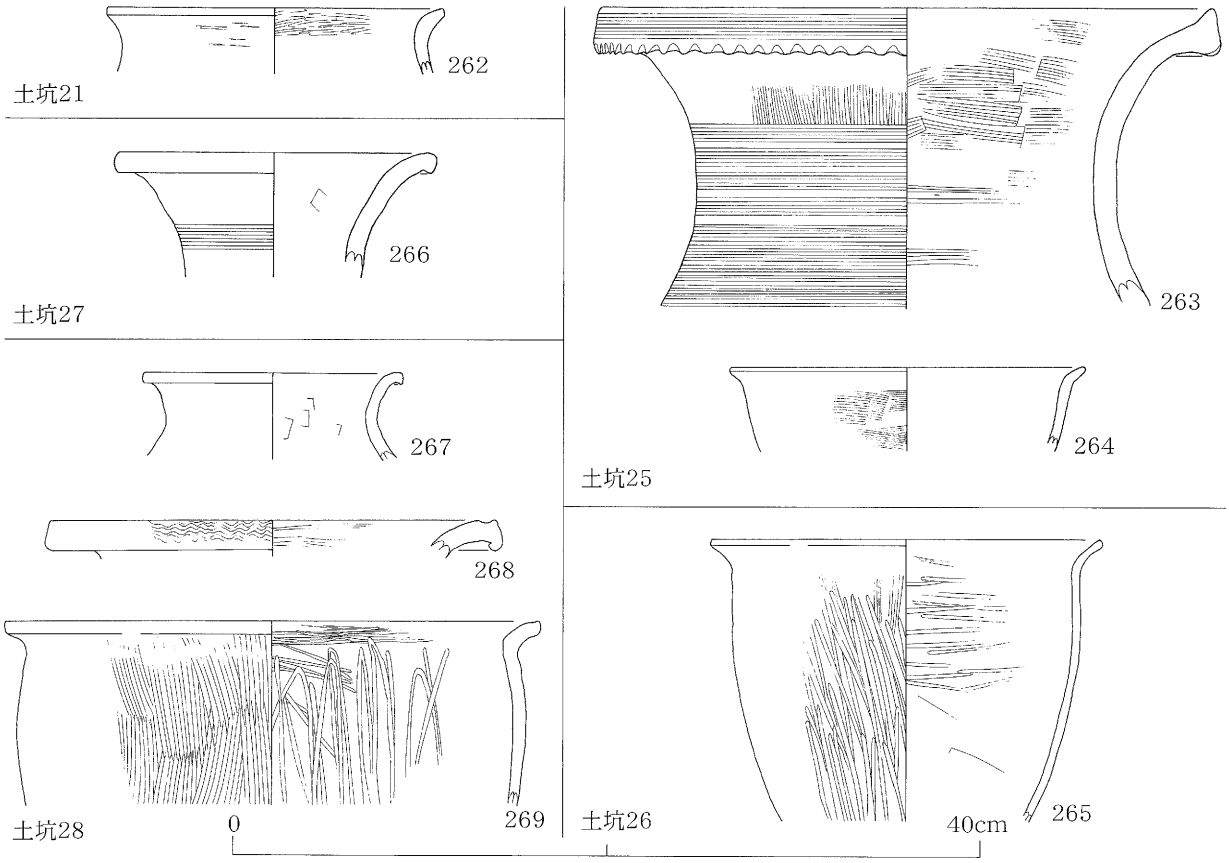
263は壷である。頸部が筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。口縁端部に櫛描直線文と刻み目、頸部に直線文を施す。内外面はハケメ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

264は鉢である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

土坑26（第58図265）

265は甕である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面は上半をヘラミガキ調整、下半をナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

土坑27（第58図266）



第58図　第58次土坑21・25～28出土土器実測図

266は壷である。口頸部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。頸部に櫛描直線文を施す。内外面はナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

土坑28（第58図267～269）

壷・甕の器種がある。

267・268は壷である267は頸部が筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。268は口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。口縁端部に櫛描波状文を施す。267はⅡ様式、268はⅢ～Ⅳ様式。267は生駒西麓産、268は非河内産。

269は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

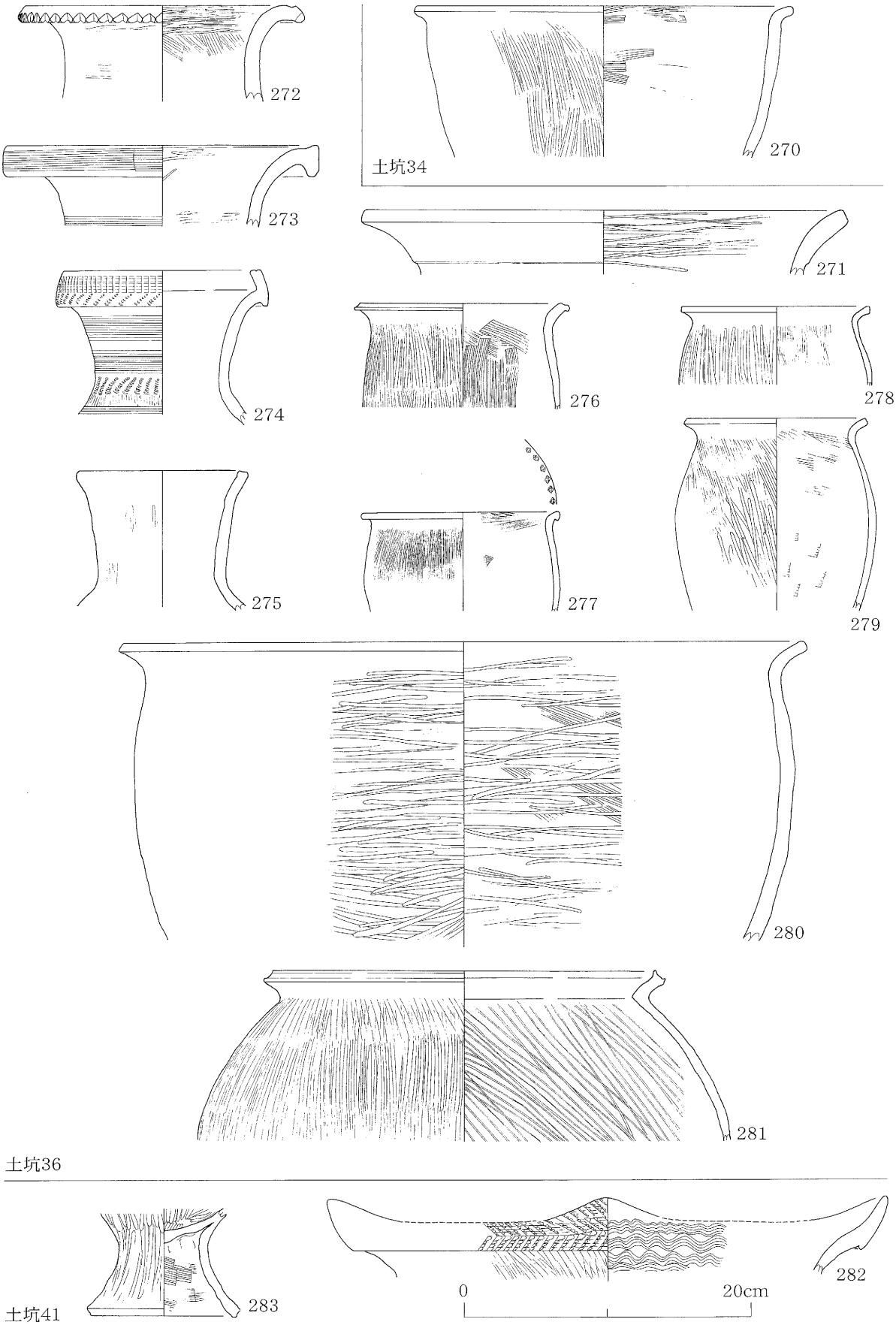
土坑34（第59図270）

270は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

土坑36（第59図271～281）

壷・甕の器種がある。

271～275は壷である。271は口縁部が短く外反し、口縁端部はやや面を持つ。頸部と体部の境に削り出しの段がつく。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。272・273は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。272は口縁端部に刻み目を施す。頸部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はハケメ調整する。273は口縁端部と頸部に櫛描直線文を施す。外面の調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。274は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部と頸部に櫛描文様を施す。調整法は不明である。275



第59図　第58次土坑34・36・41出土土器実測図

は口頸部が直線的に上方へ伸び、口縁端部が面を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。271はⅠ様式、272～275はⅢ～Ⅳ様式。272・273は生駒西麓産、他は非河内産。

276～281は甕である。276～278・280は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものがある。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。279は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は外側へ巻き込む。口縁端部に刻み目を施す。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。281は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面はハケメ調整する。276～280はⅡ様式、281はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑41（第59図282・283）

甕・脚部の器種がある。

282は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わり、波状口縁を呈する。体部外面はハケメ調整する。口縁部外面は櫛描列点文、内面は波状文を施す。所謂、近江・山城系の甕である。Ⅱ様式。非河内産。

283は脚部である。器種は不明である。裾部が急に立ち上がり、裾端部が面を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。中期。生駒西麓産。

土坑42（第61図310～313）

甕・壷・細頸壷・鉢の器種がある。

310は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。体部内面に接合痕が残る。Ⅱ様式。生駒西麓産。

311は壷である。頸部が筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。口縁端部に櫛描簾状文と刻み目、頸部に直線文を施す。頸部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

312は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部がやや面を持つ。口頸部外面に櫛描簾状文と直線文を施す。文様帯間は研磨する。内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

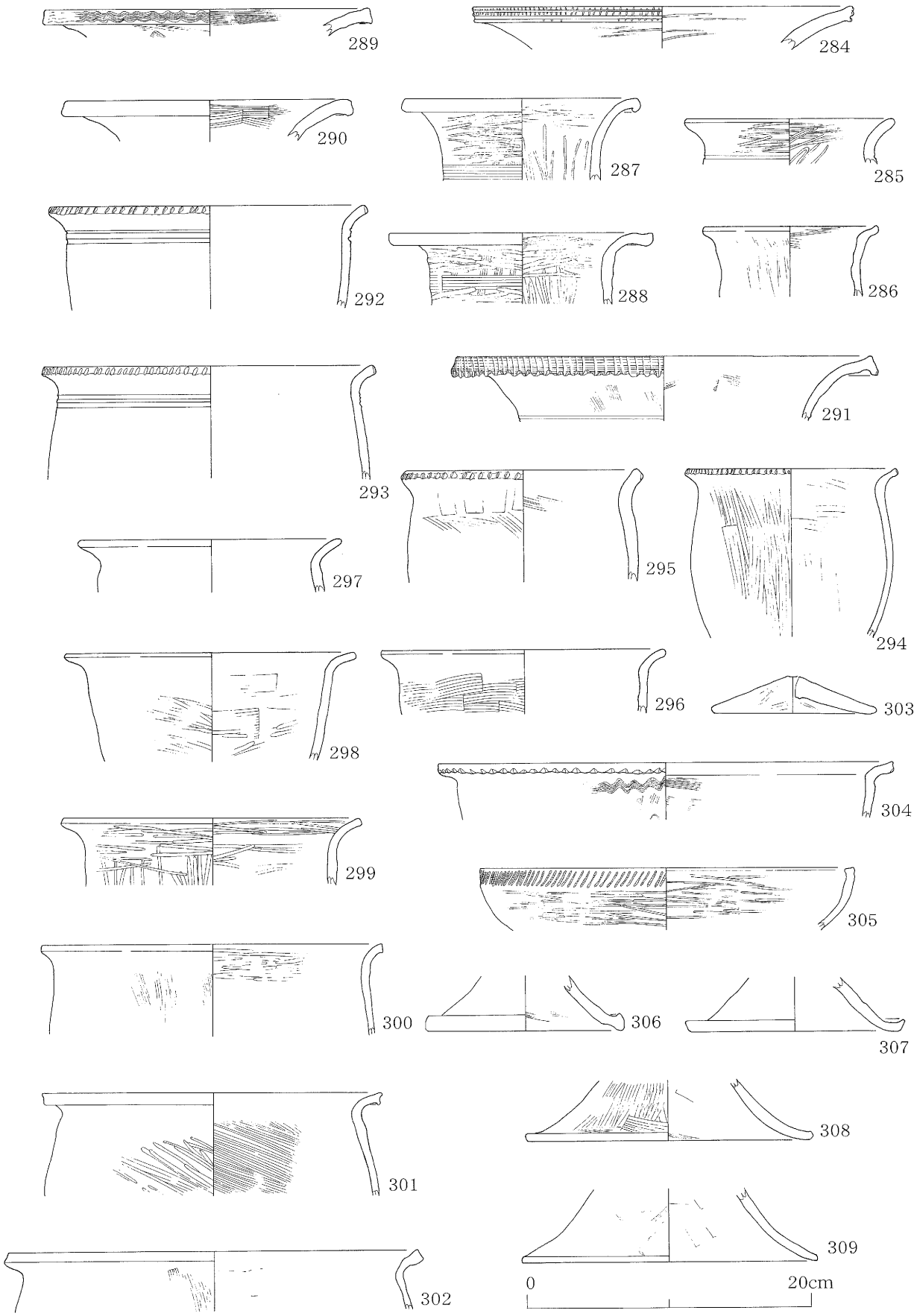
313は鉢である。体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。内外面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑43（第60図284～309）

壷・甕・壷蓋・鉢・高杯・甕蓋の器種がある。

284～291は壷である284は口縁部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部に２条のヘラ描沈線文と刻み目を施す。285は口頸部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。頸部と体部の境にヘラ描沈線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。286～288は口頸部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。287・288は頸部に櫛描直線文を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。289・290は口頸部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。289は口縁端部に櫛描波状文を施す。内外面はハケメ調整する。290は外面をナデ調整、内面をハケメ調整する。291は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描簾状文と刻み目、頸部に直線文を施す。内外面はハケメの後、ナデ調整する。284・285はⅠ様式、286～288はⅡ様式、289～291はⅢ～Ⅳ様式。286は非河内産、他は生駒西麓産。

292～302は甕である。292・293は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面にヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。体部内外面はナデ調整する。294～300は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものが



第60図　第58次土坑43出土土器実測図

ある。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。294・295は口縁端部に刻み目を施す。301・302は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。301は体部外面をヘラミガキ調整、内面をハケメ調整する。302は体部外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。292・293はⅠ様式、294～300はⅡ様式、301・302はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

303は壷蓋である。体部の立ち上がりは緩い。口縁端部は丸く終わる。中央に小円孔を１孔穿つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅰ様式。生駒西麓産。

304は鉢である。体部の張りが少なく、口縁部が外折する。口縁端部は面を持つ。口縁端部に刻み目、体部に櫛描波状文を施す。内外面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

305～307は高杯である。305は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。外面に櫛描列点文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。306・307は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部をやや上方へ拡張する。調整法は不明である。Ⅲ～Ⅳ様式。305は生駒西麓産、他は非河内産。

308・309は甕蓋である。体部が大きく立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。308は外面をハケメ調整、内面はナデ調整する。309は内外面をハケメの後、ナデ調整する。口縁部内面にリング状の煤が付着する。中期。308は非河内産、309は生駒西麓産。

土坑44（第61図314～321）

壷・甕・鉢・高杯の器種がある。

314・315は壷である。314は体部がやや張り、口頸部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。頸部と体部の境に２条のヘラ描沈線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。315は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。314はⅠ様式、315はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

316・317は甕である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。316は体部外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。317は体部外面をハケメの後、ナデ調整する。内面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

318は鉢である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はハケメ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

319～321は高杯である。319は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。外面に櫛描列点文を施す。文様帯間は研磨する。内外面はヘラミガキ調整する。320は裾端部を上方へ拡張する。小円孔が２列残る。内外面はナデ調整する。321は裾部が緩く立ち上がり、裾端部が面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。319・321はⅢ～Ⅳ様式。320は中期。生駒西麓産。

土坑45（第61図322）

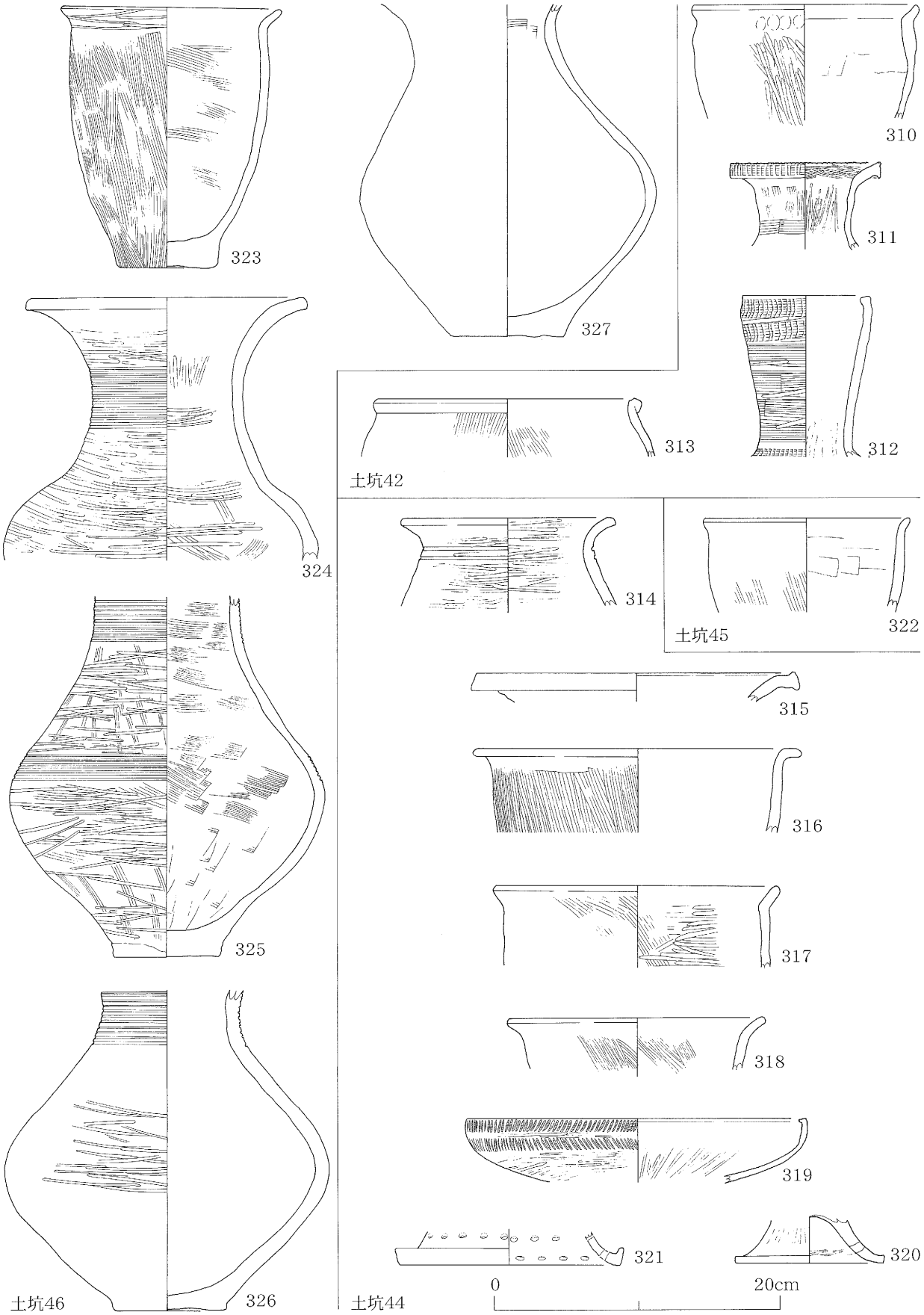
322は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

土坑46（第61図323～327）

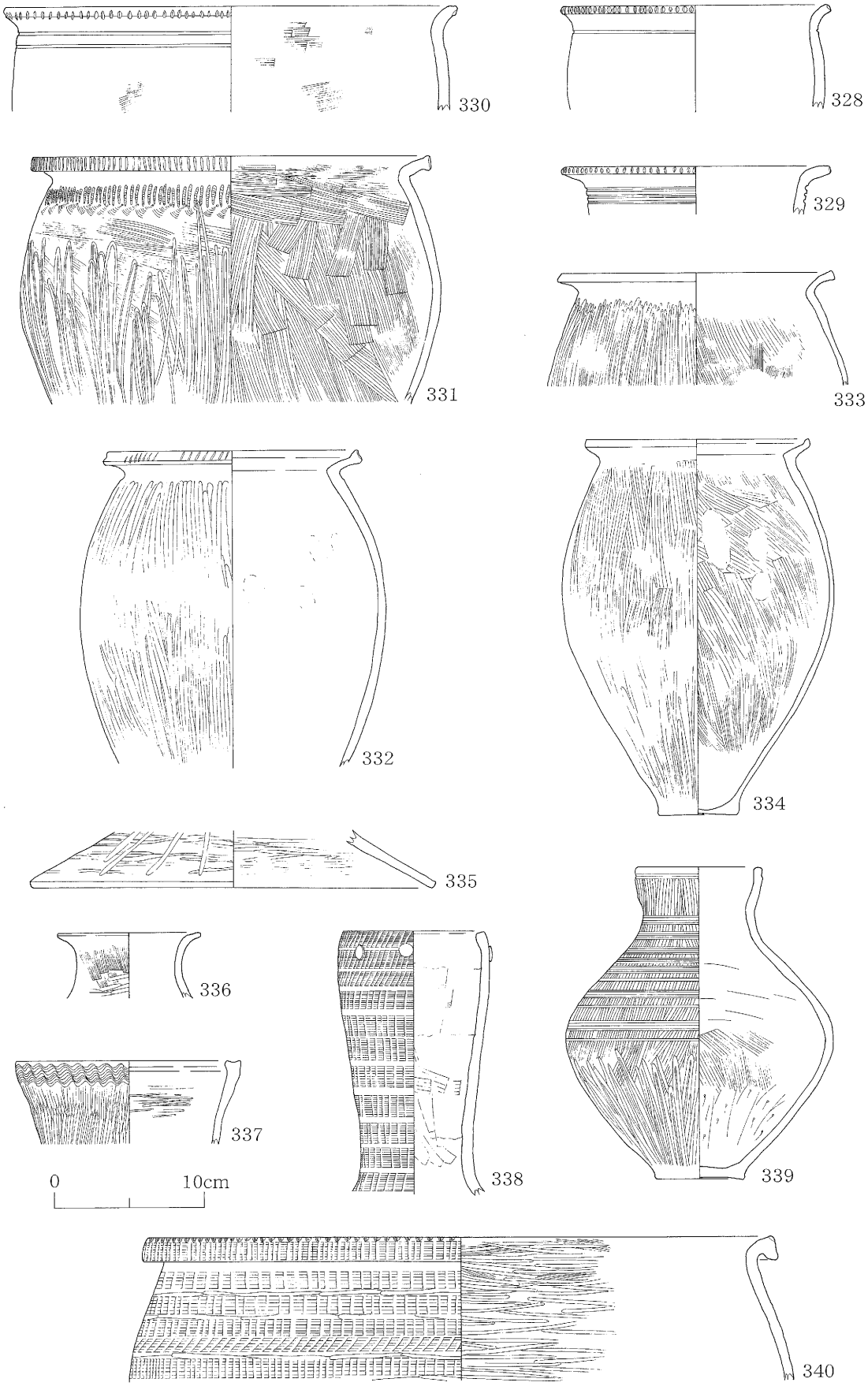
甕・壷の器種がある。

323は甕である。底部は平底である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。口縁部外面はヘラミガキ調整する。共伴遺物からみてⅠ様式の可能性が高い。生駒西麓産。

324～327は壷である。324は体部が大きく張り、頸部が長く伸びる。口縁部は大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。頸部に13条のヘラ描沈線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。325～327は底部が平底を呈し、体部よりやや下で大きく張る。325・326は頸部と体部にヘラ描沈線文を施す。325は外面をヘラミガキ調整、内面をハケメ調整する。326は外面をヘラミガキ調整する。内面は調



第61図　第58次土坑42・44～46出土土器実測図



第62図　第58次土坑49出土土器実測図

整法が不明である。327は文様と調整法は不明である。Ⅰ様式。325は生駒西麓産、他は非河内産。

土坑49（第62・63図328～343）

甕・甕蓋・壷・細頸壷・水差形土器・鉢の器種がある。

328～334は甕である。328～330は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面にヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。体部内外面はナデ調整する。331・332は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。331は口縁端部に刻み目、体部に櫛描列点文と扇形文を施す。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。332は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。333・334は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。333は口縁端部に刻み目を施す。体部外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。334は体部外面の上半をハケメ調整、下半をヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。328～330はⅠ様式、331～334はⅢ～Ⅳ様式。329・333は非河内産、他は生駒西麓産。

335は甕蓋である。体部が大きく立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面はヘラミガキ調整する。中期。生駒西麓産。

336・337は壷である。336は頸部が筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。337は口頸部が上方へ伸び、口縁端部が面を持つ。口縁部に櫛描波状文を施す。外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。336はⅡ様式、337はⅢ～Ⅳ様式。非河内産。

338は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部がやや面を持つ。口頸部外面に櫛描簾状文を施す。口縁部には円形浮文を貼り付ける。内面はハケメの後、ナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

339は水差形土器である。底部は平底を呈する。体部の張りは大きい。口頸部は外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。口頸部外面に凹線文と櫛描直線文を施す。外面は上半をハケメ調整、下半をヘラミガキ調整する。内面は下半をヘラケズリ調整、中位をハケメ調整、上半をナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

340～343は鉢である。340は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部と体部に櫛描文様を施す。口縁端部には刻み目を加える。内面はヘラミガキ調整する。341・342は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。341は体部内外面をヘラミガキ調整する。342は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。343は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。口縁端部に刻み目、体部に櫛描簾状文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。341・342はⅡ様式、340・343はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

土坑51（第63図344・345）

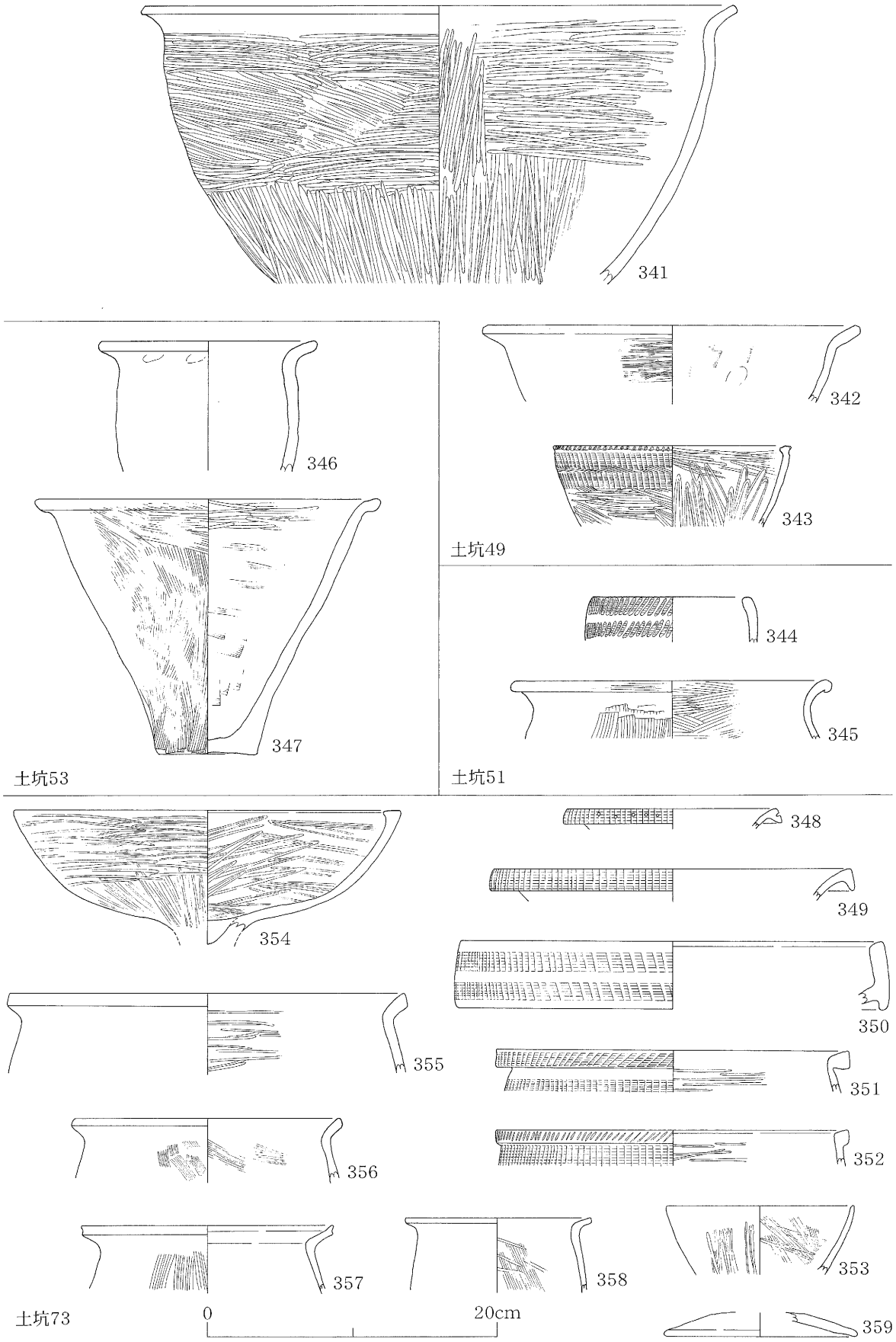
細頸壷・甕の器種がある。

344は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部が丸く終わる。口頸部外面に櫛描列点文を施す。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

345は甕である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は外側へ巻き込む。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。Ⅱ様式。非河内産。

土坑53（第63図346・347）

346・347は甕である。底部は平底である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。346は体部内外面をナデ調整する。347は体部外面をハケメ調整する。内面はハケメ



第63図　第58次土坑49・51・53・73出土土器実測図

の後、ナデ調整する。口縁部内面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。346は非河内産、347は生駒西麓産。
土坑73（第63図348～359）

壷・鉢・高杯・甕・壷蓋の器種がある。

348～350は壷である。348・349は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描簾状文を施す。348は円形刺突文を加える。350は口縁端部を上下へ拡張し、幅広の面を持つ。口縁端部に櫛描簾状文を施す。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

351～353は鉢である。351は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部と体部に櫛描文様を施す。体部内面はヘラミガキ調整する。352は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。口縁端部と体部に櫛描文様を施す。内面はヘラミガキ調整する。353は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。351～353はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

354は高杯である。浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

355～358は甕である。355～357は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つものと丸く終わるものがある。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整する。358は体部の張りがやや大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。355～357はⅡ様式、358はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

359は壷蓋である。体部はゆるく内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。中期。非河内産。

ピット53（第64図362）

362は壷である。体部の張りが大きく、口頸部が大きく外反する。口縁端部は丸く終わる。外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

ピット61（第64図363）

363は壷である。口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描波状文と刻み目を施す。内外面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

ピット87（第64図364・365）

壷・細頸壷の器種がある。

364は壷である。口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描波状文と刻み目を施す。外面はナデ調整、内面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

365は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部がやや面を持つ。口頸部外面に櫛描簾状文と波状文を施す。外面の調整法は不明である。内面はハケメ調整する。鉢の可能性もある。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

ピット120（第64図361）

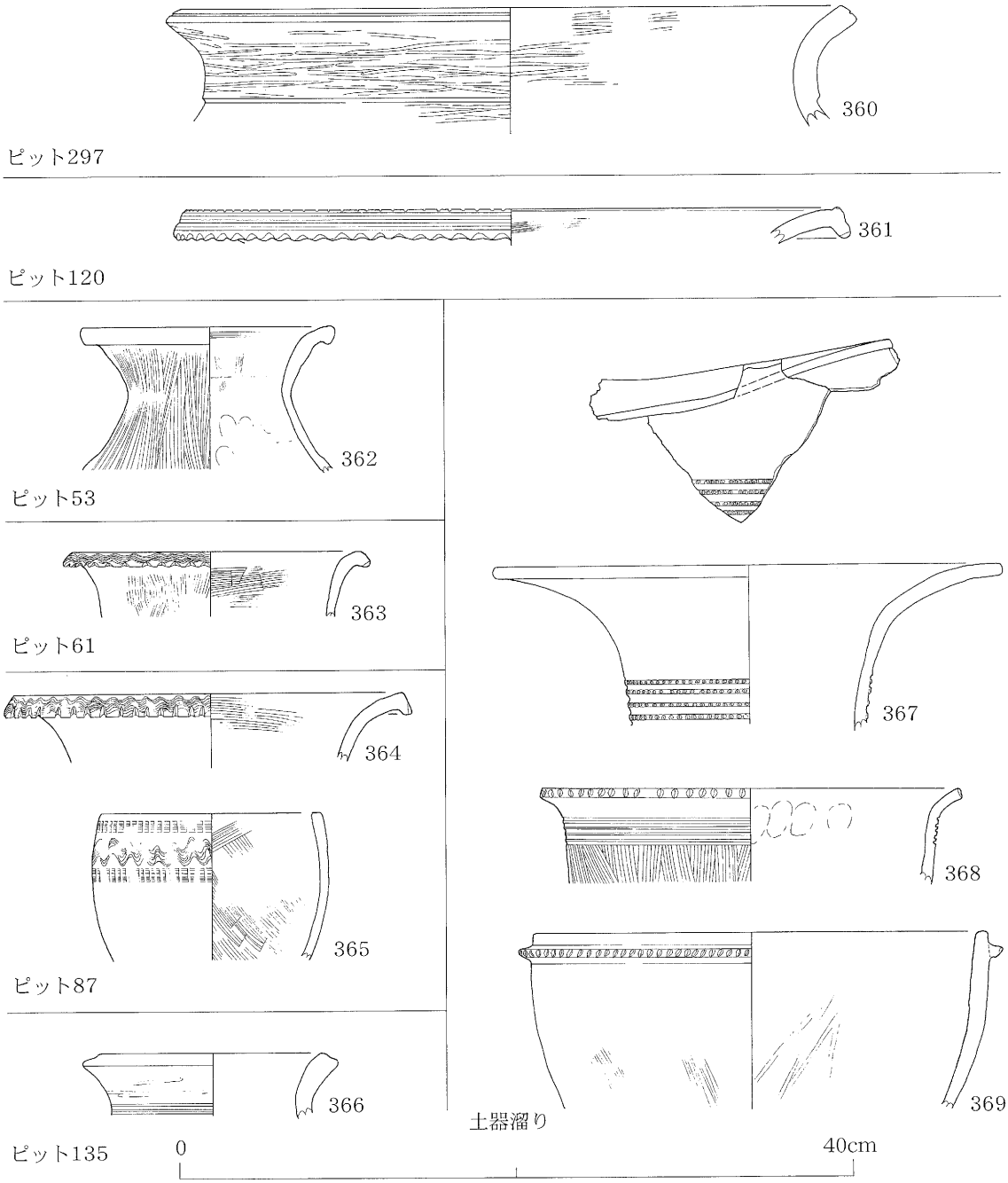
361は壷である。口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描直線文と刻み目を施す。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

ピット135（第64図366）

366は壷である。口縁部がゆるく外反し、口縁端部がやや面を持つ。頸部に櫛描直線文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅱ様式。非河内産。

ピット297（第64図360）

360は壷である。頸部が大きな筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。口縁端



第64図　第58次ピット53・61・87・120・135・297、土器溜り出土土器実測図

部にヘラ描沈線文、頸部と体部の境に削り出しの段を施す。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅰ様式。生駒西麓産。

土器溜り（第64図367～369）

壷・甕・鉢の器種がある。

367は壷である。頸部が筒状を呈し、口縁部が大きく外反する。口縁端部が丸く終わる。頸部に凸帯を貼り付け、刻み目を施す。高熱を受けており、やや変形する。器壁に鬆が入る。調整法は不明である。Ⅰ様式。生駒西麓産。

368は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。体部外面に５条のヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。Ⅰ様式。非河内産。

369は鉢である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。口縁部に１条の刻み目凸帯を貼り付ける。体部外面はハケメの後、ナデ調整する。内面はヘラミガキ調整する。Ⅰ様式。生駒西麓産。

遺物包含層出土土器

第14層（第65図370～390）

高杯・細頸壷・壷・甕の器種がある。

370～374は高杯である。370・371は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。371は外面に櫛描簾状文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。372・373は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部はゆるい段を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。374は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部をやや上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。373は非河内産、他は生駒西麓産。

375は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部がやや面を持つ。口縁端部に刻み目、口頸部外面に櫛描扇形状文と簾状文を施す。内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

376・380～390は壷である。376は口頸部が直線的に上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。内外面はナデ調整する。380・381は口頸部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。380は頸部に櫛描直線文を施す。内外面はナデ調整する。382～384は口頸部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整するものが多い。385～388は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描簾状文と刻み目を施すものが多い。388は無文である。389は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部に櫛描簾状文と円形刺突文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。390は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。頸部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。376は中期、380・381はⅡ様式、382～389はⅢ～Ⅳ様式、390はⅣ～Ⅴ様式。376・380～384は非河内産、他は生駒西麓産。

377～379は甕である。377・378は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。377は体部外面をナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。378の体部外面は調整法が不明、内面はナデ調整する。379は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキ調整する。377・378はⅢ～Ⅳ様式、379はⅡ様式。生駒西麓産。

第14ｂ層（第65図391・392）

391・392は甕である。391は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。392は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

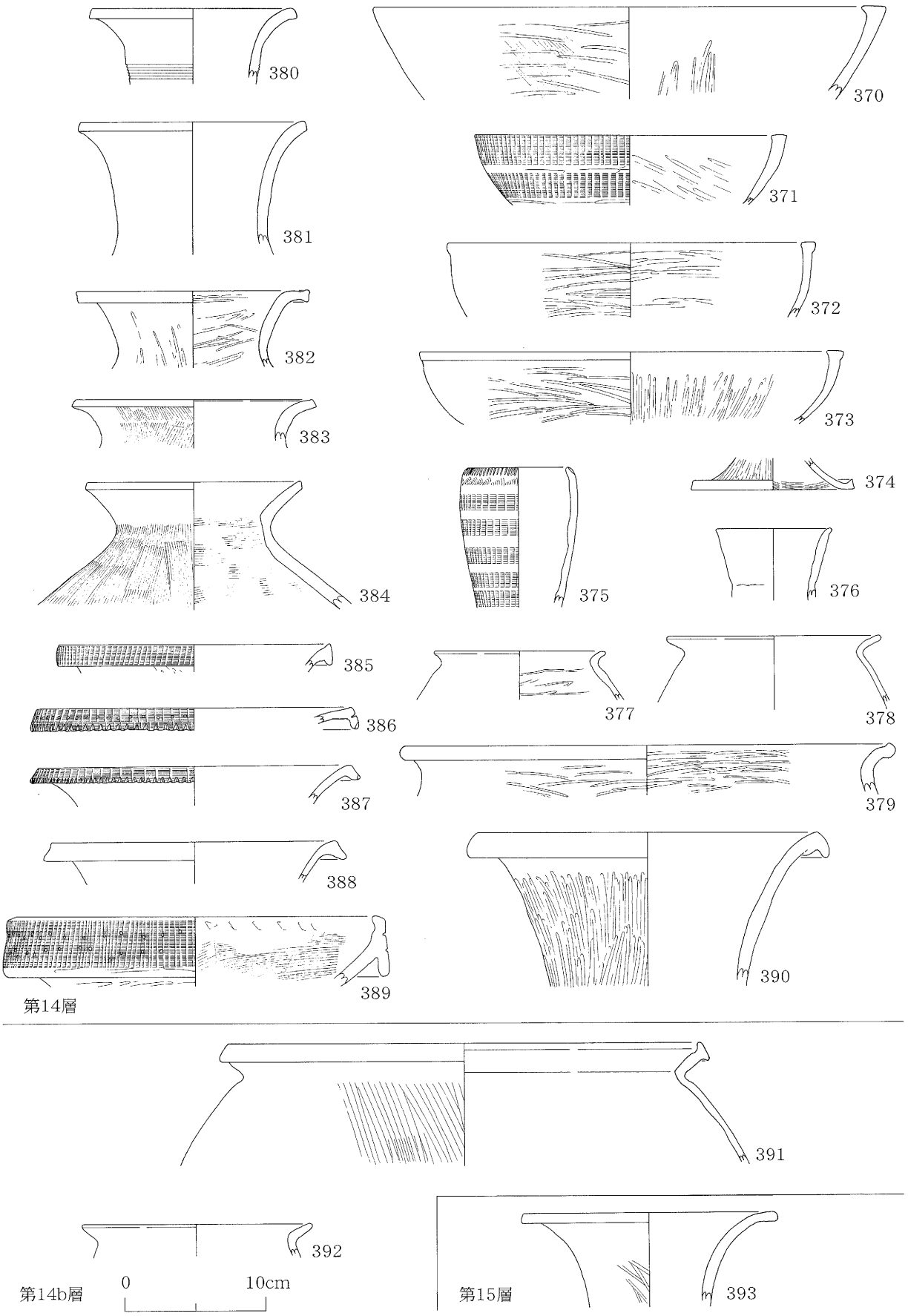
第15層（第65図393）

393は壷である。口頸部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

第16層（第66～73図394～590）

壷・細頸壷・水差形土器・無頸壷・壷蓋・甕蓋・高杯・鉢・甕の器種がある。

394～463は壷である。394～396は体部がやや張り、口頸部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。頸部と体部の境に１条のヘラ描沈線文を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。397は体部がやや張り、口頸部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。399は体部が大きく張り、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。398・



第65図　第58次第14・14b・15層出土土器実測図

400～414は口頸部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わるものとやや面を持つものがある。407～410・413は口縁端部に櫛描文様や刻み目を施す。410は頸部に櫛描直線文、口縁部内面に列点文を施す。内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整するものが多い。415・416は口頸部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。415は口縁端部に櫛描波状文を施す。内外面はヘラミガキ調整やナデ調整する。417・418は口縁部がゆるく外反し、口縁端部がやや面を持つ。調整法は不明である。419～440は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部や頸部に櫛描文様や刻み目などを施すものが多い。また、口縁部内面に文様を施すものもある。一部、無文のものもある。内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。441～450は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部や頸部に櫛描文様を施すものが多い。450は無文である。内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。451・452は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。451は口縁端部に櫛描波状文と刻み目を施す。452は無文である。453～458は口頸部が短く外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。457～458は口縁端部に櫛描波状文を施す。内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。459～461は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ大きく拡張する。459は口縁端部に３条の凹線文を施し、その上に２本で７列を単位とする棒状浮文を貼り付ける。また、口縁部内面に櫛描列点文による綾杉文を施す。460は口縁端部に櫛描波状文と刻み目を施す。461は無文である。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。462・463は口頸部が上方へ伸び、口縁端部が面を持つ。口縁部に櫛描文様と貼り付け凸帯を施す。凸帯には刻み目を加える。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。394～397はⅠ様式、398～414・417・418はⅡ様式、415・416・419～463はⅢ～Ⅳ様式。399・401・405・407・409・411・414・433・437・439・451・454・462～466は非河内産、他は生駒西麓産。

464～467は細頸壷である。464～466は口頸部が内湾し、口縁端部がやや面を持つ。口頸部外面に櫛描簾状文や列点文を施す。464は更に円形乳文を貼り付ける。文様帯間は研磨する。内面はナデ調整する。467は口頸部が内湾し、口縁端部が丸く終わる。口縁部に刻み目、口頸部外面に櫛描直線文を施す。文様帯間は研磨する。内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

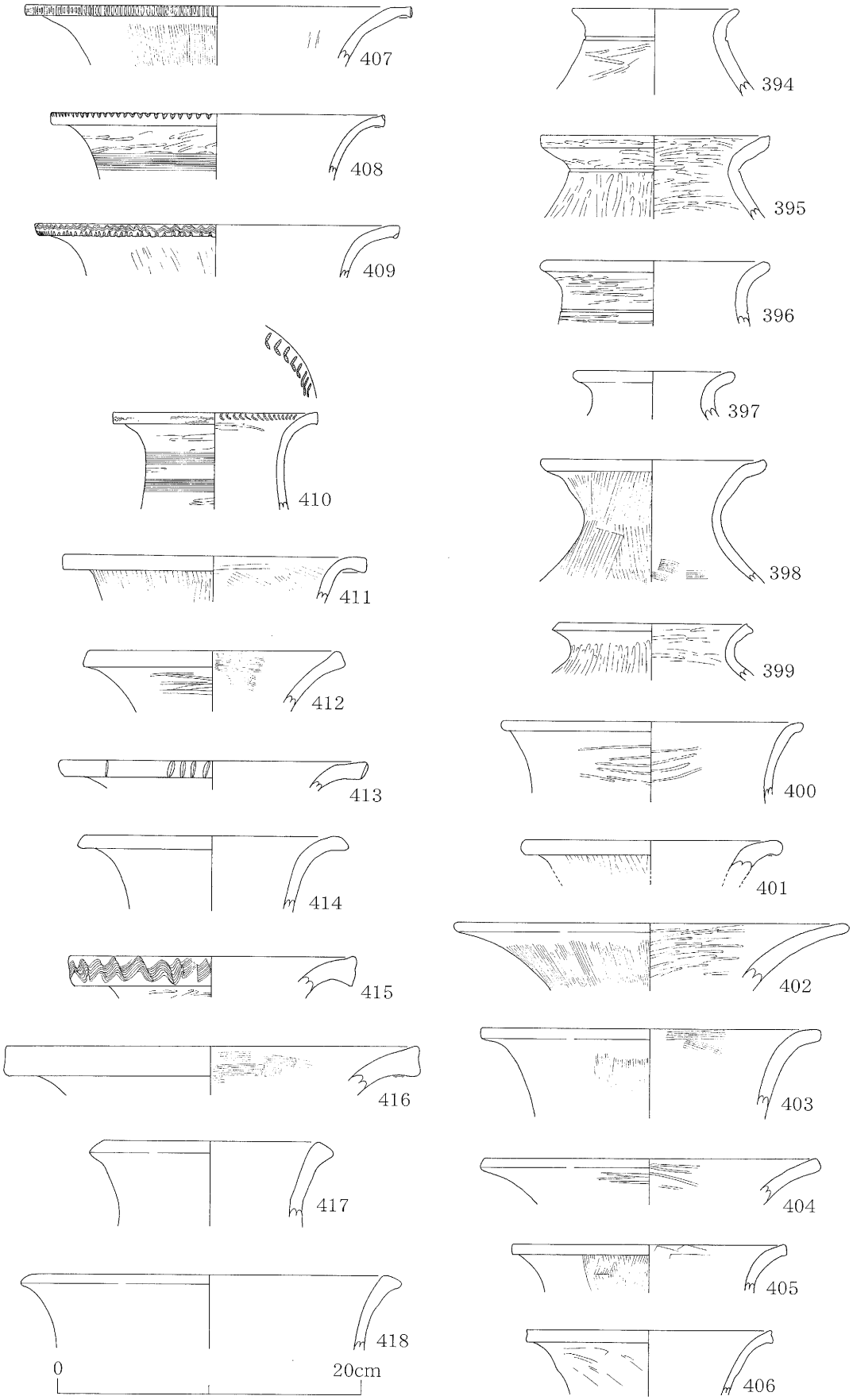
468・469は水差形土器である。口頸部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。468は口頸部外面に凹線文と櫛描文様を施す。内外面はナデ調整する。469は口縁部に半円形の切り込みを入れる。口頸部外面に櫛描簾状文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。468は非河内産、469は生駒西麓産。

470～474は無頸壷である。470・471は体部が大きく内傾する。口縁端部は丸く終わる。470は口縁部に２孔１対の小円孔を穿つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。471は内外面をヘラミガキ調整する。472～474は体部が大きく内傾する。口縁端部は段を持つ。472・473は口縁端部に刻み目、体部に櫛描簾状文を施す。472は内面をナデ調整、473はハケメ調整する。473は口縁部に小円孔を穿つ。474は無文である。体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。470・471はⅡ様式、472～474はⅢ～Ⅳ様式。470は非河内産、他は生駒西麓産。

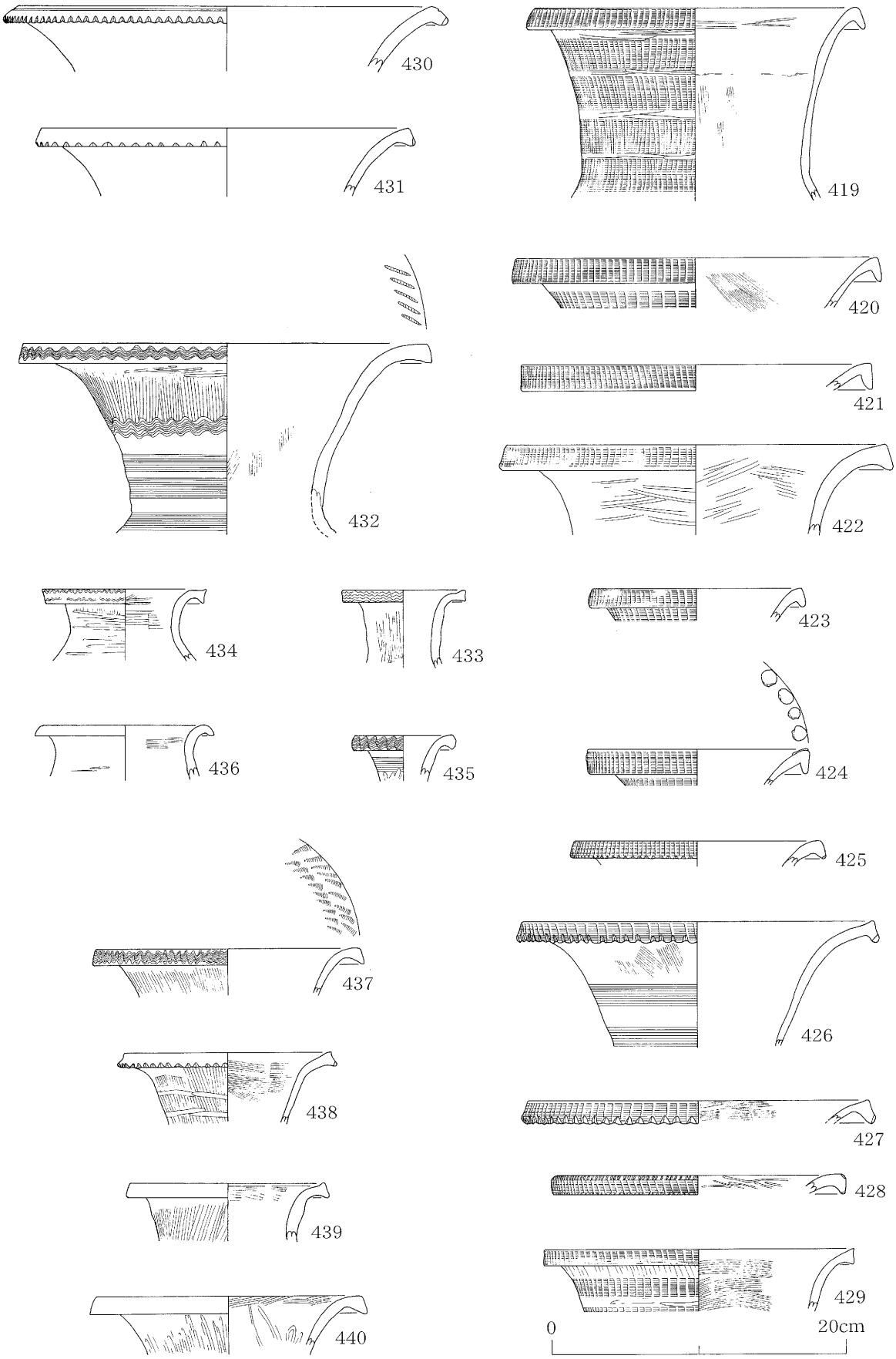
475～478は壷蓋である。475～477は体部の立ち上がりがゆるく、中央に円形の摘みが付く。口縁端部は面を持つ。口縁部に２孔１対の小円孔を穿つ。内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。Ⅲ～Ⅳ様式。475・478は生駒西麓産、他は非河内産。

479～481は甕蓋である。体部が大きく立ち上がる。479・480は中央に円形の摘みが付く。481は口縁端部が丸く終わる。内外面はハケメ調整するものが多い。中期。479は非河内産、他は生駒西麓産。

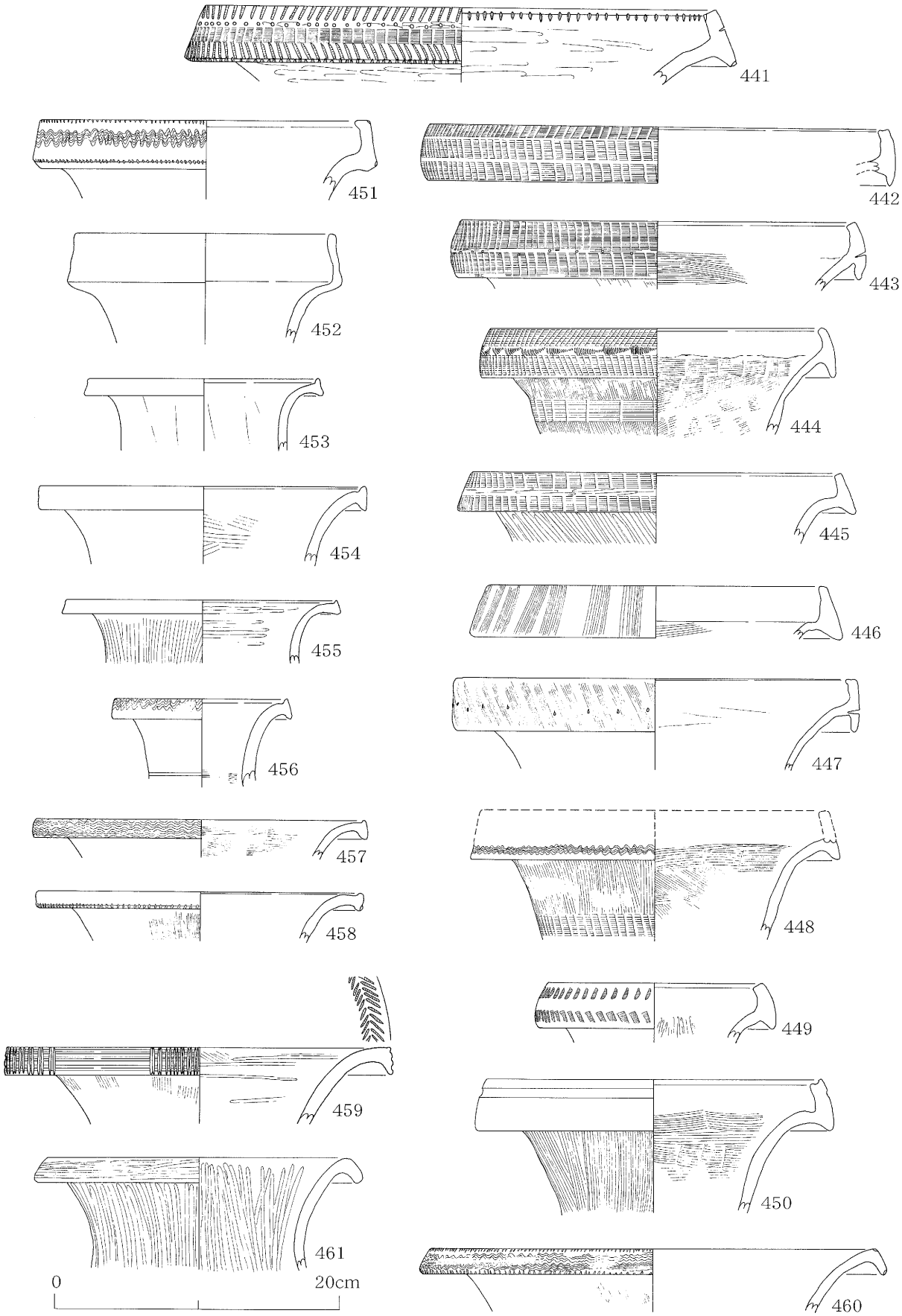
482～516は高杯である。482～487は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部が水平方向に伸びる。口



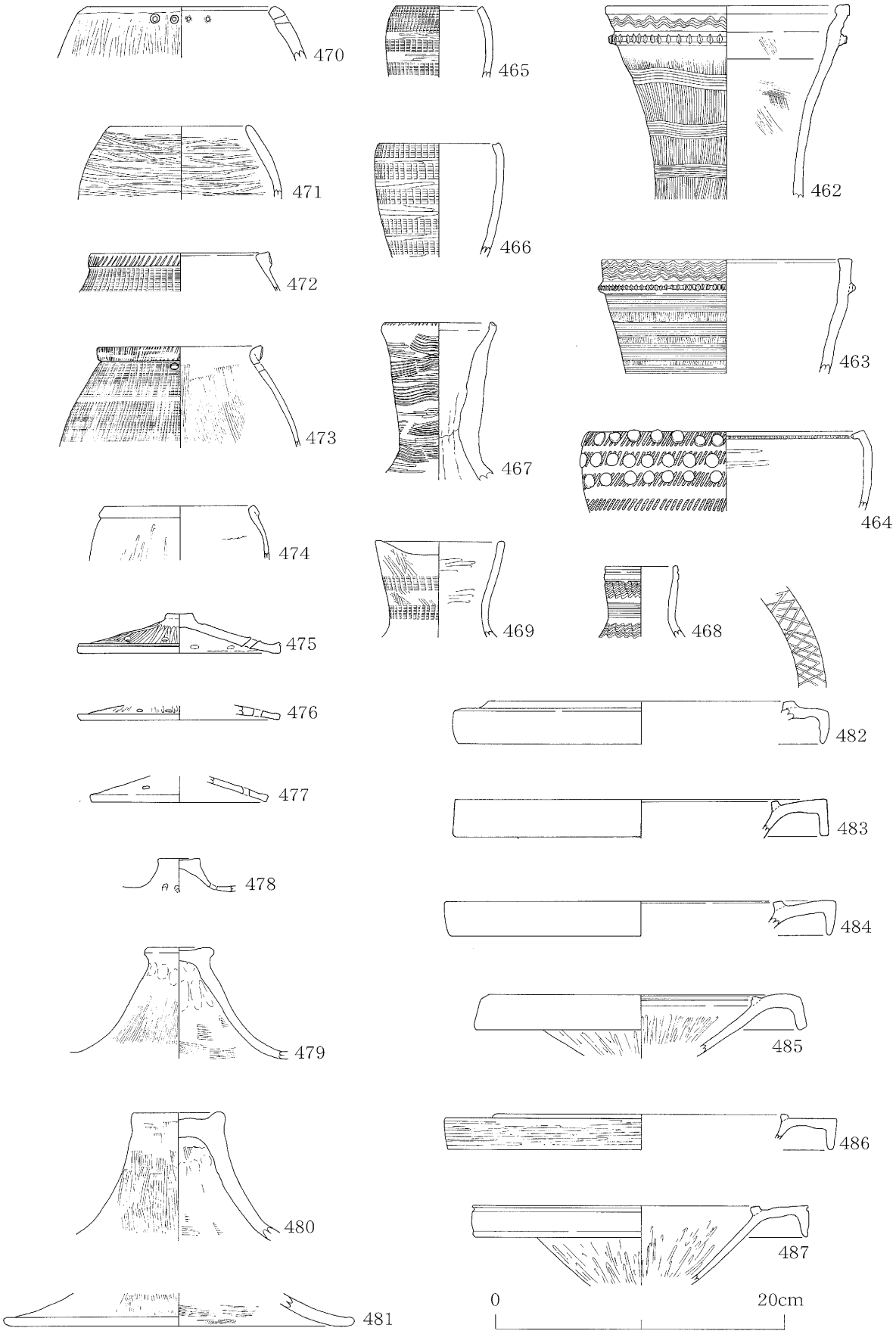
第66図　第58次第16層出土土器実測図



第67図　第58次第16層出土土器実測図



第68図　第58次第16層出土土器実測図

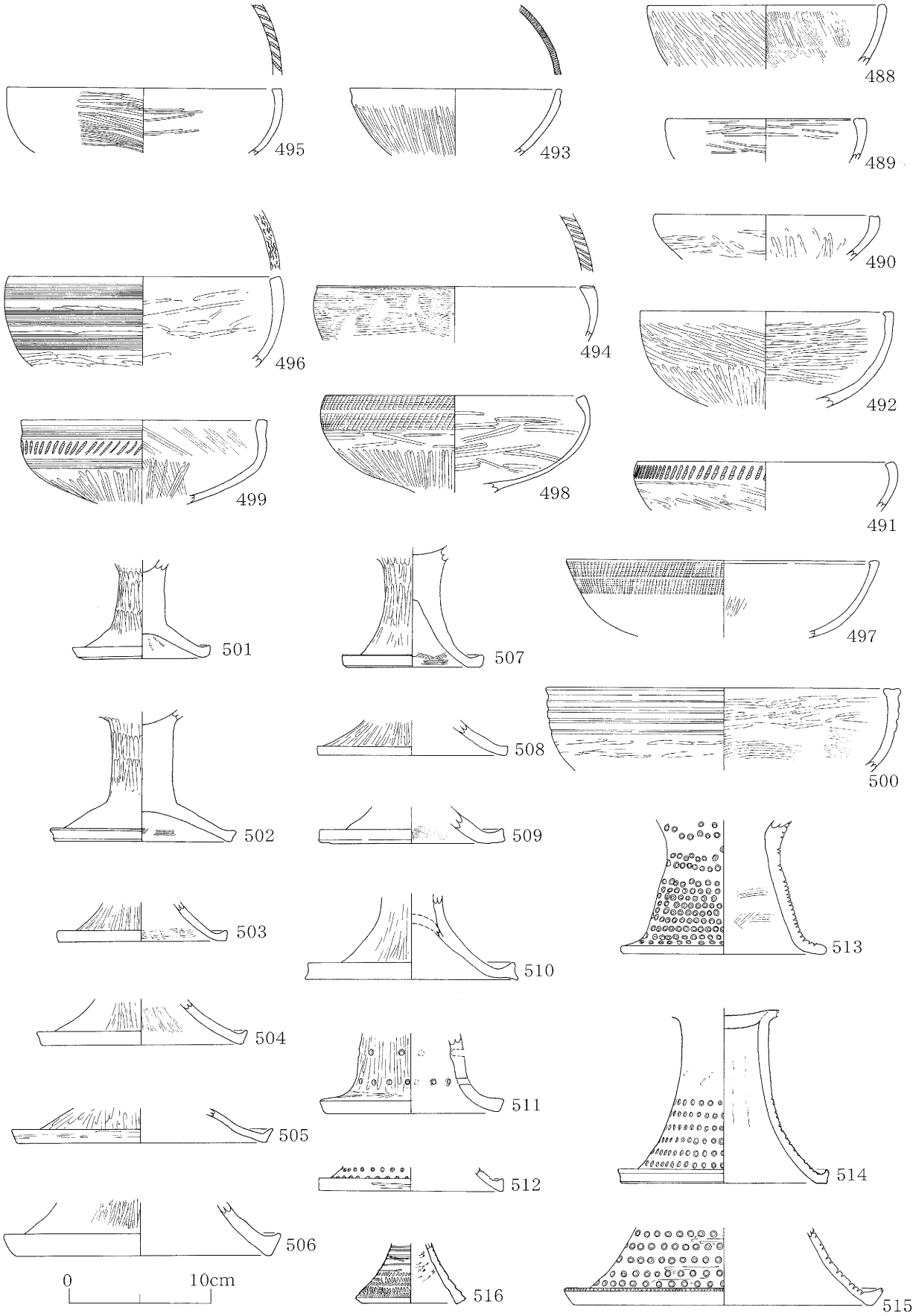


第69図　第58次第16層出土土器実測図

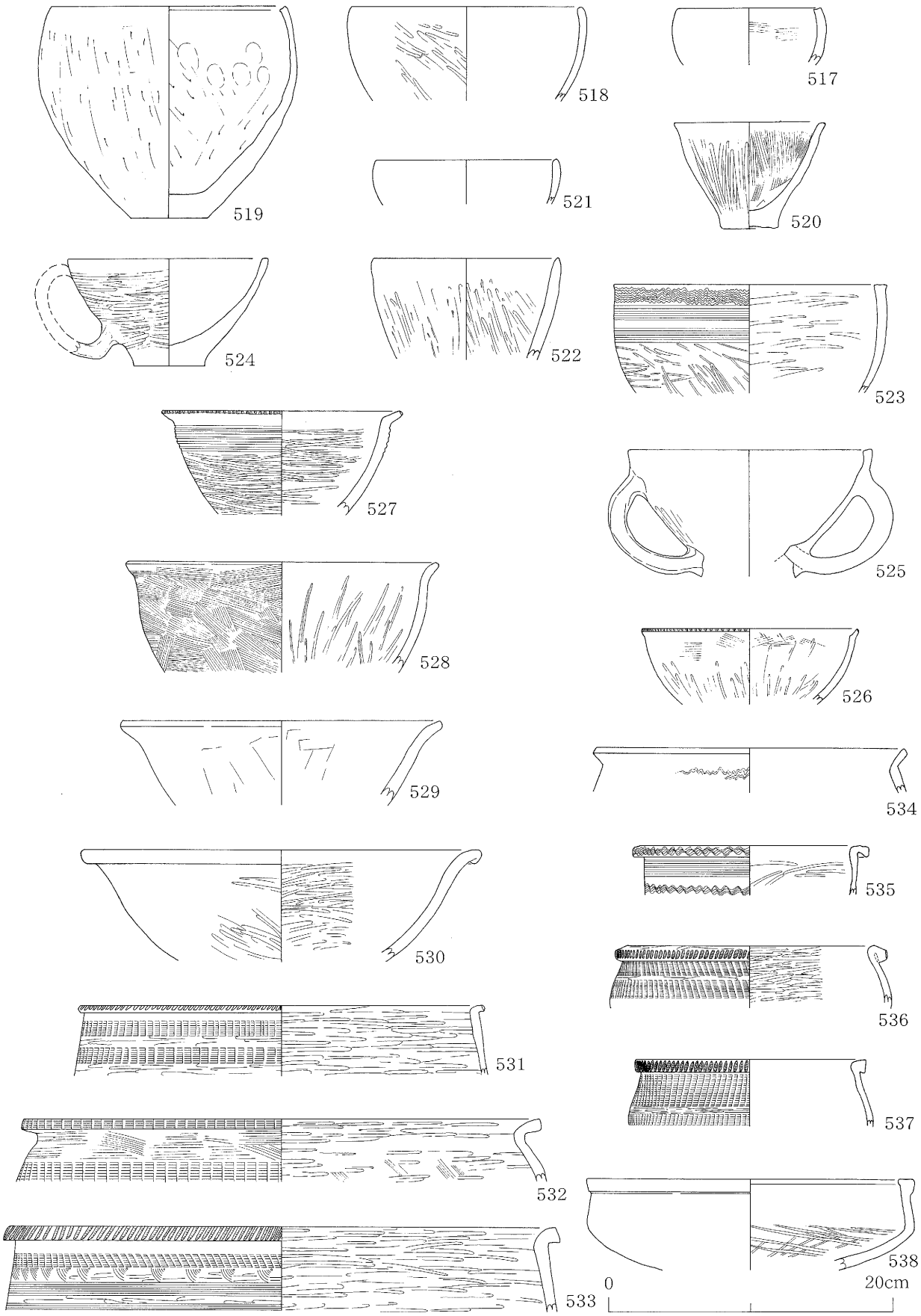
縁端部は下方へ大きく拡張する。口縁部と杯部の内面境に凸帯を廻らす。482は口縁部に斜格子の暗文を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。488・493は浅い椀状を呈する坏部である。口縁端部は丸く終わる。488は外面をヘラミガキ調整、内面をハケメ調整する。493は口縁端部に刻み目を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。489～492・494～500は浅い椀状を呈する坏部である。口縁端部は面を持つ。有文と無文がある。有文のものは口縁端部や体部に櫛描文様や凹線文を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。501～516は脚部である。501・502・507は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部をやや上方へ拡張する。柱状部は中実である。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整するものが多い。503～506・509・510は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整するものが多い。508は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部が面を持つ。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。511～515は裾部が急に立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。511は小円形を穿つ。512～515は竹管文を施す。内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。516は裾部が急に立ち上がり、裾端部は面を持つ。凹線文と刺突文を施す。502・503・506・508・510・511は裾部内面にリング状の煤が付着しており、甕蓋に転用したと考えられる。488・493・501・502・507はⅡ様式、508は中期、他はⅢ～Ⅳ様式。483・486・491・494・496・509は非河内産、他は生駒西麓産。

517～538は鉢である。517～522は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。523は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。外面に櫛描波状文と直線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。524・525は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部はやや面を持つ。体部に半環状の握手を施す。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。526は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部に刻み目、体部にヘラ描沈線文を施す。体部内外面はヘラミガキ調整する。527～530は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。527は口縁端部に刻み目を施す。体部内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。531～535は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部と体部に刻み目や櫛描文様を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。536～538は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。536・537は口縁端部と体部に櫛描文様を施す。538は無文である。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。526はⅠ様式、517～522・527～530はⅡ様式、523～525・531～538はⅢ～Ⅳ様式。519・527・534・535・538は非河内産、他は生駒西麓産。

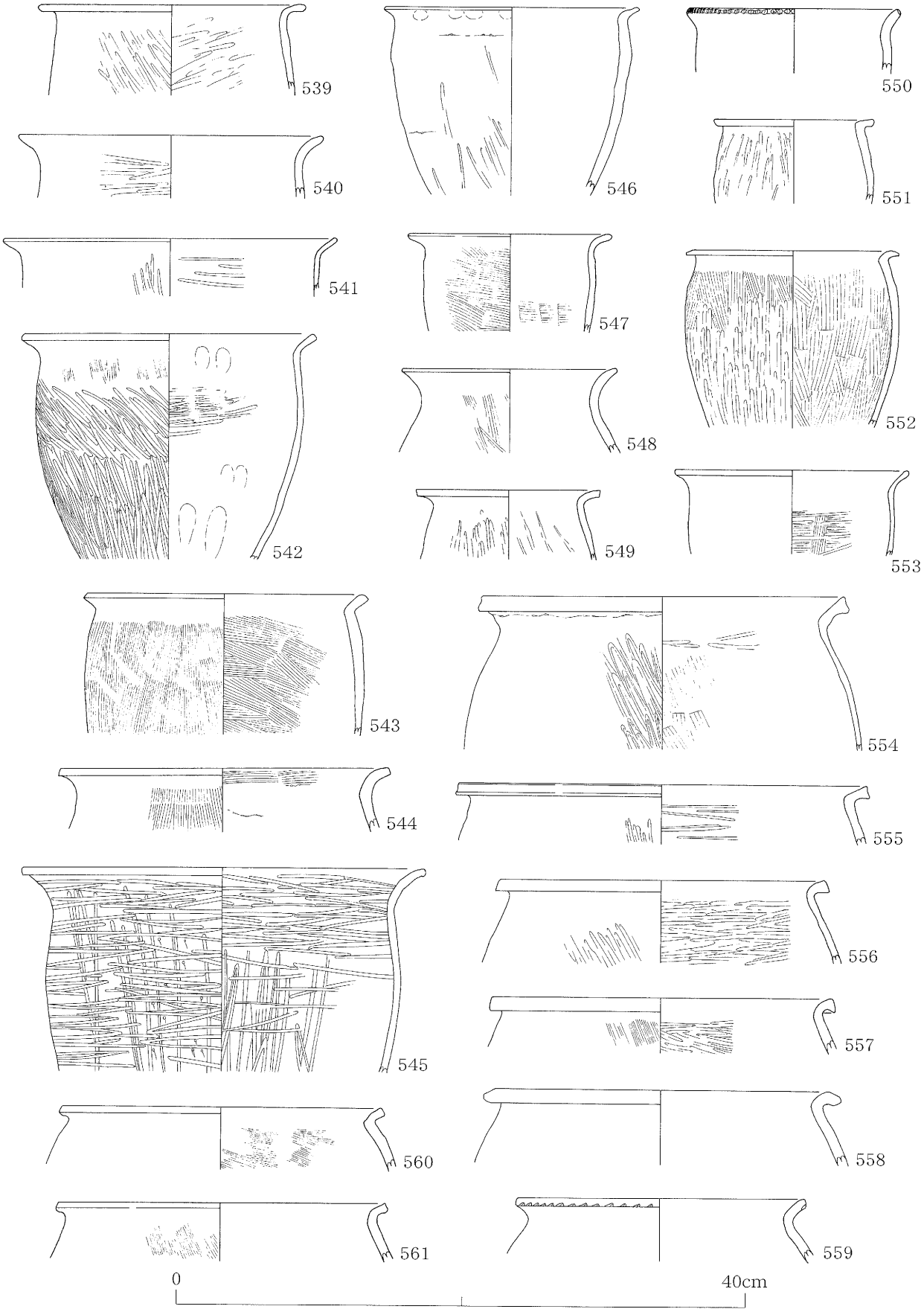
539～590は甕である。539～543・545～553は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つものと丸く終わるものがある。体部内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整するものが多い。550は口縁端部に刻み目を施す。544は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。554～558は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は下方へ拡張する。体部内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整する。559～561・565～576は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。559は口縁端部に刻み目を施す。565は体部外面に2帯の刺突文を施す。562～564は体部の張りが大きく、口縁端部が強く外反する。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。口縁端部に刻み目を施す。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。577～590は体部の張りがやや大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。



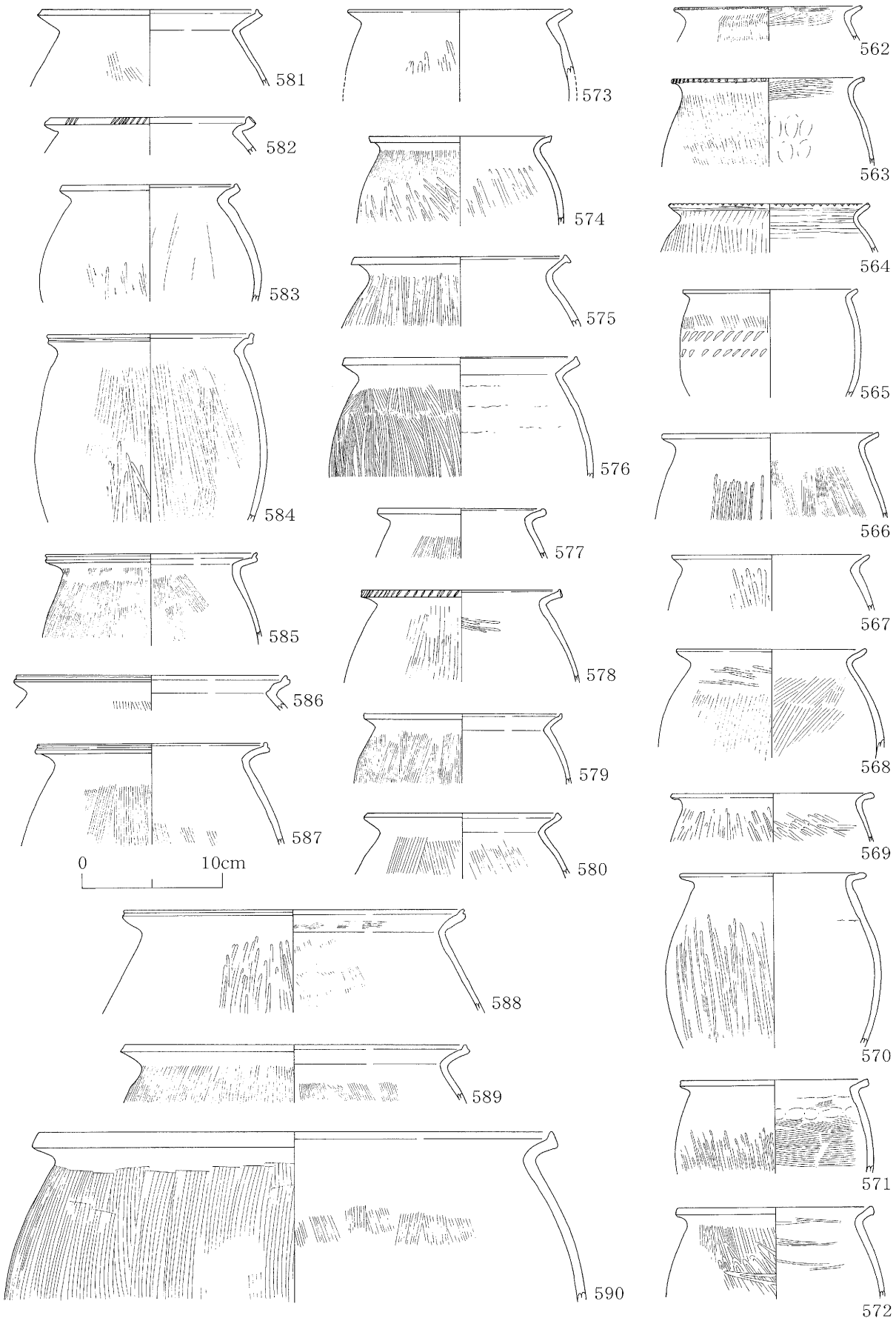
第70図　第58次第16層出土土器実測図



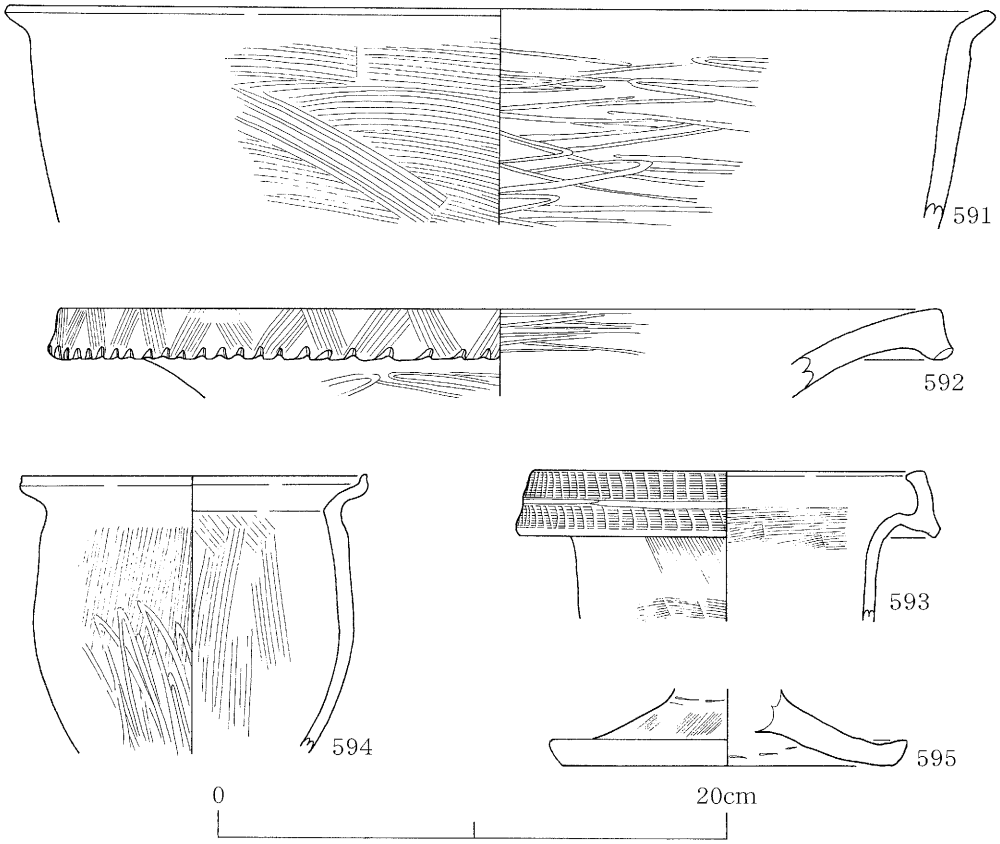
第71図　第58次第16層出土土器実測図



第72図　第58次第16層出土土器実測図



第73図　第58次第16層出土土器実測図



第74図　第58次第16ｅ層出土土器実測図

578・582は口縁端部に刻み目を施す。584～588は口縁端部に凹線文を施す。539～553はⅡ様式、554～590はⅢ～Ⅳ様式。548・562～564・571・581～587・589・590は非河内産、他は生駒西麓産。

第16ｅ層（第74図591～595）

鉢・壷・甕・高杯の器種がある。

591は鉢である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

592・593は壷である。592は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描による山形文と刻み目を施す。内外面はヘラミガキ調整する。593は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に櫛描簾状文を施す。内外面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

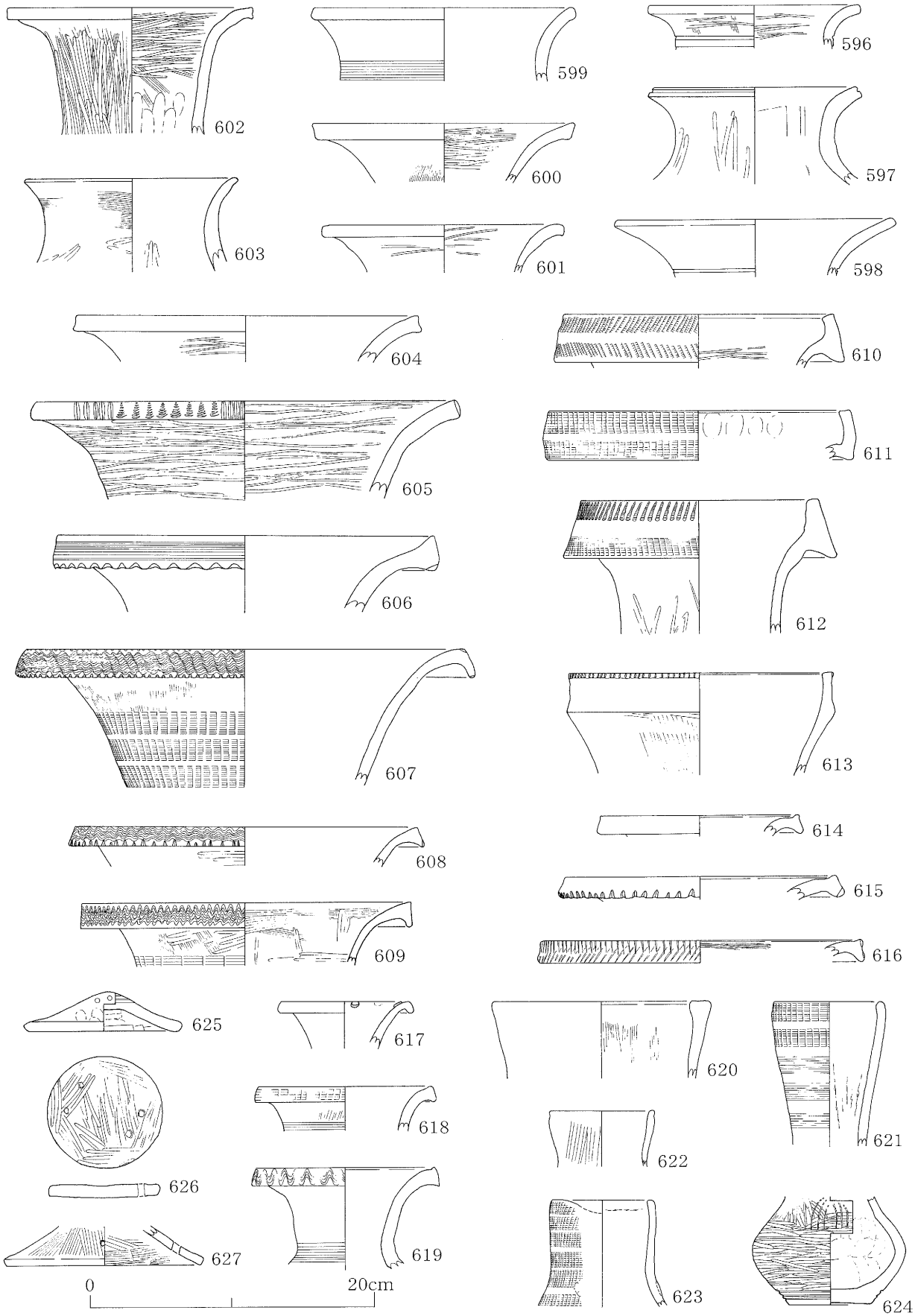
594は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が強く外反する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

595は高杯である。裾部がゆるく立ち上がり、裾端部をやや上方へ拡張する。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

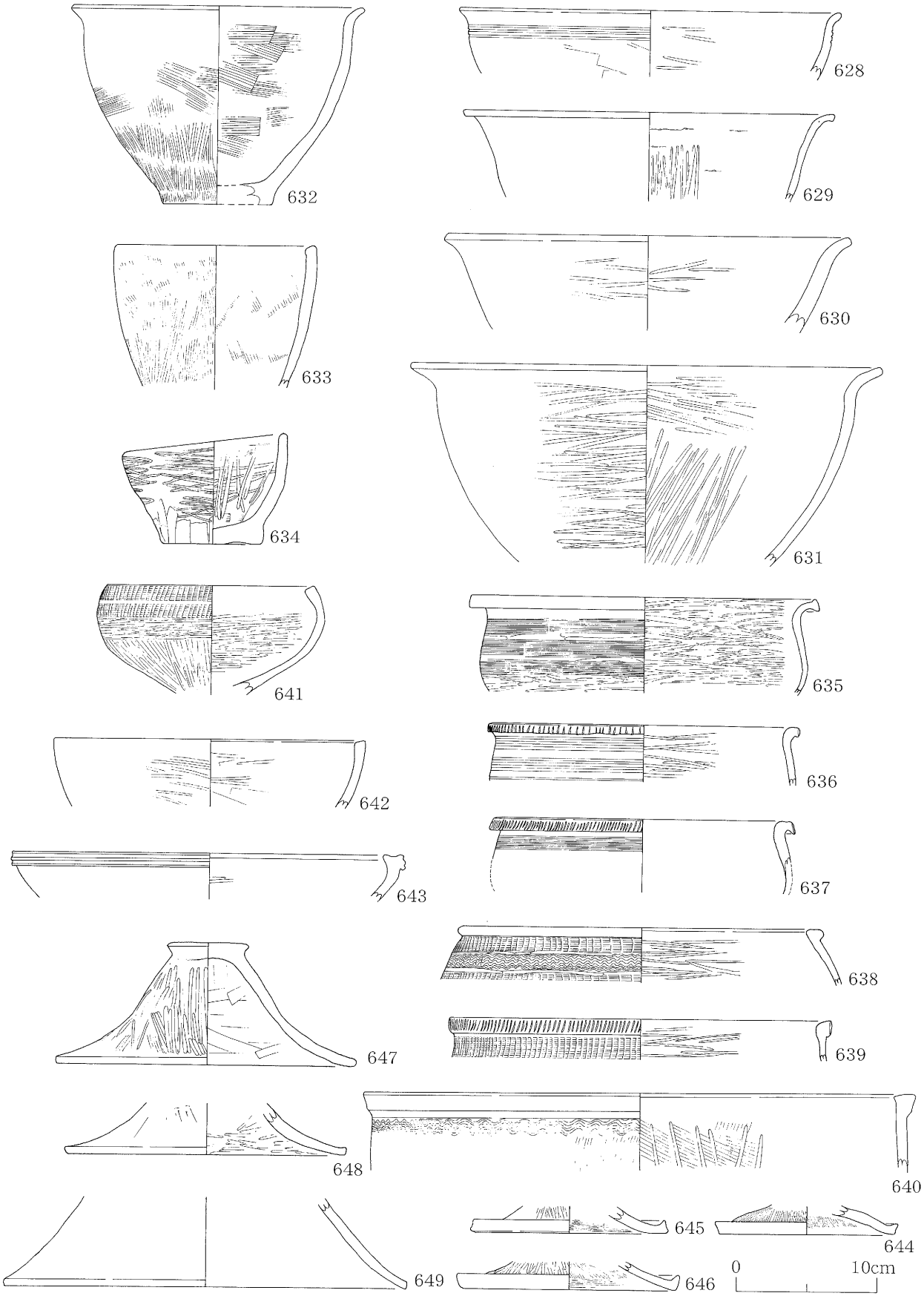
第17層（第75～78図596～688）

壷・細頸壷・水差形土器・壷蓋・鉢・高杯・甕蓋・甕の器種がある。

596～620・624は壷である。596・597は体部がやや張り、口頸部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。596は頸部と体部の境にヘラ描沈線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。597は口縁端部に１条のヘラ描沈線文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。598は口縁部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。頸部にヘラ描沈線文を施す。内外面の調整法は不明である。599



第75図　第58次第17層出土土器実測図



第76図　第58次第17層出土土器実測図

～606は口頸部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わるものとやや面を持つものがある。口縁端部や頸部に櫛描文様などを施すものと無文のものがある。内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整するものが多い。607～609・617は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。607～609は口縁端部や頸部に櫛描文様や刻み目を施す。内外面はナデ調整やヘラミガキ調整するものが多い。610～612は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部に櫛描文様を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。613は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部に刻み目を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。614～616は口頸部が短く外反し、口縁端部を上方に摘み上げ気味に拡張する。615・616は口縁端部に刻み目を施す。618・619は口頸部が大きく外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部と頸部に櫛描文様を施す。内外面はナデ調整する。620は口頸部が上方へ伸び、口縁端部が面を持つ。外面はナデ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。624は底部が平底を呈する。体部の張りは大きい。底部よりやや上に３条のヘラ描沈線文を施す。体部上半にヘラ描による弧状の線刻が残る。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。596～598・624はⅠ様式、599～606はⅡ様式、607～620はⅢ～Ⅳ様式。596・598・602・608・613・614・616は非河内産、他は生駒西麓産。

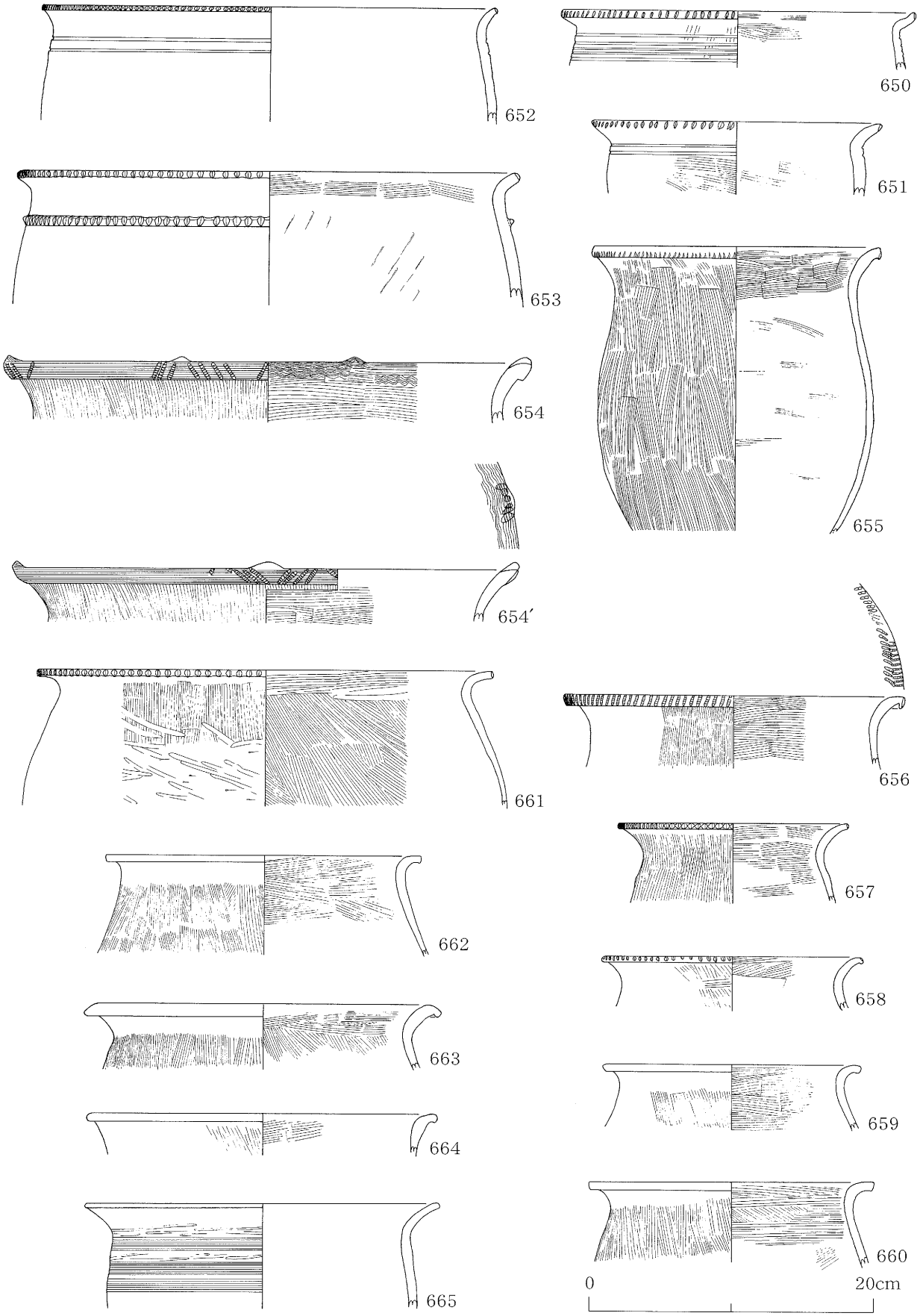
621・622は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部が丸く終わる。621は口頸部外面に櫛描簾状文と直線文を施す。調整法は不明である。622は外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。621は生駒西麓産、622は非河内産。

623は水差形土器である。口頸部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。口縁部に半円形の切り込みを入れる。口頸部外面に櫛描簾状文を施す。文様帯間は研磨する。内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

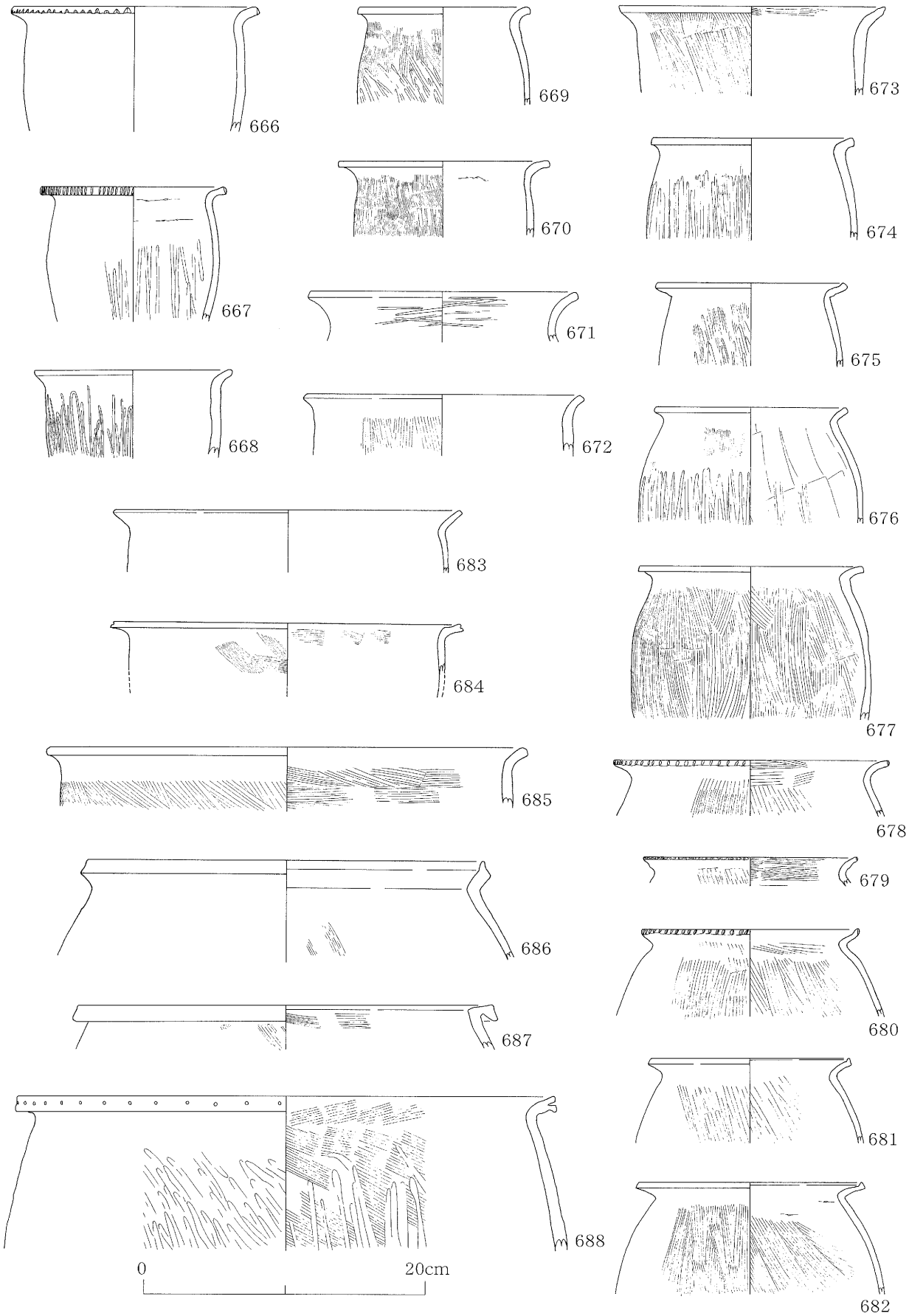
625～627は壷蓋である。625は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が丸く終わる。中央部に２孔１対の小円孔を穿つ。内外面はナデ調整する。626は体部の立ち上がりがなく、板状を呈する。口縁端部は丸く終わる。口縁部に２孔１対の小円孔を穿つ。内外面はヘラミガキ調整する。627は体部がゆるく立ち上がる。口縁端部は面を持つ。口縁部に小円孔を穿つ。内外面はハケメ調整する。625はⅠ様式、626・627は中期。生駒西麓産。

628～640は鉢である。628は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部に３条のヘラ描沈線文を施す。体部内面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。629～632は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。633・634は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。633は体部外面をハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。634は体部内外面をヘラミガキ調整する。635～637は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部と体部に刻み目や櫛描文様を施すものが多い。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。638～640は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。体部に櫛描文様を施す。639は口縁端部に刻み目を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。628はⅠ様式、629～634はⅡ様式、635～640はⅢ～Ⅳ様式。629・630・636・637は非河内産、他は生駒西麓産。

641～646は高杯である。641・642は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。641は外面に櫛描簾状文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。642は内外面をヘラミガキ調整する。643は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は段を持つ。口縁端部に２条の凹線文を施す。外面の調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。644～646は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部をやや上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整するものが多い。Ⅲ～Ⅳ様式。642・645



第77図　第58次第17層出土土器実測図



第78図　第58次第17層出土土器実測図

は非河内産、他は生駒西麓産。

647～649は甕蓋である。体部が大きく立ち上がり、中央に円形の摘みが付く。口縁端部は丸く終わる。口縁部内面にリング状の煤が付着する。内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整する。中期。生駒西麓産。

650～688は甕である。650～652は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。体部外面にヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。653は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。体部外面に貼り付け凸帯を1条施す。貼り付け凸帯と口縁端部に刻み目を施す。654・654′は同一個体の可能性が高い。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部はやや面を持ち、波状口縁を呈する。体部外面はハケメ調整する。口縁部内面は横方向のハケメ調整する。口縁端部は櫛描列点文、口縁部内面は波状文とその上に列点文を施す。所謂、近江・山城系の甕である。655～660・662～664は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は外側へ巻き込むものと丸く終わるものがある。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。655～658は口縁端部に刻み目を施す。661は体部の張りがやや大きく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整の後、下半をヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。口縁端部に刻み目を施す。665は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。体部外面に櫛描直線文を施す。666～673・683～685は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部はやや面を持つものと丸く終わるものがある。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。666・667は口縁端部に刻み目を施す。674・675は体部の張りが少なく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。676・677は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整する。678～680は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はハケメ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。口縁端部に刻み目を施す。681・682・686は体部の張りがやや大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面はハケメ調整やナデ調整する687・688は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は下方へ拡張する。体部内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整する。688は口縁端部に円形刺突文を施す。650～653はⅠ様式、654～673・683～685はⅡ様式、674～682・686～688はⅢ～Ⅳ様式。654～660・662・663・677～680は非河内産、他は生駒西麓産。

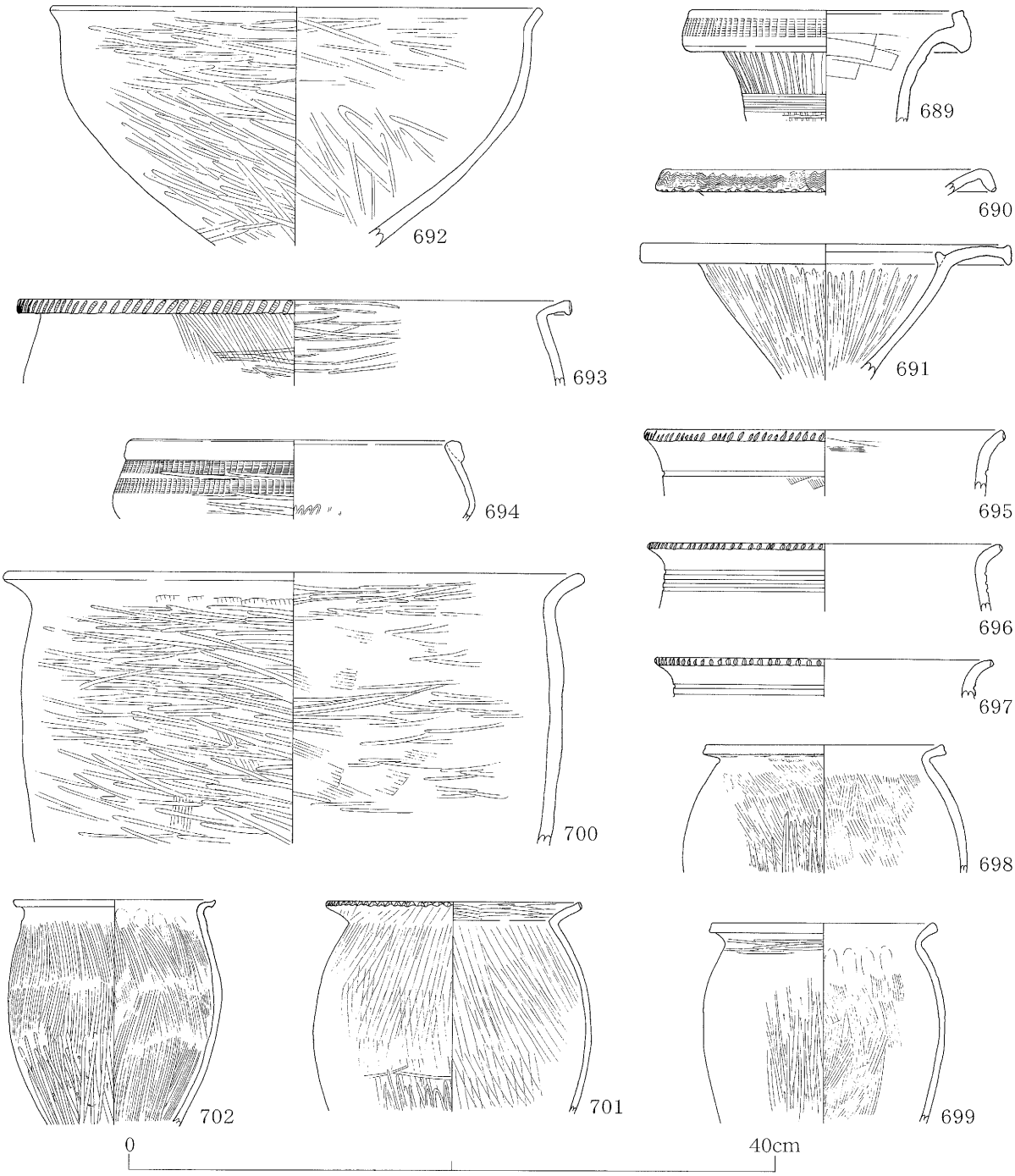
第18層（第79図689～702）

壷・高杯・鉢・甕の器種がある。

689・690は壷である。689は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部と頸部に櫛描文を施す。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。690は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ大きく拡張する。口縁端部に櫛描波状文と刻み目を施す。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

691は高杯である。体部が外上方へ立ち上がり、口縁部が水平方向へ伸びる。口縁端部は面を持つ。口縁部と杯部の内面境に凸帯を廻らす。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

692～694は鉢である。692・693は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はヘラミガキ調整する。693は口縁端部に刻み目を施す。694は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。体部に櫛描簾状文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。



第79図　第58次第18層出土土器実測図

695～702は甕である。695～697は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整するものが多い。体部外面にヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。698・699は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。700は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。701は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメの後、下半をヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。口縁端部に刻み目を施す。702は体部の張りがやや大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に

拡張する。体部外面はハケメの後、下半をヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。695～697はⅠ様式、700はⅡ様式、698・699・701・702はⅢ～Ⅳ様式。698・701は非河内産、他は生駒西麓産。第14～18層（第80～83図703～771）

壷・無頸壷・鉢・水差形土器・壷蓋・高杯・甕の器種がある。

703～728は壷である。703は頸部が大きな筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。口縁端部にヘラ描沈線文、頸部と体部の境に削り出しの凸帯を施す。内外面はヘラミガキ調整する。704～708は口頸部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わるものとやや面を持つものがある。705～707は頸部に櫛描直線文を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。709～711・720～723は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部や頸部に櫛描文様を施すものが多いが711と721は無文である。内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。712～716・719は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部や頸部に櫛描文様や刻み目を施す。内外面はハケメ調整やナデ調整するものが多い。717・718は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。717は口縁端部に刻み目、718は櫛描波状文を施す。724は底部が平底を呈する。体部の張りは大きい。体部上半に櫛描文様を施す。体部外面の上半はナデ調整する。下半はヘラケズリの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。725～727は口頸部が短く外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。口縁端部や口縁部内面に凹線文や櫛描文様を施す。727は頸部と体部の境に凸帯を貼り付ける。728は体部がやや下で大きく張り、口縁部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。無文である。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。703はⅠ様式、704～708はⅡ様式、709～728はⅢ～Ⅳ様式。709・717・720・721・724～727は非河内産、他は生駒西麓産。

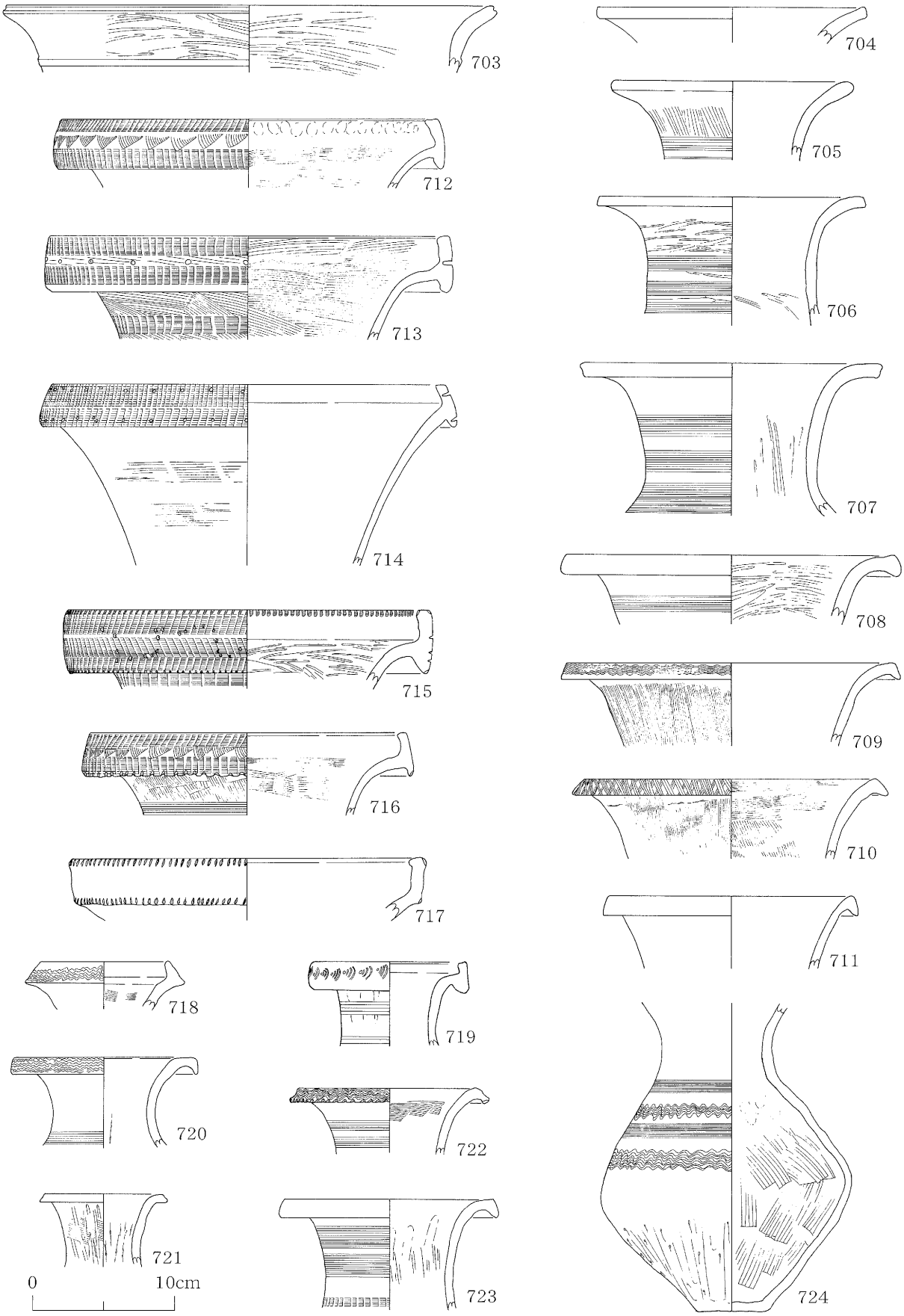
729・730は無頸壷である。729は体部が大きく内傾する。口縁端部は丸く終わる。口縁端部に瘤状の握手が付く。握手に２孔の小円孔を穿つ。外面の調整法は不明である。内面はハケメの後、ナデ調整する。730は体部が大きく内傾する。口縁部が強く外反し、口縁端部は面を持つ。外面に櫛描流水文を施す。内面はヘラミガキ調整する。729はⅡ様式、730は中期。生駒西麓産。

731～737は鉢である。731は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキ調整する。732～735は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。体部に櫛描文様を施す。735は口縁端部に刻み目を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。736・737は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。736は握手の剥落痕が残る。体部内外面はヘラミガキ調整する。731はⅡ様式、736～737はⅢ～Ⅳ様式。732は非河内産、他は生駒西麓産。

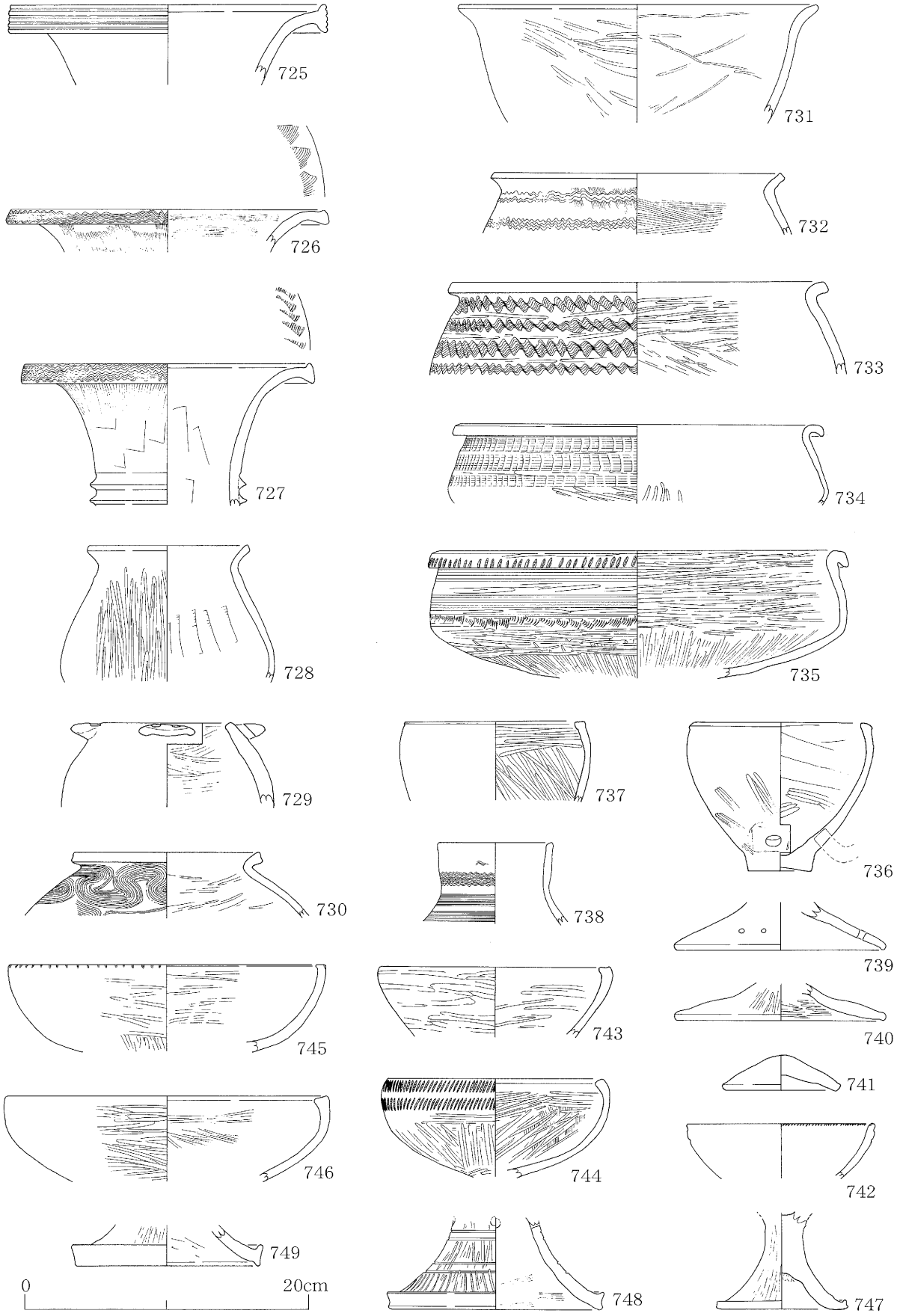
738は水差形土器である。口頸部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。口頸部外面に櫛描波状文と直線文を施す。内外面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

739～741は壺蓋である。739・740は体部がゆるく立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。739は口縁端部に２孔１対の小円孔を穿つ。内外面はナデ調整する。740は内外面をヘラミガキ調整する。741は体部がゆるく内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。中期。739は非河内産、他は生駒西麓産。

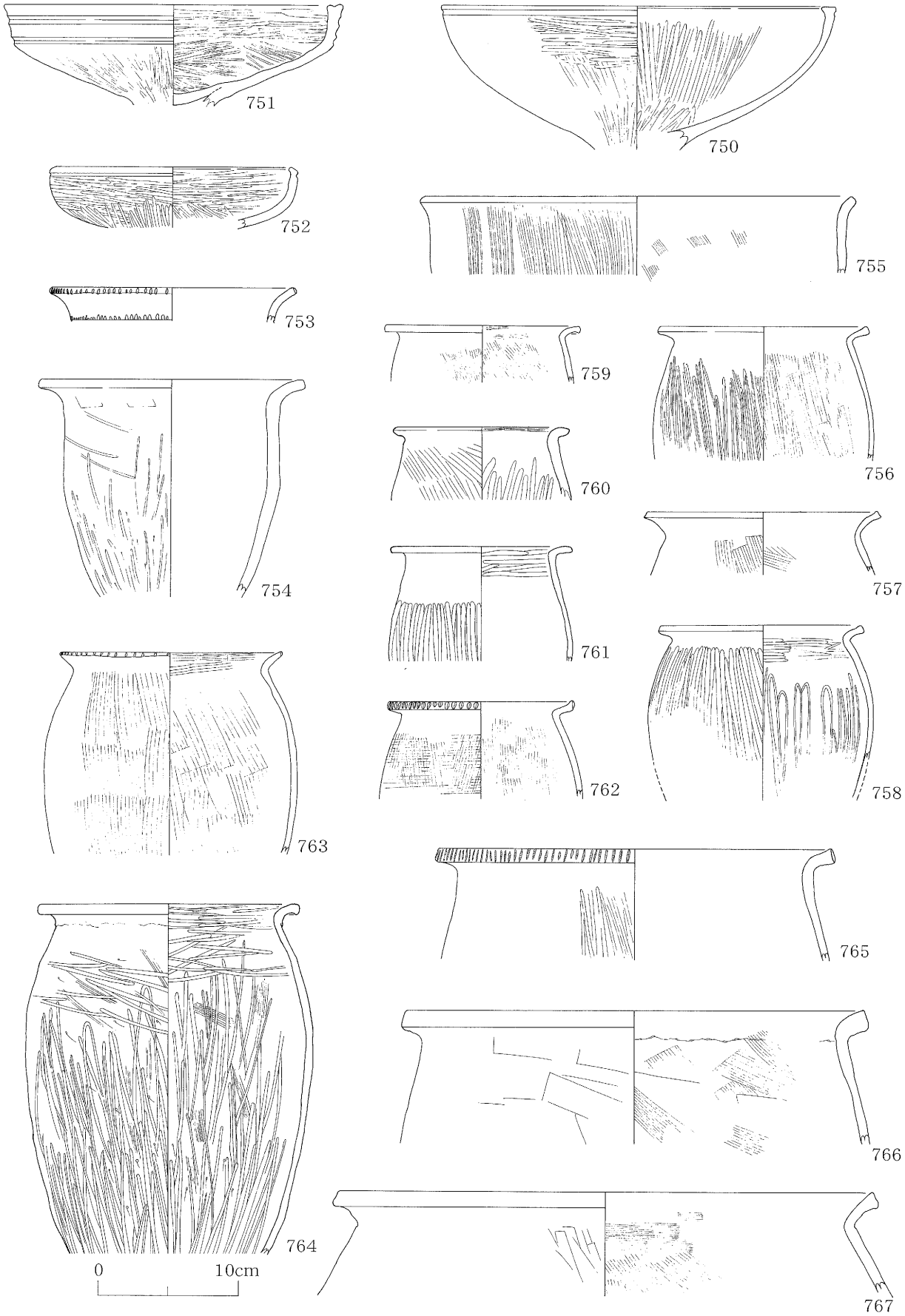
742～752は高杯である。742～746は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。有文と無文がある。有文のものは櫛描文様や凹線文を施す。742・745は口縁端部に刻み目を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。747は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部をやや上方へ拡張する。柱状部は中実である。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。748・749は裾部がゆるく立ち



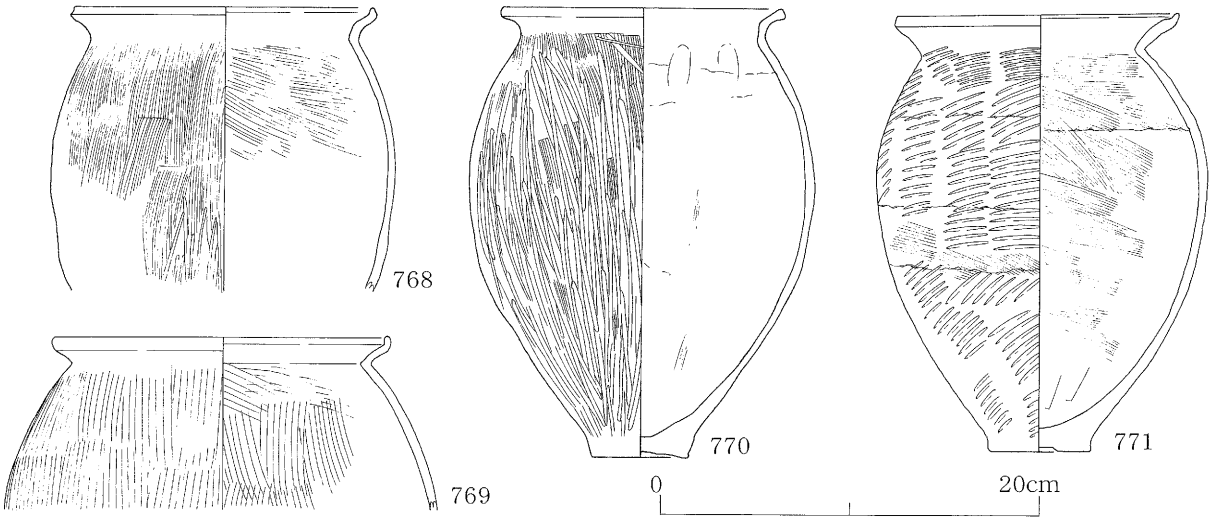
第80図　第58次第14～18層出土土器実測図



第81図　第58次第14～18層出土土器実測図



第82図　第58次第14～18層出土土器実測図



第83図　第58次第14～18層出土土器実測図

上がり、裾端部を上方へ拡張する。748は外面に凹線文や縦方向の線刻を施す。小円孔が一部残る。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。749は外面をヘラミガキ調整、内面をヘラケズリ調整する。747はⅡ様式、他はⅢ～Ⅳ様式。747は非河内産、他は生駒西麓産。

753～771は甕である。753は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が面を持つ。体部外面にヘラ描沈線文と刺突文、口縁端部に刻み目を施す。754・755は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部はやや面を持つ。754は体部外面をヘラケズリの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。755は体部外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。756～767・770は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つものと丸く終わるものがある。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。763・765は口縁端部に刻み目を施す。768・769は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部内外面はハケメ調整する。771は底部がやや上げ底を呈する。体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部外面はタタキの後、部分的なハケメ調整する。内面はハケメ調整する。753はⅠ様式、754・755はⅡ様式、756～770はⅢ～Ⅳ様式、771はⅤ様式。755・760・763は非河内産。他は生駒西麓産。

古墳時代以降の土器

古墳時代～近世期の土器がある。土器は須恵器・土師器・瓦器・磁器・黒色土器・緑釉陶器がある。弥生時代の遺物包含層より上の遺構と遺物包含層より出土した。

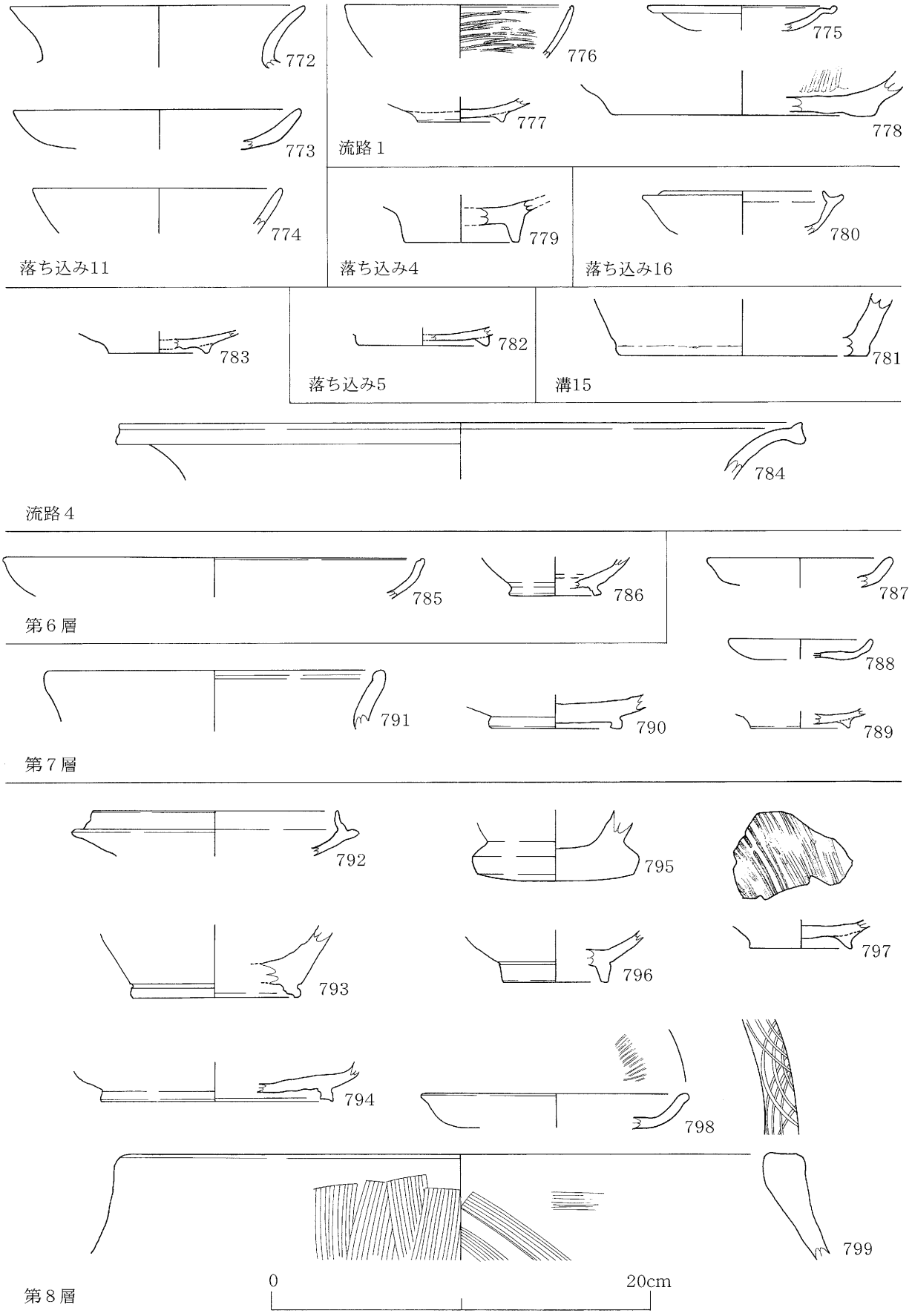
遺構出土土器

落ち込み４（第84図779）

779は白磁の椀である。高台は高く、断面形が逆三角形を呈する。内外面はロクロナデ調整をする。底部の裏面以外は施釉する。釉の色調は乳灰色を呈する。中世期。

落ち込み５（第84図782）

782は黒色土器の椀である。断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。内面を燻し、黒色を呈する。調整法は不明である。平安時代。



第84図　第58次落ち込み４・５・11・16、流路１・４、溝15、第６～８層出土土器実測図

落ち込み11（第84図772～774）

土師器・須恵器がある。

772・773は土師器である。772は甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部が丸く終わる。内外面はヨコナデ調整する。773は皿である。口縁部がやや内湾しながら上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。772は平安時代、773は中世期。

774は須恵器の杯である。口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。奈良時代。

落ち込み16（第84図780）

780は須恵器の杯である。体部は浅く、受部が水平方向へ伸びる。立ち上がり部は短く内傾する。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。古墳時代。

流路１（第84図775～778）

土師器・瓦器がある。

775は土師器の皿である。やや丸底を呈する底部より口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は内側に巻き込み、肥厚する。体部内外面はナデ調整する。平安時代。

776～778は瓦器である。776・777は椀である。776は体部が内湾して口縁部に至る。口縁端部に１条の沈線を廻らす。体部外面の調整法は不明である。内面はやや密なヘラミガキ調整する。777は断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。調整法は不明である。778は擂鉢である。底部は平底を呈する。体部は大きく外上方に伸びる。内面に摺り目が残る。中世期。

流路４（第84図783・784）

瓦器・須恵器がある。

783は瓦器の椀である。断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。調整法は不明である。中世期。

784は須恵器の甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部を摘み上げ気味に拡張する。内外面は回転ナデ調整する。奈良時代。

溝15（第84図781）

781は須恵器の底部である。底部は平底を呈し、体部が外上方へ伸びる。内外面は回転ナデ調整する。時期は不明。

遺物包含層出土土器

第６層（第84図785・786）

土師器・須恵器がある。

785は土師器の皿である。口縁部が内湾気味に外上方へ伸びる。口縁端部は面を持つ。内外面はヨコナデ調整する。奈良時代。

786は須恵器の底部である。体部は内湾気味に外上方へ伸びる。高台は断面形がコの字形を呈し、やや高い。内外面は回転ヘラケズリ調整する。奈良～平安時代。

第７層（第84図787～791）

土師器・瓦器・緑釉陶器・須恵器がある。

787・788は土師器の皿である。787は口縁部がやや外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。788は口縁部が内湾気味に上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。中世期。

789は瓦器の椀である。断面形が逆三角形を呈する低い高台を貼り付ける。調整法は不明である。中世期。

790は緑釉陶器である。椀の底部である。高台は低く、断面形がコの字形を呈する。風化が著しく、内外面の一部に釉が残る。平安時代。

791は須恵器の甕である。口縁部はやや内湾し、口縁端部が内側へ肥厚する。内外面は回転ナデ調整する。奈良時代。

第８層（第84図792～799）

須恵器・白磁・瓦器・土師器がある。

792～795は須恵器である。792・794は杯である。792は体部が浅く、受部が水平方向へ伸びる。立ち上がり部は短く外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。794は底部である。高台は断面形がコの字形を呈する。体部外面は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデ調整する。793は底部である。体部は外上方へ伸びる。高台は低い。内外面は回転ナデ調整する。795は擂鉢である。底部は丸みのある平底である。底部と体部の境が強くくびれる。内外面はナデ調整する。792・795は古墳時代、793は奈良～平安時代、794は奈良時代。

796は白磁の椀である。高台は高く、断面形が逆三角形を呈する。内外面はロクロナデ調整をする。底部の裏面以外は施釉する。釉は乳灰色を呈する。中世期。

797は瓦器の椀である。断面形が逆三角形を呈するやや高い高台を貼り付ける。見込み部に平行線の暗文を施す。外面はヨコナデ調整する。中世期。

798・799は土師器である。798は皿である。口縁部は緩く外反する。口縁端部はやや面を持つ。口縁部内面に放射状の暗文を施す。外面はナデ調整する。799は竈である。口縁部は内傾する。口縁端部は面を持つ。外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。口縁端部に青海波の当て具痕が残る。798は奈良時代、799は古墳時代。

第９層（第85図800～804）

須恵器・土師器・瓦器がある。

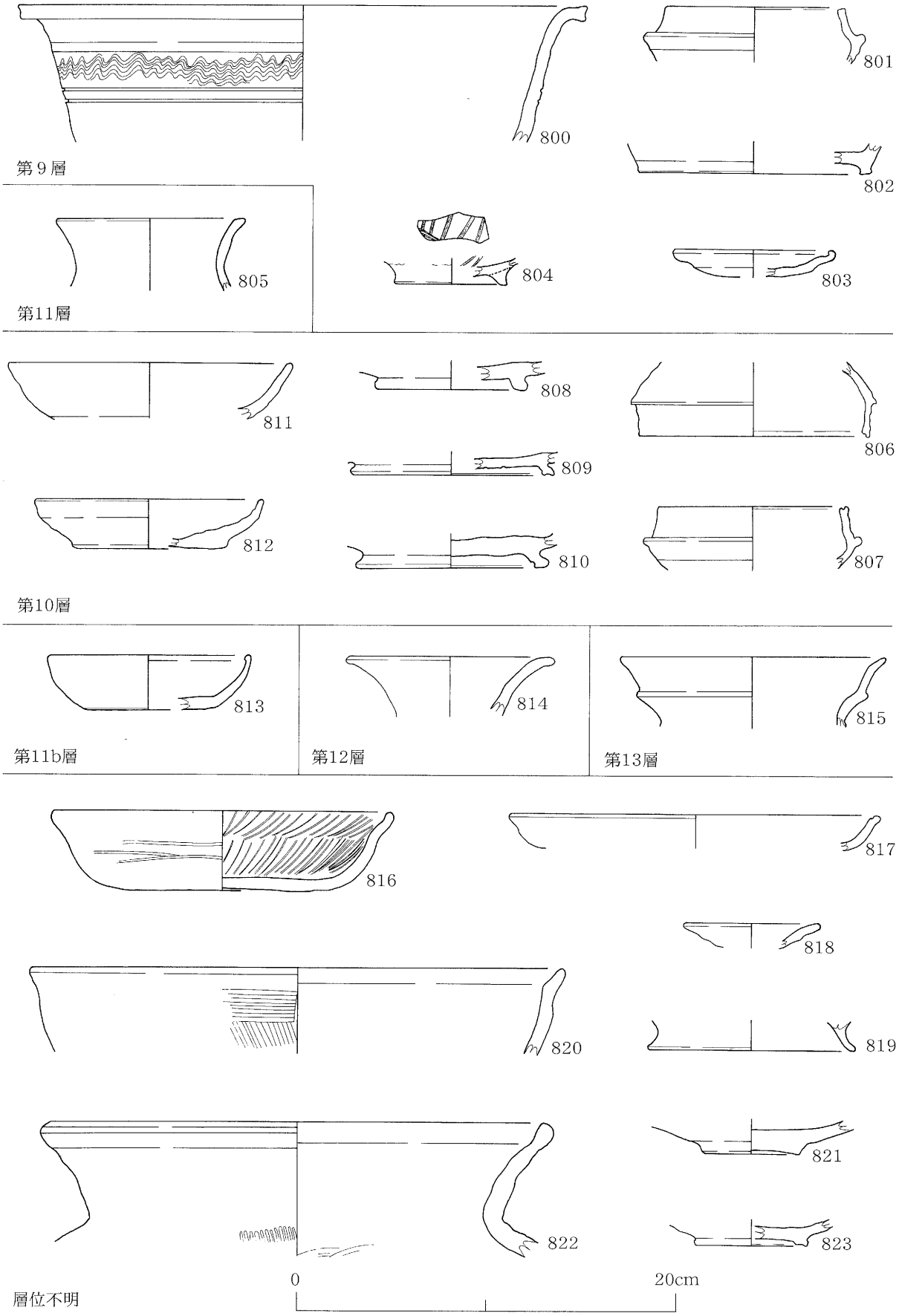
800～802は須恵器である。800は器台である。体部は内湾し、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面に櫛描波状文と沈線を施す。内外面は回転ナデ調整する。801・802は杯である。801は受け部が水平方向へ伸び、立ち上がり部が長い。口縁端部はやや面を持つ。体部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。802は底部である。高台は断面形がコの字形を呈する。内外面は回転ナデ調整する。800・801は古墳時代、802は奈良時代。

803は土師器の皿である。やや丸底を呈する底部より口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は内側に巻き込み、肥厚する。体部内外面はナデ調整する。平安時代。

804は瓦器の椀である。断面形が逆三角形を呈するやや高い高台を貼り付ける。見込み部に平行線の暗文を施す。中世期。

第10層（第85図806～812）

806～812は須恵器である。806は蓋杯である。天井部はやや丸い。天井部と口縁部の境に稜が付く。口縁部は長く伸び、口縁端部が凹む。内外面は回転ナデ調整する。807～812は杯である。807は受け部が水平方向へ伸び、立ち上がり部が長い。口縁端部はやや面を持つ。体部外面は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。808～810は底部である。高台は断面形がコの字形を呈する。内外面は回転ナデ調整する。811は口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。812は底部が平底を呈し、体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転



第85図　第58次第９～11・11b・12・13層、層位不明出土土器実測図

ナデ調整する。806・807は古墳時代、808～811は奈良時代・812は平安時代。

第11層（第85図805）

805は土師器の甕である。口縁部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。内外面はヨコナデ調整する。平安時代。

第11ｂ層（第85図813）

813は須恵器の杯である。底部が平底を呈し、体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は内側へやや肥厚する。内外面は回転ナデ調整する。平安時代。

第12層（第85図814）

814は須恵器の壷である。口頸部が大きく外反する。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。奈良時代。

第13層（第85図815）

815は土師器の壷である。口頸部が二段で外反し、口縁端部が丸く終わる。頸部と口縁部の境には凸帯状の稜がつく。内外面はヨコナデ調整する。布留式期。

層位不明（第85図816～823）

土師器・瓦器・須恵器・緑釉陶器がある。

816～819は土師器である。816～818は皿である。816は底部がやや丸底に近い平底を呈し、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は内側へ肥厚する。口縁部内面に２段の放射状暗文を施す。外面はヘラミガキ調整する。817は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸く終わる。内外面はヨコナデ調整する。818は口縁部が大きく外上方へ伸び、口縁端部が丸く終わる。内外面はヨコナデ調整する。819は椀の底部である。高台は高い。816・817・819は奈良時代、818は中世期。

820は瓦器の擂鉢である。体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。中世期。

821・822は須恵器である。821は底部である。平底を呈し、中央がやや凹む。外面は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデ調整する。822は甕である。口縁部が長く外上方へ伸び、口縁端部がやや肥厚する。体部外面はタタキ調整する。内面に当て具痕が残る。奈良～平安時代。

823は緑釉陶器である。椀の底部である。高台は低く、断面形がコの字形を呈する。底部の裏面以外を施釉する。釉の色調は暗緑灰色を呈する。平安時代。

２）土製品（第86～88図824～878）

弥生時代の遺構や遺物包含層より出土した。土偶・土錘・ミニチュア土器・匙形土製品・環状土製品・紡錘車・紡錘車未成品・円板状土製品がある。

824は土偶である。体部は欠損するが頭部はほぼ完存する。高さ約7.4cm、幅9.6cm、厚さ2.1cmを測る。板状の粘土を張り合わせたのち、ユビオサエとナデにより成形・調整する。横長の板状を呈する頭部をもつ。表面に粘土紐を横、縦の順に十字に貼り付け眉と鼻を表現する。両眼は細い沈線で眉の下に表す。鼻を表現する縦方向の粘土紐の下には刺突によって両鼻腔を表す。口は押圧によって丸く窪める。両耳部には表から裏へ円孔を穿つ。両眉上の額部には粒状の粘土を貼付ける。２個１対をなすが、何を表現したかは不明である。裏面の上部には表面と同様の貼付けがやや潰れた状態で四つ残る。下部には数条の不揃いの円弧状沈線と、背面に近い位置に刺突を数個施す。表面の左側にはユビオサエによる頸のくびれが残る。頭部は裏面に向かってやや反る。胎土は生駒西麓産。色調は灰色を呈する。土坑43より出土。

第86図　第58次土製品実測図

825・826は土錘である。825は楕円形を呈し、両長軸の端部から延びる溝と中央に小円孔を穿つ。溝は細く断面凸面方向に長く延びる。ユビオサエとナデにより成形・調整する。土錘の形態としては、類例が少ない。826は管状土錘である。俵形を呈し、長軸頭頂部から逆端部へ貫通する孔を穿つ。ナデ調整する。胎土は生駒西麓産。825は第16層、826は第18層より出土。

827は匙形土製品である。柄部の端部と体部口縁付近は欠損する。平面形は柄部からゆるやかに膨らむ体部をもち、端部は丸く終わる。体部は深く窪ませ凹形の断面を呈する。体部側面は皿状を呈する。外面はヘラミガキ調整、体部内面はナデ調整する。土坑４より出土。

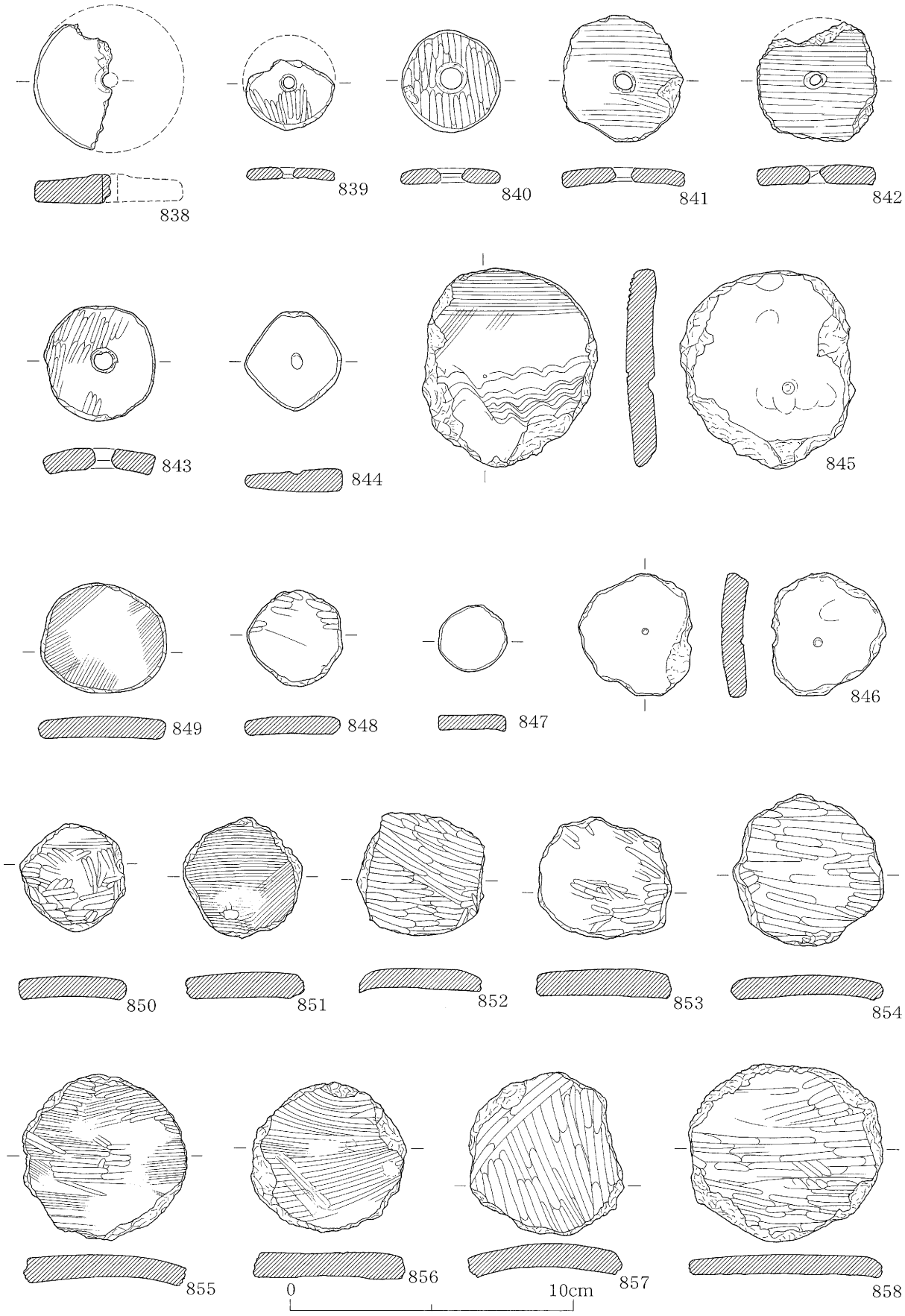
828～835はミニチュア土器である。828・829は壷である。828は口縁部と体部下方から底部にかけては欠損する。風化が著しい。体部上方がわずかに張る。内面はナデ調整する。829は口縁部のみ残存する。口縁部はわずかに内湾し立ち上がる。内面を横方向、外面を縦方向のハケメ調整する。頸部下方に直線文を施す。小型の細頸壷の可能性もある。830～835は鉢である。830～832は上げ底の底部をもつ。830は外反する体部をもち、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。831は底部のみ残存する。やや高い柱状の底部をもち、底を押し窪める。体部内面はハケメ調整、外面はナデ調整する。832はゆるく内湾する体部をもち、口縁端部は丸く終わる。底部はわずかに内湾し広がる。内外面はナデ調整する。833は口縁部が外反し、口縁端部は外傾する面をもつ。内外面はナデ調整する。834は口縁部がゆるやかに内湾する。内面はナデ調整、外面はヘラミガキ調整する。835は上方へ立ち上がる体部をもつ。内面はナデ調整、外面はヘラミガキ調整する。828・829は第17層、830・834は遺物包含層、831・833は第16層、832・835は土坑43より出土。

836は環状土製品である。筒状の断面をもち、環状を呈する体部が考えられる土製品である。復元径は27.4cmを測る。平面形態はやや内湾する弧状を呈する。断面は山形を呈し凸面をもつ。外面は橙色、内面は灰白色を呈する。内面は色調からみて還元状態であったと考えられる。凸面上部に接合痕が残る。板状にのばした粘土の両端部を曲げて筒状の体部をつくる。凸面のやや外側に施文する。外面に三条の沈線を廻らし、平行する二条以上の沈線を凸面の上方に施す。これに二条と三条の沈線を直交させ区画する。確認できる三つの区画内のうち二つに木葉文を施す。残る一つには異なった弧状の沈線を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はユビオサエとナデ調整する。胎土は生駒西麓産。溝106から出土。837は第56次調査で検出した大溝２より出土した。木葉文を施すことから前期に属する。836と形態、施文法、色調、復元径などが類似するため参考資料として掲載した。体部には内側面の立ち上がりと楕円形の剥離痕が残る。木葉文を施す区画は一条と二条の沈線によって構成する。残存する区画の一辺の長さと木葉文の規模が１cmほど836より長い。凸面の内側方向にやや広く施文していたと考えられる。土器の可能性もある。

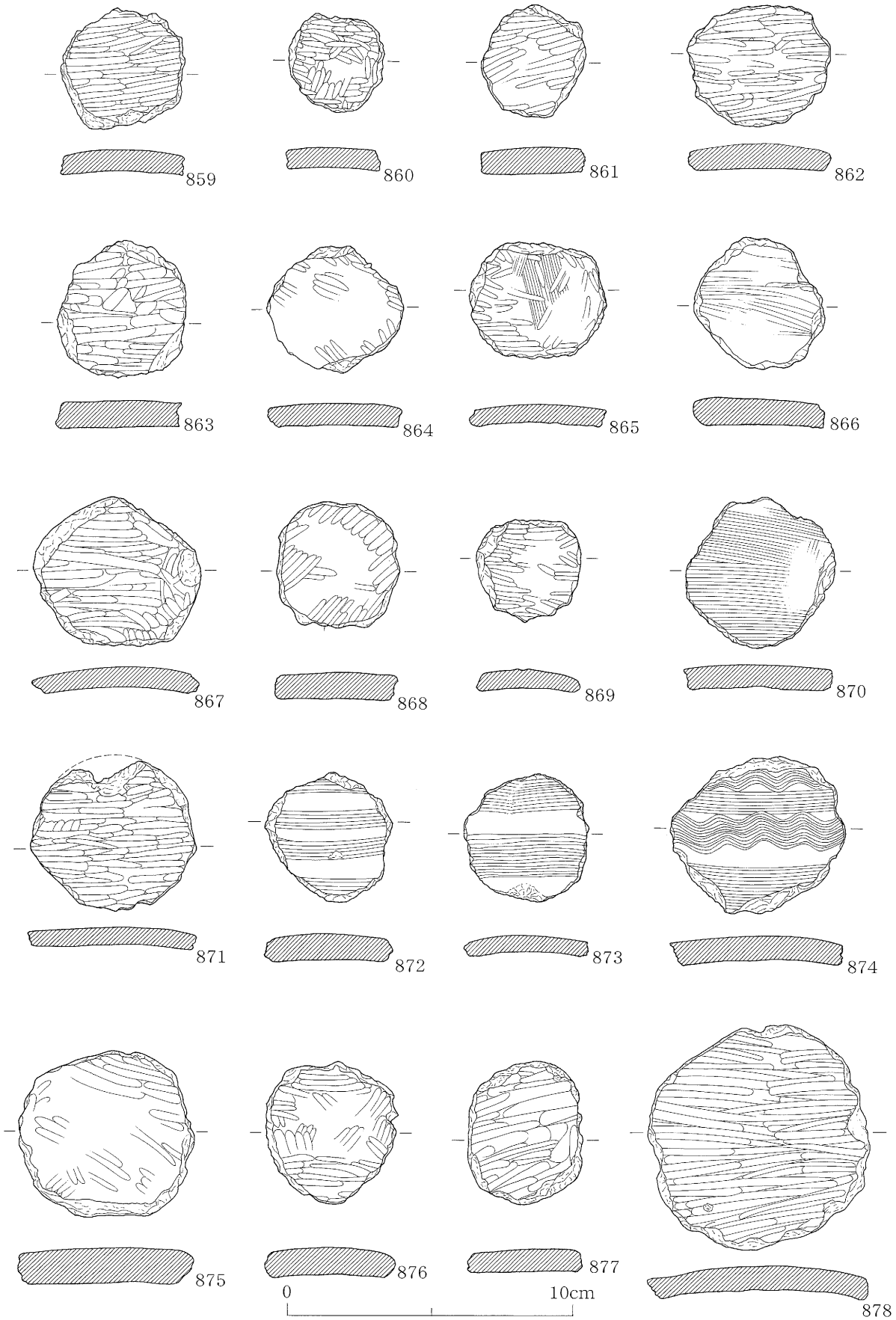
838～843は紡錘車である。838は紡錘車として焼成前につくる。円の中央部はやや膨らみをもち中央に棒輪を装着する孔を穿つ。全体を丁寧なナデ調整する。839～843は土器片を転用する。円周部を打ち欠いて円形に加工したのち、839・840・843は円周部を丁寧に研磨する。841は一部研磨する。842は円周部を打ち欠いた状態で終わり、中央に円孔を穿つ。径は３～５cmを測る。838・841・843は第16層、839・840は大溝２、842は土坑43より出土。

844～846は紡錘車未成品である。土器片を転用する。844は円周部を丁寧に研磨し、やや菱形を呈する。中央部に内面から孔を穿つが未貫通である。845・846は打ち欠いた状態で終わり、両面より孔を穿つが未貫通である。845は径７cmを測る。844は土坑22、845は大溝２、846は第16層より出土。

847～878は円板状土製品である。土器片を転用する。利用した土器は器種に関係ない。また、非河内産のものも含む。847～849は円形に加工したのちに円周部全体を研磨する。851～856は一部を



第87図　第58次土製品実測図



第88図　第58次土製品実測図

研磨するが、857～878にみられるように多くは打ち欠きのみで終わる。径は最小約２cm、最大約7.5cmを測るが、多数は約３～６cmである。847・869は遺物包含層、848は土坑43、849は溝93、850は土坑37、851・865・876は第17層、852・857・861～863・868・871・873・874は第16層、853・878は大溝２、854・855・860・864は大溝３、856は土坑46、858は土坑49、859・872・875・877は溝95、866は土坑22、867は土坑９、870は土坑25より出土。

３）石器

弥生時代の遺構および遺物包含層より出土した。磨製石器・自然石を利用した礫石器・打製石器がある。以下、これに沿って述べたい。各部名称については『弥生時代の石器』（平井勝著　ニューサイエンス社）を参照した。なお石器の材質は筆者の肉眼観察によるものである。

磨製石器（第89図879～895）

石庖丁・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・太型蛤刃石斧がある。

879～887は石庖丁である。全形が不明な細片を除いてすべて直線刃であり、背部は半月形を呈する。緑泥片岩を用いたものが大半を占めるが、異なった材質のものも存在する。879は全体の約1/2を欠損する。体面のほぼ中央部に紐穴の1孔が残る。そのすぐ隣に未貫通の穿孔痕が残る。880は全体の約1/4を欠損する。紐穴は背に近い部分に施す。881は全体の約1/2を欠損する。体面中央部に紐穴の一部が残る。882は両端と刃部を欠損する体部の細片である。883は全体の約1/2を欠損する。黒色粘板岩製である。刃部は内湾する形状を呈するが、研ぎ直しの結果であると思われる。紐穴の一部が残る。884は全体の約1/4を欠損する。背部に紐穴の一部が残る。欠損品を再加工し、新たに2孔を穿孔したものであろう。表面には光沢がみられる。885は先端部のみである。全体の約3/4を欠損している。灰白色を呈する。耳成山において産出される流紋岩に似るが、材質は不明である。886は刃部の細片である。887は大型石庖丁である。刃部は欠損しており、全形は不明である。紐穴の一部が残る。879～881、883、885は片刃、884は両刃、882、886、887は不明である。879は土坑28、883は土坑13、884・887は大溝2、885は第17層、881は第16層、886は溝95、880・882は遺物包含層より出土した。

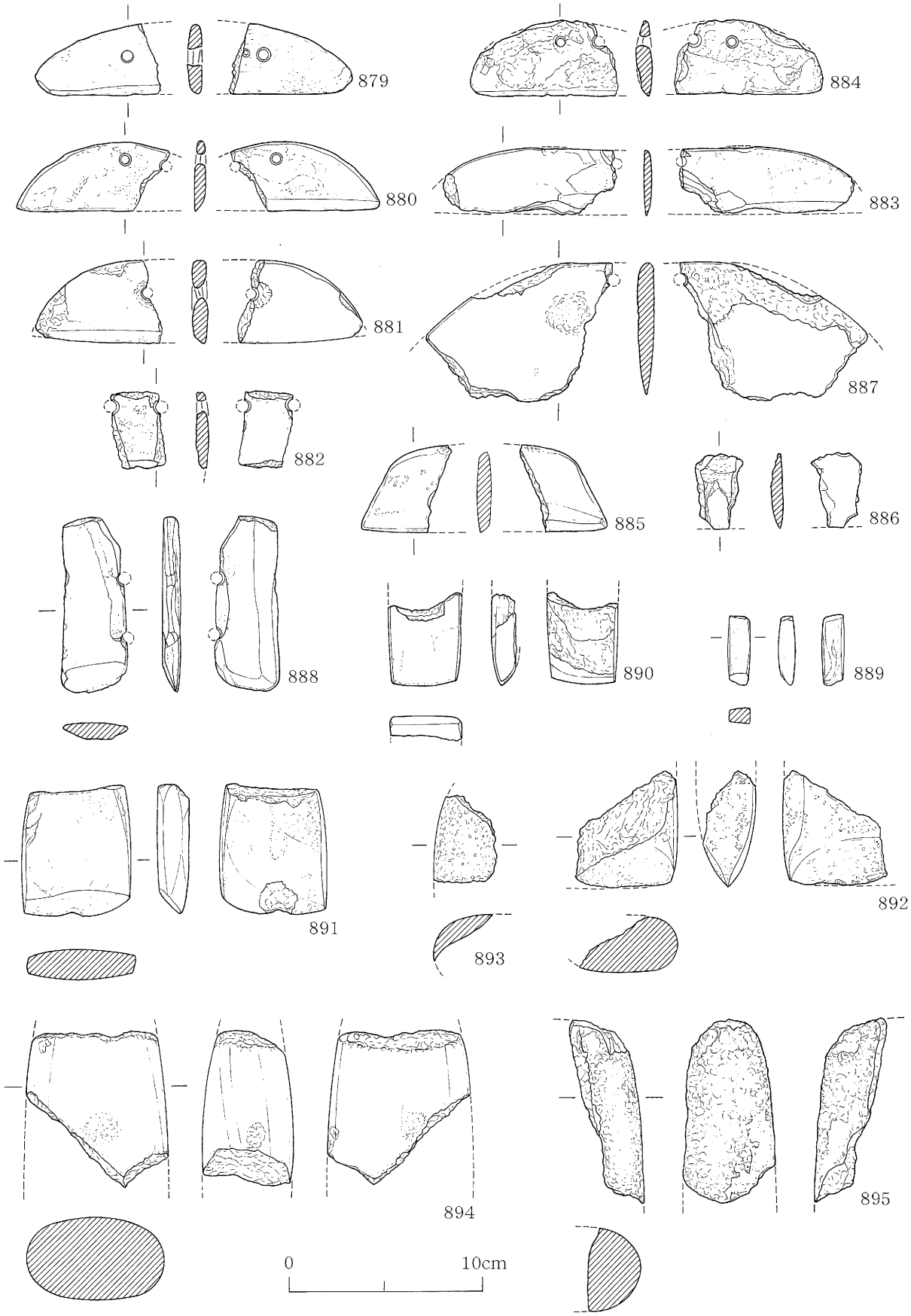
888・890・891は扁平片刃石斧である。全形は方形の板状であり、刃部は片刃を有する。888は石庖丁を転用したものである。側縁に2孔の紐穴の一部が残る。刃部は鋭く、両側縁や基端は丸く磨く。完形である。890は刃部を中心に被熱により変色する。基部を欠損するため、全形は不明である。891は刃面に刃こぼれがあるもののほぼ完形である。888・890は第16層、891は第17層より出土した。

889は小型の柱状片刃石斧である。方形の柱状であり、刃部は片刃を有する。刃部に欠けがあるが、ほぼ完形である。大溝2より出土した。

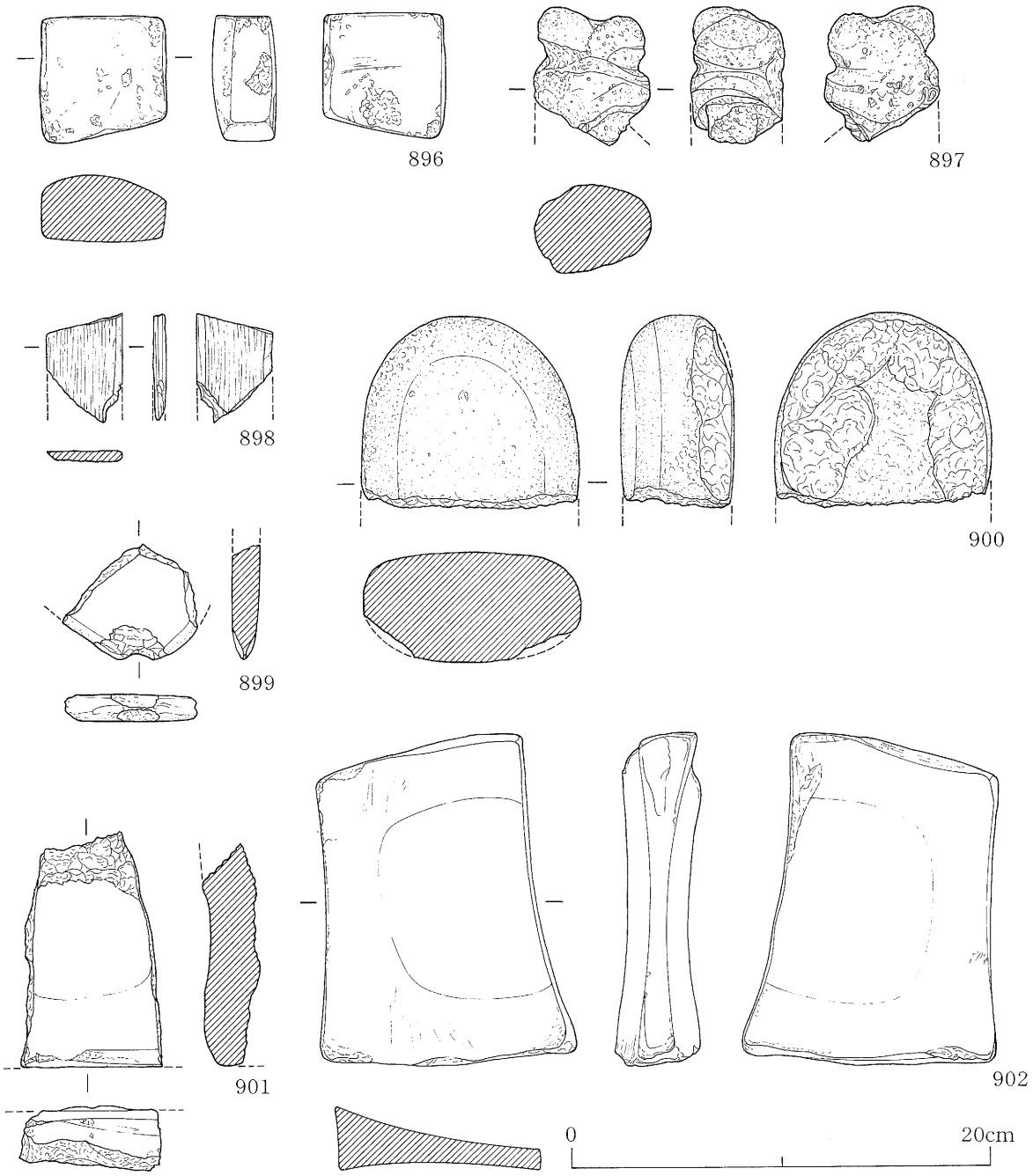
892～895は太型蛤刃石斧である。円柱状の基部は厚く、刃部は両刃を有する。892は刃部のみである。刃部には刃こぼれがある。893は側縁の細片である。894は全体の約1/2を欠損しており、基部が残る。基端面には敲打痕がある。刃部を欠損した後、叩き石として使用したと考えられる。895は全体の約2/3を欠損しており、基部が残る。表面には全体に成形時の敲打痕が残る。基端面にも別の敲打痕が認められるが、成形時のものか叩き石に転用されてできたものかは不明である。892は第14層、893・894は第16層、895は遺物包含層より出土した。

自然石を利用した礫石器（第90・91図896～914）

石鋸・石錘・砥石・用途不明石器がある。



第89図　第58次石器実測図

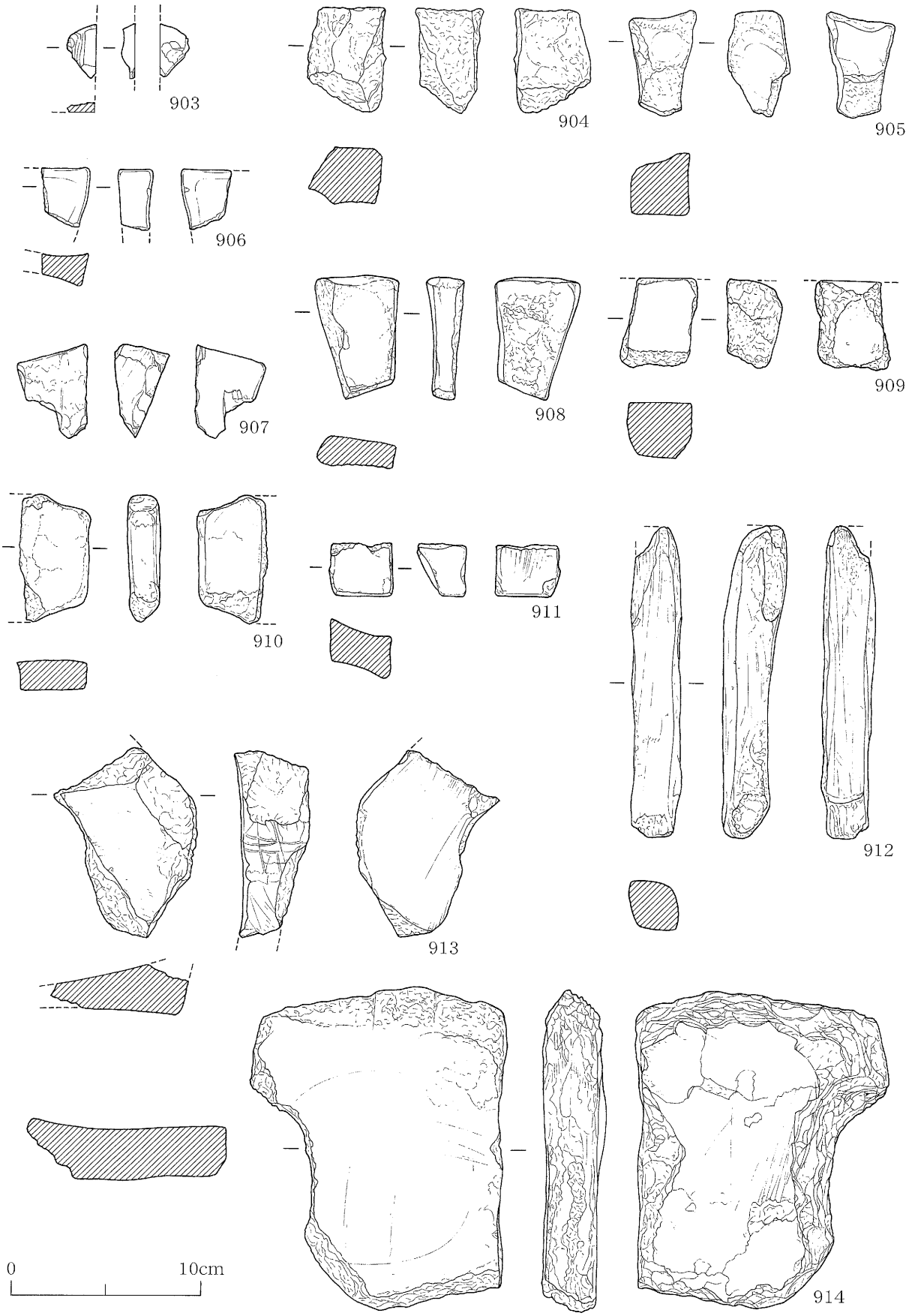


第90図　第58次石器実測図

898は石鋸、または玉鋸である。紅簾片岩を板状に割ったものである。上端部には割り取るための打ち欠き、両側縁に擦り痕がある。第16層より出土した。

899は石錘である。扁平な砂岩を用い、両端に紐を掛けるための打ち欠きを施す。一方の打ち欠き部分のみが残る。第16層より出土した。

901～914は砥石である。砂岩を利用し、方形を呈するものが多い。902は全面を使用する。中央部は両面とも使用による磨り減りが著しい。903は方形を呈する砥石の細片である。柱状片刃石斧の側縁部の可能性もある。904は3面が黒ずんでいる。高熱を受けており、鋳型を転用した可能性も考えられる。906は4面に使用がみられる。全体が黒く煤ける。907・910は被熱により、赤く変色する。そ



第91図　第58次石器実測図

れに伴って表面の剥離がすすみ、使用痕は不明瞭である。911は2面を使用する。片面は黒く煤け、複数の溝状の擦り痕がある。912は棒状の黒色粘板岩を用いた砥石である。3面を使用する。913は2面を使用する。片面は被熱しており、細かい筋状の擦り跡が残る。側面には十字状の溝がある。914は使用により中央部がゆるやかにくぼむ。901は土坑17、903は第14層、904・907・910・913は第16層、906は土坑43、909は大溝2、911は溝95、912は第11層、902・905・908・914は遺物包含層より出土した。

896・897・900は用途不明石器である。896は方形に成形し、全体を磨く。片面は凸レンズ状にふくらみをもち、全面に煤が付着する。砂岩製である。897は約1/2を欠損する。軽石を利用したものであり、造形を意図したと思われる溝が数条みられる。900は約1/2を欠損する。厚みのある楕円形の砂岩である。一方の表面を周囲から打ち欠いており、中央部には原礫面が残る。896は遺物包含層、897は第17層、900は溝95より出土した。

打製石器（第92～94図915～949）

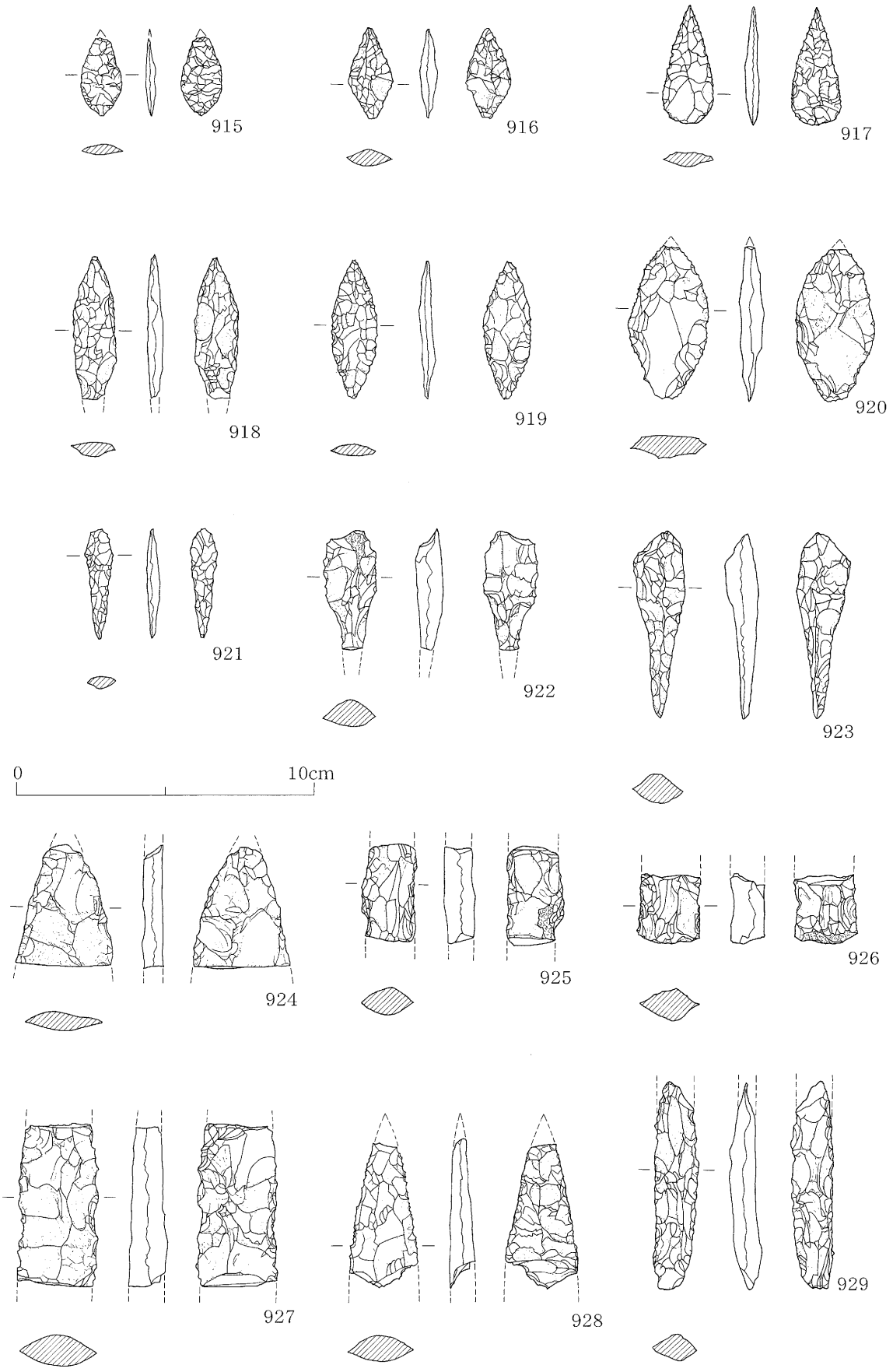
石鏃・石錐・石剣・削器・剥片がある。石材の不明な1点を除いて全てサヌカイト製である。

915～919は石鏃である。円基式、凸基有茎式、凸基無茎式のものがあった。917は円基式。915・916は凸基有茎式。918・919は凸基無茎式である。918は基部を欠損する。919は側縁部の細部調整が荒い。916・918は第16層、917は土坑2、919は第17層、915・920は遺物包含層より出土した。

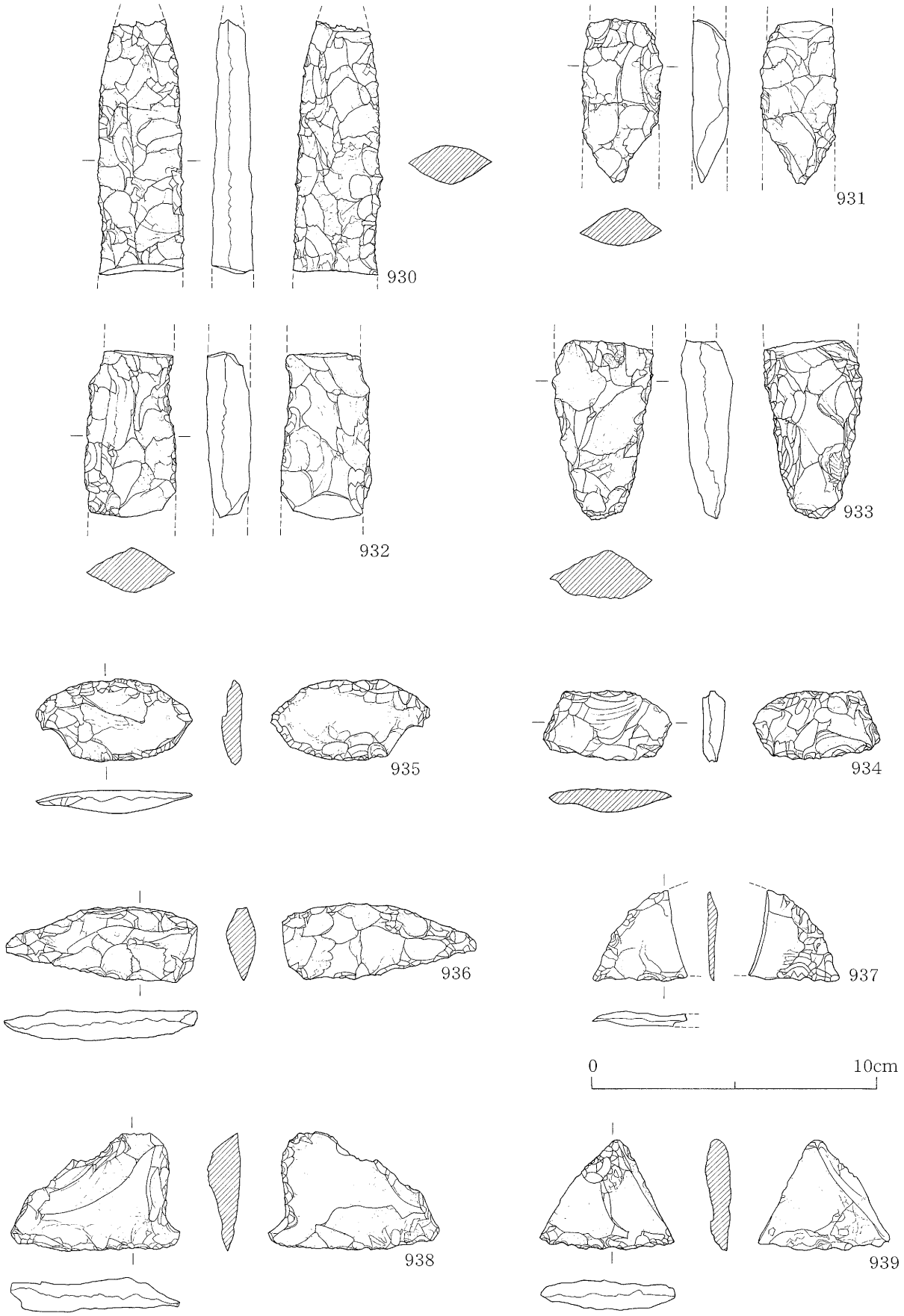
921～923は石錐である。全て涙滴形を呈する。921は小型のものである。錐部の断面形は菱形である。922は錐部を欠損する。923は長く伸びる錐部をもつ。断面形は菱形である。第16層より出土した。

924～933は石剣である。樹皮ないし柄が伴わない限り、「剣」と「槍」の区別は困難だが、本稿では恩智遺跡や当遺跡から、基部に樹皮を巻き付けた出土例や、木製の鞘に収まって出土した例があることから「剣」の名称を用いたい。924は先端部に近い部分であり、先端と基部を欠損する。側縁部の細部調整は荒い。925は両端を欠損する。側縁部に一部原礫面が残る。926は基端部である。基端面には原礫面が残る。927は両端を欠損しており、割れ面はひさし形を呈する。928は先端部である。最先端部および基部を欠損する。基部の割れ面はひさし形を呈する。929は小型の石剣である。石鏃には厚く、長いと思われるため石剣に分類した。先端部や基部の細部調整は荒い。930は先端と基端部を欠損する。基部の欠損に近い部分がわずかに幅広になる。931は両端を欠損する。欠損面はひさし形を呈する。側縁には並行する部分にわずかに刃潰しがある。932は両端を欠損する。上方の欠損面はひさし形を呈する。下方の欠損面に再度細部調整を施す。欠損した後転用を試みたと思われる。933は先端部を欠損する。側縁には刃潰しを施しており基部と思われる。欠損に近い中心部に原礫面がわずかに残る。924は大溝2、926は土坑9、927・931は第16層、929は第18層、930は土坑37、933はピット152、925・928・932は遺物包含層より出土した。

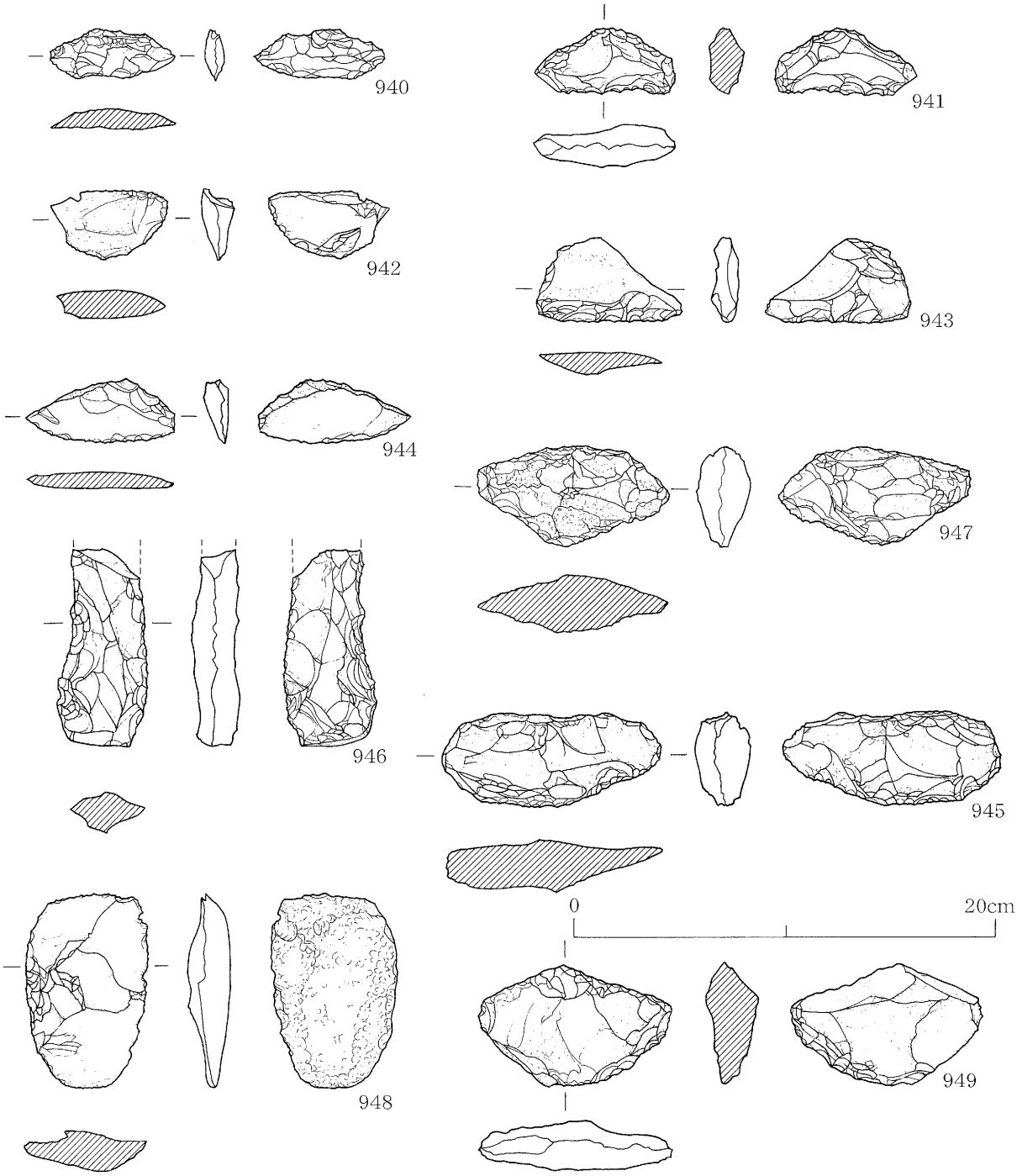
934～947、949は削器である。剥片を用いて、両面からの細部調整により刃部を作る不定型なものを削器とした。934は側縁に細部調整がめぐる。935は平面形が木の葉形である。幅広で先端部の作り出しはなく、側縁部に刃部をもつ。石鏃の未成品の可能性がある。936は基部となる部分が薄い。尖頭器の先端と思われる。937は石庖丁の先端状を呈する。隣り合う2辺に細部調整が施される。938は荒割りの剥片で、隣り合う2辺に細部調整を施す。939は正三角形の剥片を用い、底辺に細部調整を施す。940は平面形が木の葉形である。細部調整は荒い。941は三日月形の背部に刃潰しがみられる。942は船底形を呈する。頂部にも細部調整が施される。943は三角形に荒割りした底辺部に細部調整



第92図　第58次石器実測図



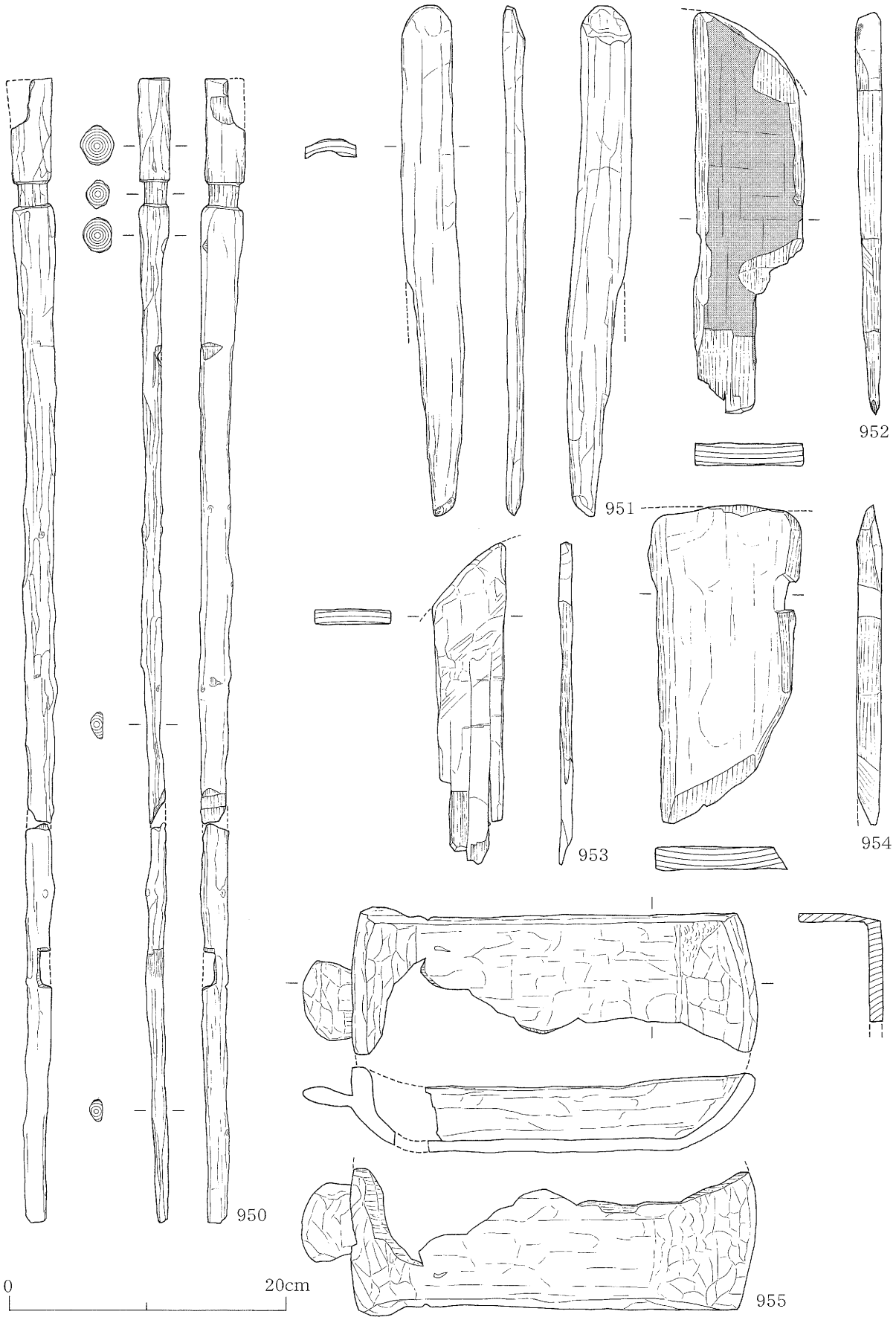
第93図　第58次石器実測図



第94図　第58次石器実測図

を施す。944は翼型の剥片を用いる。部分的に細部調整を施す。945は平面形が木の葉形である。背部に原礫面が残る。946は棒状の剥片を用いる。基部に原礫面が残る。石剣の未成品の可能性がある。細部調整は荒い。947は平面形が木の葉形である。部分的にみられる細部調整は荒い。949は灰白色を呈する。風化したサヌカイトのようであるが材質は不明。934は落ち込み9、935・942は大溝2、936・946は第17層、937はピット34、938・939・944は遺物包含層、940・943・947・949は第16層、941は土坑9、945は土坑36より出土した。

948はサヌカイト剥片である。片面は原礫面で、細部調整はない。土坑36より出土した。



第95図　第58次木製品実測図

4）木製品（第95図950～955）

弥生時代の遺構と遺物包含層より出土した。横断面の弧は木取りを表す。文中に針葉樹と広葉樹を記すが、専門家による樹種同定ではなく、筆者の肉眼観察によるものである。

950は有頭棒である。棒材の全体を削る。太い小口の端部は、平坦に削りやや下方の円周部に抉りを入れて長い突起状に残す。他の一端は丸く終わる。芯持材を使用する。材は針葉樹である。大溝２より出土。

951は棒である。扁平な長い棒状を呈する。断面はゆるやかなU字形を呈するが、凹面は腐食によるものである。弧状を呈する小口の端部は、凹面方向からの削り痕を残す。他の一端は丸く終わる。板目材を使用する。材は針葉樹である。第36層より出土。

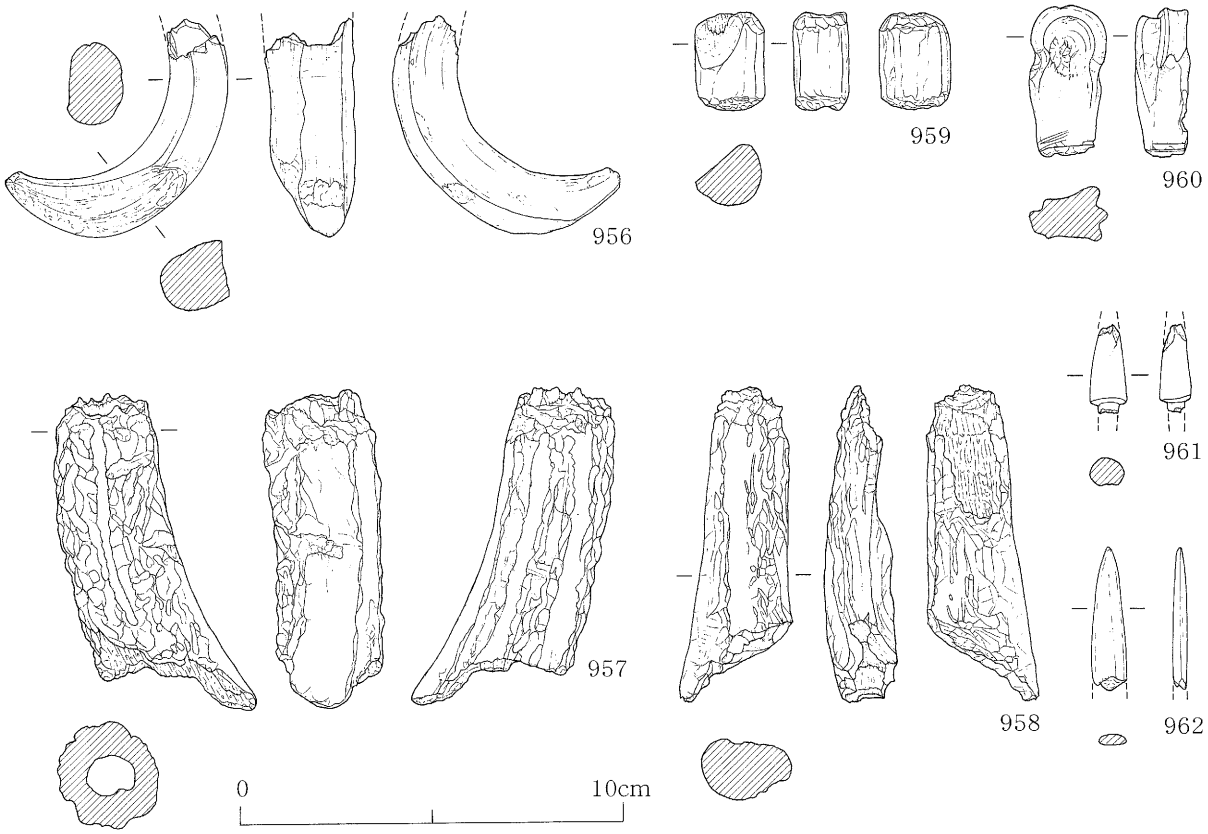
952・953は板である。952の上端部は弧状を呈する。片面の全体に焼け跡が残る。953は両側面が欠損する。上端部は弧状を呈する。中央部は側面方向からの削り痕が残る。板目材を使用する。材は広葉樹である。遺物包含層より出土。

954は有孔板である。残存する形状は長方形を呈する。角をもって貫通する孔が残る。抉り入り板の可能性もある。板目材を使用する。材は広葉樹である。大溝２より出土。

955は木槽である。底部から片側面にかけて欠損する。平面は長方形、側面は舟形を呈する。短辺の中央部に扁平な把手状の突起を削りだす。底部内外面の削り痕は不明瞭である。側面にはやや粗い削り痕が残る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。土坑36より出土。

5）骨角牙製品（第96図956～962）

弥生時代の遺構と遺物包含層より出土した。



第96図　第58次骨・角・牙製品実測図

956は加工痕の残る牙である。側面から先端部にかけて、斜めに削り尖らす。牙の根元付近は欠損する。材はイノシシ（雄）の右側上顎骨の牙である。かなり大型の個体である。遺物包含層より出土。

957～959は加工痕の残る角である。957は上端部の円周に削り痕を残す。下端部は欠損する。958は両端部の小口や円周部に削り痕が明瞭に残る。959は両端部の円周部に削り痕が残る。小口の一端には側面からの明瞭な削り痕を残す。一部研磨する。角幹の細い部分を短く加工する。材はシカの角である。957は第19層、958は大溝２、959は遺物包含層より出土。

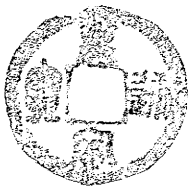
960は加工痕の残る骨である。半分が欠損する。小口の一端に溝を入れて折り取る。削り痕が明瞭に残る。材はシカの中手骨か中足骨の遠位端部である。遺物包含層より出土。

961は弭状角製品の部品である。本来は細い基部を持ち両端を瘤状に削り出すが、一端の瘤状部以外は欠損する。明瞭な削り痕を残し全体を研磨する。材はシカの角である。土坑82より出土。

962は骨製の刺突具である。薄い板状を呈する骨の両側辺を削って尖らす。のち全体を研磨する。横断面は薄い楕円形状を呈する。材はシカの長骨であり、骨幹の一部である。中手骨の可能性もある。第17層より出土。

６）銭貨(第97図963)

963は銭貨である。銭種は皇宋通宝、北宋銭である。外径2.4cm、中央の郭孔は0.7cmを測る。初鋳年は宝元２年（1039年）である。材は銅である。自然流路１より出土。



963

第97図　第58次銭貨拓影

４．第60次調査－11工区－

ａ．層位（第98図　図版119・120）

第１層　暗緑灰色（10GY3/1）粘土層。中粒砂を少量含む。層厚は40cm以上。上層は機械掘削により除去した。上面で井路を2条検出した。

第２層　暗緑灰色（7.5GY3/1）粘土層。細粒砂を含む。層厚は約40cm。３層に分かれる。上面で落ち込み1を検出した。

第３層　オリーブ黒色（5GY2/1）粘土層。層厚は約10～30cm。２層に分かれる。弥生土器・土師器・瓦器・黒色土器（1089）・瓦の細片が出土した。

第１～３層は江戸時代以降の遺構面を形成する層。

第４層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土層。中粒砂を少量含む。層厚は約20～35cm。３層に分かれる。弥生土器・土師器・瓦器の細片が出土した。上面で溝１・３、落ち込み２を検出した。

鎌倉・室町時代の遺構面を形成する層。

第５層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土層。粗粒砂を含む。層厚は約25cm。調査地全域に堆積する。土師器・須恵器の細片が出土した。上面で溝４、落ち込み３を検出した。

第６層　暗オリーブ灰色（5GY3/1）シルト質粘土層。中粒砂を含む。層厚は約５cm。５地区付近に薄く堆積する。土師器の細片が出土した。

第５・６層は奈良・平安時代の遺構面を形成する層。

第７層　灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質土層。中粒砂を含む。層厚は約10～20cm。２層に分かれる。１～３地区に堆積する。須恵器・弥生土器の細片が出土した。

第８層　暗オリーブ灰色（5GY3/1）シルト質粘土層。層厚は約10～15cm。上面で足跡を検出した。

第９層　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘土層。炭、植物遺体を含む。層厚は約15cm。３層に分かれる。調査地全域に薄く堆積する。弥生土器の細片が出土した。上面で土坑２・３、ピット１～５を検出した。

第７～９層は層位から古墳時代に相当する層。

第10層　灰オリーブ色（5Y4/2）粘土層。細粒砂を含む。層厚は約20cm。２層に分かれる。５～７地区に堆積する。弥生土器が出土した。

第11層　暗オリーブ灰色（5GY3/1）粘質土層。細粒砂を多く含む。層厚は約５～20cm。３・４地区に堆積する。弥生土器、木製品が出土した。上面で流路、溝５～７、土坑５、ピット６・７を検出した。

第12層　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト質粘土層。層厚は約20cm。２層に分かれる。１～３地区に堆積する。弥生土器が出土した。

第13層　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土層。細～中粒砂を多く含む。層厚は約20～45cm。５地区に厚く堆積する。層内より甕（1030～1032）・壷（1033・1034）・細頸壷（1035）・鉢（1036）・高杯（1037・1038）などの弥生土器、砥石（1111）などの遺物がコンテナ1/2箱分出土した。

第10～13層は弥生時代中期中葉から後半以降に相当する層。

第14層　暗オリーブ灰色（5GY3/1）砂混じり土層。中～粗粒を多く含む。下部に礫を含む砂質土が堆積する。層厚は約25～35cm。７層に分かれる。2～4地区に堆積する。層内より弥生土器、石器、木製品がコンテナ１箱分出土した。上面で高まり、溝９・10を検出した。弥生時代中期前半から中頃の遺構面を形成する層。

第15層　黒色（7.5Y2/1）粘土層。暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土をブロック状に含む。層厚は約10cm。

７地区南端に薄く堆積する。

第16層　黒色(2.5Y2/1)砂混じり粘土層。粗粒砂、炭を含む。層厚は約20～35cm。北部に第16a～16c層が堆積し、高まりから南部は第16c～16e層が堆積する。１地区付近に厚く堆積する。２時期の遺構面を形成する。弥生土器、石器、動物遺体がコンテナ1/2箱分出土した。上面でピット８～23、土坑６～８、溝11～13・20を検出した。弥生時代中期前半の遺構面を形成する層。

第17層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土層。細粒砂を少量含む。層厚約20cm。２層に分かれる。層内より甕（1058・1059）などの弥生土器が出土した。

第18層　オリーブ黒色(5Y2/2)粘土層。層厚約15cm。層内より弥生土器が出土した。上面で溝19を検出した。弥生時代前期中葉から中期初頭の遺構面を形成する層。

第19層　黒色(10Y2/1)粘土層。暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト質粘土、炭、植物遺体を含む。層厚約30cm。３層に分かれる。弥生土器の細片が出土した。上面で溝14～18を検出した。弥生時代前期前半から中葉の遺構面。

第20層　オリーブ黒色(5Y3/2)粘土層。植物遺体を多く含む。層厚は約15cm。

第21層　灰オリーブ色(5Y4/2)粘土層。層厚は約20cm。

第22層　オリーブ灰色(10Y4/2)粘土層。層厚は約10cm。

第23層　オリーブ灰色(10Y4/2)粘土層。シルト含む。層厚は約15cm。

第24層　灰色(10Y4/1)粘土層。シルトを帯状に含む。層厚は約15cm。

第25層　灰色(10Y4/1)粘土層。層厚は約20cm。

第26層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土層。層厚は約25cm以上。

第20層以下は縄文時代晩期以前の自然堆積層。

b．遺構

今回の調査地では弥生時代前期から近・現代までの遺構を検出した。以下、主要な遺構を番号順に概観して記す。各遺構面で検出したピットの規模、埋土の詳細は（第２表）に記す。

［弥生時代］

＜前期＞

第19層上面遺構（第99図　図版121）

溝14～18（５～７地区）を検出した。

溝14・16～18は東西方向、溝15は南北方向に延びる不整形な溝で、最大幅約1m30cm、最小幅約35cm、深さ約４～９cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土はオリーブ黒色（5Y2/2）の粘土である。溝15内より有頭棒（1128）が出土した。第19層は調査区全域に広がるが、上層の溝により削られている部分が多い。検出したのは５～７地区であるが、第58次調査（10工区）同様に同形状の溝が調査区内に広がっている可能性がある。

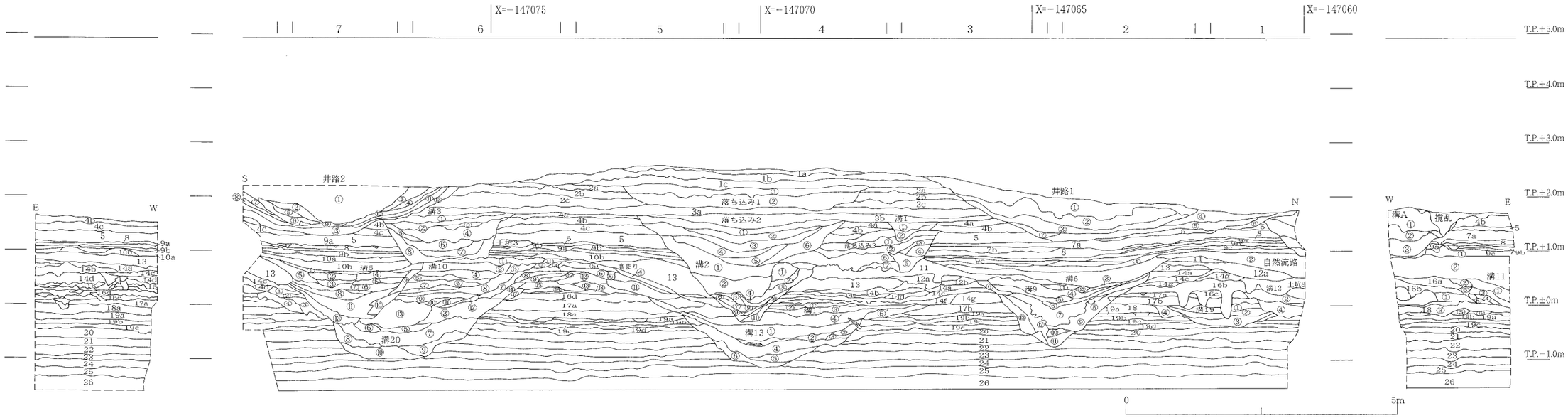
これらの溝を検出した黒色粘土層上面では、同形状の溝（第52・58次調査）やピット（第53・56次調査）が検出されている。遺物は出土していない。層位関係より前期中葉以前と考えられる。

＜前期中葉～中期初頭＞

第18層上面遺構（第99図　図版122）

溝を１条検出した。層内より甕（1060）などの弥生土器が出土した。

溝19（１地区）は東西方向の溝である。第19層上面で検出したが、第18層からの切込みを断面によ



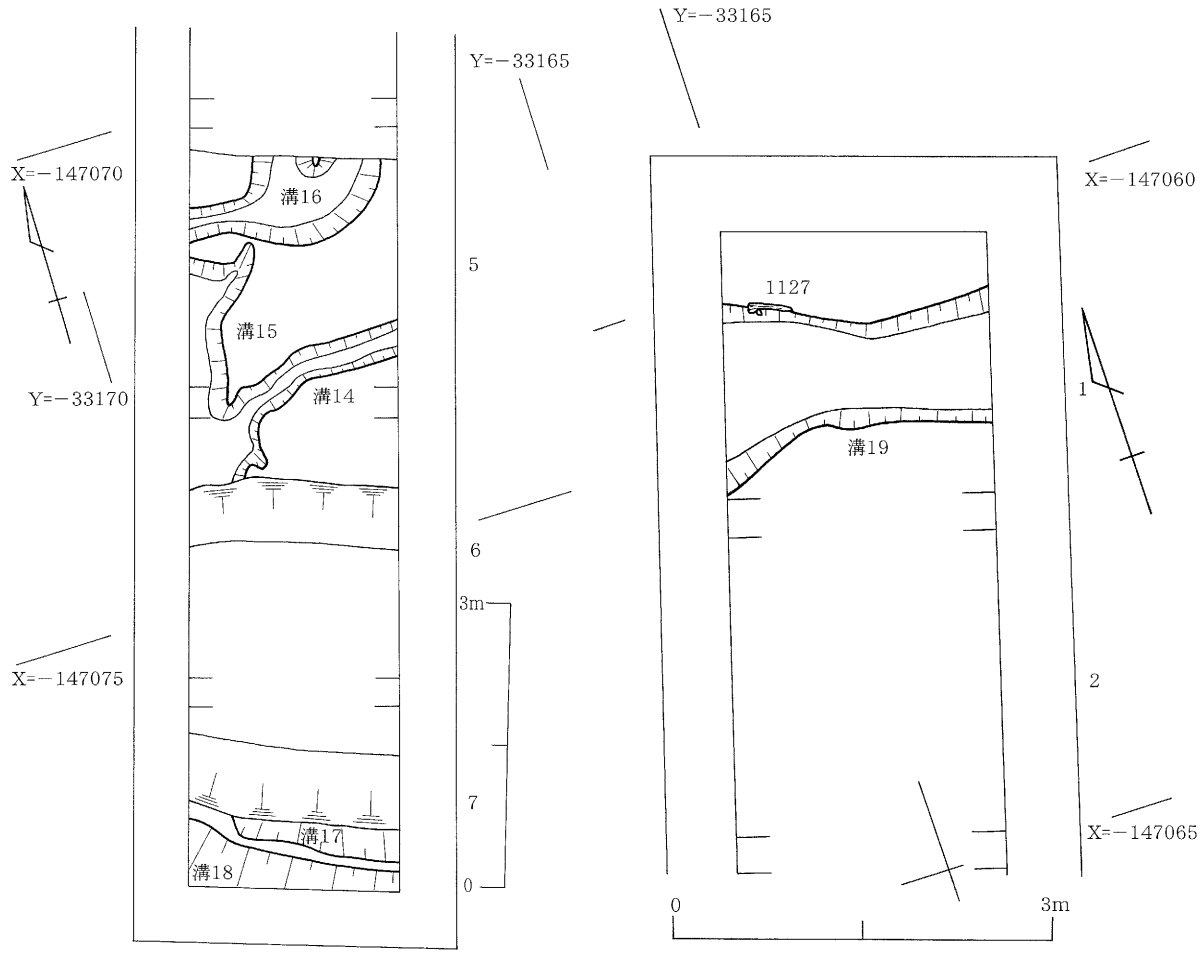
11工区層名一覧

第１ａ層　7.5GY3/1 暗緑灰 粘土(中粒砂を少量含む)
第１ｂ層　10GY3/1 暗緑灰 砂混じり粘土(細~中粒砂を全体に含む)
第1c層　10Y3/1 オリーブ黒 粘土(シルトを含む)
第2a層　7.5Y3/1　オリーブ黒　砂混じり粘土(細~中粒砂を少量含む)
第2b層　10GY2/1 緑黒 砂混じり粘土(中粒砂を全体に含む)
第2c層　7.5GY3/1 暗緑灰 砂混じり粘土(細~中粒砂を含む)
第3a層　5GY2/1 オリーブ黒 粘土(細粒砂を少量含む)
第3b層　5GY3/1　暗オリーブ灰　粘土(細粒砂を含む)
第4a層　10Y4/1　灰　粘土(シルトを少量含む)
第4b層　7.5Y3/1　オリーブ灰　砂混じり粘土(細~中粒砂を含む)
第4c層　7.5Y3/1　オリーブ灰　砂混じり粘土(粗粒砂を含む)
第5層　7.5Y3/1 オリーブ灰 砂混じり粘質土(粗粒砂を含む)
第6層　5GY3/1 暗オリーブ灰　シルト質粘土(中粒砂を全体に含む)
第7a層　7.5Y4/2　灰オリーブ　砂混じり土(中粒砂を層状に含む)
第7b層　7.5Y4/2　灰オリーブ　シルト質土(中粒砂を含む)
第8層　5GY3/1 暗オリーブ灰　シルト質粘土(細粒砂含む)
第9a層 2.5GY2/1　黒　粘土(炭、植物遺体を含む)
第9b層 2.5GY3/1　暗オリーブ灰　粘土(シルト、炭を少量含む)
第9c層 7.5GY3/1　暗緑灰　粘土(中粒砂を含む)
第10a層　2/5GY3/1　暗オリーブ灰粘土(細粒砂を含む)
第10b層　5Y4/2 灰オリーブ 粘土(細粒砂を少量含む)
第11層　5GY3/1　暗オリーブ灰　砂混じり粘質土(細粒砂を多く含む)
第12a層　10Y3/1　オリーブ黒　粘質土(シルトを含む)
第12b層　2.5GY3/1　暗オリーブ灰 シルト質粘土(細粒砂を帯び状含む)
第13層　5Y3/1　オリーブ黒　砂混じり粘土(細~中粒砂を全体に含む)
第14a層　2.5GY3/1　暗オリーブ灰 シルト
第14b層　5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり土(中~粗粒砂を多く含む)
第14c層　5GY2/1 黒 粘土(細粒砂を少量含む)
第14d層　2.5GY2/1　黒　砂混じり粘質土(中粒砂を多く含む)
第14e層　7.5GY3/1　暗緑灰　砂質土(粗粒砂、礫多く含む)
第14f層　7.5Y3/2　オリーブ黒　砂質土(中~粗粒砂、炭含む)
第14g層　5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘質シルト(中粒砂、植物遺体、炭混じる)
第15層　7.5Y2/1 黒 粘土(7.5GY4/1暗緑灰色粘土をブロック状に含む)
第16a層　2.5Y2/1 黒 砂混じり粘土(粗粒砂、炭を含む)
第16b層　2.5Y2/1 黒 砂混じり粘土(粗粒砂、炭、焼土を含む)
第16c層　5Y2/2　オリーブ黒 砂混じり粘土(中粒砂、炭を少量含む)
第16d層　7.5Y2/1 黒 砂混じり粘土(細粒砂、炭を少量含む)
第17a層　7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土(細粒砂を少量含む)
第17b層　5Y2/2 オリーブ黒 粘土
第18層　5Y2/2 オリーブ黒 粘土(シルトを少量含む)
第19a層　10Y2/1 黒 粘土(7.5GY4/1暗緑灰色のシルト質粘土を層状に含む)
第19b層　7.5Y2/1 黒 粘土(7.5GY4/1暗緑灰色のシルト質粘土を層状、炭、植物遺体を含む)
第19c層　5Y2/1　黒　粘土(20層をブロックで含む)
第20層　5Y3/2 オリーブ黒 粘土(植物遺体を多く含む)
第21層　5Y4/2 灰オリーブ 粘土(植物遺体含む)
第22層　10Y4/2 オリーブ灰 粘土
第23層　10Y4/2 オリーブ灰 粘土
第24層　10Y4/1 灰　粘土(シルトを帯状に含む)
第25層　10Y4/1 灰　粘土(シルト含む)
第26層　2.5GY4/1 暗オリーブ灰(シルト含む)

遺構

井路1　①N2/0 黒　砂混じり土(粗粒砂を全体に含む)
②N2/0 黒　砂混じり土(シルト~細粒砂を全体に含む)
③N2/0 黒 シルト質土(細粒砂、植物遺体を全体に含む)
④10Y3/1 オリーブ黒 粘土(シルト、植物遺体含む)
⑤7.5GY3/1 暗緑灰 シルト質粘土(細粒砂をブロック状に含む)
⑥7.5Y2/1　黒　砂混じり粘土(細粒砂を全体に含む)
⑦7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質土(植物遺体、貝を含む)
井路2　①10Y2/1 黒 砂混じり粘土(細粒砂をブロック状に含む)
②10Y3/1 オリーブ黒 粘土(シルトを層状に含む)
③10Y2/1 黒 砂混じり粘土(中粒砂を含む)
④7.5Y2/1 黒 粘土(細粒砂を含む)
⑤10GY3/1 暗緑灰 砂混じり土(シルト~細粒砂をブロック状に含む)
⑥2.5GY2/1 黒 砂混じり粘土(細粒砂を全体に含む)
⑦5Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土(細粒砂を少量含む)
⑧5Y3/1 オリーブ黒 粘土(シルトを少量含む)
⑨5Y3/1 オリーブ黒 粘土(細粒砂含む)
⑩5Y3/1 オリーブ黒 粘土(植物遺体含む)
⑪5Y2/2 オリーブ黒 粘土(シルトをブロック状に含む)
⑫5Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土(植物遺体を含む)
⑬10Y3/2 オリーブ黒 粘土(シルトを少量含む)
溝1　①10Y3/1 オリーブ黒 砂混じり粘土(中粒砂を少量含む)
②5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘土(細~中粒砂を全体に含む)
溝2　①7.5GY3/1 暗緑灰 粘土(シルト含む)
②2.5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト質粘土(細粒砂含む)
③2.5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土
④7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土
⑤2.5Y2/1　黒　粘土(細粒砂、植物遺体含む)
⑥10YR2/1 黒 砂質土(細粒砂、植物遺体を多く含む)
⑦2.5Y2/1　黒　砂質土(中粒砂、植物遺体を多く含む)
⑧2.5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘質土(細粒砂を含む)
⑨2.5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり土(粗粒砂を含む)
⑩2.5GY3/1 暗オリーブ灰 粘質土(細粒砂を少量含む)
⑪7.5GY3/1 暗緑灰 粘土(中粒砂を含む)
⑫7.5Y2/1 黒 粘土(中粒砂少含む)
⑬10Y2/1　黒　砂混じり粘質土(中粒砂を多く含む)
溝3　①10Y4/1 灰　シルト質粘土(細粒砂を含む)
②10Y4/1 灰 粘土(中粒砂を含む)
③2.5GY4/1 暗オリーブ灰　シルト質粘土(細粒砂を少量含む)
④7.5GY3/1 暗緑灰 砂混じり粘質土(シルト~細粒砂を全体に含む)
⑤7.5GY4/1 暗緑灰 シルト質粘土(植物遺体を含む)
⑥7.5Y3/1　オリーブ黒　粘質土(シルトを少量含む)
⑦10Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土(細粒砂、植物遺体を含む)
⑧10Y3/1　オリーブ黒　粘土(シルトをブロック状に含む)
⑨5Y3/1　オリーブ黒　シルト質粘土(植物遺体含む)
⑩5Y2/2　オリーブ黒　粘土(植物遺体を含む)
⑪5Y3/1　オリーブ黒　砂混じり粘土(細粒砂含む)
⑫7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土(植物遺体含む)
⑬10Y3/2　オリーブ黒　粘土(シルトを少量含む)
溝1　①10Y3/1 オリーブ黒　砂混じり粘土(中粒砂を少量含む)
②5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘土(細~中粒砂を全体に含む)
溝2　①7.5GY3/1 暗緑灰 粘土(シルト含む)
②2.5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト質粘土(細粒砂含む)
③2.5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土
④7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土
⑤2.5Y2/1 黒 粘土(細粒砂、植物遺体を含む)
⑥10YR2/1 黒 砂質土(細粒砂、植物遺体を多く含む)
⑦2.5Y2/1 黒 砂質土(中粒砂、植物遺体を多く含む)
⑧2.5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘質土(細粒砂を含む)
⑨2.5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり土(粗粒砂を含む)
⑩2.5GY3/1 暗オリーブ灰 粘質土(細粒砂を少量含む)
⑪7.5GY3/1 暗緑灰 粘土(中粒砂を含む)
⑫7.5Y2/1 黒 粘土(中粒砂少含む)
⑬10Y2/1　黒　砂混じり粘質土(中粒砂を多く含む)
溝3　①10Y4/1 灰　シルト質粘土(細粒砂を含む)
②10Y4/1 灰 粘土(中粒砂を含む)
③2.5GY4/1 暗オリーブ灰　シルト質粘土(細粒砂を少量含む)
④7.5GY3/1 暗緑灰 砂混じり粘質土(シルト~細粒砂を全体に含む)
⑤7.5GY4/1 暗緑灰 シルト質粘土(植物遺体を含む)
⑥7.5Y3/1　オリーブ黒　粘質土(シルトを少量含む)
⑦10Y3/1 オリーブ黒 シルト質粘土(細粒砂、植物遺体を含む)
⑧10Y3/1　オリーブ黒　粘土(シルトをブロック状に含む)
溝5　①5Y4/2　灰オリーブ　粘土(中粒砂を少量含む)
②7.5Y4/2 灰オリーブ 砂質土(粗~礫を多く含む)
③7.5Y4/2　灰オリーブ　砂質土(粗粒砂を多く含む)
④5GY4/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘土(中粒砂を含む)
⑤5GY4/1 暗オリーブ灰　粘土(中粒砂を少量含む)
⑥5Y4/1 灰 砂質土(粗粒砂を多い)
⑦5Y4/1　灰　砂混じり粘質土(中粒砂を含む)
⑧5Y4/1　灰　砂質土(粗粒砂、同色の粘土ブロック含む)
⑨5GY2/1 オリーブ黒 砂混じり粘質土(中粒砂を含む)
⑩5GY2/1 オリーブ黒 砂混じり粘質土(細~中粒砂を少量含む)
⑪5Y2/1 黒 粘質土(細~中粒砂、植物遺体を全体に含む)
⑫5GY2/1 オリーブ黒 砂混じり粘質土(中粒砂、植物遺体を含む)
溝6　7.5Y3/1　オリーブ黒　粘質シルト(細粒砂を少量含む)
溝9　①7.5Y3/1　オリーブ黒 粘土(細粒砂を少量含む)
②7.5Y3/1　オリーブ黒　粘土(細粒砂を少量含む)
③5Y4/1 灰　砂混じり粘質土(粗粒砂を含む)
④10Y3/1　オリーブ黒　粘土(中粒砂を含む)
⑤5Y3/2　オリーブ黒　砂混じり粘質土(粗粒砂を多く含む)
⑥10Y3/1 オリーブ黒 粘土(中粒砂、植物遺体を少量含む)
⑦2.5GY2/1 黒 粘土(細粒砂、植物遺体を多く含む)
⑧2.5GY2/1 黒 粘土(中粒砂含む)
⑨7.5Y4/1　灰　砂混じり粘質土(粗粒砂を含む)
⑩2.5GY2/1 黒 粘土(細粒砂、植物遺体を含む)
⑪2.5GY2/1 黒 粘土(細粒砂、植物遺体を少量含む)
⑫7.5Y4/1 灰 粘質土(中粒砂含む)
⑬7.5Y4/1 灰 砂混じり粘質土(中~粗粒砂を多く含む)
溝10　①5Y2/2　オリーブ黒　砂混じり土(粗粒砂を全体に含む)
②7.5Y3/1 オリーブ黒 砂質土(細~中粒砂を多く含む)
③5Y2/1　黒　砂混じり土(中粒砂を多く含む)
④7.5Y4/1　灰　砂質土(細粒砂を多く含む)
⑤7.5GY4/1 暗緑灰 砂混じりシルト質粘土(細粒砂を全体に多く含む)
⑥5GY4/1　暗オリーブ灰　砂質土(細粒砂を多く含む)
⑦2.5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト質粘土(細粒砂含む)
⑧7.5GY4/1 暗緑灰 シルト質粘土(細粒砂、炭を含む)
⑨7.5Y3/1 オリーブ黒　シルト(細粒砂含む)
⑩7.5Y3/2 オリーブ黒 シルト
⑪5Y2/2 オリーブ黒　粘質シルト(細粒砂含む)
⑫5Y3/1 オリーブ黒　粘土(炭、植物遺体を含む)
⑬10Y3/1 オリーブ黒 砂(極細~細粒砂を多く含む)
溝11　①10Y3/1 オリーブ黒 砂混じり粘質土(粗粒砂、炭、植物含む)
②10Y2/1 黒 粘土(中粒砂を含む)
③7.5Y3/2 オリーブ黒 砂混じりシルト(粗粒砂、植物遺体を含む)
④5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘質土(細~中粒砂、植物遺体を含む)
⑤2.5GY3/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘質土(細粒砂、炭を少量含む)
⑥2.5GY4/1 暗オリーブ灰 砂混じり粘質土(粗粒砂、炭含む)
①′5Y2/2 オリーブ黒 砂混じり粘質土(粗粒砂、植物遺体を含む)
②′5Y2/2 オリーブ黒 砂混じり粘質土(中~粗粒砂、植物遺体を含む)
③′5Y2/2 オリーブ黒 砂混じり粘質土(粗粒砂、植物遺体を多く含む)
④′5Y2/2 オリーブ黒 砂混じり粘土(細粒砂、植物遺体、貝を全体に多く含む)
⑤′5Y2/2 オリーブ黒 砂混じり粘土(中粒砂、植物遺体、貝を含む)
溝12　①5Y2/1 黒 砂混じり粘土(細~中粒砂、炭、植物遺体を含む)
②7.5Y2/1 黒 砂混じり粘土(中粒砂、炭、植物遺体を含む)
③10YR1.7/1 黒 砂混じり土(中粒砂、炭、焼土を全体に含む)
④2.5Y2/1 黒 砂混じり粘土(粗粒砂、炭、焼土、植物遺体を含む)
⑤5Y3/1 オリーブ黒 粘土(炭含む)
溝13　①5Y2/2 オリーブ黒 砂混じり粘土(細粒砂、植物遺体、貝を全体に含む)
②2.5GY　黒　粘土(細粒砂、植物遺体を含む)
③2.5GY 黒 粘土(植物遺体を含む)
④2.5GY　黒　粘土(5Y4/2灰オリーブ粘土、中粒砂、植物遺体を少含む)
⑤2.5GY　黒　粘土(5Y4/2灰オリーブ粘土、植物遺体を少量含む)
⑥2.5GY　黒　粘土(5Y4/2灰オリーブ粘土のブロックを多く含む)
溝19　①10Y2/1　黒　粘土(炭が少量混じる)
②5Y2/1 黒 粘土(炭、植物含む)
③2.5Y2/1 黒 粘土(炭を含む)
④5Y3/1　オリーブ黒　粘土(炭を下層に層状に含む)
溝20　①7.5Y2/1　黒　粘土(細粒砂、炭を含む)
②5Y2/2　オリーブ黒　粘土(細粒砂を含む)
③2.5Y3/1　黒褐　粘土(植物遺体を全体に多く含む)
④5Y2/2　オリーブ黒　粘土(細粒砂、炭を全体に含む)
⑤2.5Y3/1　黒褐　粘土(炭、植物遺体を少量含む)
⑥2.5Y3/1 黒褐 粘土(植物含む)
⑦5Y2/2　オリーブ黒　粘土(炭、植物遺体を含む)
⑧5Y2/1　黒　粘土(10Y4/1灰粘土をブロック状、植物遺体含む)
⑨5Y2/1　黒　粘土(細粒砂、10Y4/1灰粘土ブロック、植物遺体を含む)
⑩5Y2/1　黒　粘土(細粒砂、10Y4/1灰粘土をブロック状に含む)
高まり①5Y3/1　オリーブ黒　砂混じり粘土(シルト~細粒砂を含む)
②7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土(シルト~細粒砂を含む)
③7.5Y3/1　オリーブ黒　粘土(細粒砂を含む)
④7.5Y4/1　灰　砂混じり粘土(細粒砂を少量含む)
⑤7.5Y2/1 黒 粘土(細粒砂を含む)
⑥10Y3/1　オリーブ黒　粘土(10GY4/1暗緑灰色粘土をブロック状に含む)
⑦10Y3/1　オリーブ黒　粘土(細粒砂を少量含む)
⑧5GY2/1 オリーブ黒 粘土
⑨5GY2/1　オリーブ黒　粘土(10GY4/1暗緑灰色粘土をブロック状に含む)
⑩10Y4/1 灰 粘土
⑪10Y3/1 オリーブ黒 粘土(10Y4/1灰色粘土をブロック状に多く含む)
⑫7.5Y2/1 黒 粘土(10Y4/1灰色粘土をブロック状に含む)
⑬2.5GY2/1 黒 粘土
⑭10GY3/1 暗緑灰 シルト質粘土
⑮2.5GY2/1 黒 粘土(10Y3/1オリーブ黒粘土をブロック状に含む)
⑯10GY3/1 暗緑灰 粘土(炭が混る)
⑰10GY3/1 暗緑灰 粘土
⑱7.5GY2/1 緑黒 粘土(炭少含む)
土坑3　5GY4/1 暗オリーブ灰　砂混じり粘土(粗粒砂を含む)
土坑8　10Y2/1 黒 砂混じり粘土(中粒砂、炭、植物遺体を含む)
溝A　①10Y2/1 黒 粘土(中粒砂を少量含む)
②2.5GY2/1　オリーブ黒　粘土(中粒砂を含む)
③2.5GY2/1 黒 砂混じり粘土(粗粒砂を多く含む)
落込み1　①2.5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト質粘土(細粒砂含む)
②2.5GY3/1　暗オリーブ灰　粘土(細粒砂を少量含む)
落込み2　①7.5Y4/1 灰 粘土
②7.5Y4/1 灰 粘土(中粒砂を含む)
③10Y4/1 灰 粘土
④10Y3/1　オリーブ黒　粘土
⑤7.5Y3/1　オリーブ黒　粘土(植物遺体を含む)
⑥2.5GY3/1 暗オリーブ灰 粘土(シルト~細粒砂を含む)
落込み3　①7.5Y2/1　黒　砂混じり粘土(細粒砂を少量含む)
②2.5GY3/1 暗オリーブ灰　シルト質粘土(細粒砂を多く含む)
③2.5GY4/1 暗オリーブ灰　シルト質粘土
④10Y4/1 灰　砂混じり粘土(細粒砂を含む)
⑤10Y2/1　黒　砂混じり粘土(中粒砂を全体に含む)
⑥7.5Y2/1 黒 粘土(シルトを含む)
⑦7.5Y2/1 黒 粘土(細粒砂を含む)

第98図　第60次層位断面図



第99図　第60次第18・19層上面遺構平面図

り確認した。断面観察による規模は幅約２m、深さ約40cmを測る。北肩は溝12によって切られている。断面形はゆるやかな皿状を呈する。埋土は炭、植物遺体を含む黒色（10Y2/1）の粘土を主体として４層に分かれる。壷（1023）などのⅡ様式の弥生土器、柄状木製品（1127）が出土した。

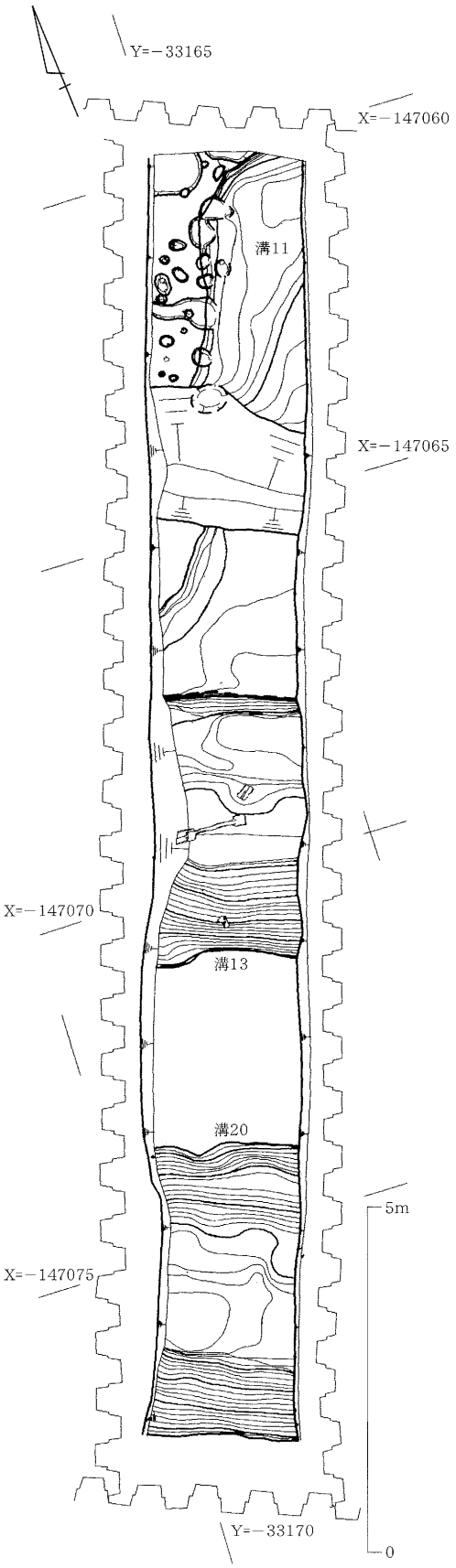
＜中期前半＞

第16層上面遺構（第100～102図　図版123～132）

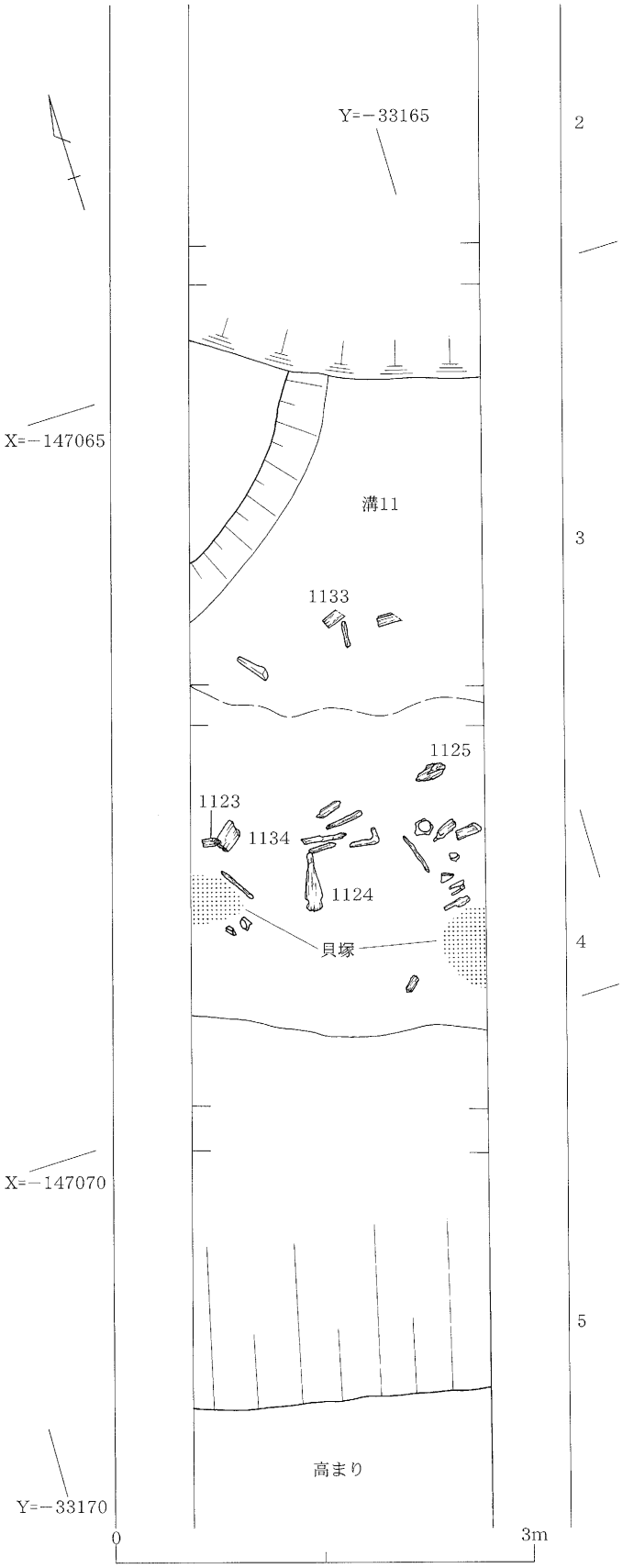
ピット16個、土坑３基、溝４条を検出した。土坑、ピット群を検出した１・２地区は第16層が他の地区より厚く堆積する。切り合い関係から少なくとも３時期の遺構がある。

第16層内より出土した遺物は、コンテナ1/2箱分である。第16ａ層内から壷（1048～1050）・甕（1051・1052）・細頸壷（1053）・甕蓋（1054）・高杯（1055）などの弥生土器が出土した。第16b層内から壷（1056）・甕（1057）などの弥生土器が出土した。

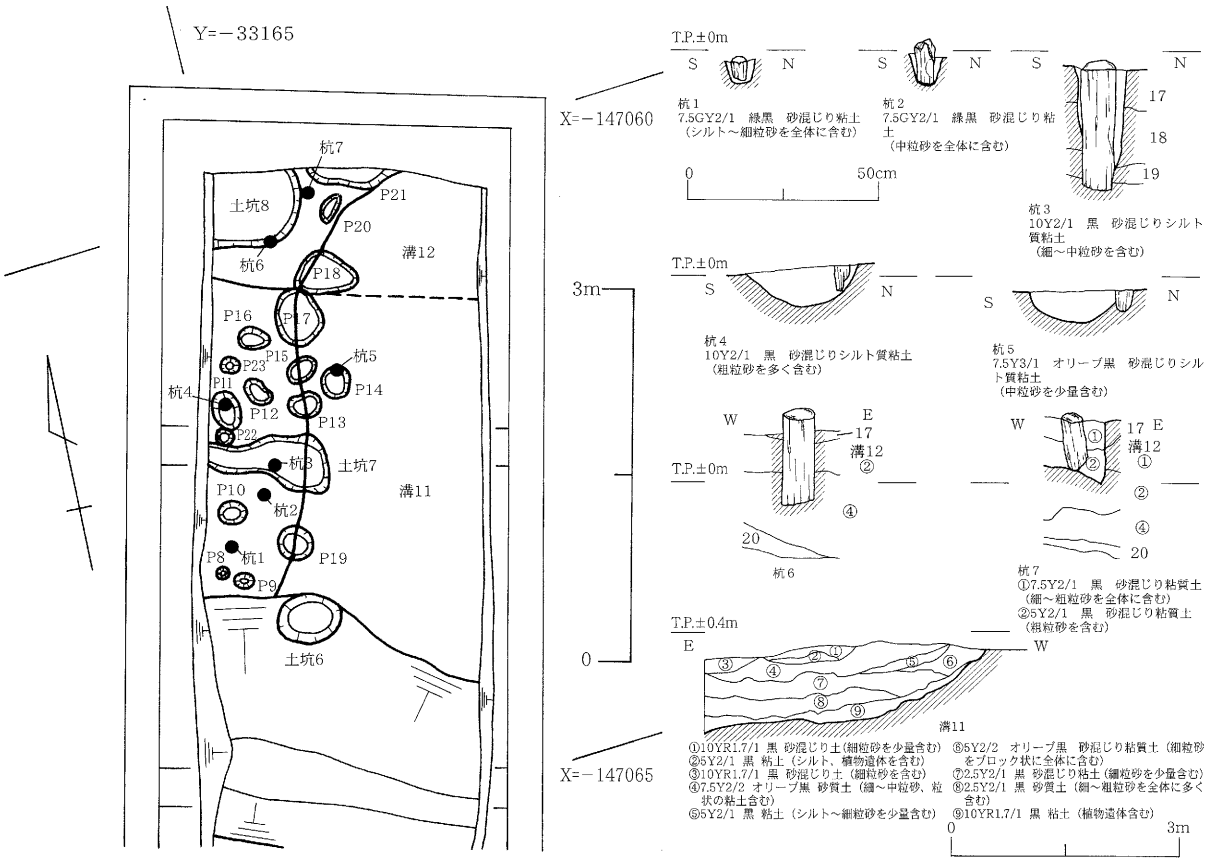
溝11（１～４地区）は南北方向に延びる溝で、西肩のみ検出した。高まり(５地区)北側で西へ大きく曲がる。検出幅約1m80cm、深さ約70cmを測り落ち込み状に窪む。埋土上部は黒色（10YR1.7/1）細粒砂混じり土と黒色（5Y2/1）粘土の互層で下部は粗粒砂を多く含む砂質土である。コンテナ４箱分の遺物が出土した。壷（982～989）・無頸壷（990）・鉢（991・992）・高杯（993）・甕（994～1009）などの弥生土器、円板状土製品（1092・1095・1097・1098）、削器（1118・1121）、多くの木製品（1123～1126・1131・1133・1134）、イノシシ、シカ、サル、イヌ、スッポン（資241～266）などの動物遺体が出土した。木製品には欠損や焼け痕がみられることから、使用後に破棄され



第100図　第60次第16層上面遺構平面図



第101図　第60次第16層上面溝11内遺物出土状況平面図



第102図　第60次第16層上面遺構平面（部分）・断面図

たものと考えられる。

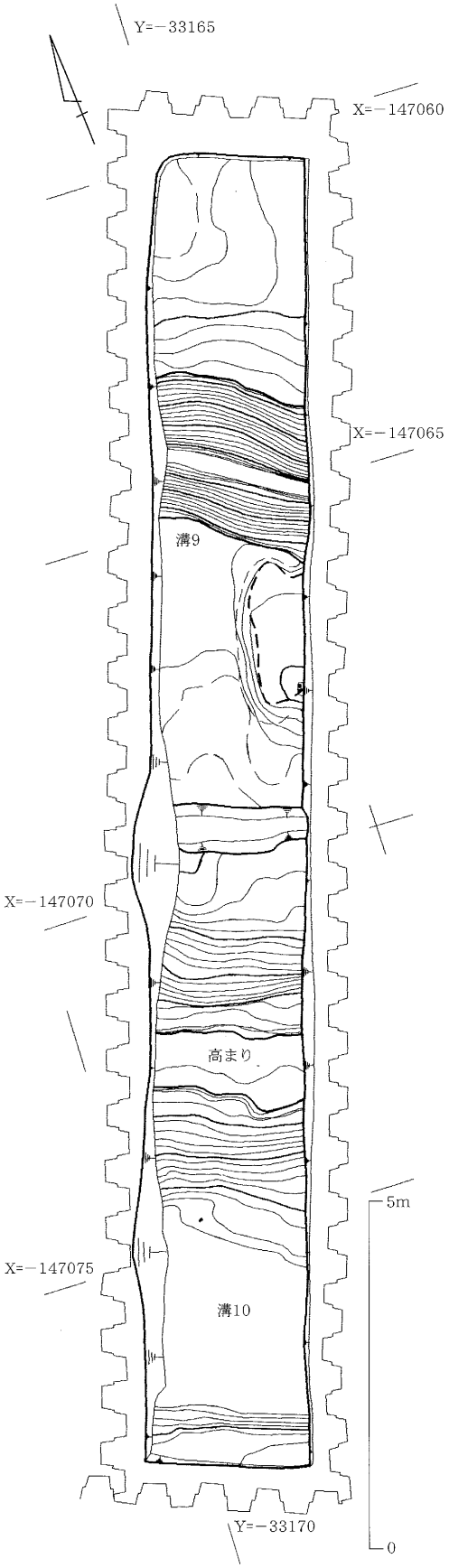
溝11は第16層上面で検出した遺構では、もっとも新しい時期に属する。出土した弥生土器はⅡ様式のものを中心にⅢ様式のものも含む。機能時期は中期前半であると考えられる。

また、小貝塚を４地区の東西端２箇所で検出した。検出範囲は西側が約50～60cm、東側が約１mをはかる。厚さはともに約25cmを測る。土中に混じる貝遺体の密度は薄く遺存状態も良くなかった。溝11は北から南へ約20cmの高低差がある。溝11西壁断面（４地区）では、植物遺体を含む粘質土が厚く堆積し高まり北側での滞水状況がみられる。このことから、本調査で検出した貝塚は、溝11に投棄された貝が高まり北側の溝13上面に堆積したことによると考えられる。採取した貝塚は土嚢20袋分である。炭化籾・種子などの植物遺体と貝・魚などの小動物遺体（P183～186、図版102に記す）が出土した。貝・魚遺体は淡水棲のものが占める。溝の機能時期より考えられる貝塚形成時期は中期前半である。

本遺跡では第4・7・21・27次調査で貝塚が検出されている。第21・27次調査で検出された貝塚は、突帯文土器とⅠ様式が共伴する弥生時代初期の貝塚である。第7次調査ではⅡ・Ⅲ様式を主体としてⅠ～Ⅳ様式までの土器を包括する貝塚が検出されている。

溝12（１地区）は東西方向に延びる溝で、溝11によって切られている。第16b層上面で検出した。検出幅約１m、深さ約30cmを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は炭、植物遺体を含む黒色(5Y2/1)の粗粒砂混じり粘土を主体として５層に分かれる。壷（1010・1011）などⅡ様式の弥生土器、砥石（1109）が出土した。

溝13（４地区）は東西方向に延びる溝で、北肩は溝11によって切られている。幅約４m、深さ約１



第103図　第60次第14層上面遺構平面図

m20cmを測る。断面形はゆるやかなU字を呈する。埋土は黒色（2.5GY2/1）粘土を主体として6層に分かれる。コンテナ2箱分の遺物が出土した。壷（1012～1014）・甕（1015～1018）・鉢（1019～1022）などの弥生土器、石庖丁（1104）、砥石（1110）、尖頭棒（1135）、弓（1136）、シカ、イノシシ、サル（資267～273）などの動物遺体が出土した。長柄鋤（1122）の未成品は底面よりやや上方で、溝に平行した状態で出土した。加工状況から細部加工に及ぶ前の水漬けであったと考えられる。Ⅰ～Ⅳ様式の土器が出土したが、上面の溝11による混入品を除くと機能時期は中期初頭と考えられる。

溝20（6・7地区）は東西方向に延びる溝で、幅約4m40cm、深さ約1m10cmを測る。断面形はゆるやかなU字を呈する。埋土は黒褐色（2.5Y3/1）植物遺体を含む粘土で10層に分かれる。コンテナ2箱分の遺物が出土した。壷（1024・1025）・甕（1026・1027）などの弥生土器、イノシシ（資274～278）などの動物遺体が出土した。機能、埋没時期は中期初頭である。

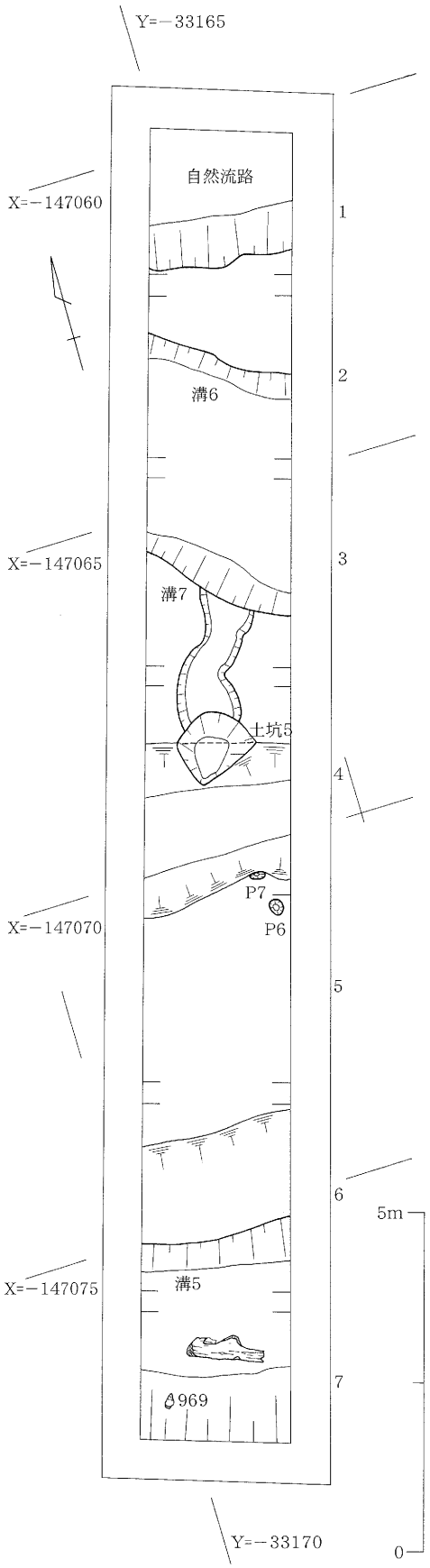
土坑6（2地区）は東西方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。検出長軸約50cm、短軸約40cm、深さ約35cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は黒色(2.5GY2/1)粘土で炭、植物遺体を含む。弥生土器片が出土した。

土坑7（2地区）は東西方向に延びる不整形な土坑で、検出長軸1m、短軸約35cm、深さ約8cmを測る。短軸の断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒色（10Y2/1）粘土である。弥生土器の細片が出土した。

土坑8（1地区）は隅が丸い正方形状の土坑である。検出長約70cm、深さ約5cmを測る。断面形はうすい台形を呈する。埋土はオリーブ黒色（5GY2/1）粘土で中粒砂、炭、植物遺体を含む。細頸壷（1028）・甕（1029）などの弥生土器が出土した。

ピット8～23（1・2地区）は溝11の西肩部で検出した。ピットの規模は径約10～25cm、深さ約7～15cmを測る。溝11によって切られているものがある。遺構内より弥生土器の細片が出土した。ピット13と17から動物遺体（資279・280）が出土した。中期初頭には全て埋没したと考えられる。

また、杭1～7（1・2地区）を検出した。杭の径は約4～8cmを測る。切断して自然面を残した状態でほぼ直立する。杭1～3は小ピットを穿って立てられ、他は



第104図　第60次第11層上面遺構平面図

打ち込まれたと考えられる。他の遺構との切り合い関係と埋土から、これらの杭が打ち込まれた時期には、若干の時期差があると考えられる。

＜中期前半～中頃＞

第14層上面遺構（第103図　図版133～136）

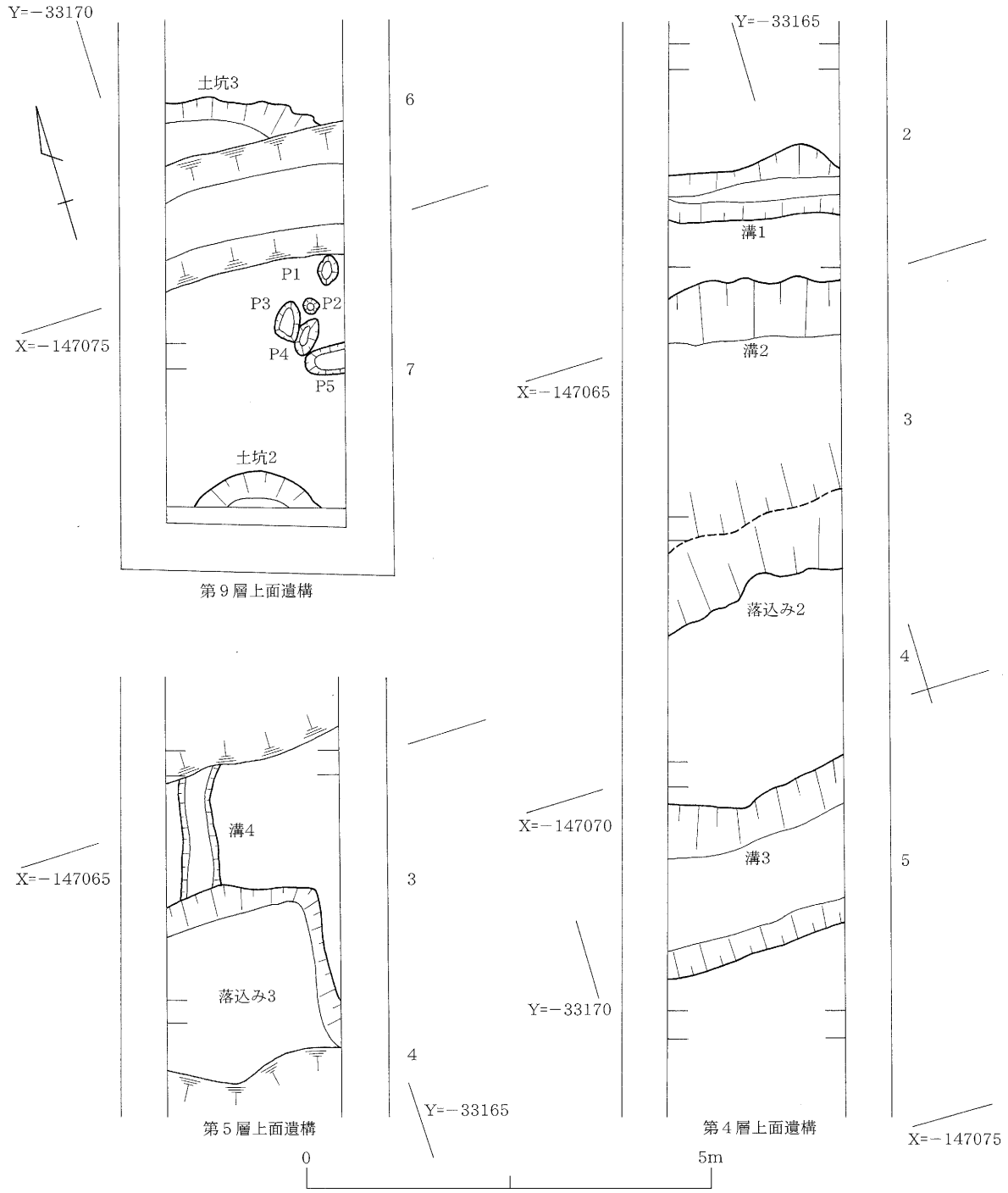
溝２条、高まりを検出した。層内より、壷(1039・1040)・甕（1041～1047)などの弥生土器、石庖丁（1105)、削器(1119・1120)、有孔板(1132)、シカ、イノシシ(資281～283）などの動物遺体がコンテナ１箱分出土した。

溝９（２・３地区）は東西方向に延びる溝で、幅約３m10cm、深さ約１m20cmを測る。断面形はV字形を呈する。埋土上部はオリーブ黒色(10Y3/1)中粒砂を含む粘土と灰色（5Y4/1）粗粒砂混じり粘質土の互層で下部は黒色(2.5GY2/1)粘土を主体とする。壷(975・976)・甕(977・978)など中期中頃までの弥生土器、イヌの上顎骨(資221)が出土した。溝９の南肩東側は島状に遺る。上層の自然流路によって南肩が浸食されたと考えられる。

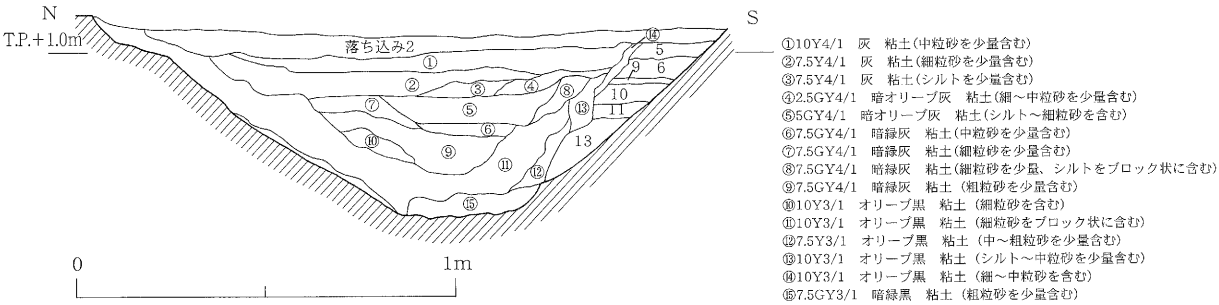
溝10（６・７地区）は東西方向に延びる溝で、幅約５m40cm、深さ約１m20cmを測る。断面形はゆるやかな逆台形を呈する。埋土上部はオリーブ黒色（7.5Y3/1）中粒砂を含む砂質土、下部はオリーブ黒色（5Y2/2）粘質シルトを主体とする。コンテナ１箱分の遺物が出土した。弥生土器はⅡ様式の鉢（979)・甕（980・981)、円板状土製品（1093)、シカ、イノシシ（資222～240）などの動物遺体が出土した。

高まり（５地区）は東西方向に延びる溝10の北肩に行った盛土で形成される。自然堆積面からの高さ約60cm、底部幅約３m70cmを測る。オリーブ黒色(7.5Y3/1）粘土を主体とした粘土がブロックに分かれ第19層が混じる。溝10の掘削時の廃土で盛土したと考えられ、遺物は出土しなかった。このような土堤状の高まりは、これまでの調査で検出された中期初頭の大溝にみられ、北方での第14・16層上面の遺構検出状況から考えると、高まりと溝10は中期前半から中頃に機能していたと考えられる。

本調査区の南方約10mで行われた第16次調査でも幅2m以上、深さ約1.5mの大溝が検出されている。時期はⅡ様式である。検出した溝10、20や溝13も同時期機能していたと考えられる。これら東西方向の溝は、弥生時代中期前半に本遺跡内で営まれた集落の南限の一端を示す可能性がある。



第105図　第60次第４・５・９層上面遺構平面図



第106図　第60次第９層上面溝２アゼ断面図

検出した遺構の機能時期は、中期前半である。第14ｆ層からⅢ様式の弥生土器が出土することから中期中頃には埋没したと考えられる。

＜中期中頃～後半＞

第11層上面遺構（第104図　図版137～140）

ピット２個、土坑１基、溝３条、自然流路を検出した。層内より弥生土器の細片、有頭棒（1129・1130）が出土した。

溝５（７地区）は東西方向に延びる溝で、幅約２m70cm、深さ約90cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土上部は灰オリーブ色（7.5Y4/2）粗粒砂を含む砂質土、下部はオリーブ黒色（5GY2/1）中粒砂混じり粘質土である。コンテナ１箱分の遺物が出土した。甕（966）・壷（967～970）・高杯（971）・甕蓋（972）などの弥生土器、動物遺体（資料219）が出土した。

溝６（２・３地区）は東西方向に延びる溝で、幅約３m60cm、深さ約50cmを測る。断面形は薄い皿状を呈する。埋土はオリーブ黒色（7.5Y3/1）粘質シルトである。溝６埋没後に堆積した自然流路の洪水砂により上面で足跡を検出した。弥生土器の細片と動物遺体（資料220）が出土した。

溝７（３・４地区）は南北方向に延びる溝で、北は溝６によって南は土坑５により切られている。幅約90cm深さ約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は暗オリーブ灰色（5GY3/1）粗粒砂混じり粘質土である。甕蓋（973）・高杯（974）などの弥生土器、円板状土製品（1094）が出土した。

土坑５（４地区）は南側を溝２によって切られている。検出長軸約１m10cm、短軸約45cmを測る。埋土は黒色（7.5Y2/1）細粒砂を含む粘土である。弥生土器の小細片が出土した。

［古墳時代］

この時代以降は遺物、遺構ともに希薄であり生産域であったと考えられる。

第９層上面遺構（第105図　図版141）

ピット５個、土坑２基を検出した。

土坑２（７地区）は検出長軸約１m50cm、短軸約50cm、深さ約13cmを測る。埋土は暗オリーブ灰色（5GY3/1）細粒砂混じりシルト質粘土である。弥生土器の細片が出土した。

土坑３（６地区）は南側を溝３によって切られている。検出長軸約１m20cm、短軸約75cm、深さ約５cmを測る。埋土は暗オリーブ灰色（5GY3/1）中粒砂混じりシルト質粘土である。

ピット１～５（６・７地区）は径約20～50cm、深さ約４cmを測る。土坑２基の間の東側で検出した。遺物は出土しなかった。

［奈良・平安時代］

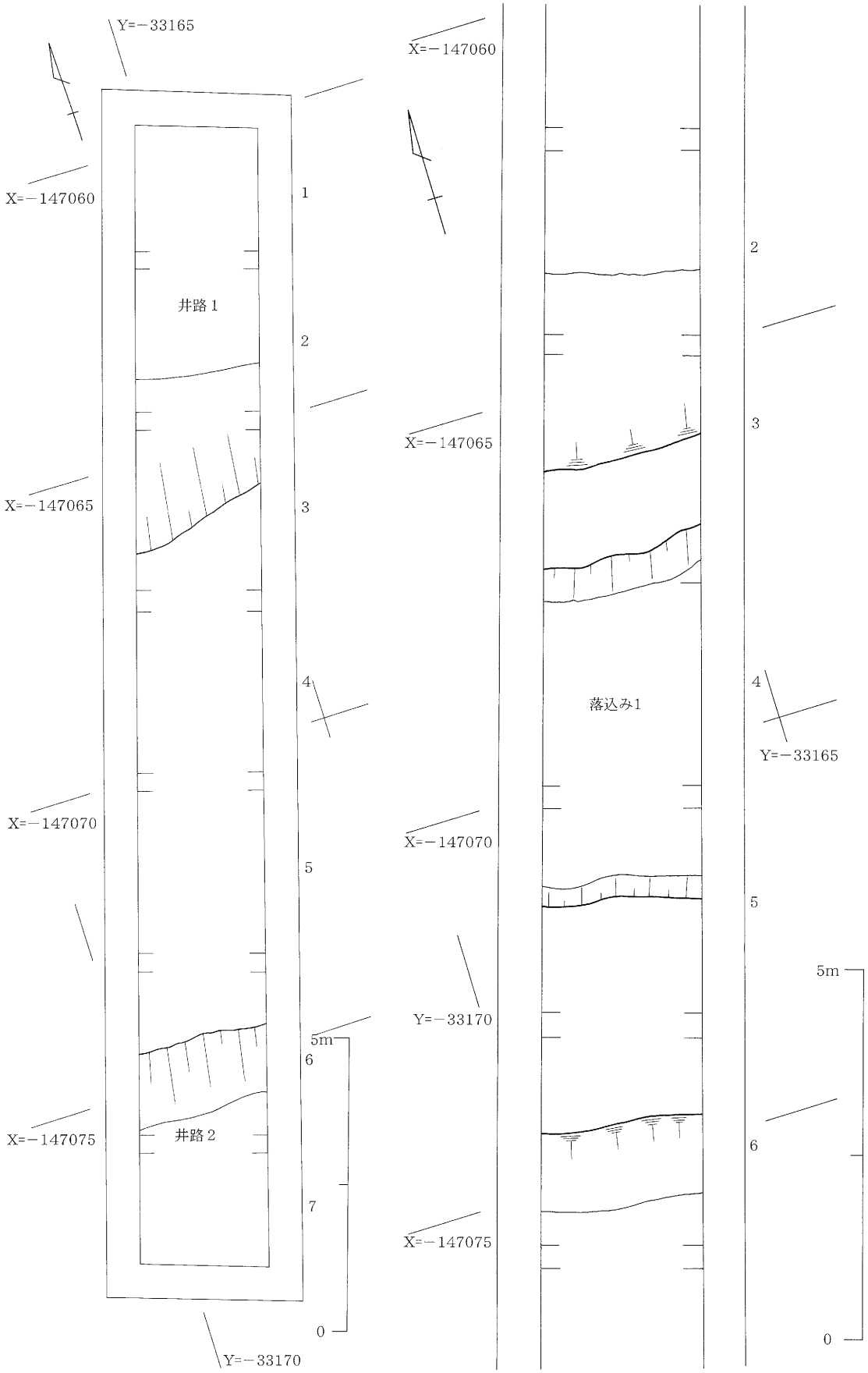
第５層上面遺構（第105図　図版142）

溝１条、落ち込みを検出した。

溝４（３地区）は南北方向に延びる溝で、南側は落ち込み３によって切られている。幅約45cm、深さ約５cmを測る。断面形は薄い皿状を呈する。埋土は暗オリーブ灰色（5GY3/1）細粒砂混じり粘土である。土師器の細片が出土した。

溝２（４地区）は東西方向に延びる溝で、南肩を落ち込み２によって切られている。幅約１m30cm、深さ約45cmを測る。断面形はV字を呈する。埋土上部は暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土、下部はオリーブ黒色（10Y3/1）粘土である。西壁断面の切り合い関係と東アゼ断面より、第５層堆積以後に掘削されたと考えられる。混入品であるが壷（964）などの弥生土器の小細片が出土した。

落ち込み３（３地区）は南側を溝２によって切られている。検出長軸約２m、短軸約１m80cm、深さ約38cmを測る。隅が丸い方形状の落ち込みである。埋土上部は暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シル



第107図　第60次第１・２層上面遺構平面図

ト質粘土、下部は灰色（10Y4/1）粘土である。

［鎌倉・室町時代］

第４層上面遺構（第105図　図版143・144）

溝２条、落ち込みを検出した。層内より弥生土器・土師器・瓦器(1090・1091)の小片が出土した。

溝１（２地区）は東西方向に延びる溝で、幅約70cm、深さ約20cmを測る。断面形は不整な逆三角形を呈する。埋土上部はオリーブ黒色（10Y3/1）中粒砂混じり粘土、下部は暗オリーブ灰（5GY3/1）中粒砂混じり粘土である。弥生土器の細片が出土した。

溝３（６地区）は東西方向に延びる溝で、幅約２m10cm、深さ約60cmを測る。断面形は逆台形を呈する。暗緑灰色（7.5GY3/1）シルト質粘土を主体として８層に分かれる。混入品であるが、壷（965）などの弥生土器の小細片が出土した。

落ち込み２（４地区）は南北の肩を検出した。幅約４m、深さ約23cmを測る。両肩部からゆるやかに窪む。埋土は灰色（10Y4/1）粘土を主体として６層に分かれる。

［江戸時代以降］

第２層上面遺構（第107図　図版145）

落ち込みを検出した。

落ち込み１（４地区）は南北の肩を検出した。幅約４m80cm、深さ約25cmを測る。埋土は灰色（2.5GY3/1）シルト質粘土と暗オリーブ灰色（5GY3/1）粘土の２層に分かれる。

第１層上面遺構（第107図　図版145・146）

堀り上げ田に伴う井路を２条検出した。

枚岡市時代の地図（第４図）によると、11工区は東西に延びる２条の井路をかすめるところに位置する。検出したのは井路の肩部である。井路１の南肩には護岸用の杭が数本打設されていた。

調査地付近では、昭和30年代後半まで堀り上げ田による耕作が行われていた。これに伴う井路が完全に埋没したのは昭和40年代後半である。本来の井路検出面は上層に位置するが、後世の撹乱によって正確な検出面を確認することは出来なかった。

ピット番号	平面形態	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土
1	楕円形	40	25	3	A
2	円形	20		4	A
3	楕円形	50	30	4	A
4	楕円形	50	20	3.5	A
5	楕円形	46	35	4	A
6	円形	25		12	B
7	円形	20		10	B
8	円形	10		7	F
9	円形	10		7	F
10	楕円形	20	15	8	F
11	楕円形	30	20	16	C
12	楕円形	25	15	7	C
13	楕円形	25	15	9	C
14	円形	45		6	D
15	楕円形	25	15	16	C
16	楕円形	25	15	10	E′
17	楕円形	45	35	14	E′
18	三角形	50	35	26	E′
19	円形	25		16	G
20	楕円形	25	10	8	E′
21	楕円形	70	15	15	E
22	円形	25		10	E
23	円形	30		12	E

第２表　第60次検出ピット計測値・埋土表

A:5GY3/1 暗オリーブ灰 中粒砂混じりシルト質粘土
B:10Y3/1 オリーブ黒 砂混じり粘質土(粗粒砂を多く含む)
C:5GY2/1 オリーブ黒 粘土(細～中粒砂、炭、植物遺体含む)
D:7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土(中粒砂、植物遺体含む)
E:10Y2/1 黒 粘土(植物遺体を含む)
E′：10Y2/1 黒 粘土(中粒砂を多く含む)
F：7.5GY2/1 オリーブ黒 粘土(細粒砂を少量含む)
G:2.5GY2/1 黒 粘土(細粒砂、炭植物遺体を含む)

c．遺物

遺物は土器、土製品、石器、木製品などがある。以下、各項目ごとに分けて記す。

1）土器

縄文時代～近世期の土器が出土した。縄文土器は細片であり、図化できるものはなかった。弥生時代の土器が特に多い。各時代の遺構及び遺物包含層に分けて記す。

弥生土器

記載等は第58次調査出土遺物と同様である。

遺構出土土器

溝２（第108図964）

964は壷である。頸部が筒状を呈し、口縁部が大きく外反する。口縁端部はやや面を持つ。頸部内外面はハケメ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

溝３（第108図965）

965は壷である。口頸部が大きく外反し、口縁端部はやや面を持つ。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅱ様式。非河内産。

溝５（第108図966～972）

甕・壷・高杯・甕蓋の器種がある。

966は甕である。体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

967～970は壷である。967・968は口頸部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。頸部に櫛描直線文を施す。967は内外面をナデ調整する。968は外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。969は底部が平底を呈する。体部の張りは少ない。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。970は頸部が筒状を呈し、口縁部が大きく外反する。口縁端部はやや面を持つ。口縁部内面に櫛描直線文と扇形文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。969は中期、他はⅡ様式。967・970は非河内産、他は生駒西麓産。

971は高杯である。口縁部が水平方向へ伸び、口縁端部が面を持つ。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

972は甕蓋である。体部が大きく立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。中期。生駒西麓産。

溝７（第108図973・974）

甕蓋・高杯の器種がある。

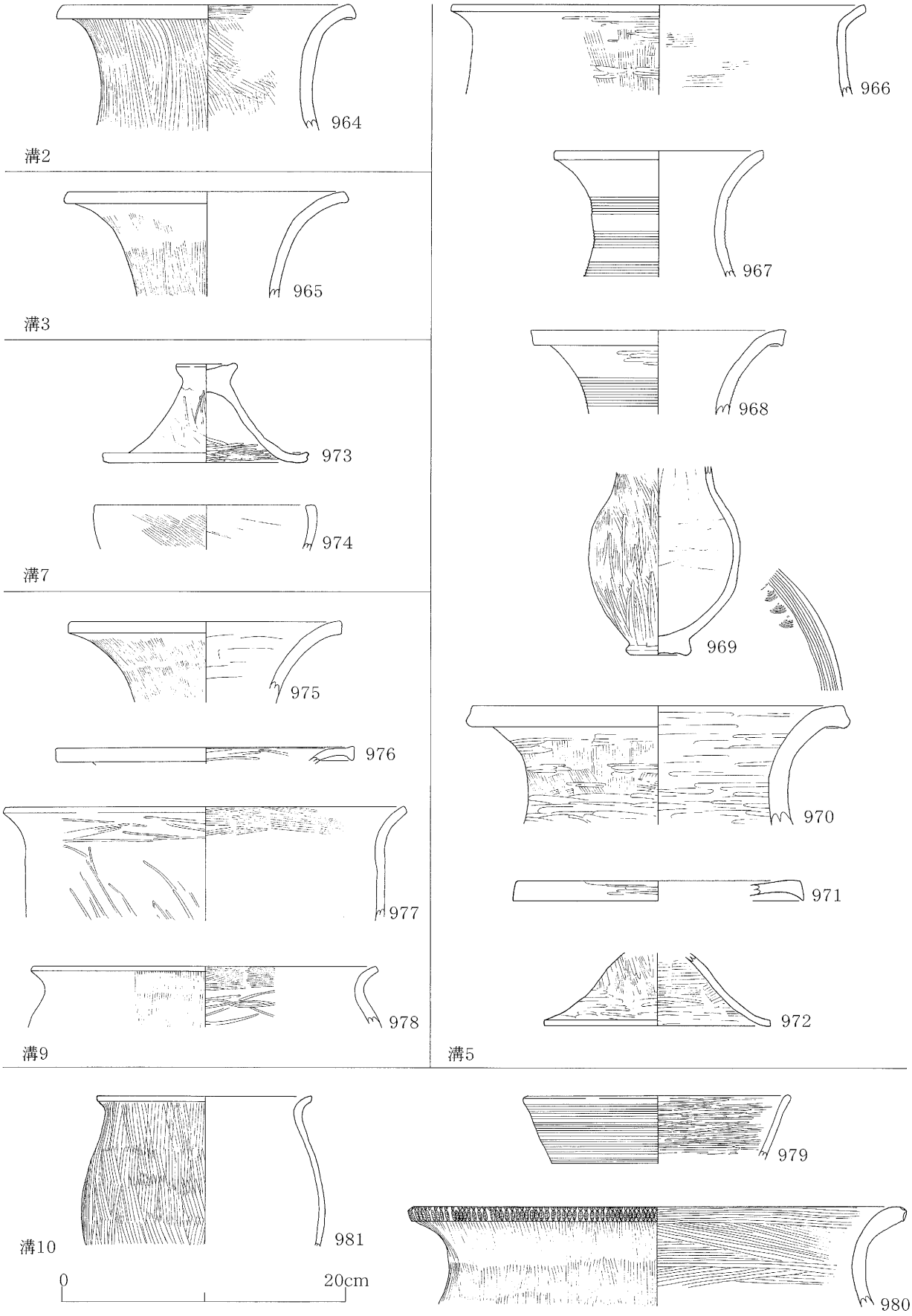
973は甕蓋である。体部が大きく立ち上がり中央に円形の摘みが付く。口縁端部はやや上方へ拡張する。口縁部内面にリング状の煤が付着する。内外面はヘラミガキ調整する。中期。生駒西麓産。

974は高杯である。浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。非河内産。

溝９（第108図975～978）

壷・甕の器種がある。

975・976は壷である。975は口頸部が大きく外反し、口縁端部はやや面を持つ。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。976は口縁部が短く外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。975はⅡ様式、976はⅢ～Ⅳ様式。975は生駒西麓産、976は非河内産。



第108図　第60次溝２・３・５・７・９・10出土土器実測図

977・978は甕である。977は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はハケメ調整する。978は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。977はⅡ様式、978はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

溝10（第108図979～981）

鉢・甕の器種がある。

979は鉢である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面に櫛描直線文を施す。内面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

980・981は甕である980は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。口縁端部にハケ状工具による刻み目を施す。981は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅱ様式。980は非河内産、981は生駒西麓産。

溝11（第109・110図982～1009）

壷・無頸壷・鉢・高杯・甕の器種がある。

982～989は壷である。982～987は口頸部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものがある。983は頸部に櫛描直線文を施す。986は口縁端部にヘラ描綾杉文、987は櫛描直線文を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。988・989は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。988は口縁端部に櫛描波状文を施す。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。989は外面をナデ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。982～987はⅡ様式、989・989はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

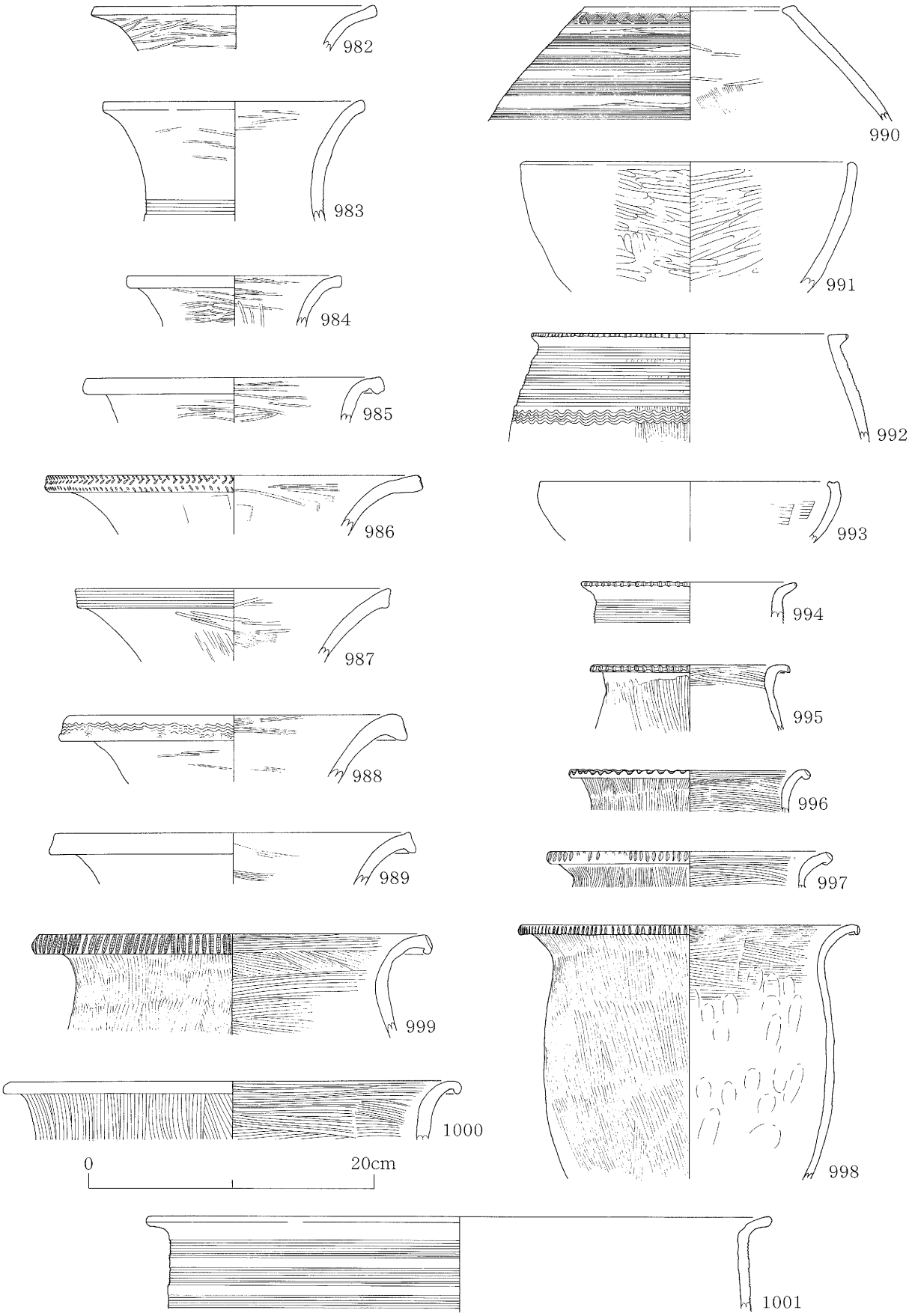
990は無頸壷である。体部は大きく内傾する。口縁端部はやや面を持つ。外面に櫛描扇形文と直線文を施す。文様帯間は研磨する。内面はハケメの後、ナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

991・992は鉢である。991は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキ調整する。992は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部に刻み目、体部に櫛描文様を施す。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。991はⅡ様式、992はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

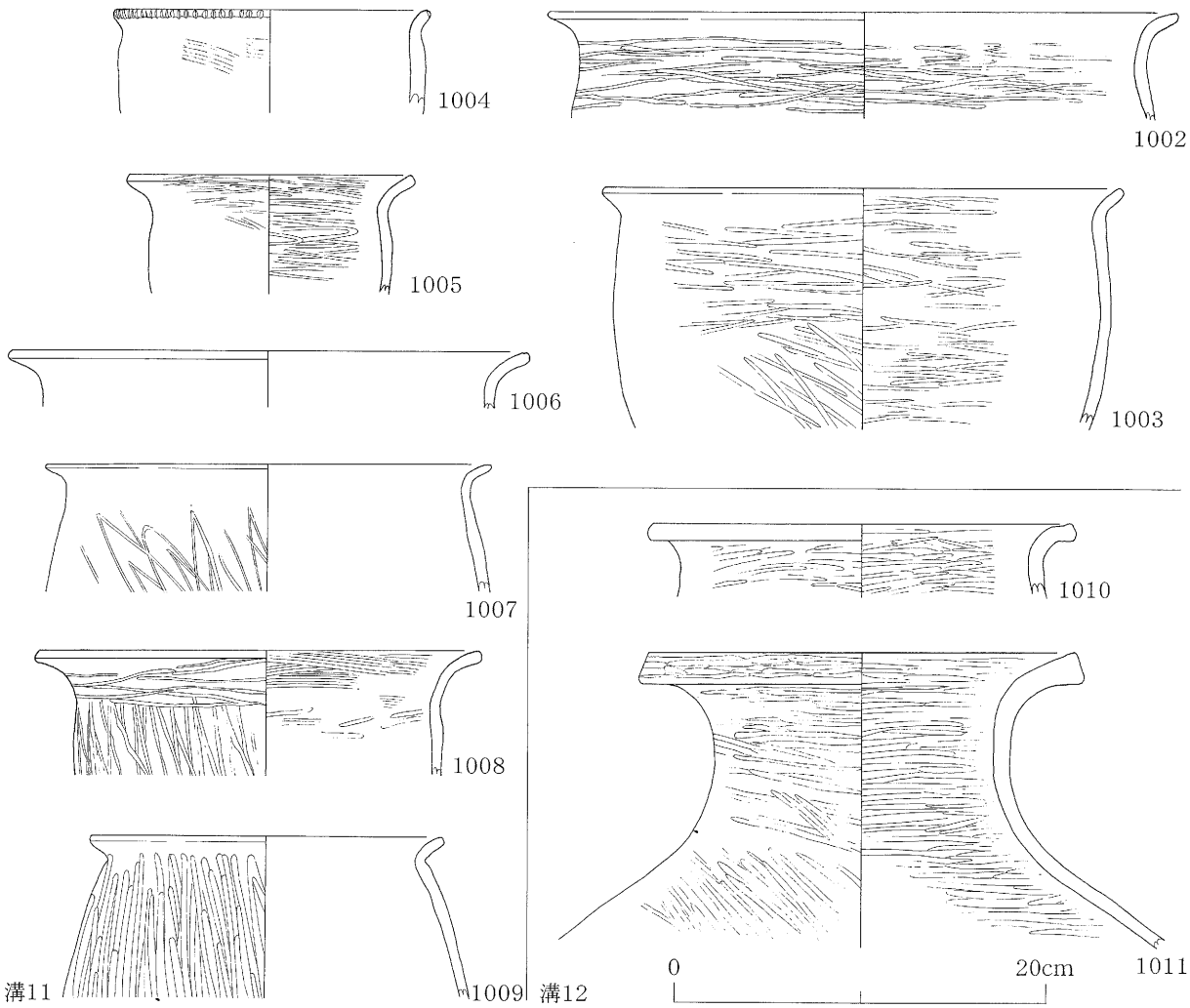
993は高杯である。浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。内外面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

994～1009は甕である。994・1001は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。体部外面に櫛描直線文を施す。994は口縁端部に刻み目を施す。995～1000は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は外側へ巻き込むものと丸く終わるものがある。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。995～999は口縁端部に刻み目を施す。999はハケ状工具による刻み目である。1002～1008は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものがある。体部内外面はヘラミガキ調整するものが多い。1009は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。994～1008はⅡ様式、1009はⅢ～Ⅳ様式。994～1000は非河内産。他は生駒西麓産。

溝12（第110図1010・1011）



第109図　第60次溝11出土土器実測図



第110図　第60次溝11・12出土土器実測図

1010・1011は壷である。1010は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面はヘラミガキ調整する。1011は体部の張りが大きく、頸部が筒状を呈する。口縁部は大きく外反し、口縁端部が面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

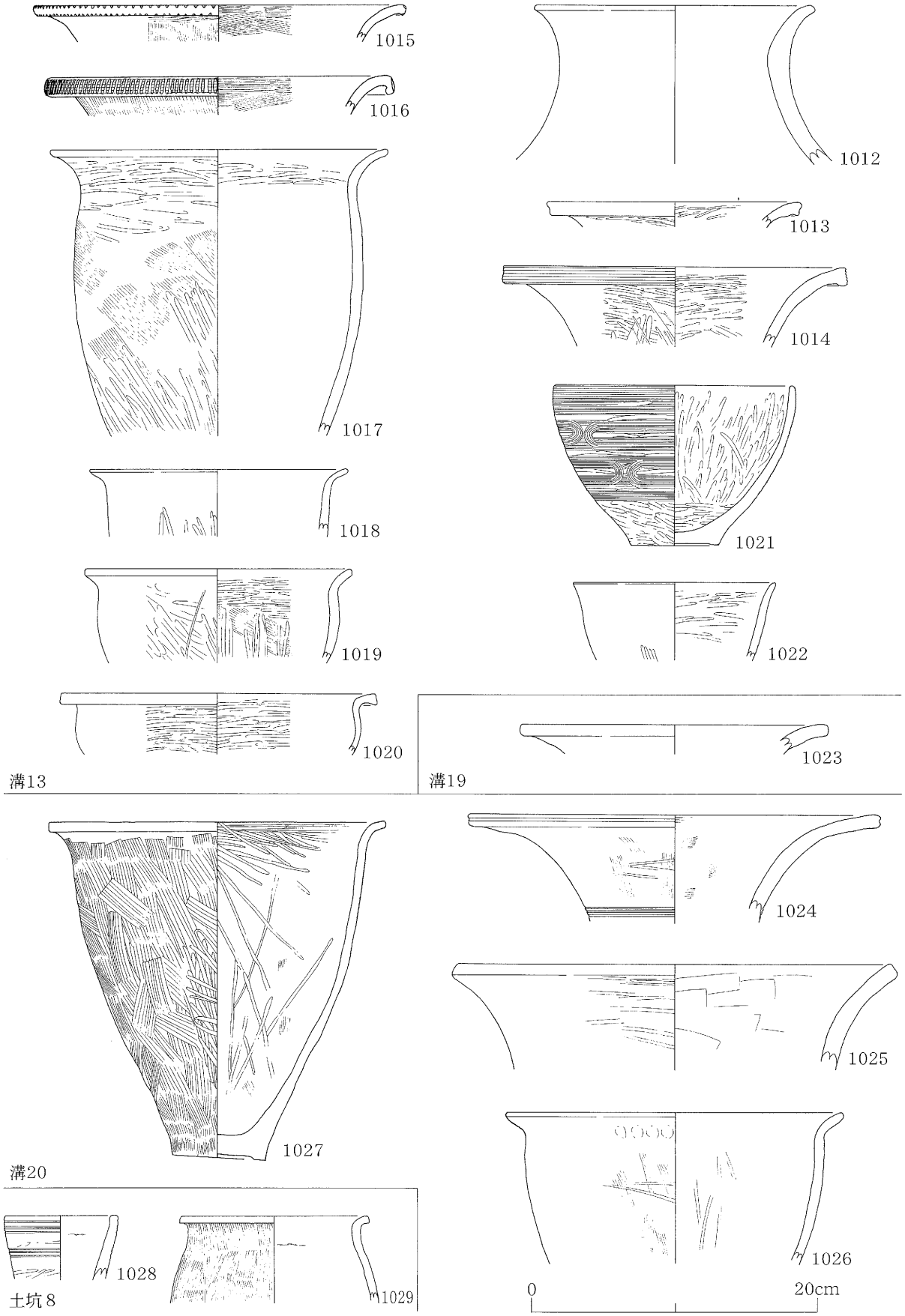
溝13（第111図1012～1022）

壷・甕・鉢の器種がある。

1012～1014は壷である。1012は口頸部が緩く外反し、口縁端部は丸く終わる。外面の調整法は不明である。内面はナデ調整する。1013・1014は口頸部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。1014は口縁端部に櫛描直線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

1015～1018は甕である。1015・1016は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わるものと外側へ巻き込むものがある。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。口縁端部に刻み目を施す。1016はハケ状工具による刻み目である。1017・1018は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。1017は体部外面をハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面は部分的なヘラミガキ調整する。1018は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

1019～1022は鉢である。1019は体部の張りが少なく口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメの後ヘラミガキ調整する。1020は体部の張が少な



第111図　第60次溝13・19・20、土坑８出土土器実測図

く、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はヘラミガキ調整する。1021・1022は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。1020は外面に櫛描直線文と扇形文を施し、流水文を描く。体部外内面はヘラミガキ調整する。1019はⅡ様式、1020～1022はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

溝19（第111図1023）

1023は壷である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。Ⅱ様式。生駒西麓産。

溝20（第111図1024～1027）

壷・甕の器種がある。

1024・1025は壷である。1024は口頸部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁端部と頸部にヘラ描沈線文を施す。内外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。1025は口頸部が大きく外反し、口縁端部がやや面を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。1024はⅠ様式、1025はⅡ様式。生駒西麓産。

1026・1027は甕である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

土坑８（第111図1028・1029）

細頸壷・甕の器種がある。

1028は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部が丸く終わる。口頸部外面に櫛描直線文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

1029は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。体部内面に接合痕が残る。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

遺物包含層出土土器

第13層（第112図1030～1038）

甕・壷・細頸壷・鉢・高杯の器種がある。

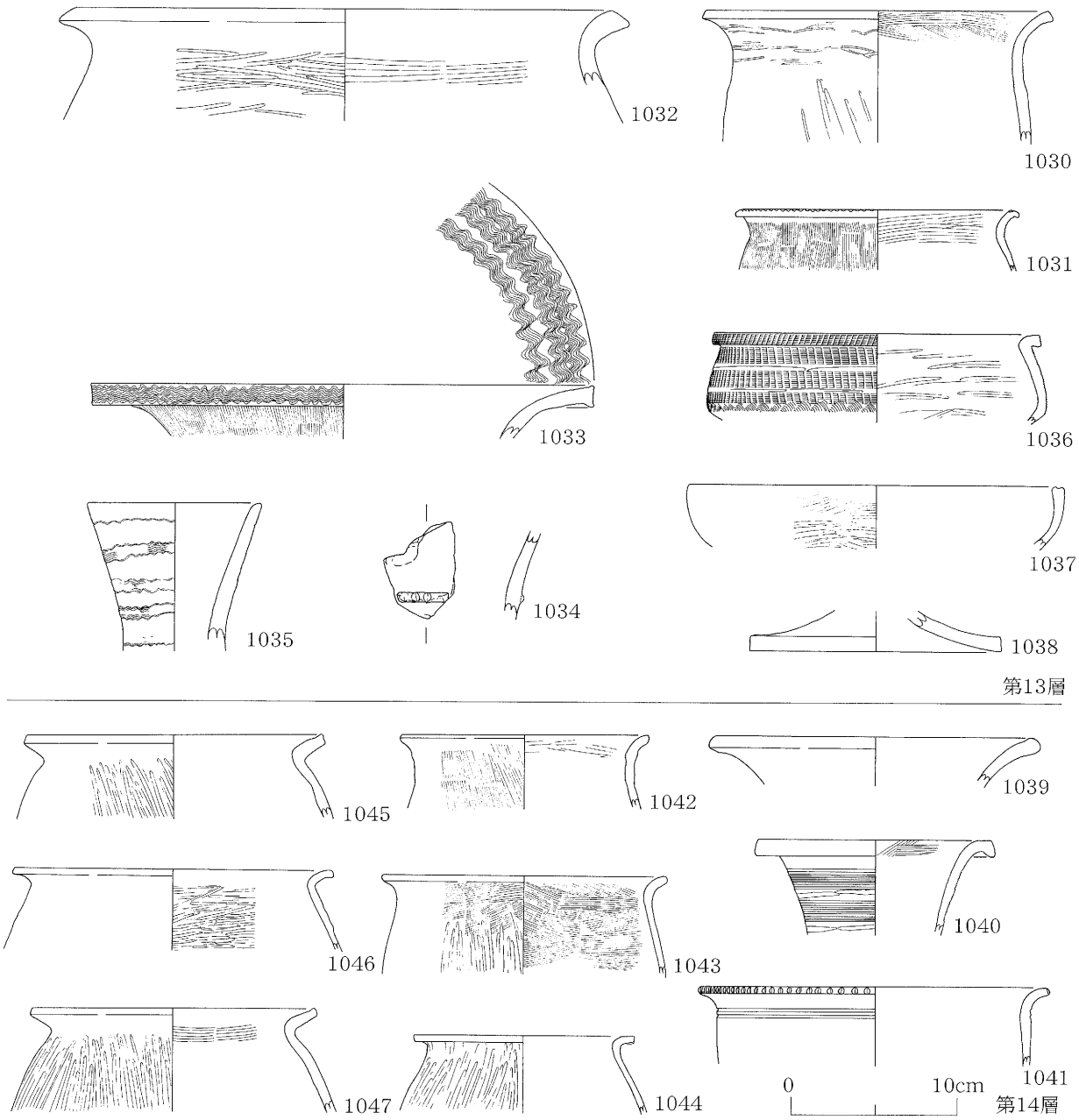
1030～1032は甕である。1030は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。1031は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は外側へ巻き込む。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。口縁端部に刻み目を施す。1032は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はヘラミガキ調整する。1030・1031はⅡ様式、1032はⅢ～Ⅳ様式。1031は非河内産、他は生駒西麓産。

1033・1034は壷である。1033は口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。口縁端部と口縁部内面に櫛描波状文を施す。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。1034は頸部の破片である。外面に１条の刻み目凸帯が残る。頸部と凸帯の胎土が異なる。頸部が茶褐色、凸帯が桃灰色の色調を呈する。1034はⅠ様式、1033はⅢ～Ⅳ様式。1034は生駒西麓産、1033は非河内産。

1035は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部は丸く終わる。口頸部外面に櫛描波状文を施す。内外面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

1036は鉢である。体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁端部が面を持つ。口縁端部と体部に櫛描文様を施す。文様帯間は研磨する。内面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

1037・1038は高杯である。1037は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。外面はヘ



第112図　第60次第13・14層出土土器実測図

ラミガキ調整、内面はナデ調整する。1038は裾部が緩く立ち上がり、裾端部が面を持つ。内外面はナデ調整する。裾部内面にリング状の煤が付着しており、甕蓋に転用したと考えられる。1037はⅢ～Ⅳ様式、1038は中期。生駒西麓産。

第14層（第112図1039～1047）

壷・甕の器種がある。

1039・1040は壷である。1039は口縁部が大きく外反し口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。1040は口縁部が大きく外反し口縁端部を下方へ拡張する。頸部に櫛描直線文を施す。文様帯間は研磨する。内面はハケメの後、ナデ調整する。1039はⅡ様式、1040はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

1041～1047は甕である。1041は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。体部外面に２条のヘラ描沈線文、口縁端部に刻み目を施す。1042は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内

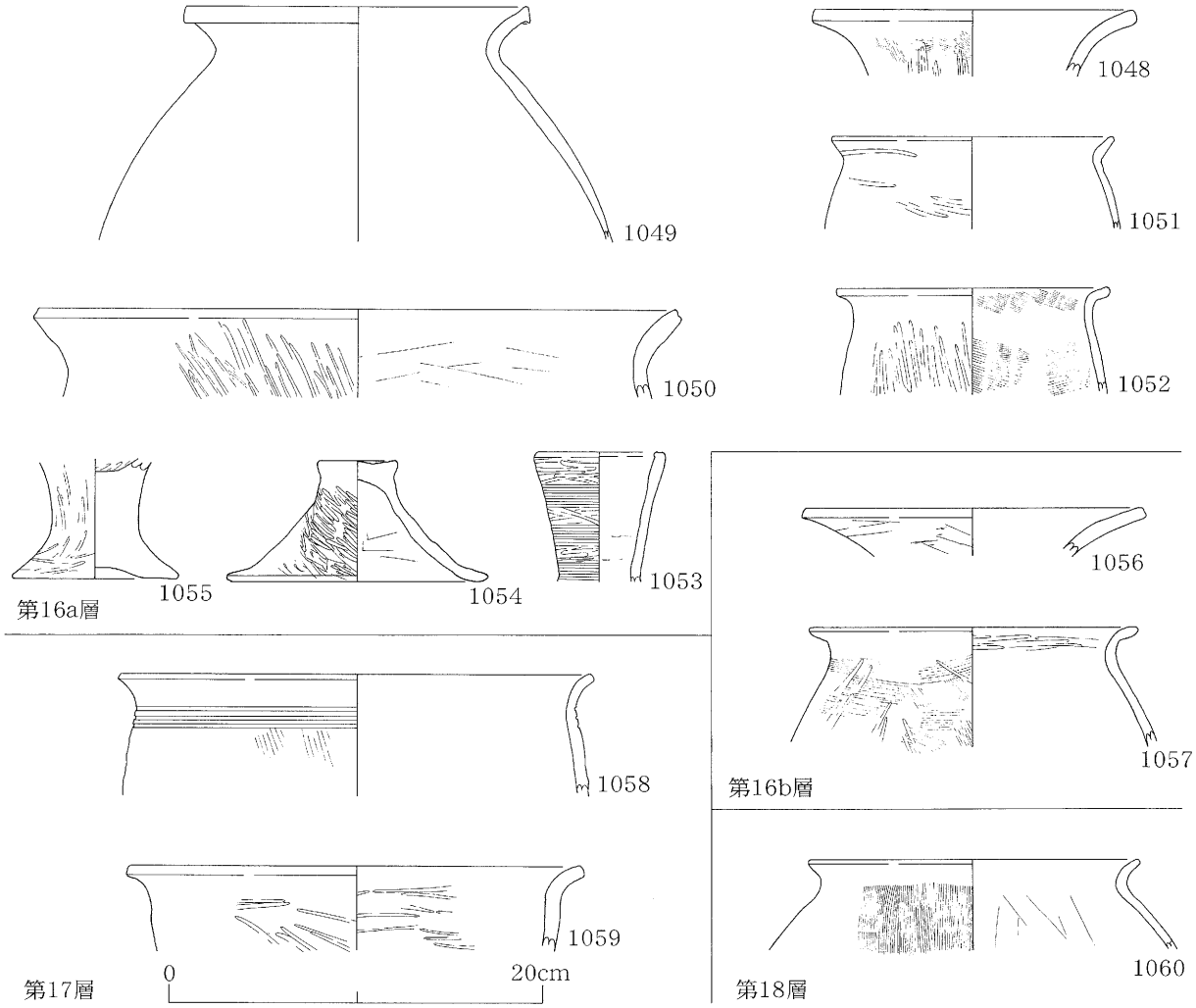
面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。1043は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。1044～1047は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つものと丸く終わるものがある。体部内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。1041はⅠ様式、1042・1043はⅡ様式、1044～1047はⅢ～Ⅳ様式。1042・1044は非河内産、他は生駒西麓産。

第16ａ層（第113図1048～1055）

壷・甕・細頸壷・甕蓋・高杯の器種がある。

1048～1050は壷である。1048は口頸部が大きく外反し、口縁端部はやや面を持つ。外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。1049は体部の張りが大きく、口頸部が短く外反する。口縁端部は面を持つ。外面の調整法は不明である。内面はナデ調整する。1050は口縁部がゆるく外反し、口縁端部はやや面を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。1048はⅡ様式、1049はⅢ～Ⅳ様式、1050は中期。1048は生駒西麓産、他は非河内産。

1051・1052は甕である。体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。1051は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。1052は体部外面をヘラミガキ調整、内面をハケメ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。



第113図　第60次第16a・16b・17・18層出土土器実測図

1053は細頸壷である。口頸部が内湾し、口縁端部がやや面を持つ。口頸部外面に櫛描直線文を施す外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

1054は甕蓋である。体部が大きく立ち上がり、中央に円形の摘みが付く。口縁端部は面を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。中期。生駒西麓産。

1055は高杯の脚部である。裾部は緩く立ち上がり、裾端部が丸く終わる。柱状部は中実である。外面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

第16ｂ層（第113図1056・1057）

壷・甕の器種がある。

1056は壷である。口縁部が大きく外反し、口縁端部はやや面を持つ。内外面はナデ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

1057は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。口縁部内面はヘラミガキ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

第17層（第113図1058・1059）

1058・1059は甕である。1058は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部外面に３条のヘラ描沈線文を施す。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。1059は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部はやや面を持つ。体部内外面はヘラミガキ調整する。1058はⅠ様式、1059はⅡ様式。1058は非河内産、1059は生駒西麓産。

第18層（第113図1060）

1060は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

第13～18層（第114図1061～1088）

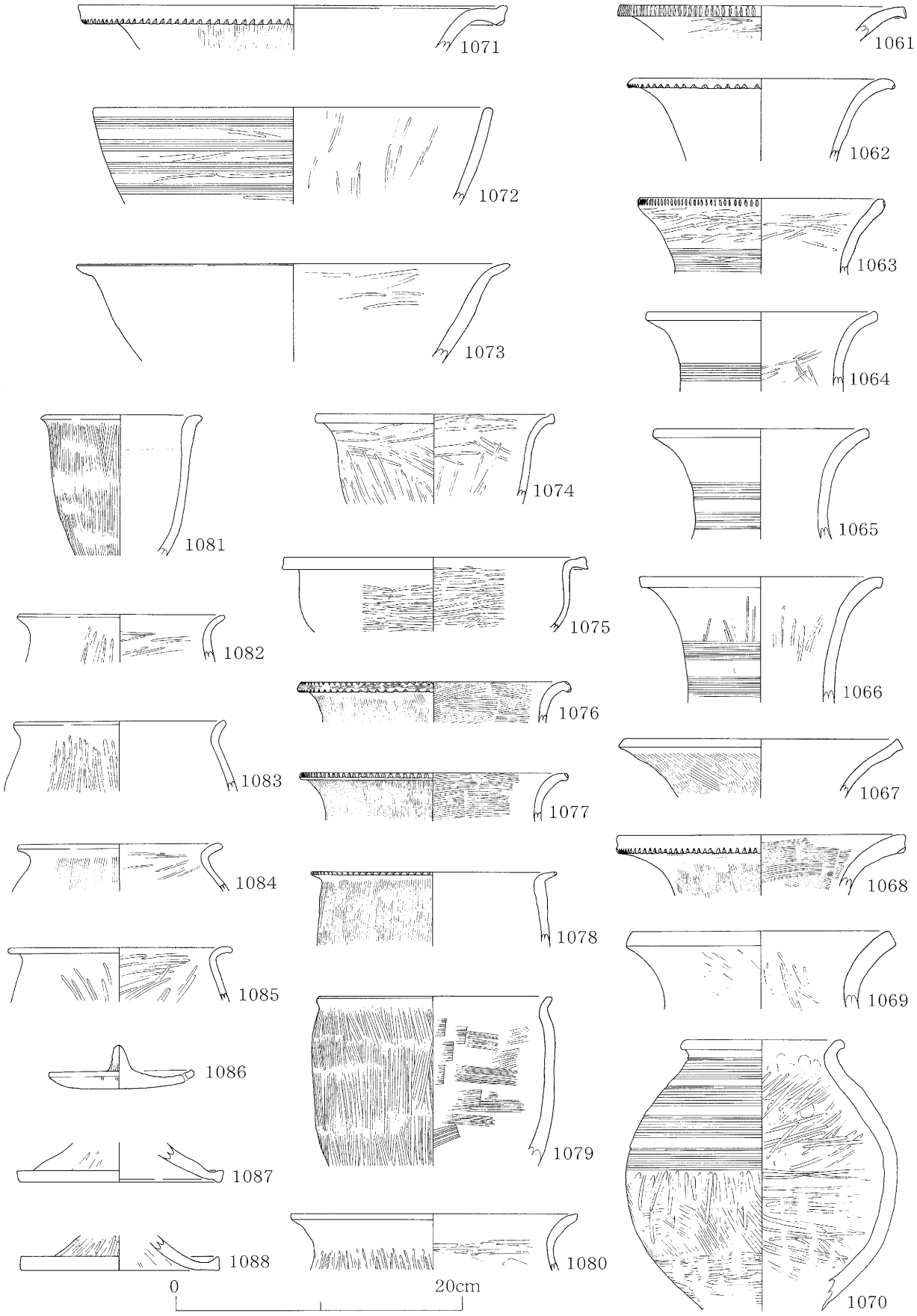
壷・無頸壷・鉢・甕・壷蓋・高杯の器種がある。

1061～1069・1071は壷である。1061～1066は口頸部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。1061～1063は口縁端部に刻み目を施す。1063～1066は頸部に櫛描直線文を施す。内外面はヘラミガキ調整するものが多い。1067～1069は口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。1068は口縁端部に刻み目を施す。内外面はハケメ調整するものが多い。1071は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。口縁端部に刻み目を施す。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。1061～1063はⅡ様式、1064～1069・1071はⅢ～Ⅳ様式。1062・1063・1066・1068・1069は生駒西麓産、他は非河内産。

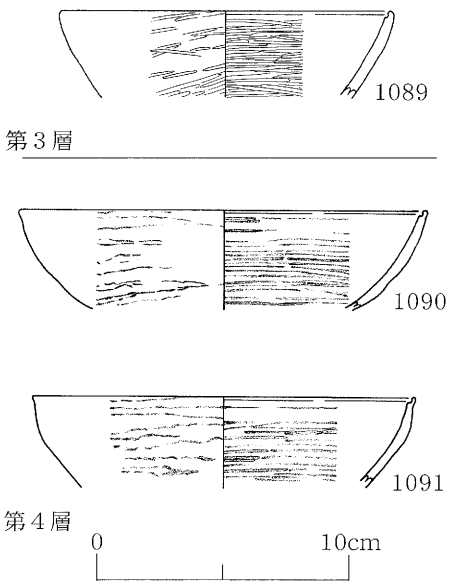
1070は無頸壷である。体部は縦長の球形を呈する。口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。外面に４帯の櫛描直線文を施す。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はヘラミガキ調整する。Ⅱ様式。生駒西麓産。

1072～1075は鉢である。1072は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面に櫛描直線文を施す。内面はヘラミガキ調整する。1073・1074は体部の張りが少なく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終わる。1073は体部外面をナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。1074は体部内外面をヘラミガキ調整する。1075は体部の張りが少なく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はヘラミガキ調整する。1072～1074はⅡ様式、1075はⅢ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

1076～1085は甕である。1076・1077は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端



第114図　第60次第13～18層出土土器実測図



第115図　第60次第３・４層出土土器実測図

部は外側へ巻き込む。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のハケメ調整する。口縁端部に刻み目を施す。1078～1082は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものがある。体部内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。1083～1085は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものがある。体部内外面はヘラミガキ調整するものが多い。1076～1082はⅡ様式、1083～1085はⅢ～Ⅳ様式。1076・1077・1084は非河内産、他は生駒西麓産。

1086は壺蓋である。口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部中央に横断面が楕円形を呈する摘みが付く。口縁部に２孔１対の小円孔を穿つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。中期。生駒西麓産。

1087・1088は高杯である。裾部がゆるく立ち上がり、裾端部をやや上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。1087は非河内産、1088は生駒西麓産。

古墳時代以降の土器

記載等は第58次調査出土遺物と同様である。

遺物包含層出土土器

第３層（第115図1089）

1089は黒色土器の椀である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に1条の沈線を廻らす。内外面を燻しており、黒色を呈する。内外面は密なヘラミガキ調整する。平安時代。

第４層（第115図1090・1091）

1090・1091は瓦器の椀である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に1条の沈線を廻らす。所謂、大和型の椀である。内外面は密なヘラミガキ調整する。中世期。

２）土製品（第116図1092～1099）

記載等は第58次調査出土遺物と同様である。

1092～1099は円板状土製品である。土器片の円周部を打ち欠いて円形に加工する。のちに1092・1094～1096は円周の一部を研磨する。1093は円周部全体に丁寧な研磨の痕が残る。1092・1095・1097・1098は溝11、1093は溝10、1094は溝７、1096は第15層、1099は遺物包含層より出土。

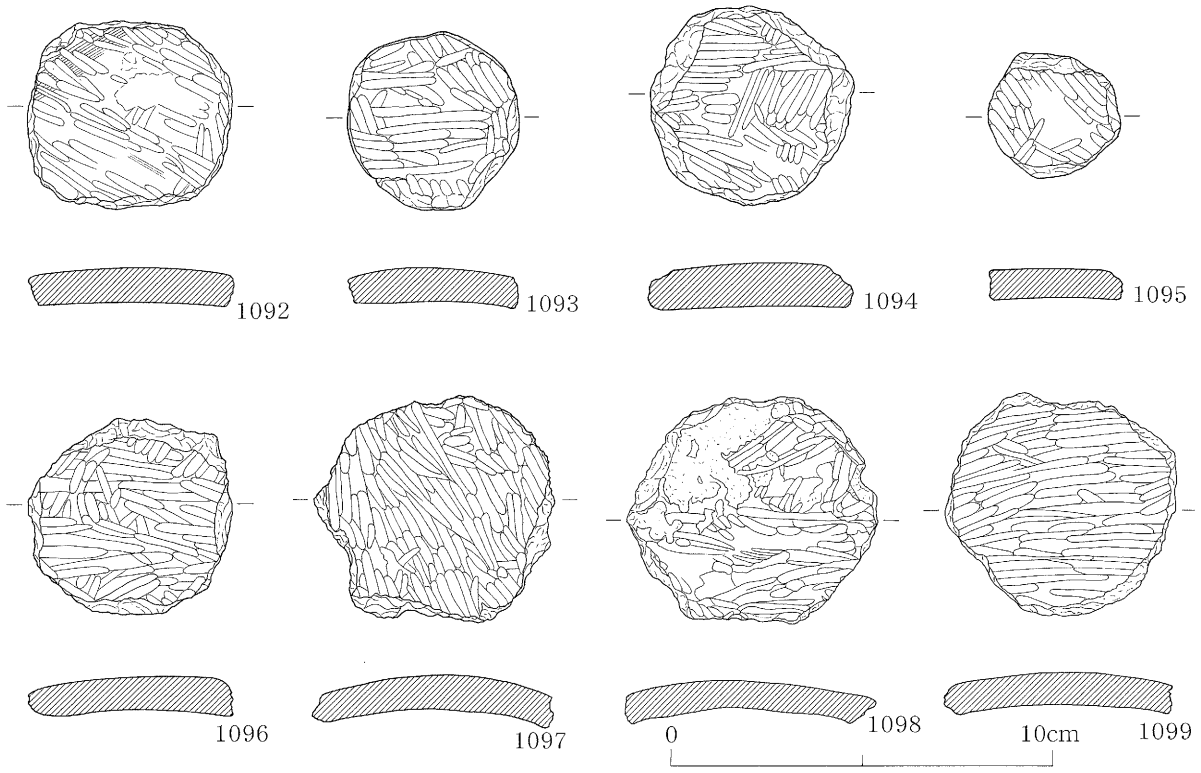
３）石器

記載等は第58次調査出土遺物と同様である。

磨製石器（第117図1100～1107）

太型蛤刃石斧・石庖丁がある。

1100～1103は太形蛤刃形石斧である。円柱状の基部は厚く、刃部は両刃を有する。1100はほぼ完形である。両側縁から頂部にかけて成形時の敲打痕が残る。1101は刃部を欠損する。全体の約1/3を欠損している。欠損部には敲打痕が残る。刃部を欠損して後、叩き石として使用したと考えられる。



第116図　第60次土製品実測図

1102は刃部・基端部共に欠損しており、基部の中央部が残る。側縁には被熱により変色した部分がある。1103は加工面が残る基部の一部である。煤が付着しており、被熱により赤く変色した部分がある。白色の石英を用いている。1100・1103は溝11、1101は遺物包含層、1102は土坑2より出土した。

1104～1107は石庖丁である。全形が不明な細片が多い。全て緑泥片岩製である。1104は先端部のみである。1105は全体の約1/2を欠損する。直線刃をもち、背部は半月形を呈する。背部近くに紐穴が1孔残る。1106は先端部のみである。1107は体部の細片である。両端を欠損する。体部中央に紐穴の一部が残る。1104は両刃、1105・1106は片刃である。1107は不明である。1104は溝13、1105は第14層、1106・1107は遺物包含層より出土した。

自然石を利用した礫石器（第117図1108～1111）

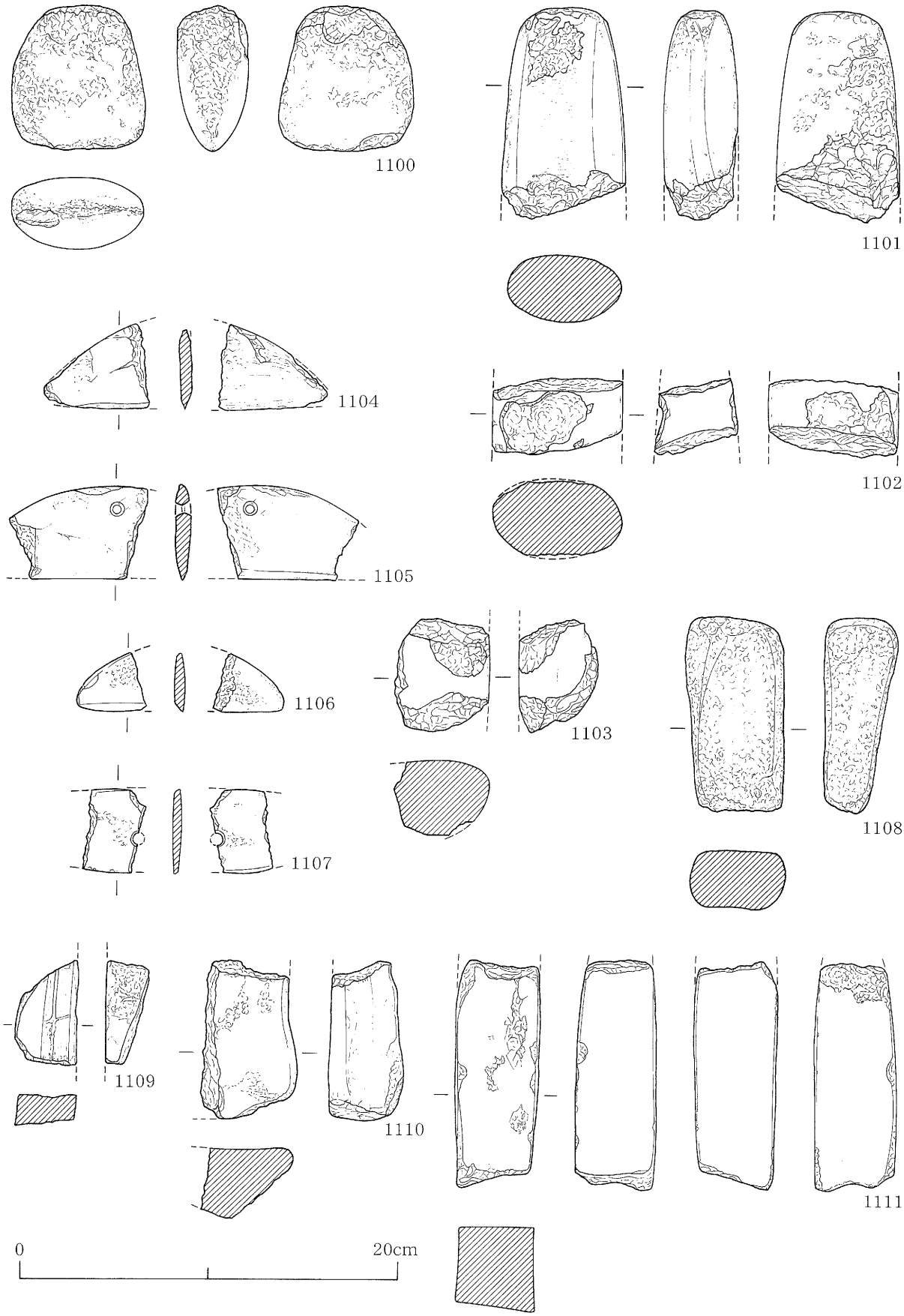
1108～1111は砥石である。方形を呈するものが多い。1108は表面が荒れるため、使用面・材質は不明である。被熱により変色した部分がある。1109は使用面が2面残る。方形の砥石の角部で、材質は不明である。1110は使用面が1面残る。砂岩製である。1111は4面を使用する。被熱により変色した部分がある。砂岩製である。1108は第15層、1109は溝12、1110は溝13、1111は第13層より出土した。

打製石器（第118図1112～1121）

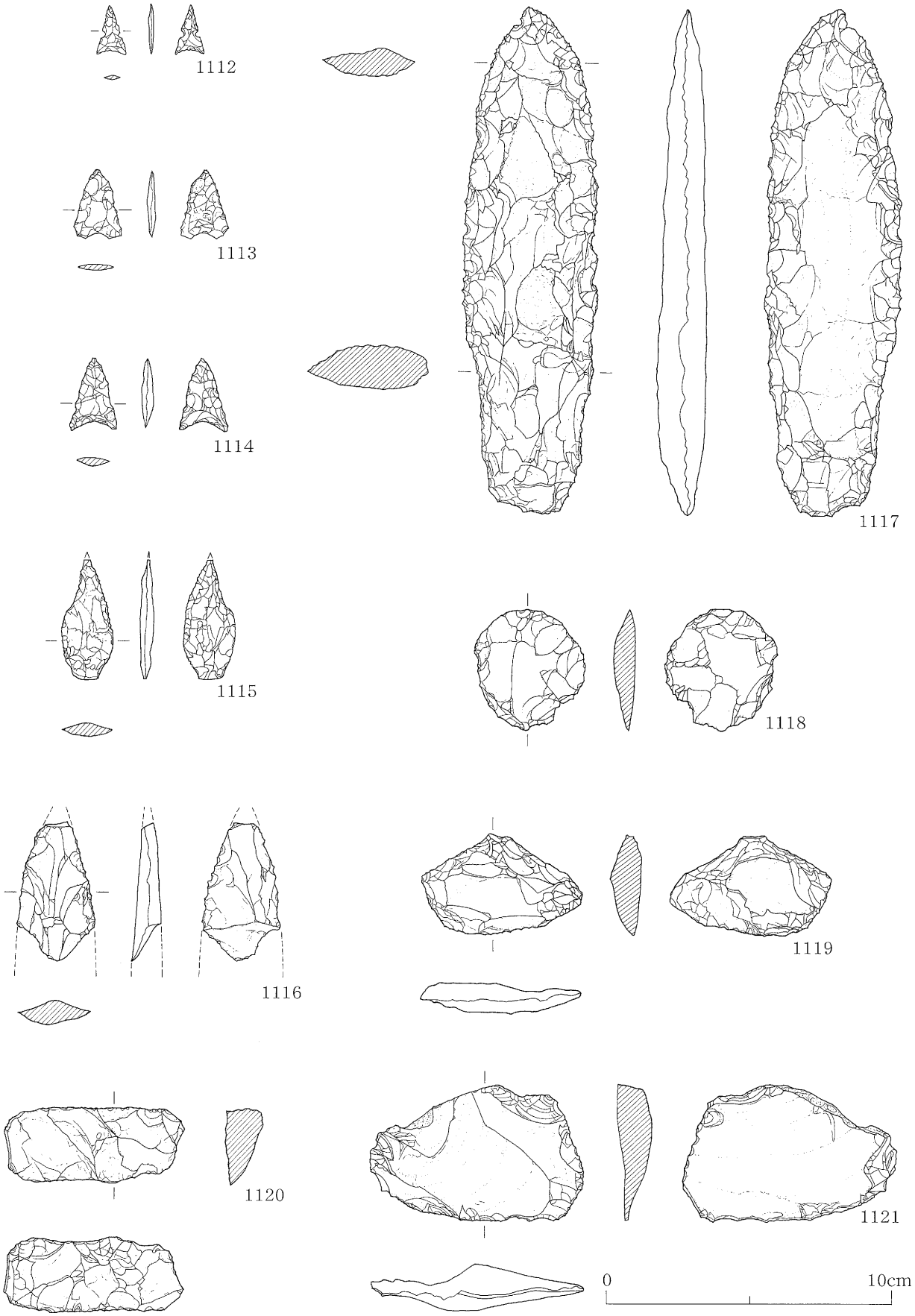
石鏃・石剣・削器がある。全てサヌカイト製である。

1112～1115は石鏃である。1112は両側縁に抉りが入ったアメリカ式、1113・1114は凹基式、1115は凸基無茎式である。1114は基部に原礫面が残る。1115は最先端部を欠損する。側縁部の片側は欠損した後再度細部調整を加え、成形したと思われる。石錐の可能性もある。1112～1114は溝11、1115は溝10より出土した。

1116・1117は石剣である。1116は先端部である。最先端部を欠損する。基部の欠損面はひさし形



第117図　第60次石器実測図



第118図　第60次石器実測図

を呈する。1117は完形である。中央より少し先端寄りの部分に最大幅をもち、先端部と基部に向かって幅を減じる。基部には茎の作り出しがあり、基端から5cm程度までに刃潰しが施されている。原礫から材料となる剥片を割り取る際にできた主剥離面が大きく残っており、横長の剥片を用いたことが分かる。1116は溝11、1117は溝10より出土した。

1118～1121は削器である。1118は円形を呈する。周縁を細部調整で成形する。1119は背部に原礫面を一部残して周縁に細部調整を施す。1120は背部に原礫面を残す、楔形の剥片に細部調整を施す。1121は背部に原礫面を残す。側縁はわずかに細部調整が施される。1118・1121は溝11、1119・1120は14層より出土した。

4）木製品（第119～121図1122～1136）

記載等は第58次調査出土遺物と同様である。

1122は長柄鋤の未成品である。ほぼ完存する。全長は約139.6cmを測る。身は長さ約64.4cm、幅17.4cm厚さ5.6を測る。長方形を呈し、端部は平坦に終わる。柄は幅約7.6cm、厚さ5.6cmを測る。四角形の断面をもち、把手方向に厚みが増す。把手は長さ約16cm、幅13cm、厚さ5.6cmを測る。四角形を呈し身に比べ厚みをもつ、端部を平坦に削る。把手と身の一側面には大部分は剥離するが一部樹皮が残る。他の一側面は両面から削って側面の中央部に約２cmを測る面をもたせる。身の一面は平坦に他の一面を舟底状に削り出す。加工の初段階で前面と後面を意識したものと思われる。身の部分に明瞭な削り痕を残す。形状から肩の張った長方形の身と逆三角形を呈する把手を有する鋤を作り出すと考えられる。本品は細部に加工を施す前段階の未成品である。柾目材を使用する。材は広葉樹である。溝13より出土。

1123は槌状木製品である。楕円形を呈し、長軸頭頂部から延びる柄状の突起を削り出す。片面に焼け痕が残る。芯持材を使用する。材は広葉樹である。溝11より出土。

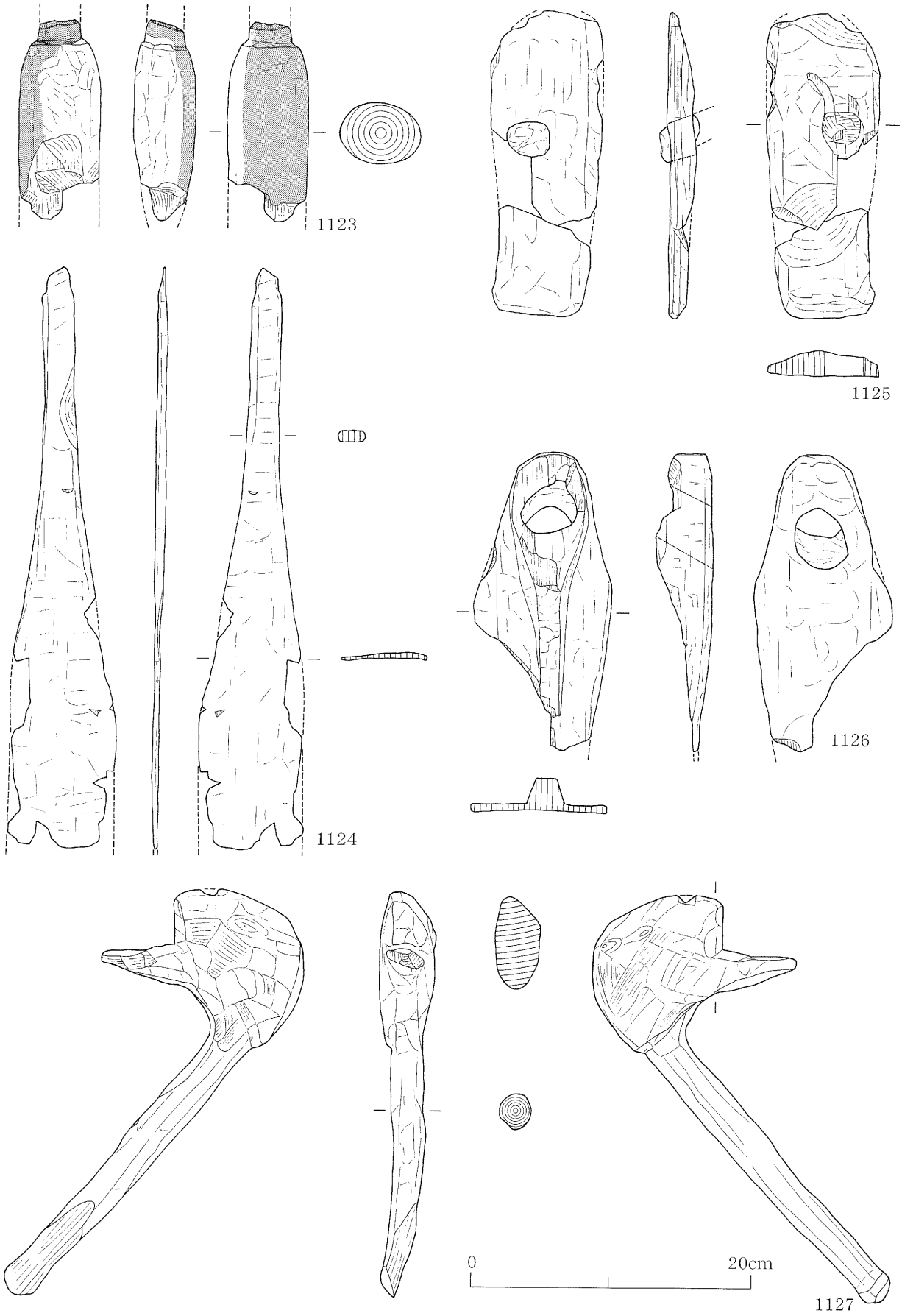
1124はヘラ状木製品である。上部は細く削り、下部に向かって幅広につくる。上部の断面は楕円形を呈する。下部は片面から厚さ0.4cmほどに薄く削る。柾目材を使用する。材は針葉樹である。溝11より出土。

1125・1126は鍬である。1125は身と柄が残る。一面はやや隆起し、他の一面は平坦に削る。両端部はやや丸味を帯びた面をもつ。刃部は丸味をもつ。柄を装着する孔が中央上方のやや右よりに位置する。右側の端部は隆起部分に近く厚みをもって終わることから再加工の可能性が高い。本来の身幅は15cmほどであったと考えられる。柄は隆起面の方へ延びるが大部分を欠損する。身は柾目材、柄は割り材を使用する。材は広葉樹である。1126は刃部が欠損する。一面に下端が長く延びる舟形隆起をもち、柄を装着する円孔を穿つ。他の一面は平坦に削る。両端部は面をもつ。身幅は刃部に向かって狭まる。刃部付近の左右は幅が異なることから再加工の可能性がある。柾目材を使用する。材は広葉樹である。溝11より出土。

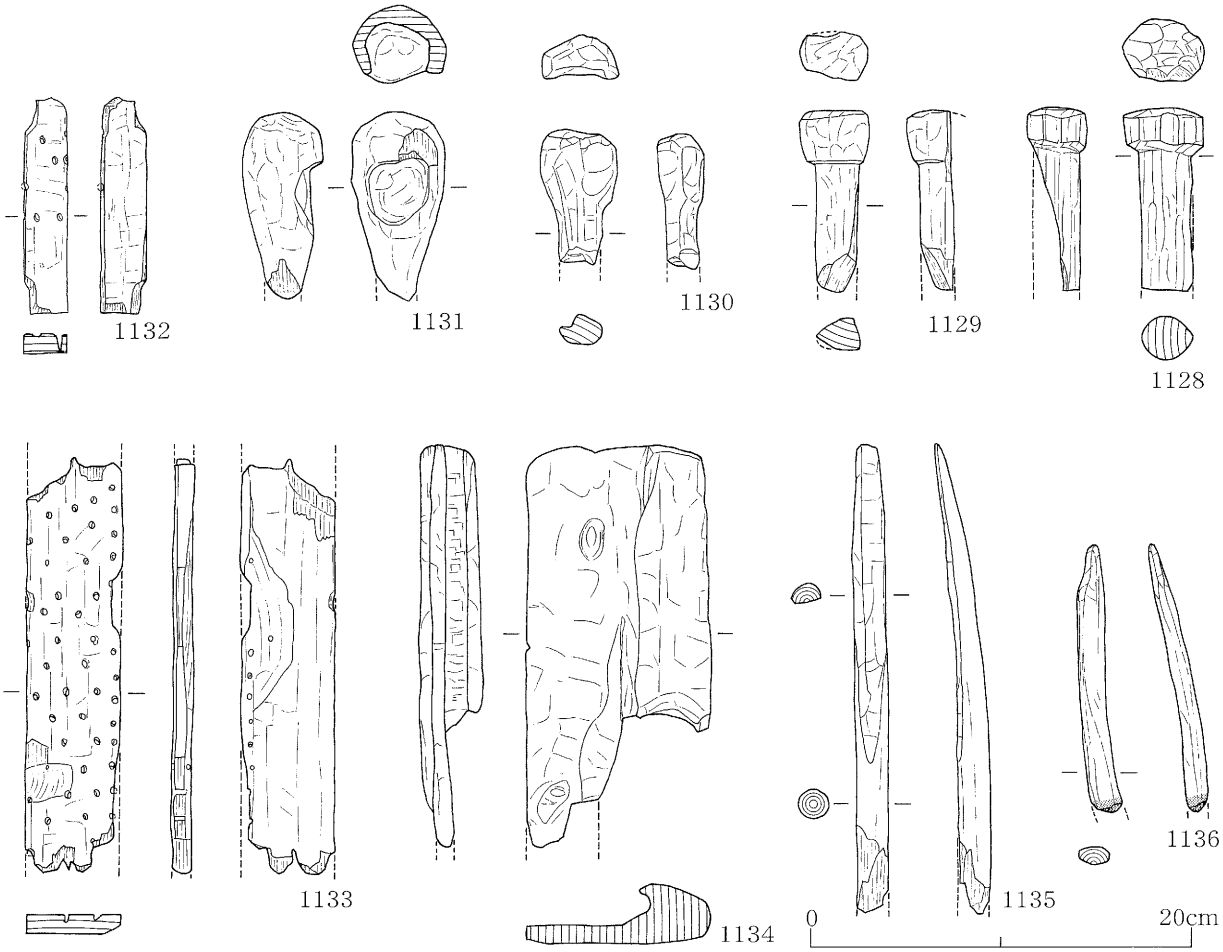
1127は柄状木製品である。ほぼ完存し手斧の柄状を呈する。台状部の幅は狭く先端の方向に細くすぼまる。台状の部分から頭頂部にかけて、ほぼ直角に削り釣鐘形の面をもつ。頭頂部から握り部にかけては、丸味をもち弧状を呈する。台状部と握り部の角度は60°を測る。握り部の端部は円周を削り瘤状に残す。頭部には丁寧な削り痕がみられ、両側面には数条の細いスレ痕が残る。幹から枝にかけて使用する。材は広葉樹である。溝19より出土。

1128～1130は有頭棒である。小口の一端を瘤状に削り出す。端部上部を平坦に削る。1128・1129は棒材の円周部を削り、瘤状部の断面が楕円形を呈する。1128は削り痕を明瞭に残す。1130は側面

第119図　第60次木製品実測図



第120図　第60次木製品実測図



第121図　第60次木製品実測図

のみに抉りを入れ、瘤状部の断面が扁平な山形を呈する。割り材を使用する。材は1128・1130が広葉樹、1129は針葉樹である。1128は溝15、1129・1130は第11層より出土。

1131は有孔柄状木製品である。頭頂部は丸く削る。中央部に円形の深い窪みを削り出す。板目材を使用する。材は広葉樹である。溝11より出土。

1132・1133は有孔板である。1132・1133ともに欠損部分が多く全形は不明である。1133は端部が残る。径約0.4cmの小孔を片面から穿つ。小孔は貫通するものと未貫通のものがある。貫通するものは1133の端部に穿たれた縦の列にみられる。また、木製の目釘が一部の孔に残る。孔間はほぼ一定の距離をもつが、規則制はみられない。盾の可能性もある。板目材を使用する。材は針葉樹である。1132は第14層、1133は溝11より出土。

1134は抉り入り板である。残存する平面は長方形を呈する。板状部分が下方へ延びる。側面は丸味をもつ。断面は横J字形を呈する。抉りが入る部分には、やや細めの工具による削り痕が残る。柾目材を使用する。材は広葉樹である。溝11より出土。

1135は尖頭棒である。棒材の一端を斜めに削り尖らす。他は樹皮を剥いだ状態で終わる。弓の可能性もある。芯持材を使用する。材は針葉樹である。溝13より出土。

1136は弓である。弭の一端のみ残存する。端部は円周部全体を細く削り尖らす。平面は三角形を呈する。下方は円周部の半分を削り断面が半月形を呈する。他の部分は樹皮を剥いだ状態で終わる。欠損した端部には焼け痕が残る。芯持材を使用する。材は針葉樹である。溝13より出土。

Ⅳ．自然科学

1. 動物遺存体について

安部　みき子

はじめに

東大阪市鬼虎川遺跡の第58次ならびに第60次調査において、弥生時代から近世までの遺物包含層・遺構より動物遺体が出土している。種が同定できたものは哺乳類５種、鳥類１種、爬虫類１種であり（第３表）、魚類は同定から除いた（第３表）。同定できた動物遺存体は、各時期の遺構ごとに最小個体数を求め、骨計測が可能なものは計測をおこなった。なお、最小個体数の推定にもちいなかった骨格の部位は、環椎、軸椎を除く椎骨と肋骨、指骨である。

第58次調査（第４・５・６表）

弥生時代以前から近世までの遺物包含層・遺構から出土した動物遺存体は弥生時代中期が最も多く、ついで中世期であった。弥生時代はシカとイノシシが大半を占めスッポンが数点みられたが、中世以降ではウマが出現しシカやイノシシは減少する。

縄文時代

第32層からはサカナの椎骨が８点出土しているが、種の同定はおこなわなかった。

弥生時代前期以前

溝123からシカの前頭骨が１点出土しているのみである。

弥生時代中期

種の同定ができた骨片はイノシシが半数以上を占め、ついでシカが多いが、最小個体数は両者とも３であった（第５表）。スッポンが３点と、種の同定ができなかったカメと思われるものが１点出土している。

遺物包含層・遺構ごとの出土数は、第17層、大溝２が多かった。シカとイノシシの出土比は、第15層がイノシシのみで、溝95はシカのみが出土している以外には大きな差異はなかった。スッポンは大溝２、溝95と第16層から出土している。

大溝２と溝95からは人骨が出土し、大溝２の人骨は肩甲骨や尺骨、手などの骨格で、小片であるため年齢や性、同一個体の有無を検証することはできなかった。また、溝95からもヒトの下顎第１大臼歯が出土しているが、これらの骨の由来は不明である。

中世期

水田遺構と溝15、第７層からウマの臼歯、シカとイノシシがともに１点遺存しており、野生動物の出土数が減少している。また、スッポンとオナガガモよりやや小型のカモの仲間の烏口骨が土坑５から出土している。

ヒトの頭骨片と思われる骨片が流路でみられるが、由来は不明である。

近世期

土坑１からウマの臼歯と哺乳類の肩甲骨が、土坑２から大型哺乳類の胸骨の一部が出土している。

第60次調査（第７・８・９表）

動物遺体は弥生時代中期の遺物包含層・遺構のみから出土し、シカとイノシシのほかに、サル、イヌ、スッポンが同定できた。シカとイノシシの出土比はイノシシの総数が35でシカが８と約４倍イノ

シシが多く、最小個体数でもイノシシが3、シカが1とイノシシのほうが多い。イヌは、溝9から左上顎骨、溝11からは右上顎骨がそれぞれ1点出土しており、左上顎骨は歯槽部が摂氏から第2大臼歯まで遺存しており、その骨計測値より小型犬に属するが、右上顎骨は遺存部位が少ないため、体格の分類はできなかった。大阪の弥生遺跡からの出土例が少ないサルは前腕骨が溝11と13でみられた。出土した動物遺体の多くが溝から出土し、遺構ごとの差異は見られなかった。

まとめ

1. 第58次調査では弥生時代以前から近世まで、動物遺体が出土し、弥生時代中期が最も多く、弥生時代中期ではシカとイノシシの出土比に差がなく、中世以降になると、ウマが出土しシカやイノシシの出現頻度が減少している。また、弥生時代には溝から、中世には流路から人骨が出土しているがその由来は不明である。

2. 第60次調査では弥生時代中期から出土したシカとイノシシの出土比はイノシシのほうが約4倍多く、かたよりが見られた。また、イヌは上顎骨の計測値より小型犬であった。サルの前腕骨が2点遺存していた。

謝辞　稿を終るにあたり、データーの入力に協力いただいた大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学（解剖学教室）の魚矢聖子さんに感謝の意を表します。

第3表　出土動物遺存体の学名

哺乳類　CLASS　MAMMALIA
- 霊長目　Order Primates
  - オナガザル科　Family Cercopithecidae
    - ニホンザル　*Macaca fuscata fuscata*
- 食肉目　Order Carnivora
  - イヌ科　Family　Canidae
    - イヌ　*Canis　familialis*
- 偶蹄目　Order　Artiodactyla
  - イノシシ科　Family　Suidae
    - イノシシ　*Sus scrofa*
  - シカ科　Family　Ceruidae
    - ニホンジカ　*Cervus Nippon*
- 奇蹄目　Order　Perissodatyla
  - ウマ科　Family　Equidae
    - ウマ　*Equus caballus*

鳥類　CLASS　AVES
- カモ目　Order　Anseres
  - カモ科　Family　Anatidae
    - 属、種不明　Gen. et sp. indet.

爬虫類　CLASS　REPTILIA
- カメ目　Order　Testudinata
  - スッポン科　Family　Trionychidae
    - スッポン　*Trionyx　sinensis*

第４表　第58次における遺構別出土表

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出土部位		詳　　細	解体痕
					左右	部位名		
近世期								
1	39	10-14	土坑1	ウマ	左	下顎第1大臼歯	近遠心径　27.15　　頬舌径　16.05 歯冠高　約35.0、比較的老齢	
2	40	10-15	土坑1	哺乳類	右	肩甲骨	烏口突起未癒合　肩甲窩～約7cm遺存	
3	41	10-8	土坑2	大型哺乳類	－	胸骨	1	
中世期								
4	84-1	10-15	水田状遺構	ウマ	左	下顎第2大臼歯	近遠心径　23.25、頬舌径　14.5	
5	84-2	10-15	水田状遺構	大型哺乳類	－	臼歯片	1	
6	83	10-14	水田状遺構	大型哺乳類	－	骨片	2	
7	86	10-8	第7層	ウマ	右	下顎第3大臼歯	歯冠の一部破損	
8	87	10-9	第9層	大型哺乳類	－	骨片	1	
9	42-1	10-8	土坑4	イノシシ	左	橈骨	近位～、約8ｃｍ遺存　近位矢状径 20.06、横径 28.10	
10	42-2	10-8	土坑4	シカ	－	中位腰椎	前関節突起と椎体のみ遺存　関節突起の一部が焼けている、解体痕あり、前関節間長 37.56、前椎体関節長 27.40、高径 25.26	アリ
11	42-3	10-8	土坑4	哺乳類	－	骨片	8	
12	43-2	10-8	土坑5	カモ（中型？）	右	烏口骨	オナガガモより小　一部焼けている 胸骨関節部のみ遺存　骨端破損	
13	43-1	10-8	土坑5	スッポン	不明	肋骨板		
14	43-3	10-8	土坑5	哺乳類	－	肋骨片、長骨片	各1	
15	44	10-8	土坑6	大型哺乳類	－	長骨片	1	
16	1	10-2	溝15	ウマ	－	臼歯片	4	
17	85	10-1	流路B－b	ヒト？	－	頭骨片	3	
縄文時代								
18	137	10-10	第32層	サカナ	－	椎骨	4	
19	137	10-10	第32層	サカナ	－	椎体	4　やや大が3	
弥生時代前期以前								
20	16	10-7	溝123	シカ	不明	前頭骨	角座と角、約1cmのみ遺存	
弥生時代中期								
21	17	10-5	大溝1	大型哺乳類	－	骨片	1	
22	18-1	10-13	大溝2	イノシシ	右	上顎第3小臼歯 P3		
23	22-1	10-14	大溝2	イノシシ	左	上顎第3大臼歯 M3	近位咬頭の萌出　近遠 31.69、頬舌径 19.56	
24	21-13	10-14	大溝2	イノシシ	－	臼歯片	1	
25	18-2	10-13	大溝2	イノシシ	不明	臼歯片	2	
26	26	10-14・15	大溝2	イノシシ	左	上顎骨	第3小臼歯～第2大臼歯まで遺存、歯は第3小臼歯～第2大臼歯まで釘植	
27	18-3	10-13	大溝2	イノシシ	不明	上顎片	3	
28	22-2	10-14	大溝2	イノシシ？	不明	下顎骨片と臼歯片	多数	
29	23	10-14	大溝2	大型哺乳類	－	長骨片	1	

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出土部位		詳　　細	解体痕
					左右	部位名		
30	29-1	10-15	大溝2	大型哺乳類	－	長骨片	2	
31	20-2	10-14	大溝2	大型哺乳類	－	長骨片	2　うち1点は一部焼けている	
32	21-15	10-14	大溝2	シカ	左	尺骨	滑車部のみ遺存	
33	20-1	10-14	大溝2	シカ	－	第2または第3胸椎	左側椎体と横突起のみ遺存	
34	24-2	10-14	大溝2	スッポン	不明	肋骨板	体部、約1cm遺存	
35	24-1	10-14	大溝2	ヒト	左	寛骨	寛骨臼の一部のみ遺存	
36	21-10	10-14	大溝2	ヒト	－	頚椎	椎体　5	
37	21-8	10-14	大溝2	ヒト	不明	肩甲骨	2	
38	21-5	10-14	大溝2	ヒト	右	肩甲骨	肩甲窩の一部のみ遺存	
39	21-7	10-14	大溝2	ヒト	不明	肩甲骨	肩甲頚	
40	21-6	10-14	大溝2	ヒト	右	肩甲骨	肩峰のみ遺存	
41	19	10-14	大溝2	ヒト	不明	鎖骨	骨幹のみ	
42	21-1	10-14	大溝2	ヒト	左	三角骨		
43	21-9	10-14	大溝2	ヒト	右	尺骨	肘頭から頭骨切痕下部まで遺存	
44	21-3	10-14	大溝2	ヒト	左	第5中手骨	近位端のみ遺存	
45	21-12	10-14	大溝2	ヒト	－	椎骨	椎弓　2	
46	21-3	10-14	大溝2	ヒト	不明	手の中節骨		
47	21-2	10-14	大溝2	ヒト	左	有頭骨		
48	21-11	10-14	大溝2	ヒト	不明	肋骨片	多数	
49	29-2	10-15	大溝2	哺乳類	－	骨片	1	
50	25	10-14	大溝2	哺乳類	－	骨片	3	
51	21-14	10-14	大溝2	哺乳類	－	骨片	多数	
52	27	10-15	大溝2	哺乳類	－	長骨片	1	
53	28	10-15	大溝2	哺乳類	－	長骨片	1	
54	24-3	10-14	大溝2	哺乳類	不明	肋骨片	体部、約1cm遺存、焼骨	
55	32-1	10-2	大溝3	イノシシ	右	下顎骨	第1大臼歯と歯槽部遺存、第1大臼歯も破損	
56	33-1	10-2	大溝3	イノシシ	左	下顎第3小臼歯	未萠出	
57	32-3	10-2	大溝3	イノシシ？	－	臼歯片		
58	33-2	10-2	大溝3	イノシシ？	－	頭骨片	多数	
59	30	10-1	大溝3	大型哺乳類	－	長骨片	3	
60	32-2	10-2	大溝3	シカ	右	距骨	内側が破損	
61	31	10-1～3	大溝3	シカ	左	下顎第1大臼歯	やや磨耗　近遠心径 15.65、頰舌径 10.22	
62	34	10-4	大溝3	シカ	左	踵骨	載距突起から、後方約4cm遺存	
63	35	10-9	大溝4	イノシシ	左	下顎骨	頭のみ　前後径 29.66、横径 30.09	
64	36	10-9	大溝4	大型哺乳類	－	長骨片	1	
65	38	10-12	大溝5	イノシシ	右	橈骨	近位部のみ　前縁破損　No.30よりやや大	
66	37	10-10	大溝5	大型哺乳類	－	長骨片	1	
67	88	10-8	第14層	シカorイノシシ	左	寛骨	寛骨臼の坐骨体外側部のみ遺存	
68	89-1	10-8	第14層	シカorイノシシ	不明	指骨	底～中央まで　底は未融合	
69	89-2	10-8	第14層	シカorイノシシ	－	長骨片	多数	
70	91-1	10-8	第15層	イノシシ	左	肩甲骨	関節窩～約9ｃｍ遺存　窩の辺縁～頚後縁と肩甲棘破損	

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出　土　部　位		詳　　細	解体痕
					左右	部　位　名		
71	91-3	10-8	第15層	イノシシ	右	下顎犬歯	先端破損　約4cm遺存　若い　♂？約1～2才？	
72	91-2	10-8	第15層	イノシシ	左	立方骨	前後径 36.07、横径 22.05、高径 28.26	
73	90	10-8	第15層	大型哺乳類	－	長骨	遊離骨端の一部	
74	91-4	10-8	第15層	哺乳類	－	骨片	3	
75	108-2	10-13	第16層	イノシシ	右	上顎第2大臼歯M2	萌出直後　近遠心径 23.11、頬舌径 18.71	
76	108-4	10-13	第16層	イノシシ	不明	尺骨	骨幹の中央前面のみ遺存	
77	103-4	10-10～15	第16層	イノシシ	左	尺骨	体の一部のみ遺存、解体痕あり	アリ
78	103-1	10-10～15	第16層	イノシシ	－	中位胸椎	棘突起と左右の横突起破損、椎体に異常骨増殖あり	
79	97-1	10-7	第16層	イノシシ	左	橈骨	遊離遠位端　矢状径 27.21、横径 36.87	
80	99	10-7	第16層	イノシシ	不明	第2または第5中手骨or中足骨	近位部破損	
81	108-5	10-13	第16層	大型哺乳類	－	骨片	3　関節部？	
82	94	10-3	第16層	大型哺乳類	－	長骨片	2　焼骨	
83	97-3	10-7	第16層	カメ？	－	骨片	1	
84	103-2	10-10～15	第16層	シカ	右	坐骨	体の一部、月状面の後端	
85	108-3	10-13	第16層	シカ	不明	中手骨または中足骨	遠位関節の一部	
86	93	10-1	第16層	シカ	左	腸骨	体の一部、関節窩	
87	92	10-1	第16層	シカorイノシシ		臼歯片	1	
88	96	10-5	第16層	シカorイノシシ	左	頚骨	遊離近位端　外側部破損　一部、焼けている	
89	107	10-12	第16層	シカorイノシシ	不明	骨片	関節部のみ遺存	
90	108-1	10-13	第16層	シカorイノシシ	不明	踵骨	踵骨隆起のみ遺存	
91	110	10-15	第16層	シカorイノシシ	不明	大腿骨	骨頭の窩周辺のみ遺存	
92	109	10-15	第16層	シカorイノシシ	不明	中節骨	矢状断　切断痕アリ	アリ
93	98	10-7	第16層	シカorイノシシ	－	長骨片	関節の一部　（上腕骨又は、大腿骨遠位部）	
94	104	10-11	第16層	シカorイノシシ	－	頭骨片	4	
95	101-1	10-9	第16層	シカorイノシシ	不明	末節骨	先端破損	
96	97-2	10-7	第16層	シカorイノシシ		末節骨	底部関節面のみ遺存	
97	103-3	10-10～15	第16層	スッポン	右	腹甲板	1	
98	105	10-11	第16層	不明	－	骨片	1	
99	95	10-4	第16層	哺乳類	－	骨片	2	
100	106	10-11	第16層	哺乳類	－	骨片	3　うち1点は焼骨	
101	100	10-9	第16層	哺乳類	－	骨片	4　うち2点は焼骨	
102	103-5	10-10～15	第16層	哺乳類	－	長骨片	1	

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出　土　部　位		詳　　細	解体痕
					左右	部　位　名		
103	102	10-9 ～15	第16層	哺乳類	不明	長骨片	2	
104	101-2	10-9	第16層	哺乳類	－	肋骨片	1	
105	132	10-15	第17層	イノシシ	－	下顎骨	下顎結合部　下縁と犬歯歯槽の一部 ♂	
106	122-1	10-10	第17層	イノシシ	－	環椎	前弓の右側の一部	
107	115	10-4	第17層	イノシシ		環椎	右側の外側塊と骨片多数	
108	127	10-12	第17層	イノシシ	右	脛骨	遊離遠位端	
109	111-1	10-1	第17層	イノシシ	左	尺骨	尺骨粗面、約6ｃｍ遺存　1才程度のものと同大　切断痕アリ	アリ
110	113	10-2	第17層	イノシシ	左	尺骨	肘頭～滑車まで遺存　肘頭破損　一部焼けている　1才程度のものより大 滑車関節面内側長 31.15	
111	125-1	10-11	第17層	イノシシ	右	上腕骨	骨幹中央～遠位端まで遺存　矢状径38.14、横径 45.59	
112	119-1	10-7	第17層	イノシシ	右	上腕骨	肘頭窩周辺のみ遺存	
113	119-2	10-7	第17層	イノシシ	不明	第3大臼歯(上下不明)	後方1/3の歯冠部のみ遺存	
114	116-2	10-5	第17層	大型哺乳類	－	骨片	2	
115	125-2	10-11	第17層	大型哺乳類	－	骨片	2	
116	111-2	10-1	第17層	大型哺乳類	－	長骨片	1	
117	124	10-11	第17層	大型哺乳類	－	長骨片	1	
118	129-2	10-13	第17層	大型哺乳類	－	長骨片	1	
119	130-2	10-13	第17層	大型哺乳類	－	長骨片	4	
120	118	10-7	第17層	大型哺乳類	－	長骨片	1　焼骨	
121	123	10-10	第17層	大型哺乳類	－	長骨片		
122	126-2	10-12	第17層	大型哺乳類(ヒト?)	－	歯根のみ	1	
123	116-1	10-5	第17層	シカ	右	距骨	内側長 37.95、外側長 41.26、遠位部横径 25.62	
124	120	10-9	第17層	シカ	左	舟状立方骨	一部破損、前後径は計測不可、横径31.15	
125	114	10-3	第17層	シカ	左	中足骨	遠位部のみ遺存　矢状径20.58、横径28.03	
126	122-2	10-10	第17層	シカ	左	中足骨	近位～骨幹までの約9cm,外側部のみ遺存	
127	121-1	10-9	第17層	シカ	不明	角片	長さ約5cm、幅1cm遺存	
128	130-1	10-13	第17層	シカ	右	側頭骨	錘体	
129	121-2	10-9	第17層	シカorイノシシ	不明	肩甲骨	前縁又は後縁の一部が、約3cmと2cmが遺存	
130	126-1	10-12	第17層	シカorイノシシ	不明	踵骨	踵骨隆起のみ遺存、骨端未癒合	
131	117	10-7	第17層	シカorイノシシ	不明	下顎骨	臼歯部歯槽の外側部のみ遺存　焼骨	
132	131	10-15	第17層	シカorイノシシ	不明	寛骨片	4	
133	129-1	10-13	第17層	シカorイノシシ	不明	上顎片	2　臼歯歯槽部　約4cmと2cm遺存	
134	112	10-2	第17層	不明	－		1　サカナ？	
135	128	10-12	第17層	哺乳類	－	下顎骨片	1	

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出　土　部　位		詳　　細	解体痕
					左右	部　位　名		
136	126-3	10-12	第17層	哺乳類	－	骨片	多数	
137	134	10-11	第18層	大型哺乳類	－	長骨片	1	
138	135	10-12	第18層	哺乳類	－	骨片	3	
139	133	10-3	第18層	哺乳類	－	骨片	1　関節部？	
140	136	10-15	第19層	大型哺乳類	－	歯槽	約2cm遺存	
141	81	10-10	土坑11	哺乳類	－	骨片	3	
142	80	10-9	土坑11	哺乳類	－	長骨片	1	
143	82	10-12	土坑18	シカ	左	上腕骨	上腕骨顆中央部のみ遺存	
144	45	10-7	土坑22	シカ	左	月状骨		
145	46	10-5	土坑25	シカ	右	舟状立方骨	最大幅　32.49、矢状径　28.14	
146	47	10-5	土坑26	イノシシ	右	大腿骨	骨頭のみ遺存	
147	48-2	10-1	土坑28	イノシシ	右	足の舟状骨	1才程度のものとほぼ同大	
148	49-1	10-1	土坑28	イノシシ	不明	中手骨又は中足骨	骨頭部のみ遺存　切断痕あり	アリ
149	48-1	10-1	土坑28	シカorイノシシ	左	頚骨	頚骨粗面より、下方6cm　前縁のみ遺存	
150	49-2	10-1	土坑28	シカorイノシシ	不明	肩甲骨	前縁又は後縁の一部、約5cm遺存 一部焼けている	
151	48-3	10-1	土坑28	哺乳類	－	骨片	1	
152	49-3	10-1	土坑28	哺乳類	－	骨片	3	
153	50	10-3	土坑30	シカorイノシシ	不明	踵骨	遊離踵骨隆起　焼骨	
154	51	10-5	土坑34	イノシシ？	不明	下顎骨	4　下顎枝	
155	52	10-12	土坑37	イノシシ	－	臼歯片	4	
156	53	10-14	土坑40	シカ	不明	中手骨または中足骨	遠位部のみ遺存　正中矢状面に切断アリ	アリ
157	54	10-14	土坑42	哺乳類	－	骨片	1	
158	59	10-15	土坑43	イノシシ	右	上顎第2大臼歯M2	萌出直後　近遠　22.45、頬舌　17.57	
159	57-1	10-15	土坑43	イノシシ	左	距骨	立方関節面下方破損　最大長　45.99	
160	56-2	10-15	土坑43	イノシシ	左	尺骨	肘頭破損　肘関節周辺のみ遺存　肘頭深　47.89、鈎状突起最大幅　27.73、滑車切痕長　29.99、切痕最大長　31.81　溝アリ	
161	60	10-15	土坑43	イノシシ	左	頭頂骨	矢状縫合部のみ、長さ約5cm遺存	
162	56-3	10-15	土坑43	大型哺乳類	－	長骨関節部	1	
163	57-2	10-15	土坑43	大型哺乳類	－	長骨片	多数	
164	56-1	10-15	土坑43	シカ	－	頚椎（中位）	椎体板未融合、上前方～下方へ切断	アリ
165	58-2	10-15	土坑43	シカorイノシシ		骨片	多数　関節部2片を含む	
166	58-1	10-15	土坑43	シカorイノシシ	右	上腕骨	骨幹中央～遠位部の後面のみ遺存	
167	55	10-15	土坑43	哺乳類	－	頭骨片	1	
168	62	10-15	土坑44	イノシシ	不明	頭頂骨	側頭稜の一部、約4cm遺存	
169	61-1	10-15	土坑44	イノシシ	左	有鈎骨	1才程度のものより、2周りほど大	
170	61-2	10-15	土坑44	大型哺乳類	－	骨片	一部　焼骨	
171	63-3	10-11	土坑36	大型哺乳類	不明	長骨片	1	
172	63-1	10-11	土坑36	シカ	右	下顎骨	切歯部破損　第2小臼歯脱落し、歯槽閉鎖　下顎角破損　計測は第6表	

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出　土　部　位		詳　　細	解体痕
					左右	部　位　名		
173	63-2	10-11	土坑36	シカ	右	上腕骨	遠位部のみ遺存　前後幅径　34.15、横径　37.98	
174	64	10-4	土坑48	哺乳類	－	骨片	3	
175	65	10-9	土坑49	大型哺乳類	－	骨片	1	
176	66	10-6	土坑59	哺乳類	－	骨片	3	
177	68	10-13	ピット118	不明	－	骨片	1	
178	69	10-13	ピット119	イノシシ	左	尺骨	滑車切痕の関節面周辺のみ遺存	
179	70	10-14	ピット131	哺乳類	－	長骨片	1	
180	71	10-14	ピット143	大型哺乳類	－	頭骨片	1	
181	72-1	10-11	ピット152	イノシシ	左	下顎第3大臼歯	未萌出　近遠　34.46、頬舌　14.35	
182	72-2	10-11	ピット152	哺乳類	－	骨片	1	
183	73	10-1	ピット153	イノシシ	左	踵骨	載距突起～後方約3cm遺存	
184	74	10-2	ピット165	哺乳類	－	肋骨片	1	
185	75	10-10	ピット197	シカ	－	角片	約2cm遺存	
186	76	10-5	ピット240	大型哺乳類	－	長骨片	1	
187	77	10-7	ピット246	シカ	不明	中節骨	1	
188	78	10-7	ピット265	哺乳類	－	骨片	1	
189	79	10-3	ピット363	哺乳類	－	骨片	1	
190	67	10-2	ピット80	イノシシ	左	距骨	立方関節面破損　No,30より1周り小	
191	12	10-12	溝102	大型哺乳類	－	椎骨	椎体の一部	
192	11-1	10-11	溝102	シカ	左	距骨	内側を切断　遠位面幅　25.25　切断痕あり	アリ
193	11-2	10-11	溝102	シカorイノシシ	－	椎骨	椎弓根のみ遺存	
194	14-1	10-7	溝106	イノシシ	左	上顎第3大臼歯M3	近遠位経　39.14、頬舌径　22.15	
195	14-2	10-7	溝106	イノシシ	不明	臼歯片	多数	
196	15	10-7	溝106	イノシシ	左	前頭骨+頭頂骨	眼窩周辺のみ遺存	
197	13-1	10-7	溝106	哺乳類	－	頭骨片	多数	
198	2-2	10-13	溝93	大型哺乳類	－	長骨片	3　関節部を含む	
199	2-1	10-13	溝93	シカ	左	大腿骨	小転子より下方、約11cm遺存	
200	2-1	10-9	溝95	大型哺乳類	不明	肩甲骨	一部　約２cm遺存	
201	4	10-10	溝95	大型哺乳類	－	不明	骨片	
202	8-1	10-10	溝95	シカ	左	下顎骨	下顎結合部　切歯部　破損	
203	7-2	10-10	溝95	シカ	右	距骨	近位部破損、遠位関節面幅　23.65	
204	8-3	10-10	溝95	シカ	左	坐骨	体のみ遺存	
205	3-3	10-9	溝95	シカ	－	第１胸椎	椎体のみ、椎体最大長　38.15、椎体長　35.91、前椎体幅　32.35、後椎体幅　35.97	
206	9-1	10-12	溝95	シカ	－	中位頚椎	前の椎体板　未融合、中央で切断	切断
207	9-2	10-12	溝95	シカ	不明	中節骨	1　全長　35.60	
208	8-2	10-10	溝95	シカ	左	腸骨	体のみ遺存	
209	7-1	10-10	溝95	シカorイノシシ	左	下顎骨	下顎第4小臼歯、周辺の歯槽	
210	3-2	10-9	溝95	シカorイノシシ	－	胸椎	棘突起のみ、先端破損　解体痕アリ	アリ
211	8-4	10-10	溝95	シカorイノシシ	不明	大腿骨	遠位の関節顆の一つ、切断痕あり	切断
212	6	10-9	溝95	シカorイノシシ	－	腰椎	左肋骨突起のみ遺存	
213	5-1	10-9	溝95	スッポン	不明	肋骨板	外側部の一部　　焼骨	

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出　土　部　位		詳　　細	解体痕
					左右	部　位　名		
214	3-1	10-9	溝95	ヒト	左	下顎第1大臼歯	近遠心径　11.22、頬舌径　10.66	
215	8-6	10-10	溝95	不明	－	骨片	1	
216	9-3	10-12	溝95	不明	－	骨片	4	
217	8-5	10-10	溝95	不明	－	長骨片	1	
218	10	10-13	溝97	哺乳類	－	頭骨片	1	

第５表　第58次における各時代の出土数と最小個体数

時代		近世期		中世期				弥生時代中期		弥生時代前期？
種名		ウマ	？	ウマ	イノシシ	シカ	中型カモ？	イノシシ	シカ	シカ
角片	不明								1	
錘体	右								1	
頭頂骨	左							1		
前頭骨	不明									1
前頭骨+頭頂骨	左							1		
上顎骨	左							1		
上顎第2大臼歯	右							2		
上顎第3大臼歯	左							2		
上顎第3小臼歯	右							1		
下顎骨	左							1	1	
	右							1	1	
下顎犬歯	右							1		
下顎第3小臼歯	左							1		
下顎第1大臼歯	左	1								
下顎第2大臼歯	左			1						
下顎第3大臼歯	右			1						
下顎大臼歯	左									
環椎	－							1		
肩甲骨	左							1		
	右		1							
烏口骨	右						1			
上腕骨	左								1	
	右							1	1	
尺骨	左							*3	1	
橈骨	左				1			1		
	右							1		
有鈎骨	左							1		
月状骨	左								1	
腸骨	左								2	
坐骨	左								1	
	右								1	
大腿骨	左								1	
	右							1		
脛骨	右							1		
距骨	左							*3	1	
	右								*3	
踵骨	左								1	
舟状立方骨	左								1	
	右								1	
足の舟状骨	右							1		
立方骨	左							1		
中足骨	左								1	
中位腰椎						1				
総数		1	1	2	1	1	1	28	21	1
最小個体数		1	1	1	1	1	1	3	3	1

＊最小個体数

第６表　第58次におけるシカの下顎骨の計測値

資料番号 左右	172 右
下顎枝長　M後縁より goc	60.8
goc より Pm2前縁まで	143.9
頬臼歯長　Pm3－M3後縁	84.9
小臼歯長（2）　Pm3－Pm4	25.4
大臼歯長　M1－M3後縁	58.3
下顎体高（1）　M3後縁	36.5
下顎体高（2）　M1の前縁	27.3
下顎体厚　M1－M2	12.2

単位はmm

第７表　第60次における弥生時代中期の遺構別出土表

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出　土　部　位		詳　　細	解体痕
					左右	部　位　名		
219	138	11-7	溝5	不明	－	骨片	1	
220	139	11-2	溝6	イヌ？	－	頭骨片	3	
221	140	11-2	溝9	イヌ（小型）	左	上顎骨	前上顎骨～第2大臼歯後縁まで残　第3小臼歯～第2大臼歯まで釘植　歯槽全長　75.57、切歯長　12.24、小臼歯長　41.82、大臼歯長　13.84、犬歯歯槽長　11.67、幅　7.69、第4小臼歯長　16.14、幅　7.46	
222	141	10-6	溝10	イノシシ	右	上腕骨	両骨端未融合　近位部外側破損　骨幹最大長　115.50	
223	142-1	11-6	溝10	イノシシ	左	坐骨	Ｙ軟骨未融合　276の腸骨と接合	
224	142-2	11-6	溝10	イノシシ		肋骨片	1	
225	143	11-6	溝10	不明	右	肋骨片	1	
226	144	11-6	溝10	イノシシ	左	頭頂骨		
227	145	11-6	溝10	イノシシ	左右	下顎骨	小臼歯は孔歯　第1大臼歯のみ萌出1才　第1大臼歯と第3,4小臼歯3,4は左右とも釘植　筋突起切断　計測は第9表	アリ
228	146-1	11-6･7	溝10	イノシシ	－	環椎	前弓、後弓未融合　前関節窩間幅　39.65　後関節面間幅　46.70　後弓長16.99　幼体	
229	146-10	11-6･7	溝10	イノシシ	－	頚椎3	椎体後半破損　椎体板未融合　椎体板高　13.43　横径　20.75	
230	146-11	11-6･7	溝10	シカ		頚椎6	左前関節突起～椎体切断　成体の大きさ	アリ
231	146-12	11-6･7	溝10	不明		腰椎Ｉ	椎体未融合　幼体　椎体長　19.76	
232	146-2	11-6･7	溝10	イノシシ	右	前頭骨、頬骨、頭頂骨、側頭骨	右側のみ残　眼窩内最大長　34.26	
233	146-3	11-6･7	溝10	イノシシ	左	上顎骨	第1から4小臼歯、第1大臼歯釘植　小臼歯長　47.24　大臼歯長　24.91　臼歯列長71.45　1才未満　永久犬歯歯芽アリ　♂？	
234	146-4	11-6･7	溝10	イノシシ	右	側頭骨	頬骨突起と外耳道周辺残	
235	146-5	11-6･7	溝10	イノシシ	右	脛骨	両骨端未融合　骨幹最大長　130.05	
236	146-6	11-6･7	溝10	イノシシ	右	大腿骨	両骨端未融合　骨幹最大長　140.95	
237	146-7	11-6･7	溝10	イノシシ	右	上腕骨	遠位部のみ残　内側上顆未融合　遠位端横径　37.94	
238	146-8	11-6･7	溝10	イノシシ	右	中足骨4	遠位端未融合　近位＋骨幹長　56.32　近位＋骨幹最大長　58.75	
239	146-9	11-6･7	溝10	不明	－	骨片	5	
240	147	11-7	溝10	シカ	左	下顎骨	第2小臼歯?第3大臼歯の歯槽の半分まで残　第2大臼歯は釘植	
241	148-1	11-4	溝11	イノシシ	左	下M3	近遠心径　39.46　頬舌径　16.43	
242	148-2	11-4	溝11	不明	不明	肋骨片		
243	149	11-4	溝11	イノシシ	左	大腿骨	遠位部のみ残　外側顆切断？	
244	150-1	11-1	溝11	イノシシ	右	下M3	近遠心径　37.59、頬舌径　10.02	
245	150-2	11-1	溝11	不明	－	頭骨片	多数	
246	151	11-1	溝11	イノシシ	不明	下顎犬歯	先端の前縁残　♂	
247	152	11-2	溝11	イノシシ	右	寛骨	寛骨臼周辺残　寛骨臼前後径　34.77、横径　31.35	
248	153	11-4	溝11	不明	不明	長骨片	骨幹、約7cm残	
249	154	11-4	溝11	イノシシ	左	上M3	近遠心径　31.83　頬舌径　18.56	

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出土部位		詳　　細	解体痕
					左右	部位名		
250	155	11-4	溝11	イノシシ	－	腰椎2	両椎体板未融合　右肋骨突起、棘突起、前関節突起等破損　前後関節突起間長　55.19、後関節突起間最大幅　26.39	
251	156	11-4	溝11	イノシシ	左	下顎骨	第３乳切歯～第4小臼歯までの下顎骨残　犬歯の歯槽より♂、第2小臼歯での下顎骨高　51.29	
252	157	11-4	溝11	シカorイノシシ	不明	下顎骨	体の一部、約8cm残	
253	158-1	11-4	溝11	シカ	－	環椎	右側のみ残　ほぼ正中で切断　横突起破損　背側弓長　32.88	アリ
254	158-2	11-4	溝11	イノシシ	右	大腿骨	骨幹のみ、約10cm残	
255	158-3	11-4	溝11	不明		長骨片		
256	159-1	11-4	溝11	サル	左	橈骨	近位－骨幹中央まで、約10cm残	
257	159-2	11-4	溝11	イヌ	右	上顎骨と第2,3小臼歯	第2,3小臼歯は釘植　犬歯～第3小臼歯まで残	
258	159-3	11-4	溝11	スッポン	右	大腿骨	全長54.34	
259	159-4	11-4	溝11	イノシシ	－	環椎	腹側結節発達　左右横突起破損　腹側弓長　22.44　背側弓長　23.34　前関節間　58.40	アリ
260	159-5	11-4	溝11	不明	－	犬歯		
261	160-1	11-4	溝11	イノシシ	右	下顎第3大臼歯	近位外側の咬頭破損　近遠心径　38.90	
262	160-2	11-4	溝11	イノシシ	右	後頭骨	後頭顆（R）未融合で遊離	
263	160-3	11-4	溝11	シカ	不明	中節骨	最大長31.61	
264	161	11-5	溝11	イノシシ	右	尺骨	橈骨切痕と滑車切痕の下半分が残　成体	
265	162	11-5	溝11	シカ	－	中位腰椎	両椎体板未融合　椎体長　37.33、後関節突起間幅　22.21、前関節突起間幅　26.64 棘突起、肋骨突起破損	
266	163	11-5	溝11	シカ	－	頚椎5	前関節突起間幅　54.45、前後関節突起間長　66.50、後関節突起間幅　56.31、椎体長　52.28　棘突起と椎体後部破損	
267	164	11-4	溝13	イノシシ	左	脛骨	近位～骨幹、約10cm残　近位端未融合　解体痕アリ	アリ
268	165-1	11-4	溝13	サル	左	尺骨	滑車切痕下方より、約11cm残	
269	165-2	11-4	溝13	イノシシ	－	中位腰椎	両側椎体板未融合　棘突起、肋骨突起、前関節突起破損　椎体長　32.58、後関節突起間幅　26.81	
270	165-3	11-4	溝13	シカ	右	踵骨	体の一部、後関節面より後方約3cm残	
271	166	11-4	溝13	シカ	－	軸椎	計測は第9表	
272	167	11-4	溝13	イノシシ	左	肩甲骨	頚部後縁と肩甲棘までの間のみ約10cm残	
273	168	11-5	溝13	シカorイノシシ	－	中節骨	破片	
274	169	11-6	溝20	イノシシ	右左	下顎骨	切歯部の下顎結合部の下部のみ残　左Ｃの歯槽残　♀	
275	170	11-6～7	溝20	イノシシ	右	肩甲骨	関節窩破損　頚から約9cm残　頚最小高22.44　占骨？	
276	171-1	11-7	溝20	イノシシ	左	腸骨	142-1の挫骨と接合　最大長　165.83	

資料番号	同定番号	地　区	層位・遺構	種　　名	出土部位		詳　　細	解体痕
					左右	部位名		
277	171-2	11-7	溝20	イノシシ	左	踵骨	隆突起未融合　全長　82.86　前後30.80　横径　24.99	
278	171-3	11-7	溝20	シカorイノシシ	左	上腕骨	骨幹中央～遠位部まで残　関節部破損	
279	172	11-1	ピット13	不明	－	骨片	1	
280	173	11-1	ピット17	シカorイノシシ	不明	距骨	関節の一部のみ残	
281	174-1	11-4	第15層	シカ	－	頚椎	椎体後面のみ残　椎体板融合　切断？	
282	174-2	11-4	第15層	不明	－	骨片		
283	175	11-4	第15層	イノシシ	－	環椎	横突起先端破損　最大長45.03、前関節窩間幅　56.71+、後関節面間幅53.20、前後関節面間長　38.88	

第８表　第60次における弥生時代中期の出土数と最小個体数

		シカ	イノシシ	サル	イヌ
前頭骨、頬骨	右		1		
側頭骨	右		2		
頭頂骨	左		1		
	右		1		
後頭骨	右		1		
上顎骨	左		1		☆1
	右				1
上顎第3大臼歯	左		1		
下顎犬歯	不明		1		
下顎骨	左	1	*3		
	右		2		
下顎第3大臼歯	左		1		
	右		1		
環椎	－	1	*3		
軸椎		1			
第3頚椎	－		1		
第2腰椎	－		1		
頚椎5		1			
頚椎6		1			
中位腰椎	－	1	1		
肩甲骨	右		1		
上腕骨	右		1		
尺骨	左			1	
	右		1		
橈骨	左			1	
寛骨	右		1		
腸骨	左		1		
坐骨	左		1		
大腿骨	左		1		
	右		2		
脛骨	左		1		
	右		1		
踵骨	左		1		
	右	1			
第4中足骨	右		1		
中節骨		1			
出土総数		8	35	2	1
最小個体数		1	3	1	2

＊　最小個体数、☆　小型犬

第９表　第60次におけるイノシシの計測値

下顎骨		
資料番号	227	
左右	左	右
下顎骨全長(1) id － goc	169.0	169.4
下顎骨全長(2) id － Cm	184.6	183.8
goc より Pm２ 前縁まで	125.2	125.5
歯槽最大長 id － M 後縁	111.5	111.8
頬臼歯長(1) Pm１－M 後縁	77.7	76.5
頬臼歯長(2) Pm２－M 後縁	67.4	67.1
小臼歯長(1) Pm１－Pm４	50.7	48.1
小臼歯長(2) Pm２－ Pm４	40.3	39.3
大臼歯長　M１－ M 後縁	28.3	27.0
C後縁よりPm2前縁まで	14.2	16.0
顆高　gov － 4	84.2	85.7
下顎体高(1) M 後縁	35.7	37.9
下顎体高(2) M１ －Pm４	29.8	29.5
下顎体高(3) Pm２ の前	31.2	29.8
下顎体厚　M１ － M２	20.6	19.4
犬歯歯槽最大長		11.0
下顎体中心長	41.2	
下顎体中心高	29.2	
下顎幅(1)　C後縁よりPm2前縁間最小幅	31.5	
下顎幅(3)　下顎頭間最大幅	87.3	
下顎幅(6)　下顎角間最大幅	92.5	
下顎幅(8)　歯槽後縁間	38.9	
下顎幅(9)　下顎下縁で体と枝の境界点	67.8	

軸椎	
資料番号	271
椎体最大長(歯突起を含む)	87.51
前椎体面最大幅	58.79
後椎体面最大幅	31.03
後関節突起最大幅	44.93
椎弓最大長(後関節突起を含む)	77.13
椎骨最小幅	36.49

単位はmm

2. 貝遺体の同定

㈱吉田生物研究所

鬼虎川遺跡第60次発掘調査の溝11内から出土した貝遺体を独立法人奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術室松井章室長の協力を得、分類を行った。以下の第10表に結果を示す。

第10表　第60次溝11内出土貝遺体分類表

資料番号	大分類	和名	点数
284	腹足綱	カワニナ	3
285	腹足綱	ウミニナ科	5
286	腹足綱	タニシ科	9
287	腹足綱	タニシ科(幼貝)	1
288	腹足綱	オオタニシ	1
289	腹足綱		12
290	斧足綱	シジミ科	3
291	斧足綱		6

配列は北隆館編集部「学生版 日本動物図鑑」北隆館(1981)によった。

資284. カワニナ×14　資285. ウミニナ科×14　資286. タニシ科×2　資287. タニシ科（幼貝）×28
資288. オオタニシ×2.4　資289. 複足綱×18　資290. シジミ科×2.6　資291. 斧足綱×14

第122図　第60次溝11内出土貝遺体写真

3. 魚類遺体の同定

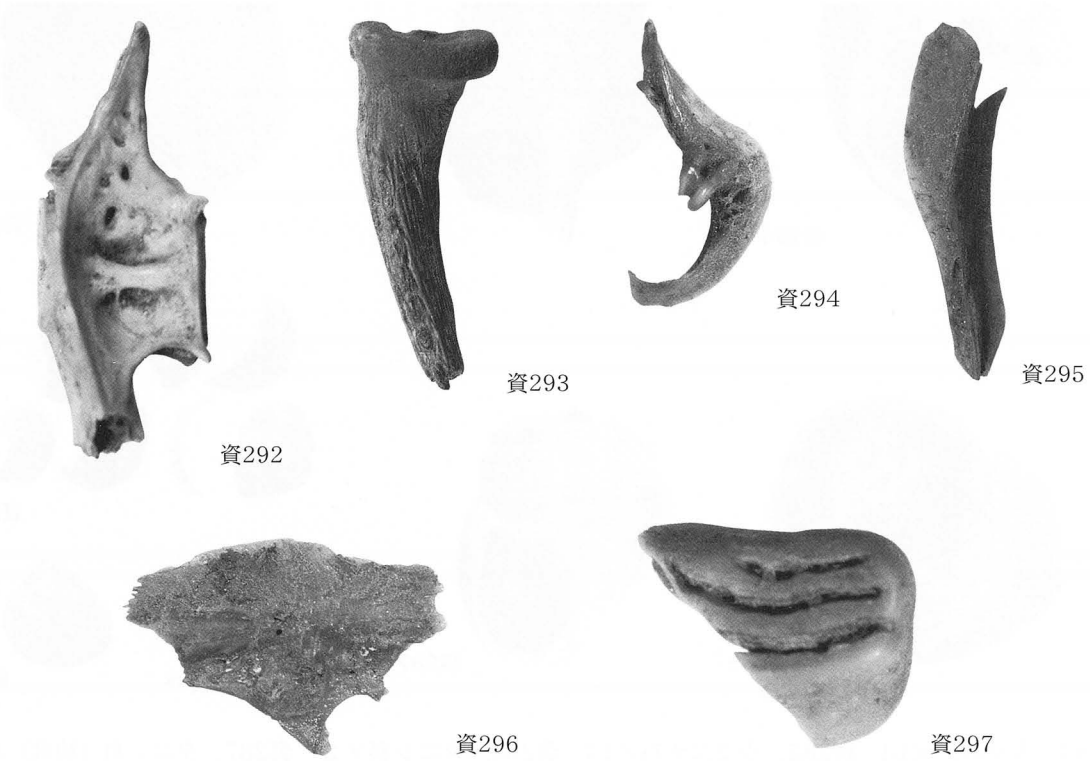
㈱吉田生物研究所

鬼虎川遺跡第60次発掘調査の溝11内から出土した魚類等動物遺体を独立法人奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術室の松井章室長の協力を得、分類を行った。以下の第11表に結果を示す。

第11表　第60次溝11内出土魚類遺体分類表

資料番号	大分類	和名	部位	左右	点数
292	魚類	タイ科	椎骨		1
293	魚類	ナマズ属	胸鰭棘		2
294	魚類	コイ科	下咽頭骨		1
295	魚類	硬骨魚綱	擬鎖骨	右	1
296	魚類	コイ科	前頭骨	左	1
297	魚類	コイ科	咽頭歯		1
298	魚類	ナマズ属	椎骨		1
299	魚類	ウナギ	椎骨		2
300	魚類	硬骨魚綱	部位不明		2
301	魚類	コイ科	第二椎骨		1
302	魚類	コイ科フナ属	主鰓蓋骨	左	1
303	魚類		不明		61
304	魚類	魚鱗			35

配列は北隆館編集部「学生版 日本動物図鑑」北隆館(1981)によった。



資292. タイ科×16　資293. ナマズ属×14　資294. コイ科×30　資295. 硬骨魚綱×19　資296. コイ科×13　資297. コイ科×14

第123図　第60次溝11内出土魚類遺体写真

4. 植物遺体の同定

㈱吉田生物研究所

東大阪市鬼虎川遺跡第60次調査の溝11から出土した植物遺体の同定結果を以下に報告する。

1. 調査した試料

調査したのは水洗い済状態の乾燥した植物遺体一式である。

2. 調査方法

試料を実体顕微鏡下で観察し、その形態から種の同定を試みた。その際、石川茂雄（1994年）、大井（1978年）、北村・村田（1979年）、中山・井之口・南谷（2000年）を参照した。

3. 結果

20種（木本８種、草本12種）が認められた。写真を示し、同定結果を第12・13表に記す。和名の順位は牧野（1989年）に、学名は北村・村田（1979年）によった。

第12表　第60次溝11内出土植物遺体同定表（木本）

資料番号	和　名	科　名	学　名	部位
305	ムクノキ	ニレ	*Aphananthe aspera* Planch.	種子
306	クワ属	クワ	*Morus* sp.	核
307	ツバキ属	ツバキ	*Camellia* sp.	果実
308	キイチゴ属	バラ	*Rubus* sp.	核
309	カラスザンショウ	ミカン科	*Fagara ailanthodes* Sieb.et Zucc	種子
310	ブドウ属	ブドウ	*Vitis* sp.	種子
311	ミズキ属	ミズキ	*Cornus controversa* sp.	核
312	ガマズミ属	スイカズラ	*Viburnum Dilatatum* sp.	核

第13表　第60次溝11内出土植物遺体同定表（草本）

資料番号	和　名	科　名	学　名	部位
313	カナムグラ	クワ	*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc	種子
314 315 316	タデ属	タデ	*Polygonum* spp.	果実
317	マメ科	マメ	Leguminosae	種子
318	ノブドウ	ブドウ	*Ampelopsis* Michx.	種子
319	シソ属	シソ	*Perilla* sp.	果実
320	シソ科	シソ		果実
321	ウリ	ウリ	*Cucumis melo* L.	種子
322	ユウガオ属	ウリ	*Lagenaria* sp.	種子
323	オナモミ	キク	*Xanthium Strumarium* L.	総苞
324	ヒルムシロ属	ヒルムシロ	*Potamogeton* sp.	果実
325 326	イネ	イネ	*Oryza sativa* L.	果実、頴

また、これら以外にも不明種実類が数個、炭化籾の集合体（資327）、不明果実の果托（資328）、木の芽（資329）、不明植物遺体（資330）が検出された。

第14表　第60次溝11内出土その他の植物遺体表

資料番号	品名
327	炭化籾の集合体
328	不明植物の果托
329	不明炭化材
330	不明植物遺体

［参考文献］

石川茂雄（1994年）『原色日本植物種子写真図鑑』、石川茂雄図鑑刊行委員会

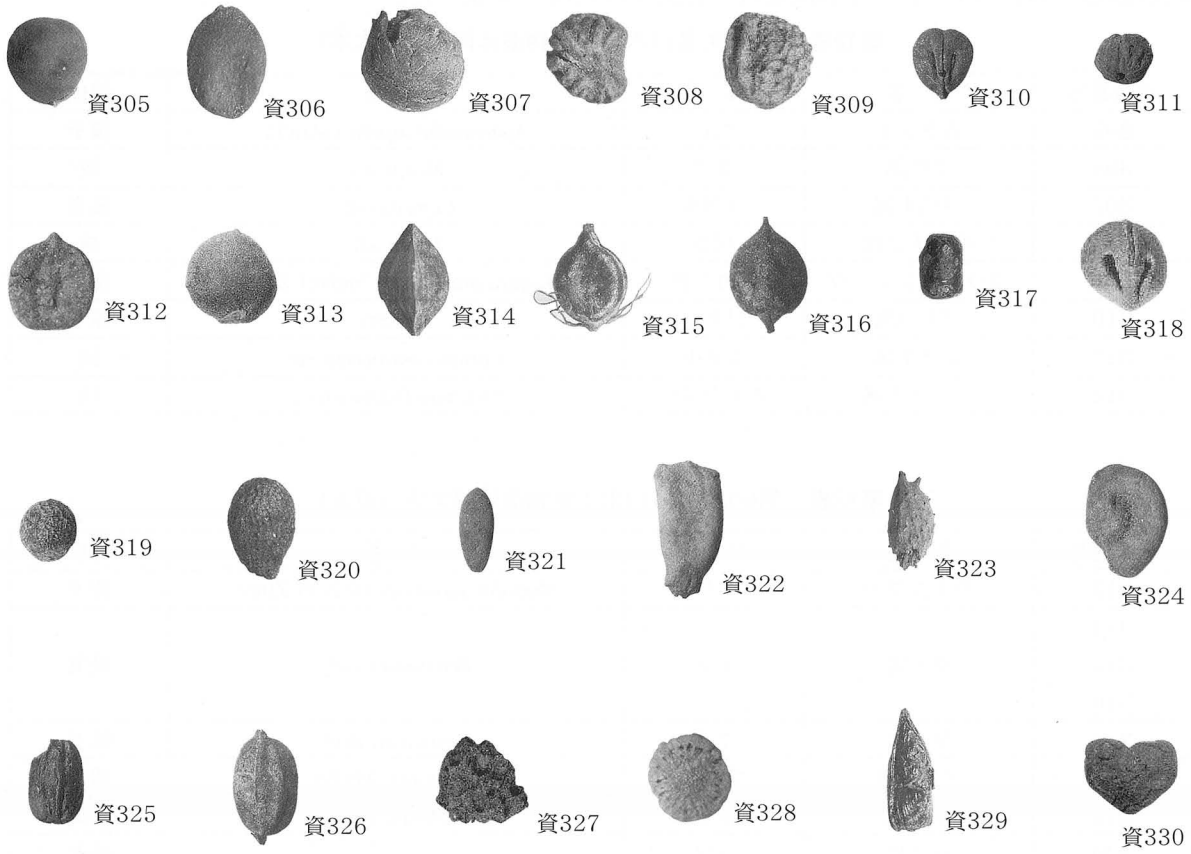
大井次三郎（1978年）『改訂増補新版日本植物誌　顕花編』、至文堂

北村四郎・村田　源（1964年）『原色日本植物図鑑　草本編』上、中、下保育社

北村四郎・村田　源（1979年）『原色日本植物図鑑　木本編』Ⅰ、Ⅱ保育社

中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000年）『日本植物種子図鑑』、東北大学出版会

牧野富太郎（1989年）『改訂増補牧野新日本植物圖鑑』、北隆館



資305. ムクノキ種子×1.7　資306. クワ属核×6.7　資307. ツバキ属果実×1.14　資308. キイチゴ属核×6.7　資309. カラスザンショウ種子×3.3　資310. ブドウ属種子×2.5　資311. ミズキ核×1.7　資312. ガマズミ属核×３　資313. カナムグラ果実×3.2　資314. タデ属果実×6.7　資315. タデ属果実×6.7　資316. タデ属果実×6.7　資317. マメ科種子×1.7　資318. ノブドウ種子×3.2　資319. シソ属果実×5.7　資320. シソ属果実×6.7　資321. ウリ種子×1.7　資322. ユウガオ属種子×1.7　資323. オナモミ総苞×1.7　資324. ヒルムシロ属果実×5.9　資325. イネ果実×2.3　資326. イネ穎×3.8　資327. 炭化籾集合体×6.7　資328. 果托×3.0　資329. 木の芽×4.2　資330. 不明植物遺体×0.9

第124図　第60次溝11内出土植物遺体同定写真

5. 木製品の樹種同定

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は東大阪市鬼虎川遺跡第60次発掘調査から出土した長柄鋤の未成品１点（1122）である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（広葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）

（遺物No.　1122）

（写真　第125図）

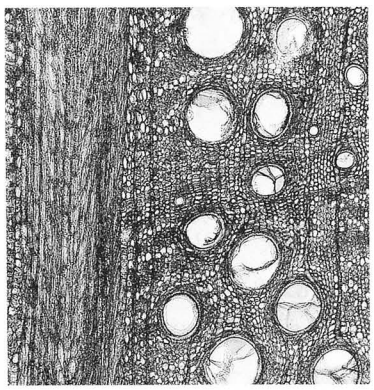
放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に１～３細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

◆参考文献◆

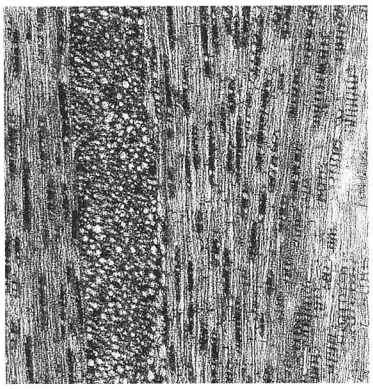
島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）
深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 （1997）
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

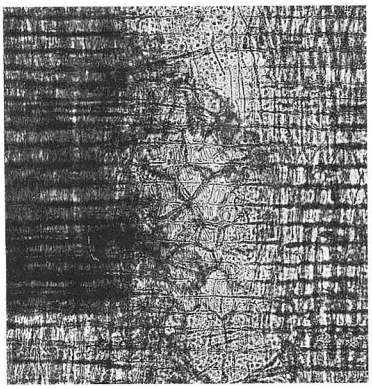
Nikon　　MICROFLEX UFX-DX Type 115



木口（×40）



板目（×40）



柾目（×100）

第125図　第60次溝11内出土木製品樹種同定顕微鏡写真

6. 花粉化石群集

㈱吉田生物研究所

1. はじめに

東大阪市の鬼虎川遺跡において行われた発掘調査で、溝内より土壌試料が採取された。この土壌試料について行った花粉分析の結果・考察を以下に示す。

2. 試料と方法

花粉化石群集の検討は、試料13（第60次調査、溝13内下部埋土）、試料19（第60次調査、溝19内埋土）、試料109（第58次調査、第26層上面検出溝109内埋土）の合計3試料について行った。試料13は黒色粘土、試料19は黒色シルト質粘土、試料109は黒色粗砂混じり粘土である。時代については、試料13、19が弥生時代中期であり、溝109（試料109）が検出された第26層は弥生時代前期以前相当層である。

花粉化石の抽出は、試料約3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート1～2枚の全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3. 花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉27、草本花粉11、形態分類で示したシダ植物胞子2である。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。

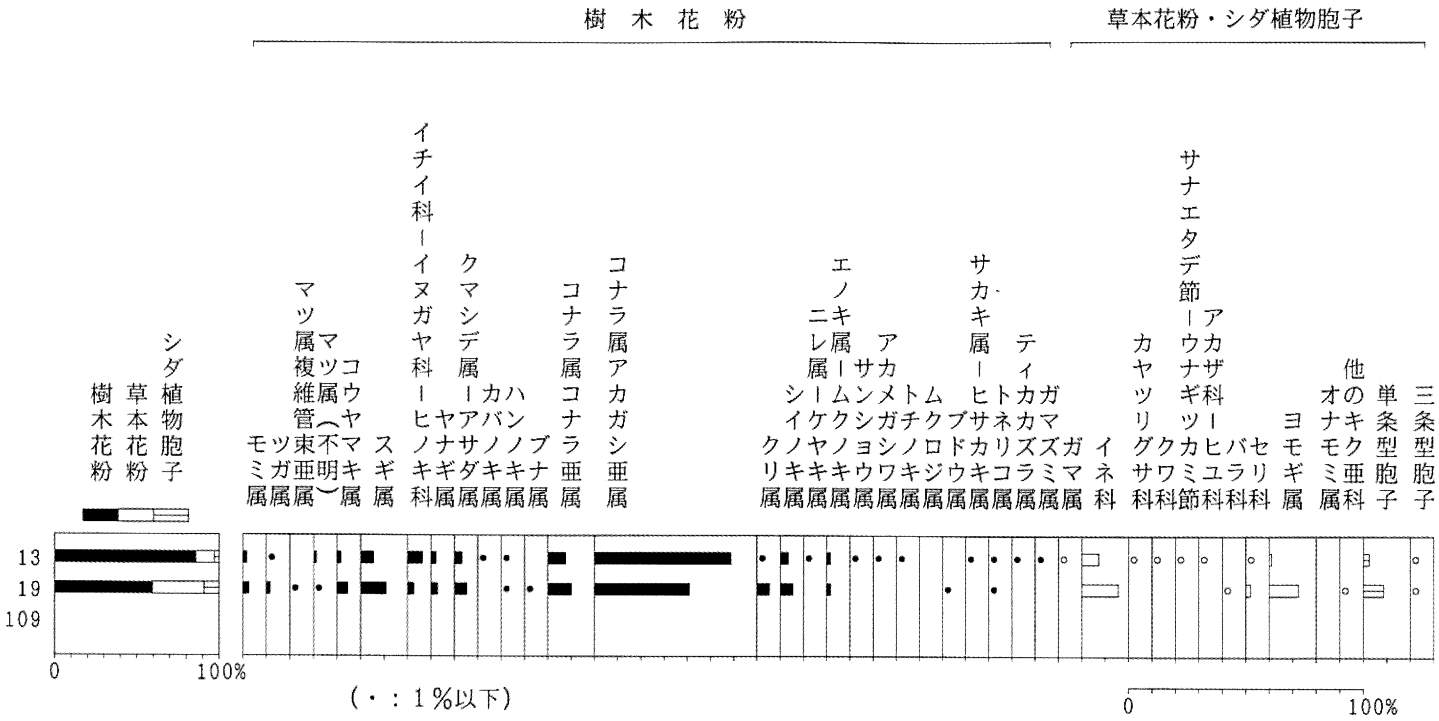
試料13：樹木花粉の占める割合は約86%と高率であり、アカガシ亜属が60%近くを占める。次いで、コナラ亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、スギ属の順に高率であり、6～8%程度を占める。他に、ヤナギ属、クマシデ属－アサダ属、シイノキ属が2～3%程度を占め、カバノキ属、ニレ属－ケヤキ属、サンショウ属、アカメガシワ属、トチノキ属、サカキ属－ヒサカキ属、トネリコ属、テイカカズラ属、ガマズミ属などが1%以下で出現する。草本花粉は、イネ科が約7%で若干目立つが、他は概ね1%以下の低率であり、ガマ属、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科－ヒユ科、セリ科、ヨモギ属が出現する。

試料19：樹木花粉の占める割合は約60%であり、アカガシ亜属が約40%を占める。次いで、スギ属、コナラ亜属の順に10%程度を占め、コウヤマキ属、クマシデ属－アサダ属、クリ属、シイノキ属が5%程度を占める。他は、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属が3%程度あり、ブナ属、ブドウ属、トネリコ属などが1%以下で出現する。草本花粉は、イネ科が約16%、ヨモギ属が約12%を占めるが、他はセリ科が約2%、バラ科、他のキク亜科が1%以下で出現するのみである。シダ植物胞子は三条型胞子が10%近くを占め、若干目立つ。

第15表　第58・60次花粉化石産出一覧表

和名	学名	13	19	109
樹木				
モミ属	*Abies*	4	3	-
ツガ属	*Tsuga*	1	2	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	1	1
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	3	1	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	4	5	2
スギ属	*Cryptomeria*	13	12	5
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	15	3	1
ヤナギ属	*Salix*	5	3	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* - *Ostrya*	8	6	-
カバノキ属	*Betula*	1	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	2	1	-
ブナ属	*Fagus*	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	18	11	8
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	139	45	12
クリ属	*Castanea*	1	6	12
シイノキ属	*Castanopsis*	8	6	8
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus* - *Zelkova*	2	-	1
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	4	2	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	1	-	-
アカメガシワ属	*Mallotus*	1	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	1	-	1
ムクロジ属	*Sapindus*	-	-	1
ブドウ属	*Vitis*	-	1	-
サカキ属－ヒサカキ属	*Cleyera-Eurya*	1	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	2	1	-
ティカカズラ属	*Trachelospermum*	1	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	1	-	-
草本				
ガマ属	*Typha*	1	-	-
イネ科	Gramineae	20	29	18
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	-	-
クワ科	Moraceae	1	-	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	1	-	1
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	2	-	11
バラ科	Rosaceae	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	2	4	1
ヨモギ属	*Artemisia*	3	23	2
オナモミ属	*Xantium*	-	-	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	1	1
シダ植物				
単条型胞子	Monolete spore	7	16	25
三条型胞子	Trilete spore	1	1	5
樹木花粉	Arboreal pollen	236	110	53
草本花粉	Nonarboreal pollen	31	58	37
シダ植物胞子	Spores	8	17	30
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	275	185	120
不明花粉	Unknown pollen	7	12	7

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

第126図　第58・60次花粉化石分布図

試料109：十分な花粉化石が産出しなかったため、花粉化石分布図として示すことは控えた。樹木花粉ではアカガシ亜属、クリ属、コナラ亜属、シイノキ属が比較的多産し、スギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、ムクロジ属なども産出した。草本花粉はイネ科、アカザ科－ヒユ科が比較的多産し、オナモミ属なども産出する。シダ植物胞子は三条型胞子が目立つ。

4. 考察

弥生時代前期以前相当層上面より検出された溝109（試料109）は、十分な花粉化石が産出せず、古植生を推定するには至らなかった。比較的多産したのは、常緑のアカガシ亜属、シイノキ属、落葉のクリ属、コナラ亜属であり、これらが主要な森林構成要素であった可能性はある。なお、花粉化石は水成堆積物であれば良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。溝109内埋土は粘質土であり、水付き堆積物の可能性が考えられたが、花粉化石が良好に保存されていないことから、安定した滞水環境で堆積したものとは考え難い。従って、溝109は、乾湿を繰り返すような溝であり、常時水が溜まっているような溝ではなかったと予想される。

溝13、19の花粉組成は、概ね類似するものであった。これらの結果によれば、弥生時代中期には、アカガシ亜属が卓越し、針葉樹のコウヤマキ属、スギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、落葉のクマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、クリ属、常緑のシイノキ属、サカキ属－ヒサカキ属などが混じる照葉樹林が発達していたと予想される。溝13では、水生植物のガマ属が出現するが、溝内に生育していたか、近接した場所にガマ属が生育するような水位の低い湿地ないし水溜りが存在していたと予想される。一方、溝19周辺は、イネ科（シバ、ススキなど）、ヨモギ属、シダ植物が生育するような幾分乾き気味の場所が広がっていたであろう。なお、比較的多産するイネ科を現時点では属や種まで絞り込むことは困難であるが、溝13のプラント・オパール分析の結果によれば、イネやヨシ属などを含む可能性がある。しかし、イネ科花粉はさほど高率ではなく、オモダカ属、ミズアオイ属などのいわゆる水田雑草も随伴しないという点から、水田が存在していたと積極的には言えない。プラント・オパール分析の結果は、当時イネが存在していたことを示すものではあるが、即座に稲作地が存在していたと言うものではない。穎部珪酸体が多産しているように、人が籾（殻）を溝内に投棄したか、周辺部に投棄したものが流入した可能性も考えられることから、稲作地の存在については多方面からの解釈が必要であり、検討の余地が残される。

5. おわりに

弥生時代前期以前相当層上面より検出された溝109の埋土は、花粉化石が良好に保存されていないことから、常時水が溜まっているような溝ではなかったと考えられた。

溝13、19の花粉組成によれば、弥生時代中期には、アカガシ亜属が卓越し、針葉樹のスギ属、落葉のコナラ亜属、常緑のシイノキ属などが混じる照葉樹林が発達していたと推定された。溝13内には、ガマ属が生育していたか、近接した場所にガマ属が生育するような湿地的環境が存在していたと考えられた。溝19周辺には、イネ科、ヨモギ属、シダ植物が生育するような乾き気味の場所が広がっていたと考えられた。

7. 植物珪酸体分析

㈱吉田生物研究所

1. はじめに

東大阪市の鬼虎川遺跡において行われた発掘調査で、溝内より土壌試料が採取された。この土壌試料について行った植物珪酸体分析の結果・考察を以下に示す。

2. 試料と分析方法

分析用試料は第58次調査の第26層（弥生時代前期以前相当層）上面検出溝109内埋土（試料番号109）、第60次調査の溝19（弥生時代前期中葉～中期初頭）内埋土（試料番号19）、同調査の溝13（弥生時代中期）内下部埋土（試料番号13）の３試料である。各土相について、13は黒灰色粘土塊混じりの黒色粘土、19は植物遺体を含むやや砂質の黒色粘土～シルト、109は黒色の砂質粘土である。植物珪酸体分析はこれら３試料について下記の方法にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μｍ）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（第16表）、それらの分布を第127図に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、試料13（溝13）と109（溝109）の２試料からイネの機動細胞珪酸体が検出され、特に13では30,000個を越え、イネの穎（籾殻）に形成される珪酸体の破片も多く観察された。イネ以外ではヨシ属が全試料10,000個以上と、機動細胞珪酸体の生産量が小さいヨシ属としては非常に高い数値を示している。やはり生産量の少ないキビ族も試料13で多産している。その他ではネザサ節型とウシクサ族が試料13、19で10,000個前後を示している。

第16表　第58・60次試料１ｇ当たりの機動細胞珪酸体個数

試料番号	イネ（個/g）	イネ穎破片（個/g）	ネザサ節型（個/g）	クマザサ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	ヨシ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	不明（個/g）
13	32,100	15,300	9,200	1,500	1,500	18,300	24,400	10,700	13,700
19	0	0	10,000	1,200	2,500	16,200	2,500	11,200	8,700
109	3,400	0	3,400	4,600	2,300	12,600	1,100	4,600	4,600

4. イネについて

上記したように、試料13において大量のイネの機動細胞珪酸体が検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤

原　1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。試料13については溝内埋土であることから、本地点における稲作は考え難く、周辺部より大量のイネの機動細胞珪酸体や穎部珪酸体の破片が供給されたものと推測される。また試料109からもイネの機動細胞珪酸体が得られており、本試料は弥生時代前期以前相当層上面より検出された溝試料であることから、こうした時期においても鬼虎川遺跡においてはイネが存在していたと考えられる。

5. 遺跡周辺のイネ科植物

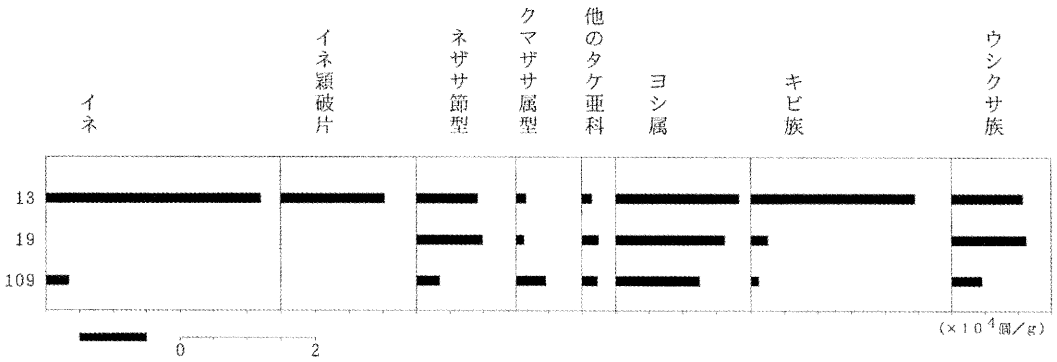
ヨシ属が各試料で多産しており、これら溝内にヨシやツルヨシなどのヨシ属が大群落を形成していたと推測される。また試料13ではキビ族も多産している。このキビ族について、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明であるが、同試料においてイネが多産していることから稲作に関わるキビ族、すなわち水田内に普通にみられるタイヌビエなどの雑草類に由来するキビ族ではないかと思われる。

遺跡周辺の空き地や丘陵部ではゴキダケ、ケネザサ（ミヤコネザサ）などのネザサ節型のササ類やススキ、チガヤといったウシクサ族が成育していたと推察され、ケネザサ－ススキ群集といった草本植生が成立していたとみられる。なおケネザサは関西の山麓や丘陵地に最も普通に見られるササである（北村・村田　1984)。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．　考古学ジャーナル，227，p.2-7.

北村四郎・村田　源（1984）原色日本植物図鑑木本編〔Ⅱ〕．保育社，545p.



第127図　第58・60次機動植物珪酸体分布図

V．調査の総括

1. 第56・58次調査出土の土偶について

東大阪市内での土偶の出土数は、神並遺跡７点、縄手遺跡２点、日下遺跡３点、馬場川遺跡49点、鬼塚遺跡６点、西ノ辻遺跡１点、宮ノ下遺跡１点、鬼虎川遺跡１点の合計70点である。

時期別の個体数は、縄文時代早期３点、後期～晩期62点、晩期４点である。

馬場川遺跡の出土数は、近畿地方でも奈良県橿原遺跡（183点）、三重県天白遺跡（70点）につぐ出土量を示す。

東大阪市出土の土偶の分類は、藤城氏の研究があり[藤城・三輪・若松1999]、馬場川遺跡の土偶分類については伊佐氏が行っている[伊佐1990]。

鬼虎川遺跡で２・３点目（計73点）を数える土偶が、第56、58次調査で出土した。出土状況から考えられる帰属時期は、弥生時代中期である。この２点の土偶は類似する形態的特徴を呈する。弥生時代の土偶という性格が考えられるため若干の考察を加えたいと思う。

以下、第56・58次調査で出土した土偶を土偶１、２（第128・129図、第137図）とする。

出土状況

土偶１は、弥生時代中期後半までの整地層（第17層）内より出土した。この整地層は、遺跡中央部に層厚約30～40cmで堆積し、２～３層に分かれる。上面で土抗墓、土器棺墓が検出され、層内からは多量の弥生土器、石器、動物遺体などが出土した。上層は古墳～弥生時代後期に相当する粘土層が堆積し、下層は弥生時代前期末から中期中葉の遺構面が形成されていた。

『鬼虎川遺跡第56次発掘調査報告』において９工区の第15層内出土とし、遺物の項では第18層と記しているが、第17層からの出土であり、ここに訂正しておく。

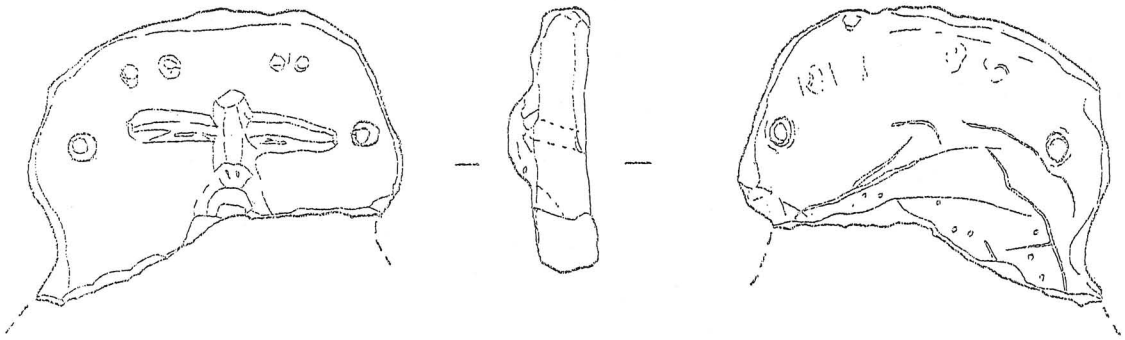
土偶２は、弥生時代中期中葉の遺構面（第17層）上面で検出した土抗43内より出土した。土抗43は南北で約50cmの高低差のある調査区の南端の低地部で検出した。共伴遺物に円板状土製品、砥石、壷や高台をもつミニチュア土製品があった。弥生土器はⅠ様式のものを若干含むが、Ⅱ・Ⅲ様式のものを中心とする。埋土は主に土偶１が出土した整地層である。下層（第18層）には弥生時代中期前半の遺構面が形成されていた。

形態と類似・相違点

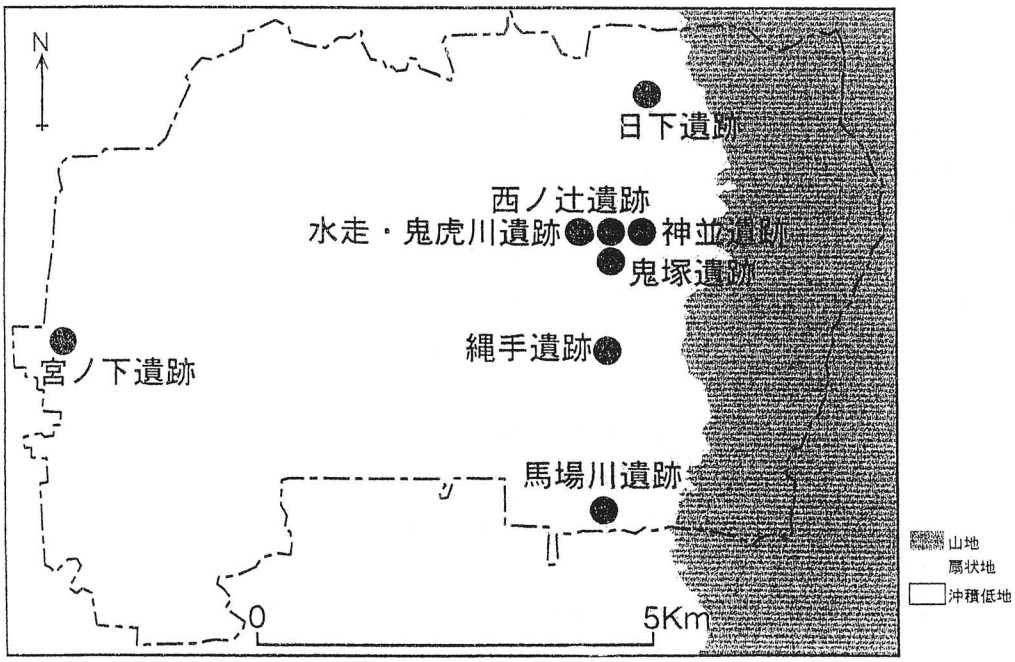
土偶１は、頭部の一部が残存する。顔面は、粘土紐を横、縦の順に十字に貼り付けて隆起させ、鼻・眉を表現する。両眼は細い沈線で眉の下に表し、縦方向の粘土紐の下には刺突により両鼻腔を表す。口は押圧によって丸く窪ます。頭部上端に粘土紐の剥落痕があるが、本来は弧を描いていたと思われる。裏面の上部には、数条の弧状や斜状の沈線がみられ、下部はハケメ調整する。断面形は頭頂部に向かって細く三角形状を呈する。板状の粘土を張り合わせたのち、頭頂部に粘土紐を貼付け、ユビオサエとナデにより成形する。胎土は生駒西麓産である。

土偶２は、体部は欠損しているが、頭部はほぼ完存する。横長の板状を呈する頭部に、粘土紐を横、縦の順に十字に貼り付けて隆起させ、鼻・眉を表現する。両眼は細い沈線で眉の下に表し、鼻を表現する縦方向の粘土紐の下には刺突により両鼻腔を表す。口は押圧によって丸く窪め、両耳部には表から裏へ貫通させた円孔がある。額部の両眉上には、粒状粘土の貼付けてそれぞれ２個の突起をもつ。裏面は、上部に表面と同様の突起状の貼付けが、やや潰れた状態であるが表の額部の突起を意識するように不規則に４つ並び、下部には数条の不揃いの円弧状沈線と背面に近い位置に刺突が数個施される。

第128図　第56次出土　土偶１（S＝1/2）



第129図　第58次出土　土偶２（S＝1/2）



第130図　土偶・土製品出土遺跡分布図［藤城・三輪・若松 1999］

表面左側にはユビオサエによる頸のくびれが残る。裏面に向かってやや反る。板状の粘土を張り合わせたのち、ユビオサエとナデにより成形する。胎土は生駒西麓産。

次に土偶１、２の類似・相異点をみる。土偶１、２の顔面表現と頭部規模に類似がみられる。土偶１の頭部幅は9.6cm、土偶２の復元幅は8.5cmを測る。頭部が残存する近畿地方出土の縄文晩期の土偶と比較して大型である。顔面は、粘土紐を横縦に十字に貼り付け表現され、両眼は沈線で、鼻腔は刺突して表す。口は丸く押し窪める。土偶１、２ともに豊かに顔面を表現する。

残存する頭部で大きく異なる点は断面形であるが、これは頭部表現に起因する。頭頂部断面形が三角形を呈する土偶１は、貼り付けが施され、額部は土偶２と比べて狭く、残存する外縁から推定される頭部形状は弧状を呈する。両眼を施した横方向の粘土紐も頭部形状を意識するようにやや弓なりに延びる。断面形が板状を呈する土偶２は、額部と後頭部に粒状の粘土を貼り付けて、装飾している。

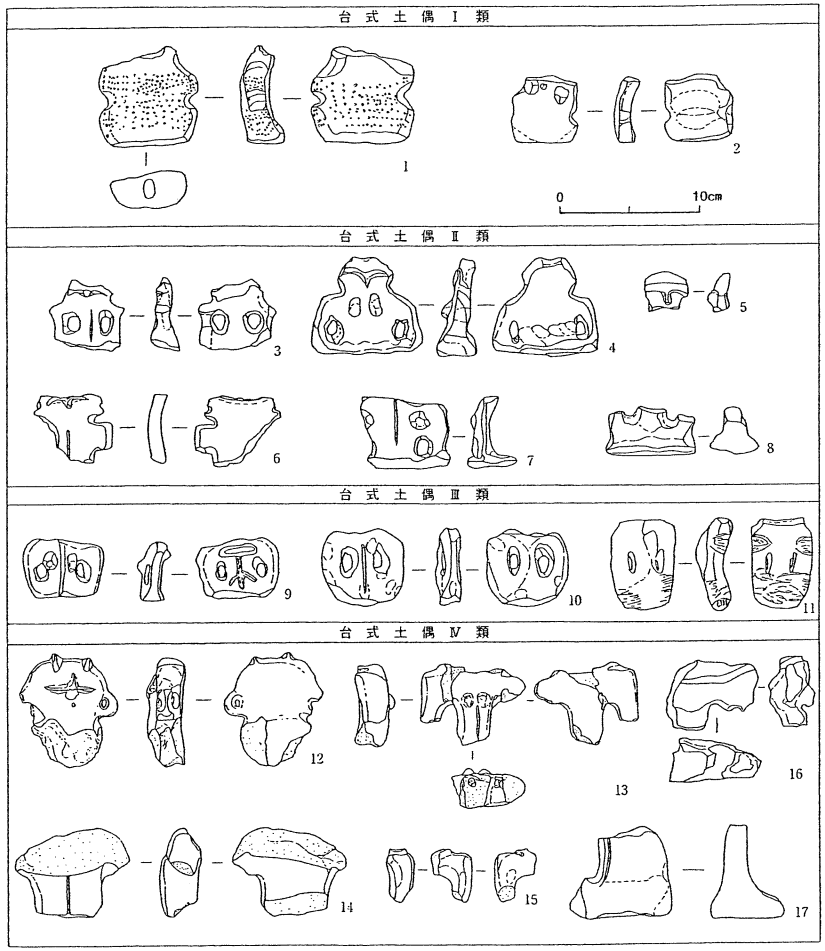
終末期土偶との比較

近畿地方の終末期の土偶については、大きく人形土偶、後頭部結髪土偶、台式土偶の３つに分類されている（第131図）[大野1997]。更に人形土偶は３タイプ、台式土偶は２タイプある。人形土偶は板状で頭部・腕部・脚部が簡略化された人形を呈するもの（新堂タイプ）、腕・脚部が省略されて消化器をもつもの（樫原タイプ）、頭部が省略され四脚が簡略化されたもの（船橋タイプ）に分けられている。台式土偶は頭部横長で両端に各１孔をもち腕部が台部につながり双孔をもつもの（長原タイプ）、体部に抉りを入れることにより腕を表すもの（鬼塚タイプ）に分けられている。後頭部結髪土偶は、頭頂部から後頭部にかけて、鶏冠状あるいは髷状の隆帯を有するものである。頭部のみの出土で、体部以下の状態は分かっていない。

土偶１、２をこの分類に照らし合わせる。土偶１、２の残存する形状からみると、頭部は板状で横長の頭部を有し、立体的な頭部をもつ後頭部結髪土偶とは明らかに異なる。また、土偶２の短くなだらかに肩部へ向かうの頸部から、肩部はそれほど張っていなっかたと考えられ、頸部から肩部にかけて鋭角に曲がる人形土偶とも異なる。土偶２は背面に向かって反っており、これらのことから土偶１、２は台式土偶に位置付けられると考える。

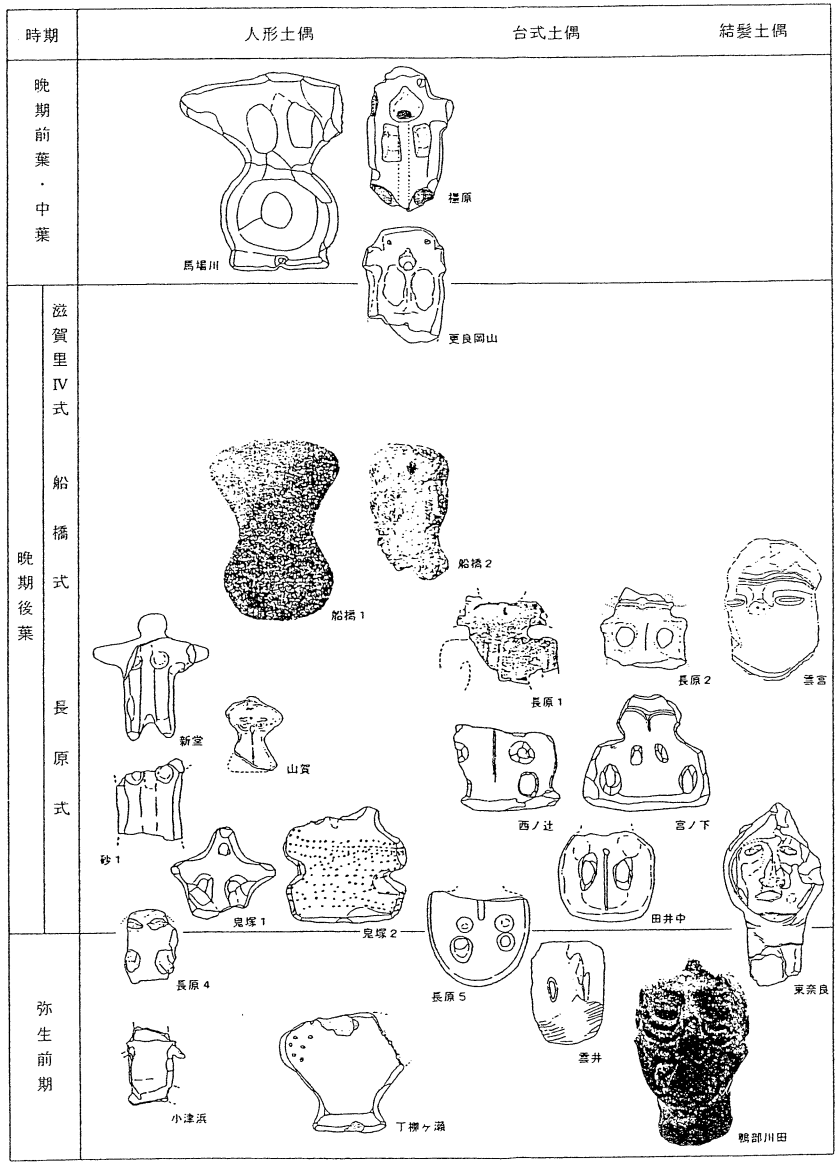
台式土偶のうち長原タイプの土偶については４段階の型式変化を考えられている[大野2000]。第Ⅰ段階は、頭部が横長扇形で粘土紐によって顔面を表し、張った肩に腕が別付けされる。第Ⅱ段階は、頭部は横長扇形を維持しているが、顔面表現は写実性を減じ簡略化が認められる。体部は隅丸方形もしくは隅丸台形を呈し、肩の張りが失われなで形になる。腕は体部に双孔を穿つことによってつくり出すため、腕らしさが徐々に失われていく。台部はまだしっかりしているが、体部下端だけを前後に拡張するものもある。第Ⅲ段階は、頭部が遺存する資料がないが、より簡略化された頭部になると想像される。体部は隅丸方形、隅丸長方形を呈し、より小さくより丸くなる傾向が窺える。双孔もより小さくなり、腕が腕と認識できなくなっている。台部の退化は著しく、体部下端に小さな平易端面をつくる程度になり、極めて不安定な状態である。第Ⅳ段階は、頭部が遺存しておらず、頭部形態は不明だが、より簡略化された頭部であろうと予想される。体部は隅丸方形、あるいは半円形など、小型化と円形化を呈する。特に双孔や台部の退化は著しく、双孔は小さくなり、台部は平坦面すら作り出さず、丸くかつ薄くおさめるようになっている。しかし、乳房はしっかり作られており、この土製品が土偶であり、かつ乳房が土偶の象徴的部位であることを示す。

土偶１、２は長原・鬼塚タイプの台式土偶の変遷上にあり、顔面表現からみる長原タイプの変遷では第Ⅰ段階であるが、出土時期とこの顔面表現の変遷は異なる。



〔1 鬼塚 2・9 麻相田大橋 3・6・8 長原 4 宮ノ下 5 宇治川南 7 西ノ辻
10 田井中 11 雲井 12～14 久宝寺 15 京大構内 16・17 口酒井〕

第132図　台式土偶の分類［中村2003］



第131図　近畿地方における終末期土偶の変遷［大野1997］

長原タイプの変遷と異なるものに大阪府久宝寺遺跡出土の台式土偶がある。帰属時期は弥生時代前期から中期である。３点が出土したうち２点は体部、１点は頭部が残存する。後者は顔面を十字の突帯で、両耳を円孔で表し、頭頂部には２つの結髪が施される。2点の残存する腕・体部は、厚みをもつ。台式土偶に分類されるが、帰属時期から人面表現と厚みをもつ体部が、その変遷と異なることを示唆されている[菊井2003]。

台式土偶の分類については中村氏の分類もある[中村2003]（第132図）。中村氏は東海地方の土偶（後頭部結髪状土偶・鯨面土偶）との関係の中で台式土偶が成立すると考え、Ⅰ～Ⅳ類に分類されている。Ⅰ類は、腕部穿孔を持たず、台状の脚部は後方に張り出す。Ⅱ類は、腕部穿孔を有し、台状となった脚部が後方に張り出すもの。Ⅲ類は、腕部穿孔を有すが、台状の脚部が後方に張り出さないもの。Ⅳ類は、腕部・体部に厚みがあり、人形土偶に近く、体部が反り、頭部も含めて扁平化していることから台式土偶の一群であると考えられるもの。変遷としてはⅠ類が最も古く、Ⅱ～Ⅳ類はⅡ類が後まで継続するものの、時期はほぼ平行すると考えられている。

久宝寺遺跡出土の土偶は、人形土偶に近い形状をもつⅣ類に含める。Ⅳ類には、口酒井遺跡出土の土偶のような大型の体部も含まれる。このことから、土偶１、２がⅣ類に含まれる可能性を考えたが、Ⅳ類に残る頸部から肩部への張りが土偶２にはみられないことから、体部形態は異なると思われる。

以上のように、土偶１、２は台式土偶の一群であると考えられるが、大野氏の長原タイプの変遷や中村氏の台式土偶の分類との相異点がみられた。そこで、大野氏の変遷をもとに、中村氏のⅣ類を加えて土偶１、２の位置付けを行った。（第133図）土偶の時期は、秋山氏の研究を参考にした[秋山2002]。

分類は、人形土偶、台式土偶、結髪土偶に大別し、台式土偶は久宝寺・鬼塚・長原の３タイプにわけた。長原タイプの台式土偶は出土数がもっとも多く、縄文時代晩期末には台部の簡略化が進む。鬼塚タイプの台式土偶もまた簡略化が進むが、腰部のくびれをとどめ弥生時代前期まで続く可能性がある。両タイプとも長原式と弥生土器が共伴する時期であるが、久宝寺タイプの台式土偶は前者の２タイプより出現がやや遅く、形態の変化はあまりみられない。

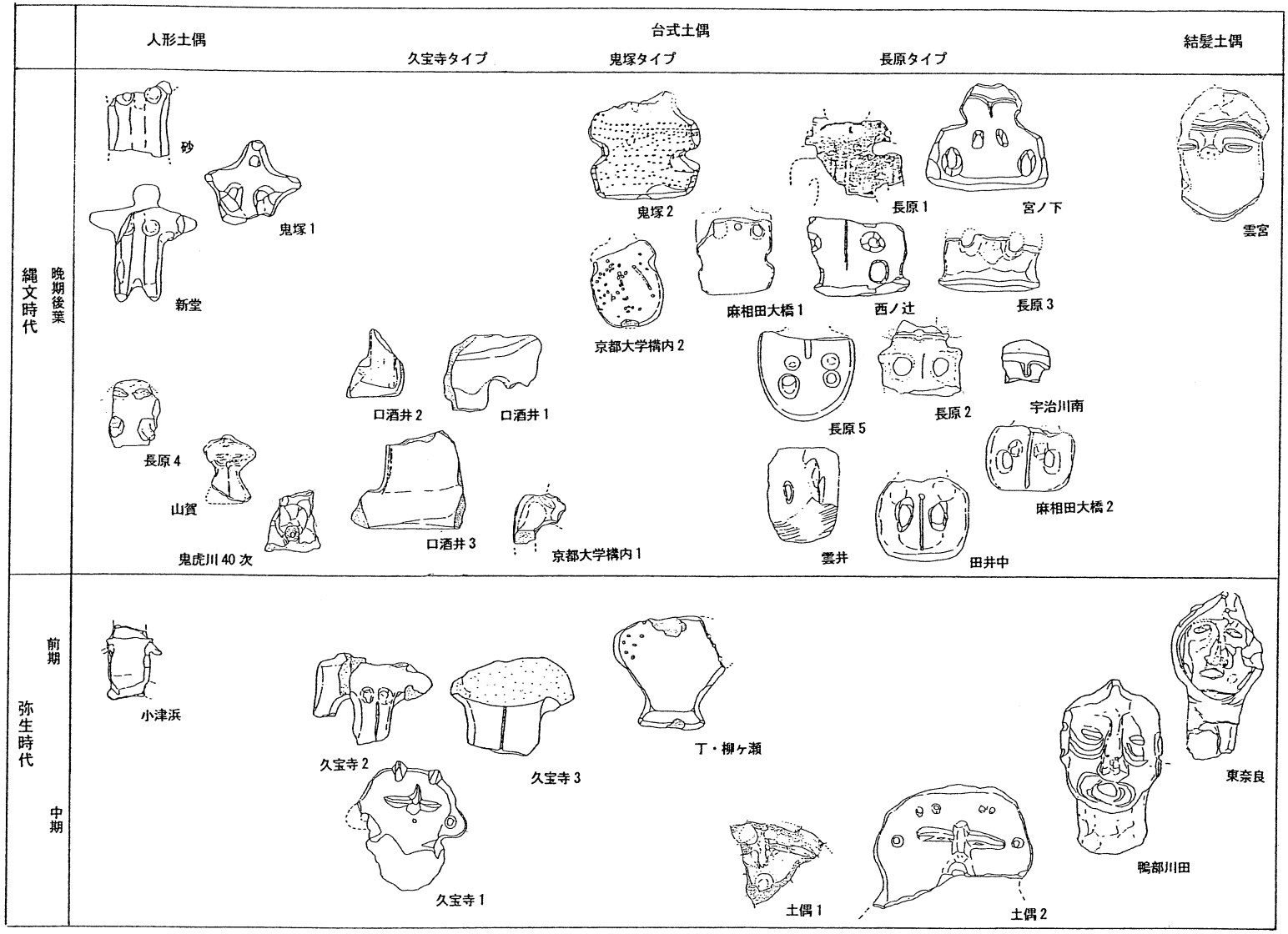
長原・鬼塚・久宝寺の３タイプは弥生時代にも継承される。長原タイプの長原５は、台部が省略化し孤状を呈する台部をもつ。鬼塚タイプの丁・柳ヶ瀬遺跡出土土偶は、腕を表す双孔もなく腕部より台部が更に小型化し、長原・鬼塚タイプで後出する土偶は台部の省略化が進む。

土偶２の板状を呈する頭部と背面が反る形態は長原タイプの変遷上に考えられる。土偶１の孤状を呈する頭頂部と三角形を呈する断面形は長原・鬼塚タイプにみられないが、土偶２との出土状況や顔面表現の類似を考えると、その時期差は少なく、類似する形態が想定され、長原・鬼塚タイプの変遷上に位置付けた。

土偶１、２の体部形態は、先述したように久宝寺例とは異なると考えられ、縄文時代晩期末から弥生時代前期の長原・鬼塚タイプを参考に考えると、偏平化した台部や小形化した腕部の双孔であったと想定される。体部表現は、長原タイプのものには乳房や正中線を施し、鬼塚タイプのものには、刺突による文様表現がみられる。土偶２は背面に刺突と沈線による文様が描かれていることから、鬼塚タイプに近い表現方法をとっていた可能性がある。しかし、十字の貼付けによる土偶１、２と久宝寺１の人面表現は終末期の土偶にみることはできない。

弥生時代の土製品との比較

土偶１、２といわゆる土偶とは時間的な隔たりがあり、頭部規模、顔面表現においても異なる点が認められるため、弥生時代の土製品との比較を考えたい。弥生時代に人面が施される土製品には、分



第133図　土偶１・２の分類（S＝1/4）［大野1997を一部改変］

銅形土製品と人形土製品がある。

分銅形土製品（第134図）の存在が知られるのは、弥生時代中期中葉から後期にかけてである。その分布は吉備地方を中心に瀬戸内海沿岸一帯と大阪湾岸地域、京都府北部から西方の日本海側にわたっている。

分銅形土製品は大きく２つに分けられている。１つは、方形状に角ばった平面形を呈し、眉状の部分を隆起させる特徴を有するもので、分布は山口県から愛媛かけて西部瀬戸内地方である。もう１つは、分布が近畿地方までしられる「吉備型」と呼ばれるものである。

「吉備型」の分銅形土製品の頭部平面形態は円形・隅丸方形・方形がある[山之内・角南1994]。断面形は、板状かやや中央部に膨らみをもつレンズ状を呈する。また、先端部の断面形には、端部に面をもつものと三角形状に丸みをもって終わるものの２タイプある[角南1994]。平面端部には、小孔をもつものともたないものがある。小孔が穿たれるものは、位置や貫通状況からの分類もなされている。形態的変遷は、10cm以上の大型のものから次第に小型化する。一方で断面幅は厚みを増すことが考えられている[高橋1987・角南1994]。近畿地方では、大阪府２点、京都府１点、奈良県１点の出土がみられる。

分銅形土製品の体部形態には３つある。（１）円形の両側に抉りを持ち、上下が対象形をなすもの、（２）その１端がなく、頭でっかちになっているもの、（３）方形を呈して左右に小さなくりこみをもつものがある。時期は、（２）がもっとも古く、（１）が中期末から後期前葉にかけて多い。（３）は後期末まで続く[藤田・柳瀬1987]。

分銅形土製品の文様表現は、眉のようなV字状の櫛描き文と刺突文がある。時期は、櫛描き文が施されているものが、刺突文が施されるものよりやや先行して出現することが知られている。

分銅形土製品に人面が描かれるものは少数で、分布の中心は西部瀬戸内地方にある。分銅形土製品の人面表現は刺突文が出現する段階と前後して現れることから、この人面にみられるV字状表現は、土偶のV字状表現に由来しないようである[高橋1987]。

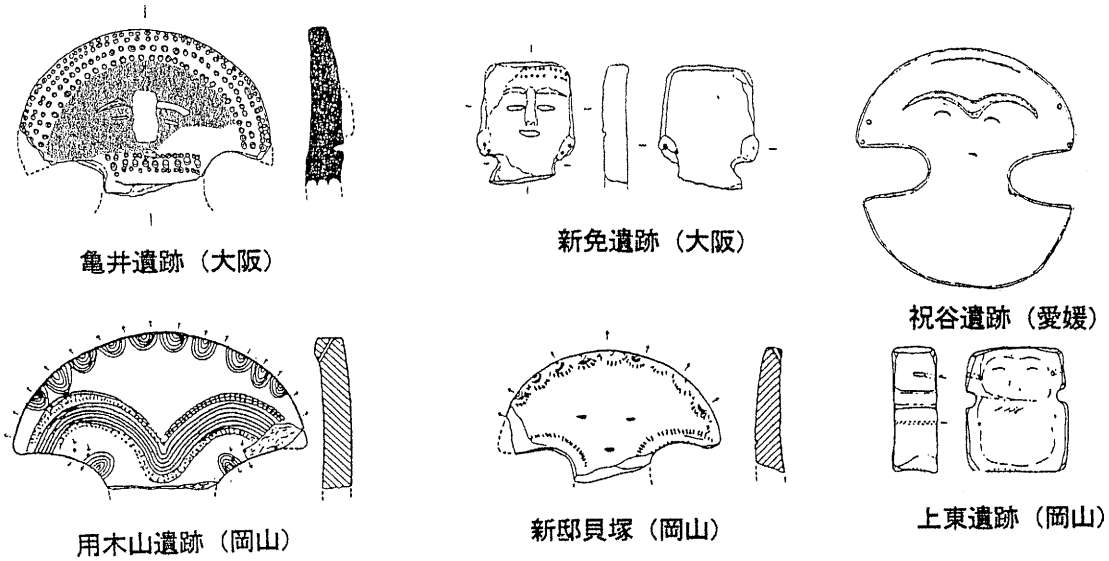
分銅形土製品と土偶の関係については、土偶にみられる体部の簡略化と分銅形土製品の体部形態が類似することから、丁・柳ヶ瀬出土土偶や真壁遺跡出土土偶は分銅形土製品との関係が指摘されている[石川1987・小林2002]。

土偶１、２と分銅形土製品の形態を比較する。土偶１、２の頭部の幅と厚みは分銅形土製品と類似する。頭頂部は先端部が尖り、断面形が体部に向かって膨らむものがみられる。頭頂部に貼付けが施されるものはないが、いずれも弧を意識した形状を呈する。また、土偶１の厚みをもつ頭部は、分銅形土製品の変遷上で考えられる可能性がある。

土偶１、２と類似する人面表現は、大阪府亀井遺跡出土の分銅形土製品にみられる。十字の貼付けによって鼻と眉が表し、縦の粘土紐の下部には両鼻腔が刺突によって表される。他の分銅形土製品に表される人面は、V字で眉を表す簡略化した表現である。

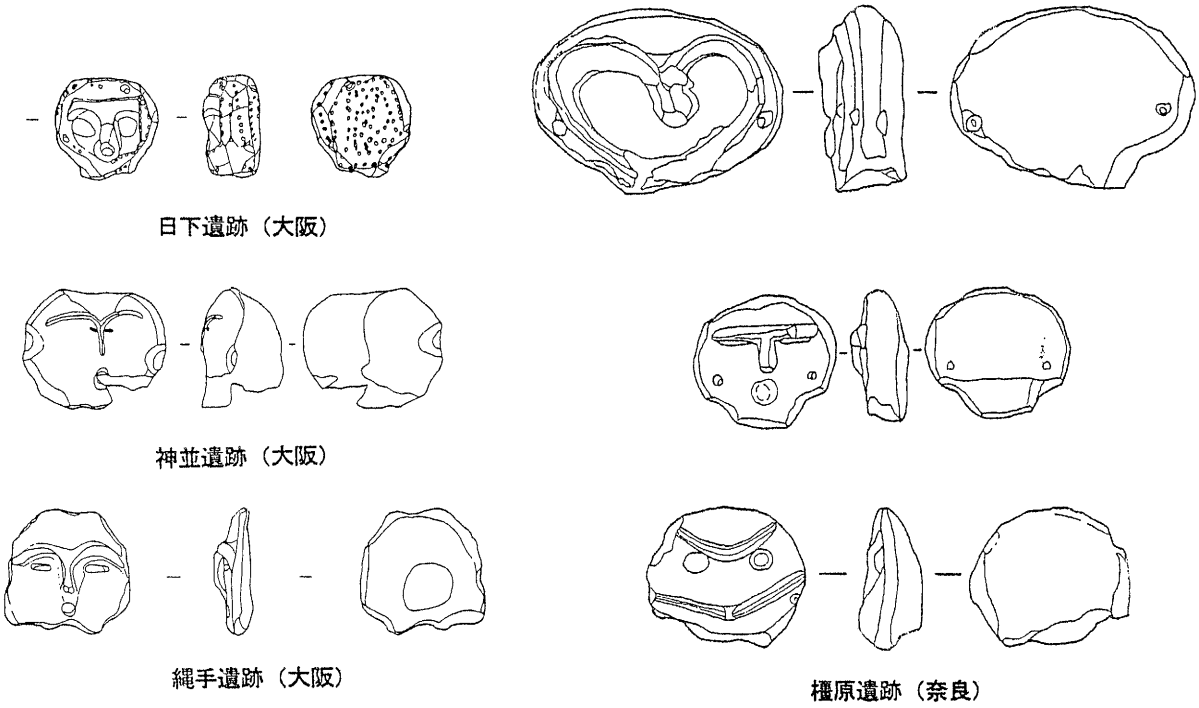
弥生時代中期に分銅形土製品に表される人面表現は、人形土製品に由来するとの考えがある[大野2005]。人形土製品は弥生時代を通じ出土例がみられる。岡山県下では北東部でその存在が知られ、分銅形土製品の分布とは異なる。近畿地方では７点出土が確認されている。時期は弥生時代中期から庄内期までである。主に立体的な頭部を持ち、頸部は柱状を呈する。顔面は土偶に表される表現と比べ写実的に表される。土偶や分銅形土製品と比べ小型のものが多い。

岡山県福田池尻遺跡出土の人形土製品（第135図）は、弥生時代の土偶として指摘されている[江坂1960]。頭頂部は孤状を呈し、頭部から体部に向かって厚みをもち、断面形が三角形を呈する。顔面



第134図　分銅形土製品（S＝1/3）

第135図　人形土製品（S＝1/3）



第136図　土偶に表される人面表現（S＝1/3）

に粘土紐の貼り付けがのこる。百間川兼基遺跡出土の人形土製品にも類する頭頂部と断面形がみられる。

分銅形土製品の出土は近畿では少なく、人形土製品の頭部表現においても瀬戸内海地方と類似するものは出土していない。また、台式土偶の出土は主に近畿地方に限られるため、これらの土製品との直接的な変遷を考えるのは難しい。しかし、土偶１、２の帰属時期や台式土偶との異なる点や土偶１の形状を考えると、弥生時代になって出現する分銅形土製品や人形土製品に表される形状や人面の影響も考えられる。

まとめ

土偶は弥生時代に引き継がれない遺物として考えられてきたが[佐原2005]、弥生時代前期までは出土例が確認されている。これら弥生時代の土偶は、縄文時代から弥生時代への移行期において、依然として縄文系集落で土偶が重要視されていたことによると考えられている[秋山2002]。

しかし、土偶１、２は、縄文時代晩期および弥生時代前期の遺物を極少量含むとはいえ弥生時代中期中葉の遺物を多量に包含した弥生時代中期の整地・埋土からの出土で、混入品の可能性はあるが、層位関係と出土状況から弥生時代中期中葉に帰属すると考えられる。ともに胎土は生駒西麓産で、人面の類似からも時期差は少なく、同一集落内で製作されたと思われる。

東大阪市内では、生駒山麓付近に縄文時代早期から集落が営まれている。これらの集落では、縄文時代早期から土偶の出土がみられる。縄文時代晩期末にいたっても、鬼塚遺跡をはじめとして古段階の台式土偶が出土する地域でもある。弥生時代中期の拠点集落である本遺跡は、これまでの調査などからも縄文時代の要素を継続する基盤があったことが考えられる。

土偶１、２を考えるうえで、まず縄文時代晩期以降の終末期土偶に類例を探し、その分類を試みた。土偶の分類では台式土偶に位置付けられ、体部形態は長原・鬼塚タイプの変遷上に求められそうである。しかし、頭部規模と顔面表現について他の土偶と異なっていた。弥生時代にみられる台式土偶の出土数は少なく、弥生時代中期まで下る可能性があるものは、久宝寺遺跡出土の土偶以外に認められていなかった。

次に、土偶１、２と弥生時代にみられる土製品と検討した。復元した頭部の規模や土偶１の弧状を呈する頭頂部には分銅形土製品と類似する点がみられた。人面をもって発生する人形土製品では、福田池尻遺跡出土のものに土偶１との類似がみられた。これらの土製品は近畿地方での出土数が少なく、距離の隔たりも大きいが、土偶１、２の帰属時期を考えるとこれらの土製品の影響が考えられる。しかし、土偶と弥生時代の土製品とでは、形態や性格など異なる点も多いため、更に検討は必要である。

土偶１、２は、弥生時代の精神世界を考えるうえでも貴重な資料であるといえる。

参考文献

秋山浩三2002「弥生開始期における土偶の意味－近畿縄文「終末期」土偶を中心素材として－」『大阪文化財論集集』Ⅱ　(財) 大阪府文化財センター

秋山浩三2004「土偶・石棒の縄文・弥生移行期における消長と集団対応」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集』 河瀬正利先生退官記念事業会

伊佐智法1990「東大阪出土の土偶」『東大阪市文化財協会ニュース』Vo１5.No1　(財) 東大阪市文化財協会

石川日出志1987「人面付土器」『季刊考古学』19　雄山閣 (株)

伊藤正人2005「顔の輪廻－土偶と土面の東西」『古代学研究』第168号　古代学研究会
今里幾次1958「播磨の分銅形土製品」『古代学研究』第21・22号　古代学研究会
江坂輝弥1960『土偶』（株）校倉書房
大野薫1997「近畿地方の終末期土偶」『西日本をとりまく土偶』土偶シンポジウム6奈良大会発表旨集「土偶とその情報」研究会
大野薫1999「長原タイプ終末期土偶試論」『大阪市文化財協会研究紀要』2　（財）大阪市文化財協会
大野薫2002「大阪府更良岡山遺跡・砂遺跡の土偶」『藤沢一夫先生卒寿記念論文集』　藤沢一夫先生卒寿記念論刊行会
大野薫2003「顔のない土偶」『立命館大学考古学論集』Ⅲ　立命館大学考古学論集刊行会
大野薫2005「西日本における縄文土偶の変遷」『西日本縄文文化の特徴』　西日本縄文文化研究会
甲斐照光2002「兵庫県の分銅形土製品素描」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻　古代吉備研究会
神原英朗1992「集成4　分銅形土製品」『吉備の考古学的研究（上）』（株）山陽新聞社
菊井佳弥2003「久宝寺遺跡出土の土偶について」『大阪文化財研究』第24号　（財）大阪府文化財センター
小林青木2002「分銅形土製品の起源－岡山県総社市真壁遺跡出土の分銅形土製品からの出発－」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻　古代吉備研究会
近藤義郎1952「分銅形土製品」『古代学研究』第6号　古代学研究会
佐原真2005『考古学への案内』編者金関恕 春成秀爾　（株）岩波書店
下澤公明1984「分銅形土製品」『えとのす』第24号　新日本教育図書（株）
柴田英樹2002「弥生時代の顔－人面文と撥形文からみた祖霊観について」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻　古代吉備研究会
菅原章太1988「3つめのビーナス－神並遺跡より縄文時代早期の土偶発見－」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol4.No1　（財）東大阪市文化財協会
角南聡一郎1994「分銅形土製品考－文様表現と断面形態を中心として－」『文化財学論集』　文化財学論集刊行会
高橋護1987「分銅形土製品」『弥生文化の研究第8巻祭りと墓と装い』　雄山閣出版（株）
寺沢薫2000『王権誕生』（株）講談社
中村大介2003「祭祀遺物にみる縄文時代から弥生時代への変化とその意義（上）」『古代学研究』第162号　古代学研究会
中村大介2003「祭祀遺物にみる縄文時代から弥生時代への変化とその意義（下）」『古代学研究』第163号　古代学研究会
藤城秦・三輪若葉・若松博恵　1999「東大阪市内出土の土偶・土製品」『光陰矢如－荻田昭次先生古希記念論集－』　光陰矢如刊行会
藤田憲二・柳瀬昭彦1987「弥生時代」『岡山県の考古学』近藤義郎編　（株）吉川弘文館
三宅俊隆1984「分銅形土製品について」『枚方市文化財研究調査会　研究紀要』第1集　（財）枚方市文化財研究調査会
若松博恵1999「土偶の性格についての覚書－性格論展開の前哨として－」『海が好きだ－藤城秦氏追悼文集－』　藤城秦氏追悼文集刊行会

［追記］

2004年８月21日、関西縄文文化研究会は東大阪市埋蔵文化財センターにおいて縄手・鬼塚・馬場川遺跡の遺物の検討を行ない、大野薫氏が縄手遺跡の遺物から新たに３点の土偶の存在を指摘された。また、本年２月、池島・福万寺遺跡の調査において、突帯文土器と弥生時代前期土器が共伴する時期の台式土偶・板状土遇など３点の土偶が出土している（池島・福万寺遺跡現地公開資料　池島・福万寺遺跡Ⅱ（その２－１）IFJ04-2調査区　（財）大阪府文化財センター　池島支所　2006.3.15）。

第137図　第56次・第58次出土土偶写真

2. 第58・60次調査のまとめ

第58次調査地は第56次調査地（８・９工区）の西・南部にあたり、第60次調査地はさらに南に位置し、第56次調査の成果を念頭において両調査の内容をまとめておく。

両調査地域は古墳時代以降、溝、足跡、水田状遺構などが検出され、遺物も少なく、周辺の調査でも確認されているように、生産域として機能していたことがうかがえた。

Ｍ層は多量の遺物を包含した弥生時代中期末から後期初頭の整地層で、３層以上に区分でき、２時期にわたる遺構を確認した。第58次では後期初頭に大溝２が埋まったのち、一定間隔をもって並ぶ径1.2～1.5ｍの土坑群と大溝１が形成されていた。これまでの調査でもＭ層に相当する層は広範囲で検出されており、この整地に伴う遺構としては土坑墓・土器棺墓などはあったが、上面遺構はほとんど知られておらず、今回検出した遺構は整地の目的を考える上で貴重なものといえる。また、大溝２の埋土内から頸骨・肩甲骨・鎖骨・三角骨・第５中指骨・椎骨・肋骨などの人骨（資料35～48）が散乱した状態で出土しており、整地時に近隣の土坑墓を破壊し、出土した人骨（１体のものか）を埋め直すことなく、周辺の土器片などとともに大溝内に埋め込まれたものと考えられる。このことは昨年の第56次調査８工区の第20層から出土した頭骨などの人骨と同じ状態で、改葬などの意識が希薄であったとことをうかがわせている。

Ｎ層上面では弥生時代中期中葉の遺構とそれに伴う遺物を検出した。この時期は本遺跡で営まれた大集落が維持されていた時期にあたり、遺物量も多く、第58次では遺構は５期以上の切り合い関係を確認することができ、大溝、土坑、ピットなどを検出し、集落内の様相を呈していた。

Ｏ層上面では弥生時代前期末から中期前半にかけての３期にわたる遺構を確認した。そのうち土坑46からは４点の前期土器が出土し、二次焼成を受けたものや、口縁部の打ち欠かれたものがあり、祭祀的意味合いもった土坑であることが考えられる。これまでの調査で大溝、土器棺墓などは確認されているが、本遺跡での前期の状況を知るうえで重要なものといえる。また、この層の上面での地震の痕跡が確認され、ほぼ東西方向に走る亀裂と断層がみられた。亀裂内から中期の土器片が出土しており、中期前葉に地震が起こったと思われる。

Ｐ層以下は遺構・遺物とも減少する。Ｑ層までの層は、主に弥生時代前期前半から中ごろにわたる東から西方向への３度の洪水（氾濫）がもたらした砂の堆積層である。砂層からは弥生時代前期の土器片とともに縄文時代晩期の小型深鉢や突帯文土器の破片が出土した。縄文土器はほとんど摩滅しておらず、近辺（東方）にこの時期の集落が存在したことがうかがえる。また砂の堆積は調査地北側で自然堤防状の高まりを成しており、集落内は平坦ではなく、本調査地北側付近の東西方向の高まりを頂点に、北と南へと傾斜していたものと考えられる。

T.P.－1.34ｍまでの調査を行ない、T.P.－0.2ｍ前後のＵ層以下は、いわゆる河内潟・湖の干潟・水湿地の自然堆積層で、人的形跡（遺構・遺物）は全く見られない。

Ｔ層上面において数条の溝を検出したが、遺物は出土せず、時期決定は困難。ただ、これまでの調査・周辺状況などにより、縄文時代晩期末から弥生時代前期前半ごろに相当すると考えられる。溝内から採取した土壌の分析からプラントオパールが確認されており、この時期に稲作が行われていたことが窺え、今回の溝群は検出状況から稲作に伴う遺構と考えてよいと思われる。

Ｓ層も遺物は出土しておらず、シルト質粘土・粘土を主体とする自然堆積層であり、Ｔ層上面遺構ののち、再度湿地状態化したようである。Ｓ層上面までは調査地の北・南でそれほどの高低差はみられない（せいぜい５～10cm）。

調査地の北部域を流れていたと思われる旧鬼虎川の東から西方向への氾濫（洪水）でもたらされた

砂の堆積が最低３期にわたってあり、その間２期の整地が行われたようである。Ｐ層上面で検出した遺構には前期末（Ｉ-４様式）の土器を内包する土坑などがあり、この氾濫・整地（第21～19層）は前期前半から後半に相当すると考えられる。

１期目の氾濫は調査地全域に広がり（Ｒ層）、南にいくほど薄くなるが、11地区あたりでは約30cmの堆積がみられ、１～２地区附近では弥生土器片とともに滋賀里Ⅲｂの小型深鉢、突帯文土器片などを包含していた。深鉢などの縄文晩期土器はほとんど摩滅しておらず、近辺（東方）にこの時期の集落があったものと想定できる。そののち整地が行われた（Ｒ上層）。

２期目の氾濫は９地区附近まででそれほど大きなものではなく、すぐに１～９地区にかけて整地が行われた（Ｑ層・Ｑ上層）。その後の３期目の氾濫は1地区を中心に自然堤防状の堆積をもたらし（Ｑ層）、その結果、北と南で約40cmの高低差ができ、その上に形成されていった前期末・中期初頭から後期初頭にかけての整地・遺構面（Ｐ層・Ｏ層・Ｎ層）は北と南で30～50cmの高低差をもたらすことになったようである。

縄文時代後・晩期における河内潟・湖の干潟・水湿地の堆積層はT.P.0m付近までは極端な高低差はそれほどなかったが（第53次-新川方向-への高低差はあった－河内湾～湖底傾斜は西だけでなく北へもあった）、第53次南・第56次８工区北と第56次９工区南・第58次北の境を中心に高さ0.5～１ｍのほぼ東西方向の自然堤防状の高まりが形成された。前期末からの集落形成期の整地は、この東西方向の高まりを残したまま、この砂層を覆う形で行われた。そのため、集落内は平坦ではなく起伏があり、西への傾斜とともに、本調査地北側付近に東西方向の高まりがあって北と南へと傾斜していたものと考えられる（53次の南・北では１ｍ近くの高低差があった）。

Ｔ層上面において十字状に交差する溝などを調査地全域にわたって検出した。本調査地おける最下層の遺構である。遺物が全く出土しなかったため時期決定は困難であるが、溝内埋土の分析によってプラント・オパールが検出されており、周辺の調査などから縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭ごろに相当する水田に伴う遺構と考えられる。

多種多量の遺物が出土した中にあって、弥生時代中期中葉のＯ層上面遺構の土坑43内より土偶が出土した。この土偶については123・124ページで記し、前節でその位置付けについて論じており、重複するところもあるが、若干補足して述べておく。

＜形状＞　横長の不整小判状を呈する頭部と左頸部の一部で、右頬下部から口下部・顎以下は欠損し、頭頂部の一部が破損している。断面は不整の長方形を呈し、裏面は頸部に向けてゆるやかに反っている。顔面には十字に隆起した眉・鼻があり、眉下の左右に細い目、鼻先端に２鼻腔がある。口はボール状にやや深く窪み、両耳部には径0.7ｃｍの円孔がある。額の両眉上部に各横列２個１対の突起を有し（右は不鮮明、右端は上部剥離）、裏面上部にも低い突起（上部など剥落）が４つある。後頭部下部から後頸部には不揃いの数条の円弧状沈線と刺突文が見られる。

＜計測値＞　残存の高さ約7.4cm、最大幅9.6cm、最大厚さ2.1cm

＜色調＞　灰色（5Y6/1）・黄灰色（2.5Y6/1）を主体とし、灰色（7.5Y5/1～4/1）あり。

＜胎土＞　密で花崗岩、長石、石英、金雲母、角閃石などを含む（生駒西麓産）

＜成形と調整＞　板状の粘土を張り合わせたのち、ユビオサエとナデおよび部分的にハケ（幅1.3cm）を用いて面を成形・調整し、頭頂部と右後側は面をなす。顔面には粘土紐を使用し、横方向の眉を貼り付けつまむようにして左から右方向に成形し、そのほぼ中央部に上から直行する形で鼻を取り付け指ナデにより成形している。目・鼻腔は刺突用具を使用し、両目は眉の下に内から外への細い沈線で表し、鼻の先端面に刺突具を押し下げて両鼻腔としている。口は指先を押し込んで丸く窪ま

第138図　第56次（8・9工区）・58次・60次弥生時代中期前半・中半平面図

せ（爪あとあり、周縁が隆起）、両耳部には表から裏へ円孔を穿っている（裏面の円孔周縁が隆起）。額部および裏面上部の各4個の突起は、粒状にした粘土を貼りナデ付けて成形しているが、右眉上外側の１つと裏面のものは剥落している。裏面下部には刺突用具によって円弧状などの沈線文および刺突文を施している。

形状などからこの土偶は台式土偶と考えてよいと思われる。土坑43の大半の埋土はM層、すなわち中期中葉から後半の整地土で、多量の弥生土器ともにミニチュア土器、紡錘車、円板状土製品、砥石とシカ・イノシシなどの動物遺体が出土した。N層上面遺構が中期中葉期で、上層のM層が中期中葉から後半の整地土層、下層のO層は前期末から中期前半の遺構面であることから、土偶の製作時期は中期中葉と考えられる。ただ、埋土内の弥生土器の大半はⅢ様式であったが、Ⅱ様式もあるとともにⅠ様式のものも若干確認された。そのため、中期前半、前期の可能性も否定できないが、出土状況や前節に記している類例、形式変遷などからも弥生時代中期前半以前に遡るものとは思われない。また、第56次調査で出土した土偶は、顔面形などは異なるが、形態、成形・調整法は同じで、極めて近い関係にあり、ほぼ同時期の資料といえる。本遺跡は農耕生活を営む弥生時代の拠点集落であり、中期はその盛行期にあたり、農耕社会においても縄文期の習俗が残存していたことを示している。今後、より明確な出土状況による類例の出現を期待したい。

第60次調査では、近世以降の掘り上げ田に伴う井路、中世期の溝、古代期の足跡群などを検出し、古代以降、本調査地周辺は生産域として活用されていたようである。これに対し、弥生時代中期では２期（O層上面とP層上面）の異なる東西方向の大溝などを検出した。これらの大溝は、集落の外を取り巻いた環濠の一部ではないかと考えられる。また、第Q層からはピット群、T層上面から溝を検出し、弥生時代前期の遺構の存在を推測させるものであった。

O層上面では東西方向の大溝２条、P層上面では北西部域にピット・土坑群が見られ、P層上面ではそれより南に東西方向の２条の大溝があって、P層の大溝は第16次調査で検出された溝と関連すると考えられ、環濠集落の南限を思わせる状況といえよう。

O層上面の溝10の北肩を形成していた高まりは、幾層にも盛り上げられその北側も一段低く、土塁状を呈していた。溝10は内側に土塁を有する濠で、その北９mにはほぼ平行する溝９があり、中期中葉の集落を画した２重の環濠の一部と考えることができる。

P層上面で検出した溝11内からは、密集度はそれほど濃くはないがシジミ・タニシ・カワニナなどの貝遺体が、ウナギ・コイ科・ナマズ科・タイ科などの魚類とイノシシ・シカ・サルなどの獣類の動物遺体、イネ・ウリ・マメ・ブドウなどの植物遺体、弥生土器、石器、木製品などとともに厚く堆積し、いわゆる貝塚の状況を呈し、当時の食生活を知り得る資料を得た。この溝の南４mには平行するように溝20が存し、中期前半の集落を画した２重の環濠の一部と思われる。

今回の調査では、これまでの調査で検出されている弥生時代中期の遺構のほかに、後期初頭の遺構、前期初頭期の遺構、中期初頭から前半における地震の痕跡である断層と亀裂、中期前半の貝塚を検出し、砂の堆積状況から集落形成面の状態を再確認した。また、環濠集落の中期前半と中葉期の南限を画したと考えられる２重の大溝を検出し、集落の南北長が約400mを測ることも確認された。遺物としては、多量の弥生土器をはじめ、縄文土器、土製品、石製品、木製品、須恵器、土師器、動物遺体、植物遺体などが出土した。その中でも弥生時代中期中葉に比定できる土偶が出土し、第56次調査からも同時期・同形態の土偶が出土していることから、当時の精神生活の一端を知る新たな資料を得た。また、アカガシ亜属の長柄鋤の未成品がほぼ完形で出土し、中期前半における木製農具の製作状況を知り得る資料といえる。

付．鬼虎川遺跡第61次調査

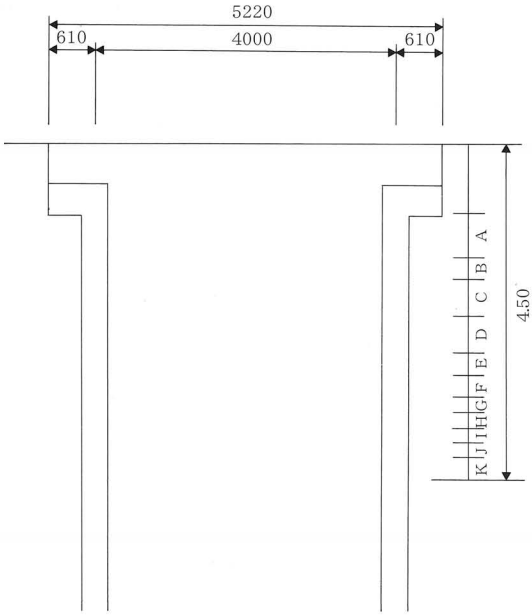
1）調査にいたる経過

平成16年7月、東大阪市弥生町～宝町地内において、送水管布設替工事に伴う「埋蔵文化財発掘の通知」が大阪府水道部東部水道事業所から提出された。工事の規模などから、工事に併行して立会調査が必要である旨、届出者に通知するとともに、大阪府教育委員会に進達した。大阪府教育委員会では本市の指示を受けて、同年8月に本市教育委員会職員が立会調査を行なう旨の通知書を、本市を介して届出者宛て送付した。

ところが、工事箇所が西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第56次調査地（8工区）と第58次調査地の中間地にあたり、遺構・遺物が濃密に遺存していることが予想されたため、再度大阪府教育委員会と取扱いについて協議を行なった。その結果、木製品などの遺物が遺存していることが懸念され、排土中の遺物採集を中心とした調査を行ない、記録保存として報告書を作成すべき旨指示された。これを受けて、大阪府教育委員会は、大阪府水道部東部水道事業所に対し、東大阪市教育委員会を調査主体として発掘調査を行うべき旨、回答した。なお、調査箇所は現道部にあたり、掘削工事は夜間施工となった。これに伴う調査方法については別記したい。

第139図　遺物検出作業風景

いっぽう、送水管布設替工事については、西石切立体交差事業と密接に関連するものであることから、調査の方法や費用負担等について、大阪府水道部東部水道事業所は大阪府八尾土木事務所と協議を重ねた。これを受けて、平成16年12月、大阪府八尾土木事務所、大阪府水道部東部水道事業所、東大阪市の三者間で協定書を締結した。この協定書により、調査に要する費用は大阪府八尾土木事務所が負担することとなった。このため、今回の調査成果を本報告書に付載することとしたものである。



第140図　工事掘削断面図

調査は、平成16年12月24日から平成17年1月19日まで実施した。調査対象面積は36.8㎡である。

2）調査の概要

調査による掘削深度は、現地表面から4.50mである。第56次調査及び第58次調査の成果に基づき、1.50mは現代の盛土層と判断し、重機を使用して掘削、除去した。以下、3.0mの土層については、現場にてレベルを使用して水平に掘削し、排土の仮置き場まで運搬して、遺物の検出作業を人力で行なった。水平掘削の層厚は、周辺での調査成果を勘案し、上層部は比較的厚く、下層部は薄く設定した。

これにより、各土層から出土する遺物の所属時期を検討する素材とした。ただし、調査箇所全体で遺構が存在しないことは想定しにくく、遺構築造時の掘削により、下部の遺物が上部に攪拌されていることは十分に予想された。3.0mの土層は上述の区分によりＡからＫまでの11層に分割した。なお、仮置き場にて、各層の土色・土質を観察、記録したが、区分があくまで便宜的なものであったため、以下では、「～を主体とする層」として記述する。土層の概要は以下のとおりである。

Ａ層（現地表面から1.5m）　現代の盛土層。遺物なし。

Ｂ層（水平掘削0.3m）　旧耕土層を主体とする層。

Ｃ層（水平掘削0.5m）　5BG4/1暗青灰色砂混じり粘土を主体とする層。

Ｄ層（水平掘削0.5m）　5BG5/1青灰色砂混じり粘土を主体とする層。

Ｅ層（水平掘削0.3m）　2.5Y5/4黄褐色シルトとN4/灰色粘土の混合土を主体とする層。

Ｆ層（水平掘削0.3m）　N3/暗灰色粘土を主体とする層。

Ｇ層（水平掘削0.2m）　10G2/1緑黒色砂混じり粘土を主体とする層。

Ｈ層（水平掘削0.2m）　10G2/1緑黒色砂混じり粘土を主体とする層。

Ｉ層（水平掘削0.2m）　10G4/1暗緑灰色砂混じり粘土を主体とする層。

Ｊ層（水平掘削0.2m）　5BG4/1暗青灰色砂混じり粘土を主体とする層。

Ｋ層（水平掘削0.3m）　10Y2/1黒色砂混じり粘土に10G5/1緑灰色シルト質粘土がブロック状に混入する層を主体とする層。土質から人為的な盛土層と考えられる。

３）出土遺物

資料はすべて採集品である。周辺の調査状況から考えると上層と下層に遺物包含層があった可能性が高い。出土遺物は第58次調査と同様である。

①　土器・硯

弥生土器の量が多い。他に須恵器・土師器などがある。

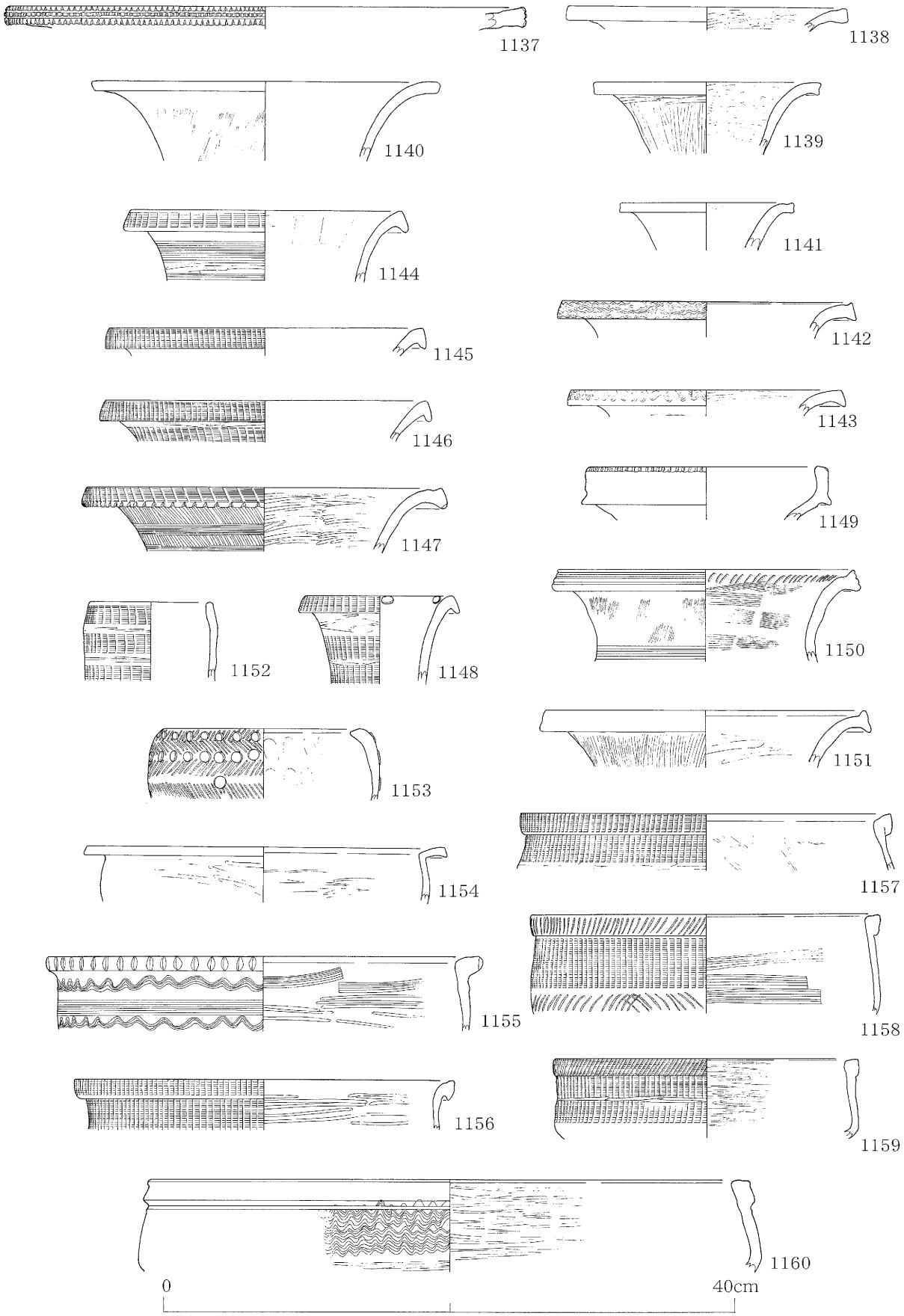
弥生土器（第141・142図1137～1183）

壷・細頸壷・鉢・甕・高杯の器種がある。

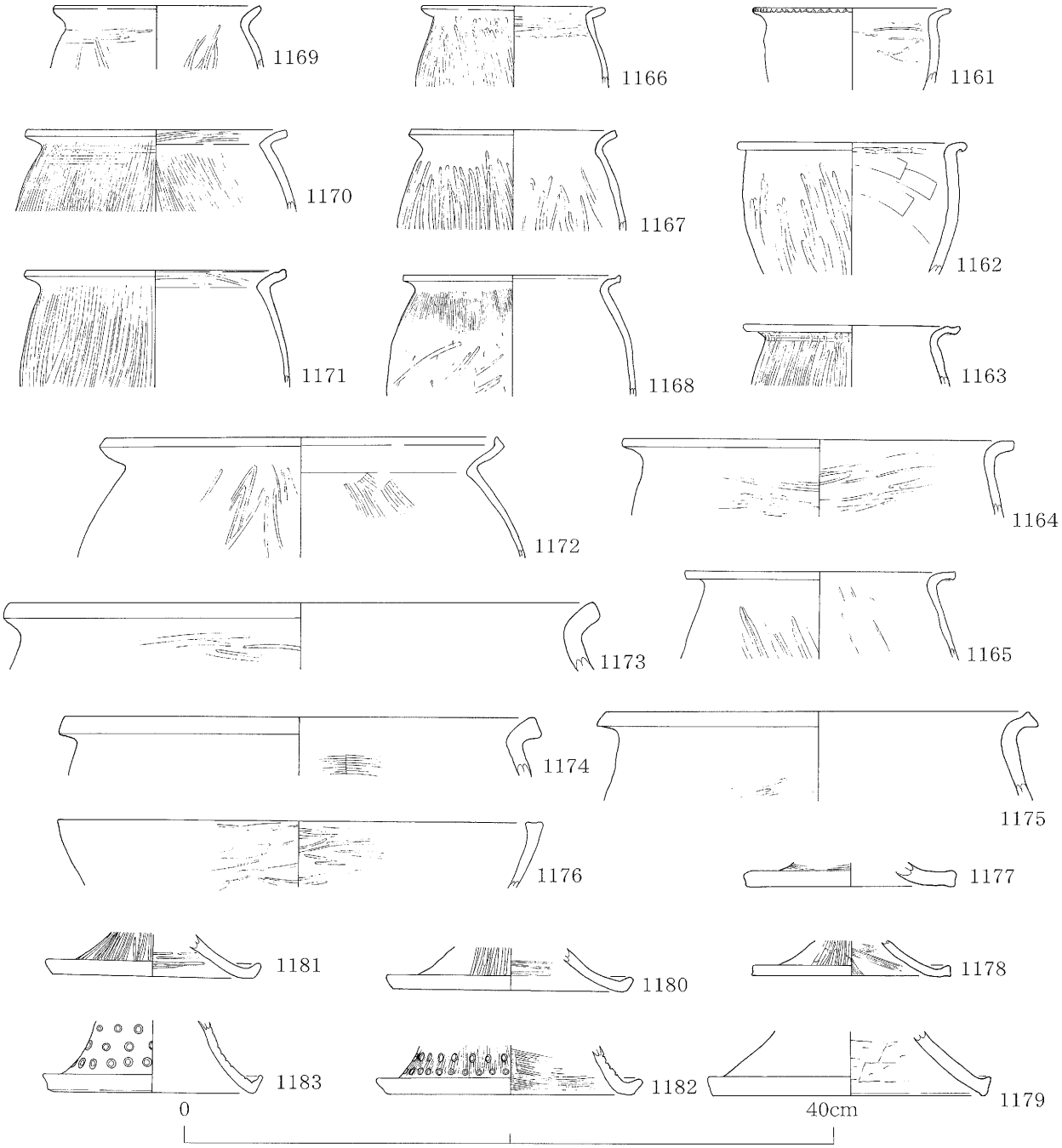
1137～1151は壷である。1137は口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。口縁端部にヘラ描沈線文と刻み目を施す。1138～1141は口頸部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わるものとやや面を持つものがある。内外面はハケメ調整やヘラミガキ調整するものが多い。1142～1148は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部や頸部に櫛描文様を施す。1148は口縁部内面に円形浮文を貼り付ける。内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整するものが多い。1149は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ拡張する。口縁端部が幅広の面を持つ。口縁端部に刻み目を施す。1150・1151は口頸部が短く外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。1150は口縁端部に凹線文、頸部に櫛描直線文、口縁部内面に列点文を施す。内外面はハケメ調整する。1151は外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。1137はⅠ様式、1138～1141はⅡ様式、1142～1151はⅢ～Ⅳ様式。1138・1140・1142・1149・1151は非河内産、他は生駒西麓産。

1152・1153は細頸壷である。1152は口頸部が内湾し、口縁端部が丸く終わる。口頸部外面に櫛描簾状文を施す。文様帯間は研磨する。内面はナデ調整する。1153は口頸部が内湾し、口縁端部が丸く終わる。口頸部外面に櫛描列点文を施し、円形浮文を加える。内面はナデ調整する。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

1154～1160は鉢である。1154は体部の張りが少なく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はヘラミガキ調整する。1155・1156は体部が内傾する。口縁部は強く外反し、口縁



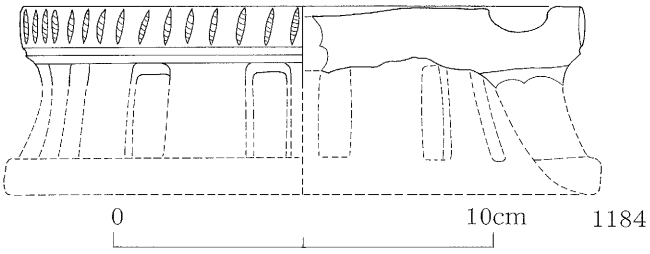
第141図　第61次出土遺物実測図（1）



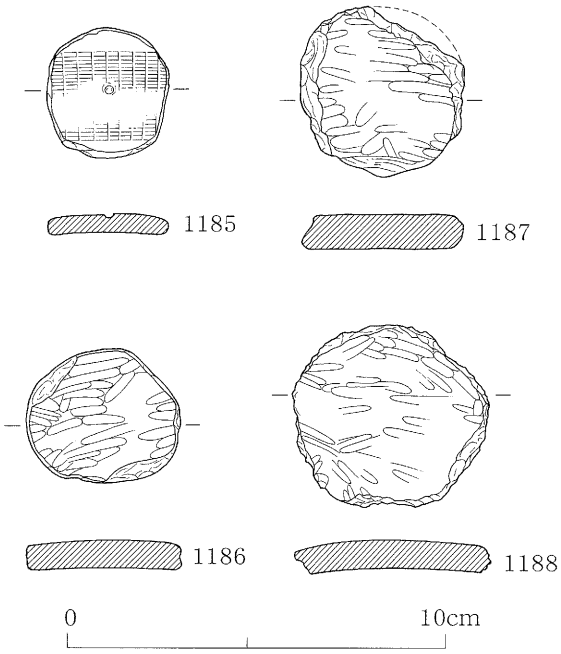
第142図　第61次出土遺物実測図（2）

端部が面を持つ。口縁端部と体部に刻み目や櫛描文様を施す。1155は内面をハケメ調整、1156はヘラミガキ調整する。1157～1160は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。1157～1159は口縁端部と体部に櫛描文様を施す。1160は体部に櫛描文様を施し、口縁端部は無文である。内面はヘラミガキ調整するものが多い。Ⅲ～Ⅳ様式。生駒西麓産。

1161～1175は甕である。1161・1162は体部の張りが少なく、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。1161は体部外面をナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。口縁端部に刻み目を施す。1162は体部外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。1163～1171・1173～1175は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つものと丸く終わるものがある。体部内外面は



第143図　第61次出土円面硯実測図



第144図　第61次出土土製品実測図

ヘラミガキ調整やハケメ調整するものが多い。1172は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。体部外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。1161・1162はⅡ様式、1163～1175はⅢ～Ⅳ様式。1170・1171は非河内産、他は生駒西麓産。

1176～1183は高杯である。1176は浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は面を持つ。内外面はヘラミガキ調整する。1177は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部が面を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。1178～1181は裾部がゆるく立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整するものが多い。1182・1183は裾部が急に立ち上がり、裾端部を上方へ拡張する。外面に竹管文を施す。1182は内外面をハケメ調整、1189はナデ調整する。1177は中期、他はⅢ～Ⅳ様式。1179は生駒西麓産、他は非河内産。

須恵器（第143図1184）

1184は須恵器の円面硯である。脚部は欠損する。口縁端部は面を持つ。外面に刻み目を施す。口縁部の縁にやや幅広の溝を廻らす。中央部はやや凹む。脚部には長方形か台形を呈する透かしを施していたと考えられるが下部は不明である。奈良時代。

②　土製品（第144図1185～1188）

紡錘車未成品・円板状土製品がある。

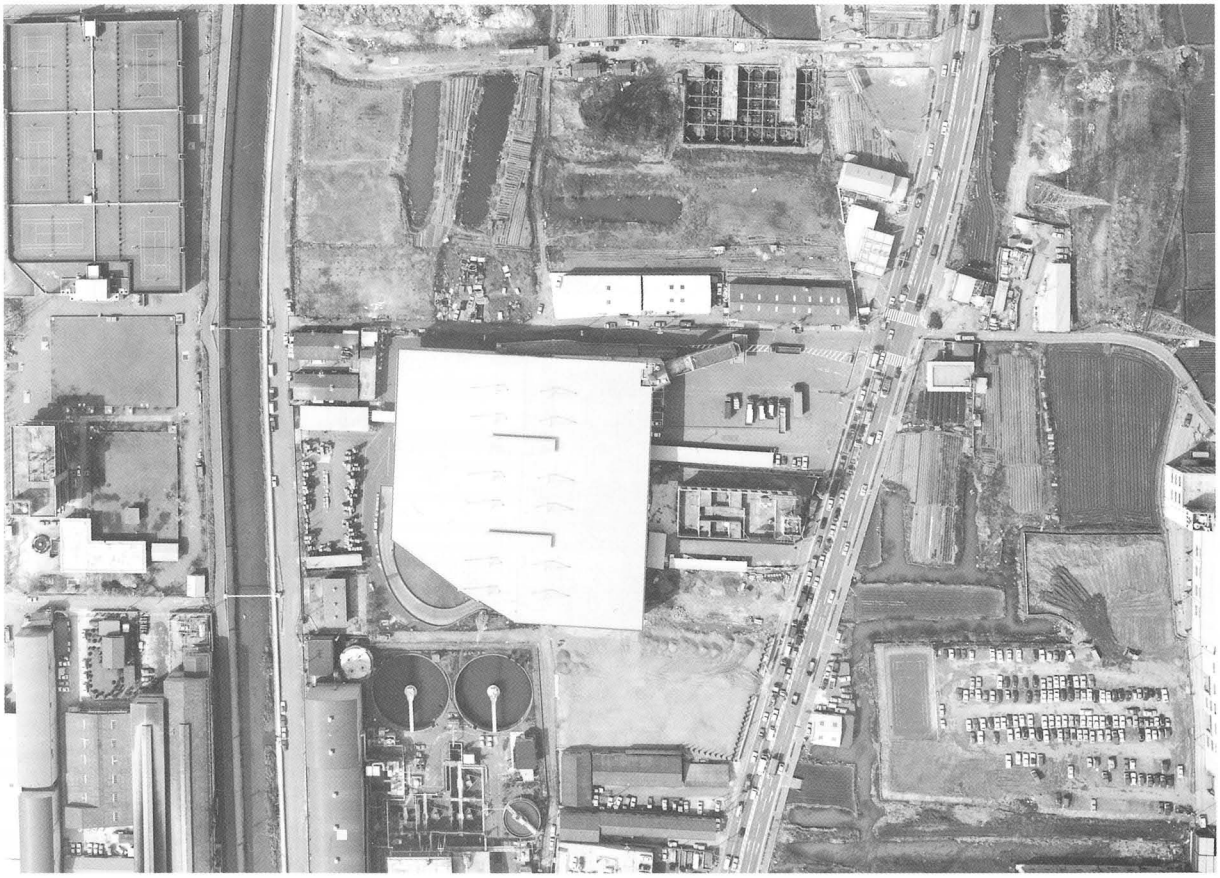
1185は紡錘車未成品である。土器片の円周部を打ち欠いて円形に加工する。円周部は丁寧に研磨する。中央部に孔を穿つが未貫通である。

1186～1188は円板状土製品である。いずれも土器片の円周部を打ち欠いて円形に加工するが、1186は円周部をさらに研磨する。

図　　版

図版1　遺構

1. 調査地周辺航空写真（1950年ごろ）

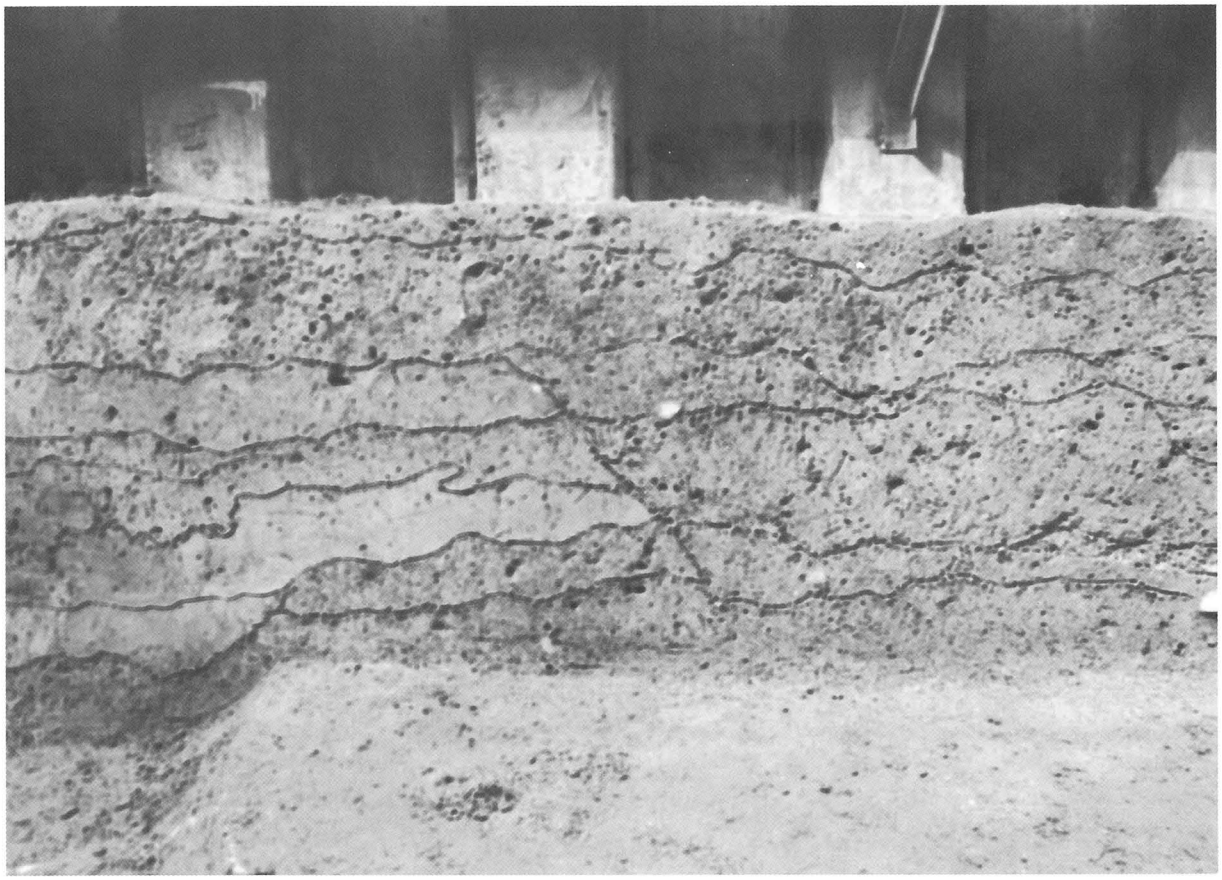


2. 調査地周辺航空写真（1980年ごろ）

図版2　遺構

1. 調査地遠望　東より

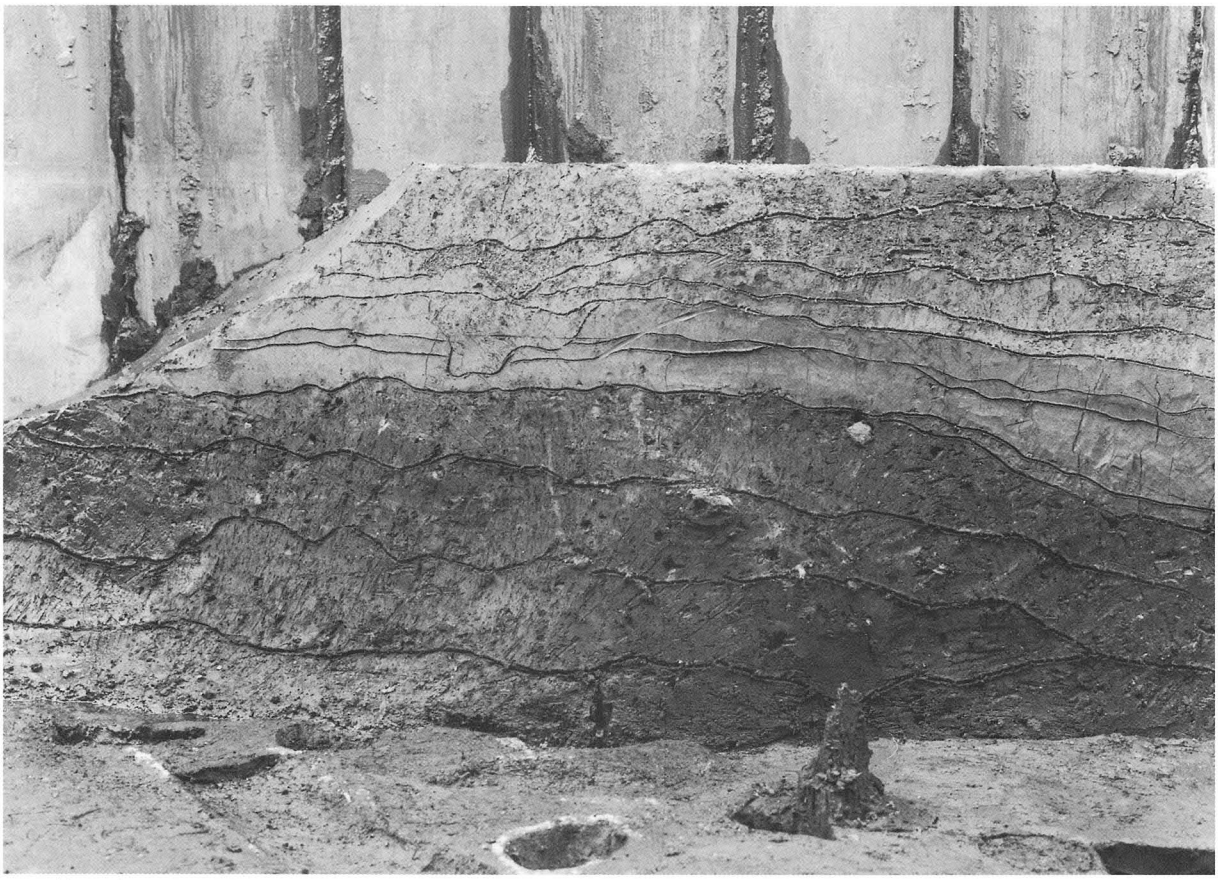
2. 調査地近景　北より



1. 第58次11地区付近西壁断面(1)

2. 第58次11地区付近西壁断面(2)

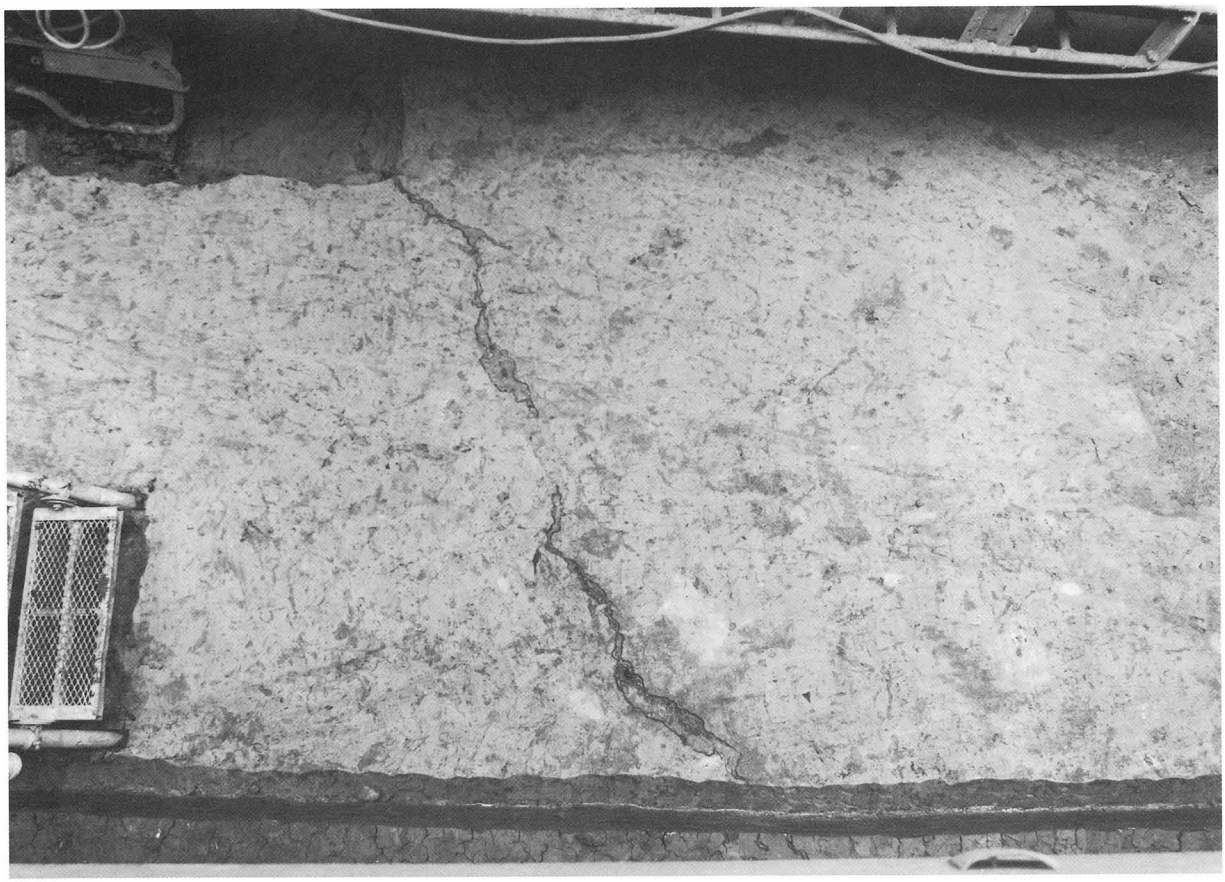
図版4　遺構



1. 第58次11地区付近西壁断面(3)

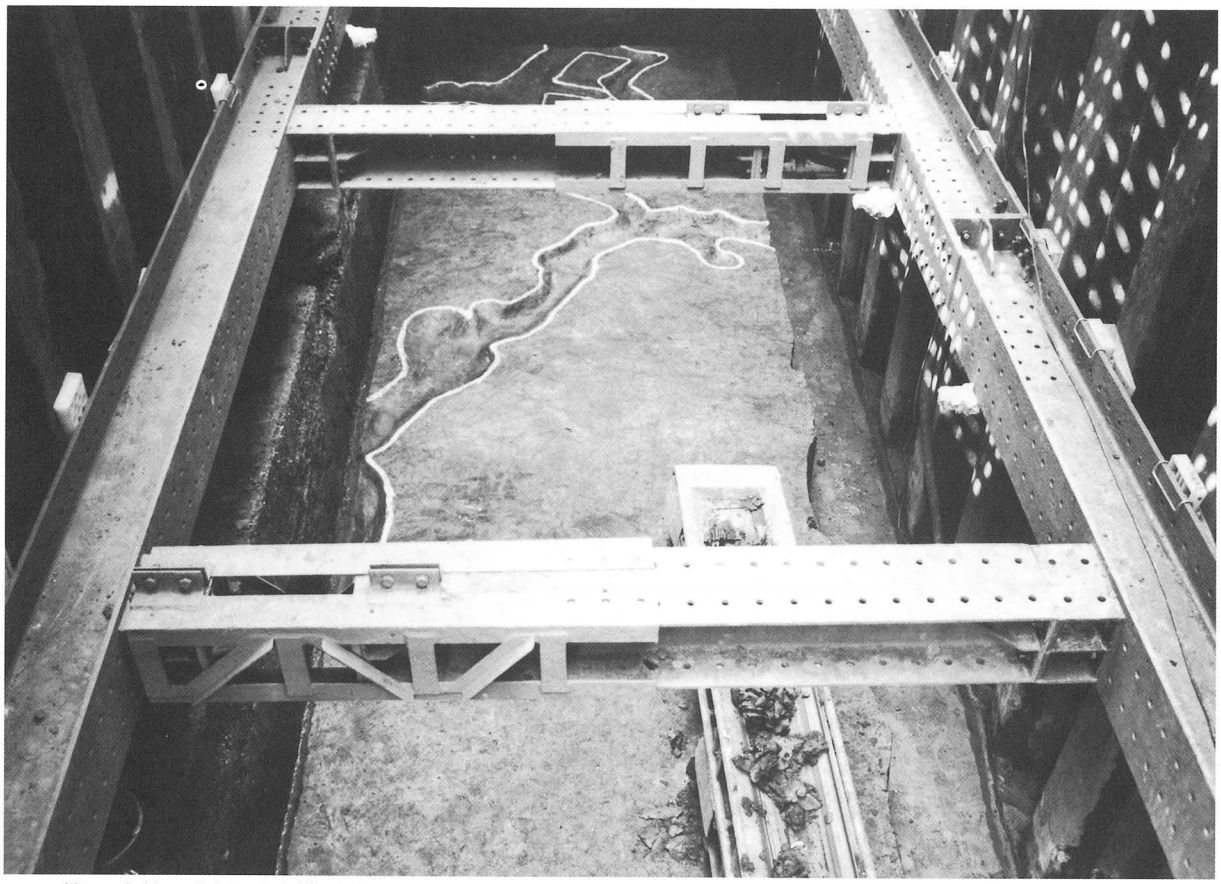
2. 第58次11地区付近西壁断面(4)

1. 第58次11地区付近西壁断面(5)



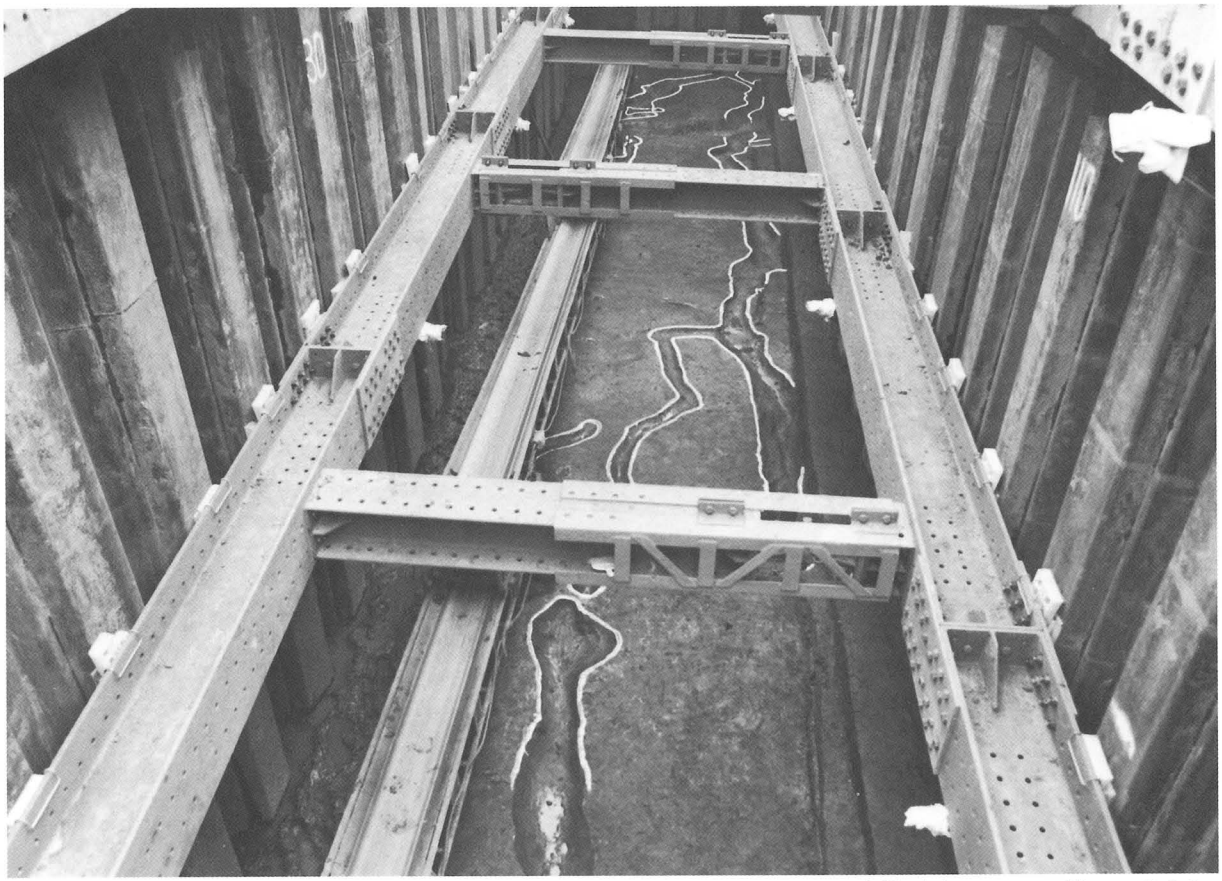
2. 第58次第27層上面　地震痕跡検出状況　11地区　西より

図版6　遺構

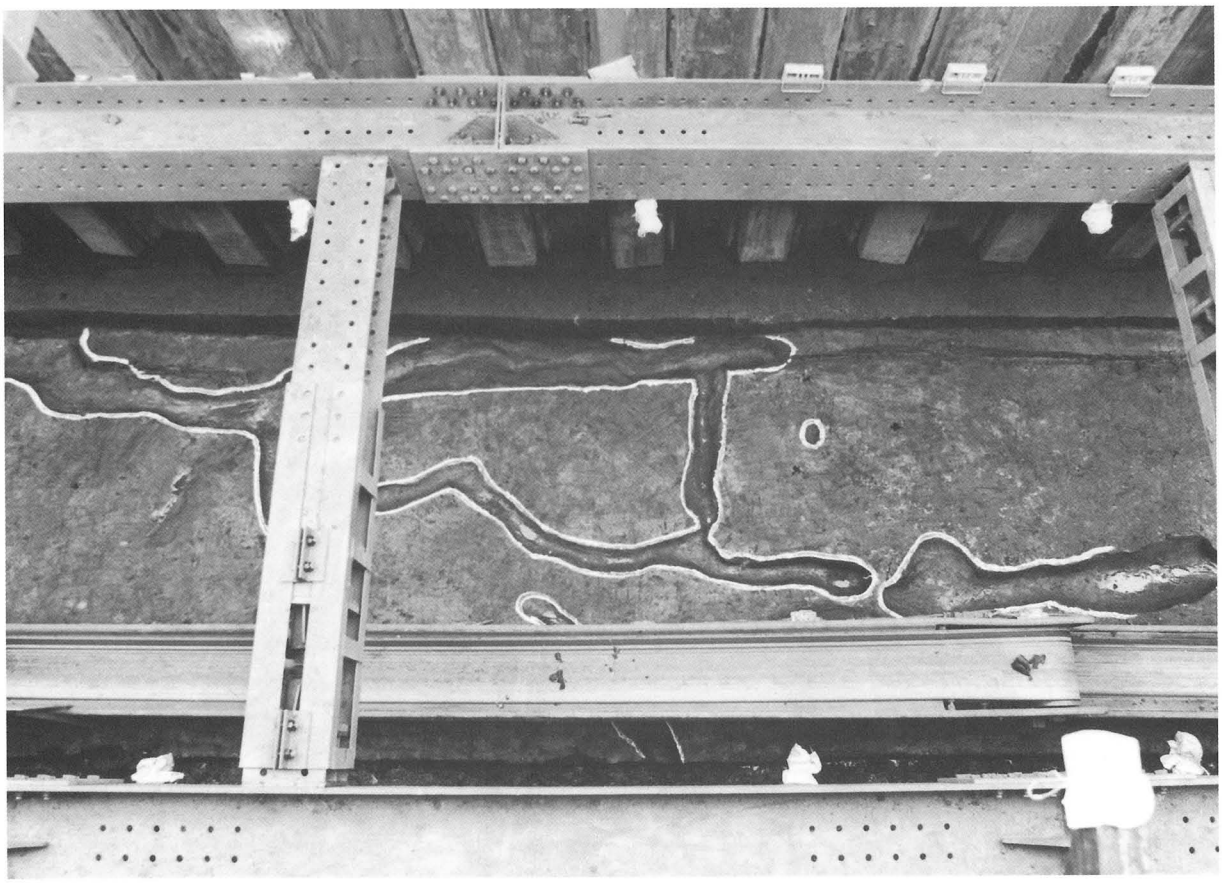


1. 第58次第25層上面遺構（1）１～３地区　南より

2. 第58次第25層上面遺構（2）１地区　東より



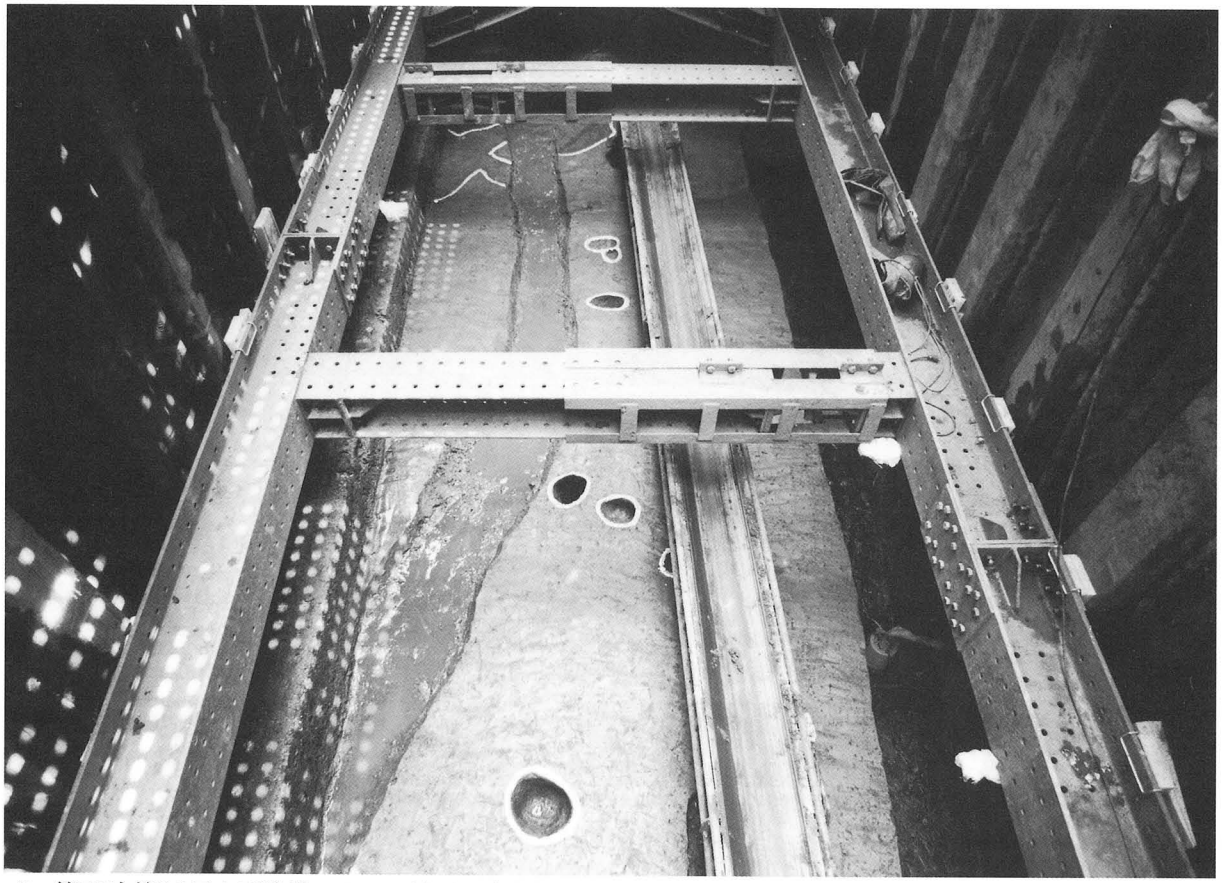
1. 第58次第25層上面遺構（3）　12～15地区　北より



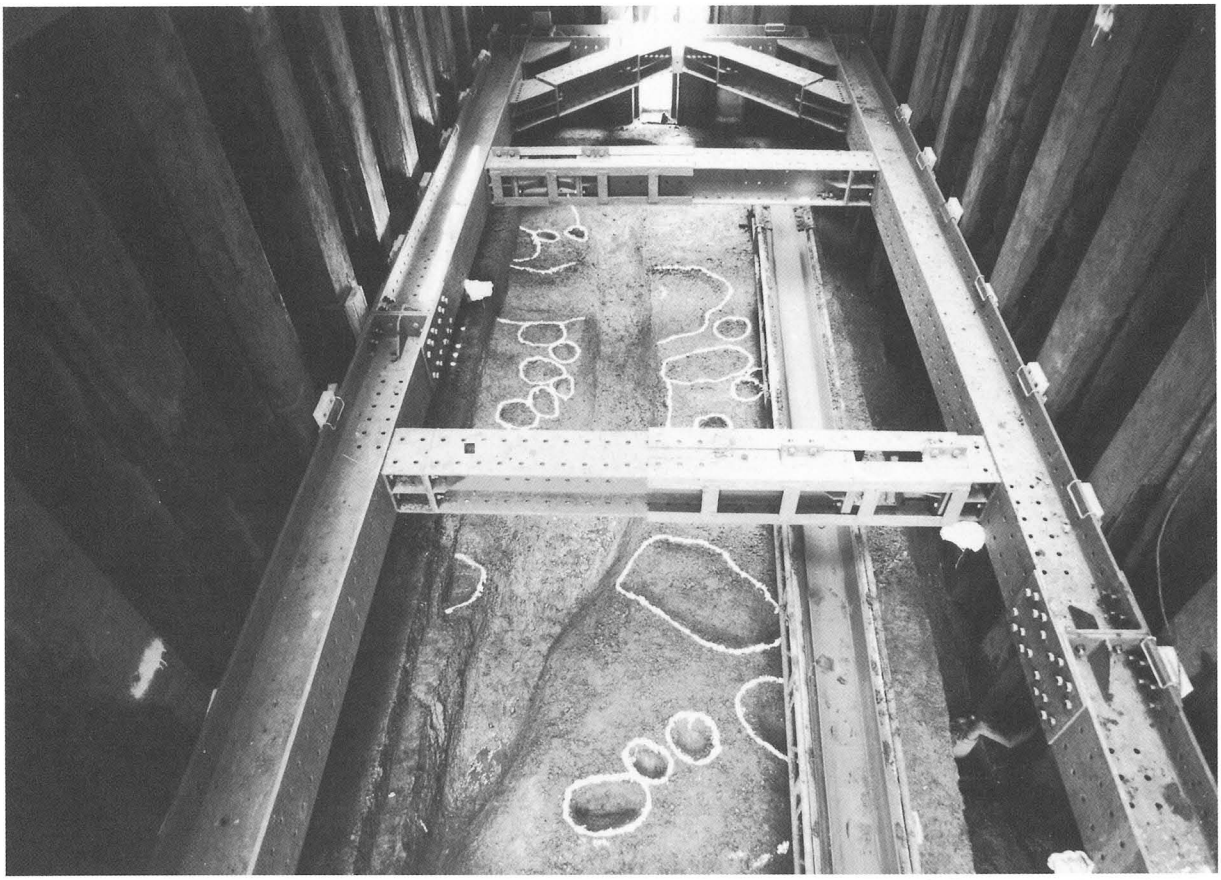
2. 第58次第25層上面遺構（4）　13地区　東より

図版8　遺構

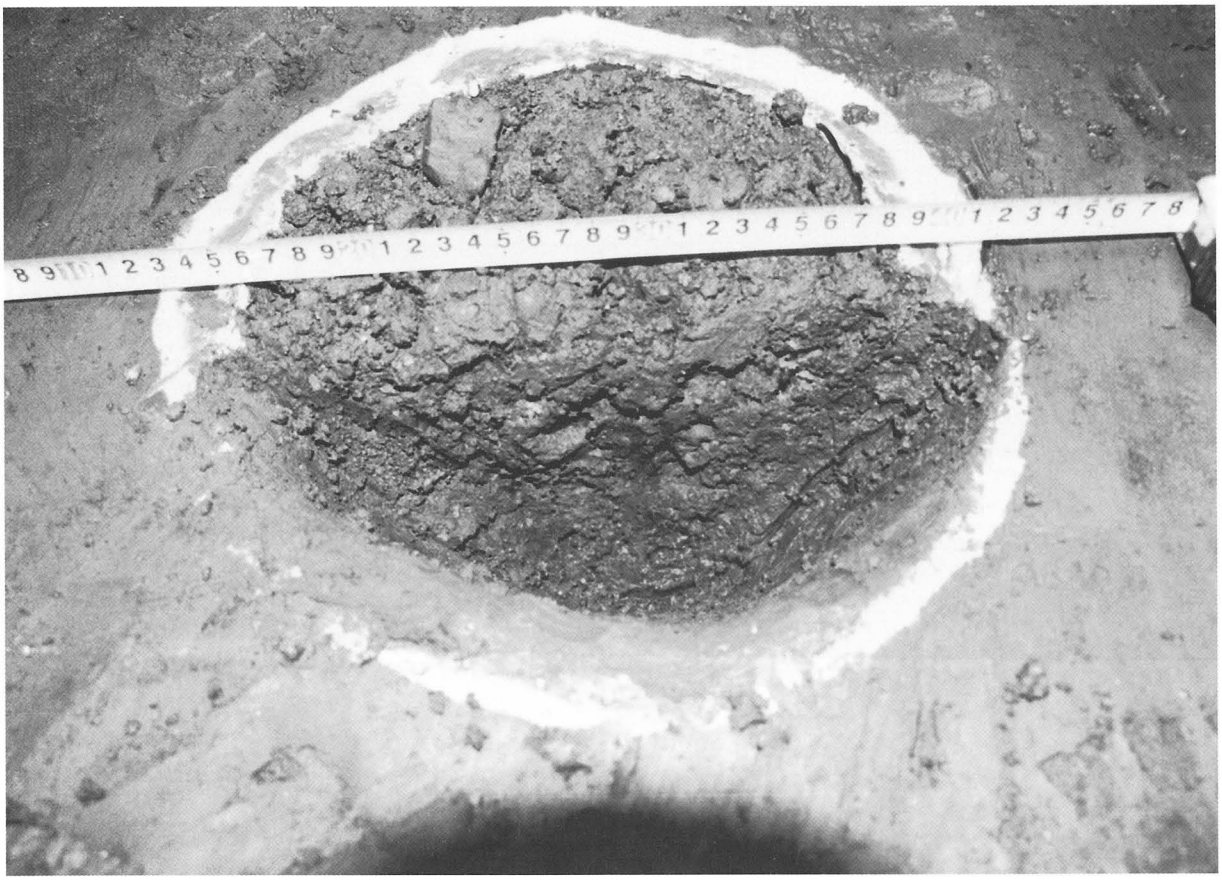
1. 第58次第25層　溝113断面　15地区　南より



2. 第58次第22層上面遺構　1～3地区　南より



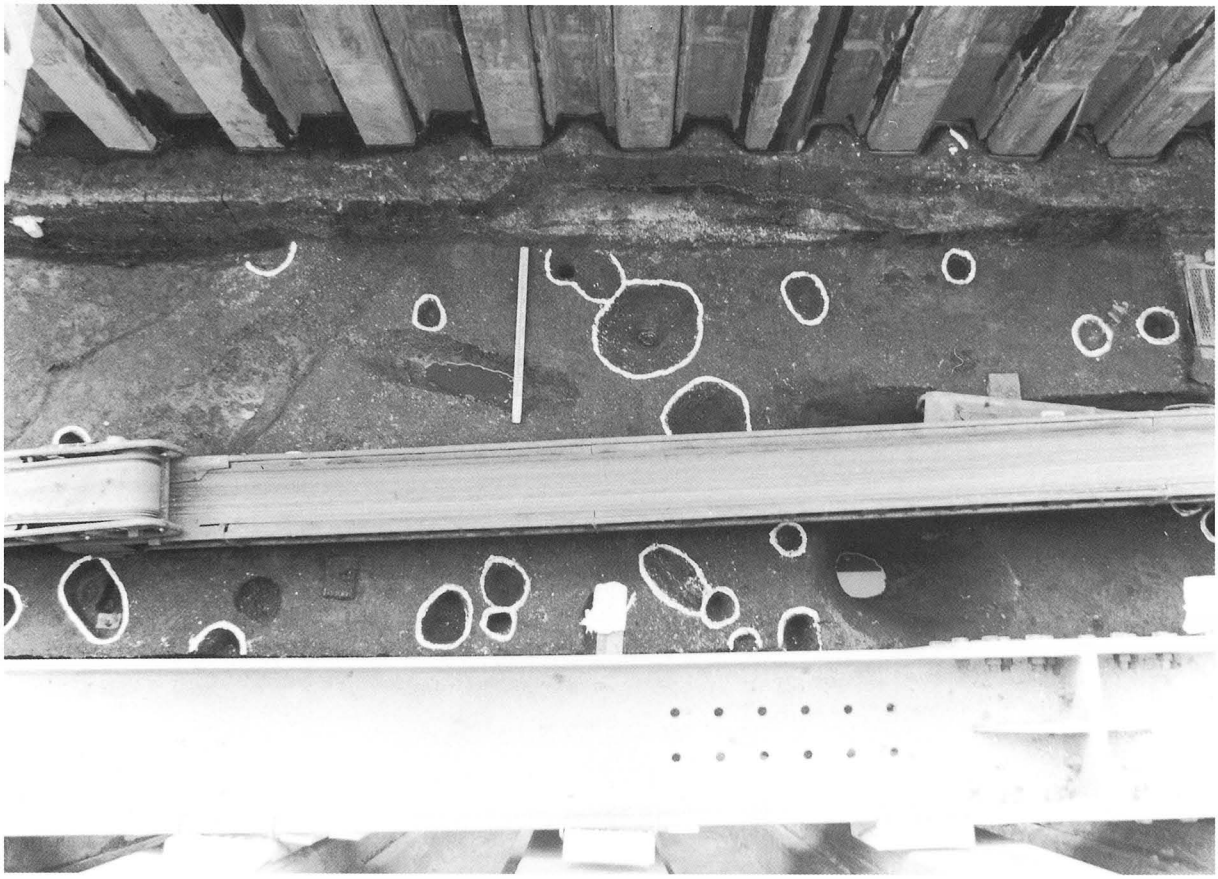
1. 第58次第21層上面遺構　1～3地区　南より



2. 第58次第21層上面　ピット434断面　3地区　南より

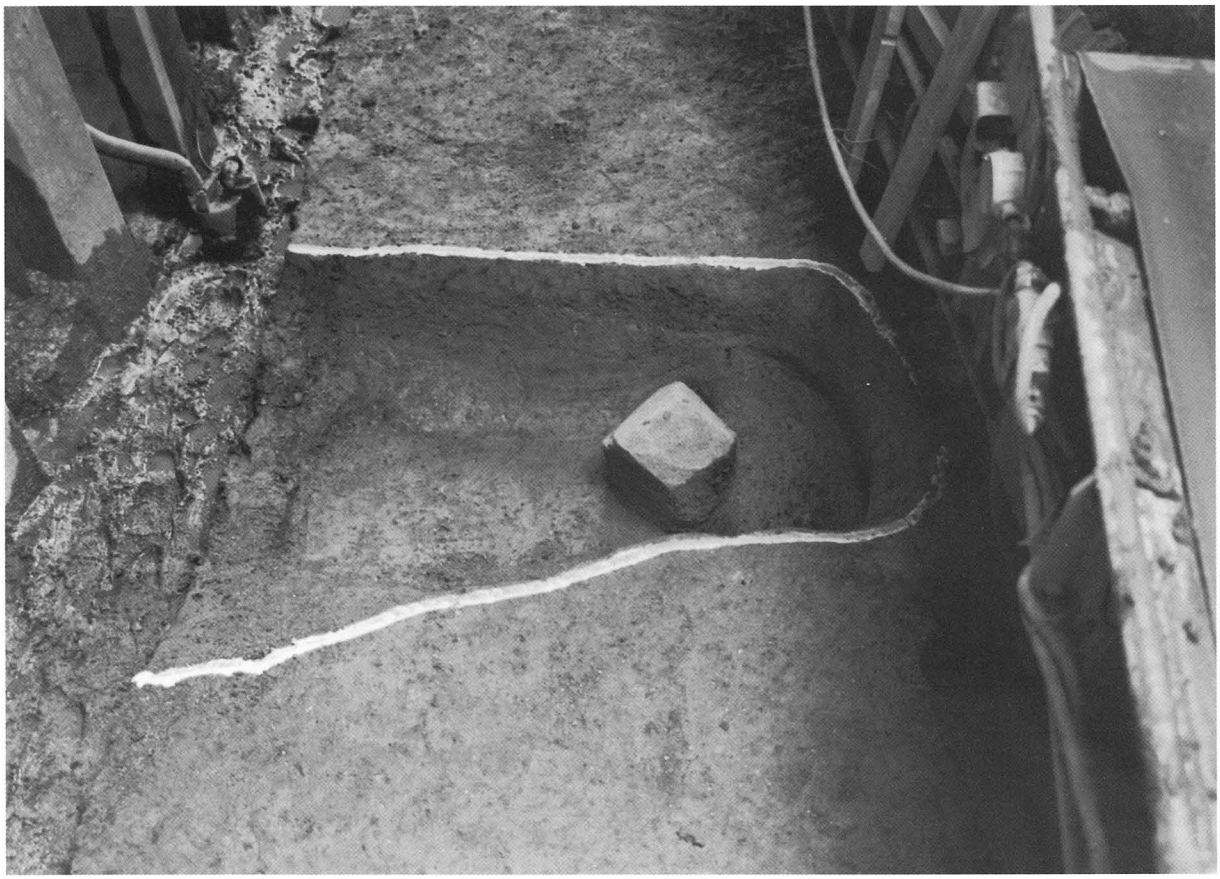
図版10　遺構

1. 第58次第20層上面遺構　4～7地区　南より

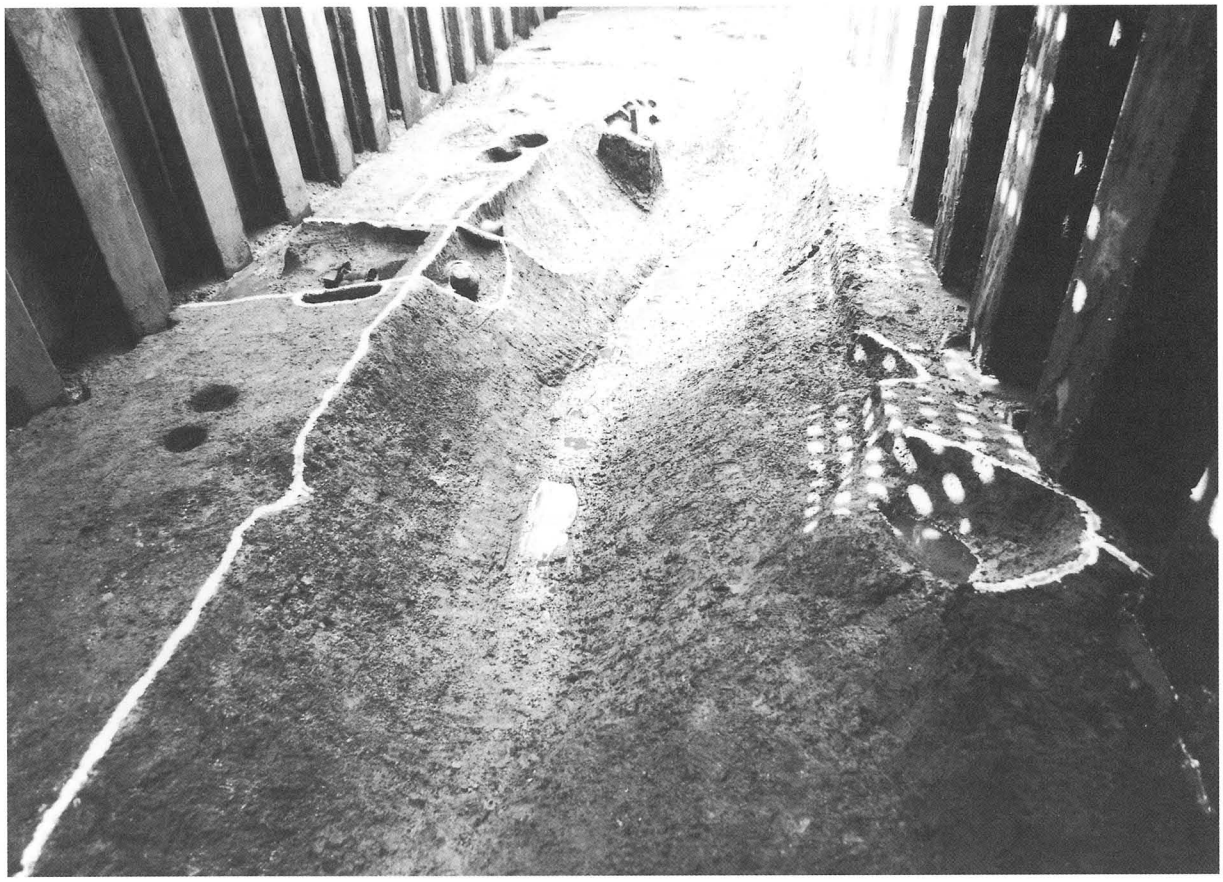


2. 第58次第19層上面遺構　10～11地区　東より

1. 第58次第19層　縄文土器（深鉢）出土状況　２地区　南より



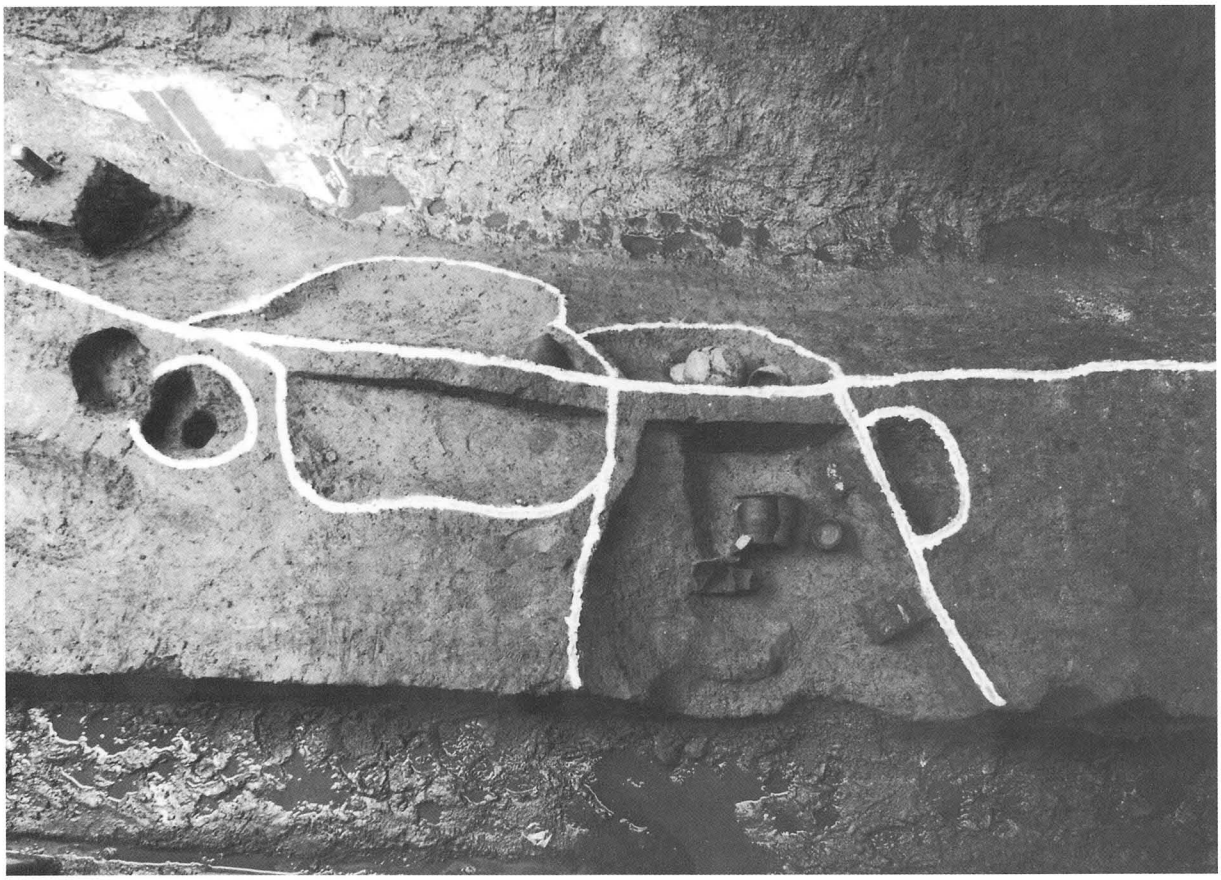
2. 第58次第19層　土坑59　５～６地区　北より



1. 第58次第18層上面遺構（1）　1～3地区　北より

2. 第58次第18層上面遺構（2）　4～7地区　南より

1. 第58次第18層上面遺構（3）　9～5地区　北より

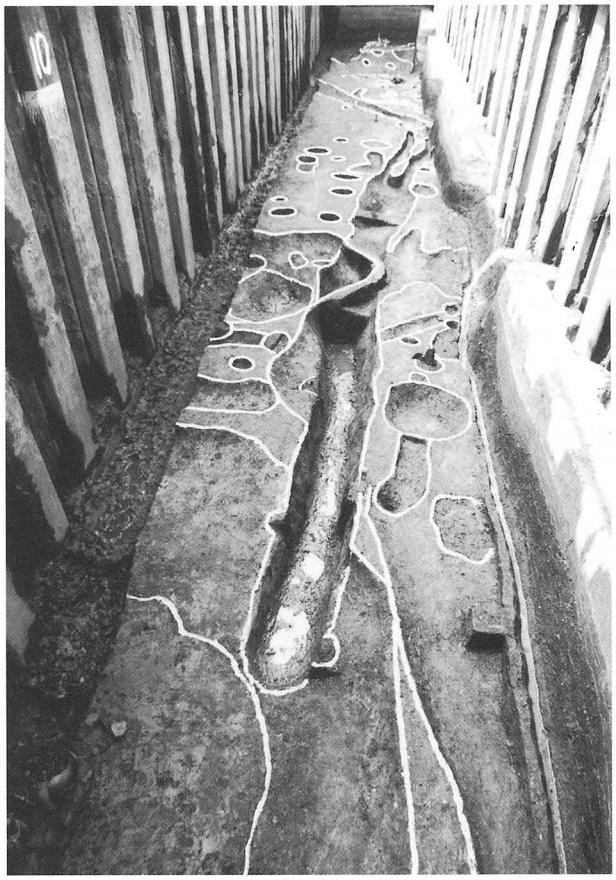


2. 第58次第18層　土坑46・47内土器出土状況　2地区

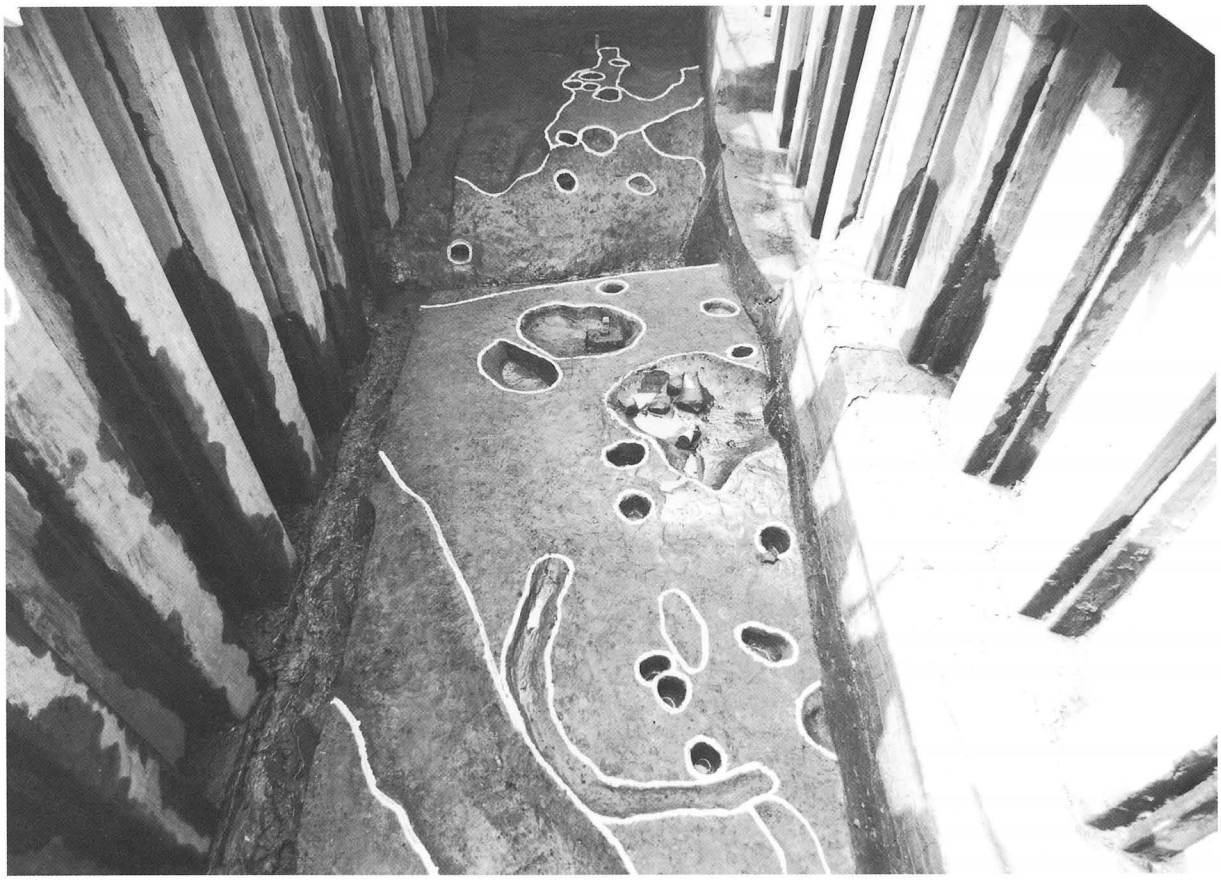
図版14　遺構

1. 第58次第17層上面遺構（1）１～４地区　北より

2. 第58次第17層上面遺構（2）４～７地区　南より

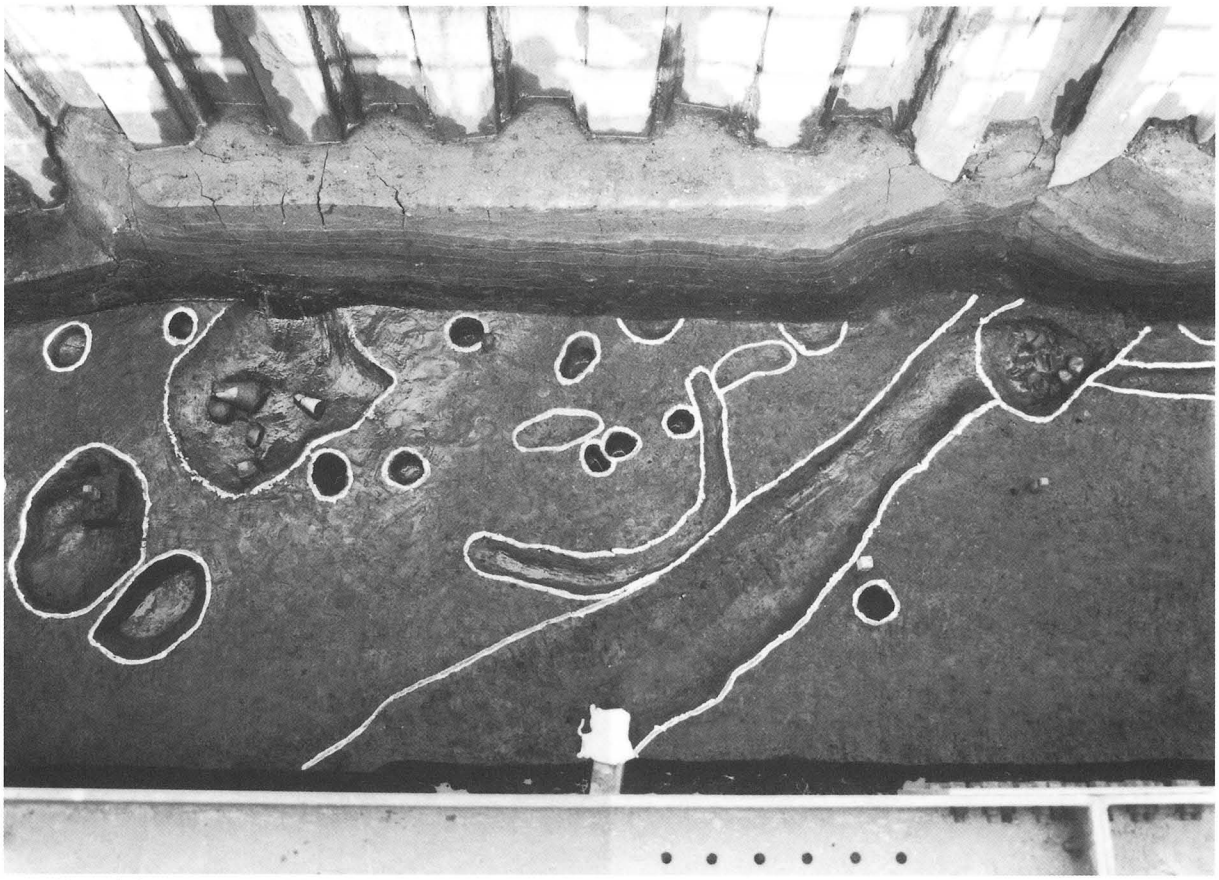


1. 第58次第17層上面遺構（3）　9～15地区　北より



2. 第58次第17層上面遺構（4）　13～15地区　北より

図版16　遺構



1. 第58次第17層上面遺構（5）　13地区　東より

2. 第58次第17層　土坑42内土器出土状況　13～14地区　東より

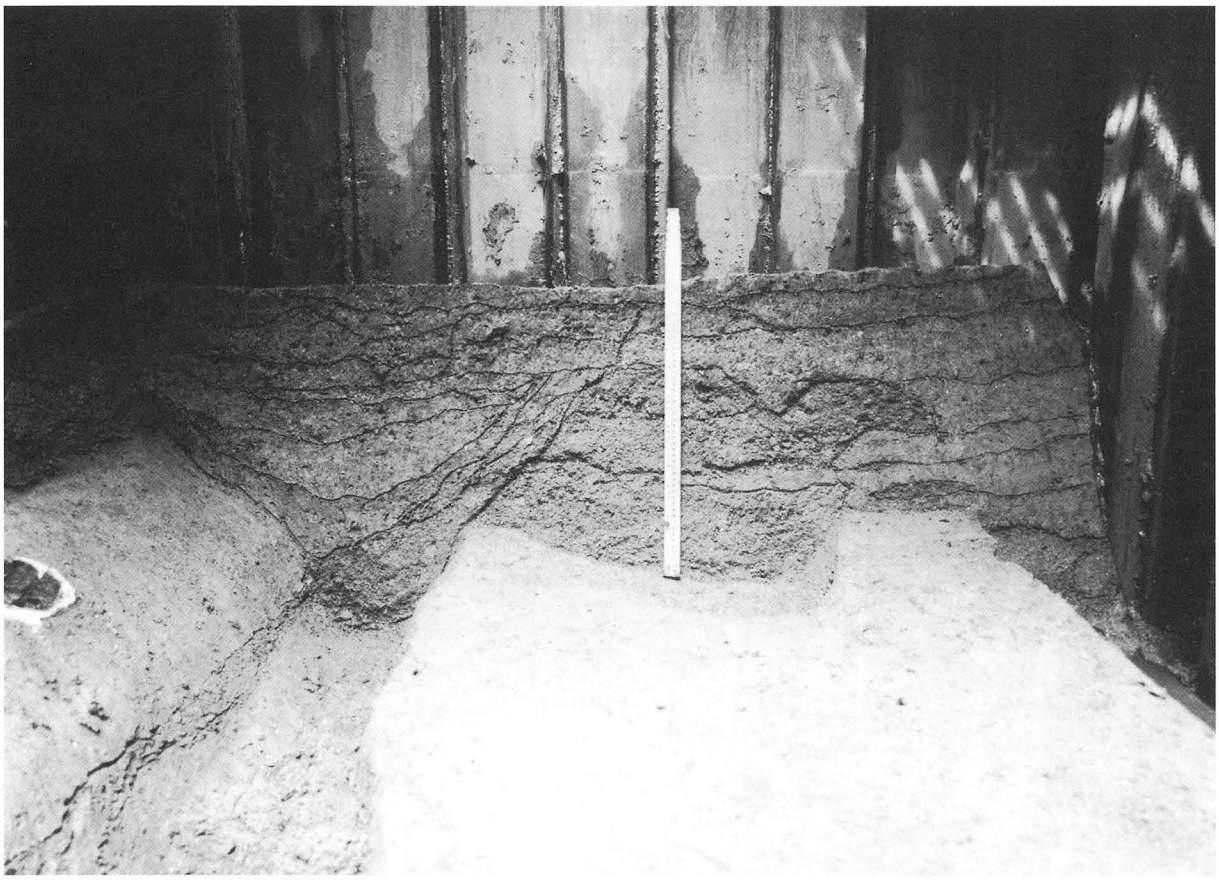
1. 第58次第17層　土坑36内遺物出土状況　11地区

2. 第58次第17層　土坑49内土器出土状況　9地区

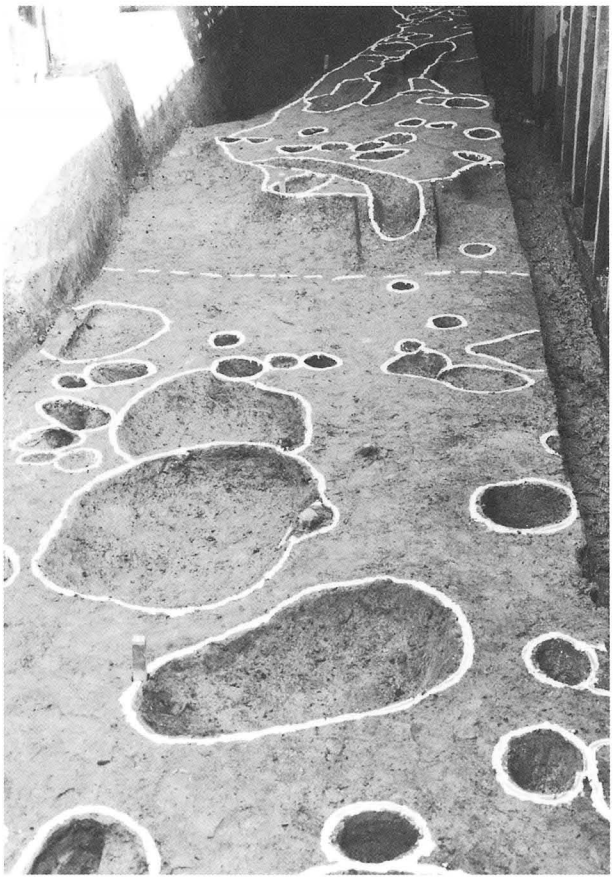
図版18　遺構

1. 第58次第17層　ピットｅ断ち割り状況　11地区　西より

2. 第58次第17層　ピットｃ断ち割り状況　10地区　西より



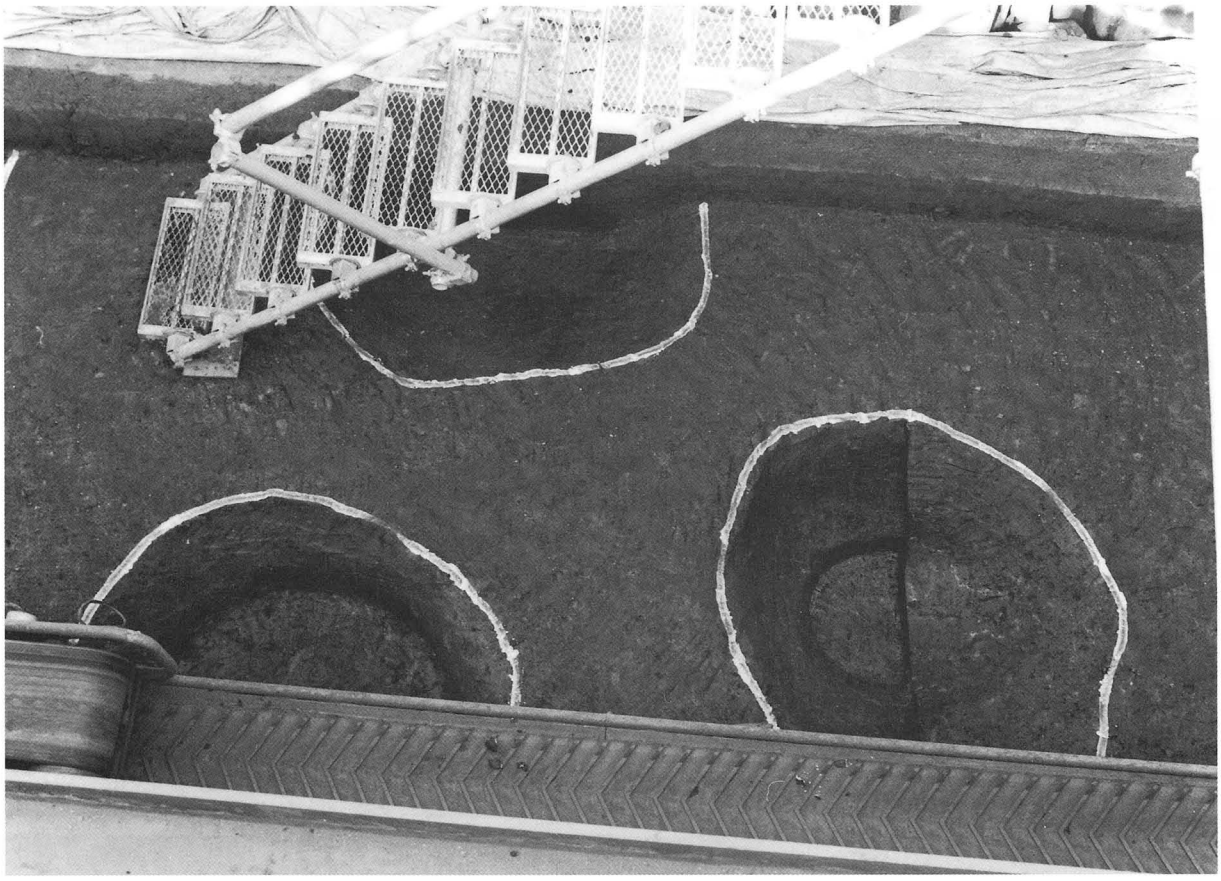
1. 第58次第17層　大溝３北壁断面　１地区　南より



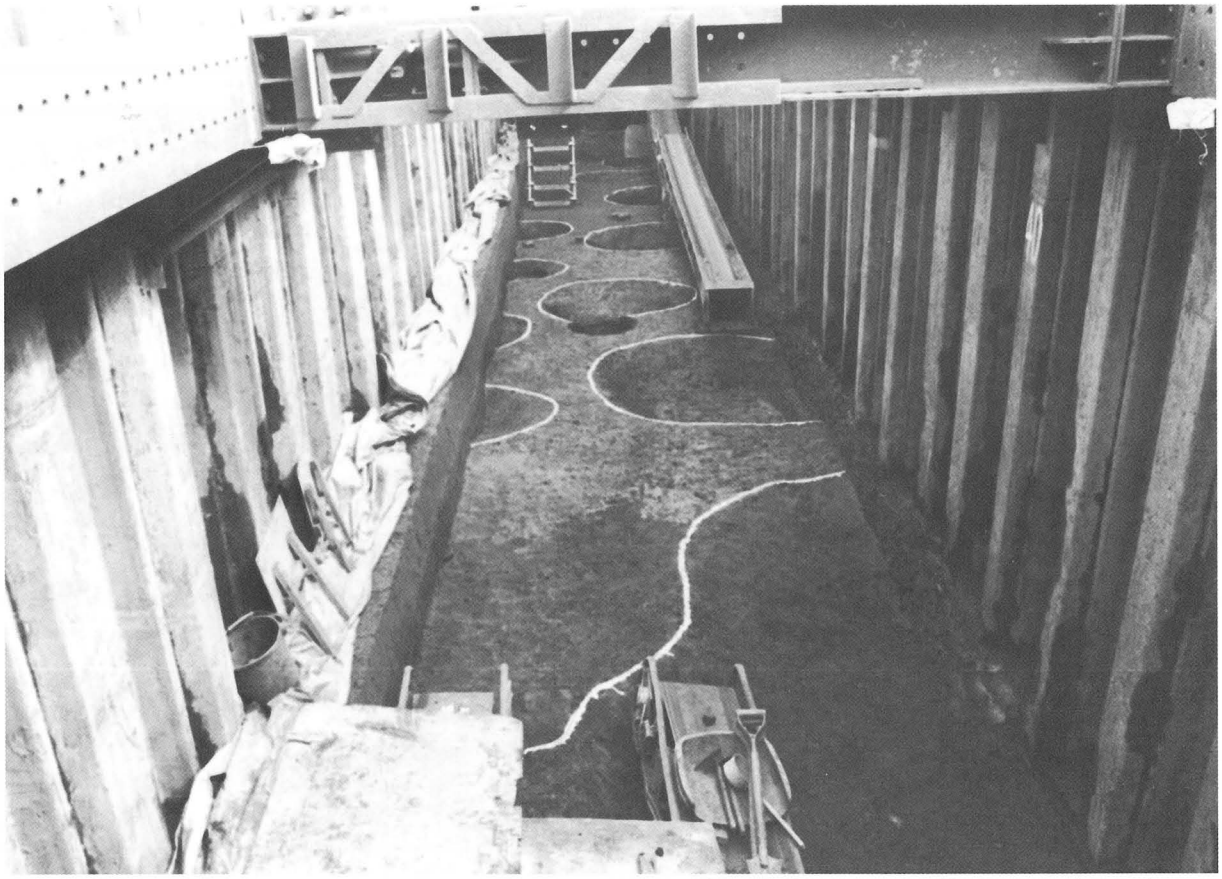
2. 第58次第17′層上面遺構　４～６地区　南より

1. 第58次第16層上面遺構検出状況　9～15地区　北より

2. 第58次第16層　土坑14断面　11地区　南より



1. 第58次第16層　土坑12～14　10～11地区　東より



2. 第58次第16層上面遺構　9～15地区　南より

1. 第58次第16層　大溝１　４～５地区　東より

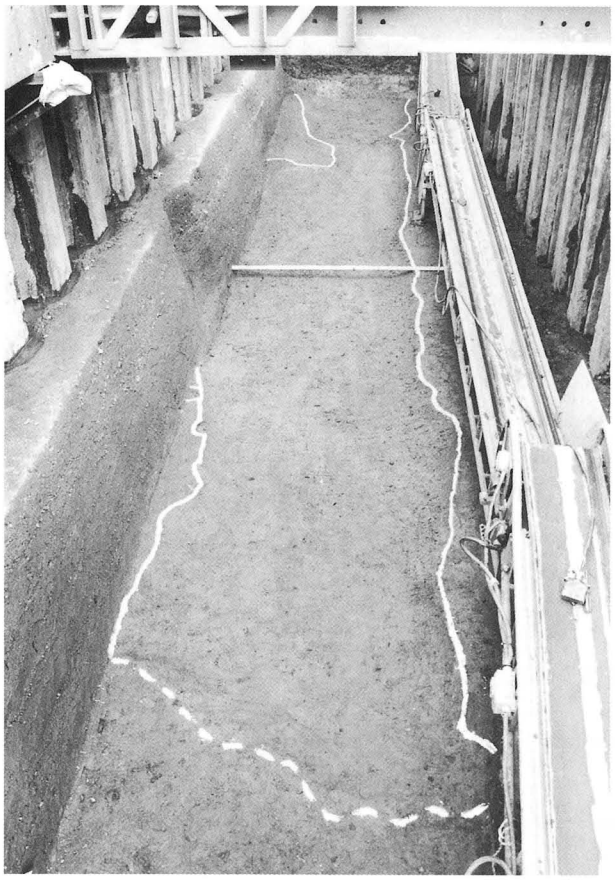
2. 第58次第16層　大溝１断面　４～５地区　東より

1. 第58次第16層　大溝２内木製品出土状況　13～15地区　西より

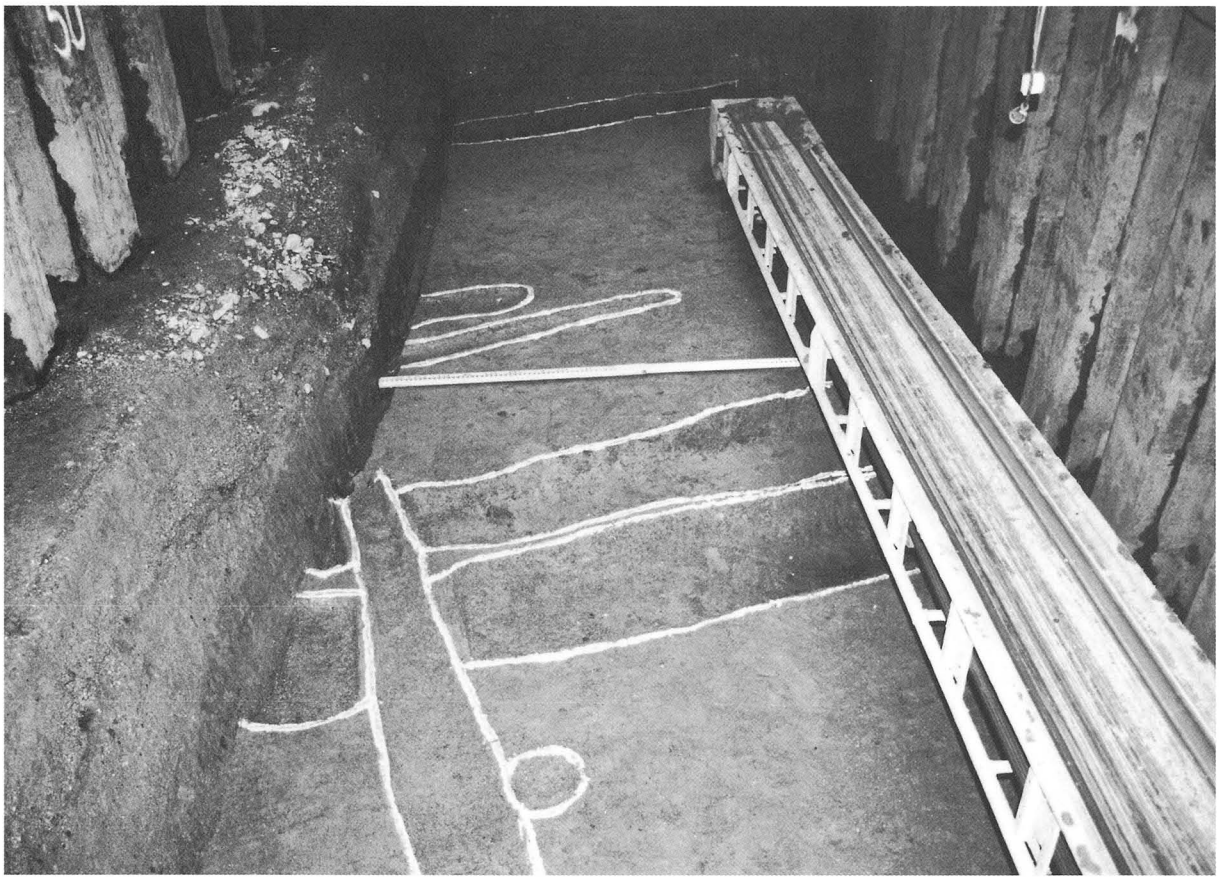
2. 第58次第16層　大溝２　13～15地区　北より

図版24　遺構

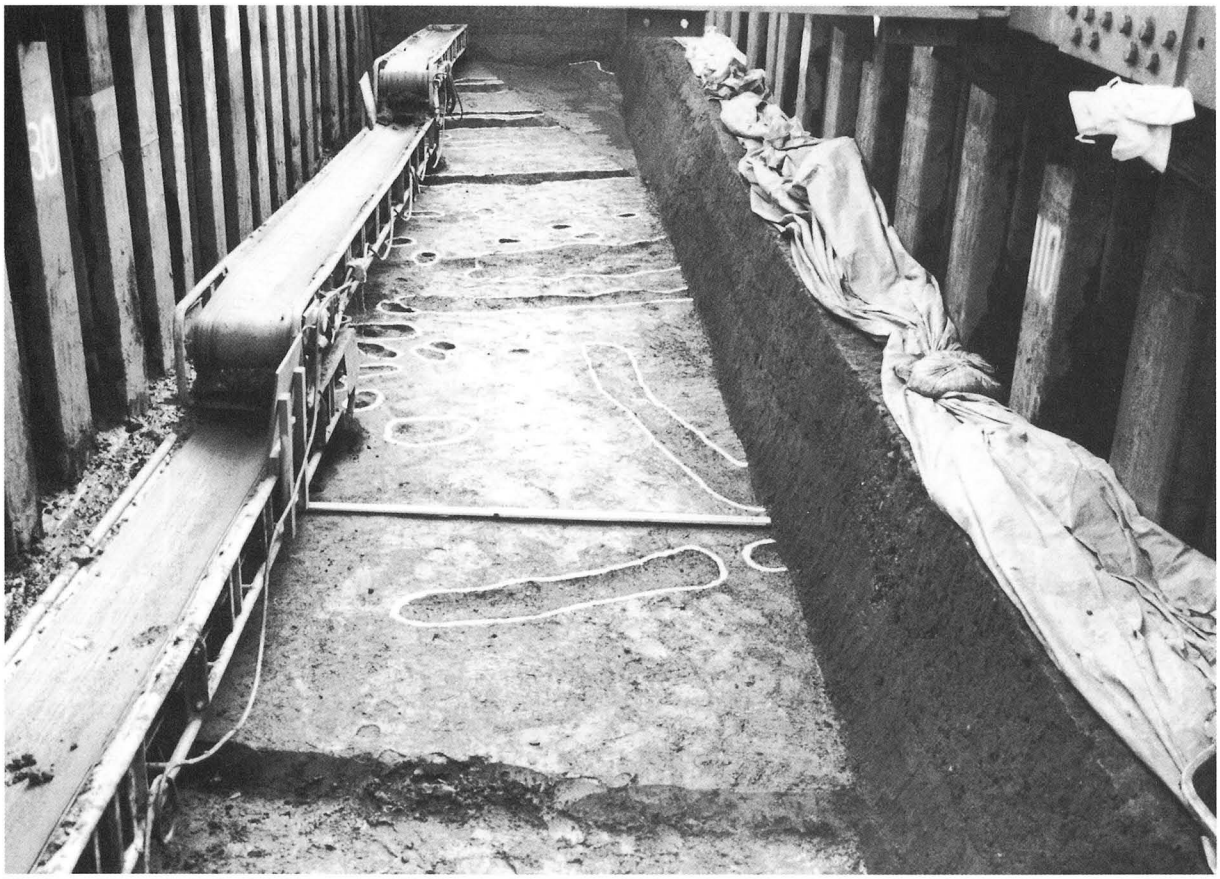
1. 第58次第13層　土坑８　12地区　西より



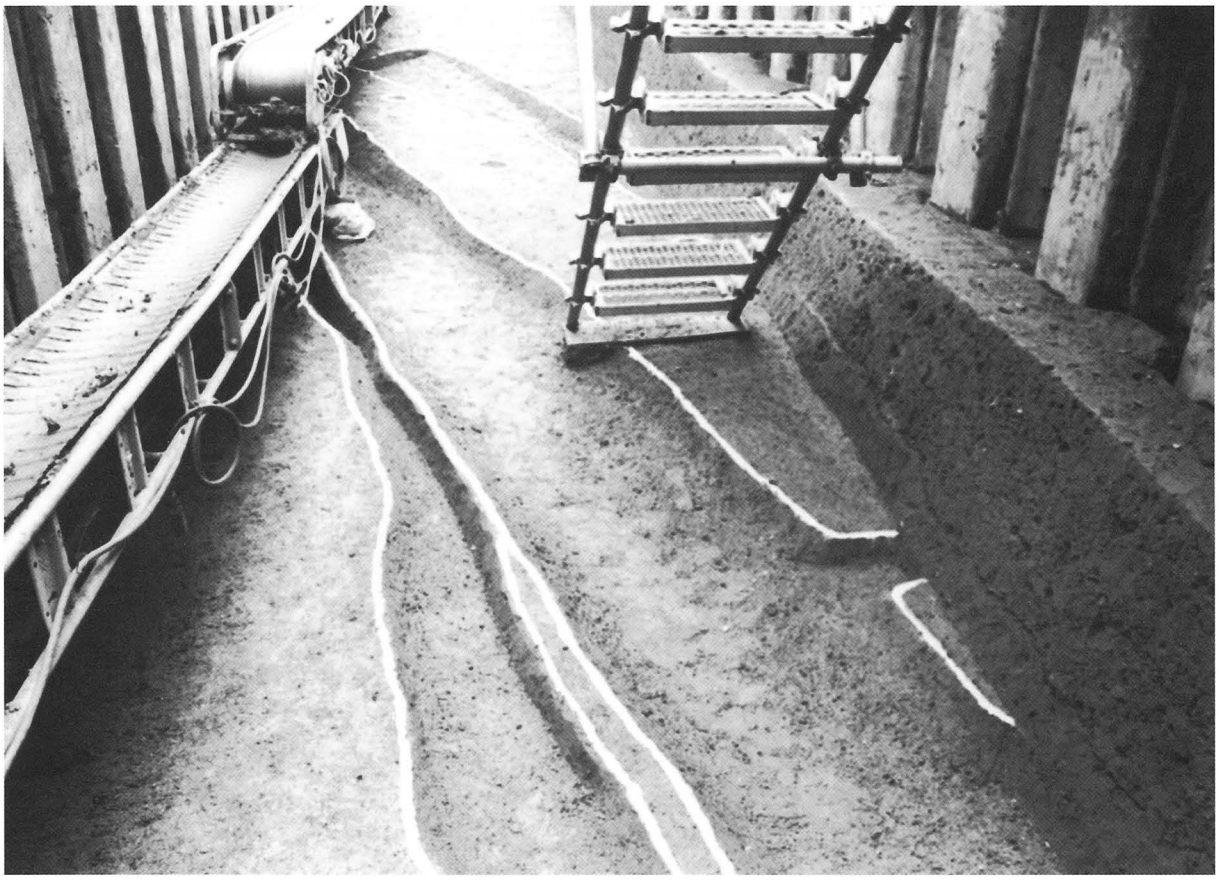
2. 第58次第12層上面遺構　９～12地区　南より



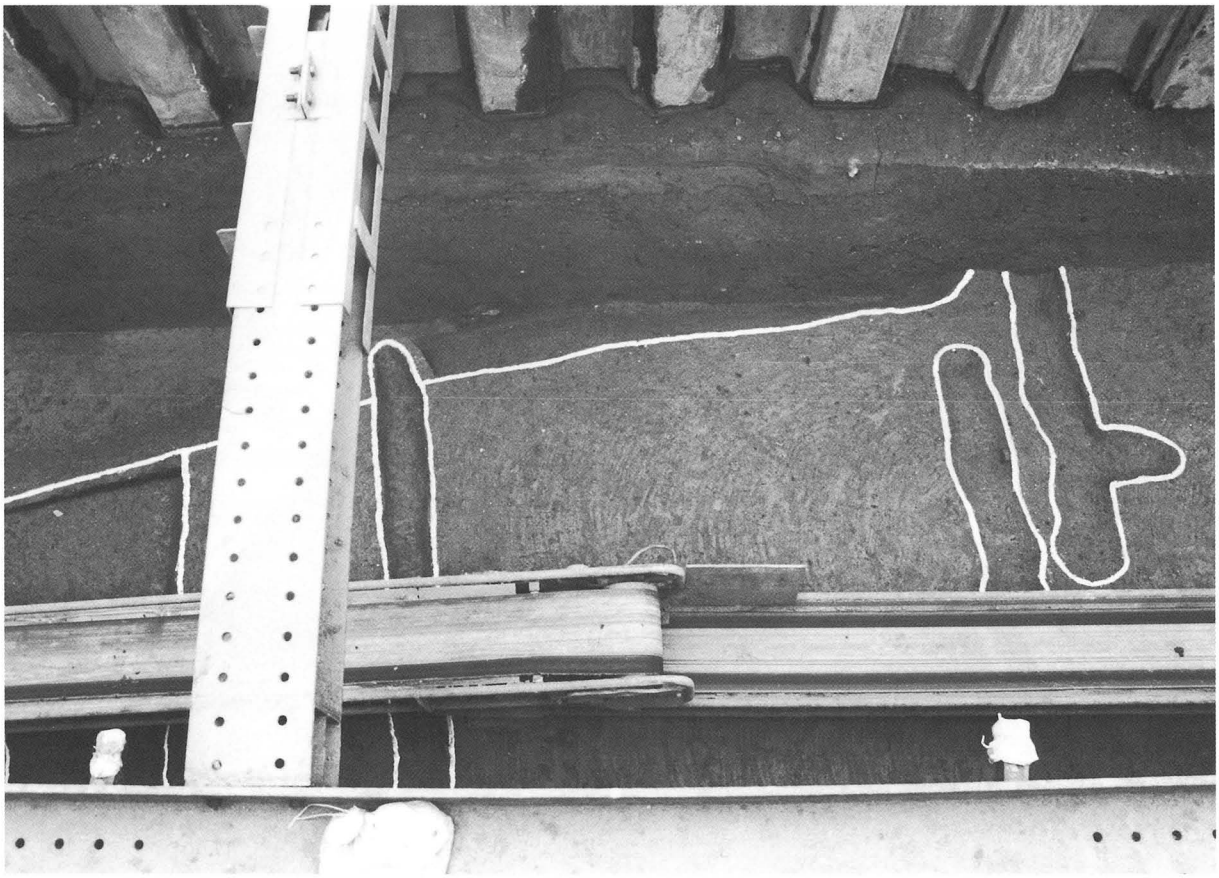
1. 第58次第11層上面遺構（1）１～３地区　南より



2. 第58次第11層上面遺構（2）12～15地区　北より

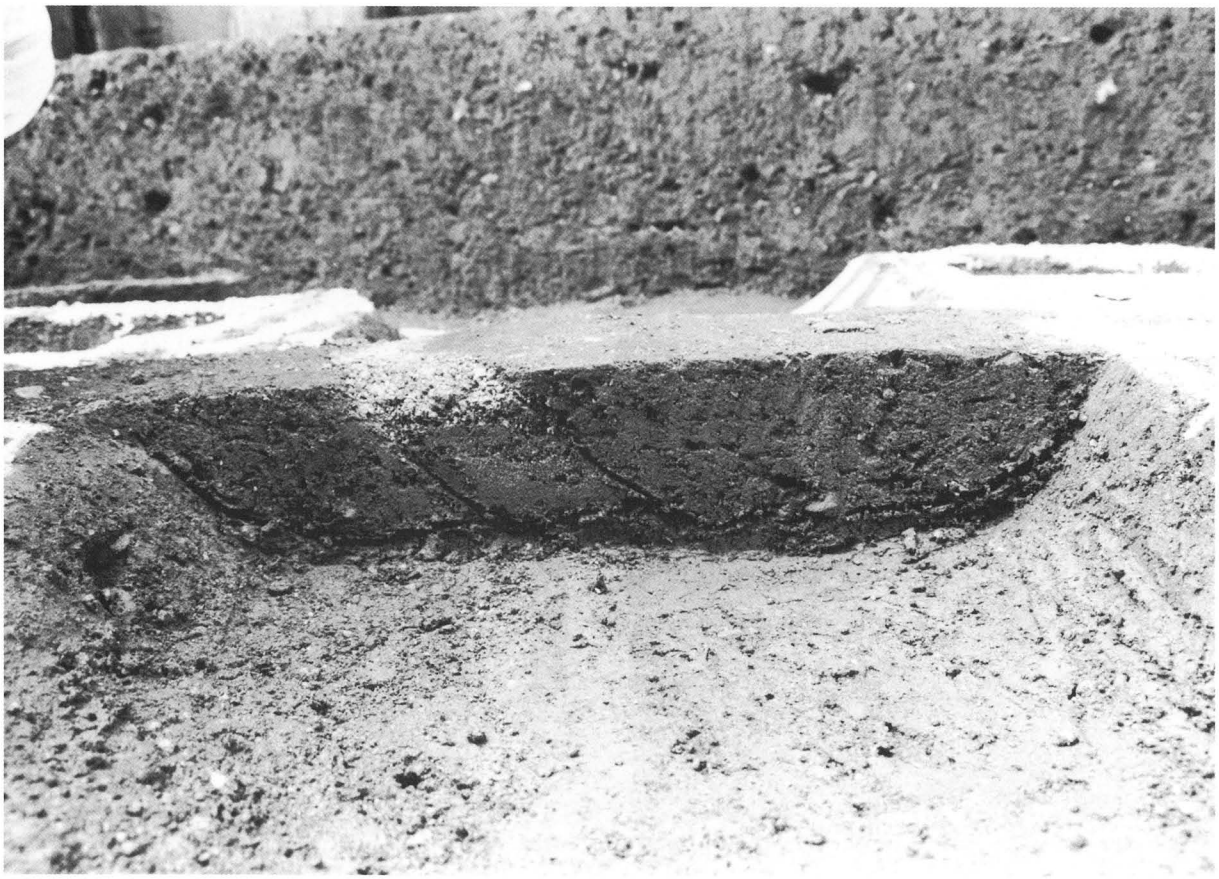


1. 第58次第９層上面遺構（1）　９～11地区　北より



2. 第58次第９層上面遺構（2）　12～14地区　東より

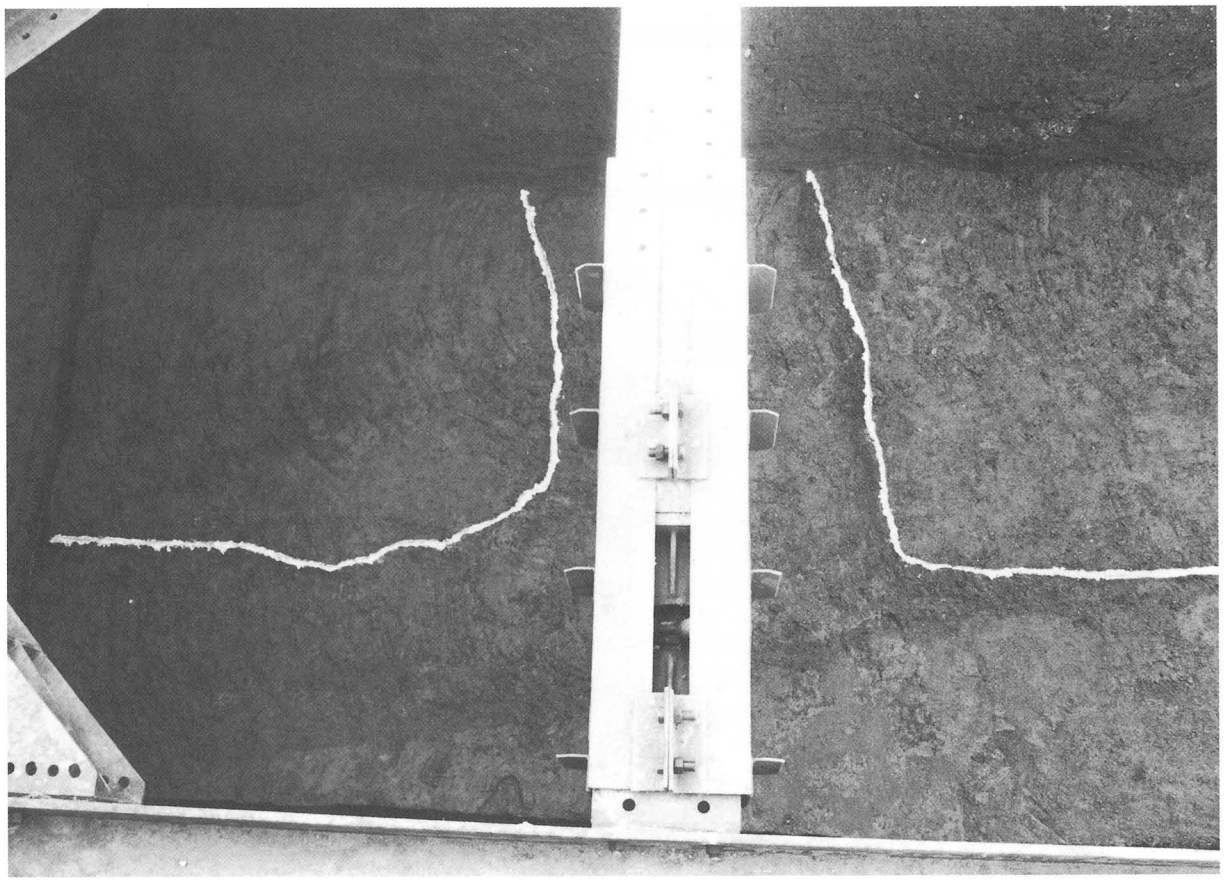
1. 第58次第８層上面遺構　９～12地区　南より



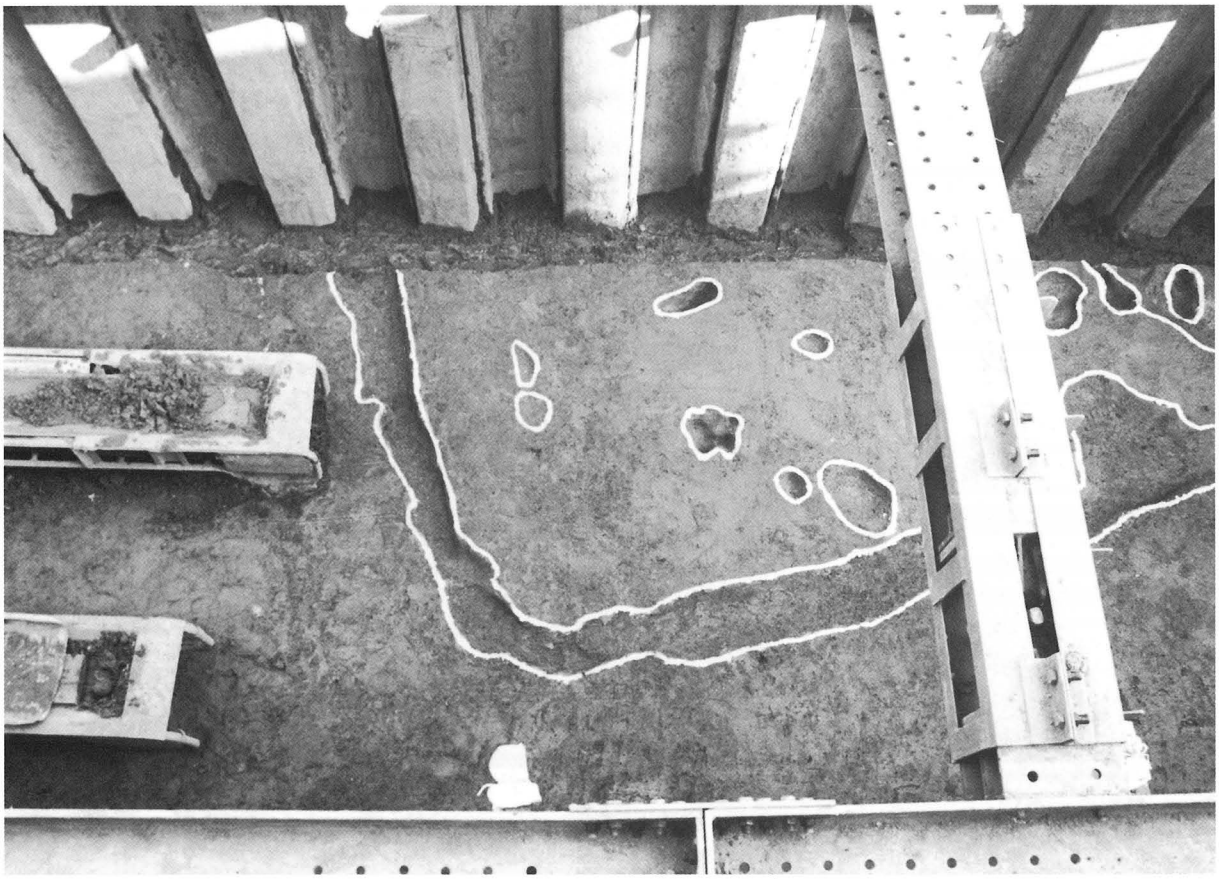
2. 第58次第８層　溝27断面　９地区　東より

図版28　遺構

1. 第58次第８′層上面遺構　10～11地区　東より



2. 第58次第７層　水田状遺構　14～15地区　東より

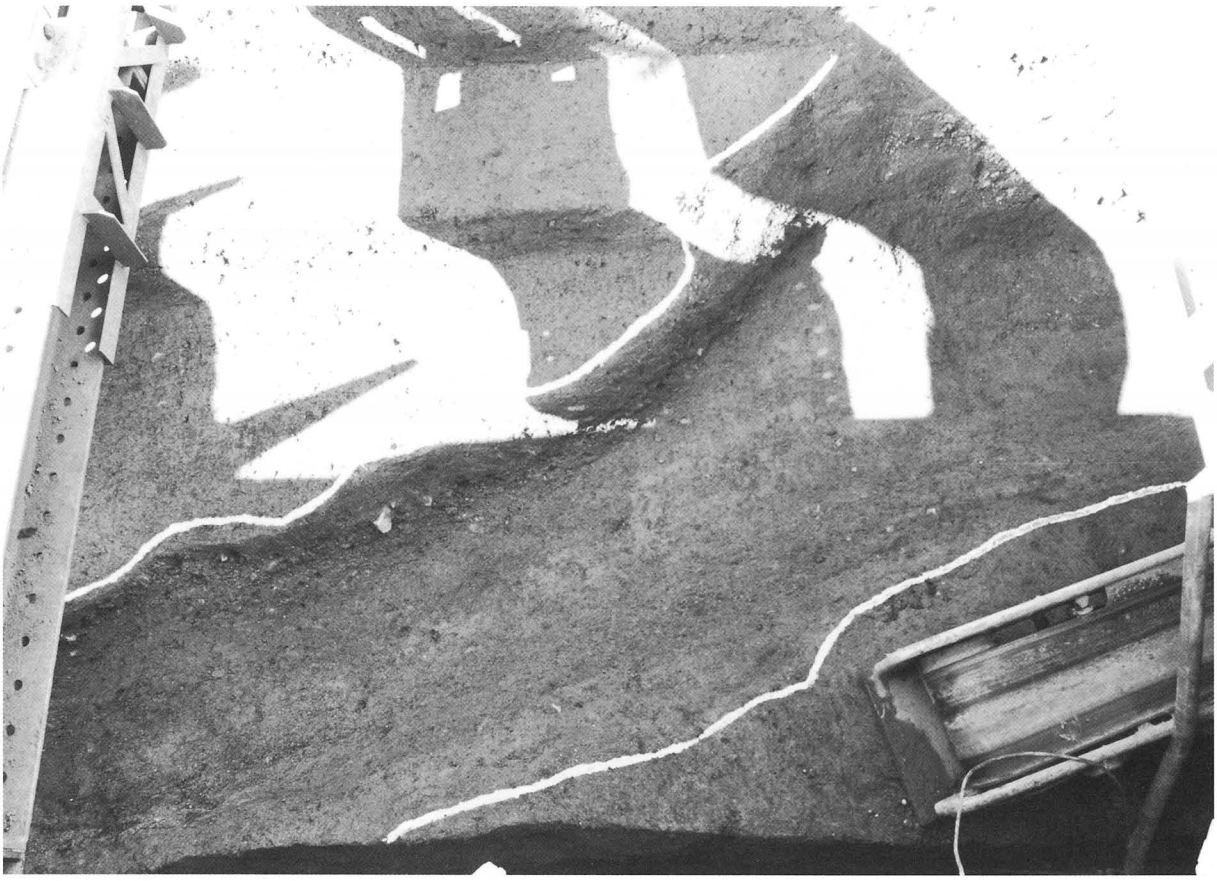


1. 第58次第7′層上面遺構（1） 13～15地区 西より

2. 第58次第7′層上面遺構（2） 13～15地区 西より

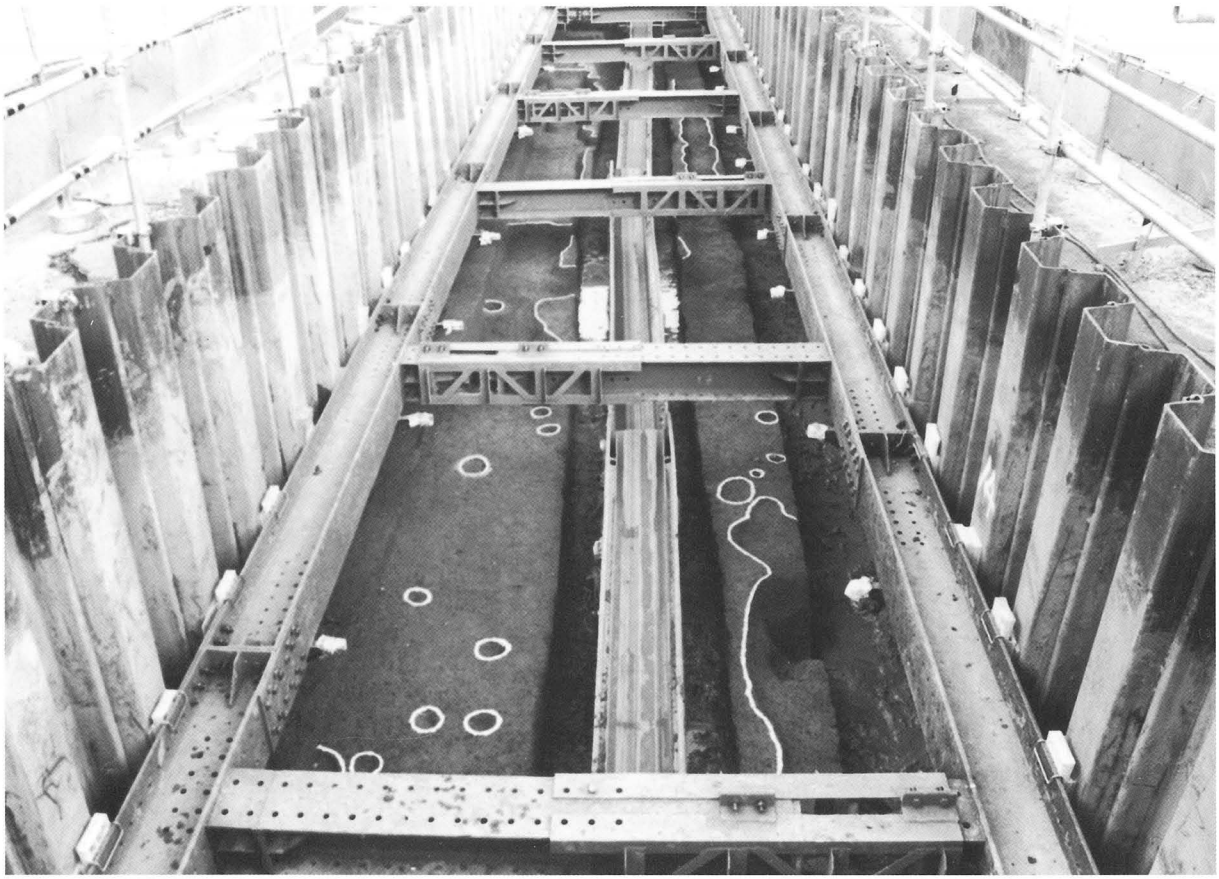
図版30　遺構

1. 第58次第５層　溝５・６　14～15地区　東より



2. 第58次第４層　自然流路１　２～３地区　東より

1. 第58次第４層上面遺構（1）　９～15地区　北より



2. 第58次第４層上面遺構（2）　９～15地区　南より

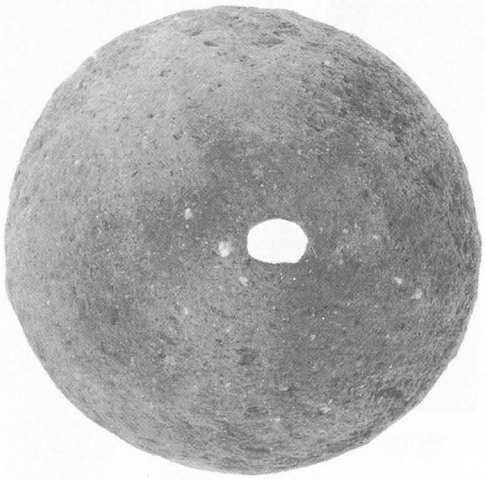
2

5

81

4

78



4′

第58次縄文土器　深鉢　大溝２出土弥生土器　甕

126

114

110

121

112

141

140

第58次大溝２・３出土弥生土器　甕蓋・高杯・甕・壺

183

144

191

172

192

164

214

215

第58次大溝４・５、溝93・95出土弥生土器　壷・鉢・高杯・甕蓋

218

201

221

226

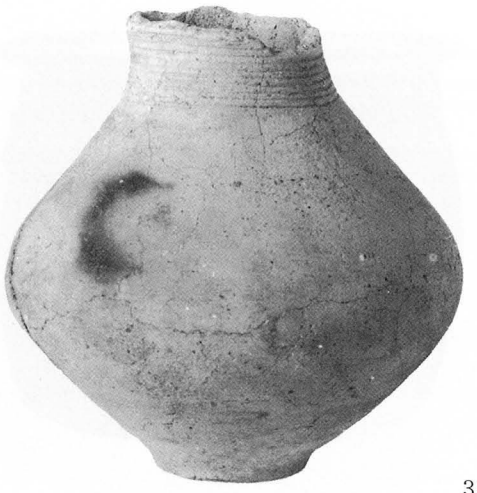
263

232

279

283

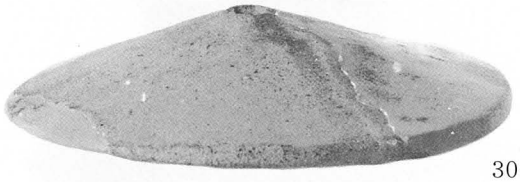
第58次溝95・106、土坑25・36・41出土弥生土器　甕・高杯・壷・脚部



326

303′

325



303

320

323

312

第58次土坑42～44・46出土弥生土器　細頸壷・壷蓋・高杯・壷・甕

338

324

327

334

332

第58次土坑46・49出土弥生土器　壷・細頸壷・甕

354′

339

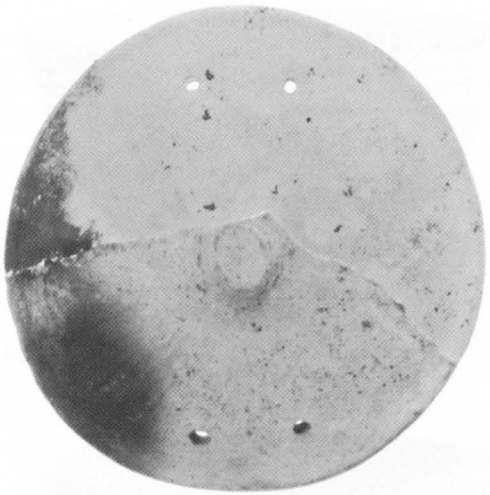
354

347

467

362

第58次土坑49・53・73、ピット53、第16層出土弥生土器　水差形土器・甕・壷・高杯・細頸壷



475′

432

475

501

502

516

507

514

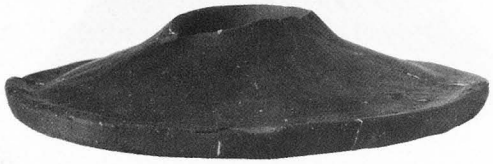
第58次第16層出土弥生土器　壷・高杯・壷蓋

524

524′

519

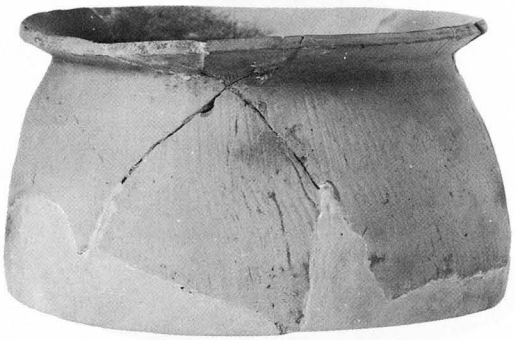
520



595

545

624



576

第58次第16・16e・17層出土弥生土器　鉢・甕・高杯・壷

632

619

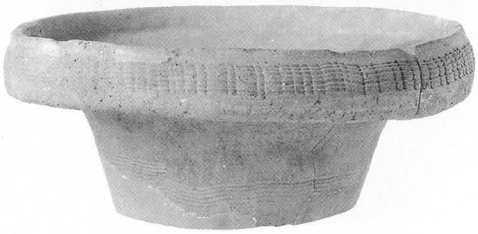
634

602

655

626

625


689

647

第58次第17・18層出土弥生土器　壷・鉢・甕・壷蓋・甕蓋

736′

724

736

719

764

702

第58次第14～18層出土弥生土器　甕・壷・鉢

751

741

771

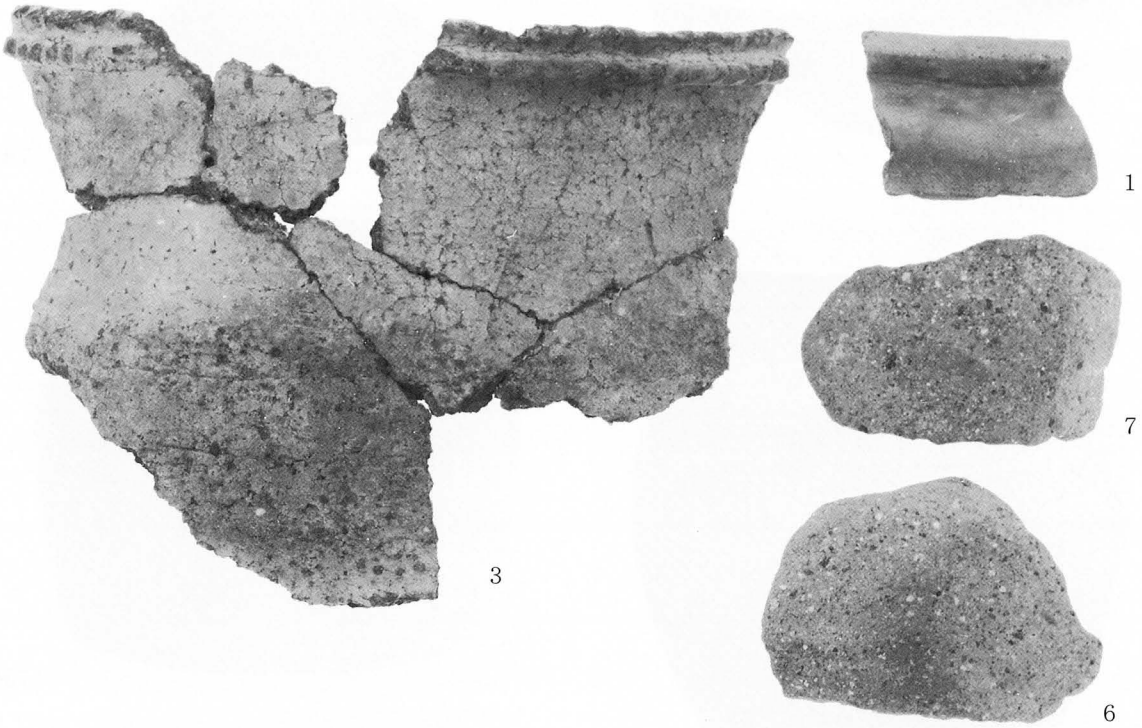
758

768

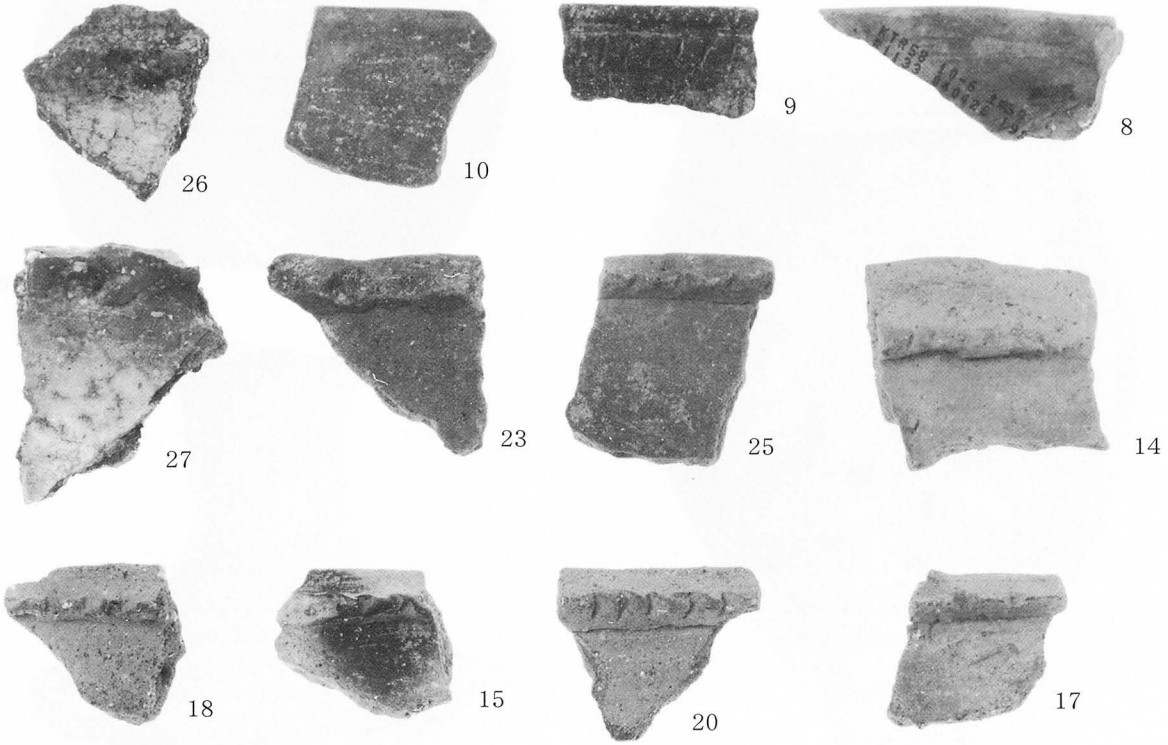
770

747

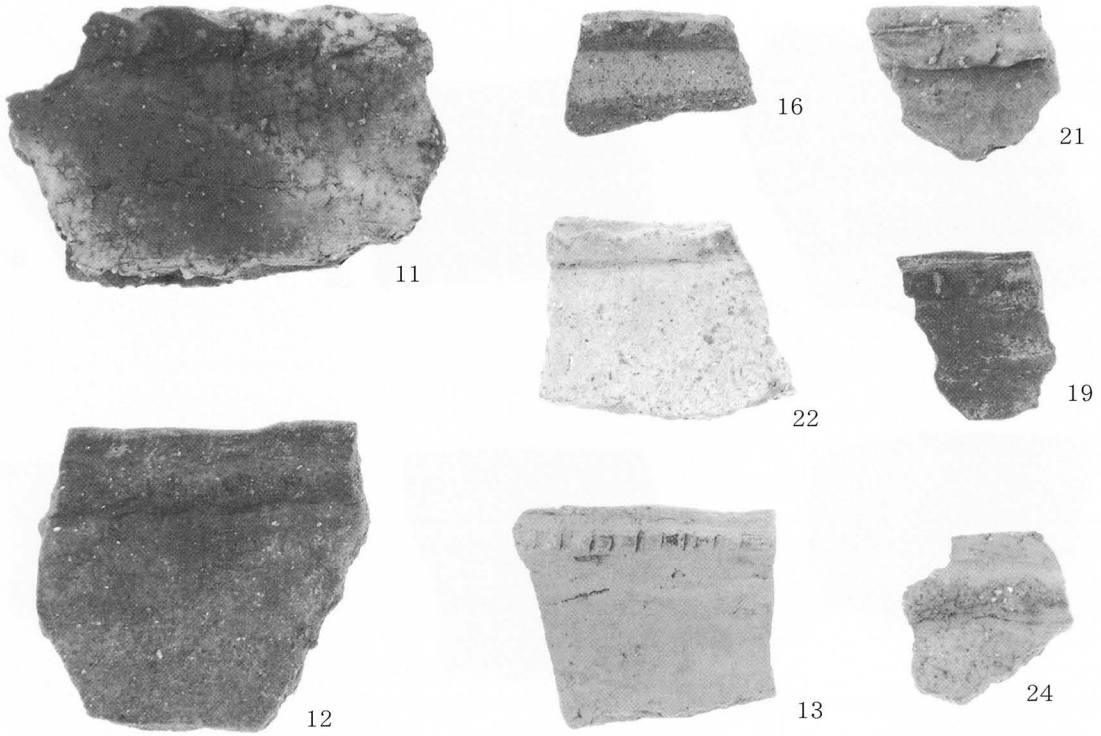
第58次第14～18層出土弥生土器　壷蓋・甕・高杯



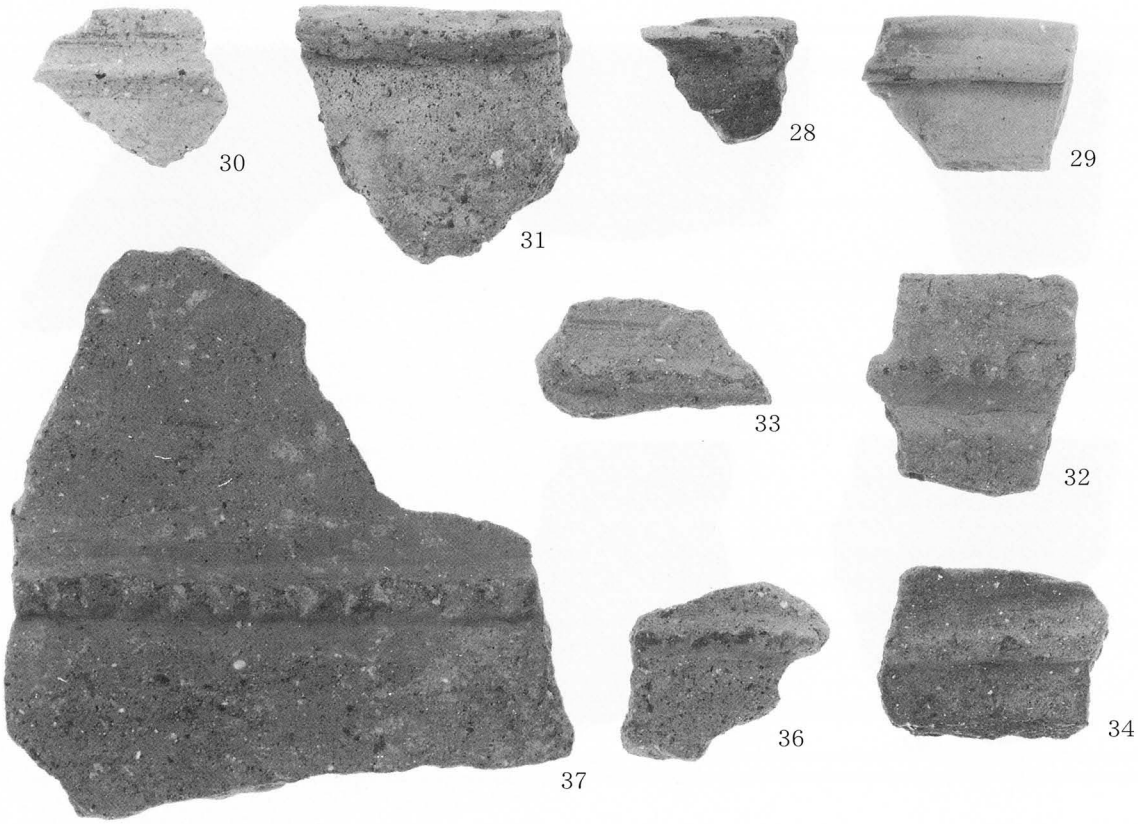
1. 第58次縄文土器　深鉢・浅鉢



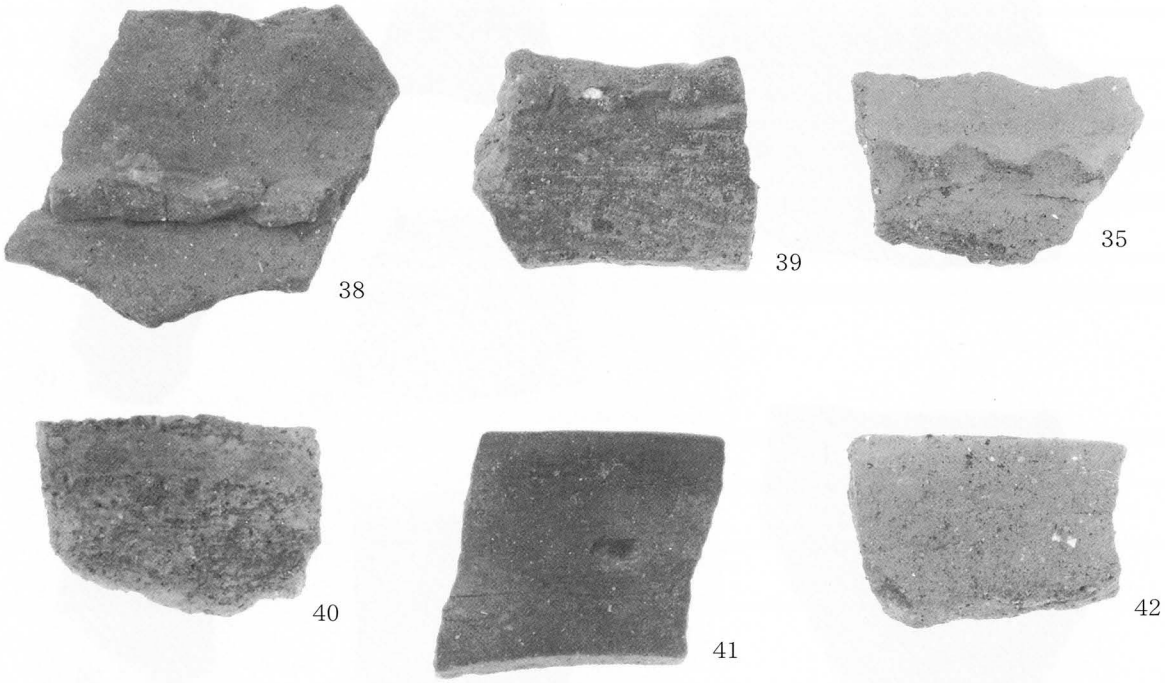
2. 第58次縄文土器　深鉢・浅鉢



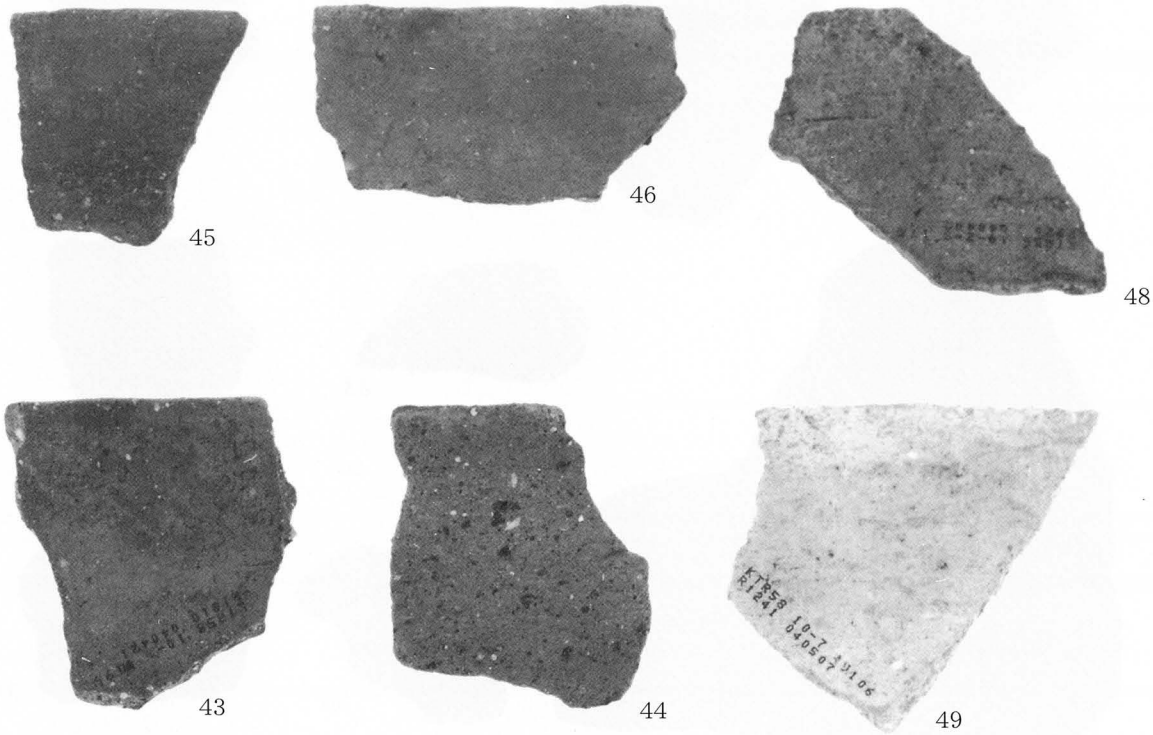
1. 第58次縄文土器　深鉢



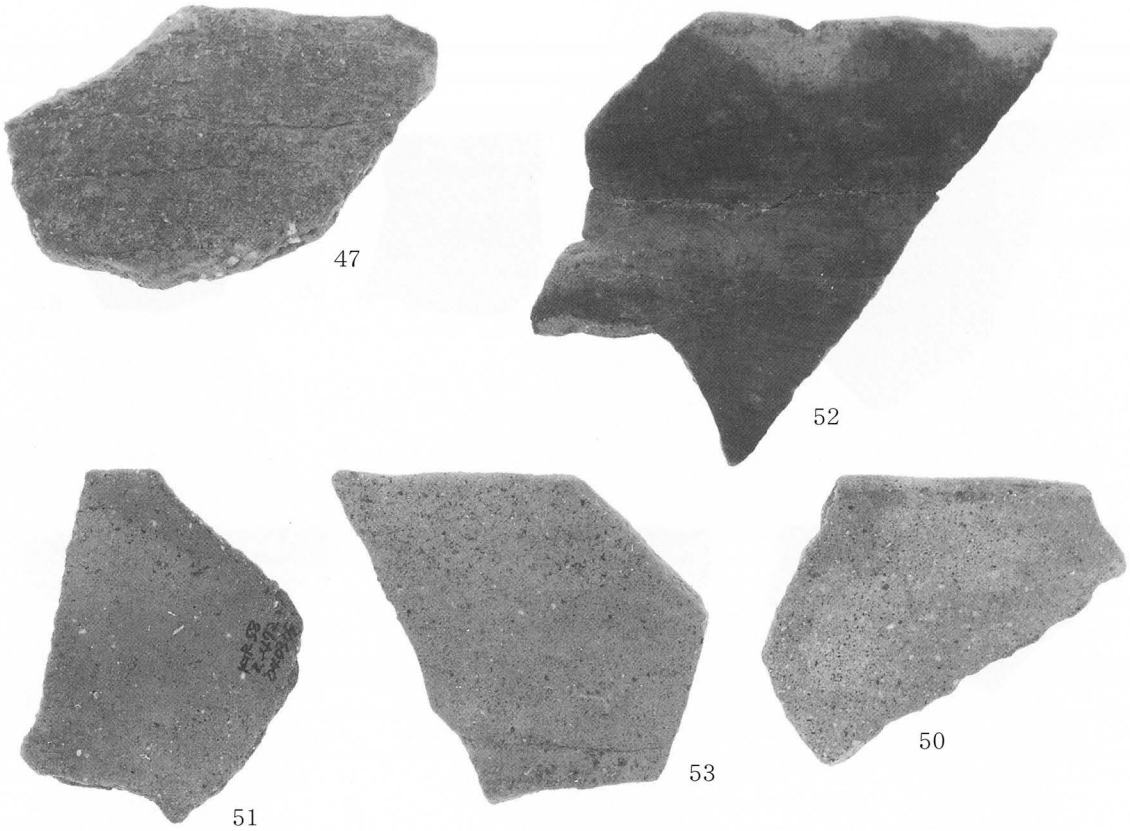
2. 第58次縄文土器　深鉢



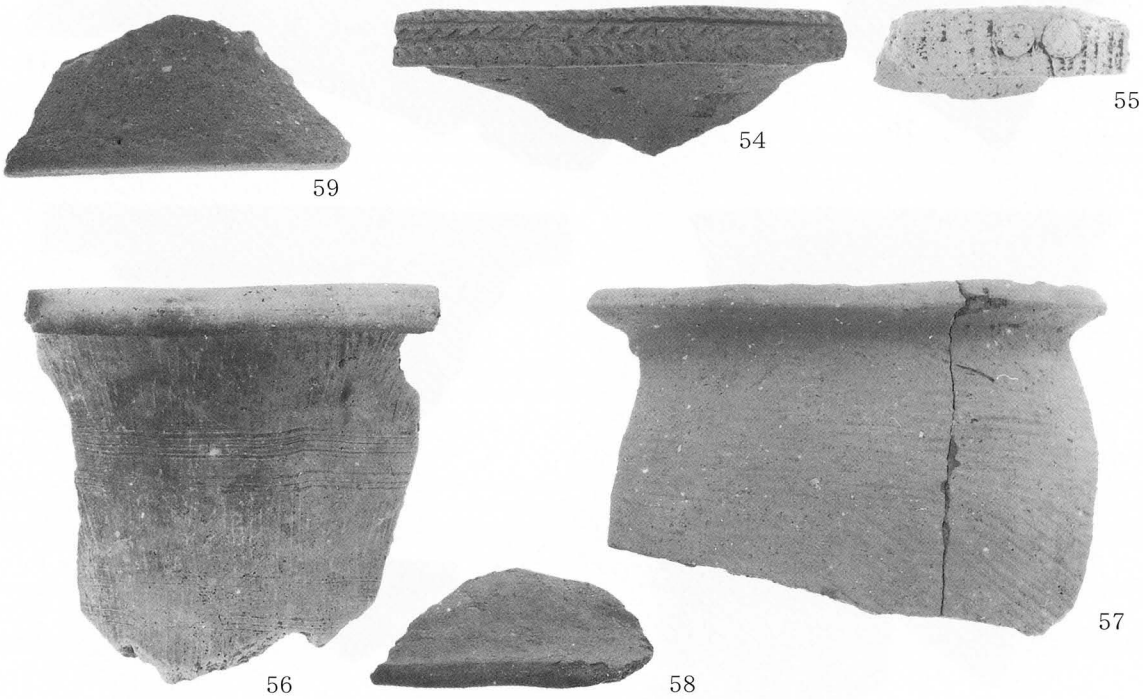
1. 第58次縄文土器　深鉢



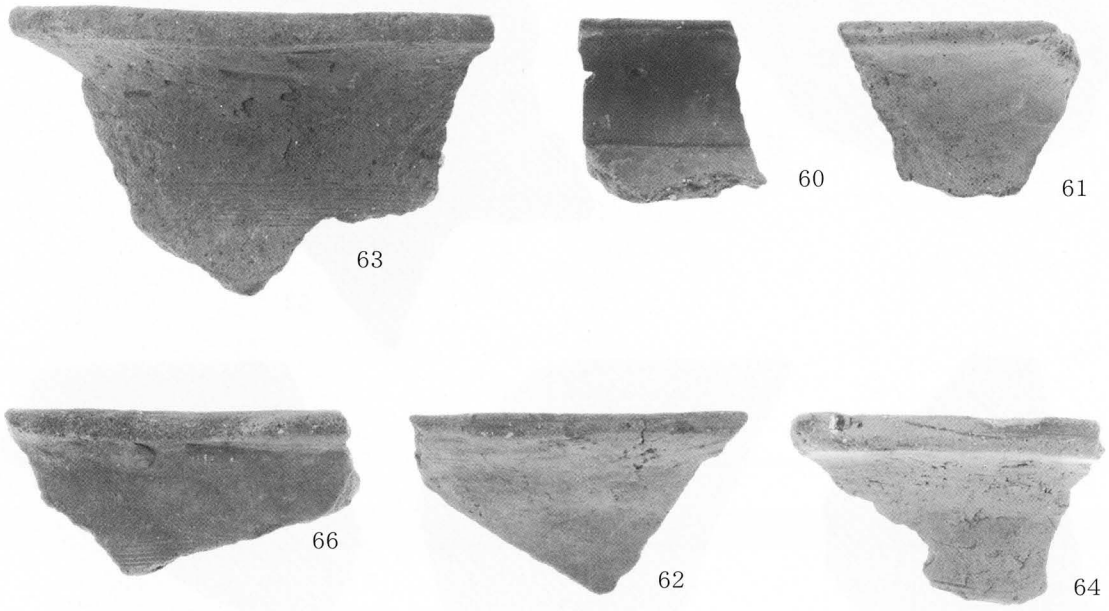
2. 第58次縄文土器　深鉢



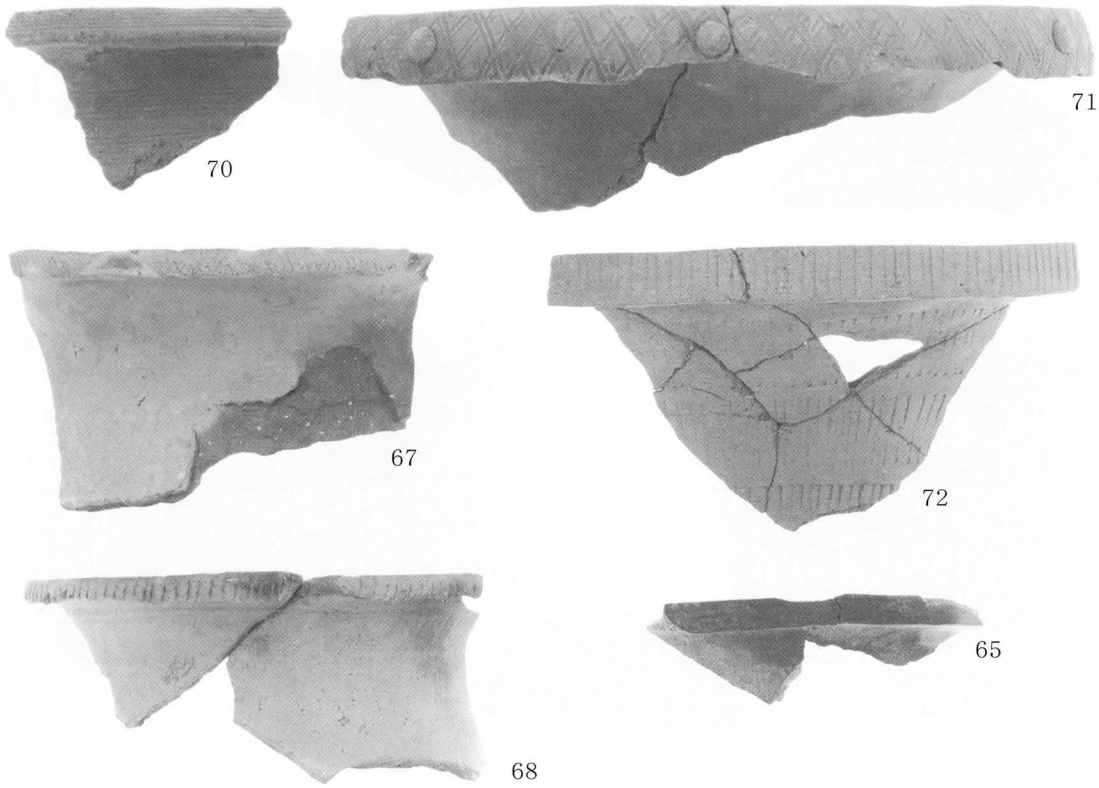
1. 第58次縄文土器　深鉢



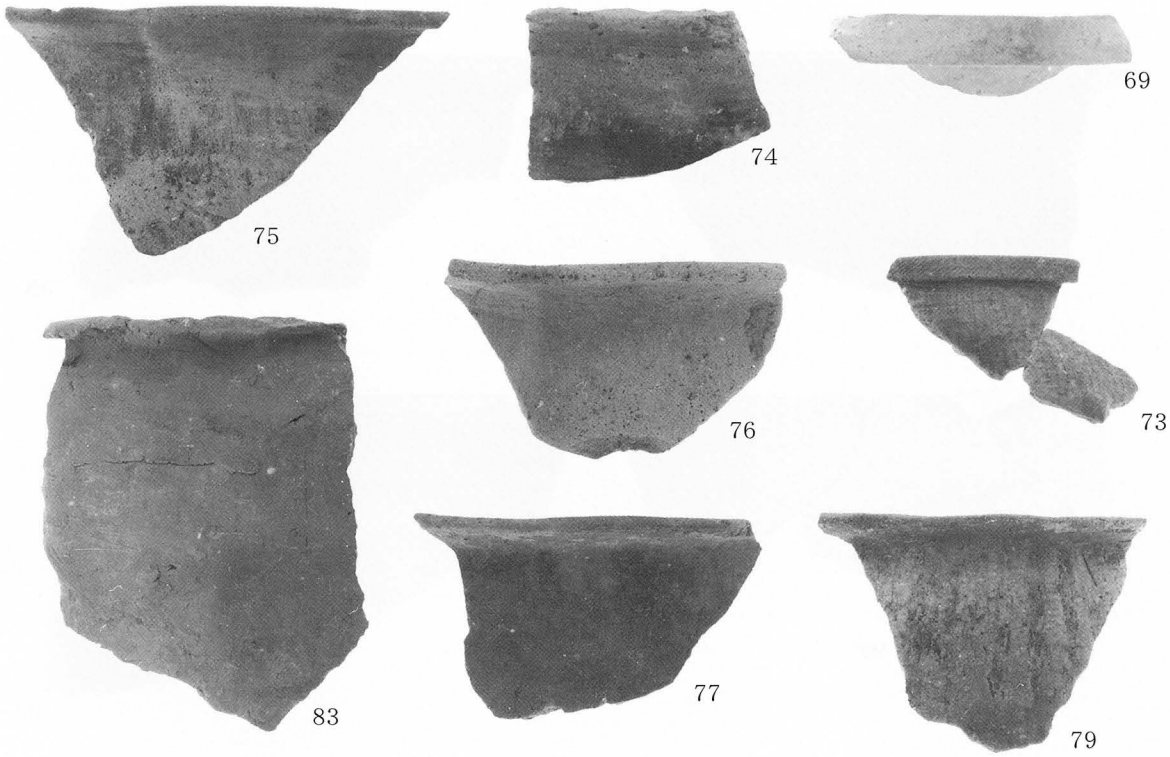
2. 第58次大溝１出土弥生土器　壷・甕・甕蓋・脚部



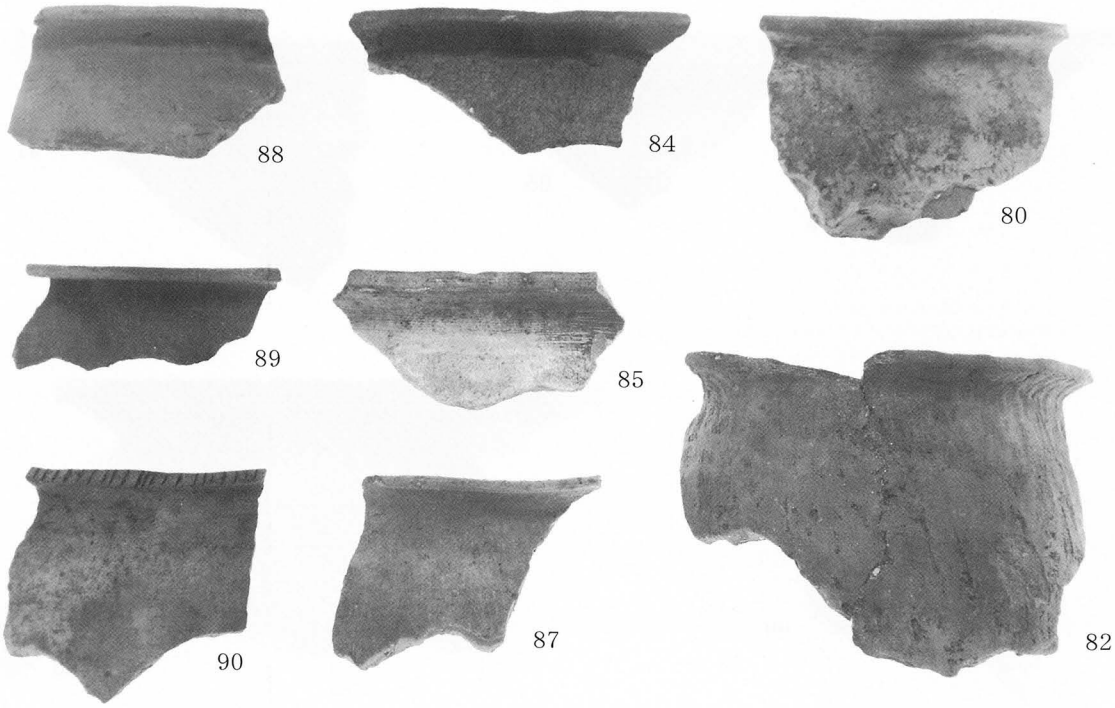
1. 第58次大溝２出土弥生土器　壷



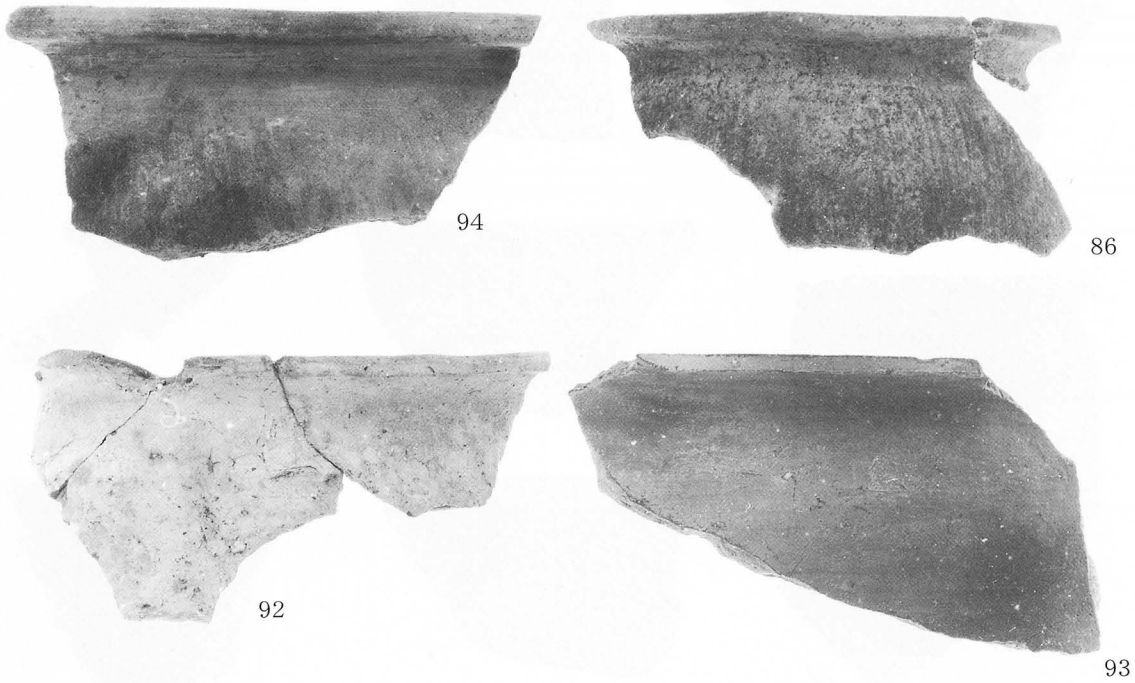
2. 第58次大溝２出土弥生土器　壷



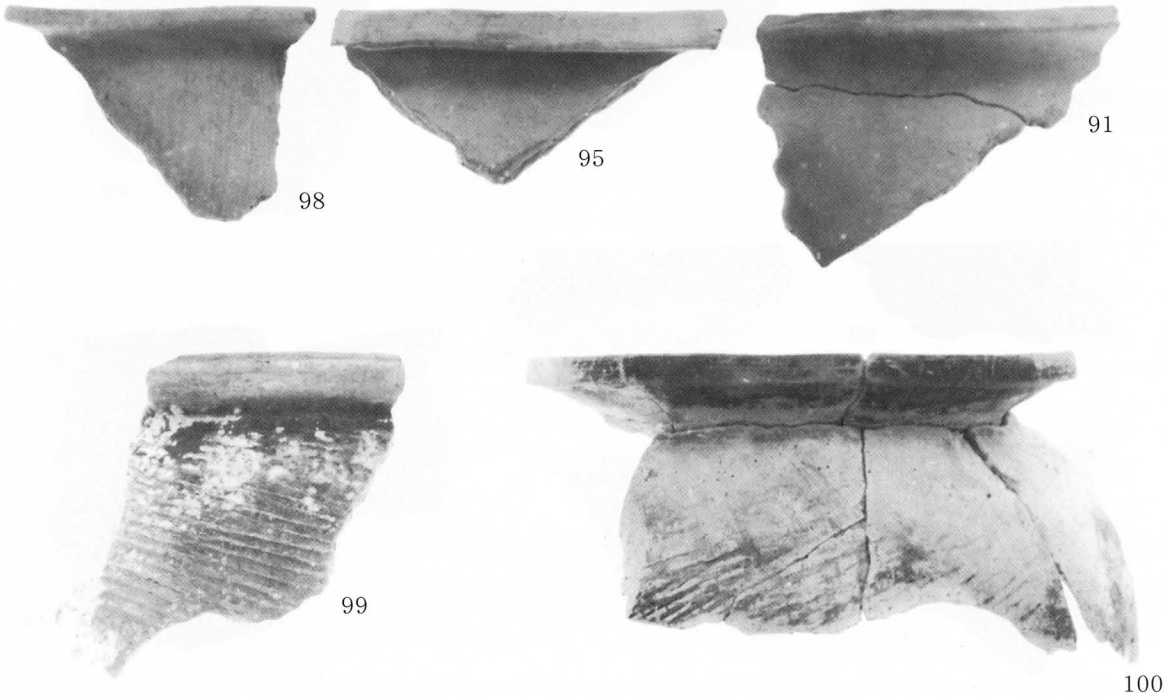
1. 第58次大溝２出土弥生土器　壷・無頸壷・甕



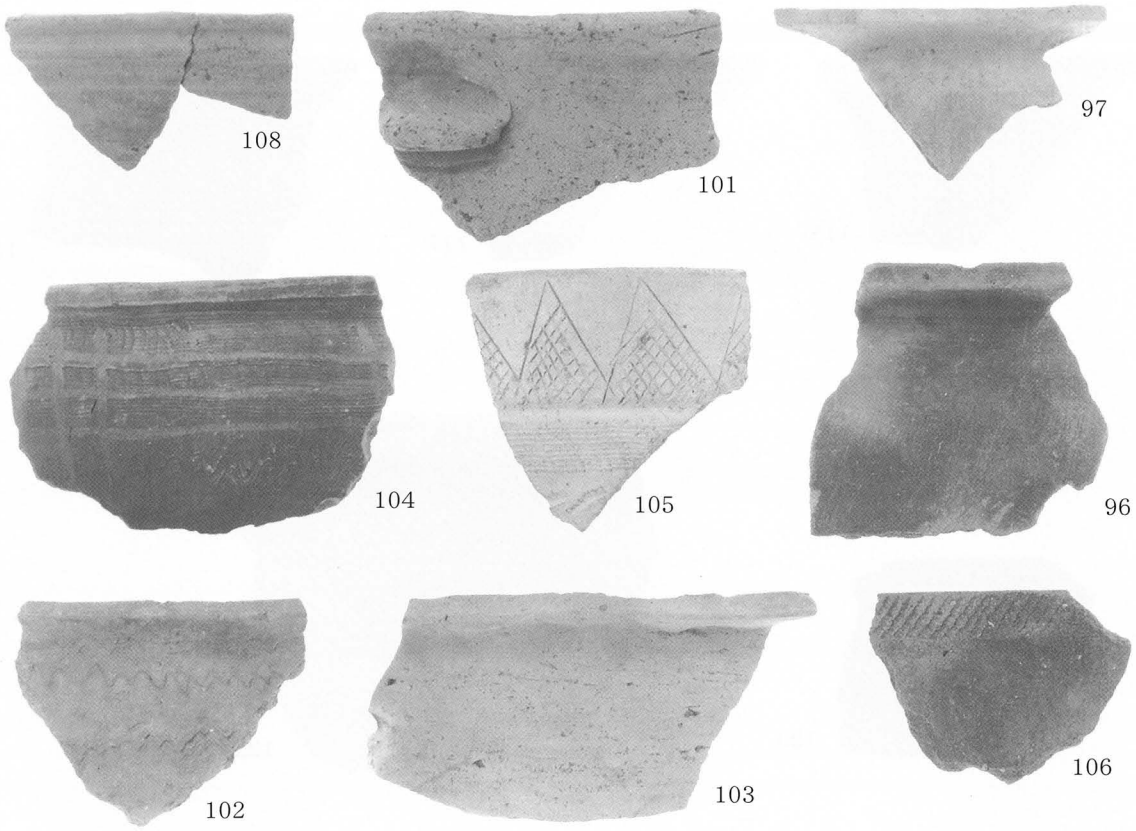
2. 第58次大溝２出土弥生土器　甕



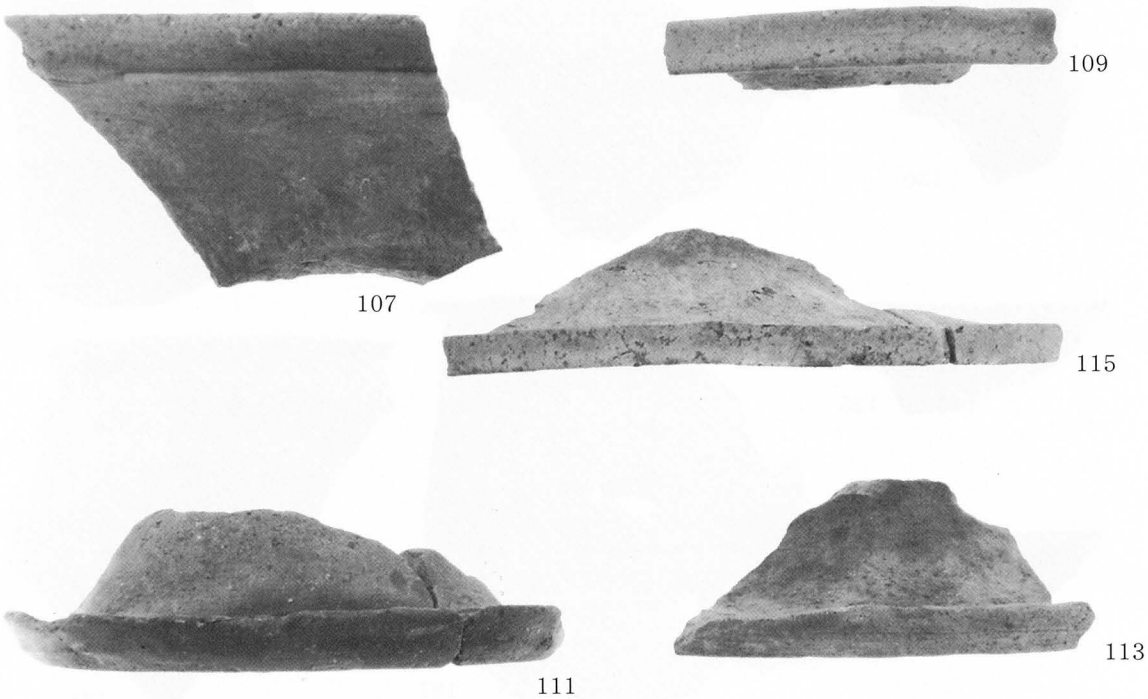
1. 第58次大溝２出土弥生土器　甕



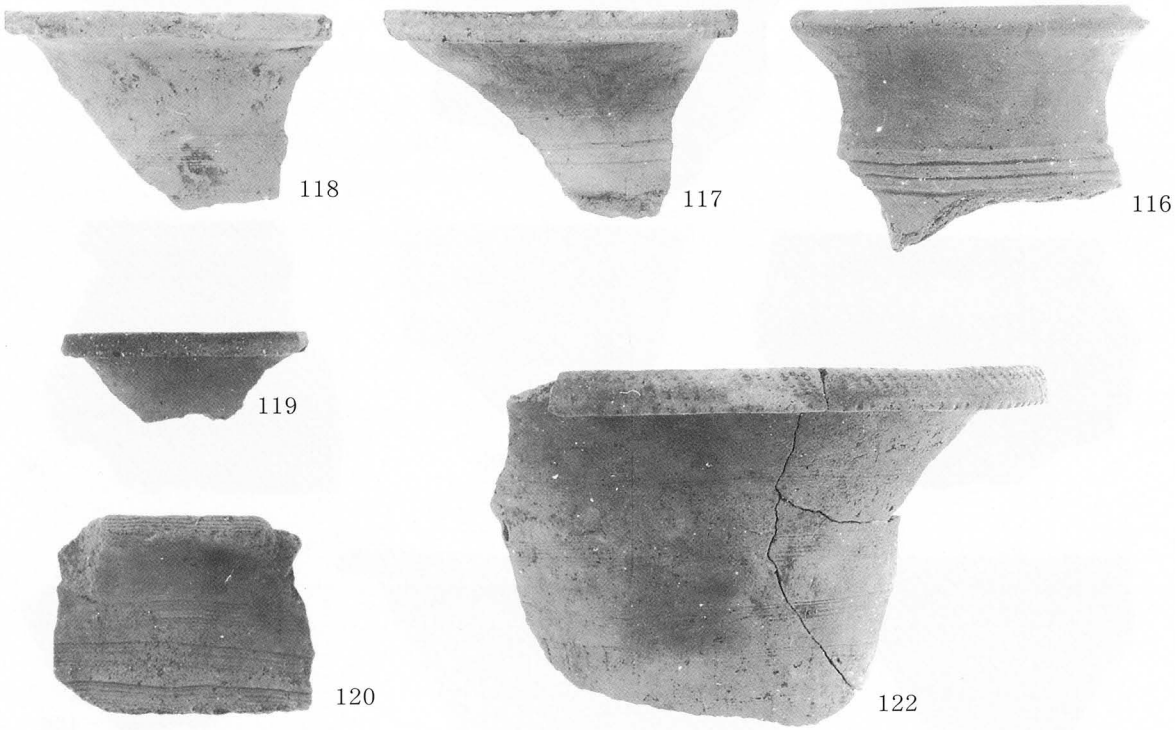
2. 第58次大溝２出土弥生土器　甕



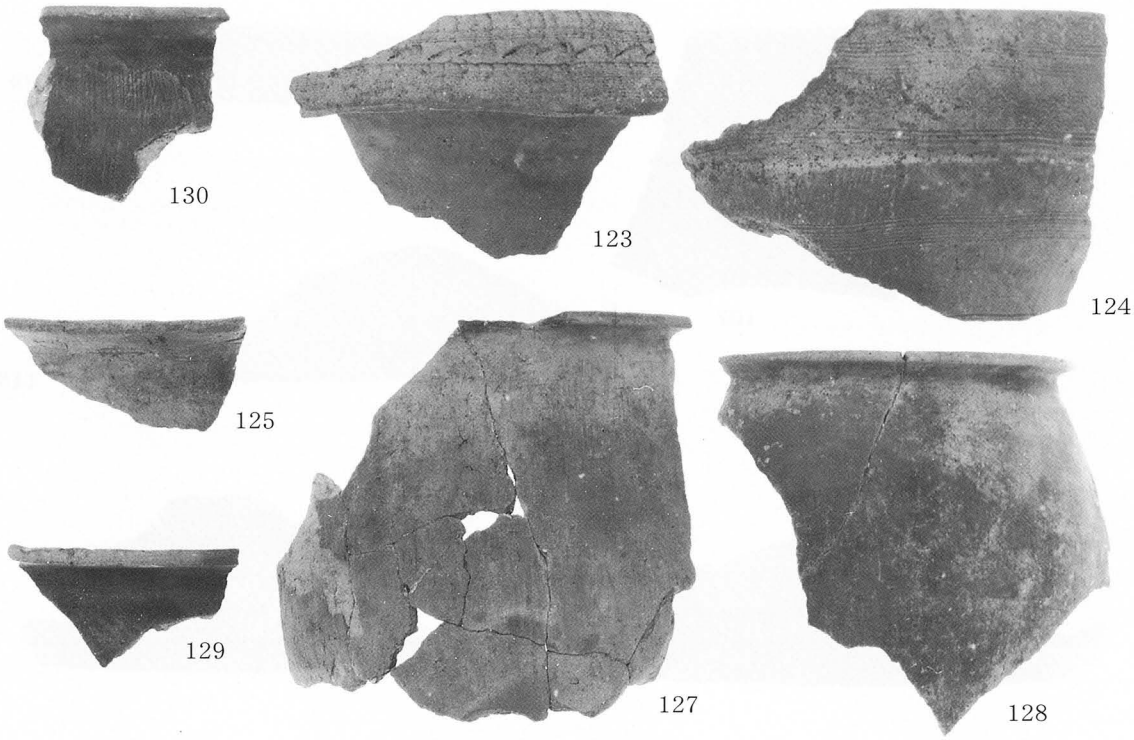
1. 第58次大溝２出土弥生土器　甕・鉢・高杯



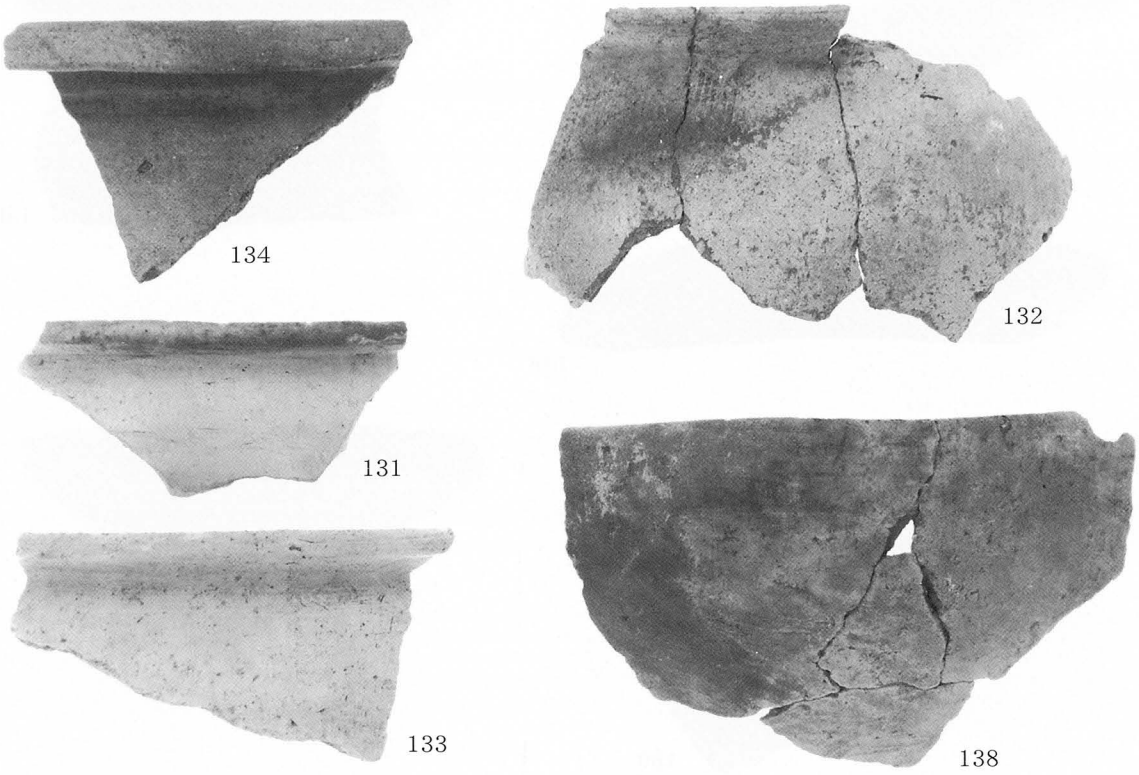
2. 第58次大溝２出土弥生土器　鉢・高杯



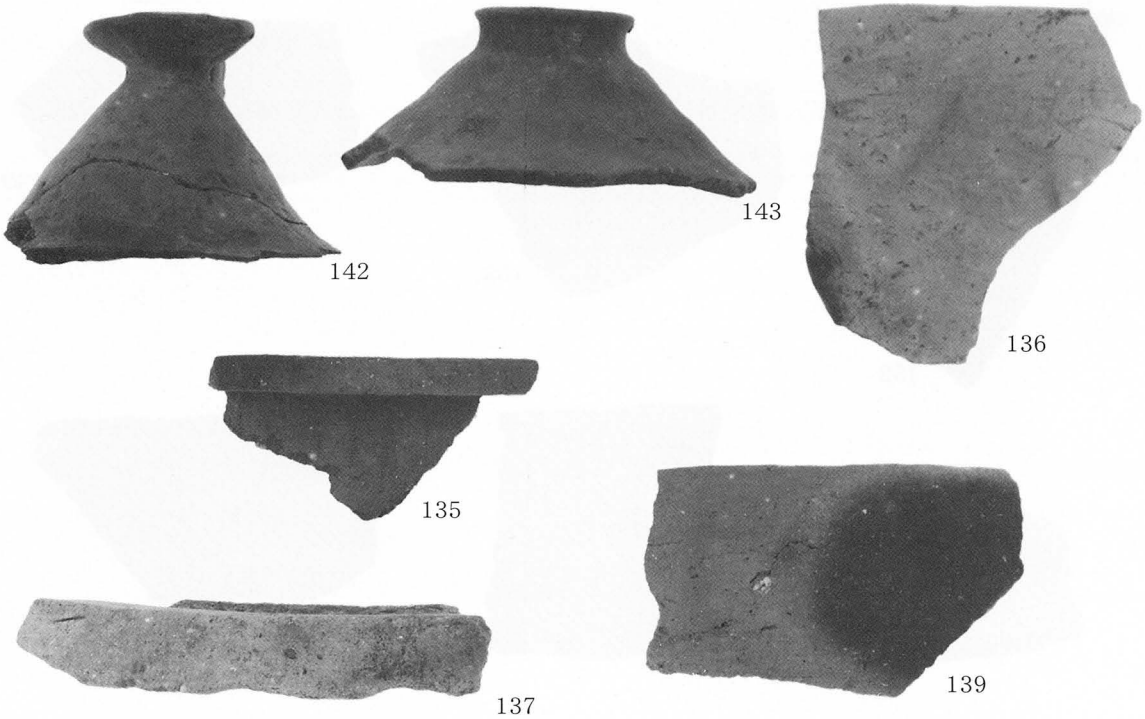
1. 第58次大溝３出土弥生土器　壷



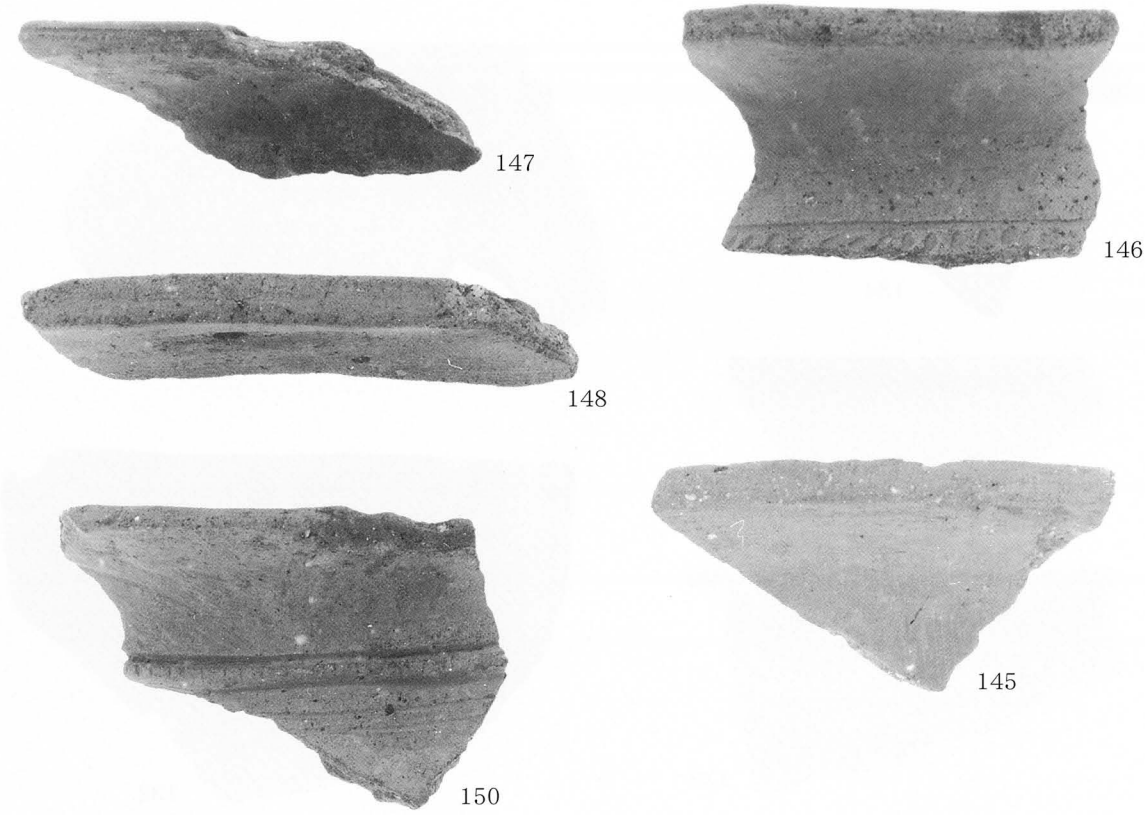
2. 第58次大溝３出土弥生土器　壷・細頸壷・甕



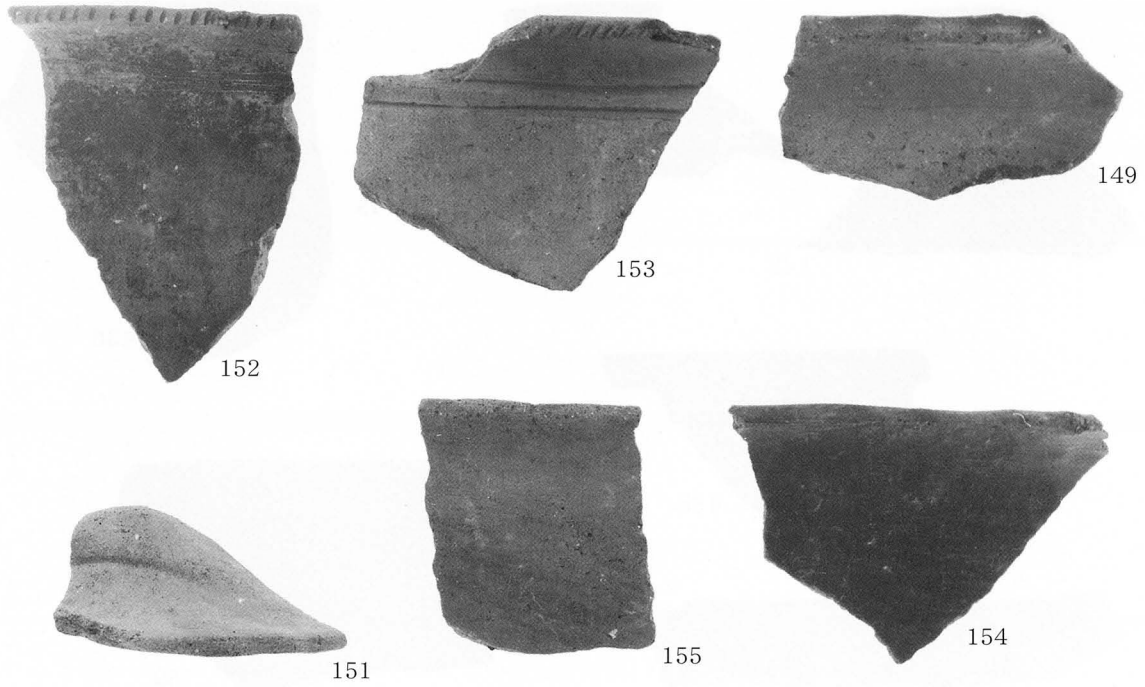
1. 第58次大溝３出土弥生土器　甕・高杯



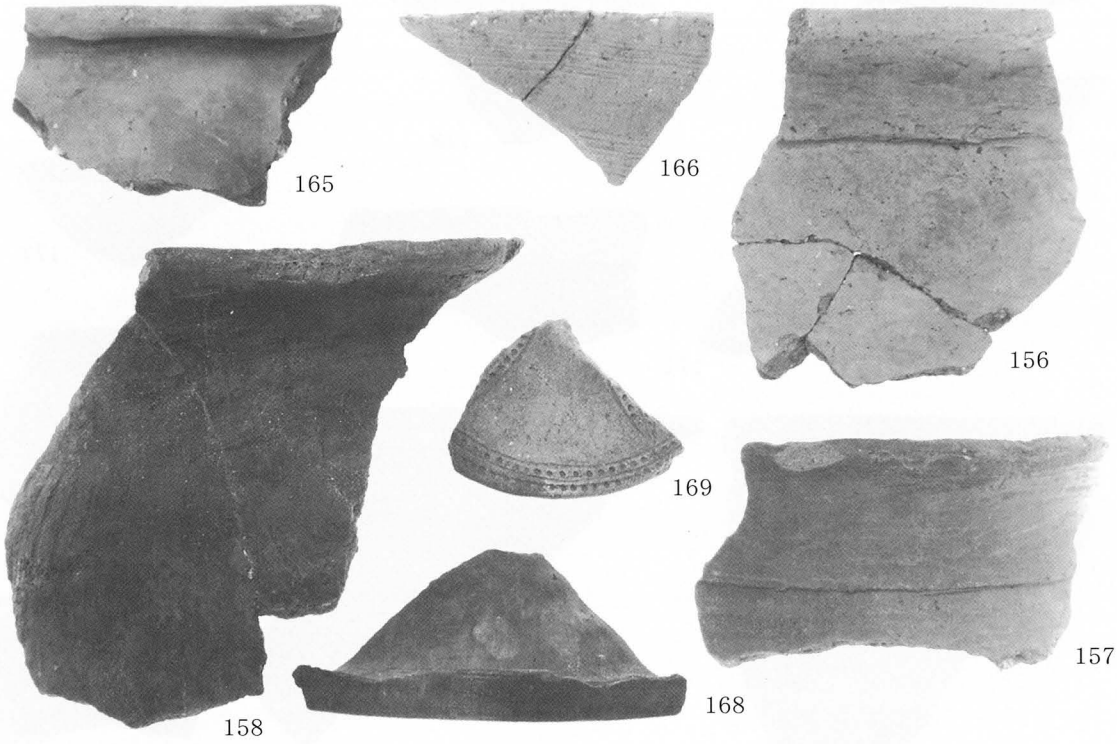
2. 第58次大溝３出土弥生土器　高杯・鉢・甕蓋



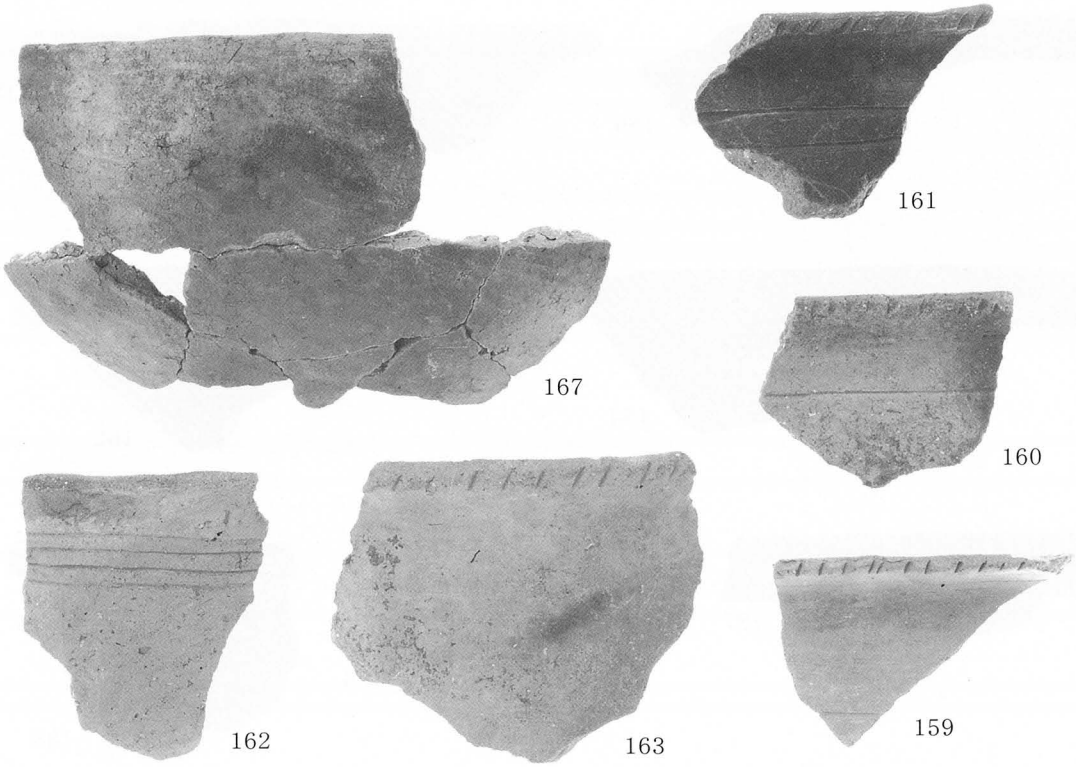
1. 第58次大溝４出土弥生土器　壷



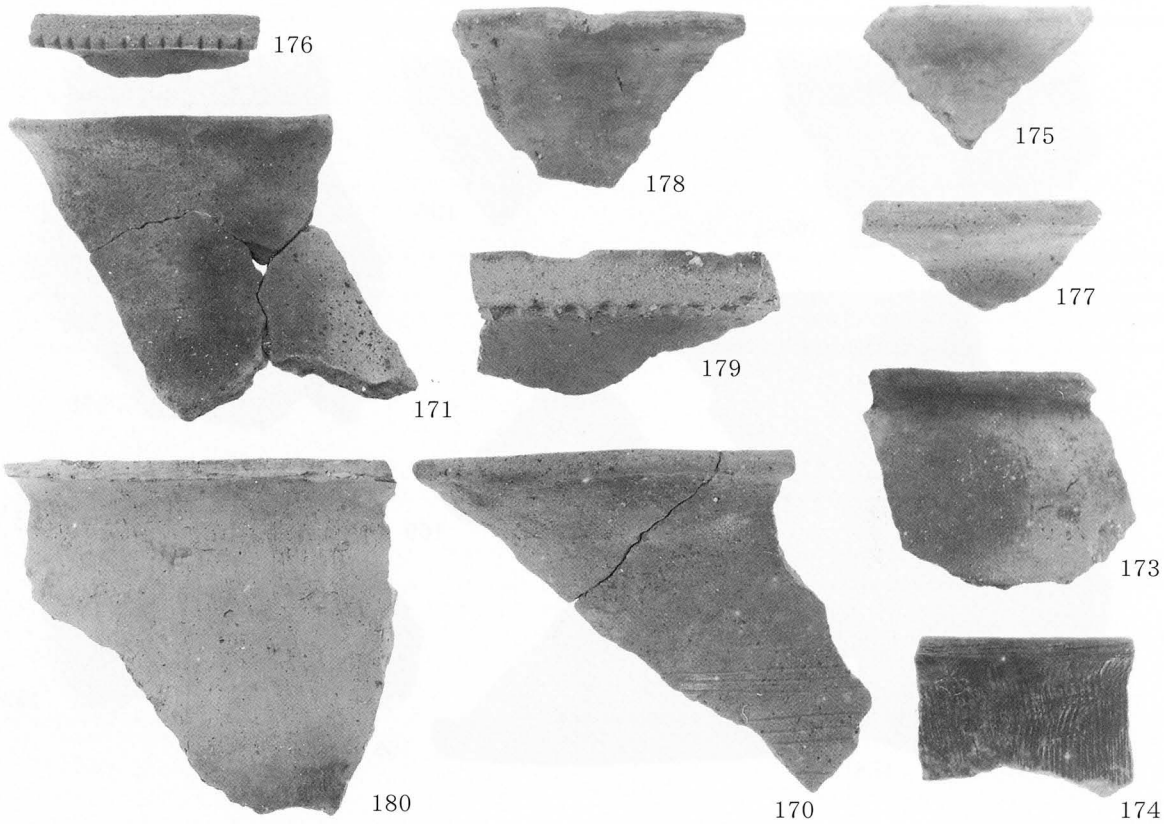
2. 第58次大溝４出土弥生土器　壷・甕・壷蓋・鉢



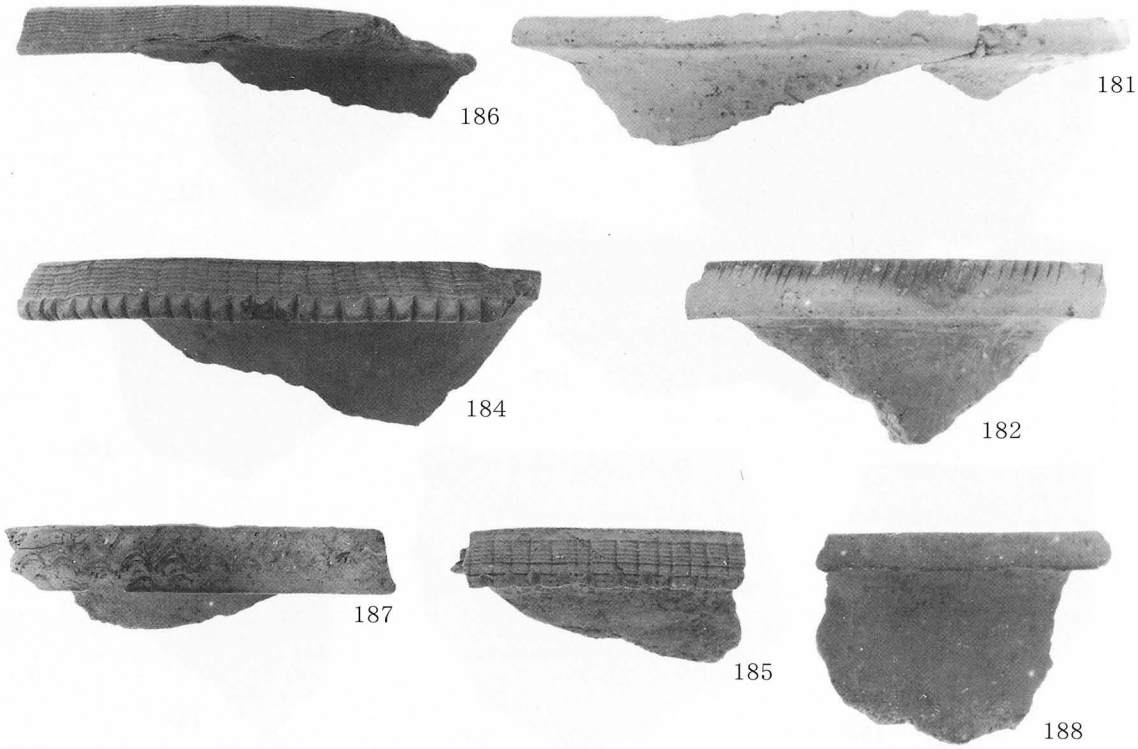
1. 第58次大溝５出土弥生土器　壷・鉢・壷蓋・水差形土器・高杯



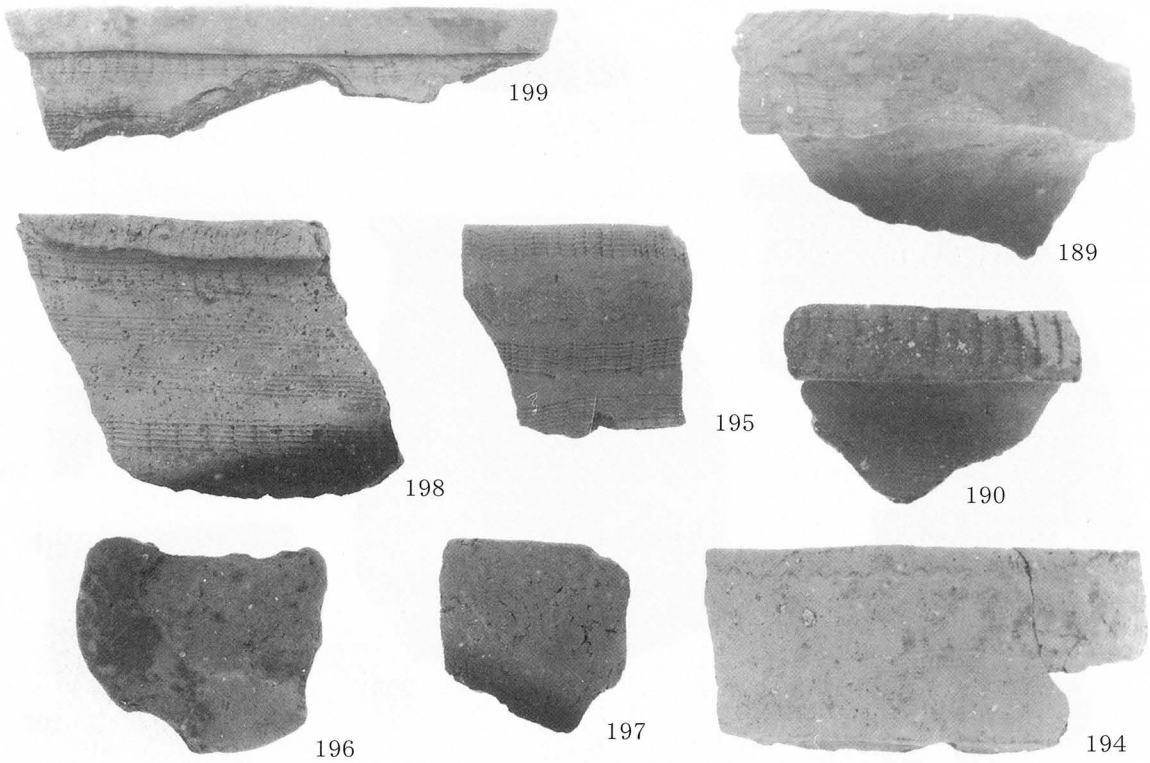
2. 第58次大溝５出土弥生土器　高杯・鉢・甕



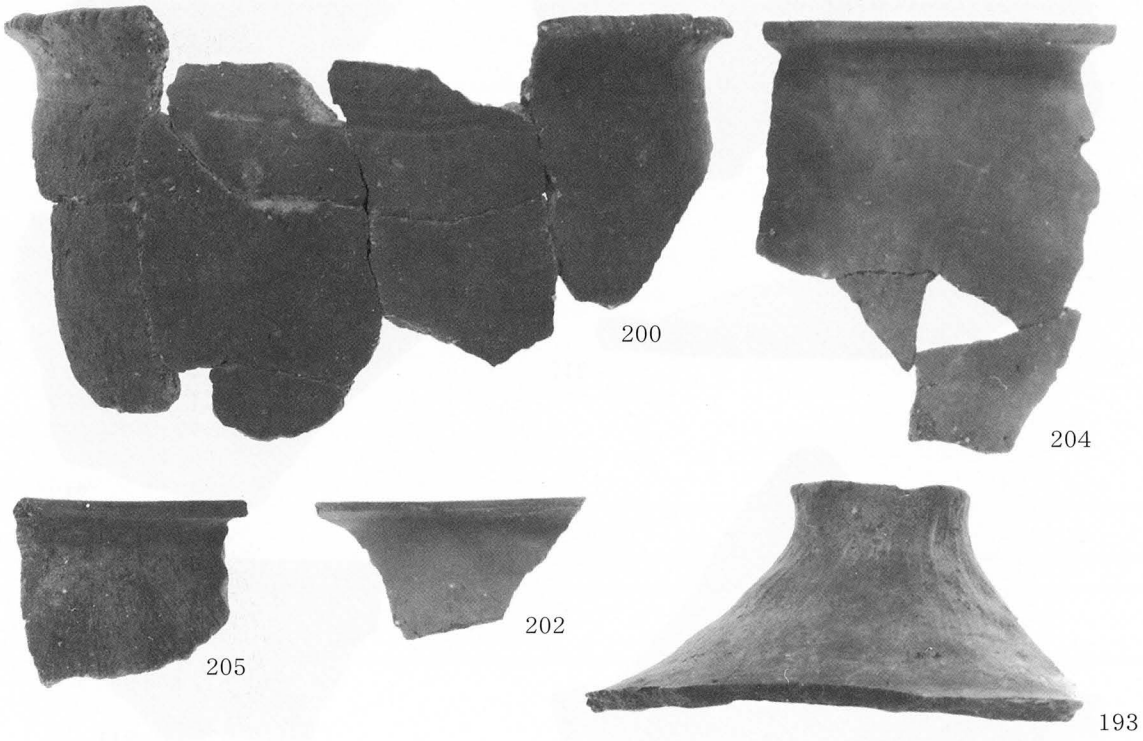
1. 第58次溝93・94・96・97出土弥生土器　壷・甕



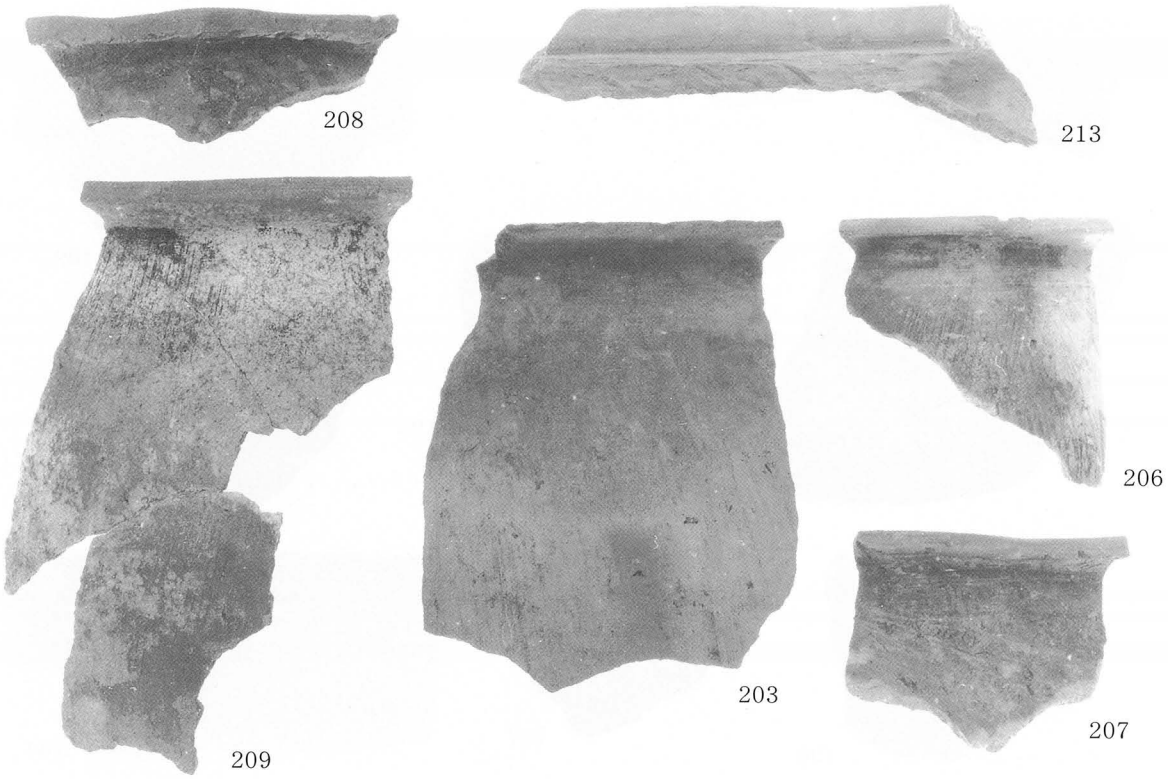
2. 第58次溝95出土弥生土器　壷



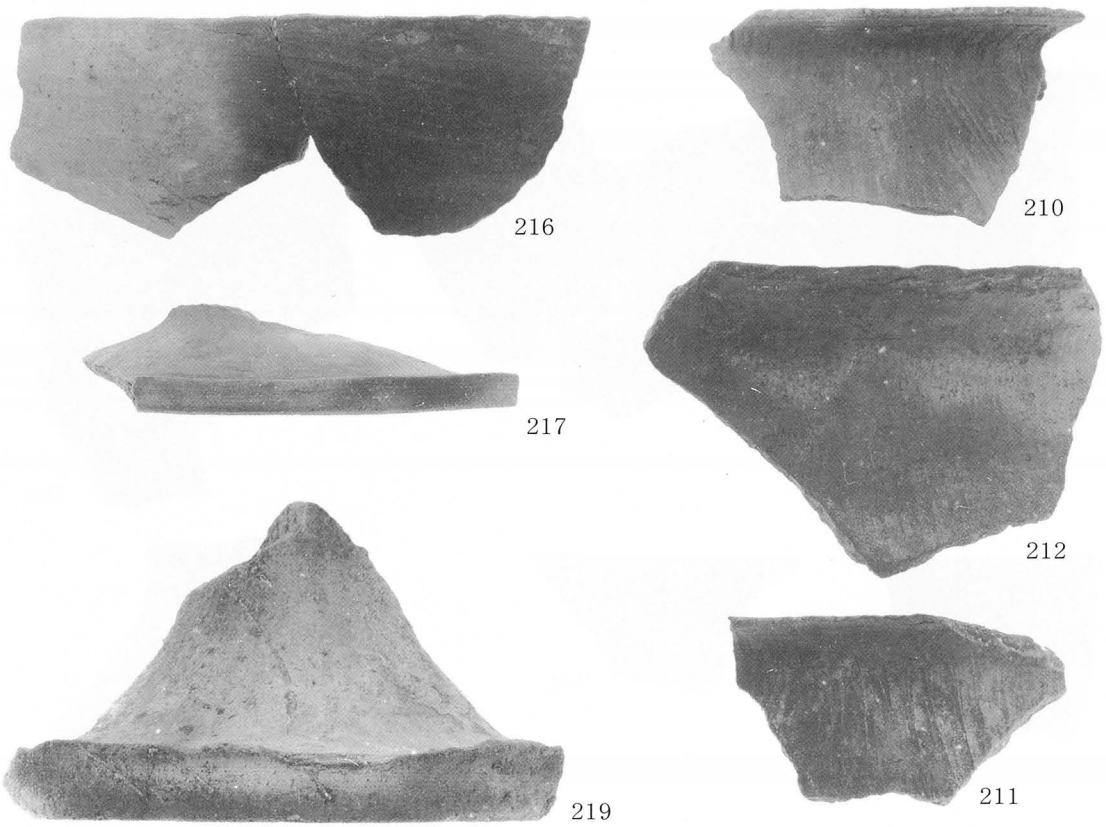
1. 第58次溝95出土弥生土器　壷・水差形土器・細頸壷・鉢・壷蓋



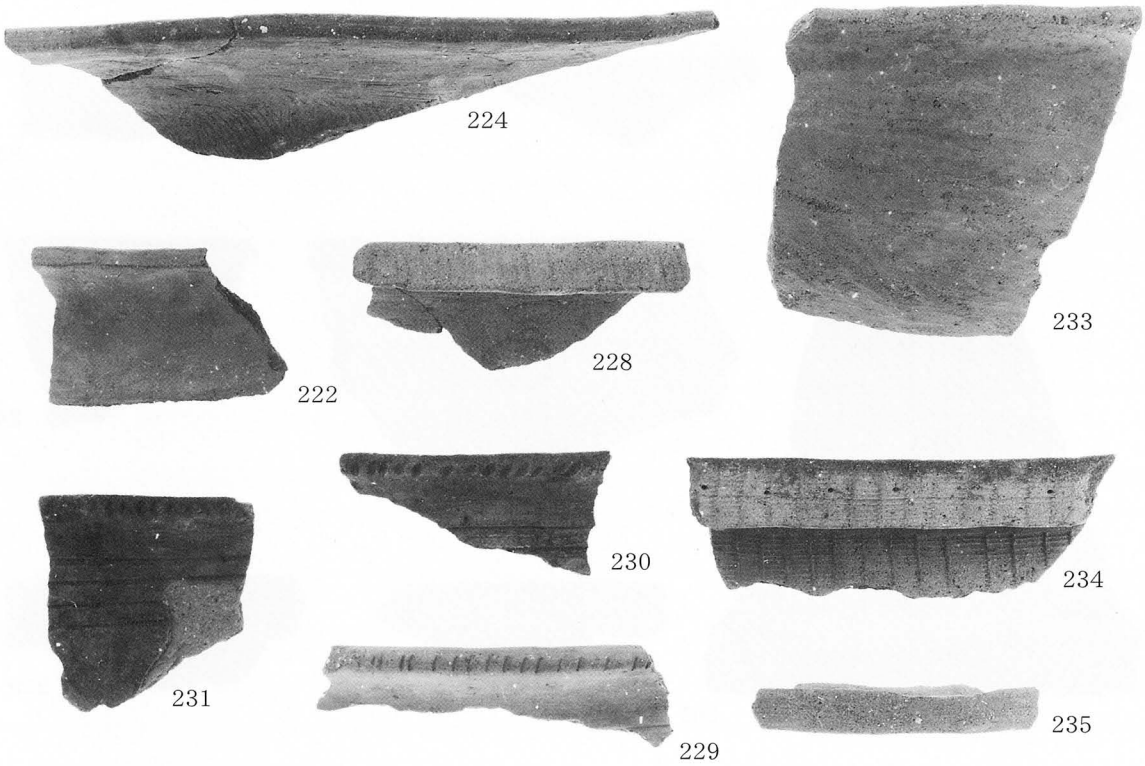
2. 第58次溝95出土弥生土器　甕蓋・甕



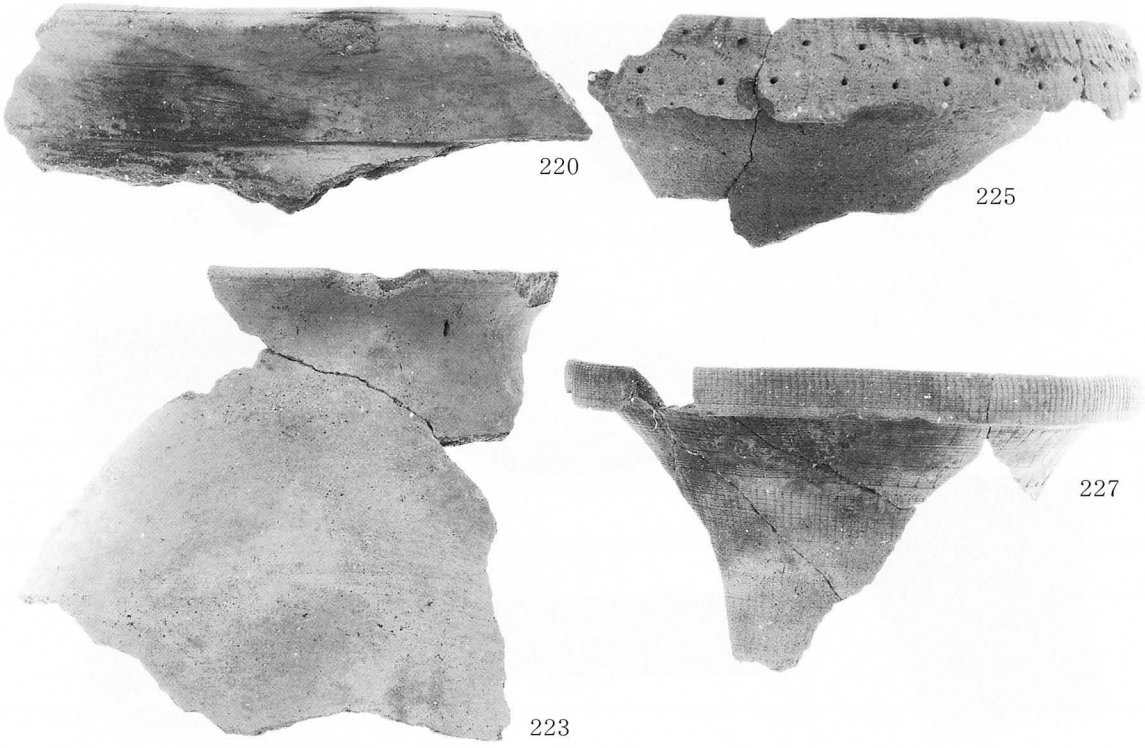
1. 第58次溝95出土弥生土器　甕



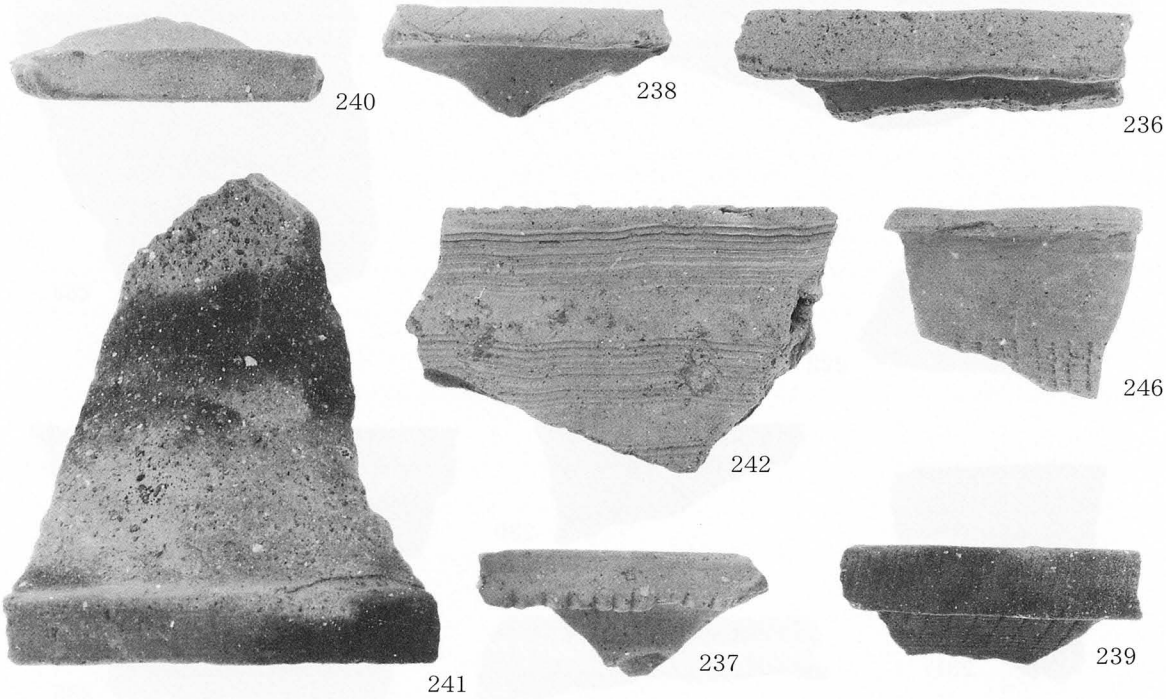
2. 第58次溝95出土弥生土器　甕・高杯



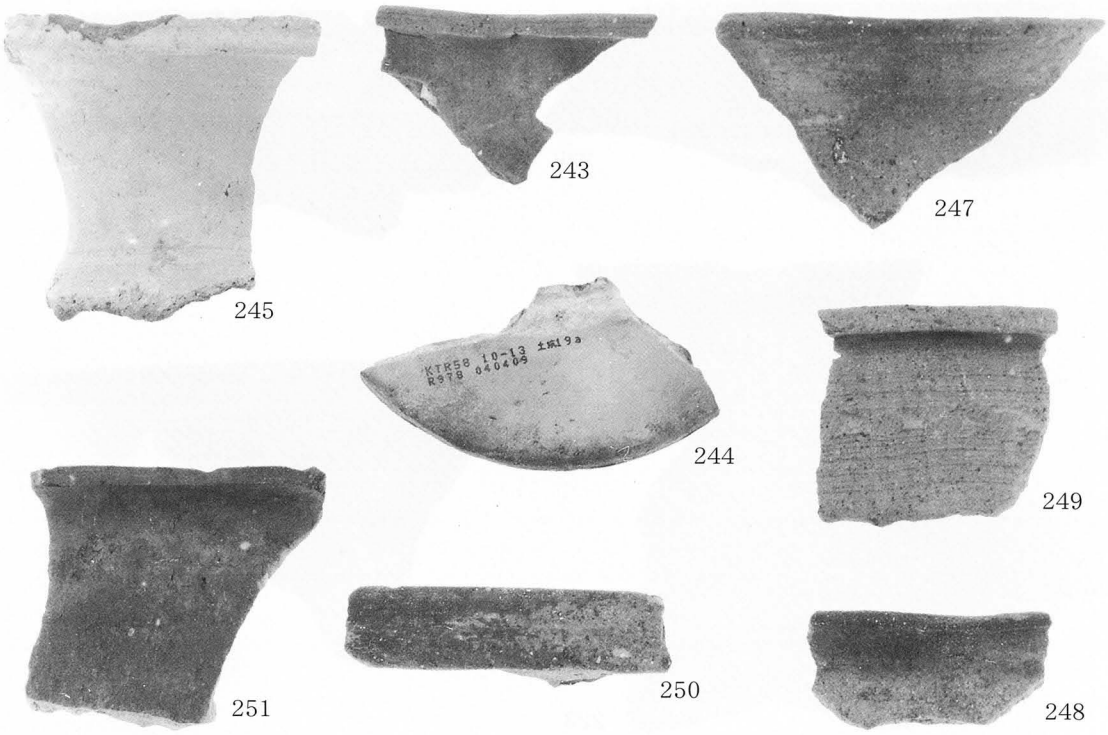
1. 第58次溝106出土弥生土器　壷・鉢・甕・高杯



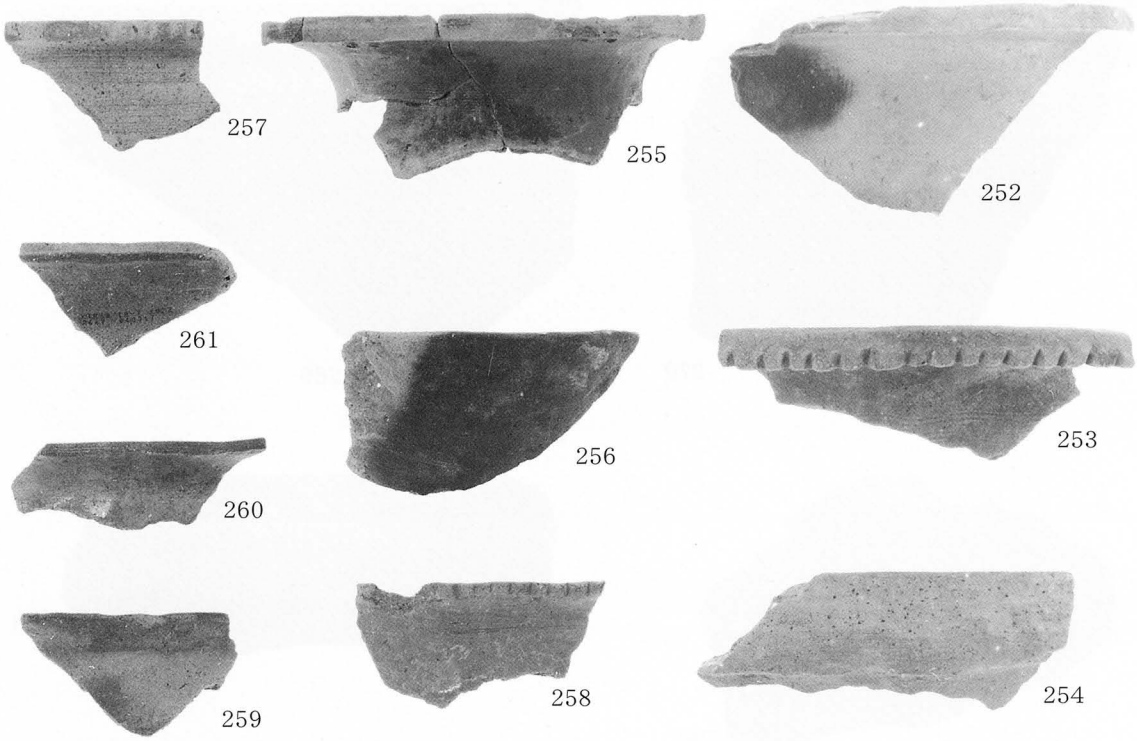
2. 第58次溝106出土弥生土器　壷



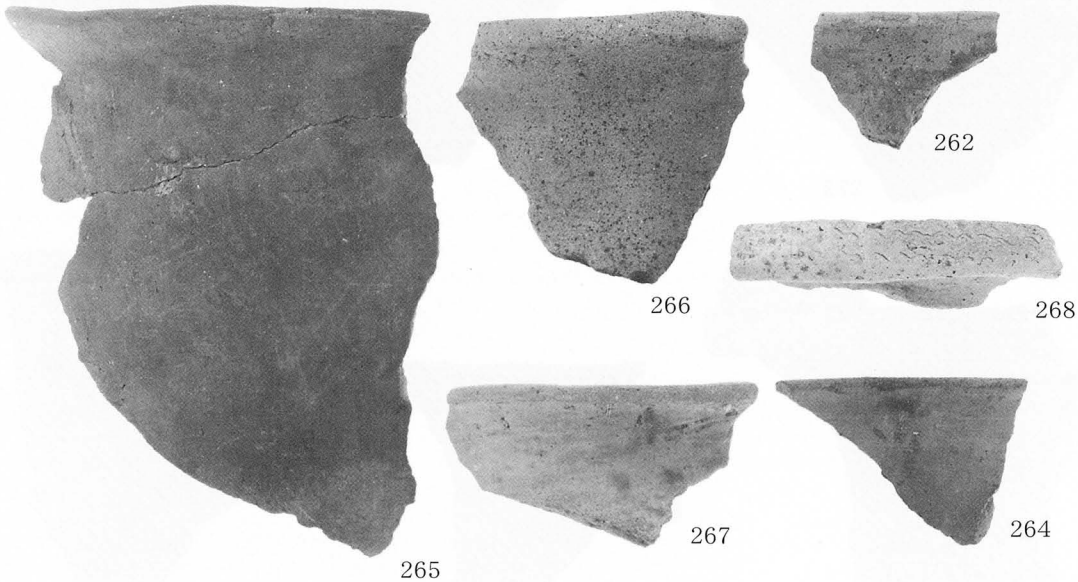
1. 第58次土坑10・11・13出土弥生土器　甕・壷・高杯・鉢



2. 第58次土坑12・17・19出土弥生土器　壷・甕・鉢・高杯

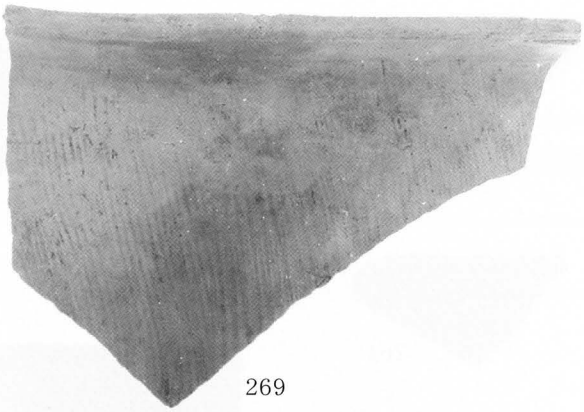


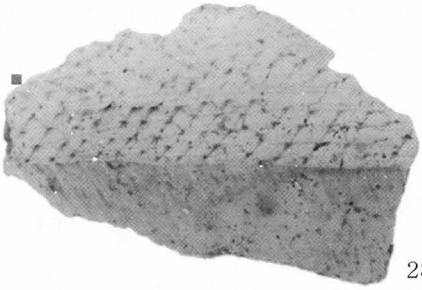
1. 第58次土坑22出土弥生土器　壷・鉢・甕

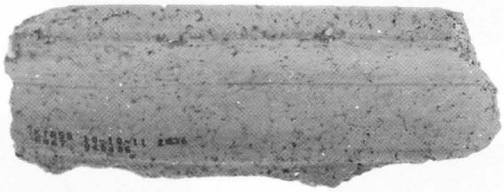


2. 第58次土坑21・25～28出土弥生土器　壷・鉢・甕

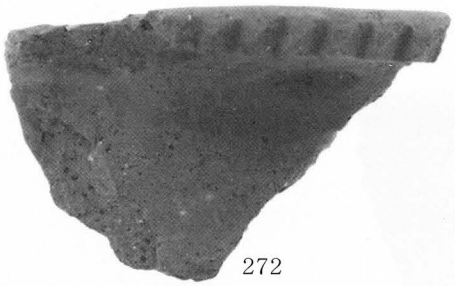
270


269


282


271

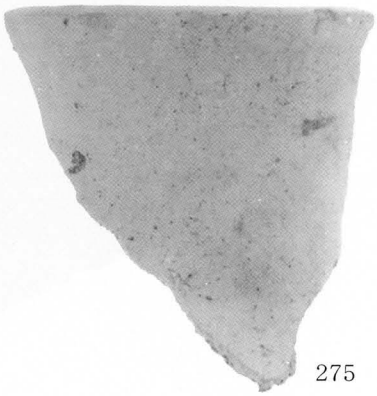
1. 第58次土坑28・34・36・41出土弥生土器　鉢・甕・壷


272

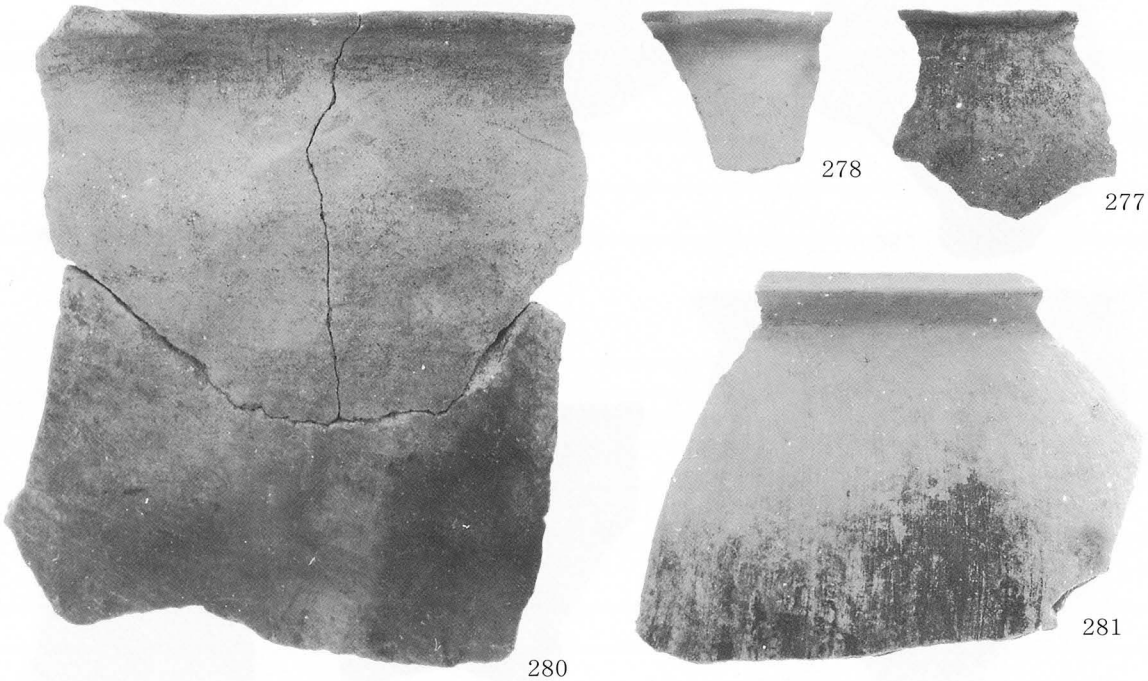
273

274

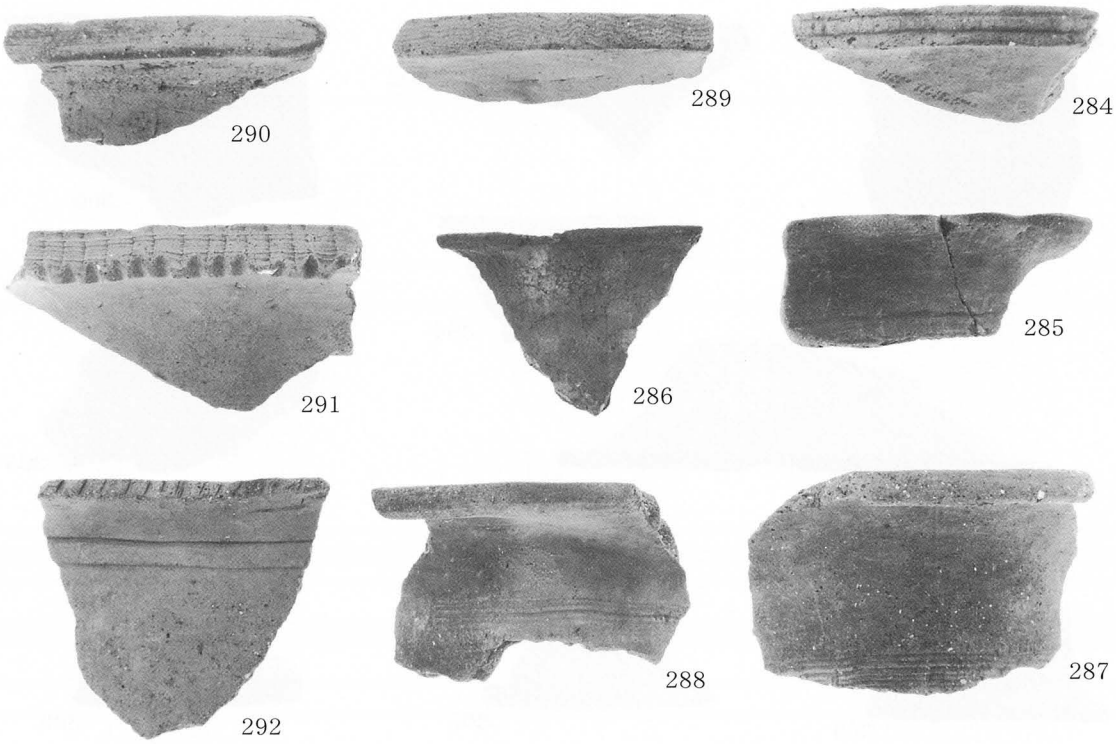
276


275

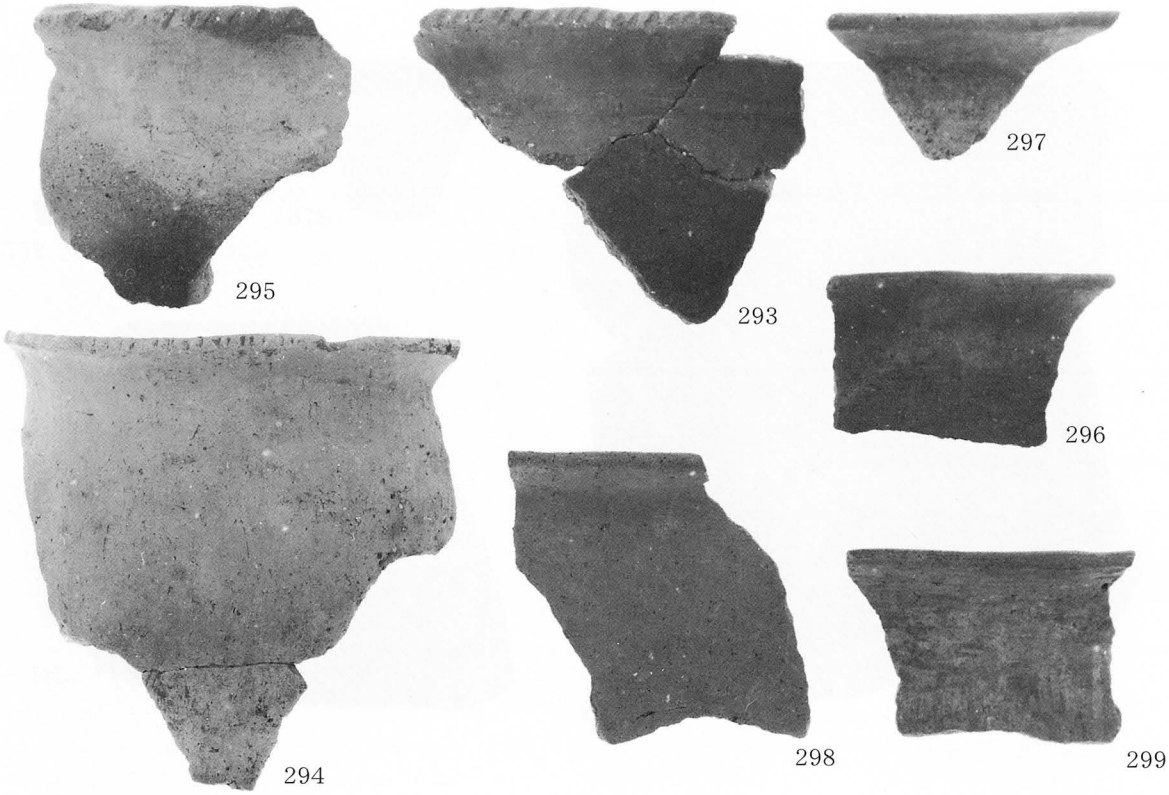
2. 第58次土坑36出土弥生土器　壷・甕



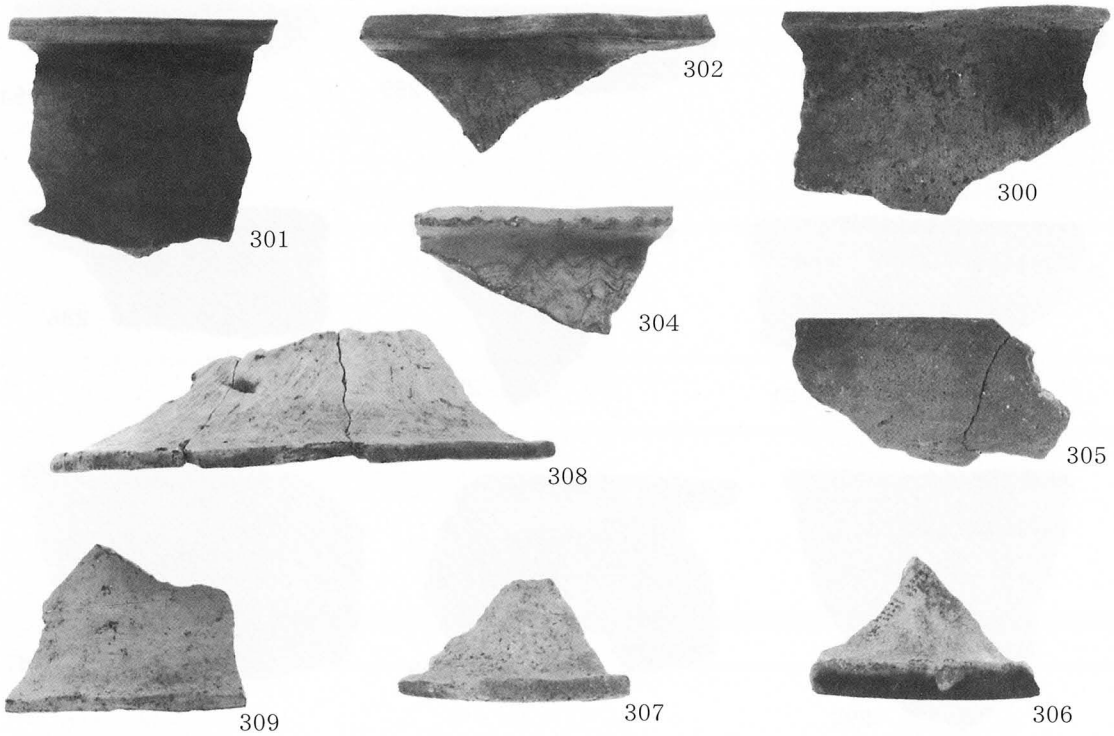
1. 第58次土坑36出土弥生土器　甕



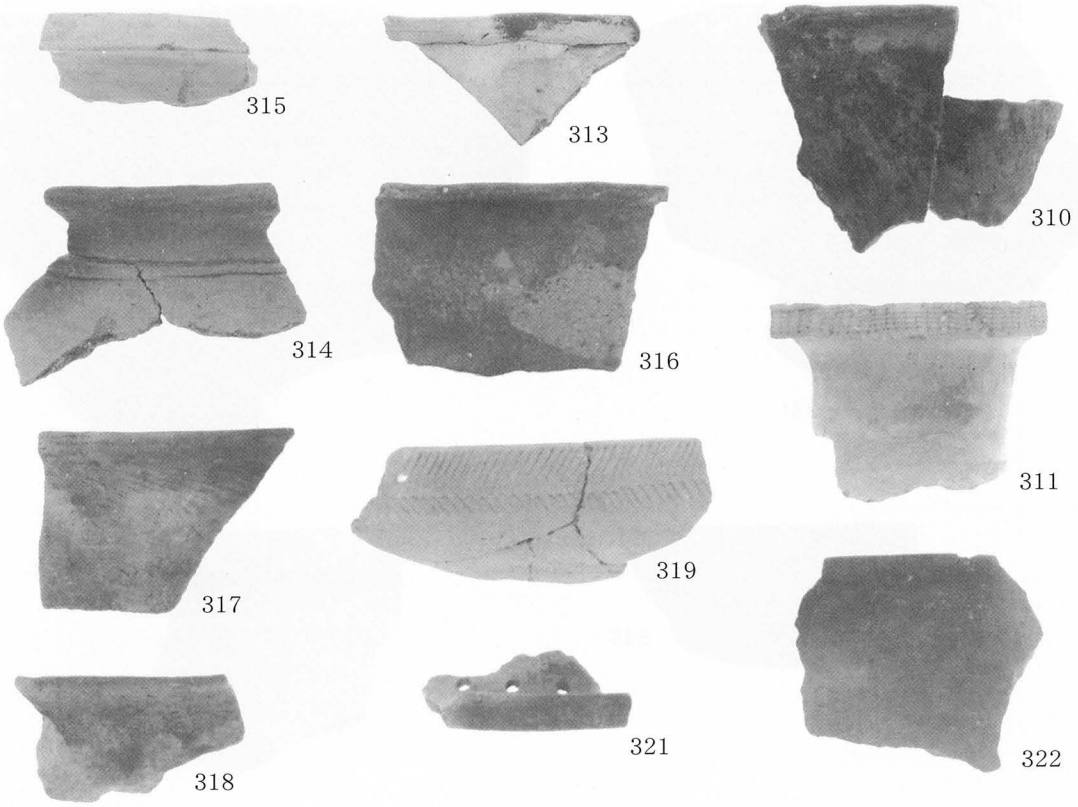
2. 第58次土坑43出土弥生土器　壷・甕



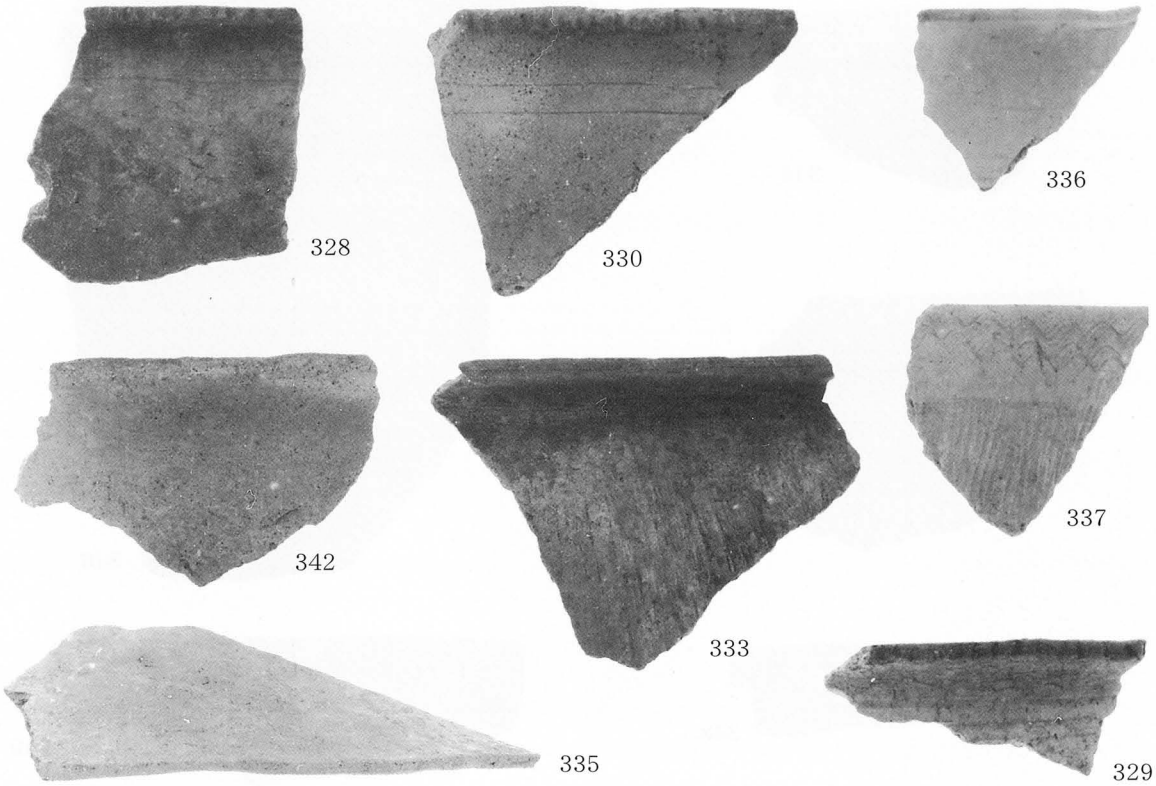
1. 第58次土坑43出土弥生土器　甕



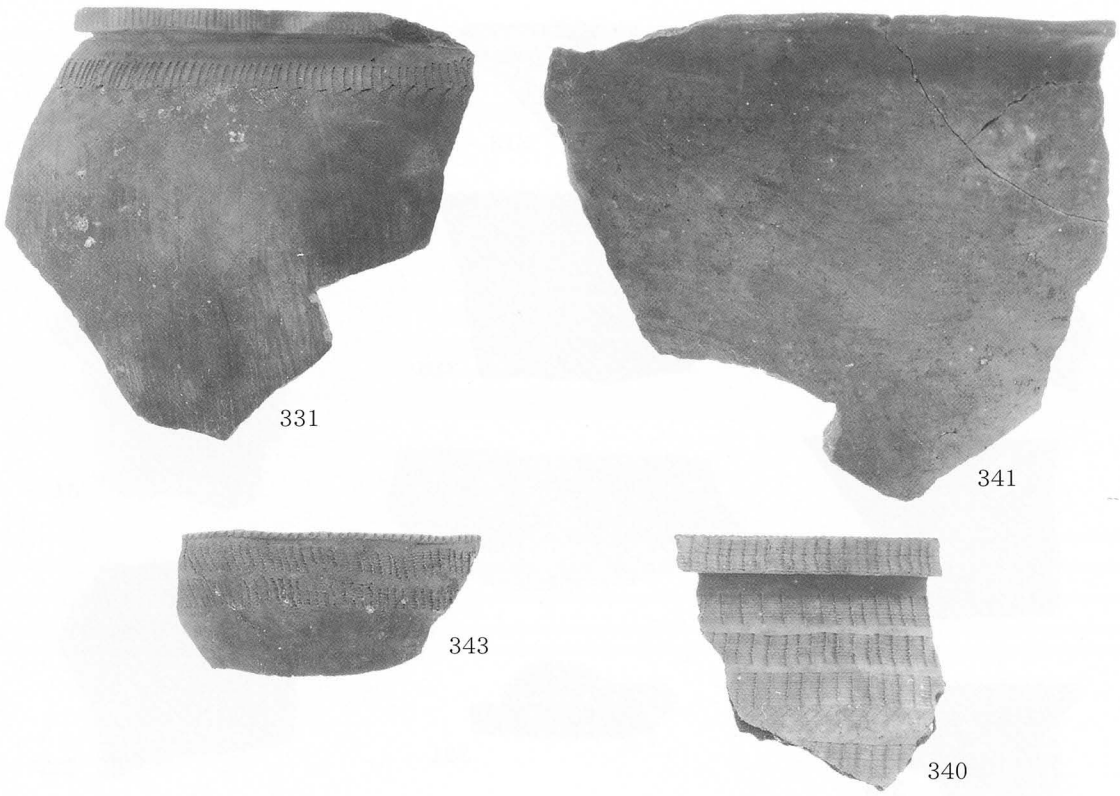
2. 第58次土坑43出土弥生土器　甕・高杯・鉢・甕蓋



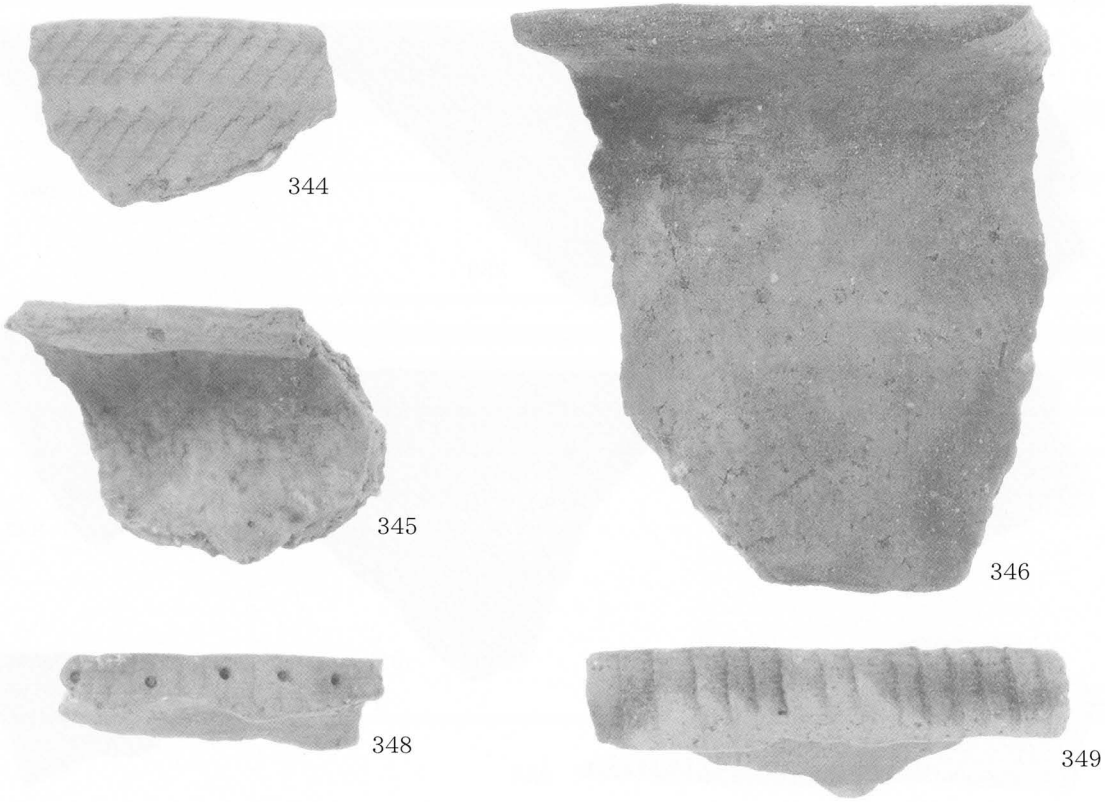
1. 第58次土坑42・44・45出土弥生土器　甕・壷・鉢・高杯



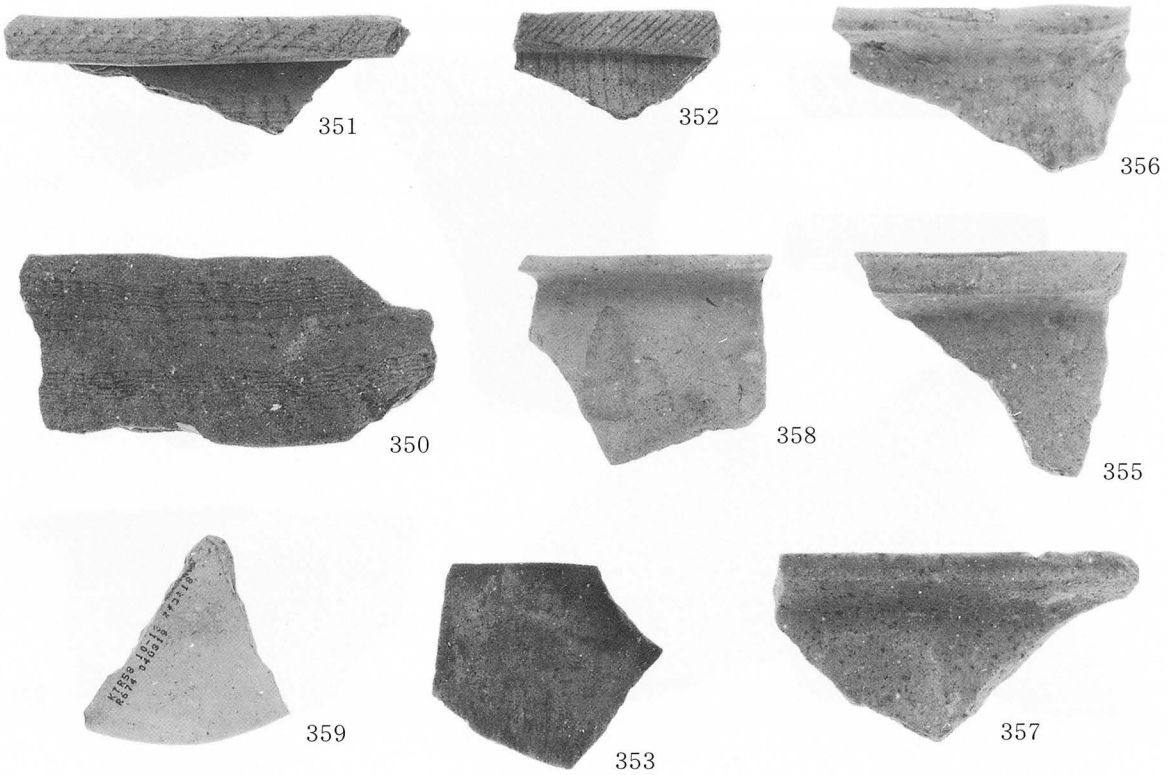
2. 第58次土坑49出土弥生土器　壷・甕・甕蓋・鉢



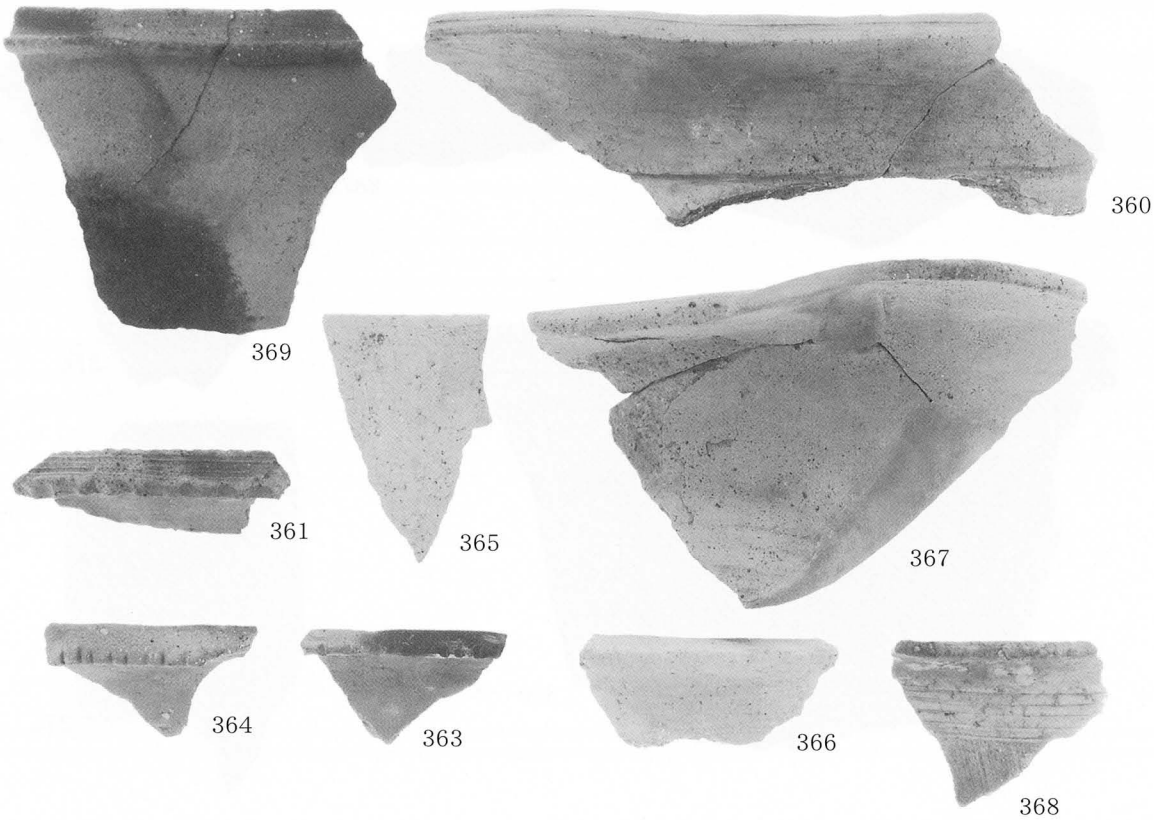
1. 第58次土坑49出土弥生土器　甕・鉢



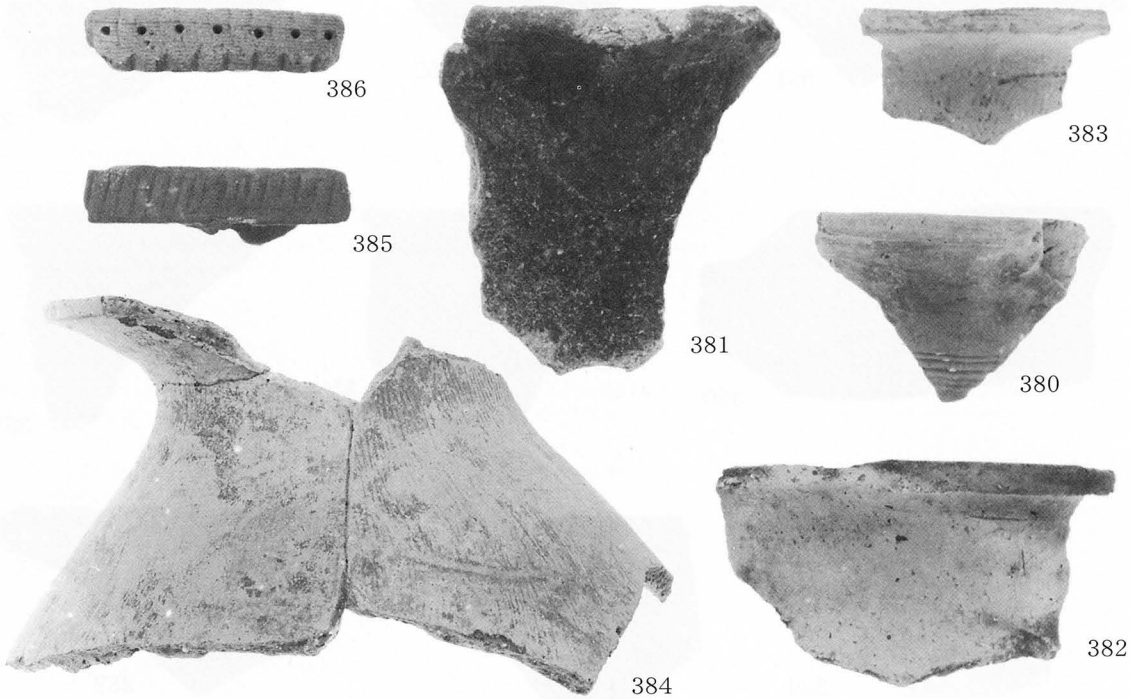
2. 第58次土坑51・53・73出土弥生土器　壷・甕・細頸壷



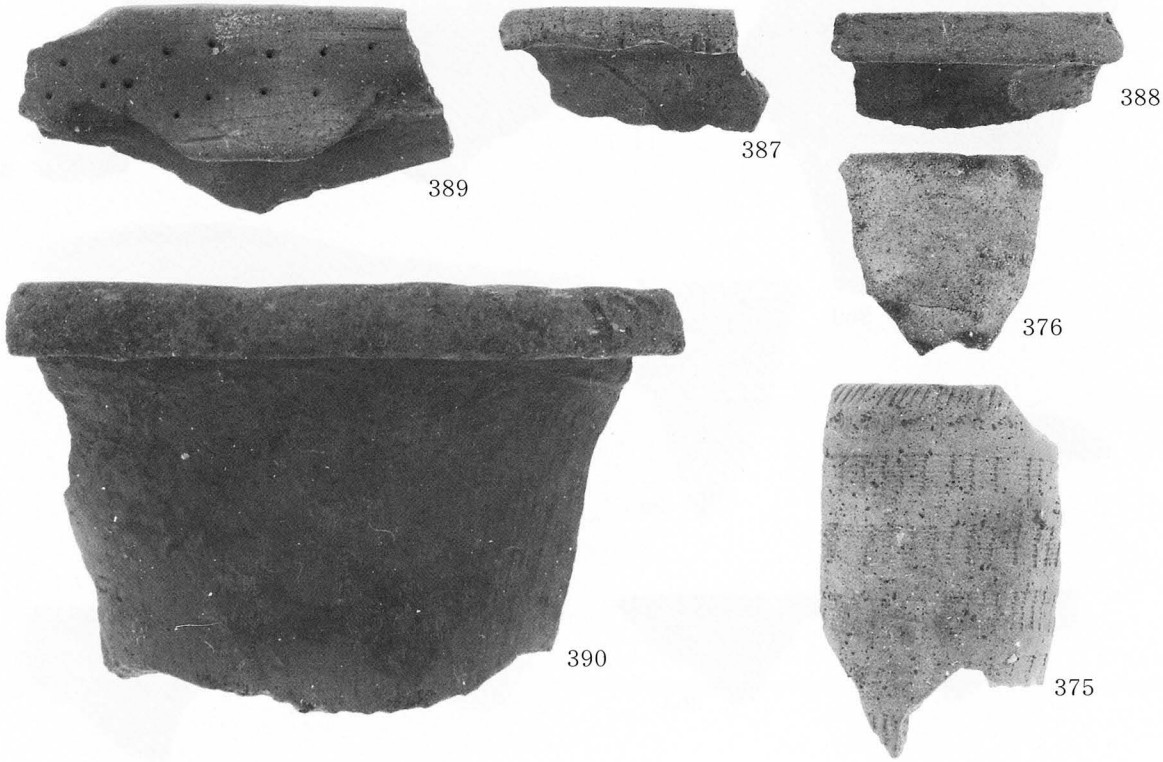
1. 第58次土坑73出土弥生土器　壷・甕・鉢・壷蓋



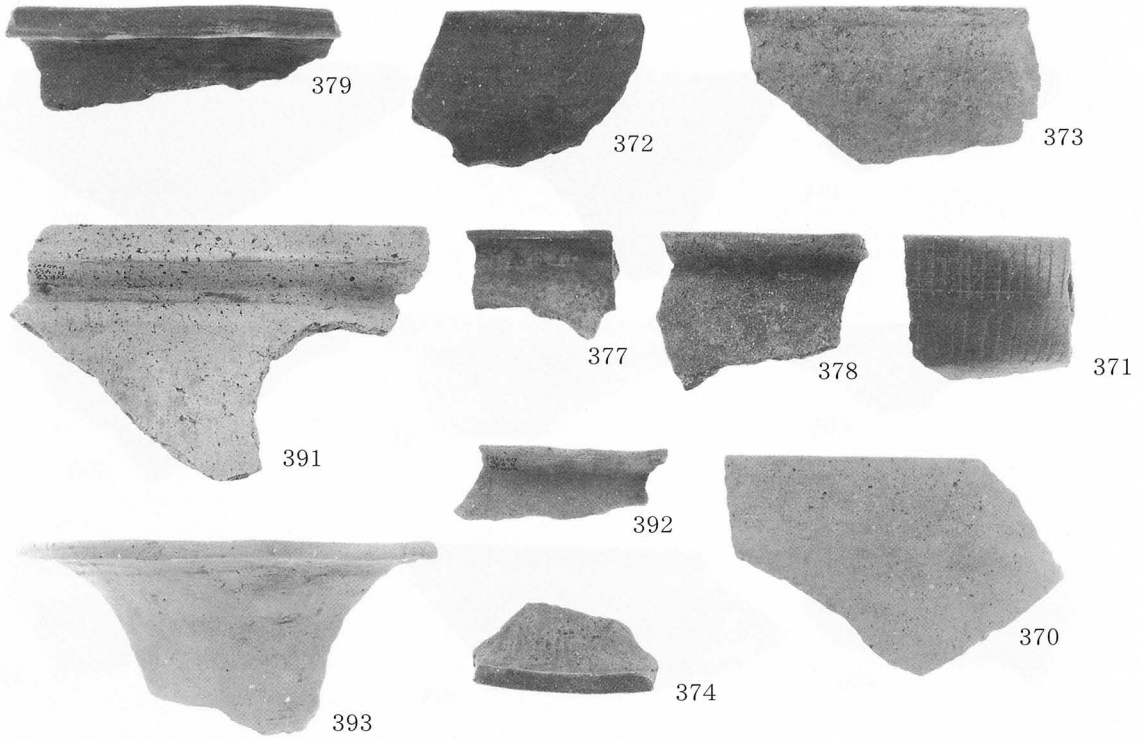
2. 第58次ピット53・61・87・120・135・297、土器溜り出土弥生土器　壷・甕・鉢



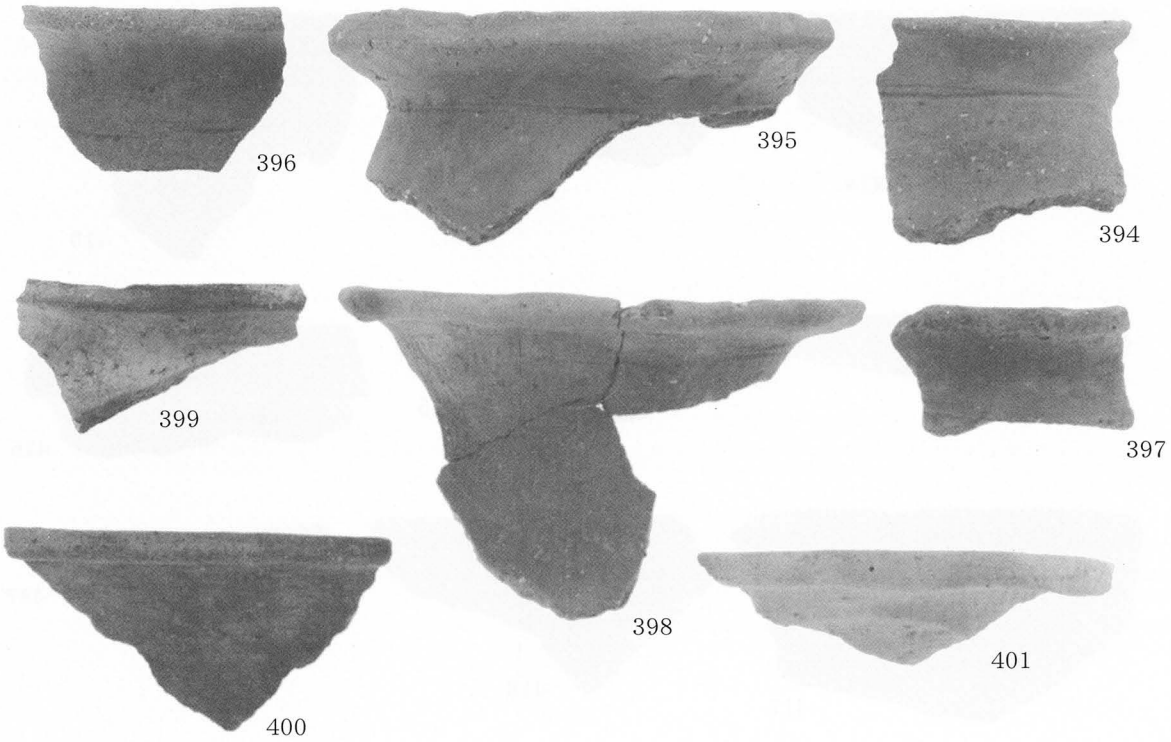
1. 第58次第14層出土弥生土器　壷



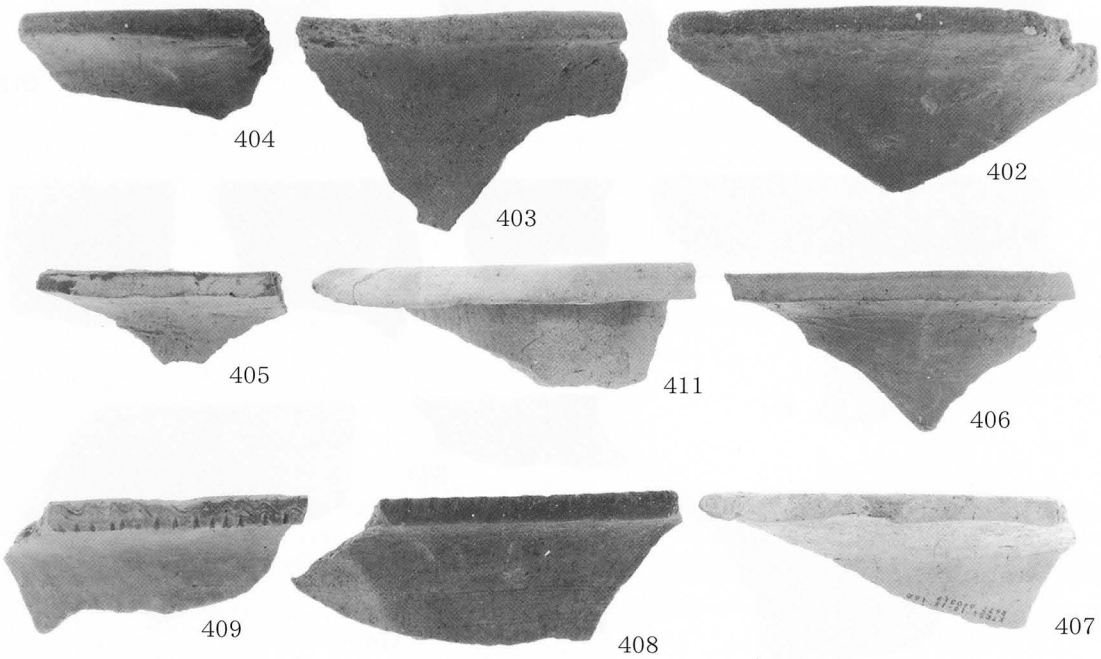
2. 第58次第14層出土弥生土器　壷・細頸壷



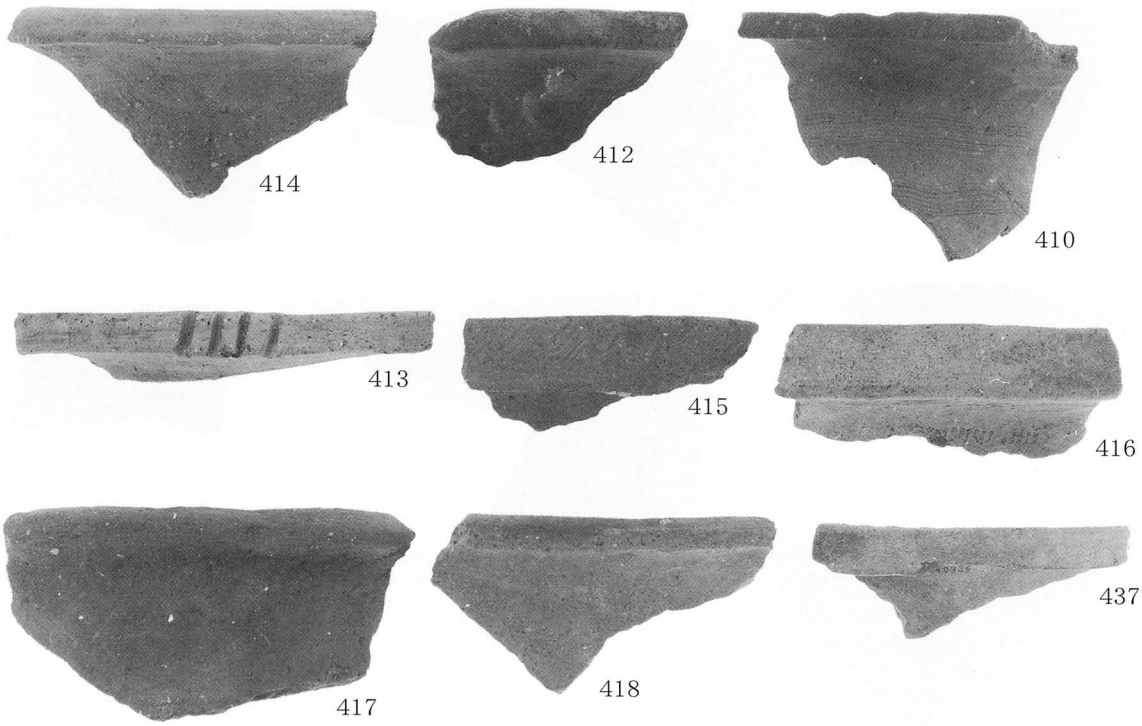
1. 第58次第14・15層出土弥生土器　高杯・甕・壷



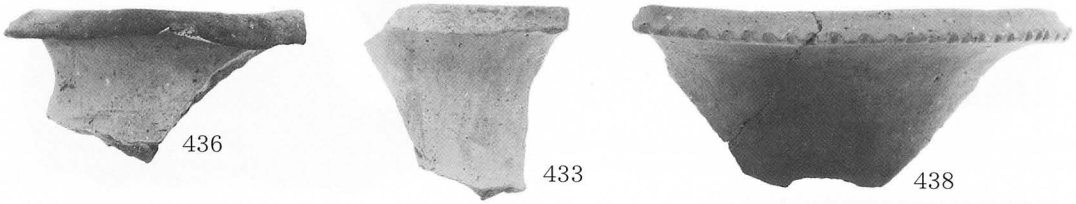
2. 第58次第16層出土弥生土器　壷



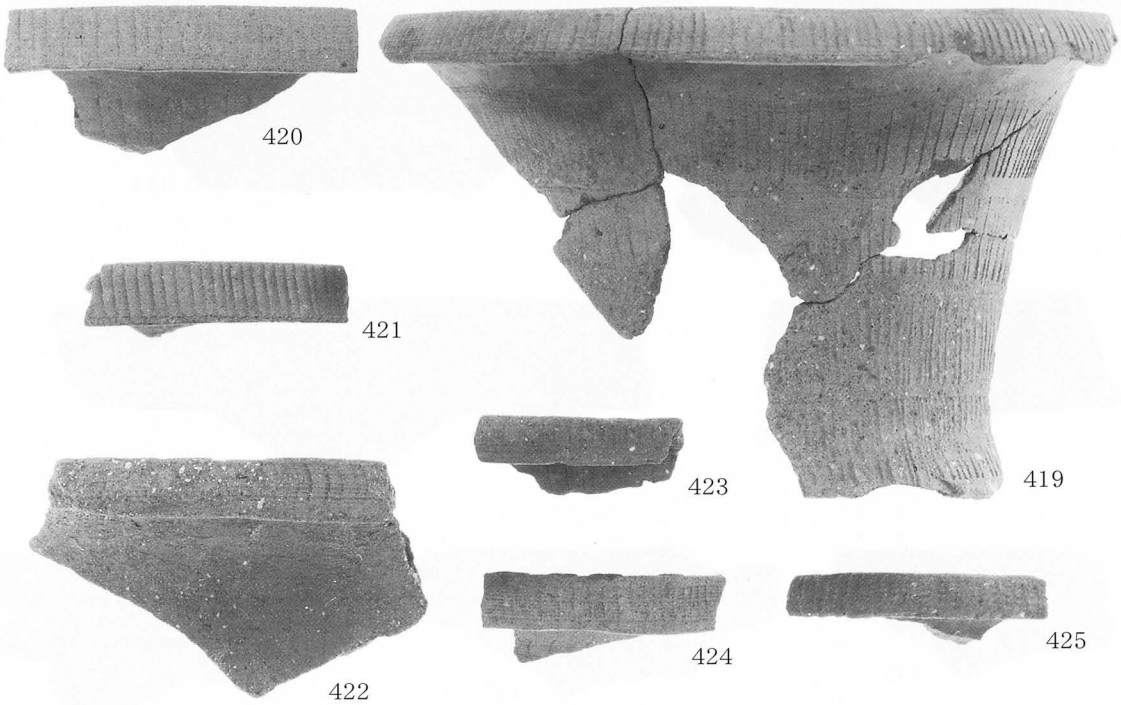
1. 第58次第16層出土弥生土器　壷



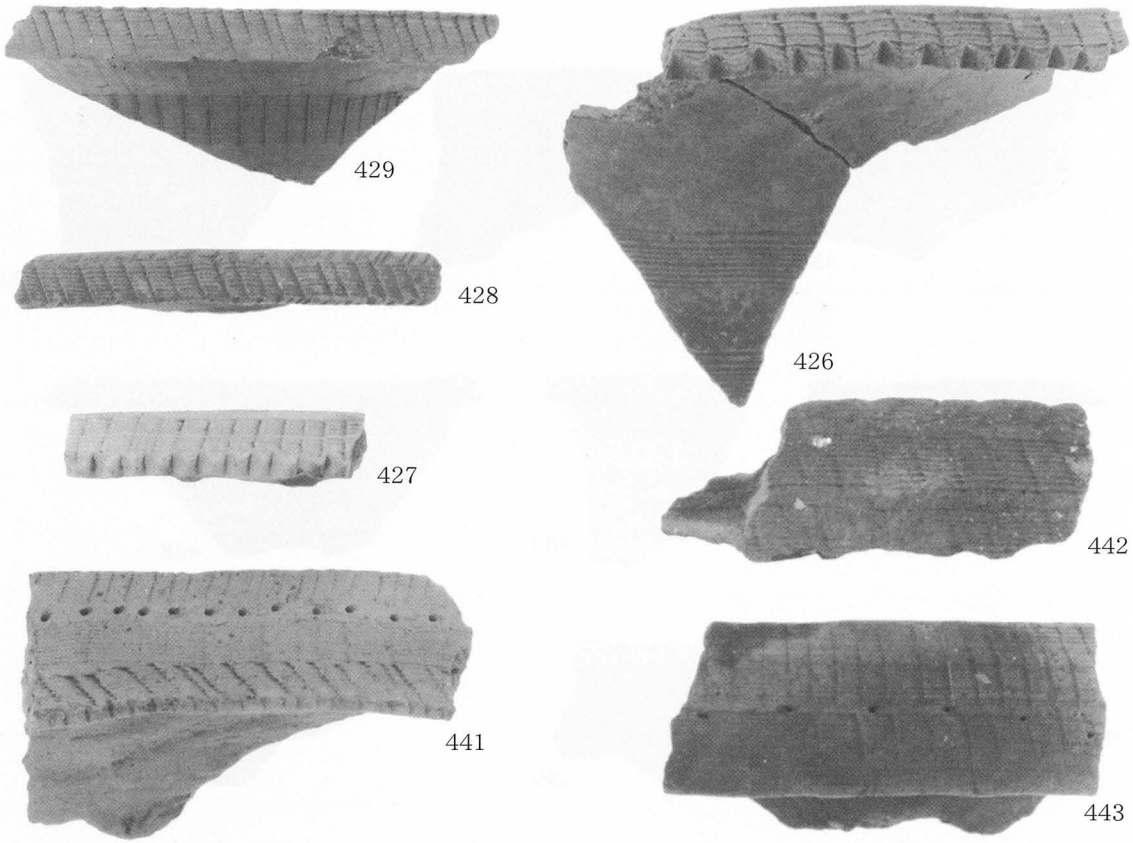
2. 第58次第16層出土弥生土器　壷



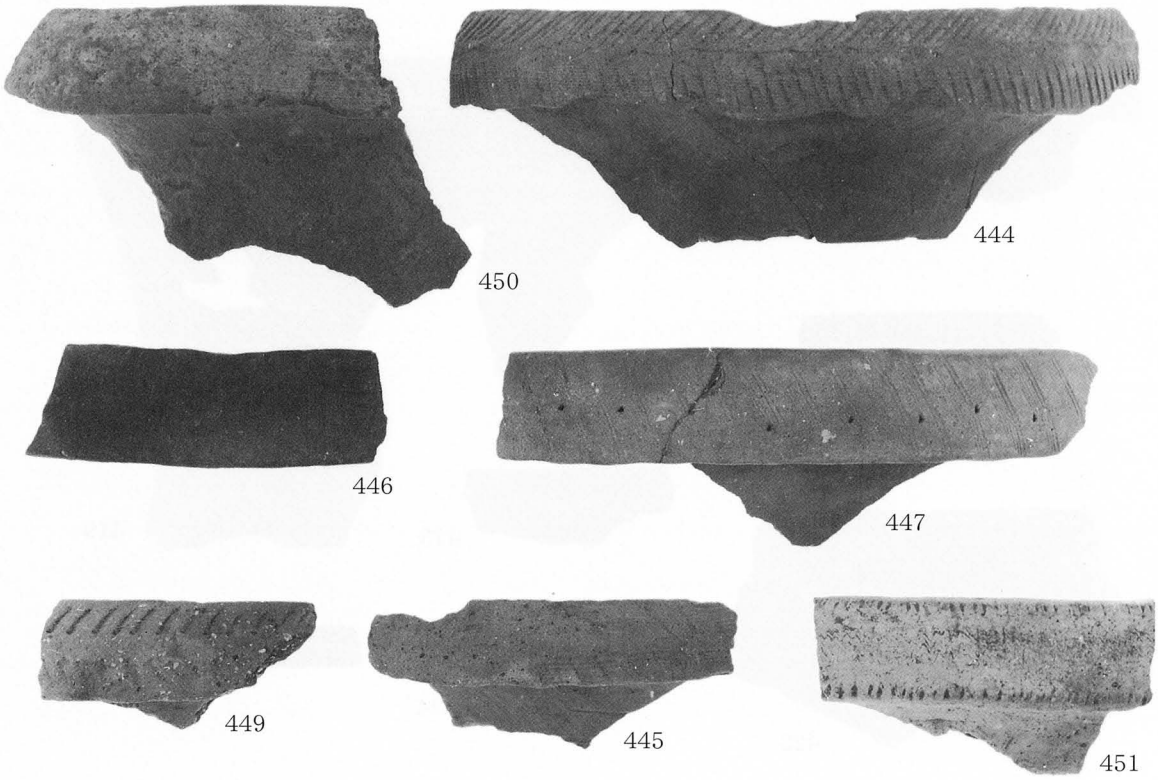
1. 第58次第16層出土弥生土器　壷



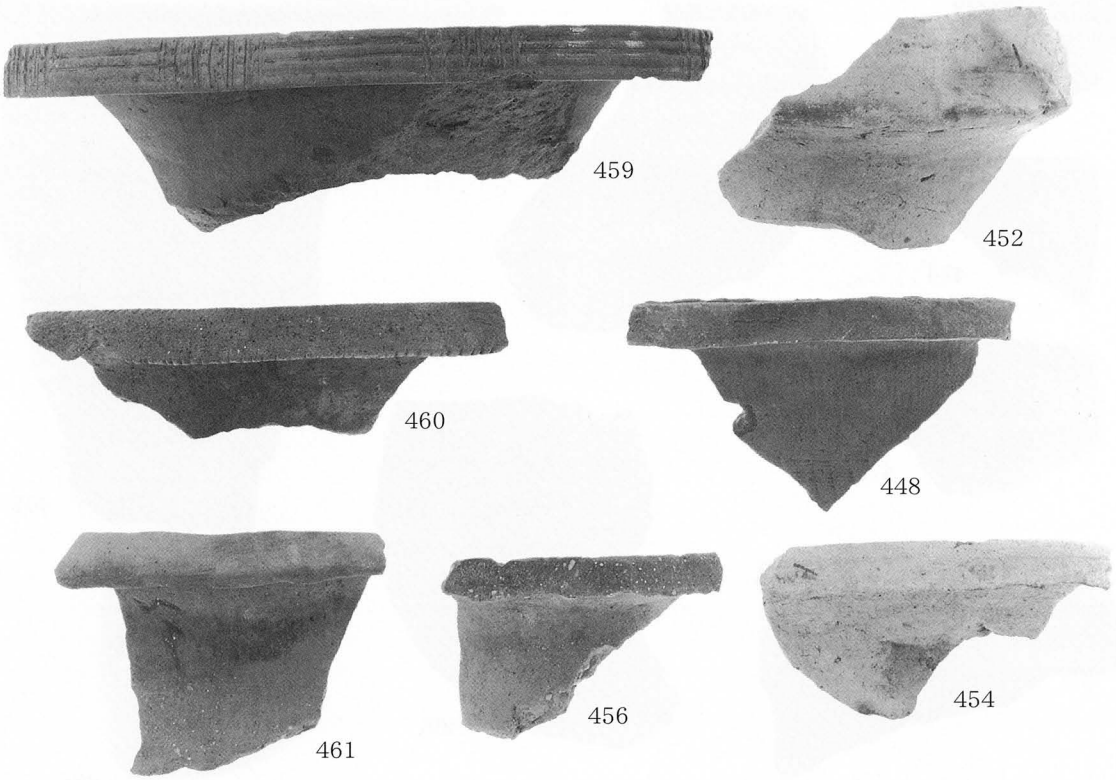
2. 第58次第16層出土弥生土器　壷



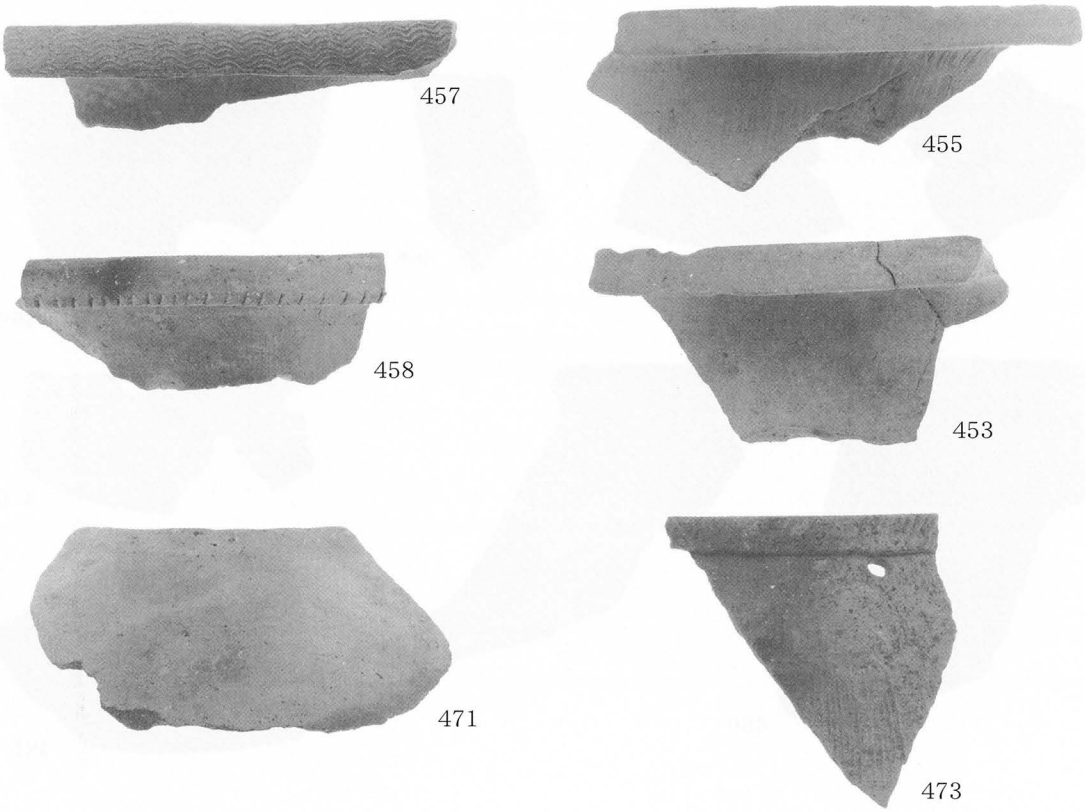
1. 第58次第16層出土弥生土器　壷



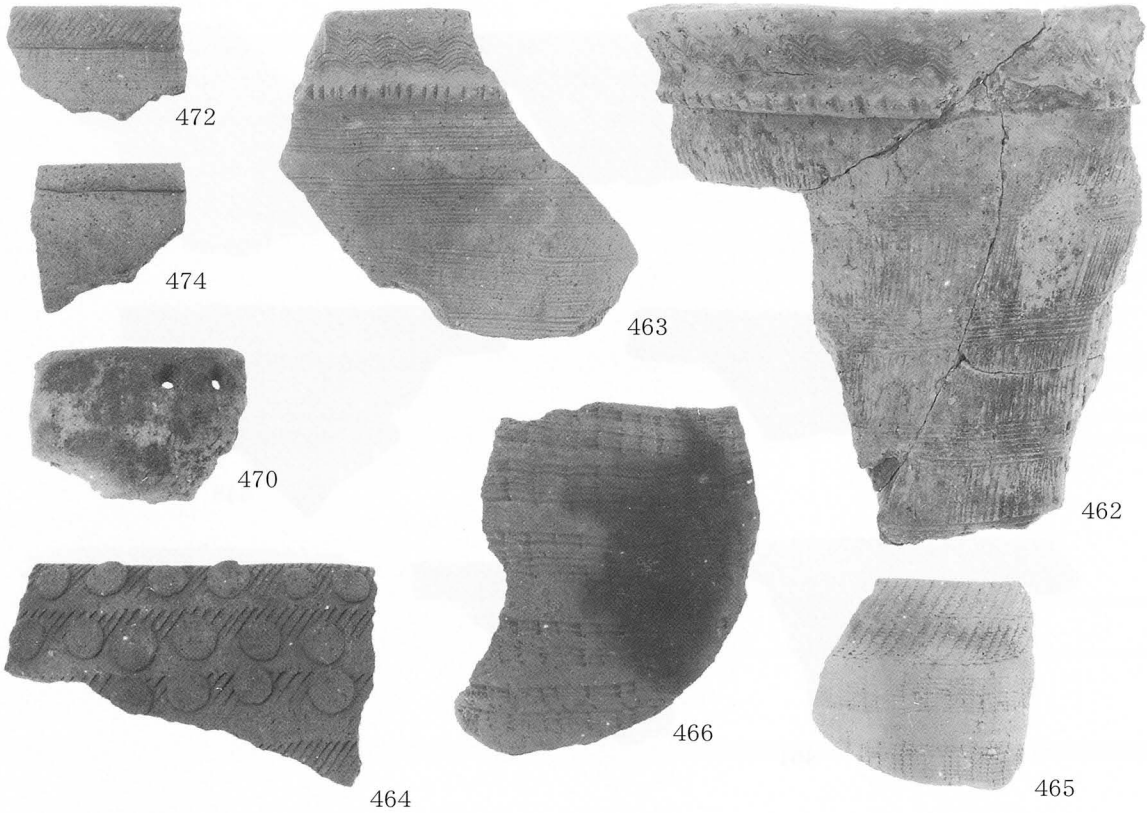
2. 第58次第16層出土弥生土器　壷



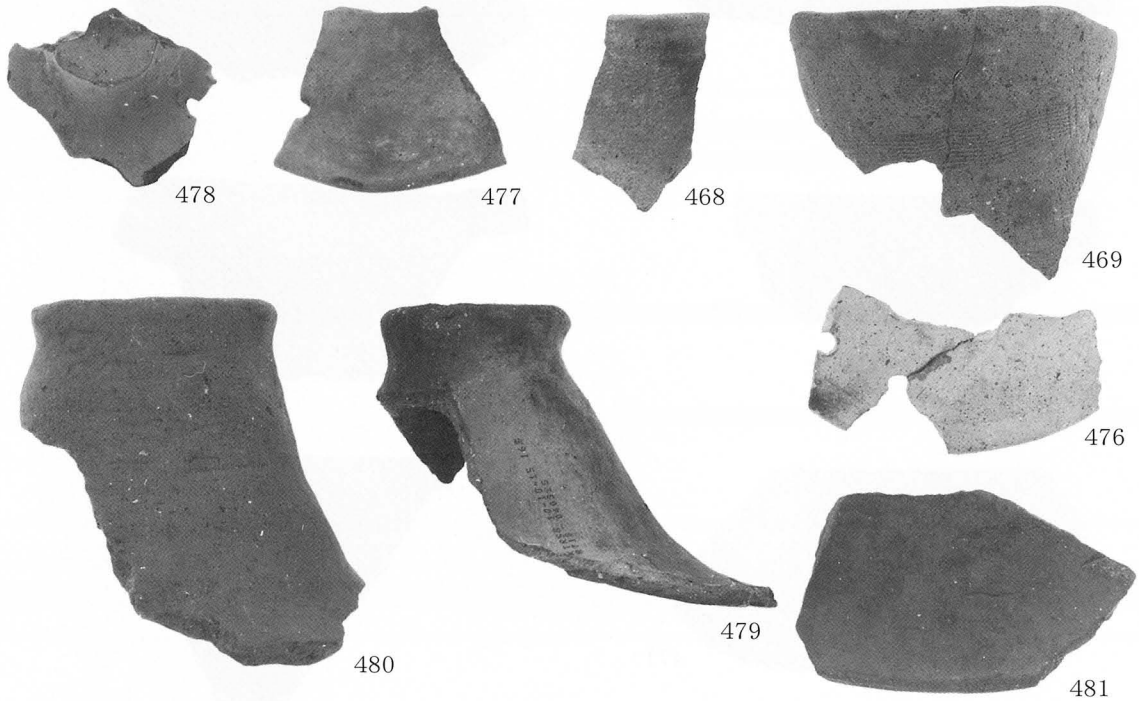
1. 第58次第16層出土弥生土器　壷



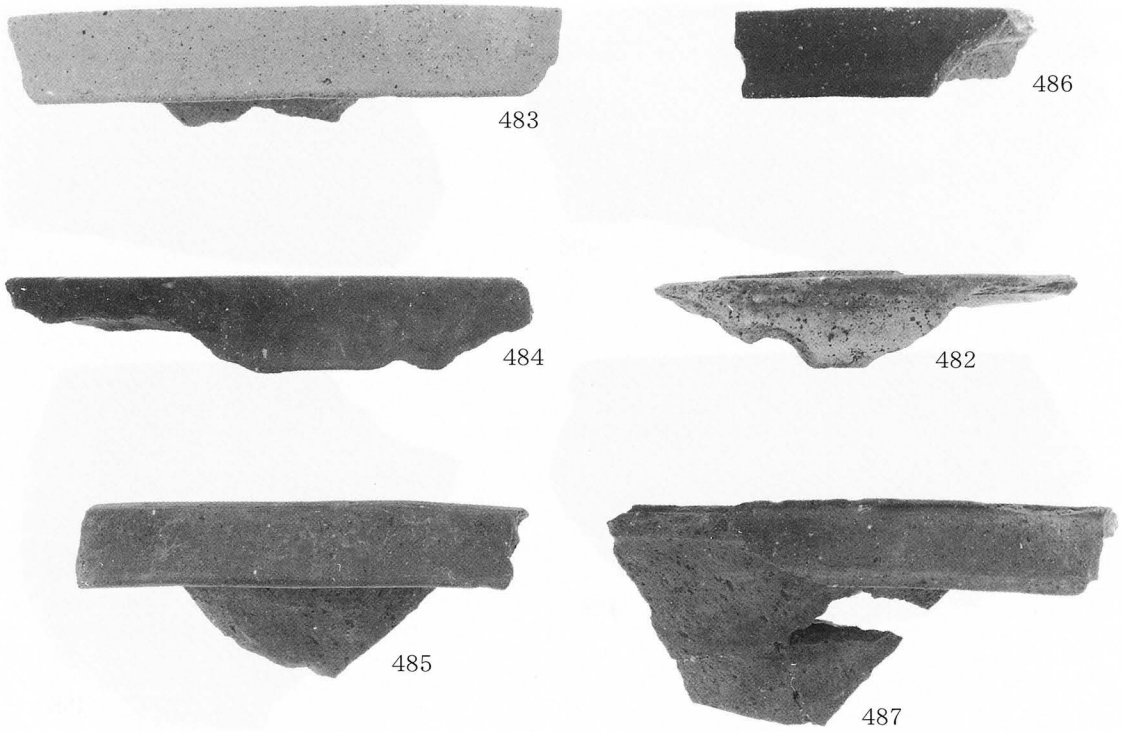
2. 第58次第16層出土弥生土器　壷・無頸壷



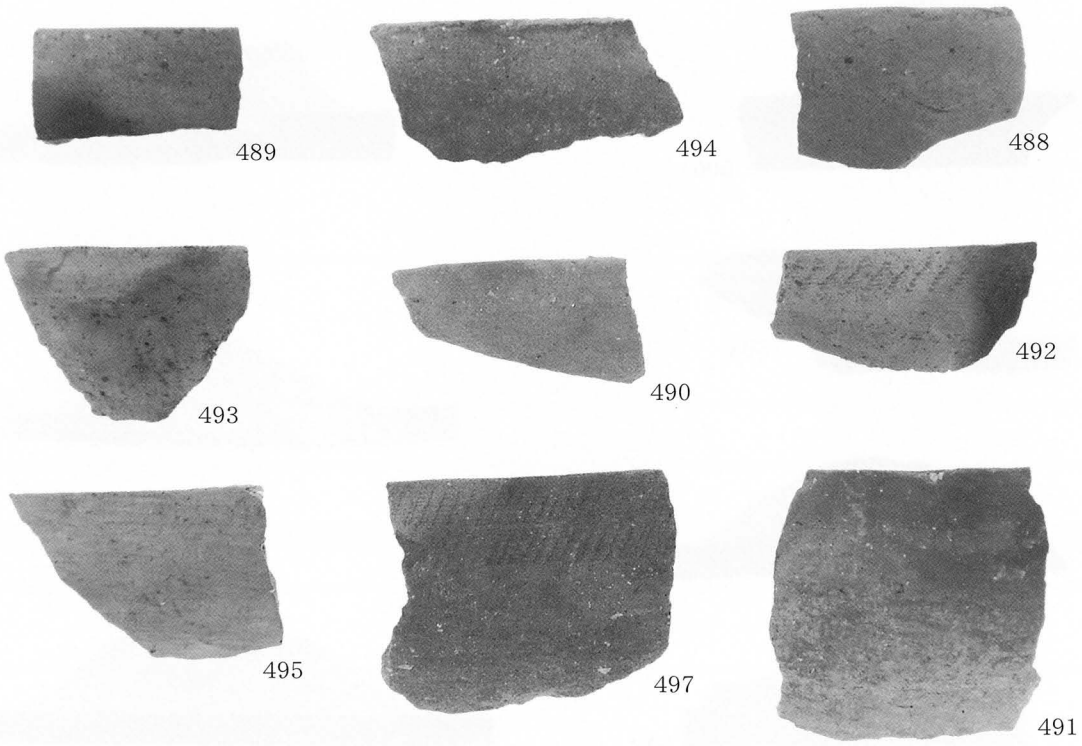
1. 第58次第16層出土弥生土器　壷・無頸壷・細頸壷



2. 第58次第16層出土弥生土器　水差形土器・甕蓋・壷蓋

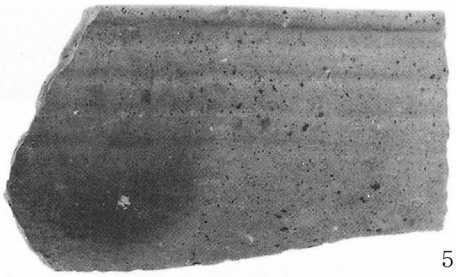


1. 第58次第16層出土弥生土器　高杯

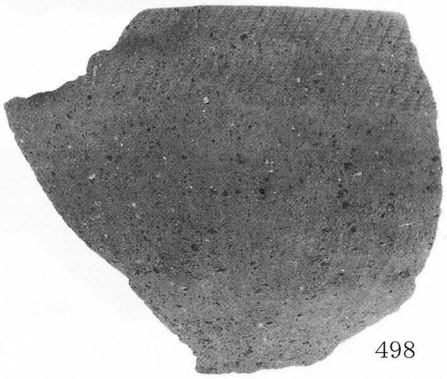


2. 第58次第16層出土弥生土器　高杯

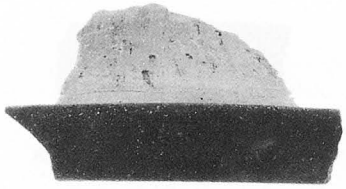
496


500

499


498

1. 第58次第16層出土弥生土器　高杯


506

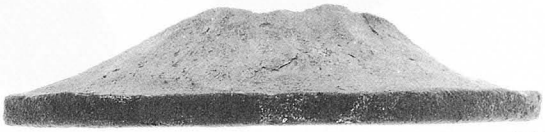
504

505

509

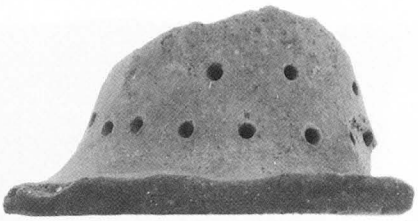
503

512

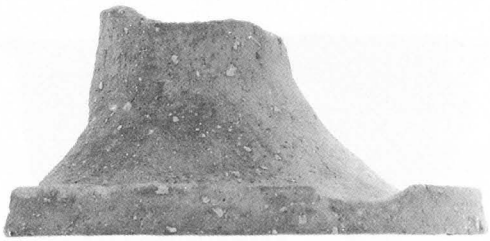

508

2. 第58次第16層出土弥生土器　高杯

515


511

513


510

1. 第58次第16層出土弥生土器　高杯

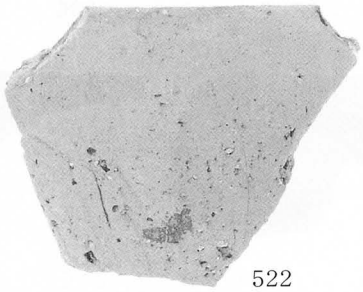
525

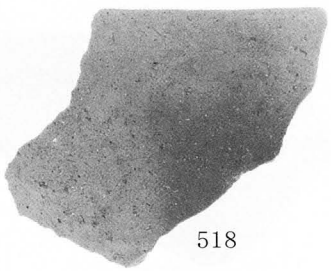
523

517

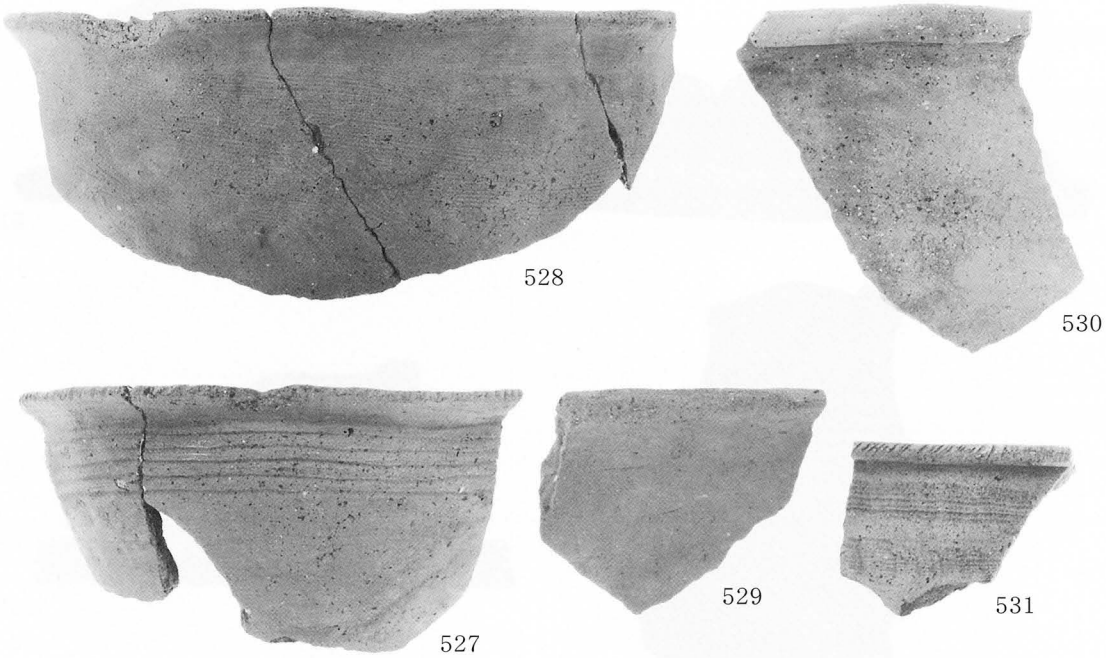
521

526

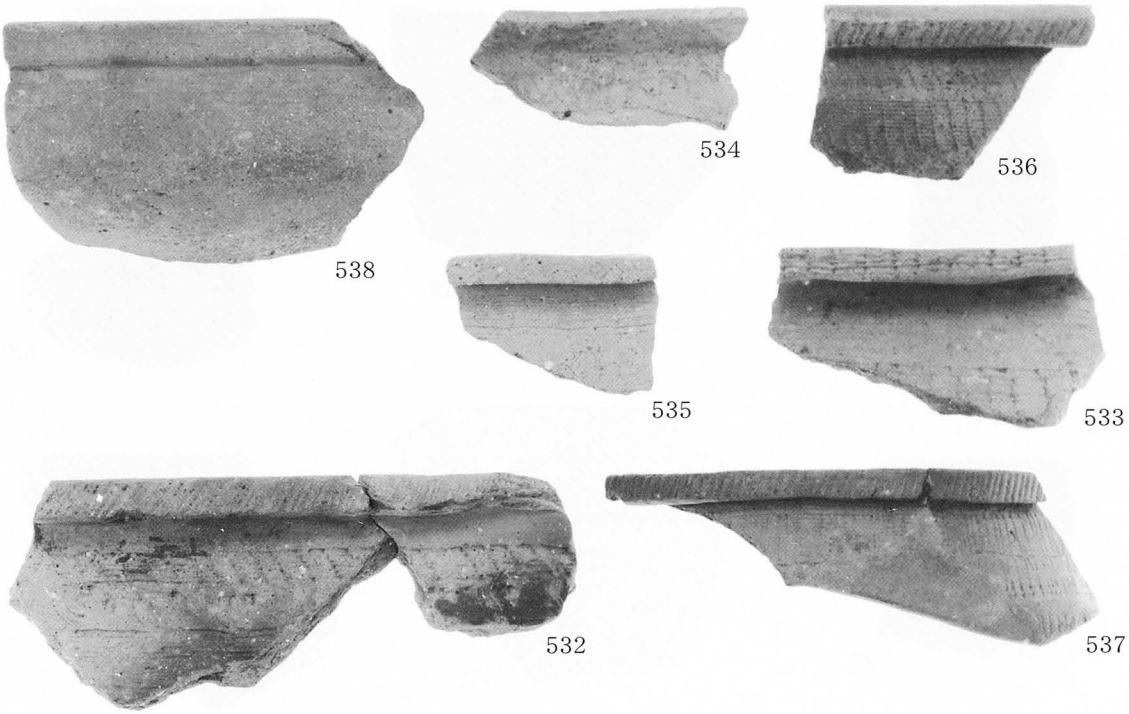

522


518

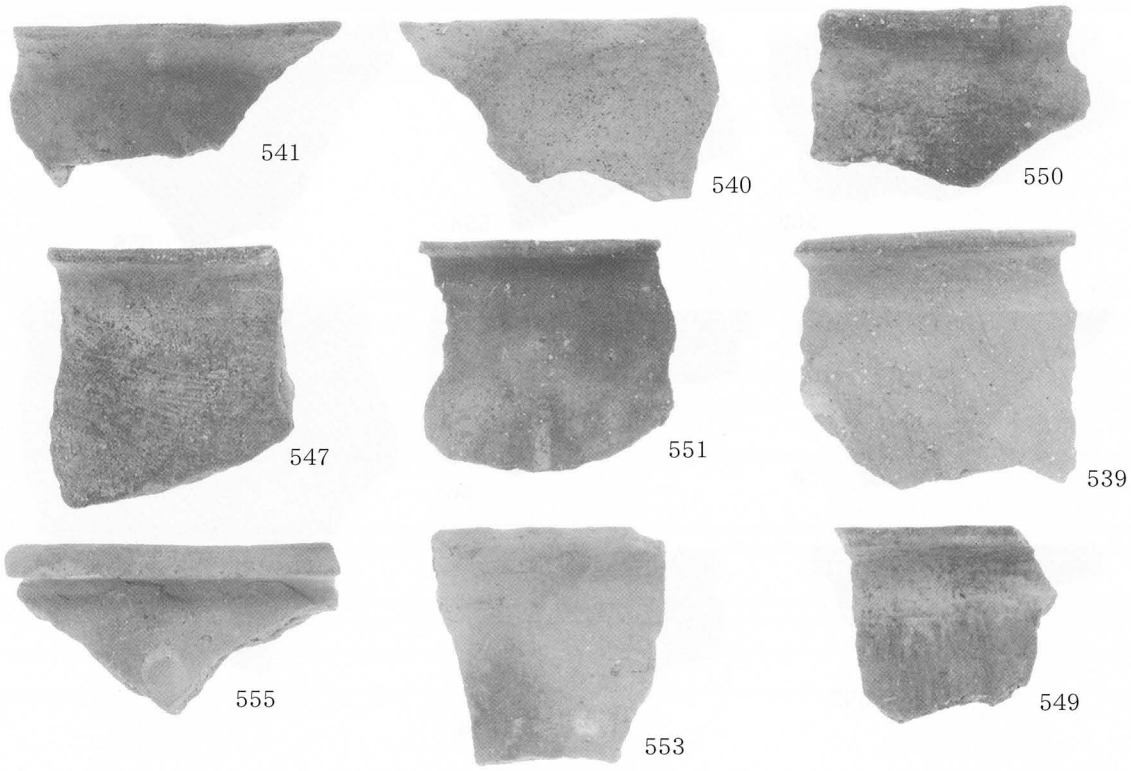
2. 第58次第16層出土弥生土器　鉢



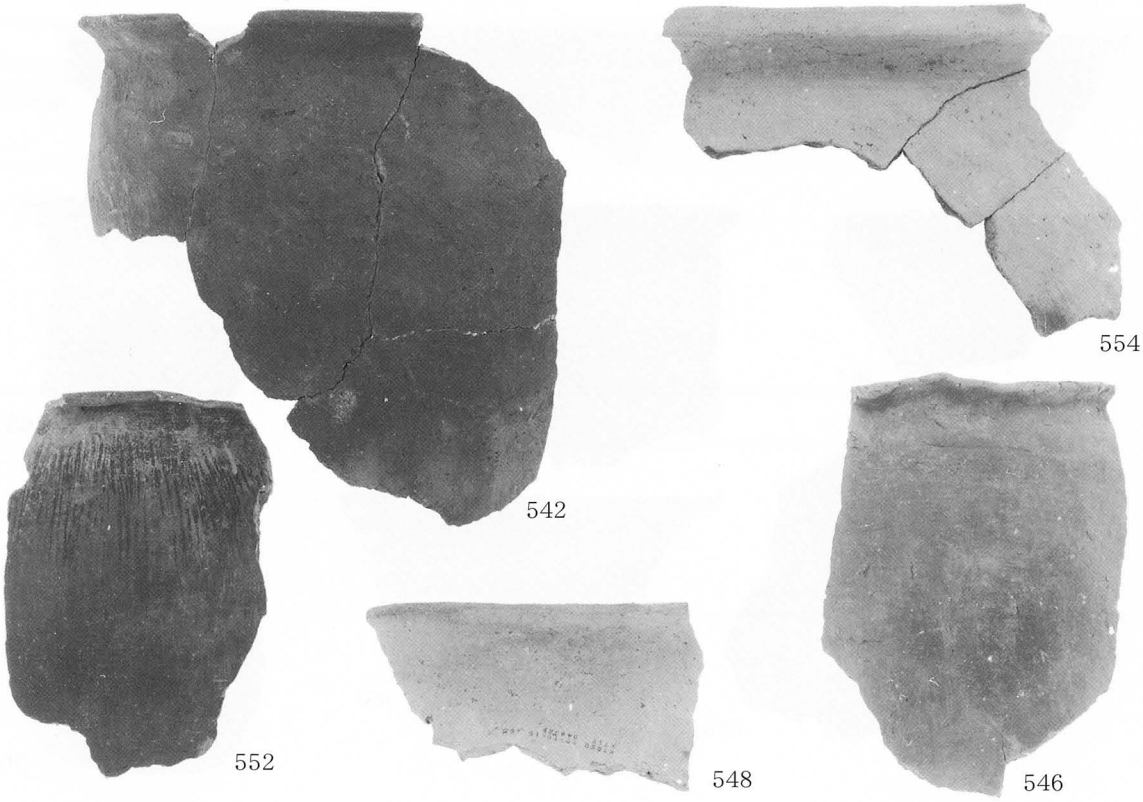
1. 第58次第16層出土弥生土器　鉢



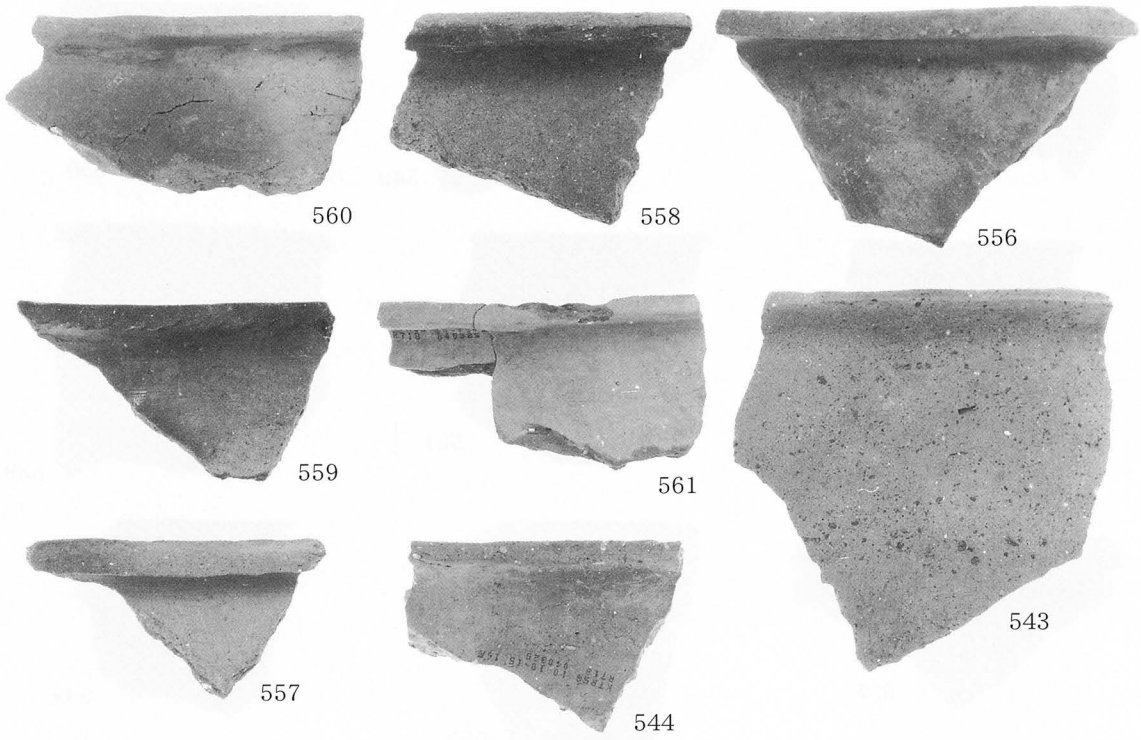
2. 第58次第16層出土弥生土器　鉢



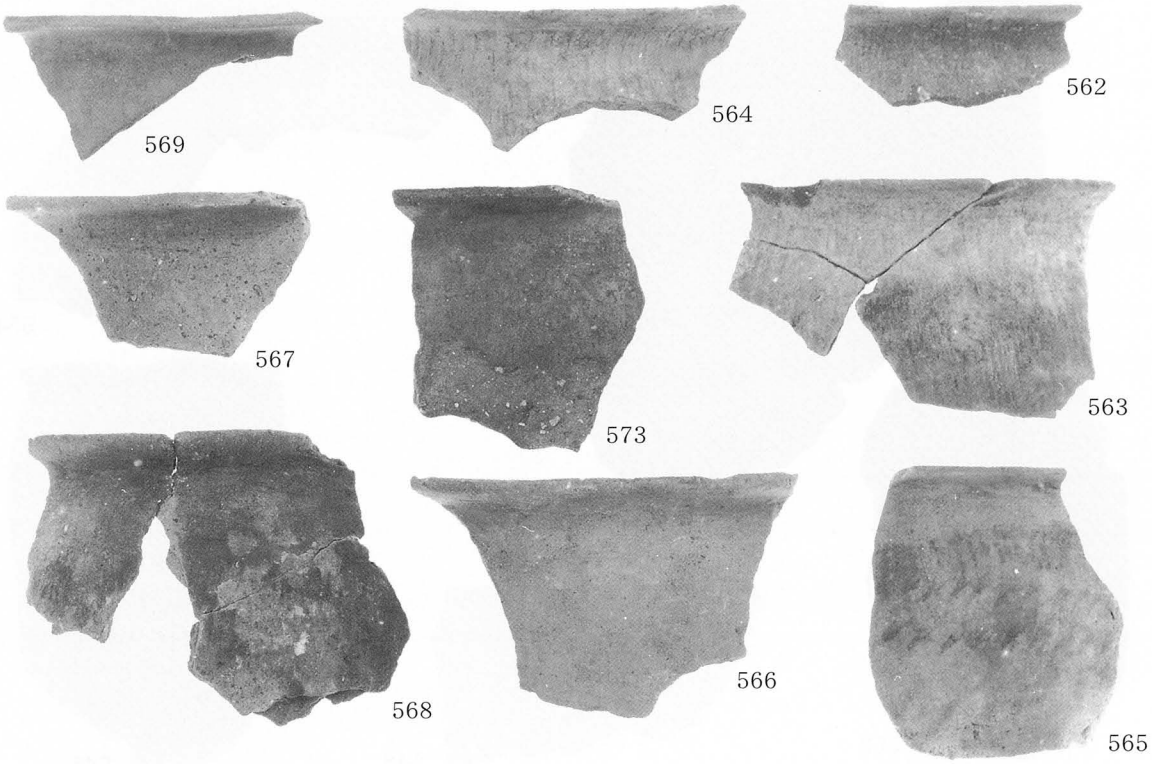
1. 第58次第16層出土弥生土器　甕



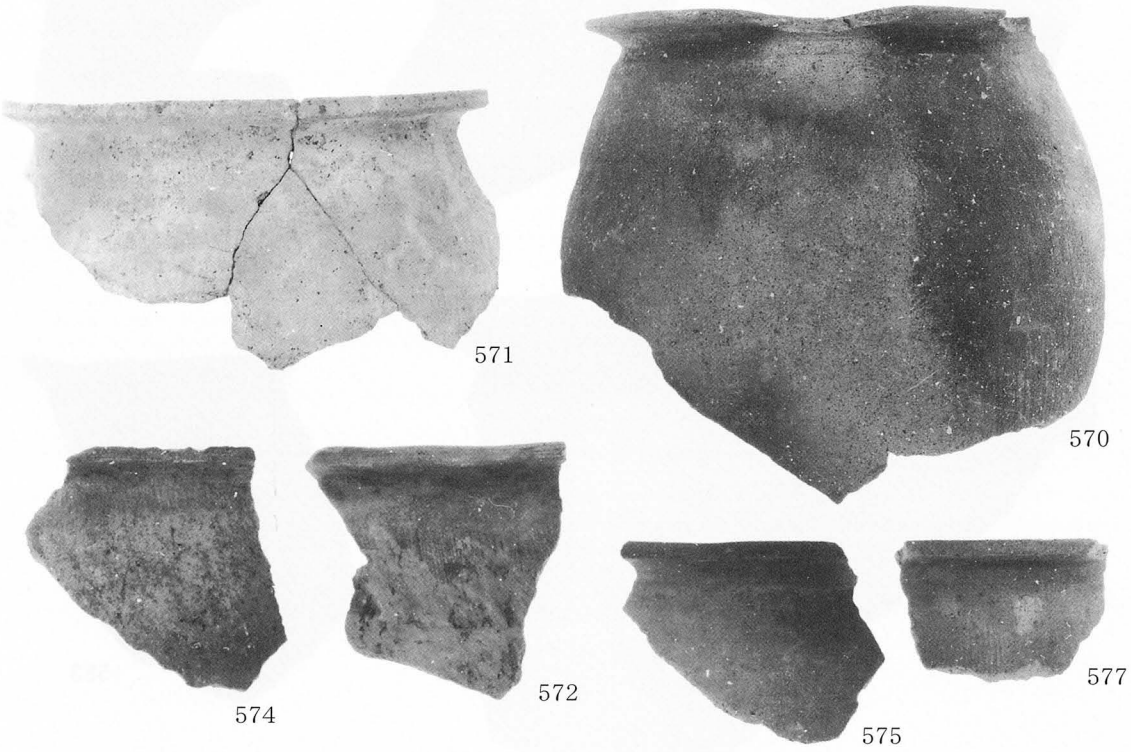
2. 第58次第16層出土弥生土器　甕



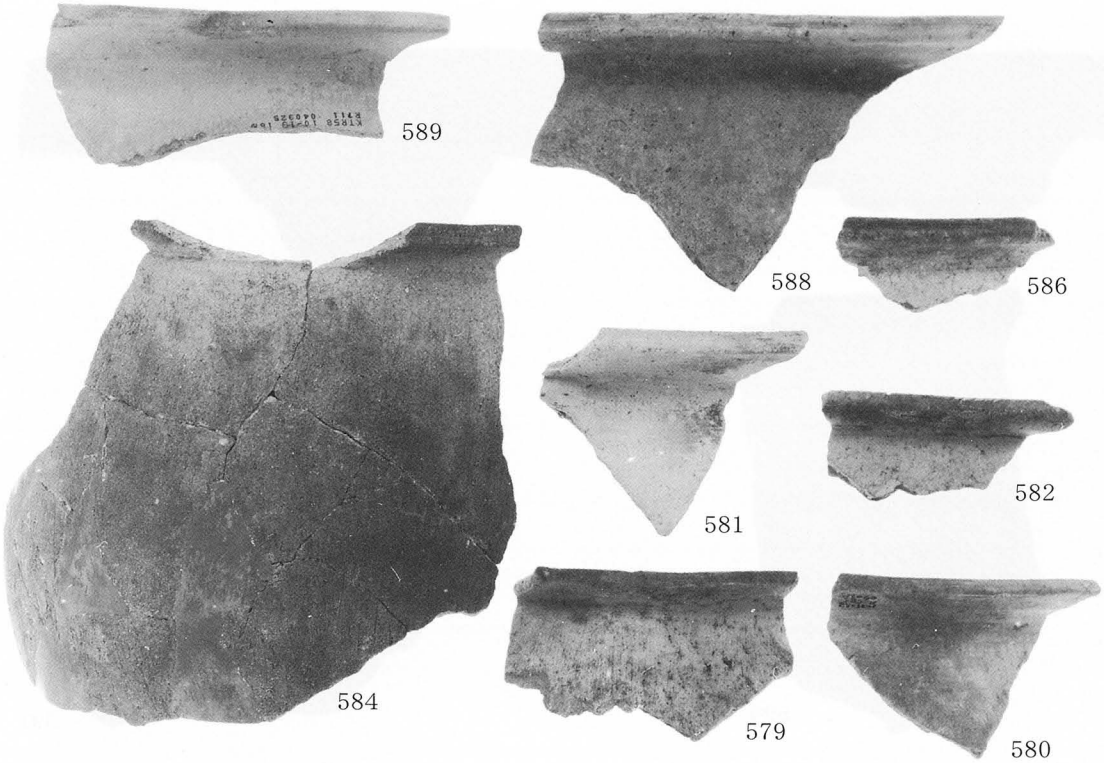
1. 第58次第16層出土弥生土器　甕



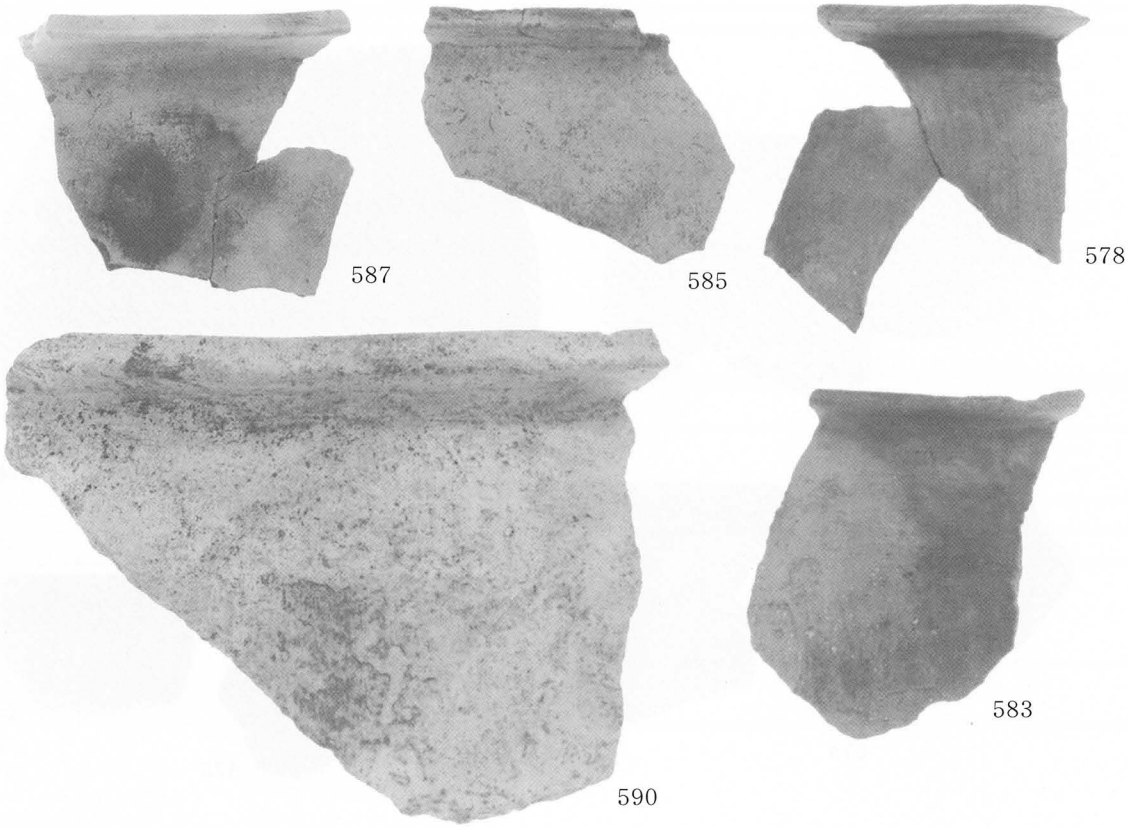
2. 第58次第16層出土弥生土器　甕



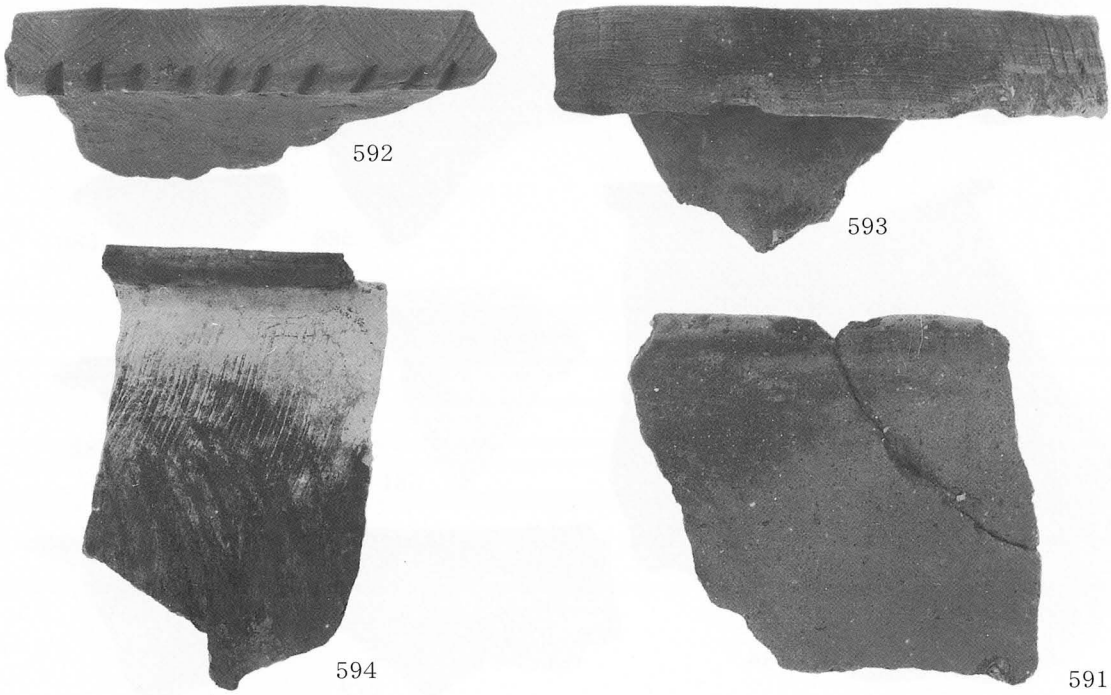
1. 第58次第16層出土弥生土器　甕



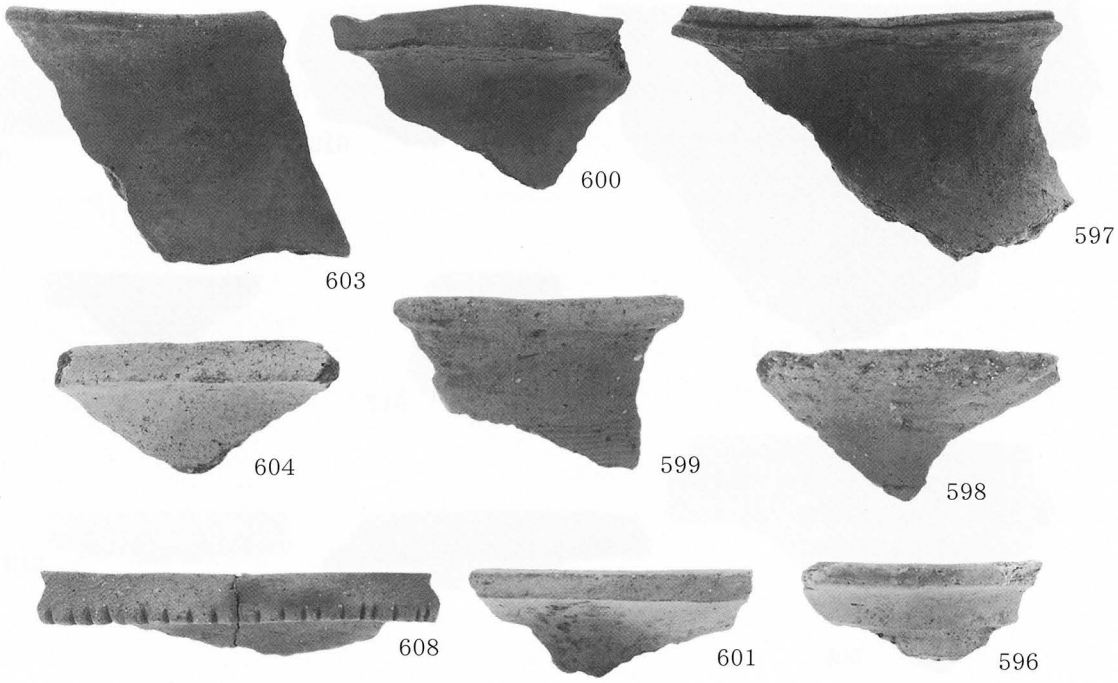
2. 第58次第16層出土弥生土器　甕



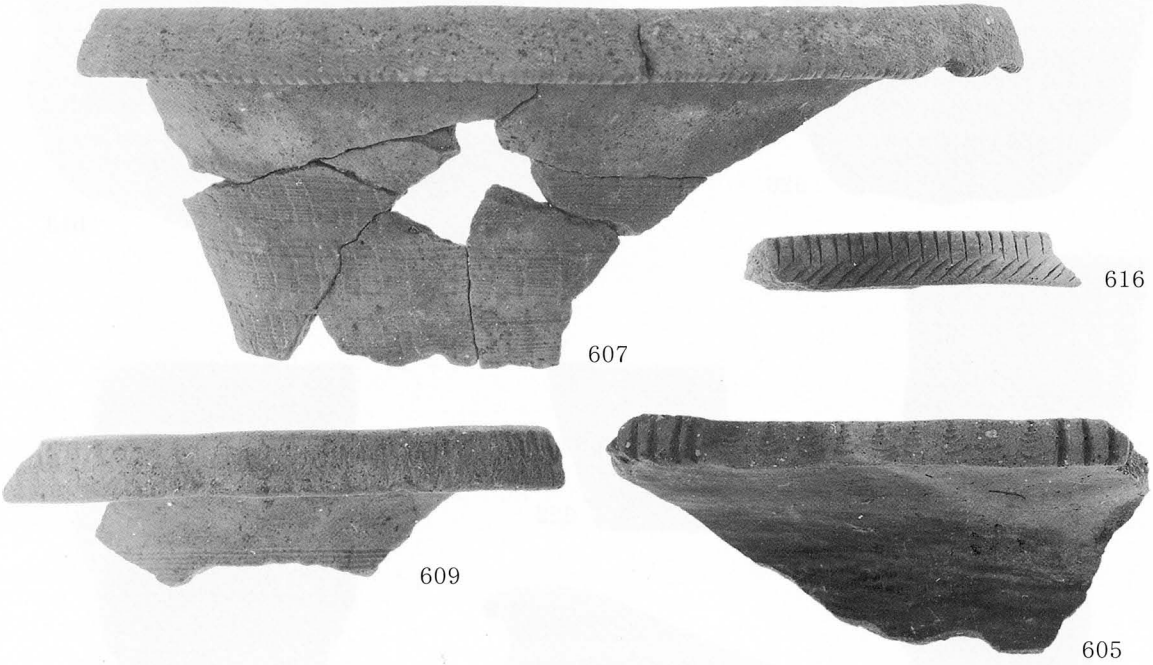
1. 第58次第16層出土弥生土器　甕



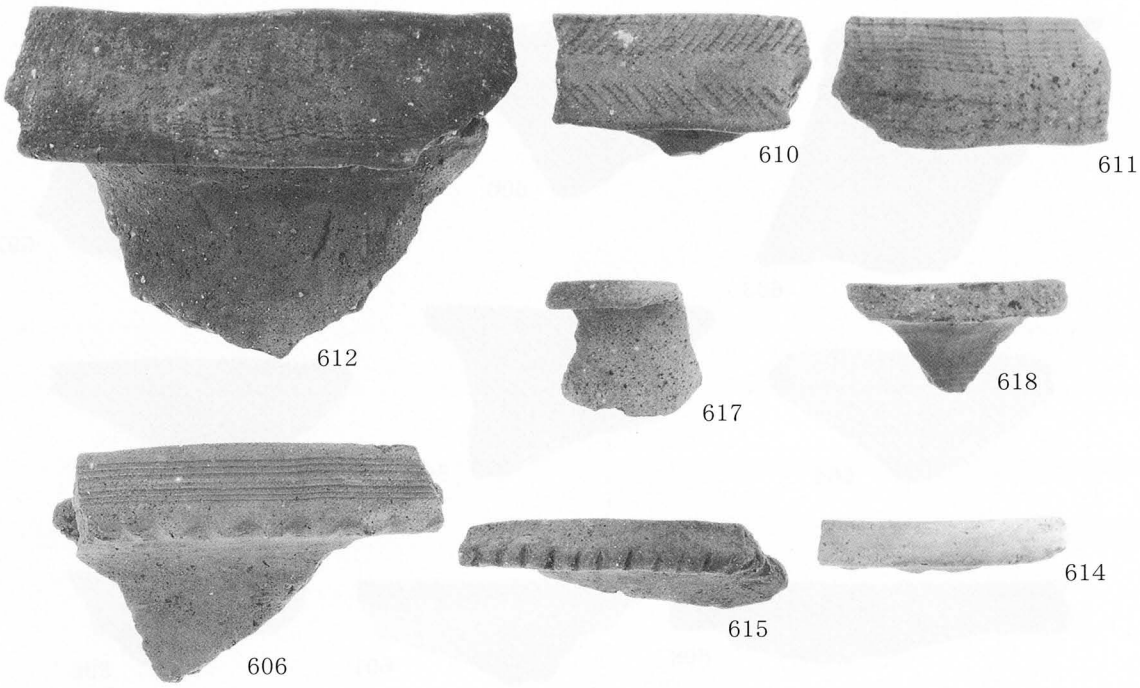
2. 第58次第16ｅ層出土弥生土器　鉢・甕・壷



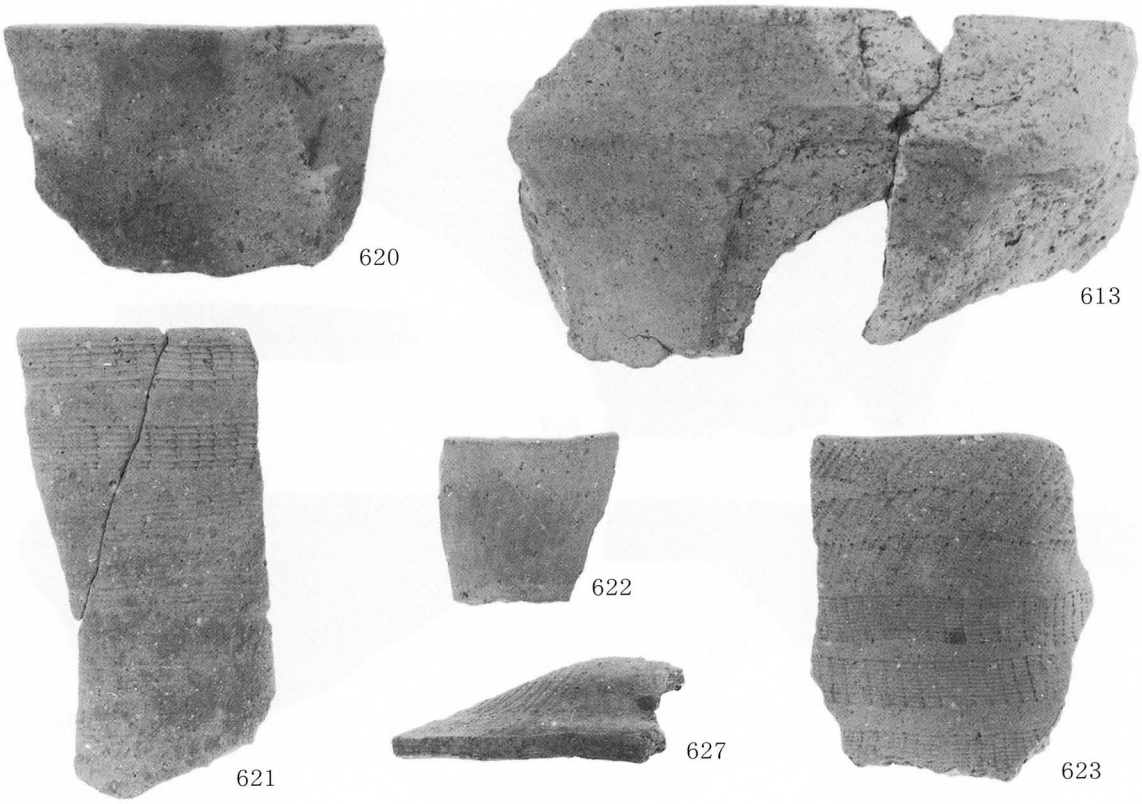
1. 第58次第17層出土弥生土器　壷



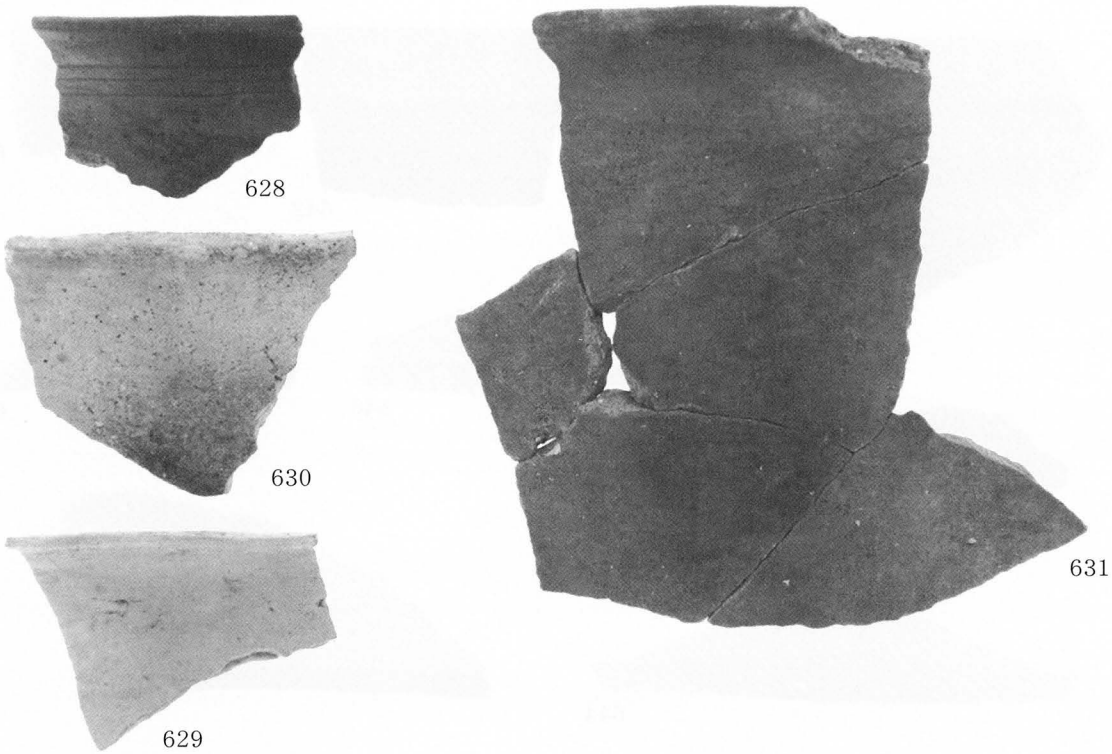
2. 第58次第17層出土弥生土器　壷



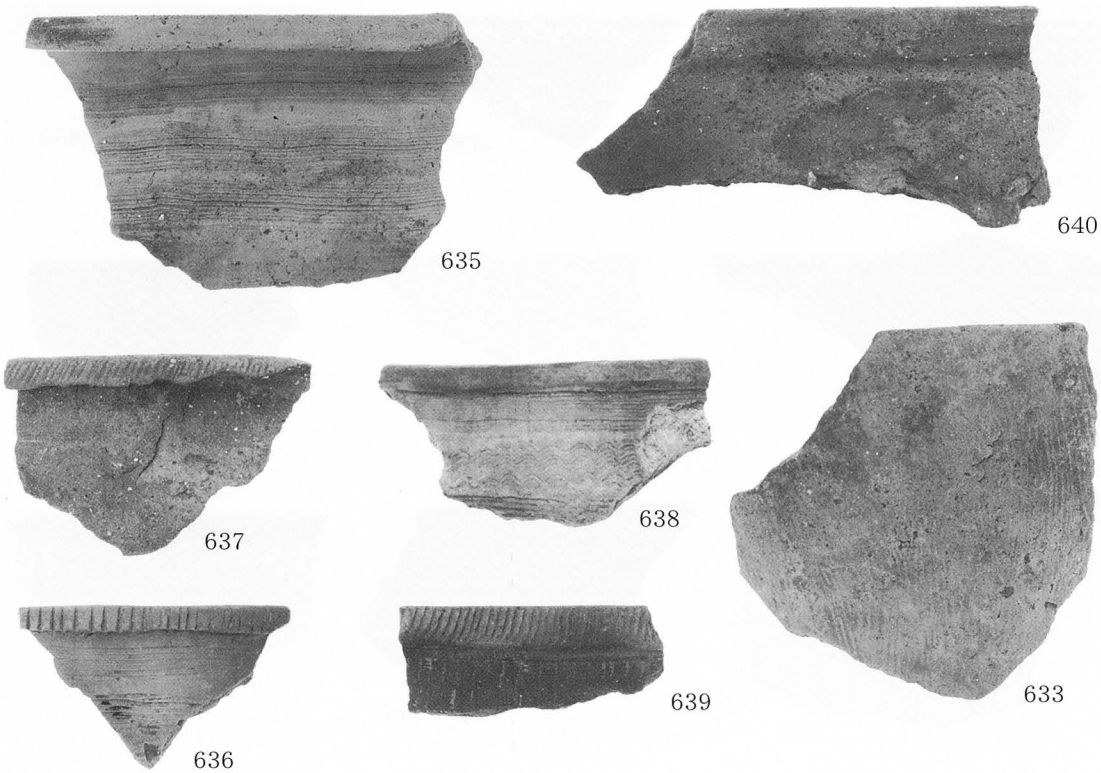
1. 第58次第17層出土弥生土器　壷



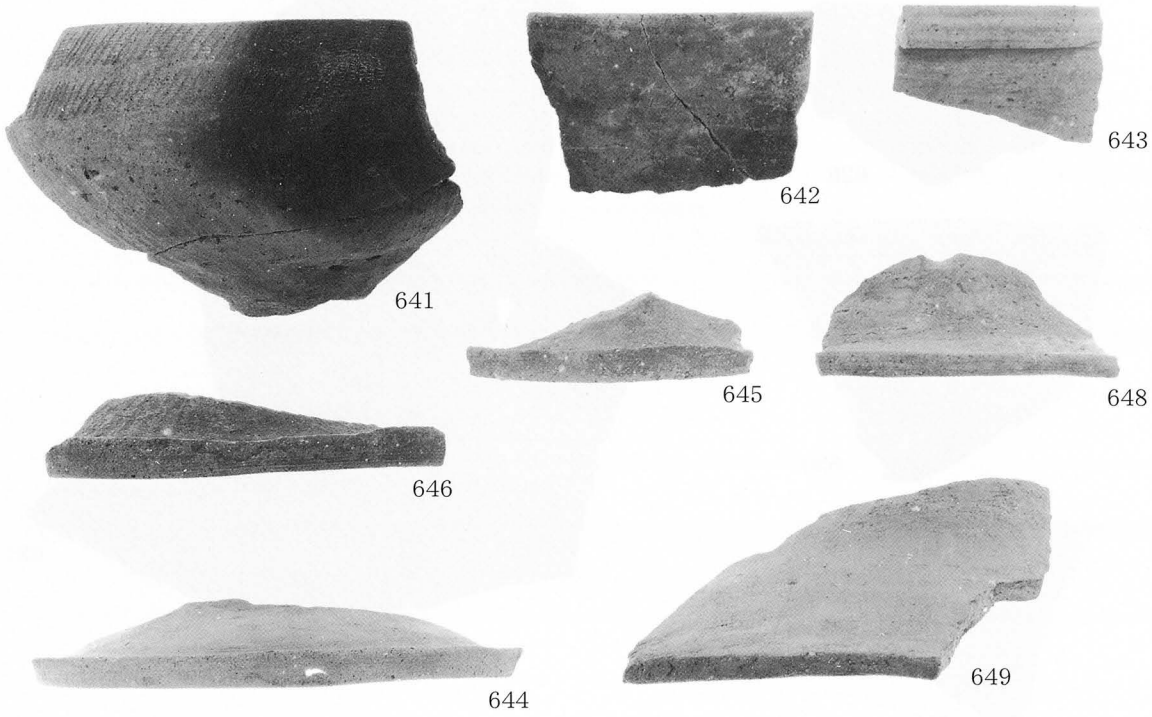
2. 第58次第17層出土弥生土器　壷・細頸壷・水差形土器・壷蓋



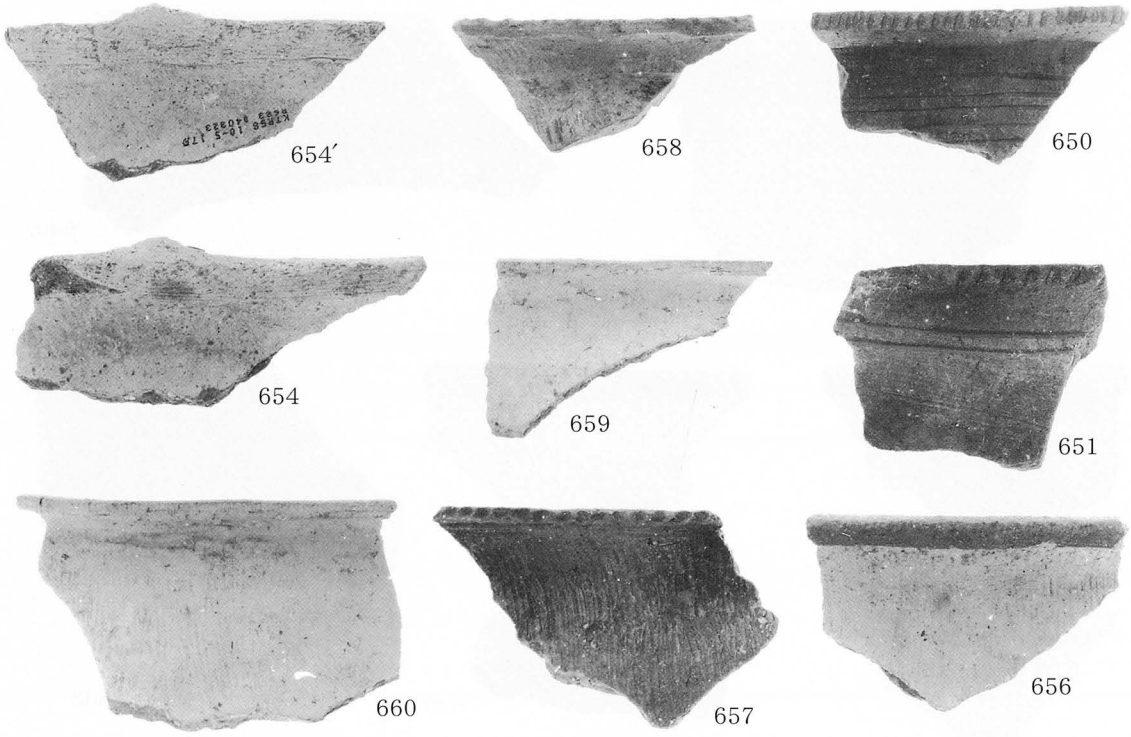
1. 第58次第17層出土弥生土器　鉢



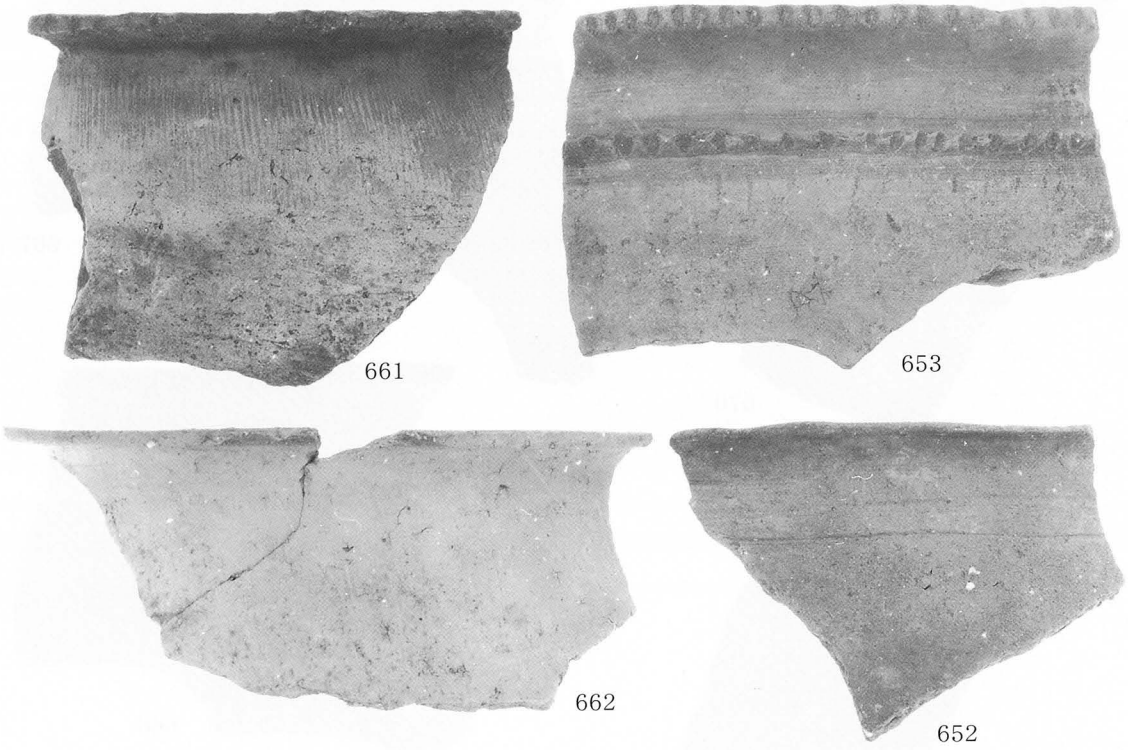
2. 第58次第17層出土弥生土器　鉢



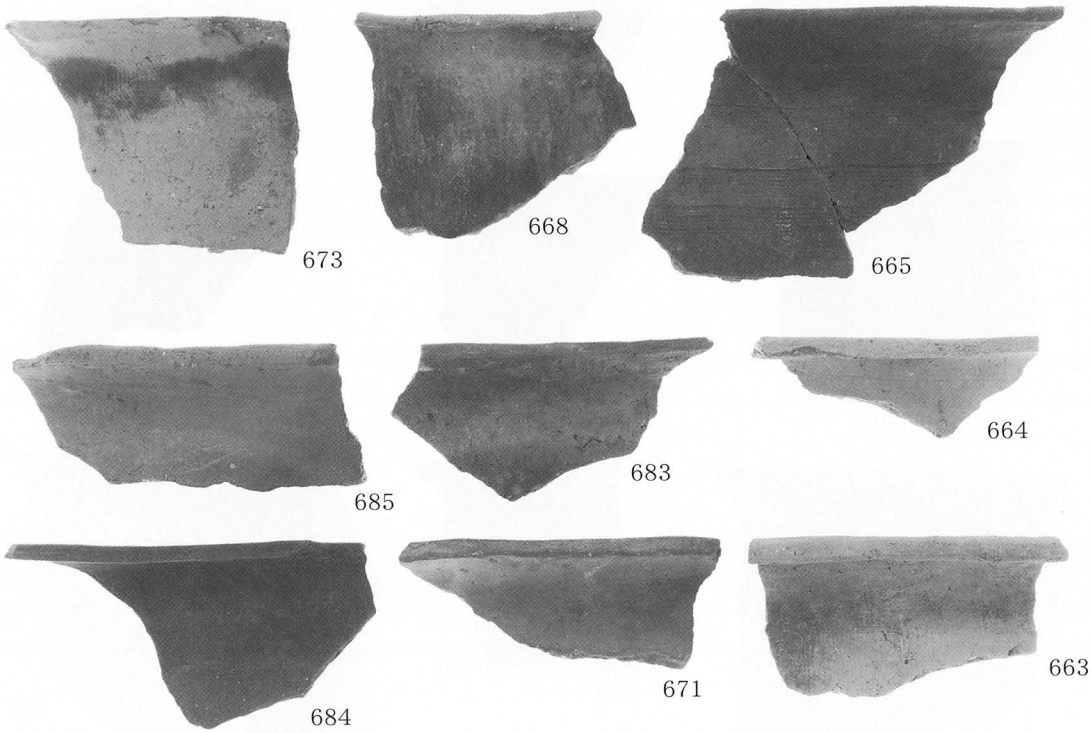
1. 第58次第17層出土弥生土器　高杯・甕蓋



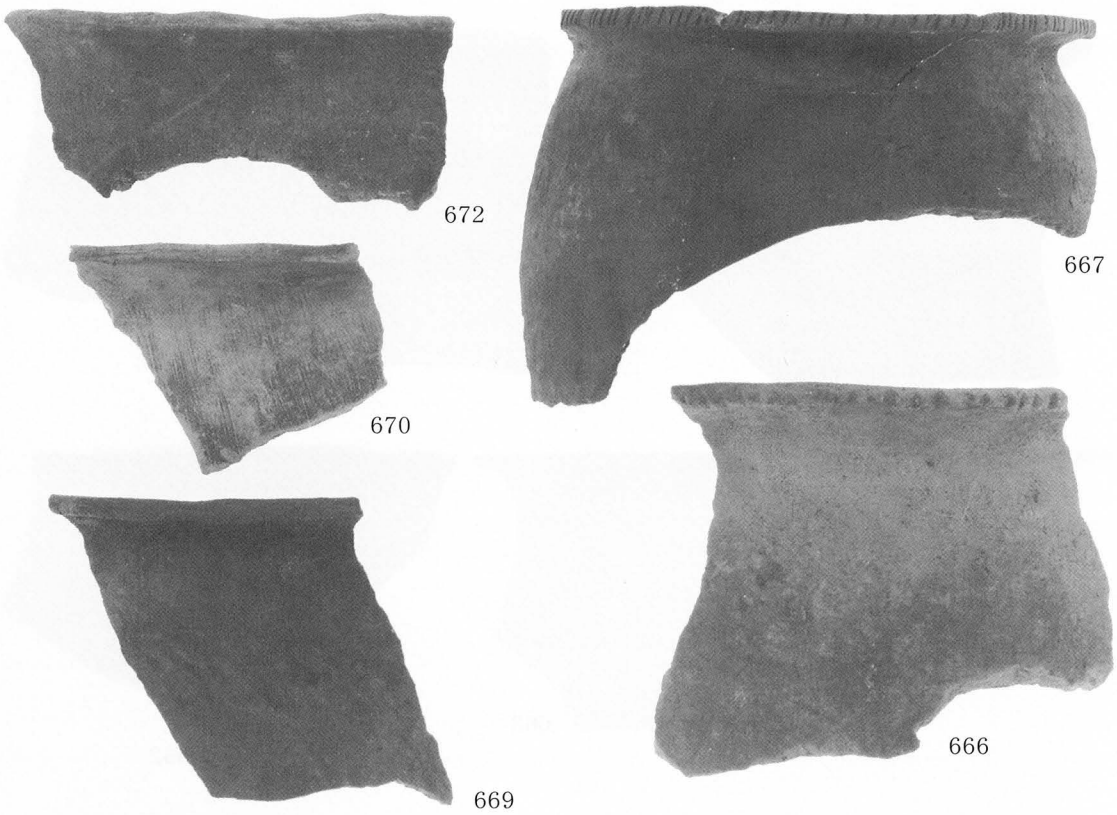
2. 第58次第17層出土弥生土器　甕



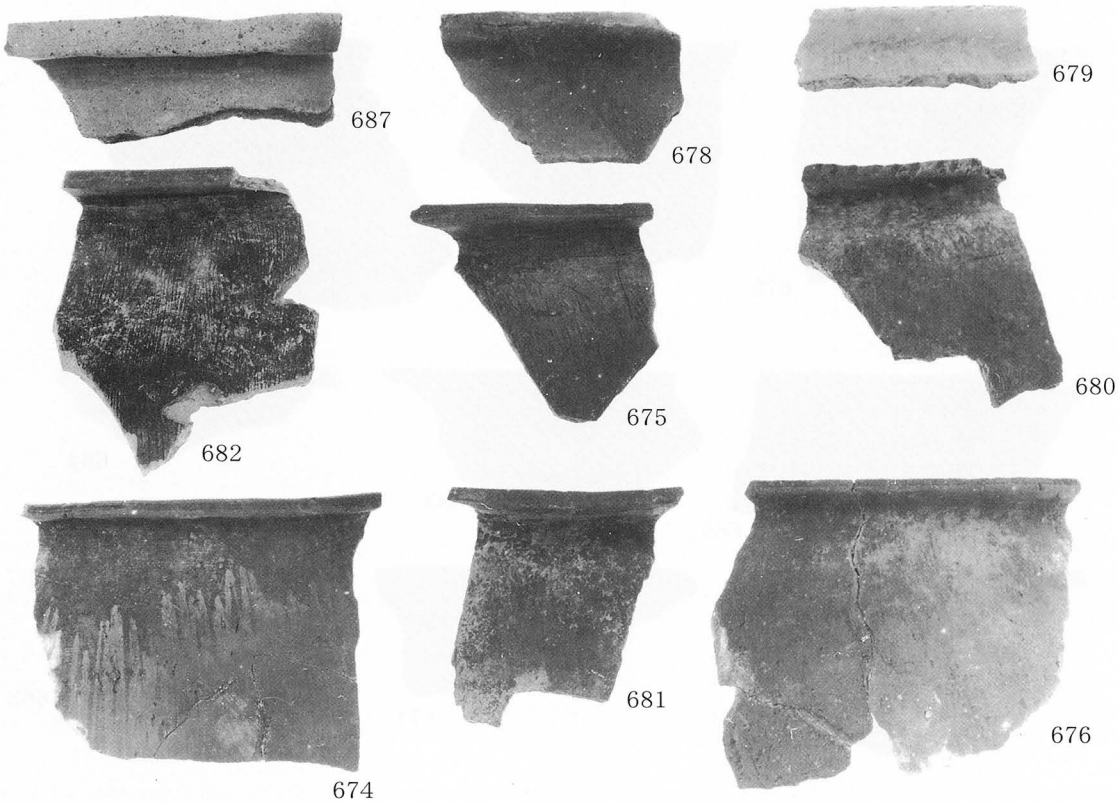
1. 第58次第17層出土弥生土器　甕



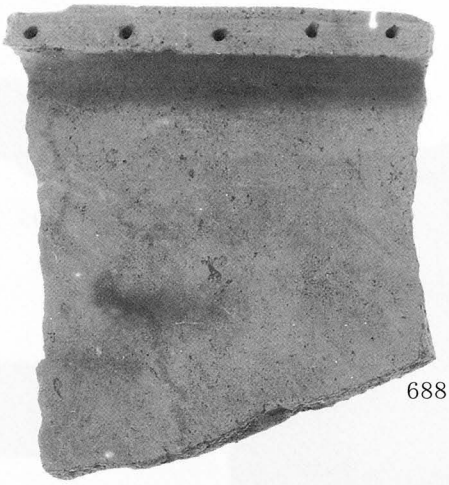
2. 第58次第17層出土弥生土器　甕



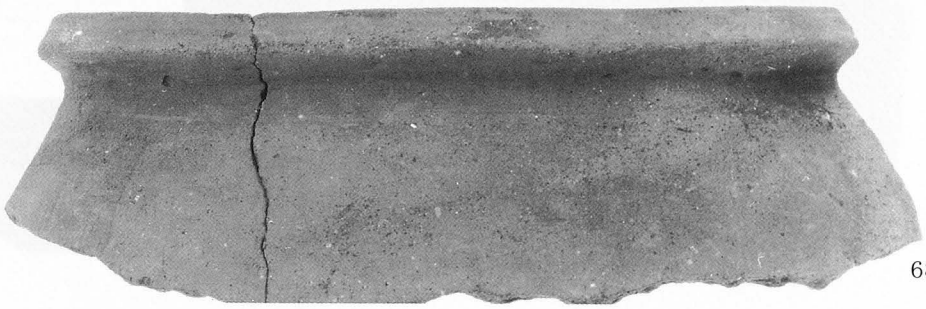
1. 第58次第17層出土弥生土器　甕



2. 第58次第17層出土弥生土器　甕


688

677

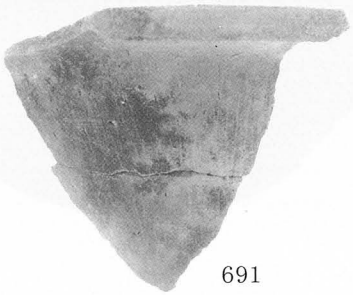

686

1. 第58次第17層出土弥生土器　甕

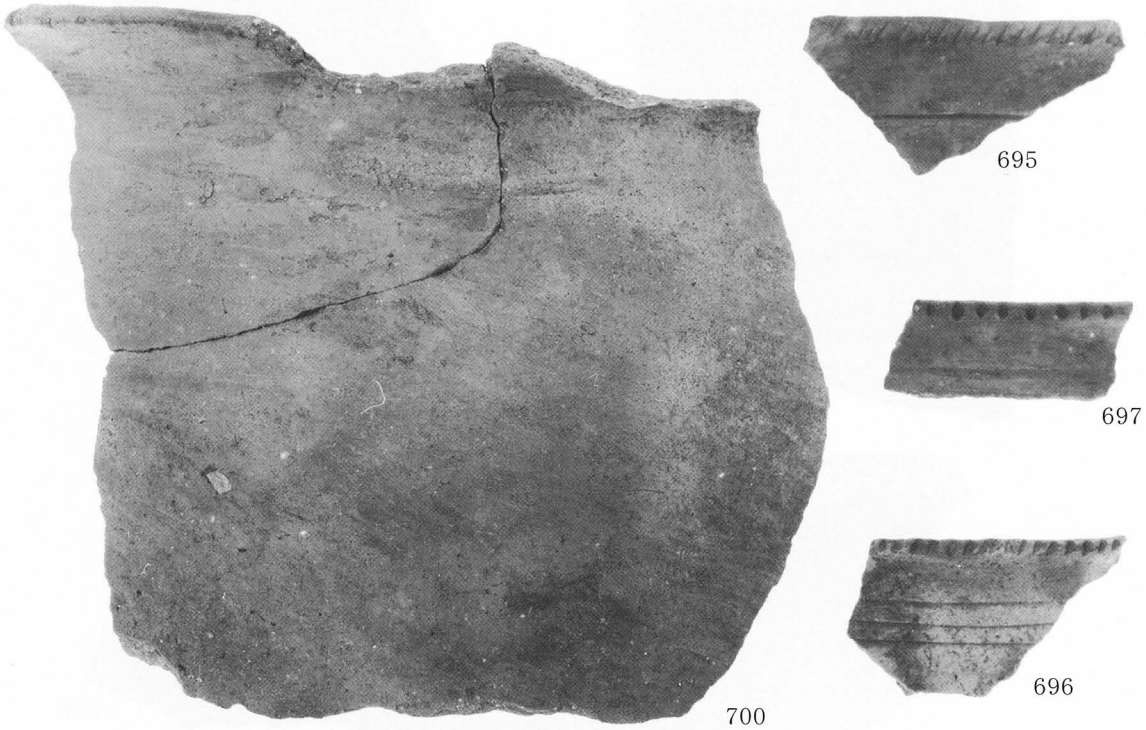
699

698

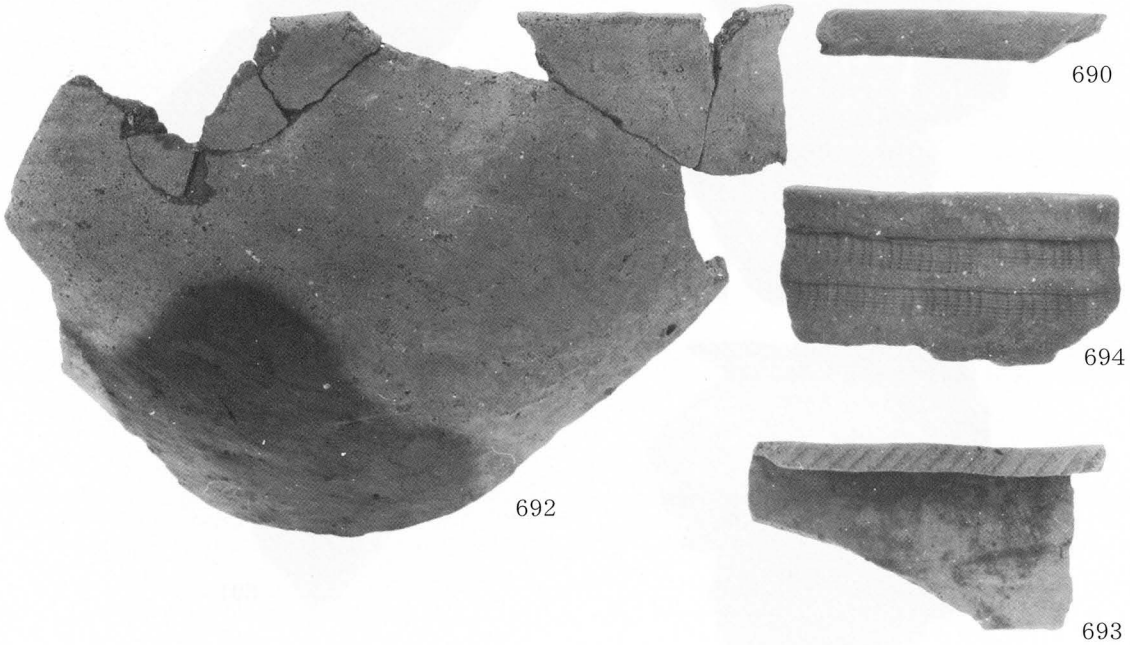
701


691

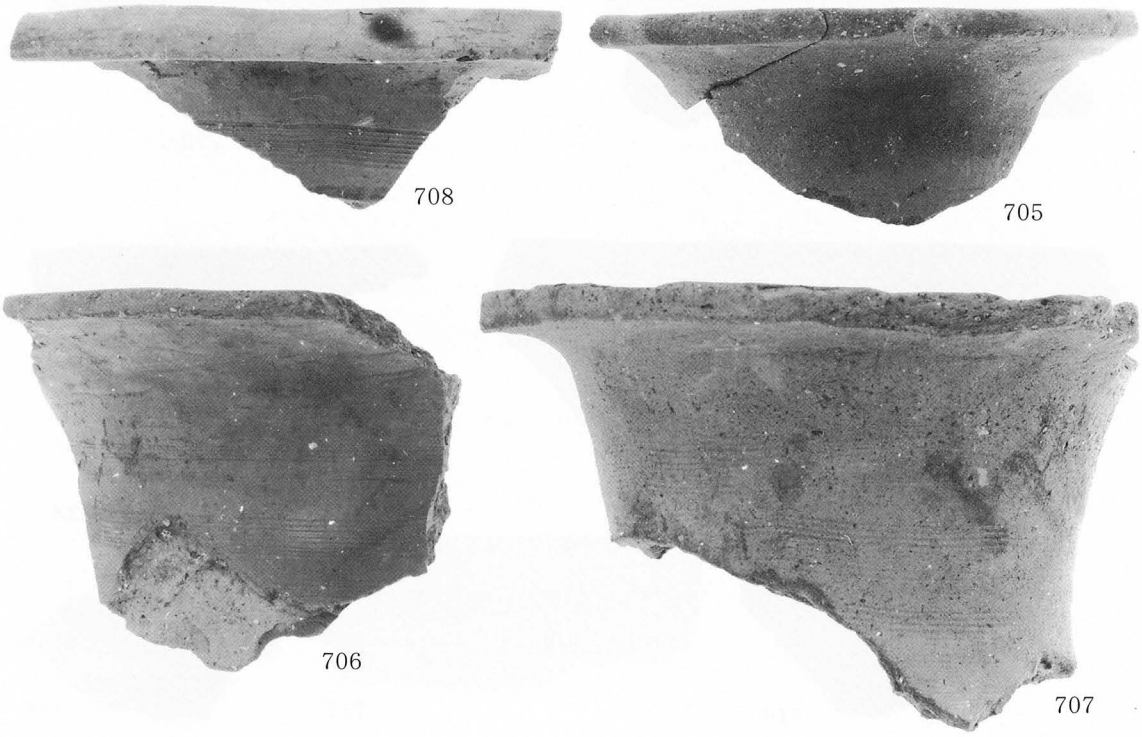
2. 第58次第18層出土弥生土器　甕・高杯



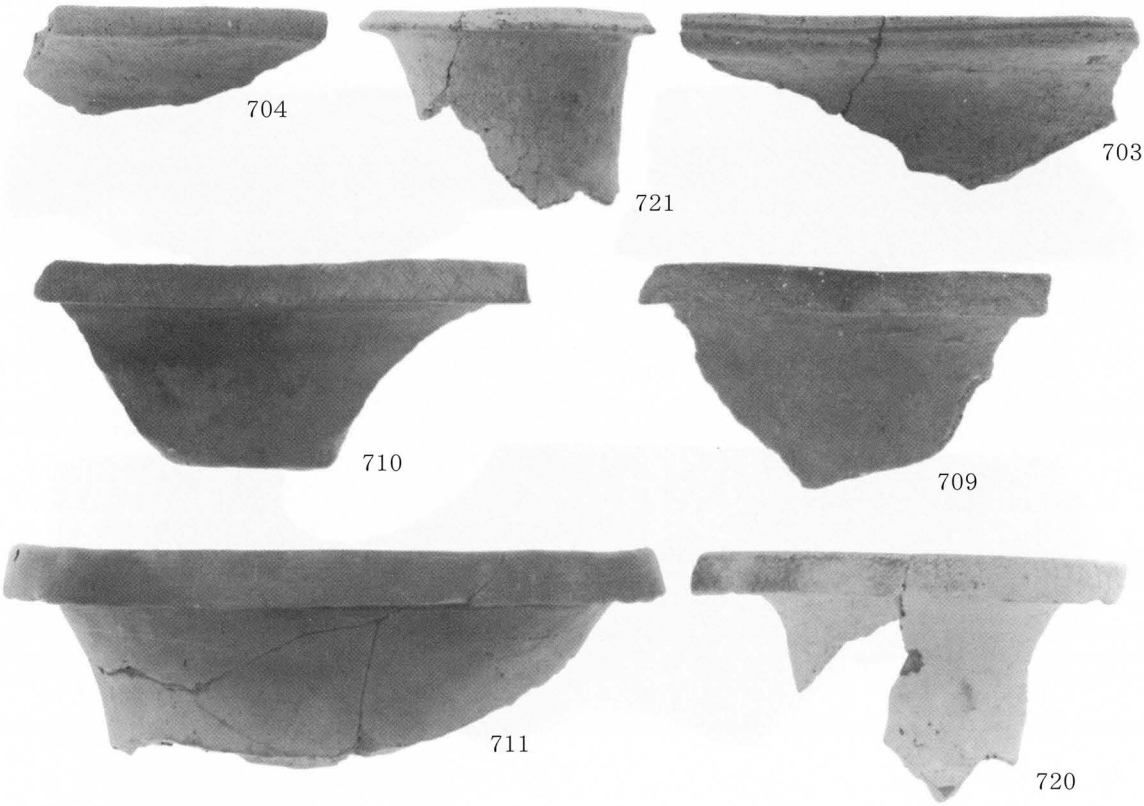
1. 第58次第18層出土弥生土器　甕



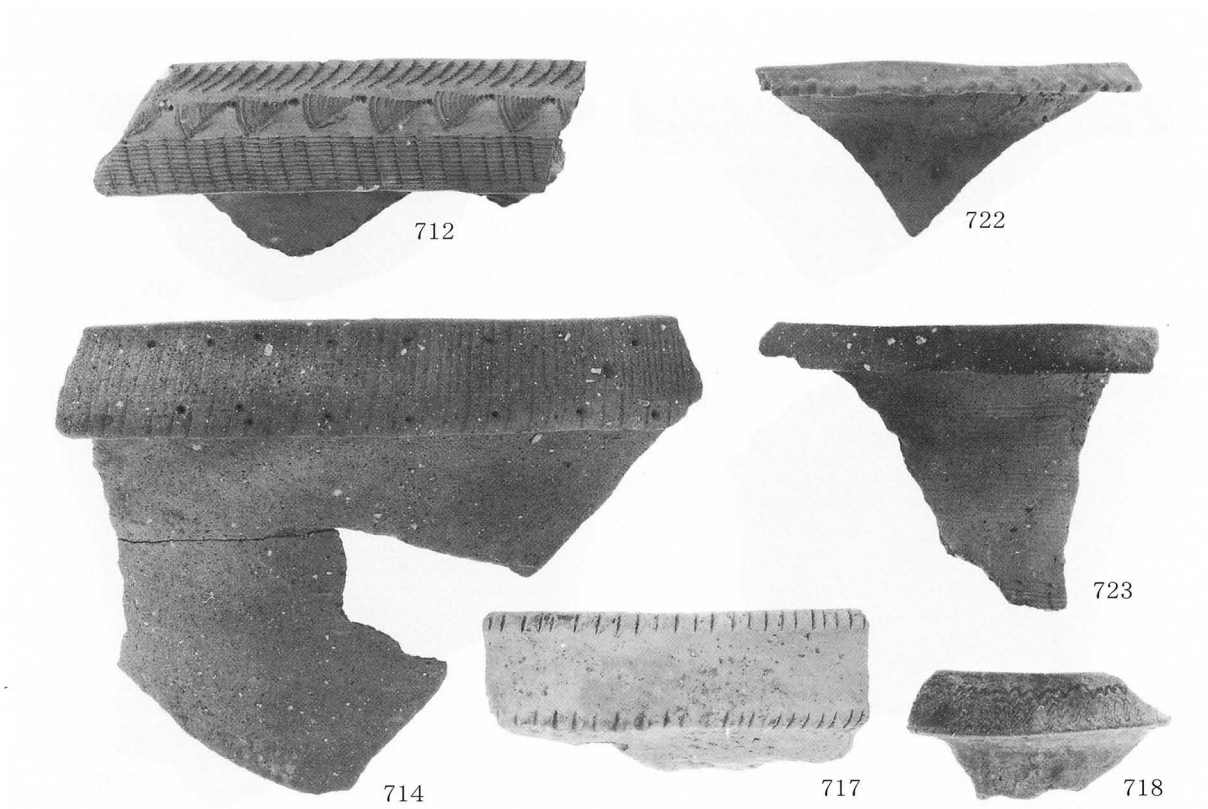
2. 第58次第18層出土弥生土器　壷・鉢



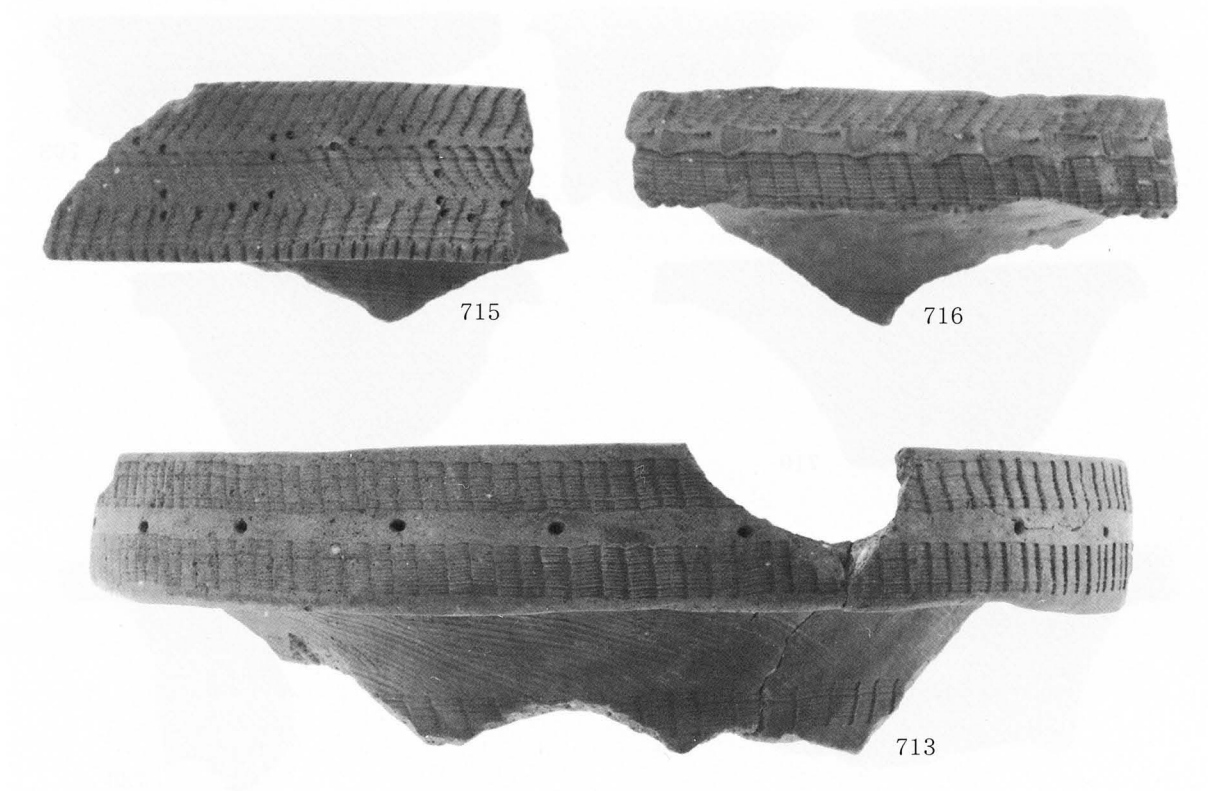
1. 第58次第14～18層出土弥生土器　壷



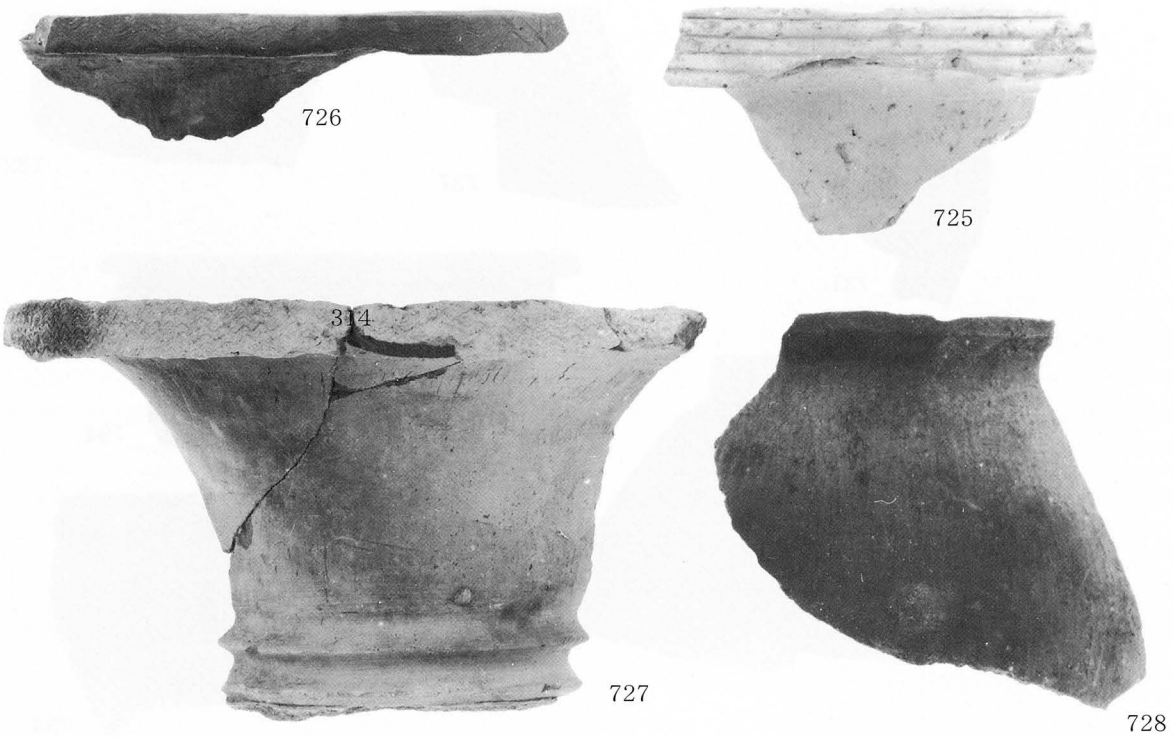
2. 第58次第14～18層出土弥生土器　壷



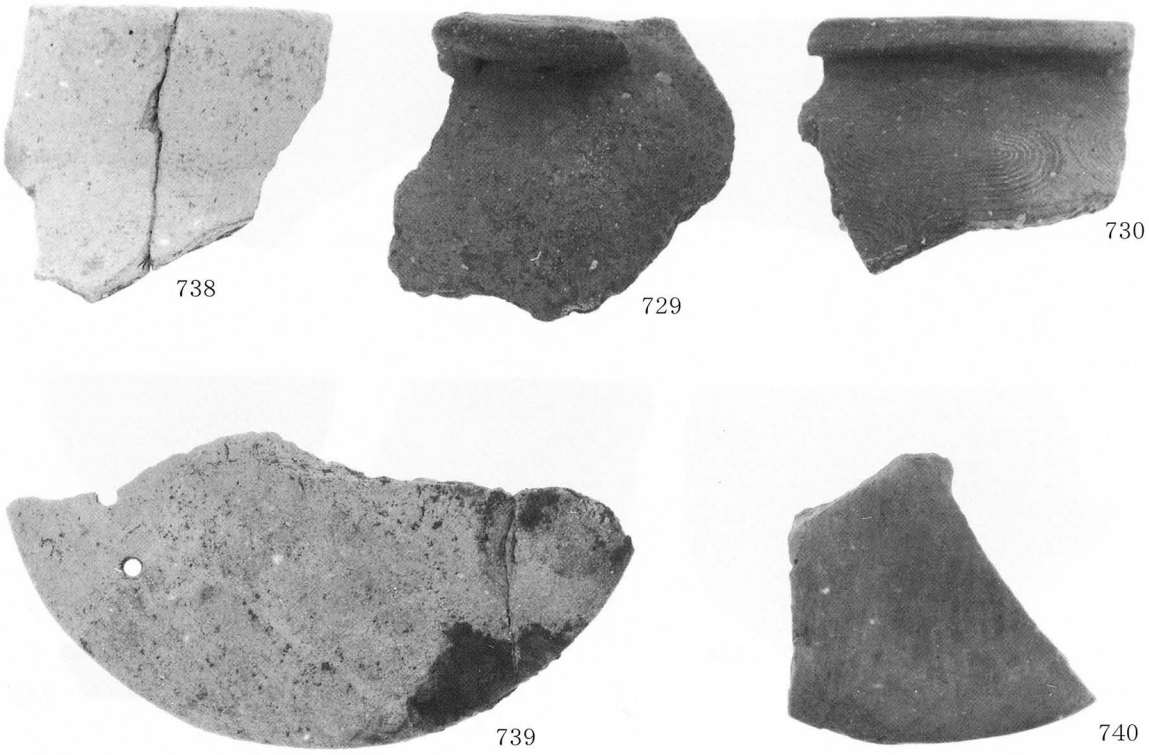
1. 第58次第14～18層出土弥生土器　壷



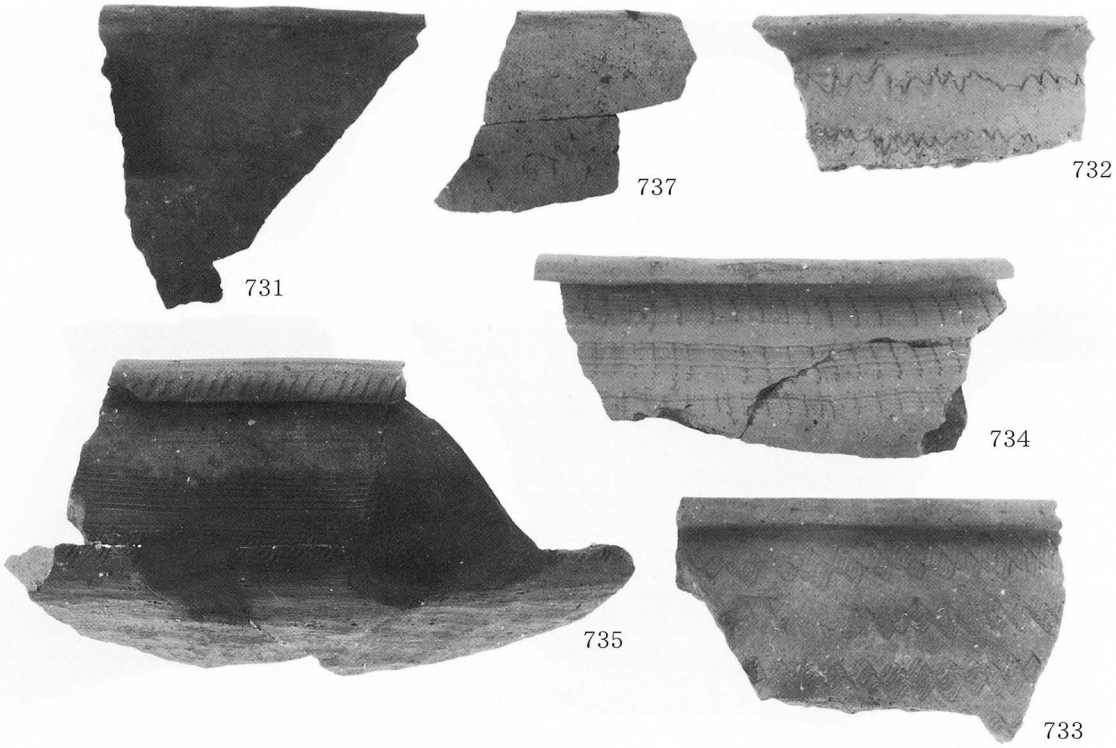
2. 第58次第14～18層出土弥生土器　壷



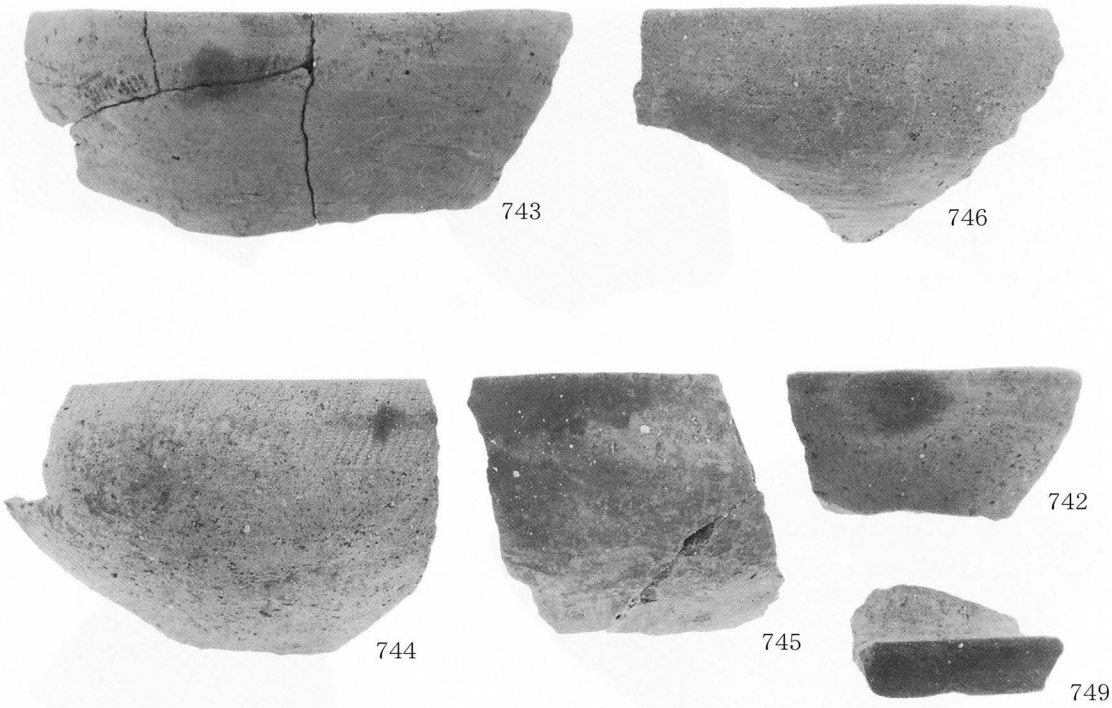
1. 第58次第14～18層出土弥生土器　壷



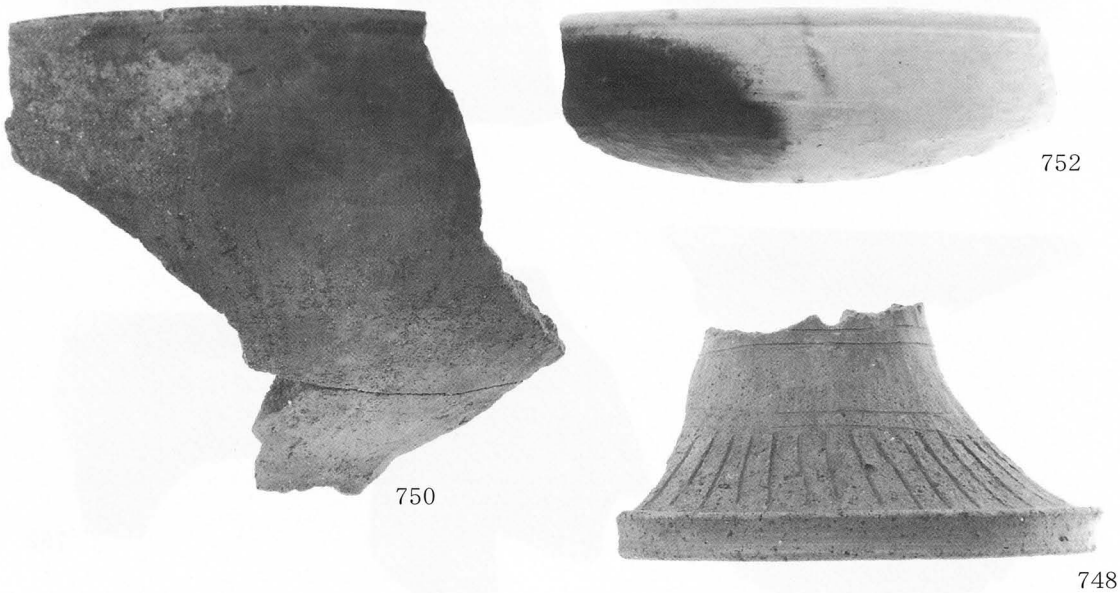
2. 第58次第14～18層出土弥生土器　無頸壷・水差形土器・壷蓋



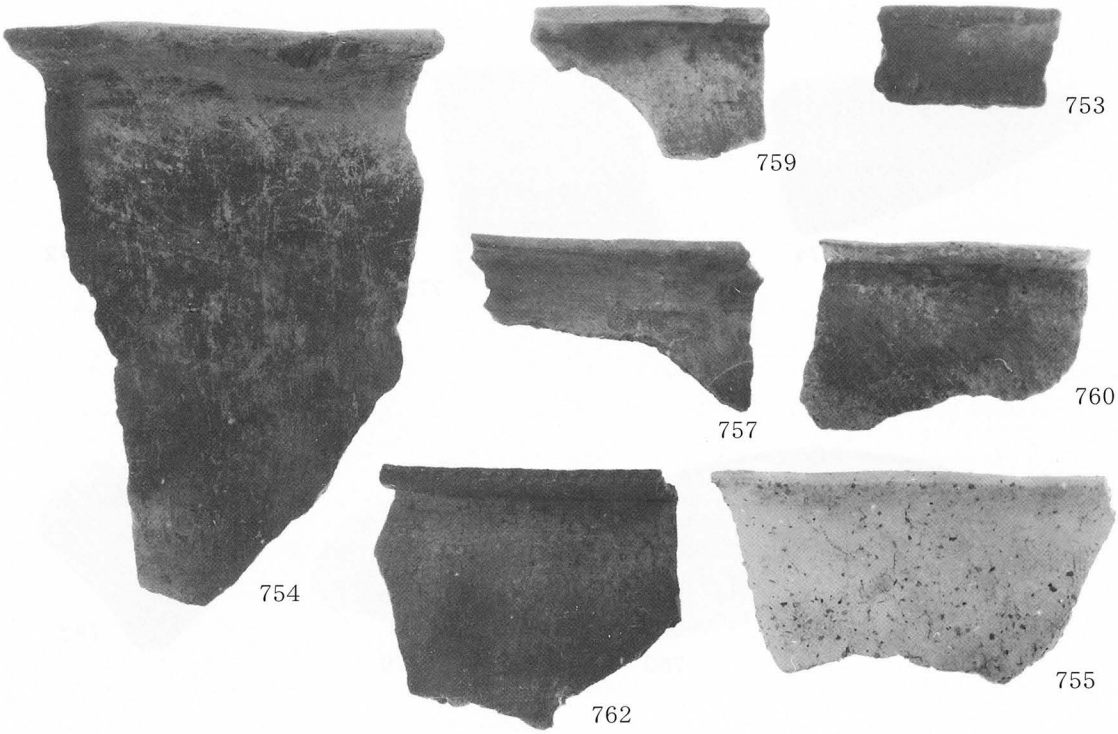
1. 第58次第14～18層出土弥生土器　鉢



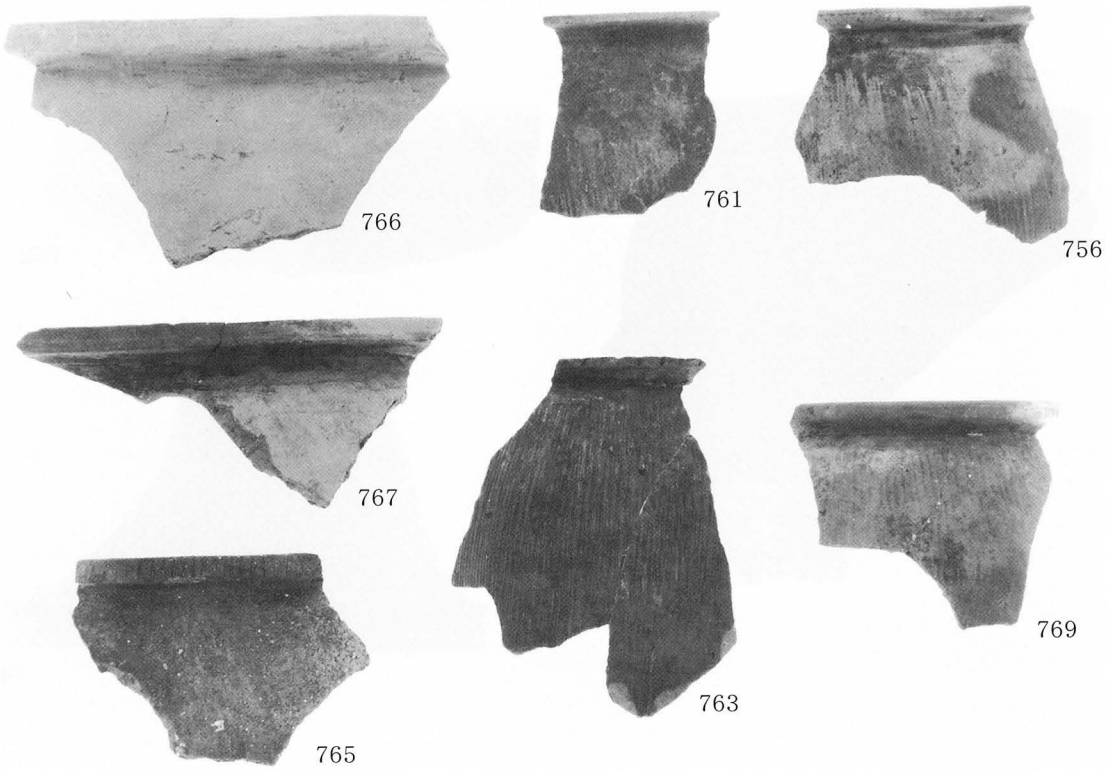
2. 第58次第14～18層出土弥生土器　高杯



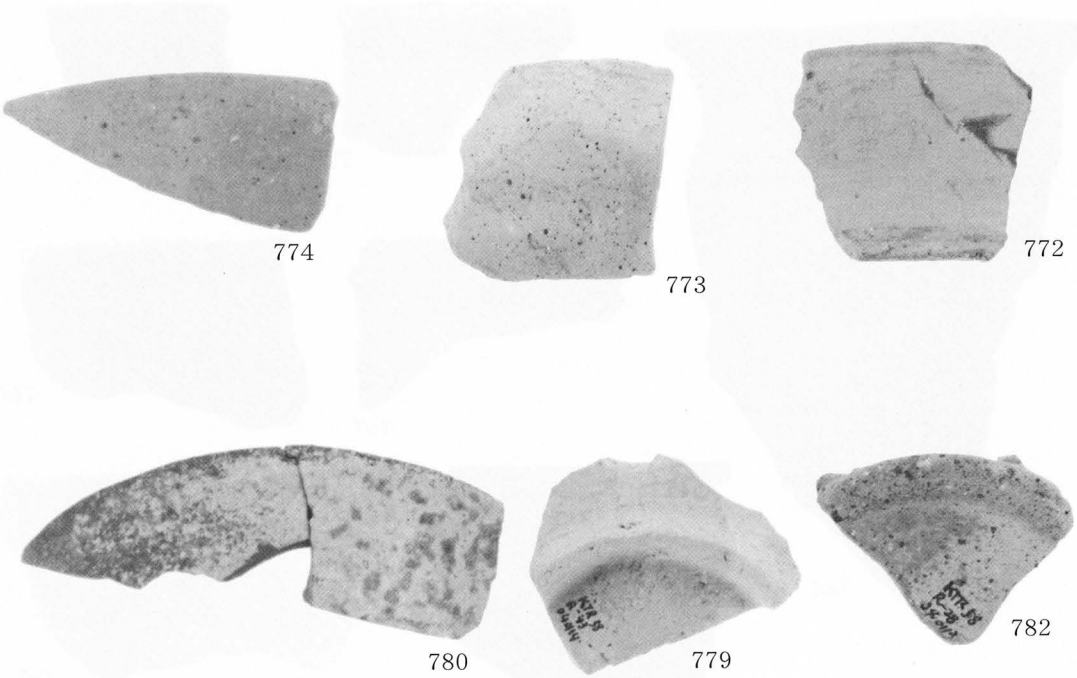
1. 第58次第14～18層出土弥生土器　高杯



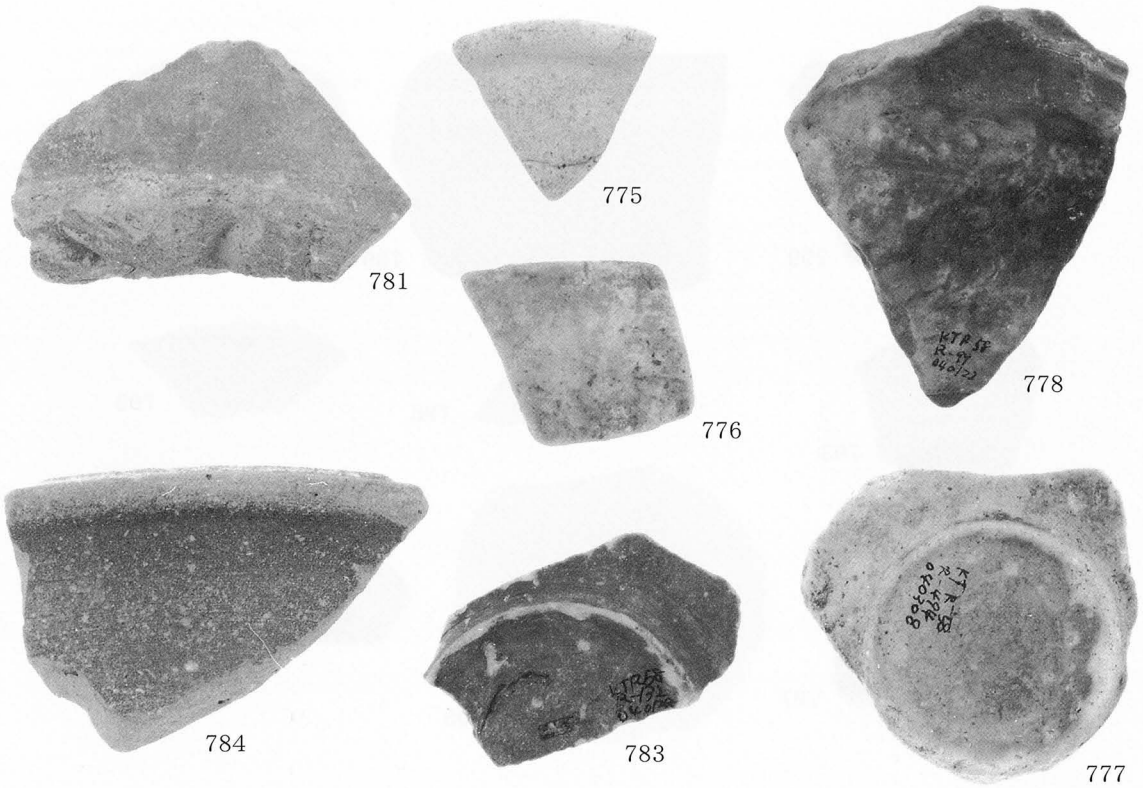
2. 第58次第14～18層出土弥生土器　甕



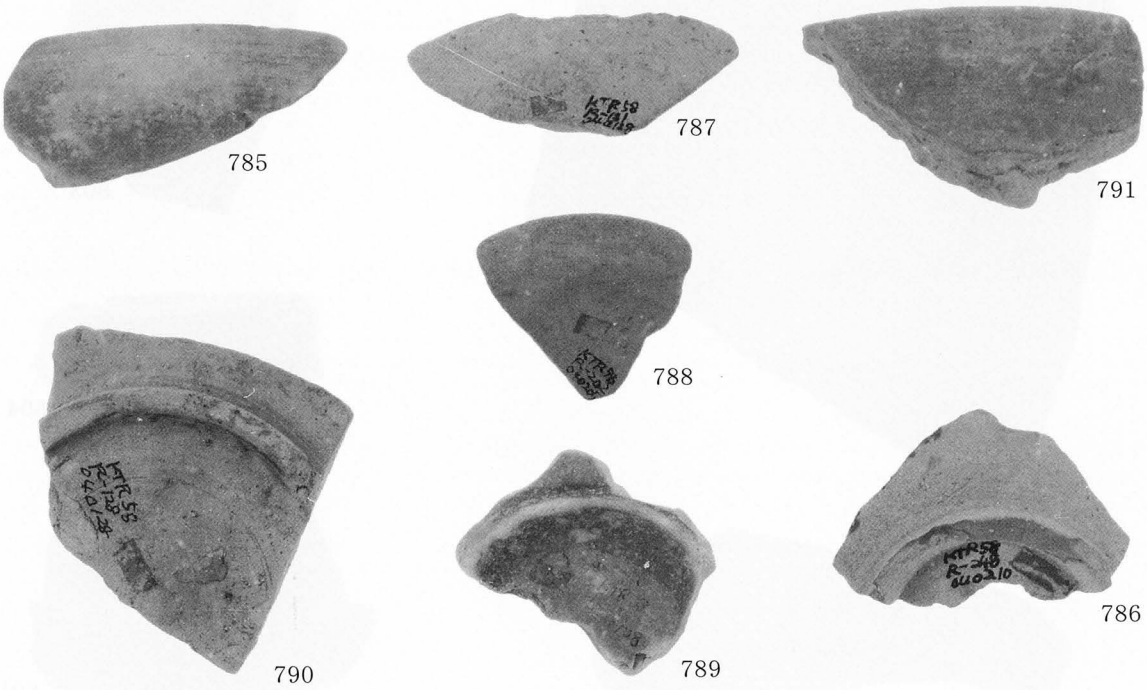
1. 第58次第14～18層出土弥生土器　甕



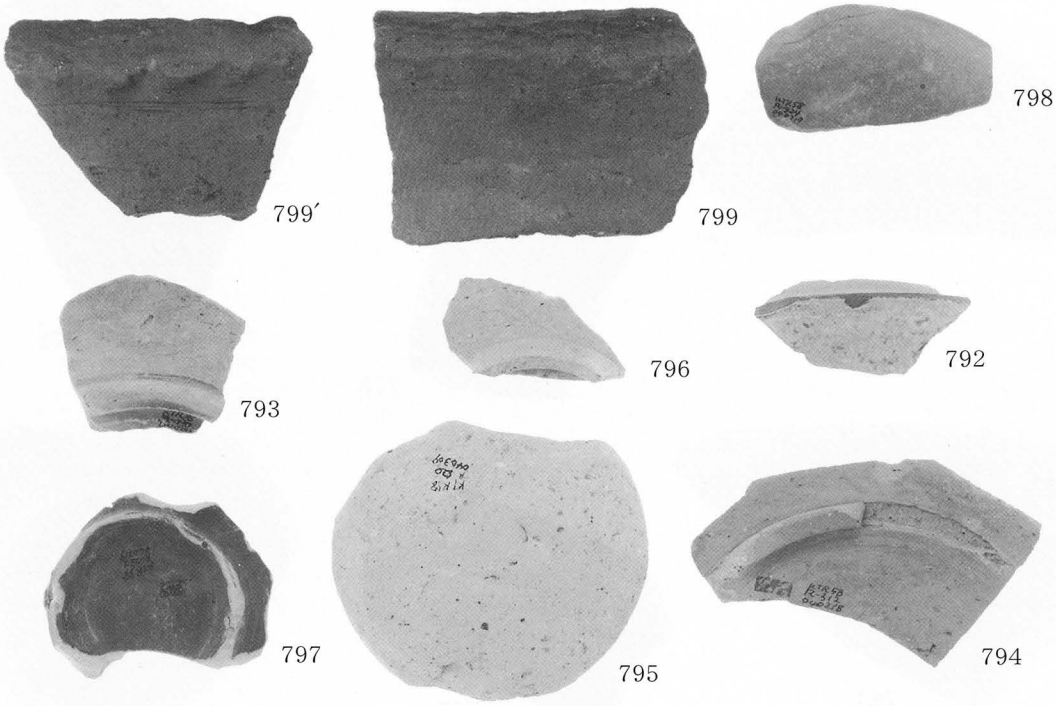
2. 第58次落ち込み４・５・11・16出土須恵器　杯、土師器　皿・甕、白磁　椀、黒色土器　椀



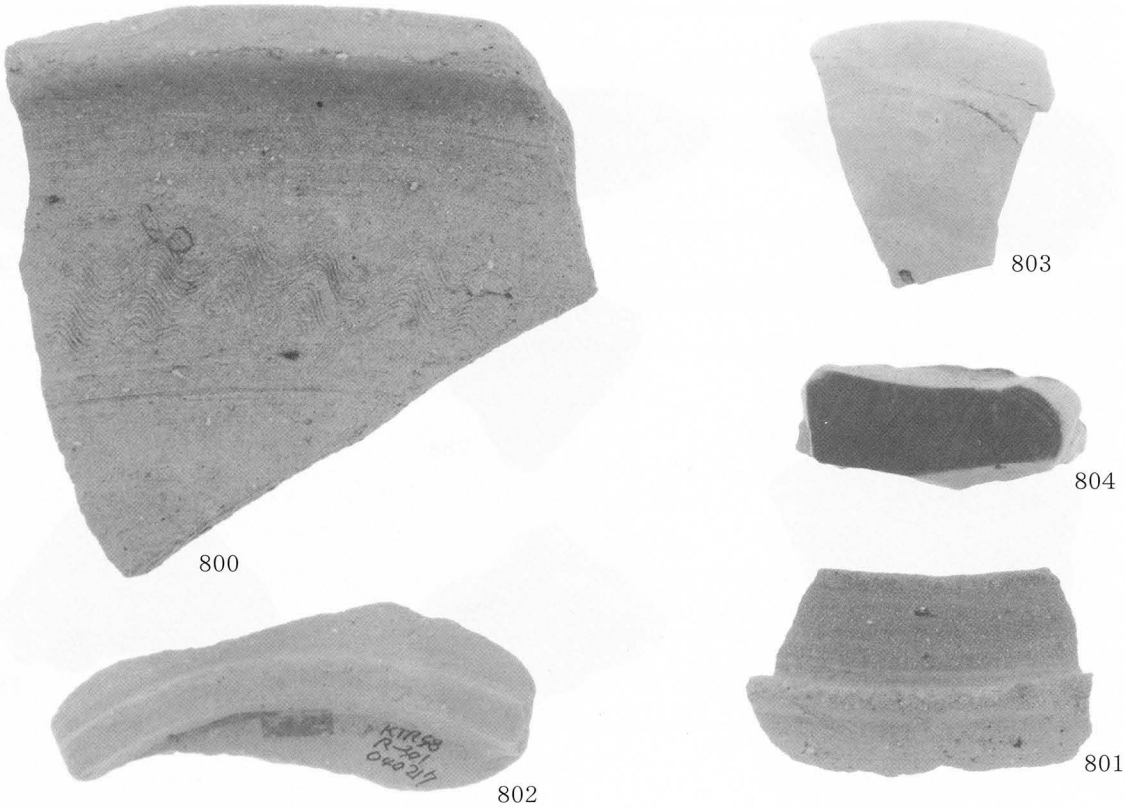
1. 第58次流路１・４、溝15出土土師器　皿、須恵器　甕・底部、瓦器　椀



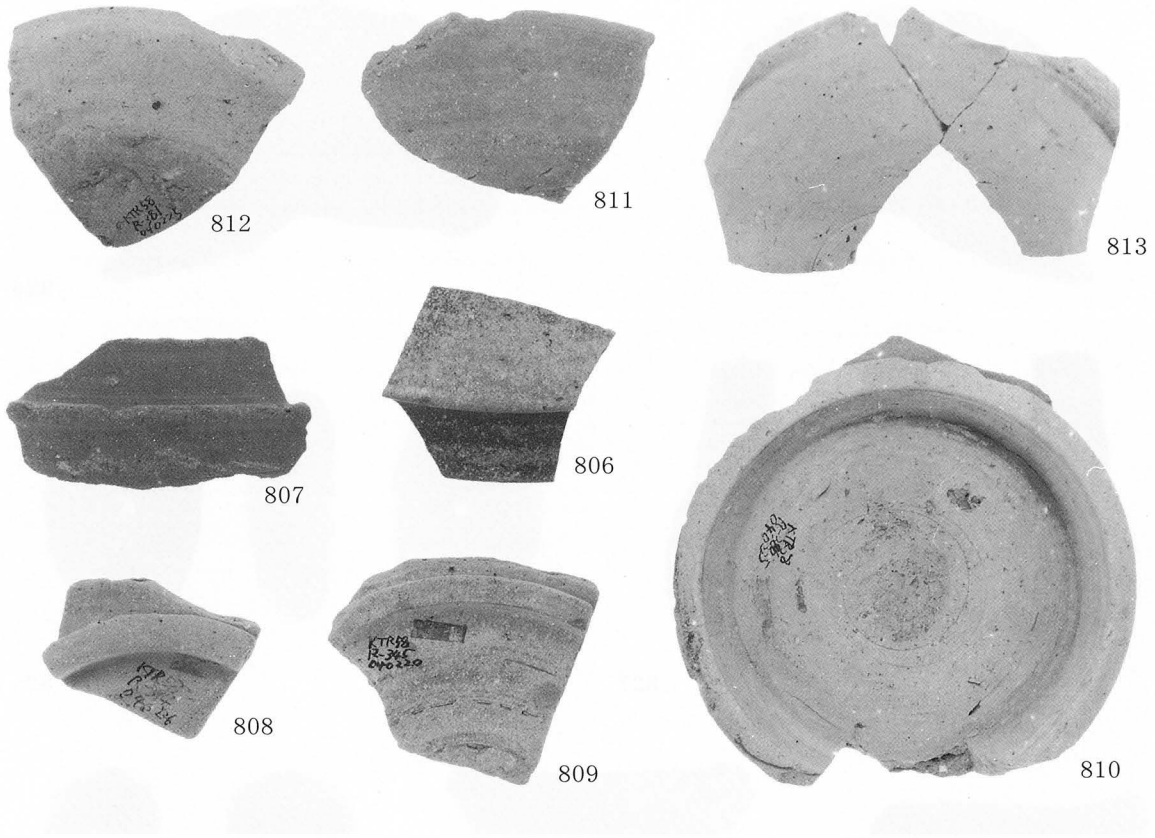
2. 第58次第６・７層出土土師器　皿、瓦器　椀、緑釉陶器　椀、須恵器　甕・底部



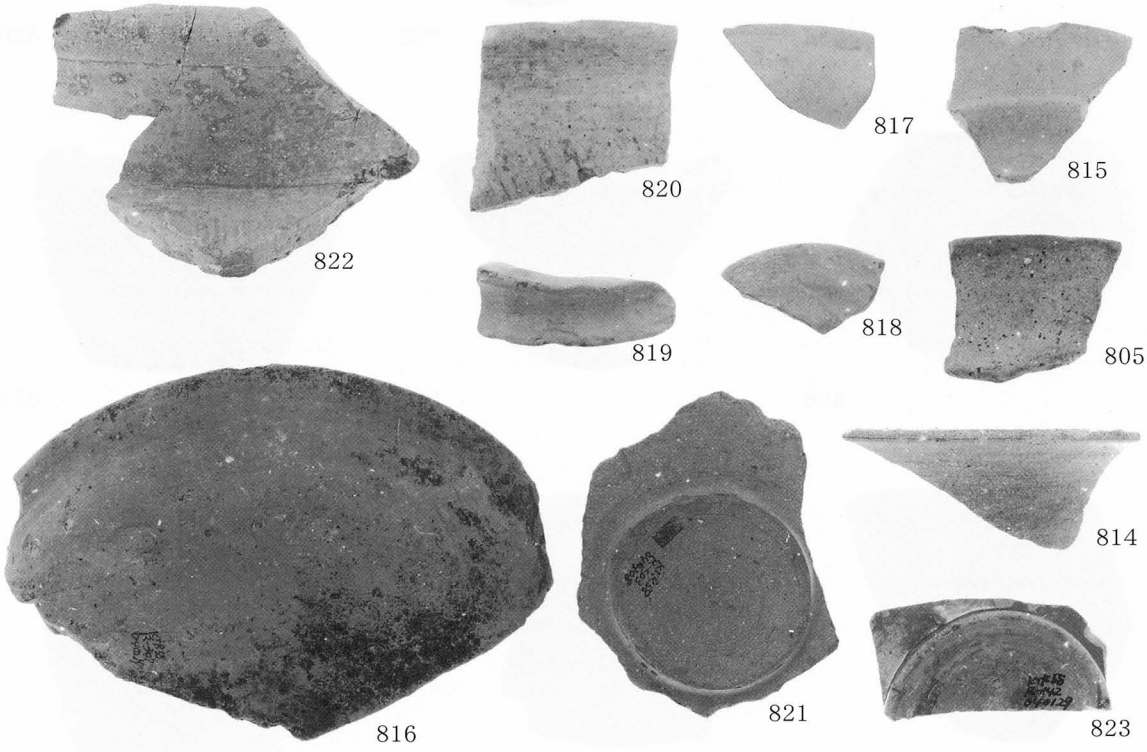
1. 第58次第８層出土土師器　皿・竈、須恵器　杯・擂鉢・底部、白磁　椀、瓦器　椀



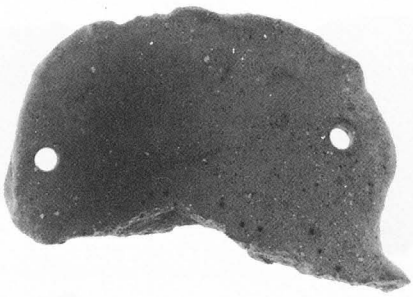
2. 第58次第９層出土土師器　皿、瓦器　椀、須恵器　杯・器台



1. 第58次第10・11ｂ層出土須恵器　杯



2. 第58次第11～13層・層位不明出土須恵器　甕・底部、土師器　甕・壷・椀・皿、瓦器　擂鉢、緑釉陶器　椀



824

827 825

833 832 826

828 830 834

829 831 835

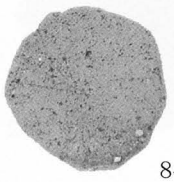
第58次土製品

836

837

1. 第58次土製品

847

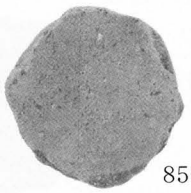


848

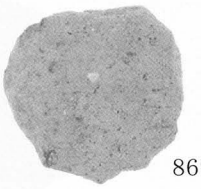
860

861

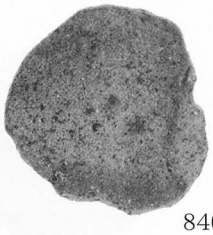
844



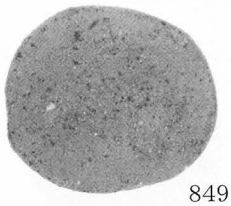
850



869



846

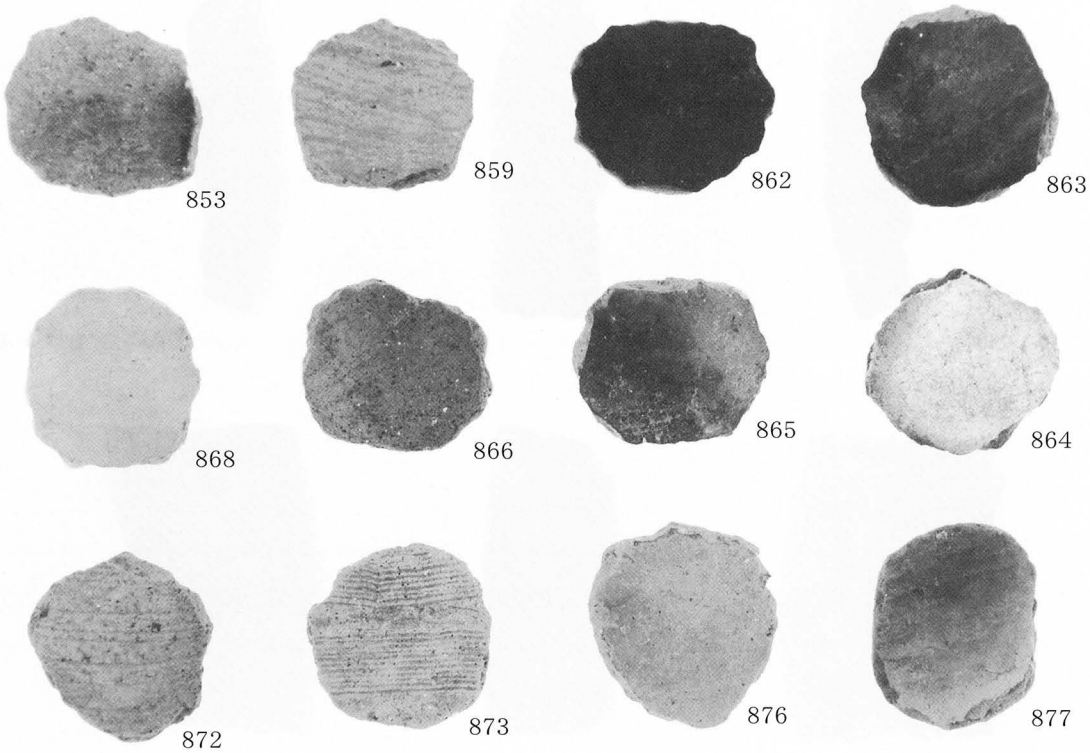


849

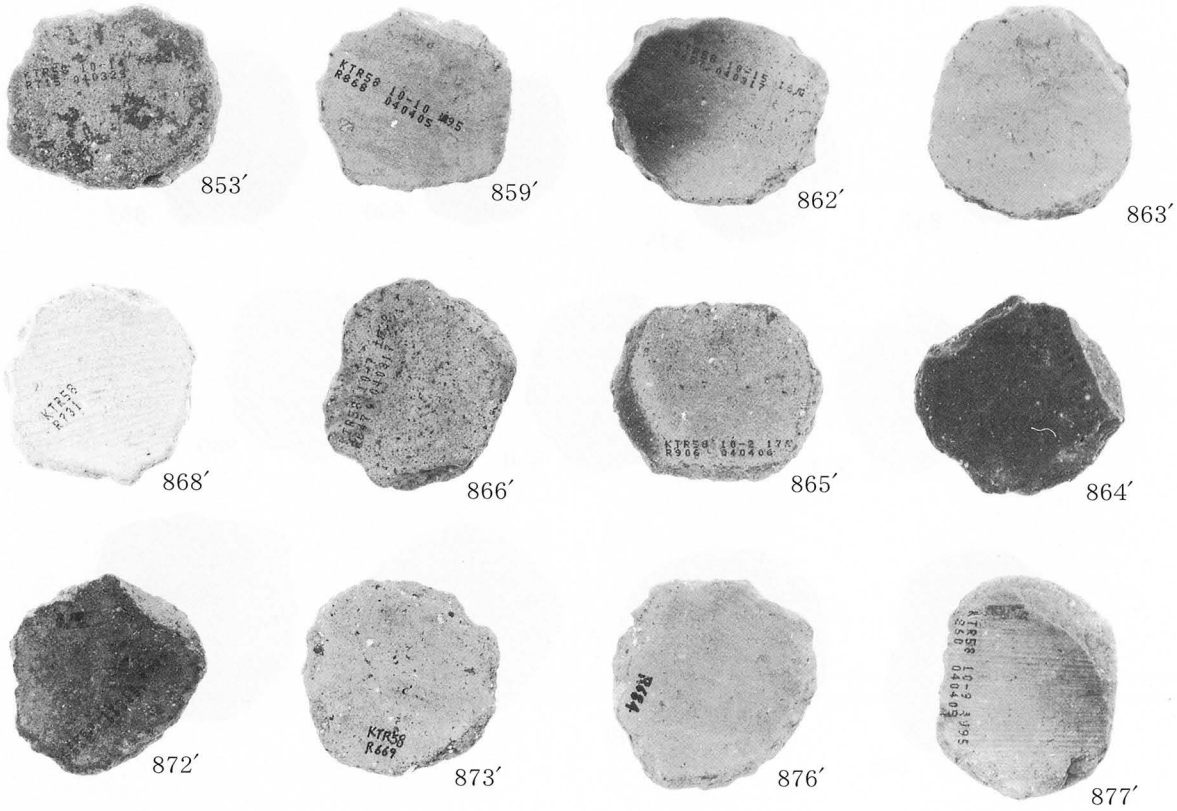
851

852

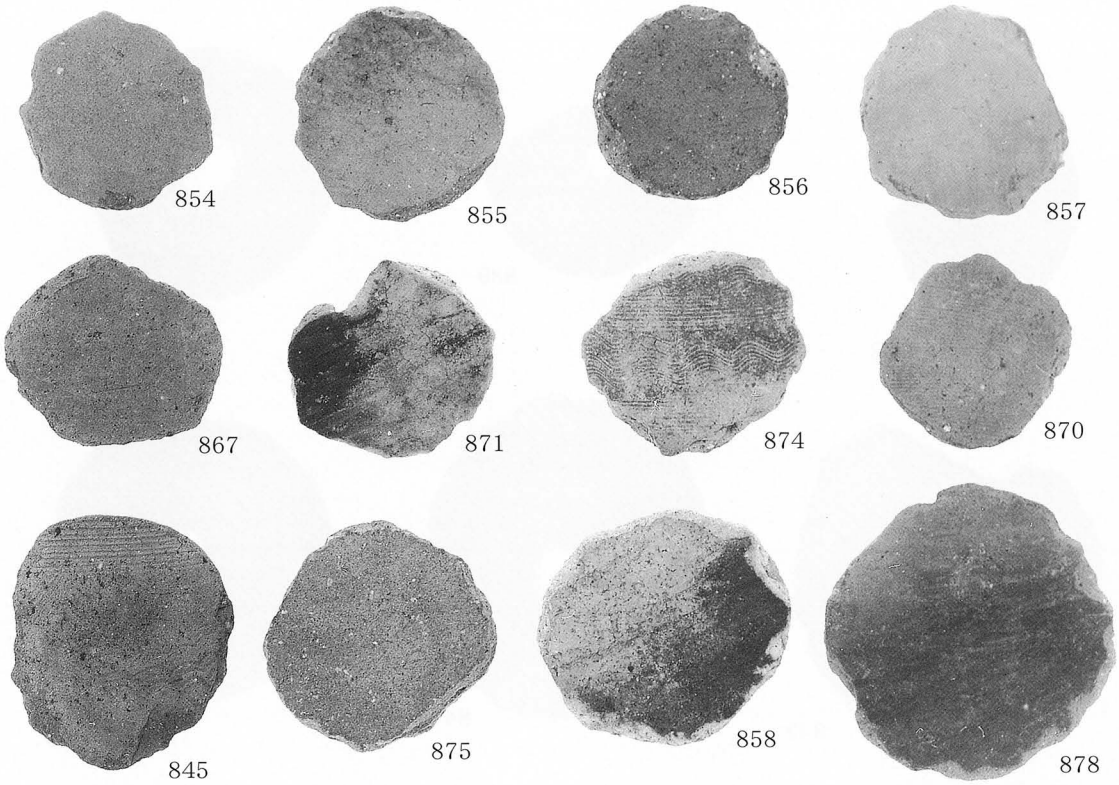
2. 第58次土製品



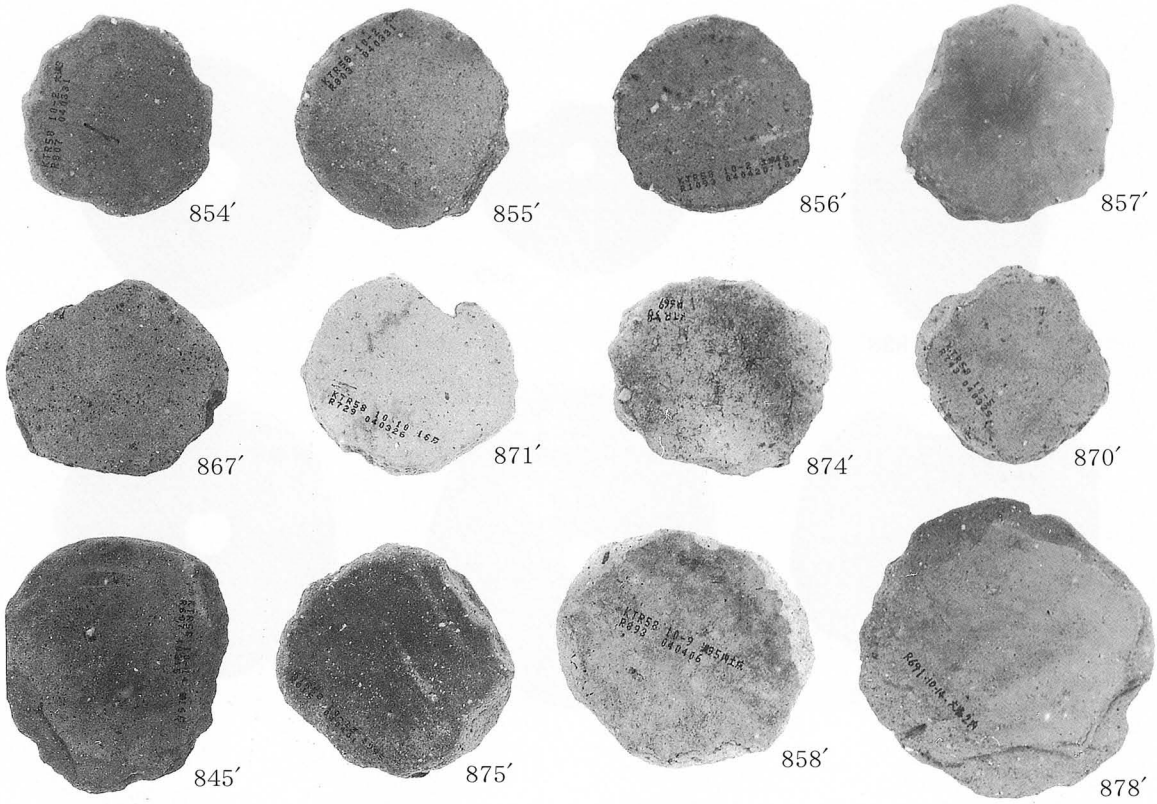
1. 第58次土製品（表）



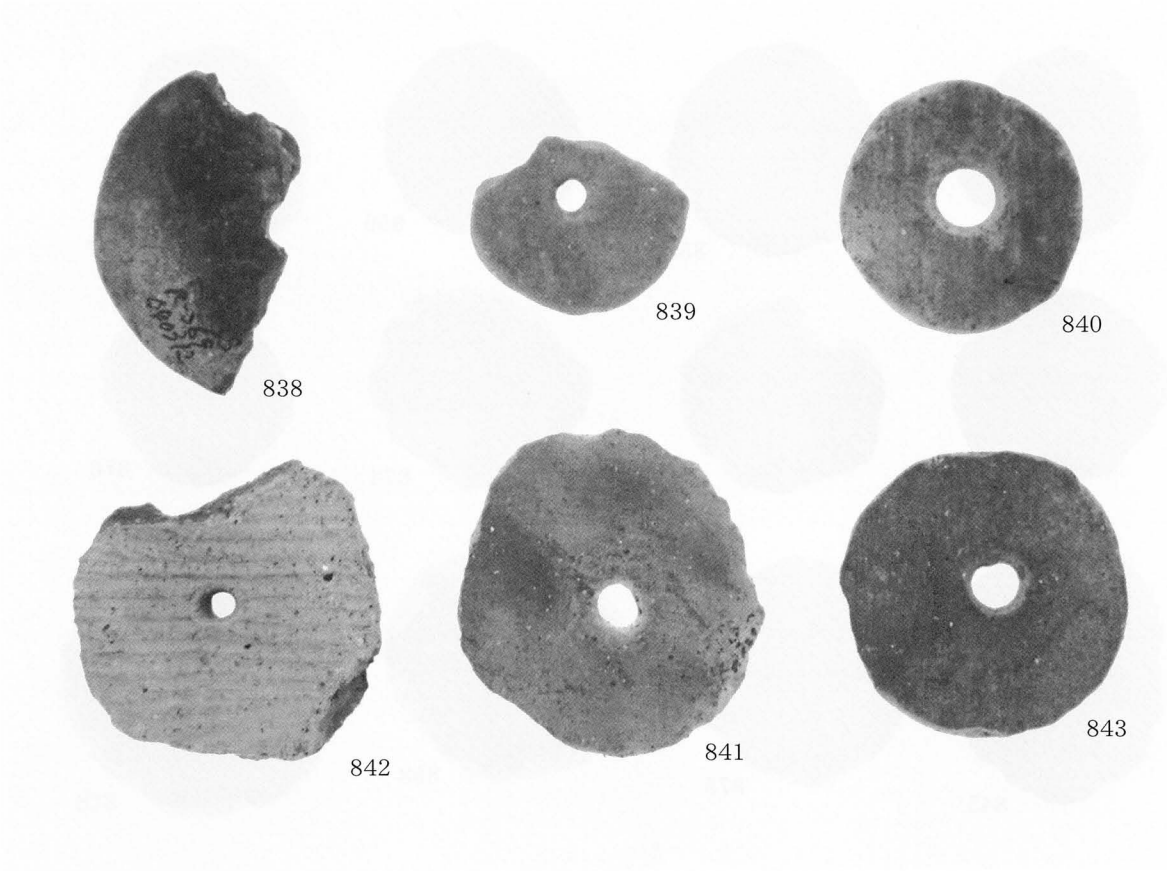
2. 第58次同上（裏）



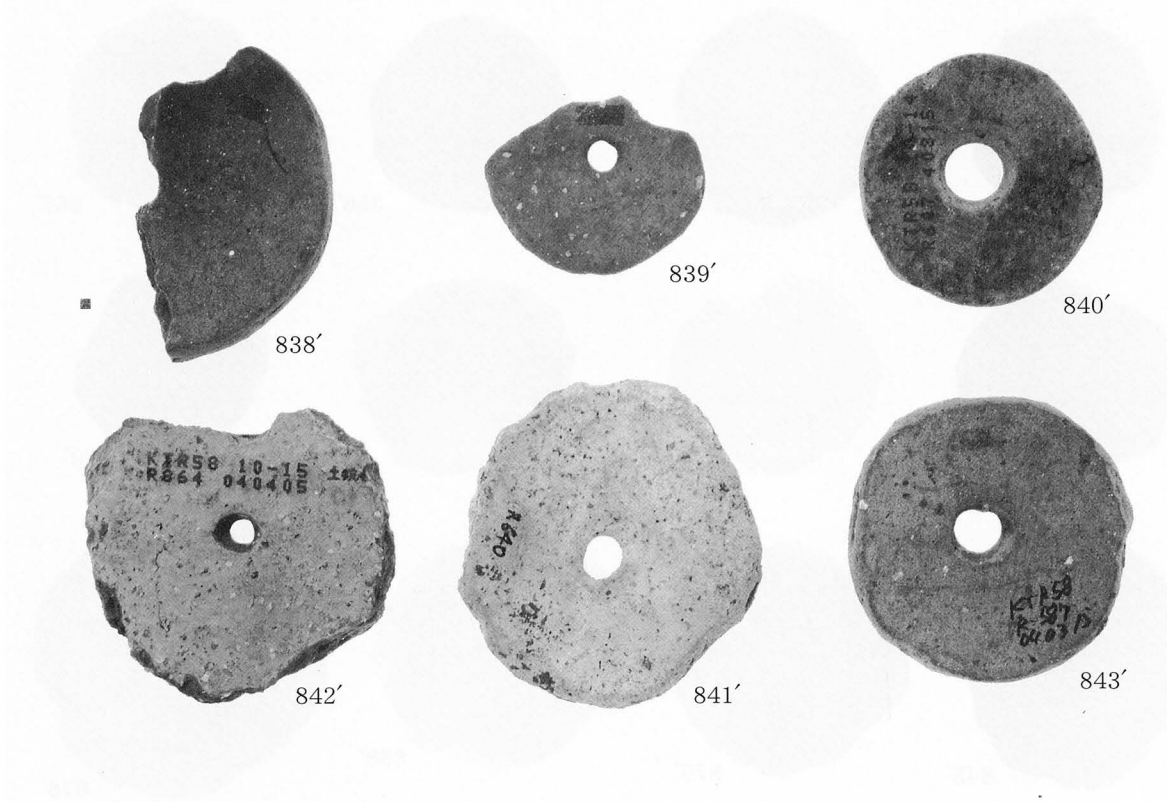
1. 第58次土製品（表）



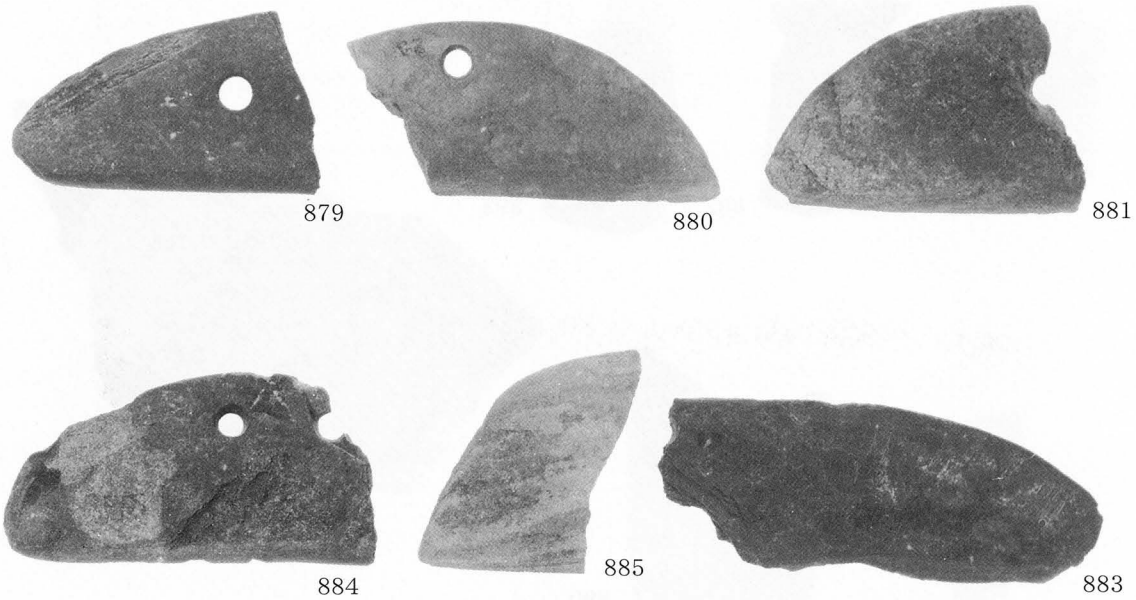
2. 第58次同上（裏）



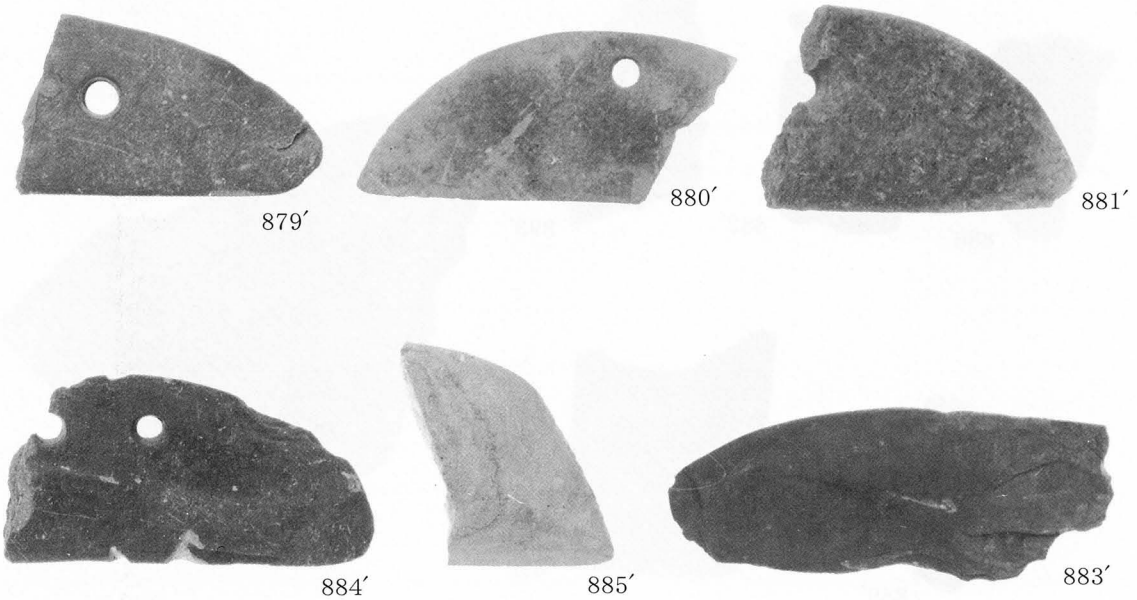
1. 第58次土製品（表）



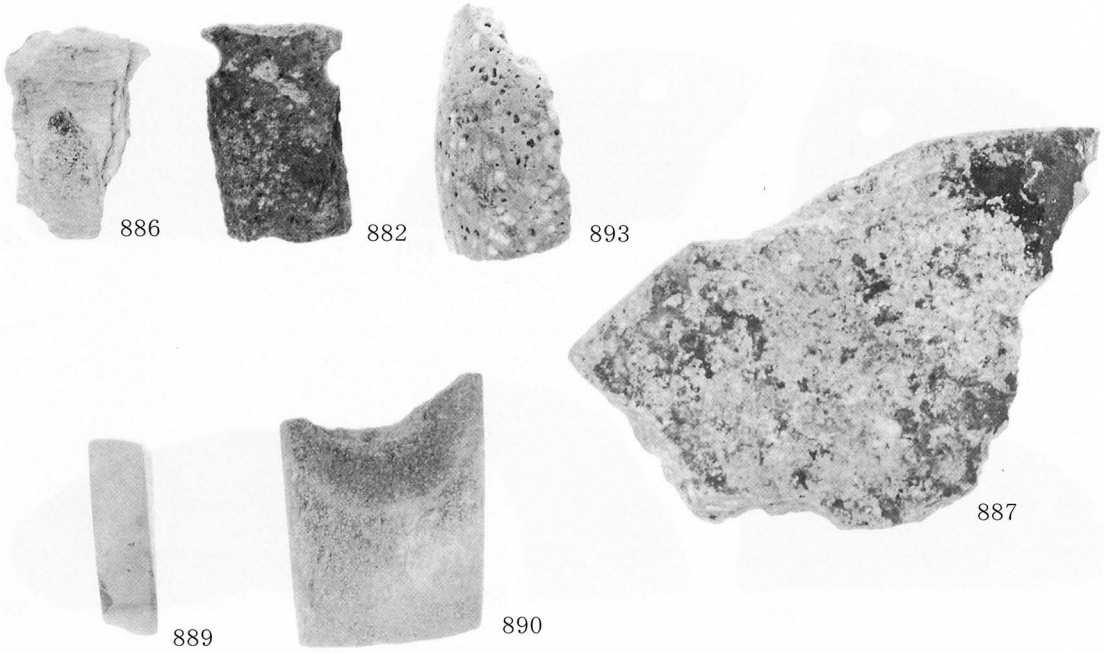
2. 第58次同上（裏）



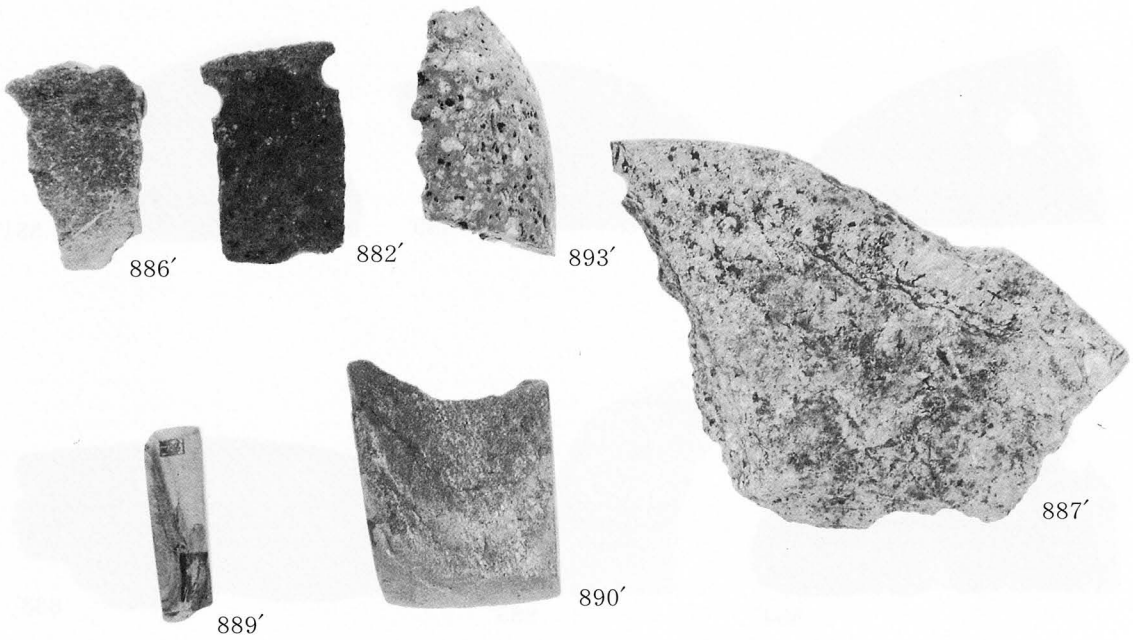
1. 第58次石器（表）



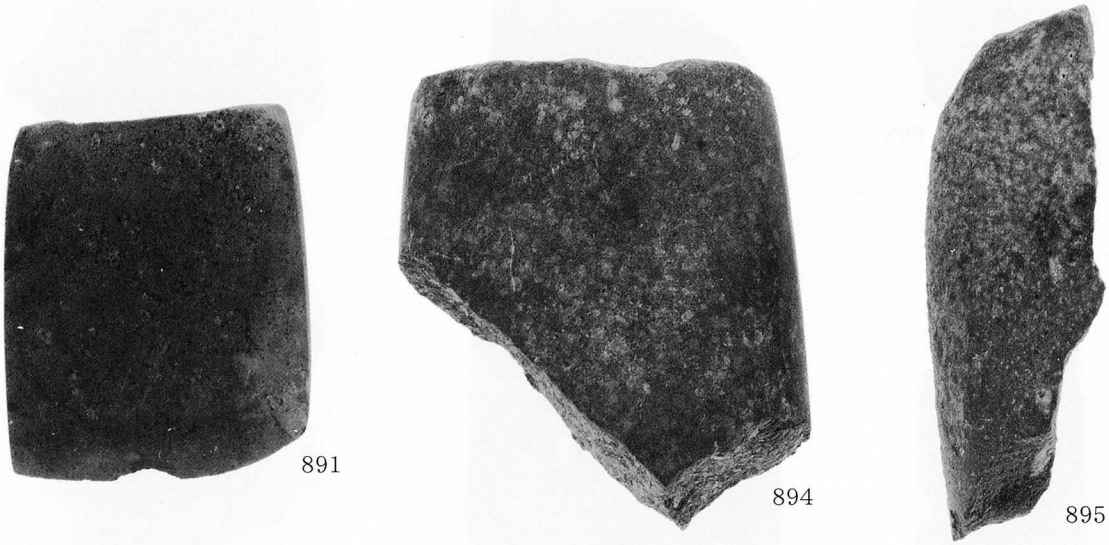
2. 第58次同上（裏）



1. 第58次石器（表）

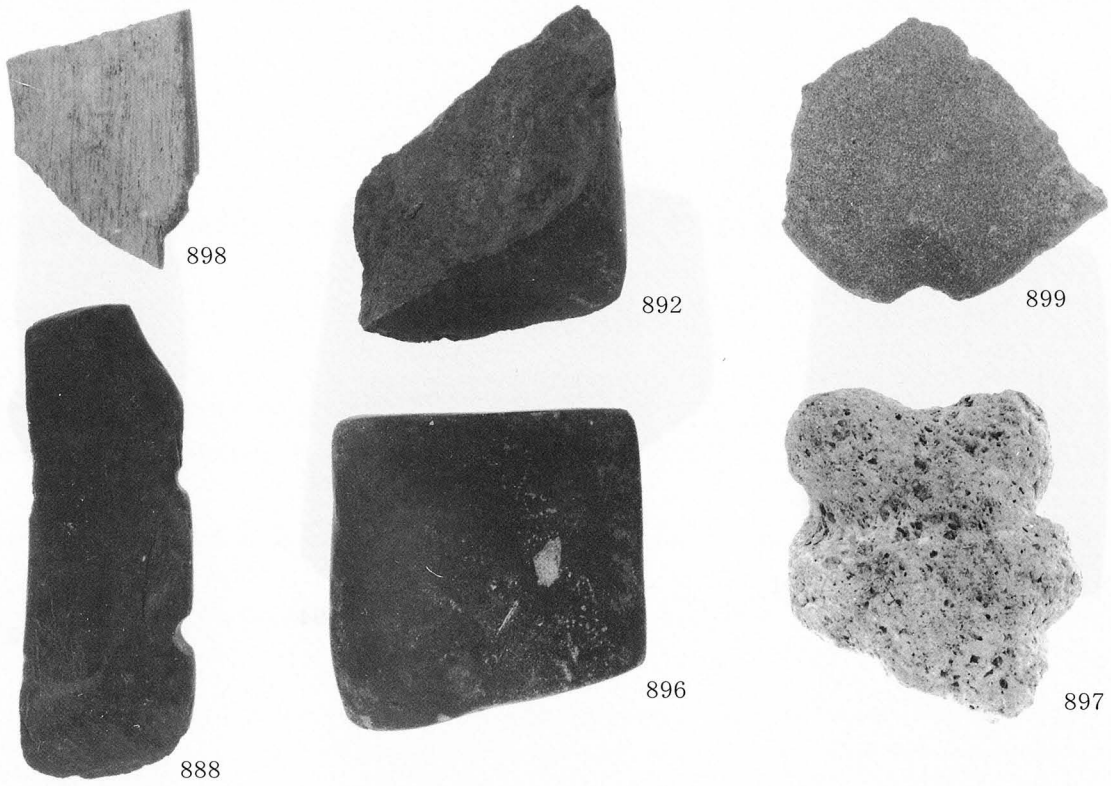


2. 第58次同上（裏）

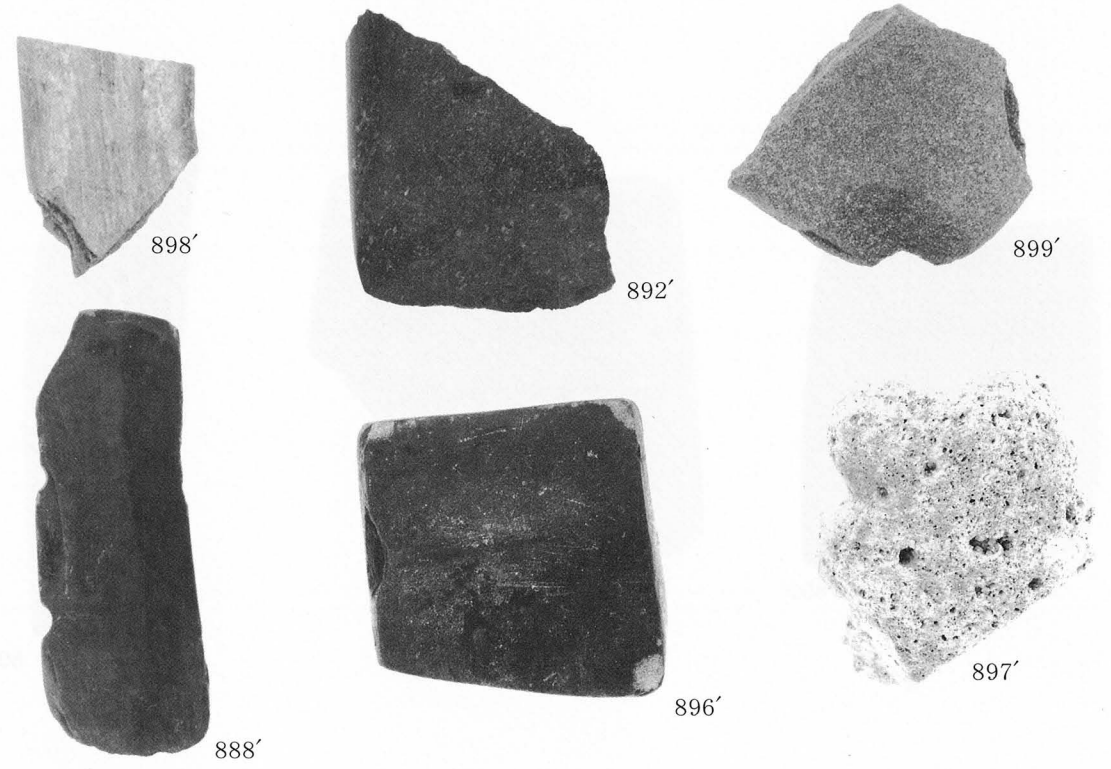


1. 第58次石器（表）

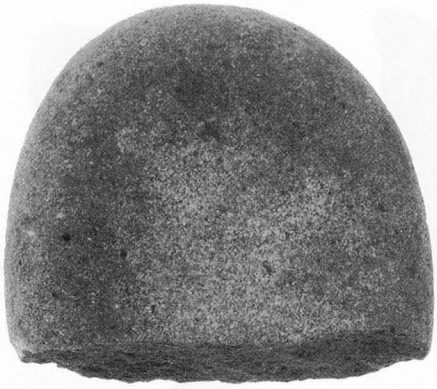
2. 第58次同上（裏）



1. 第58次石器（表）



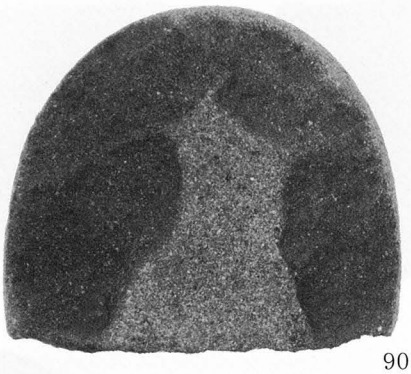
2. 第58次同上（裏）


900

901

902

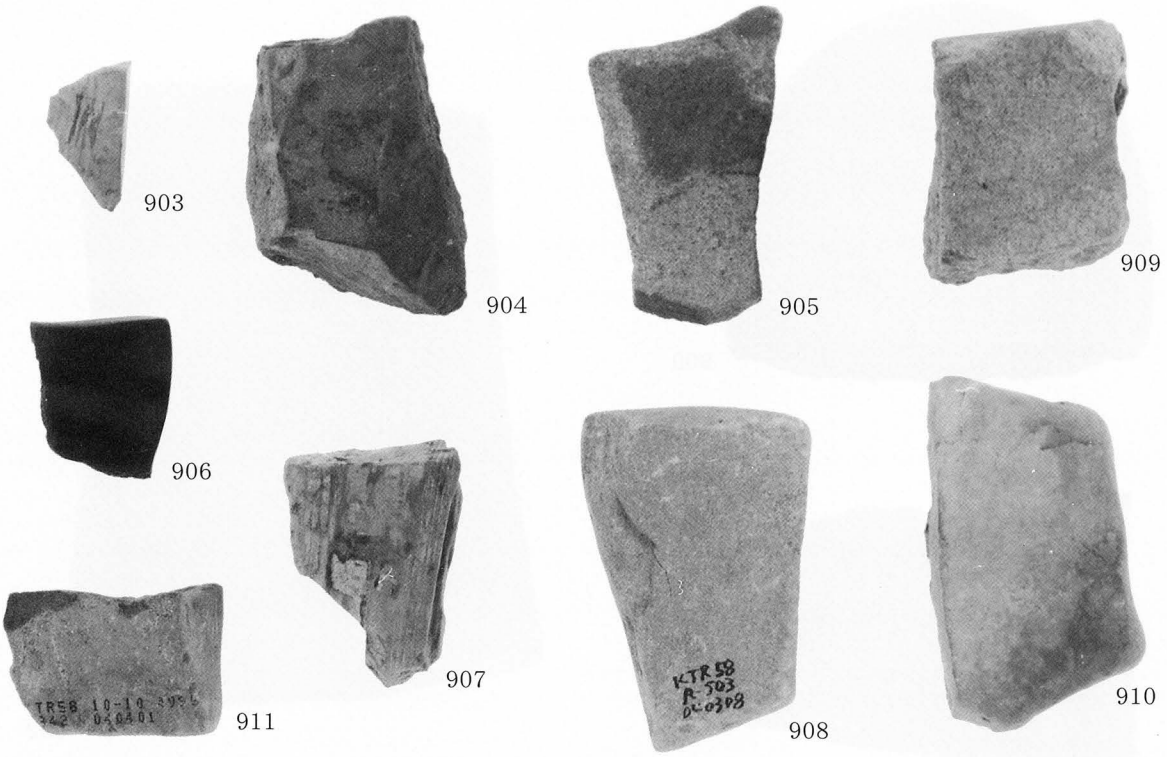
1. 第58次石器（表）


900′

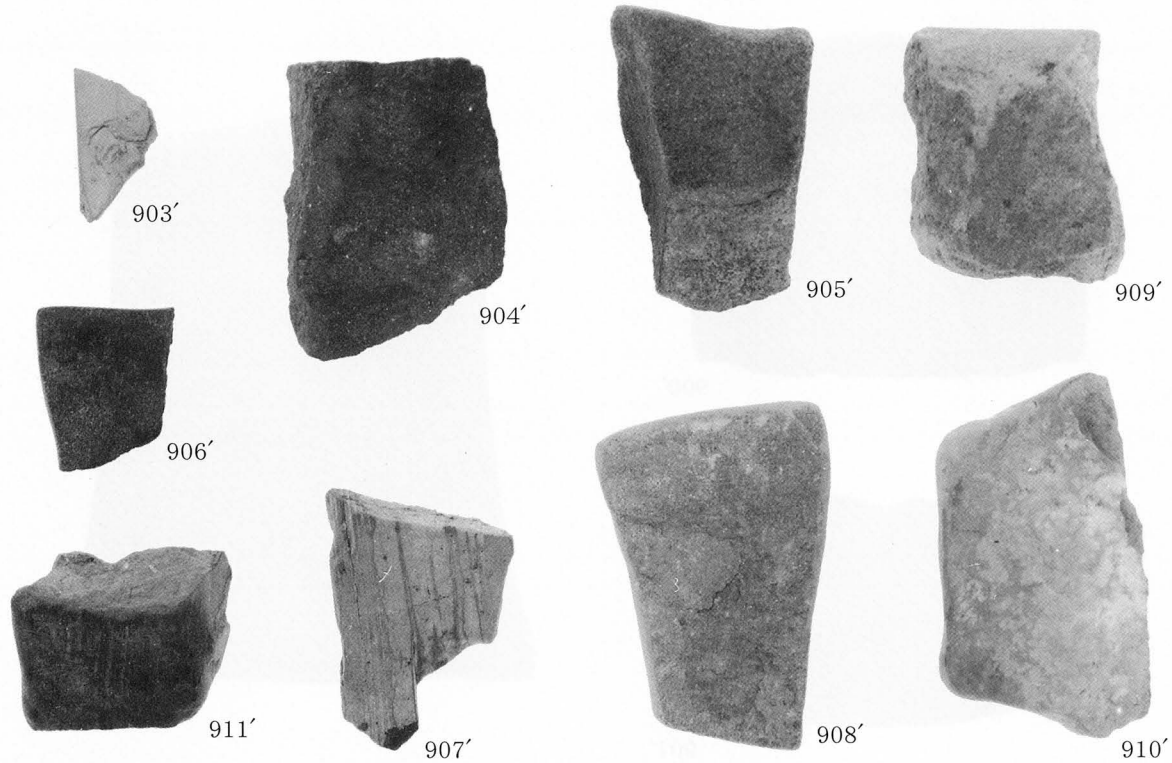
901′

902′

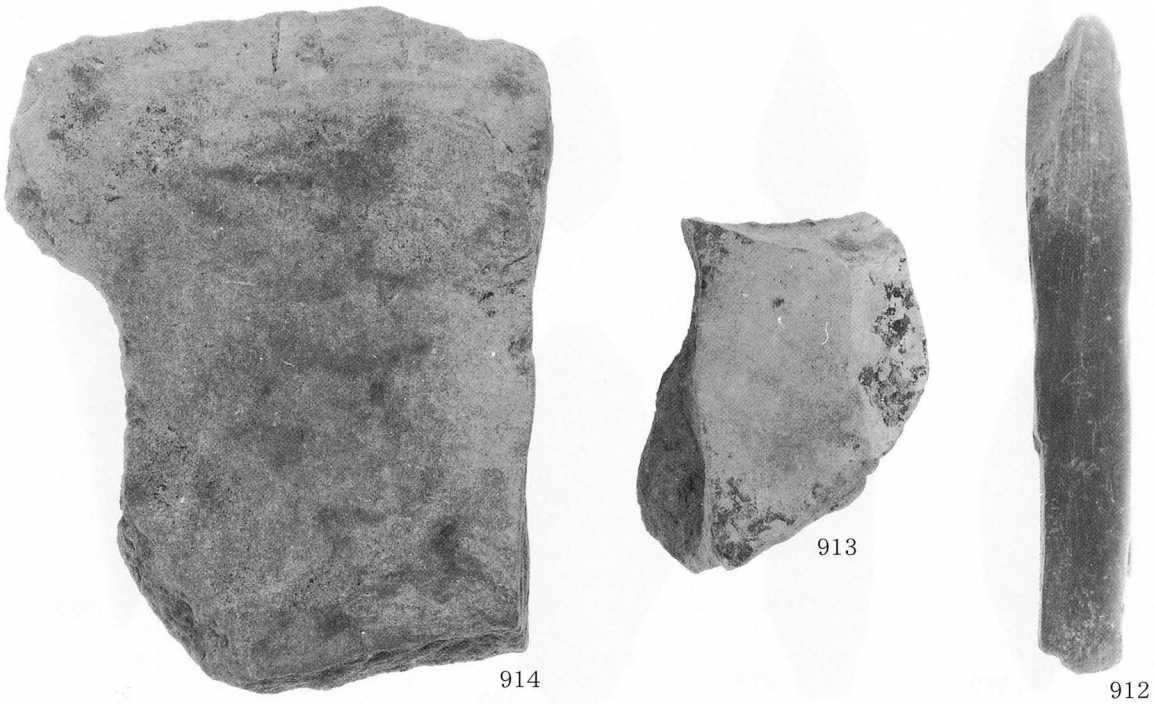
2. 第58次同上（裏）



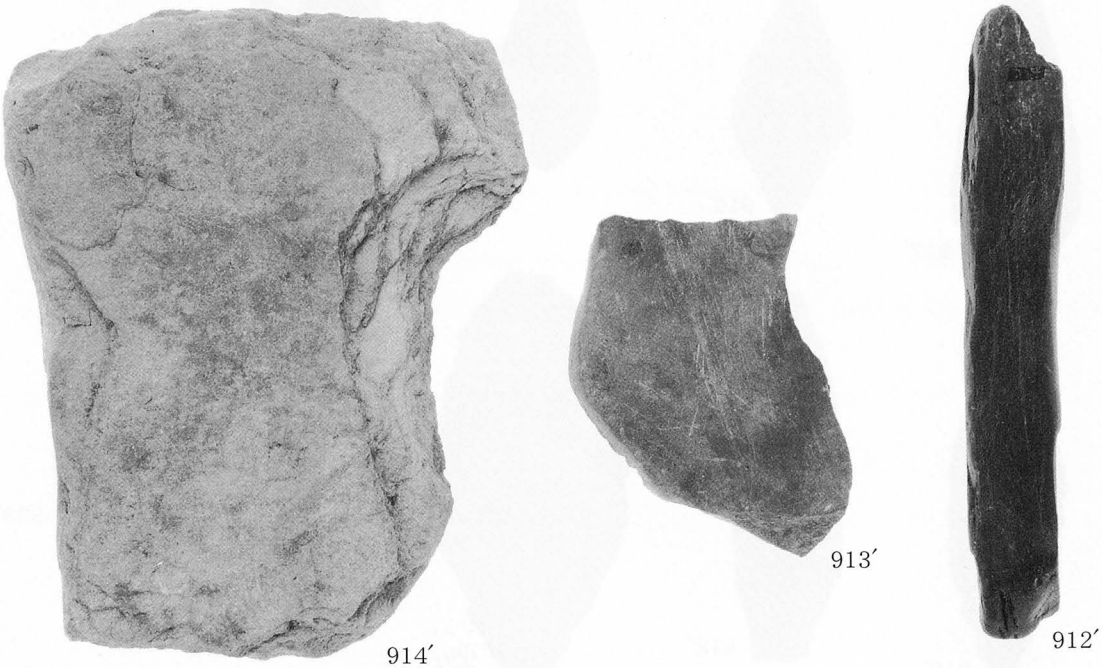
1. 第58次石器（表）



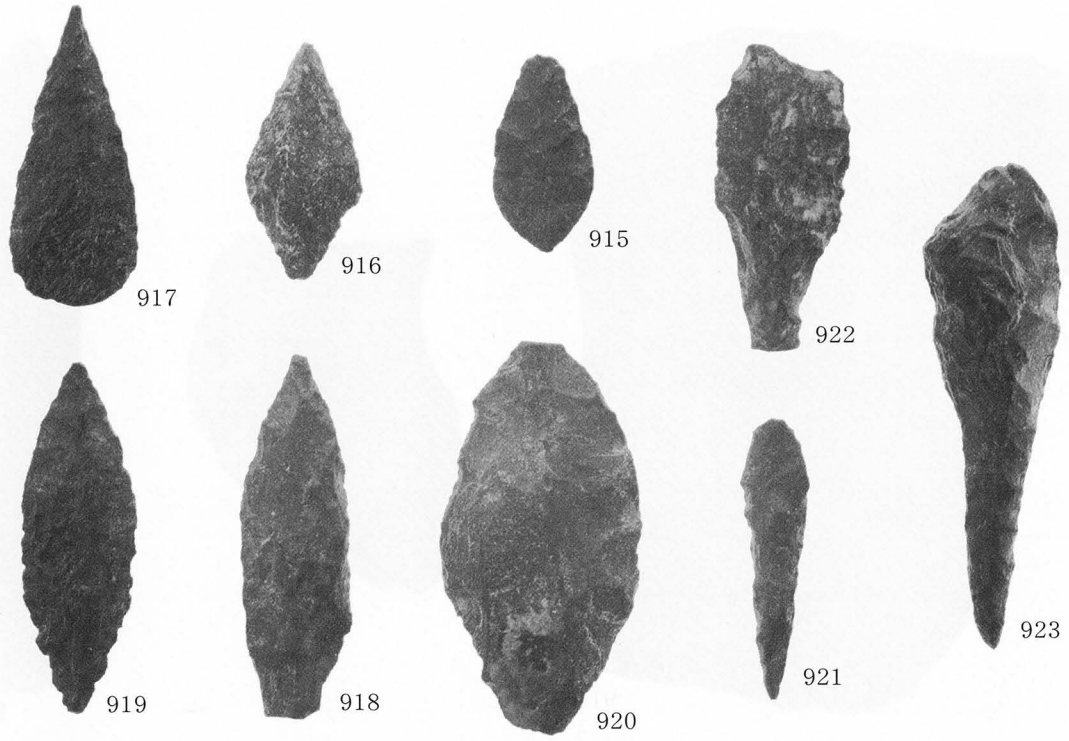
2. 第58次同上（裏）



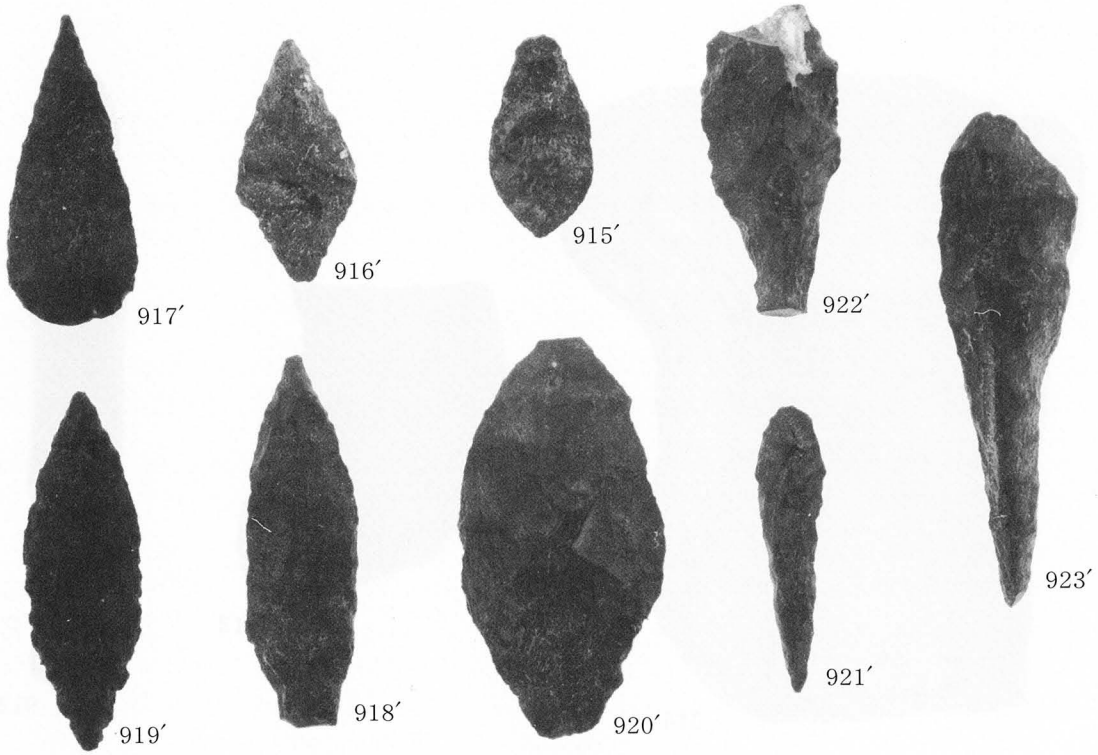
1. 第58次石器（表）



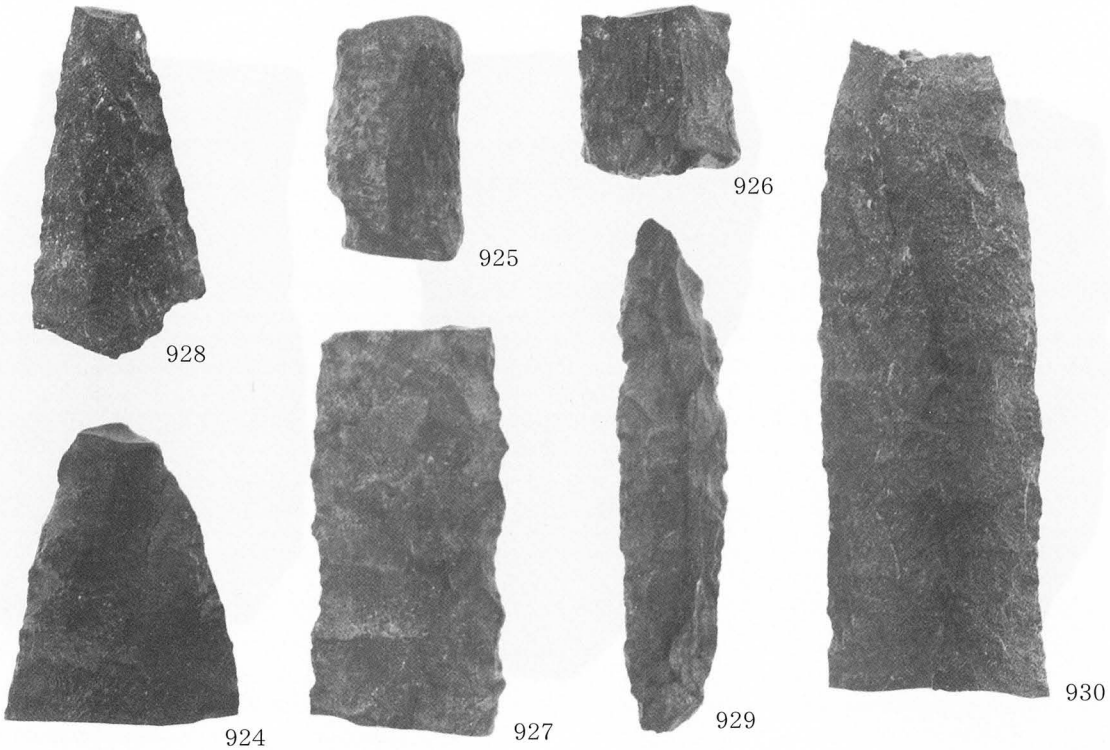
2. 第58次同上（裏）



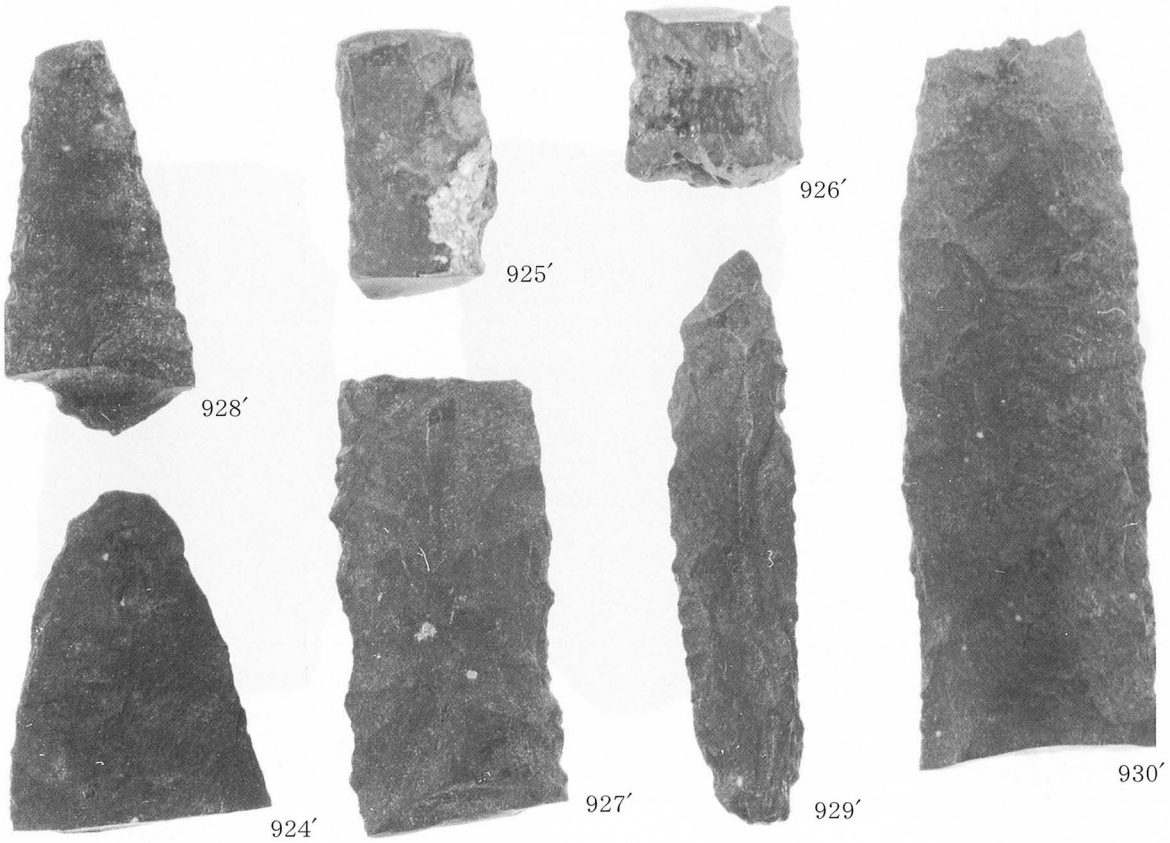
1. 第58次石器（表）



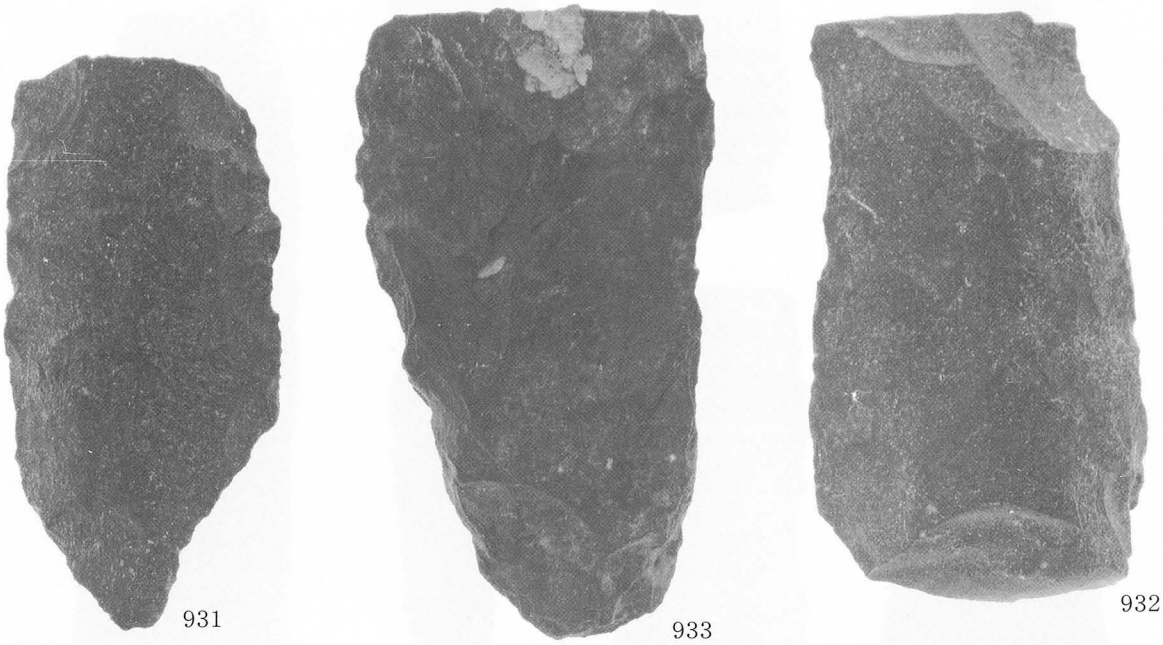
2. 第58次同上（裏）



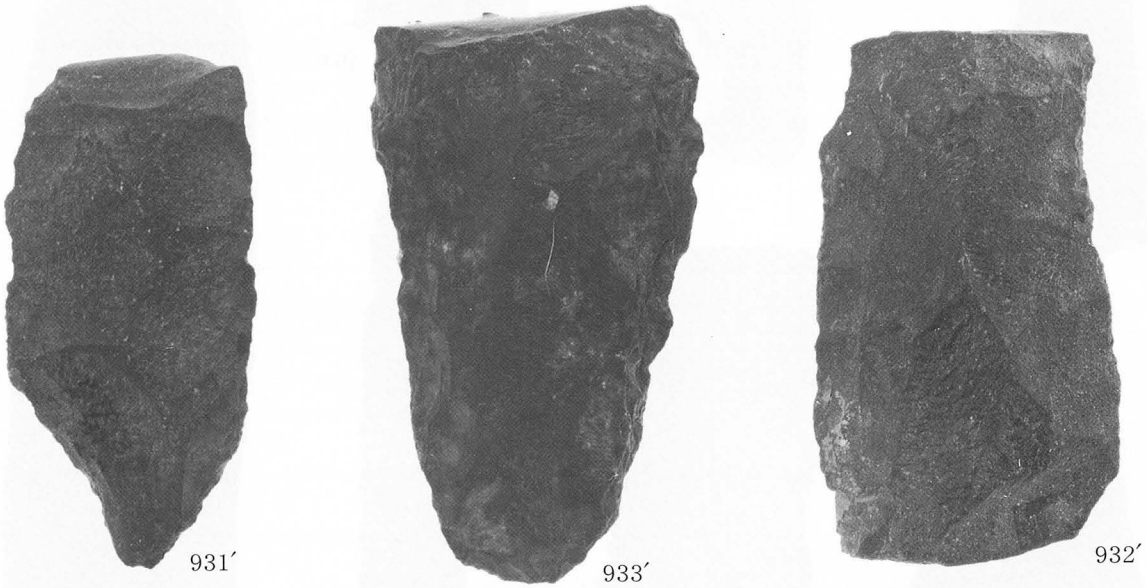
1. 第58次石器（表）



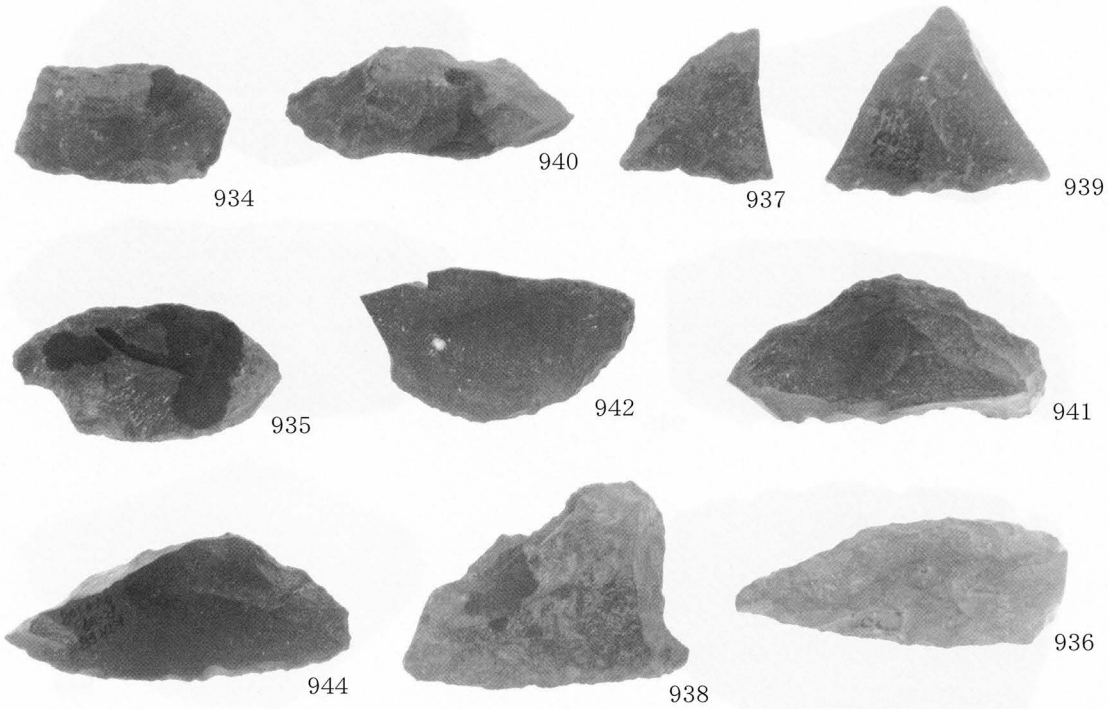
2. 第58次同上（裏）



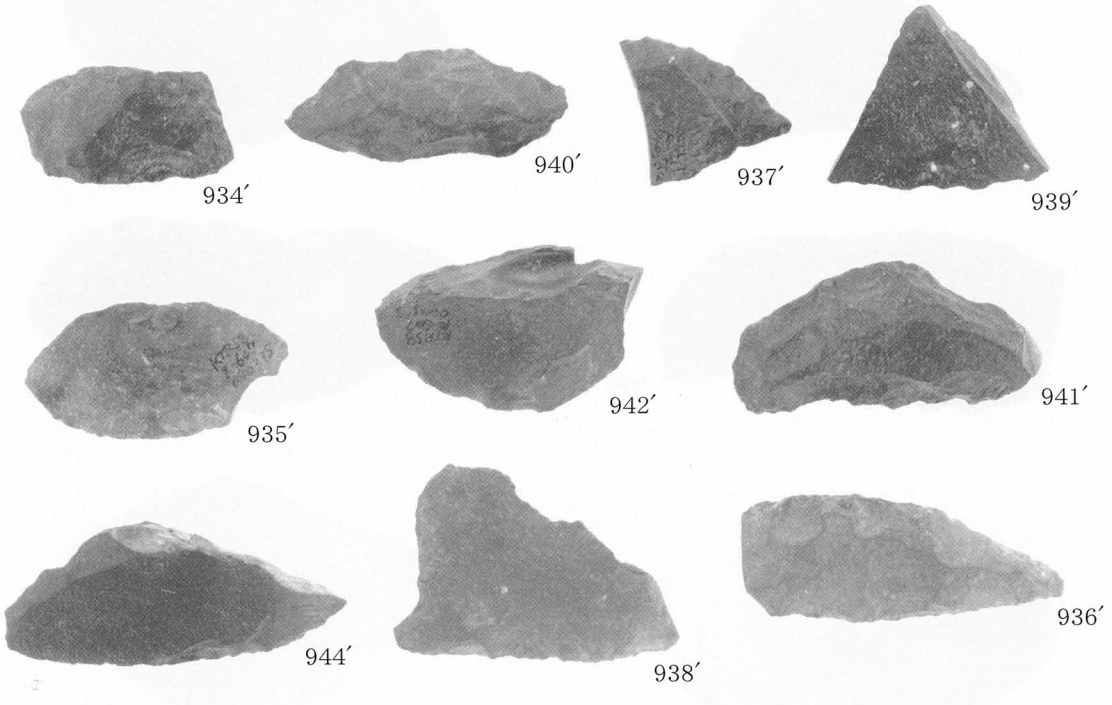
1. 第58次石器（表）



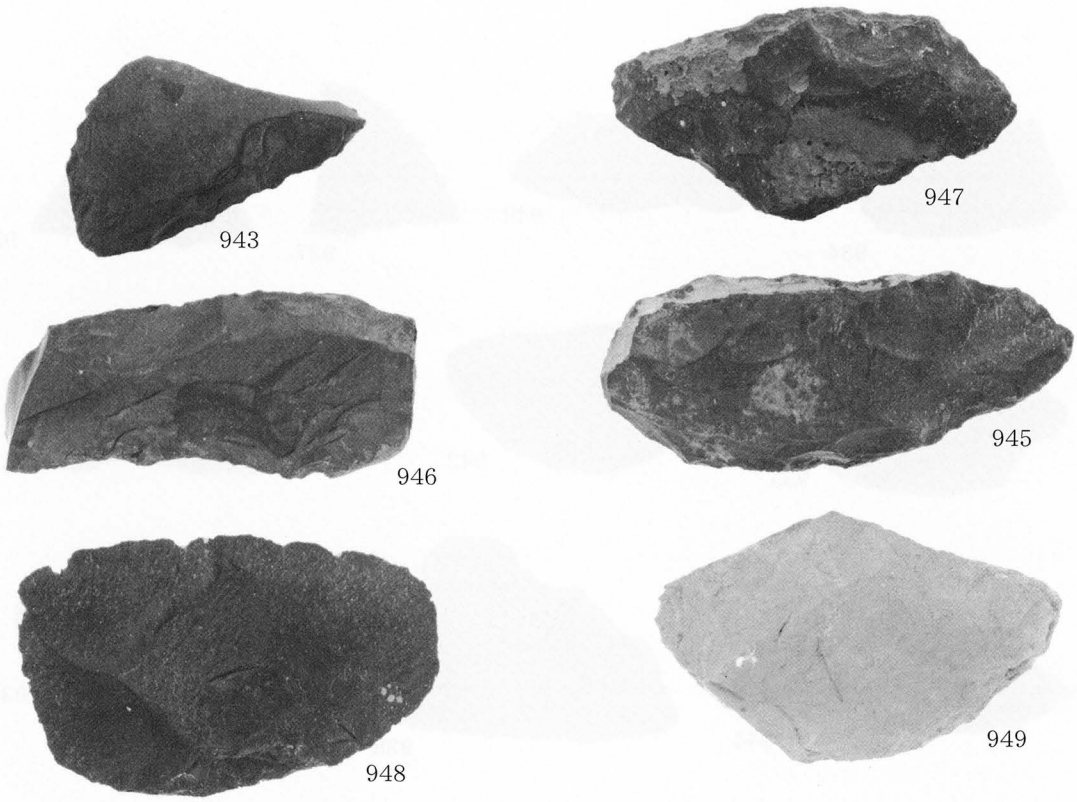
2. 第58次同上（裏）



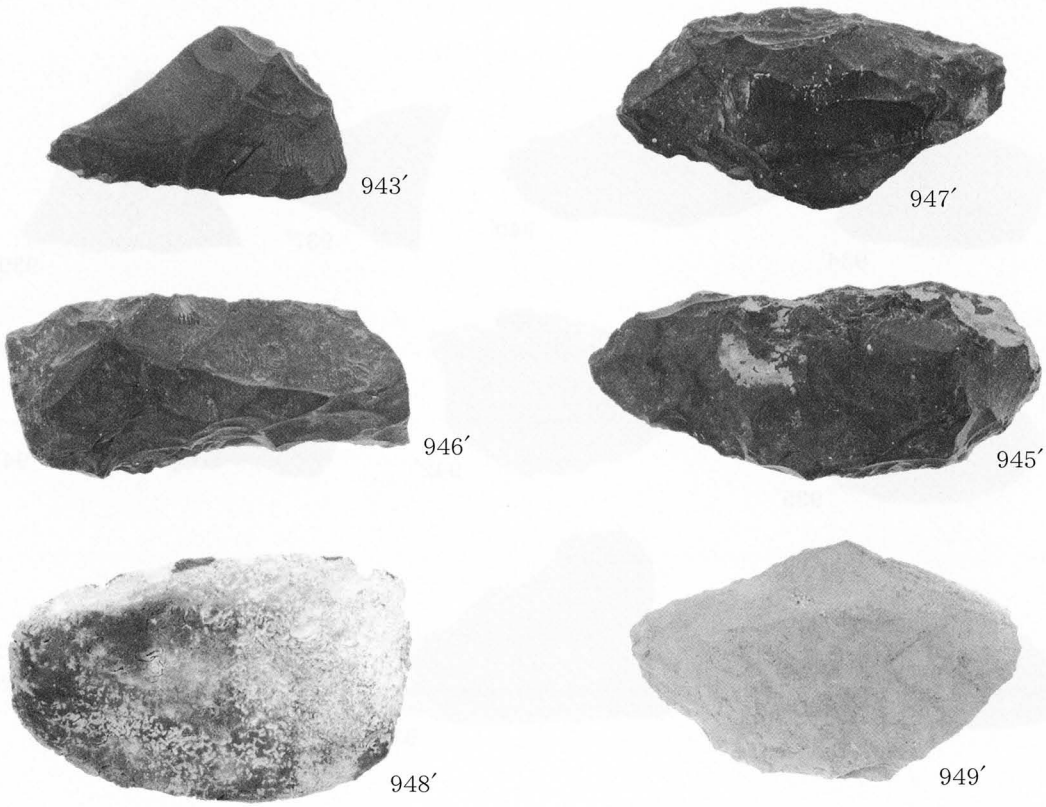
1. 第58次石器（表）



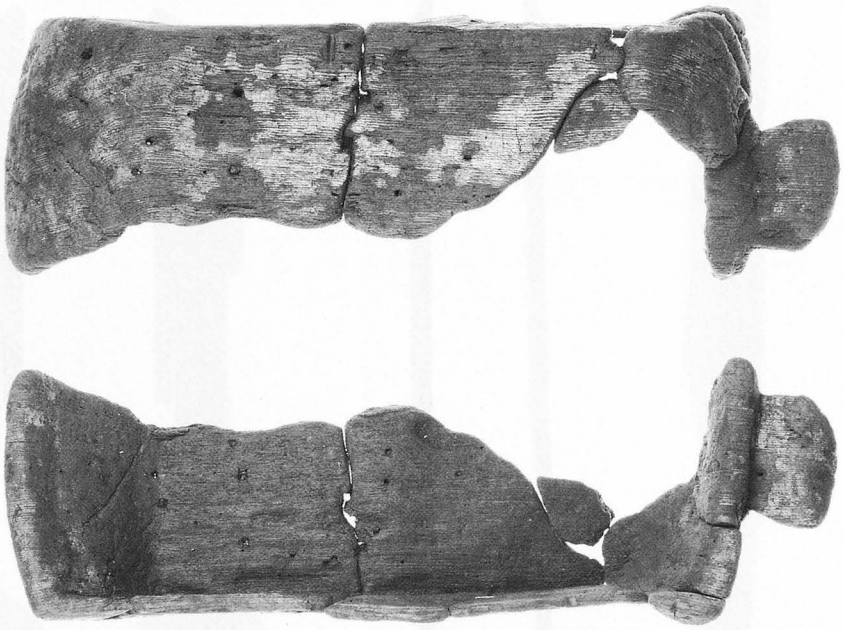
2. 第58次同上（裏）



1. 第58次石器（表）



2. 第58次同上（裏）

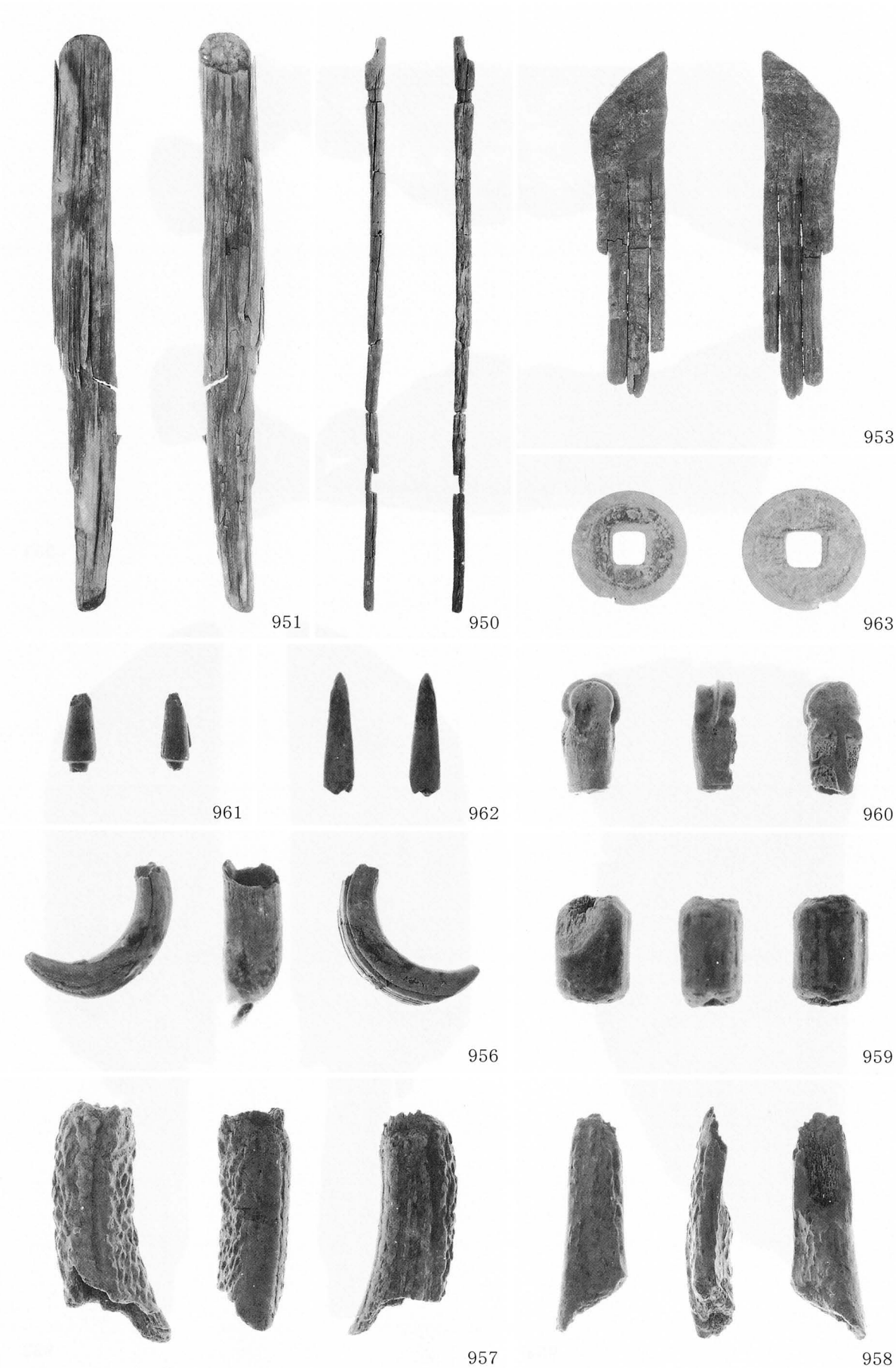


955

954

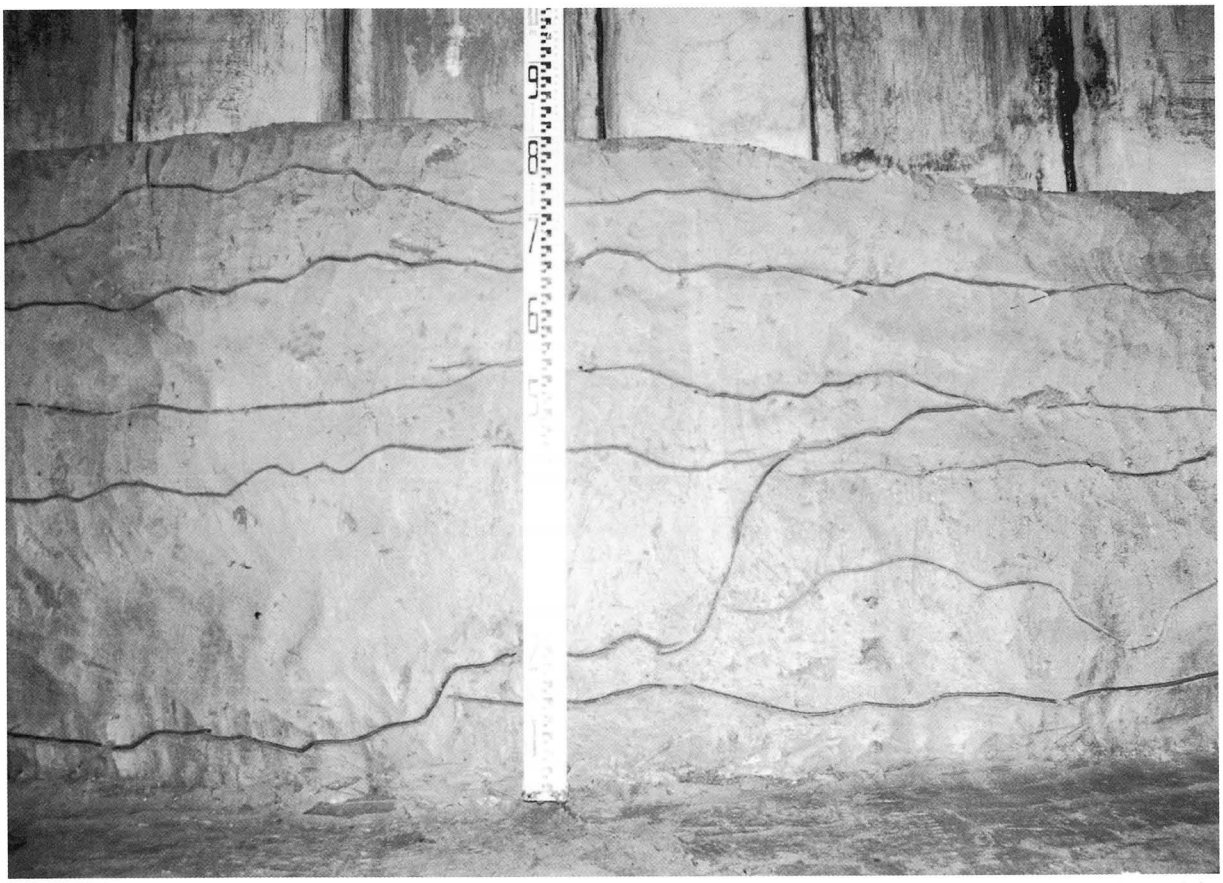
952

第58次　木製品

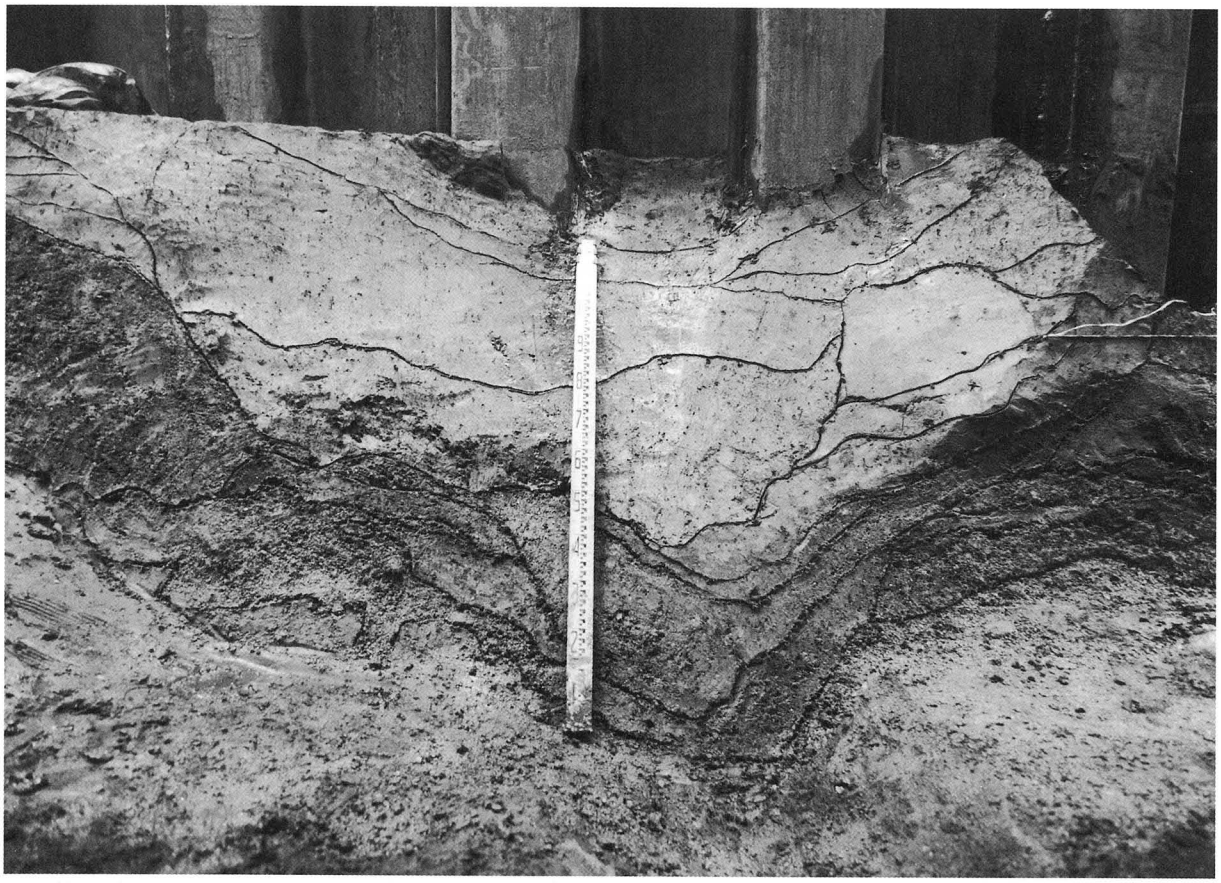


第58次木製品、骨・角・牙製品、銭貨

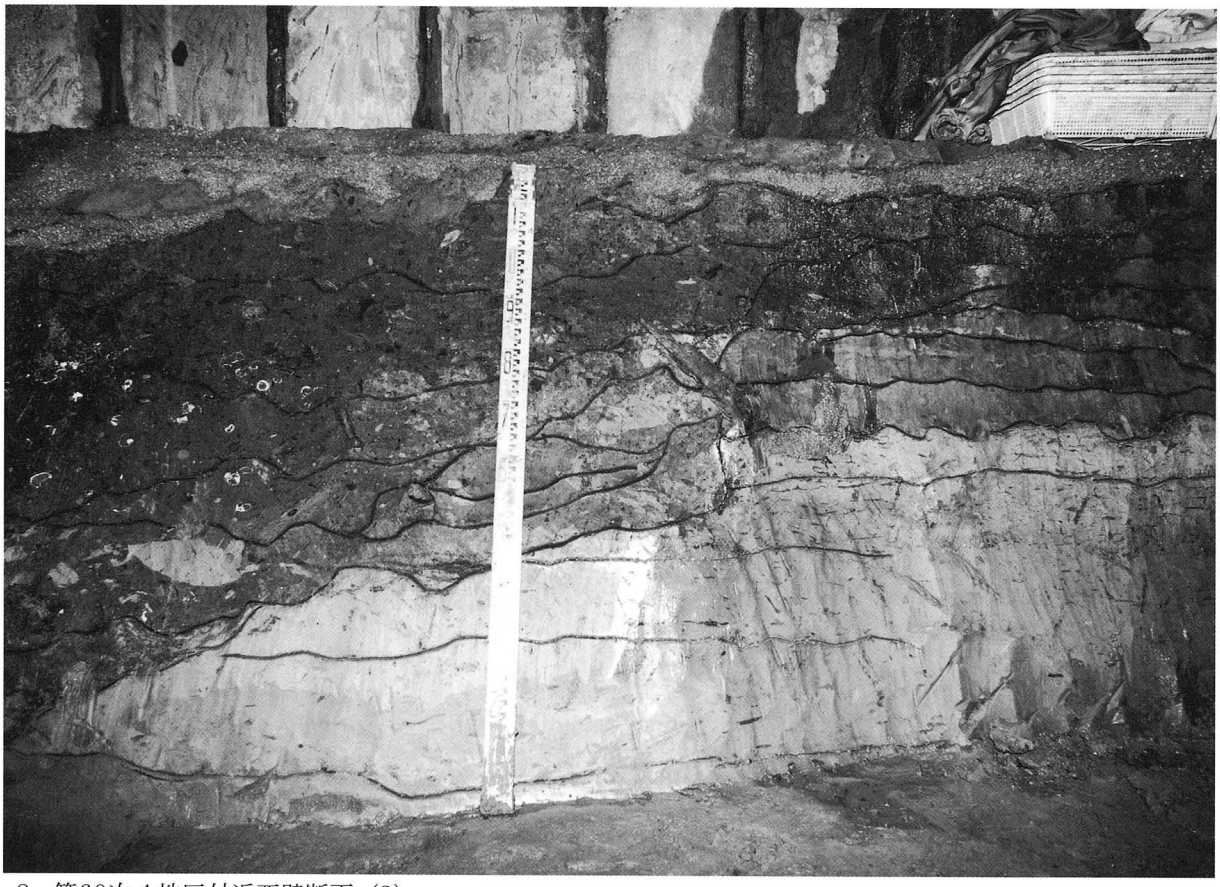
1. 第60次調査地近景　北より



2. 第60次４地区付近西壁断面（1）

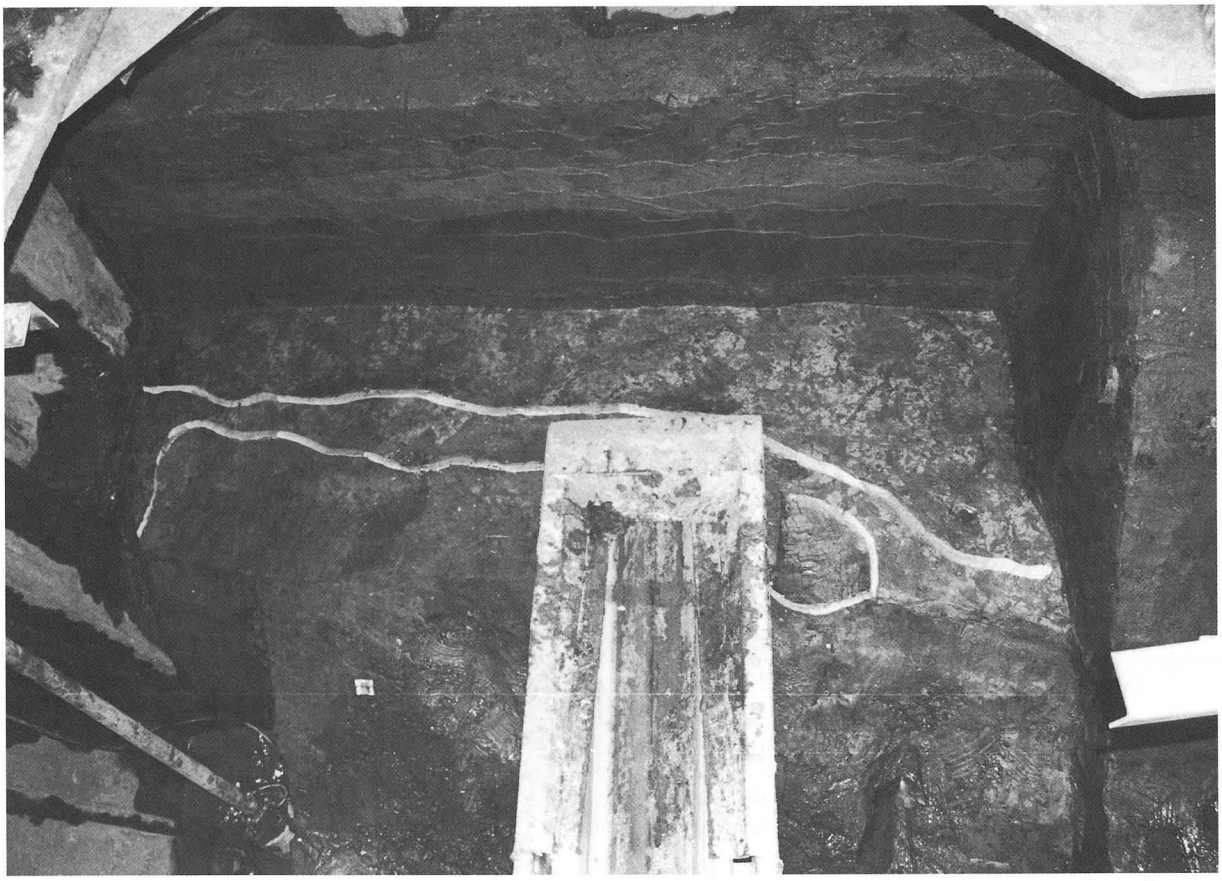


1. 第60次４地区付近西壁断面（2）

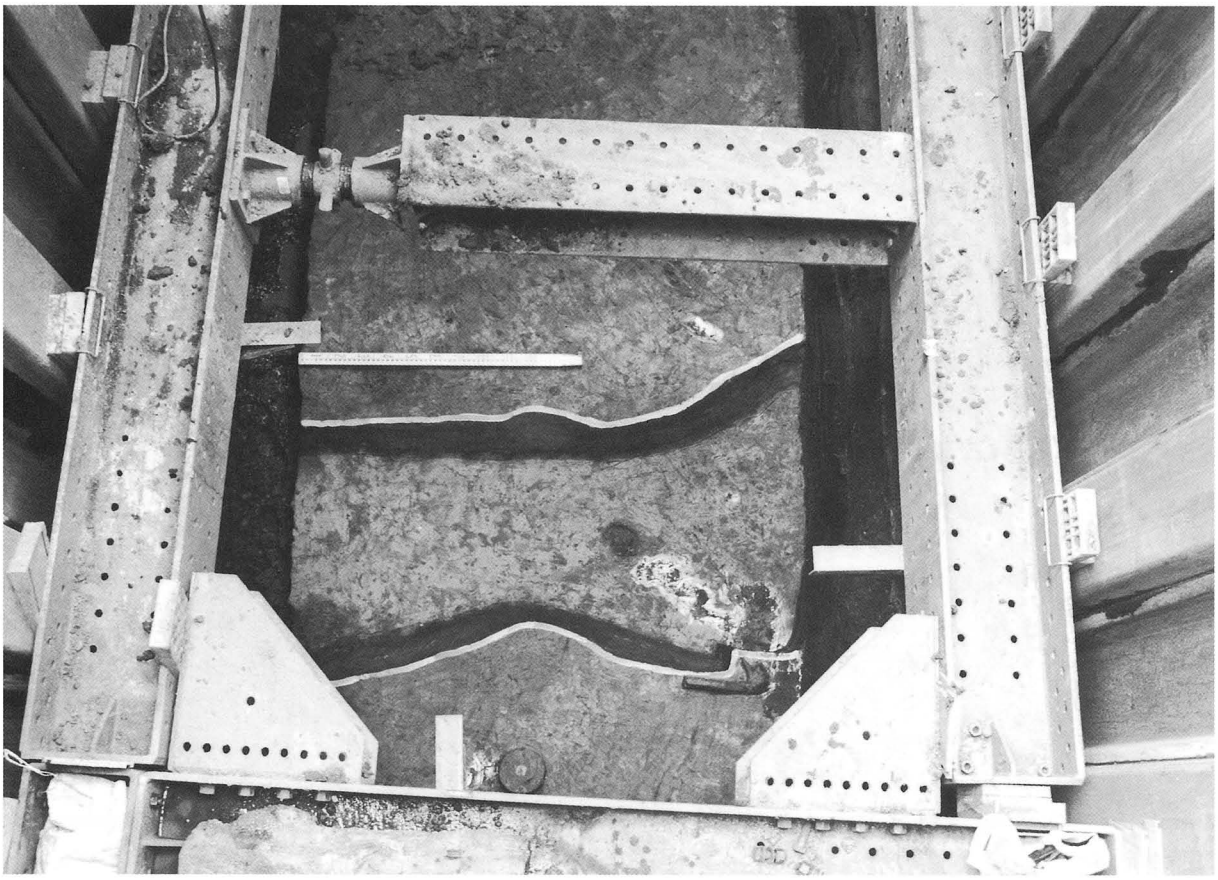


2. 第60次４地区付近西壁断面（3）

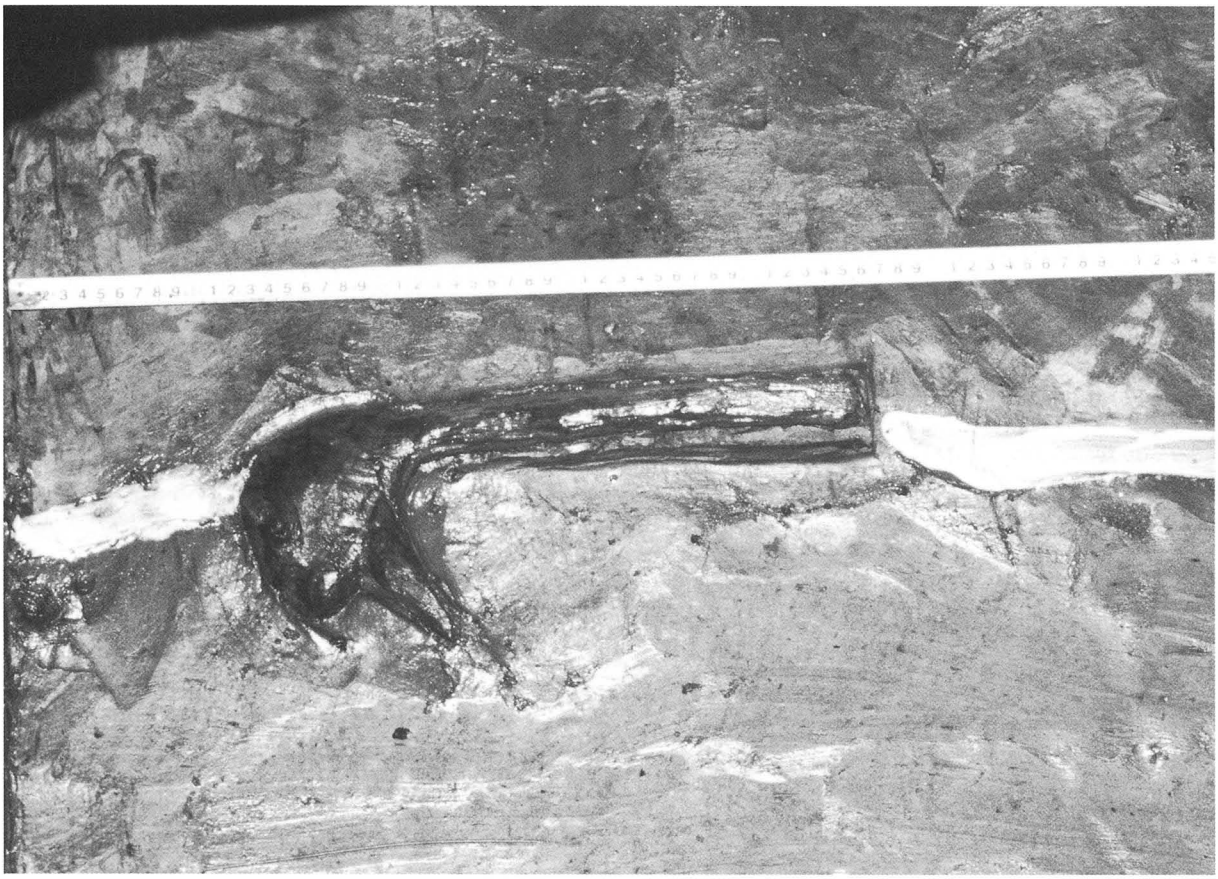
1. 第60次第19層上面　溝14～16　5・6地区　北より



2. 第60次第19層上面　溝17・18　7地区　南より

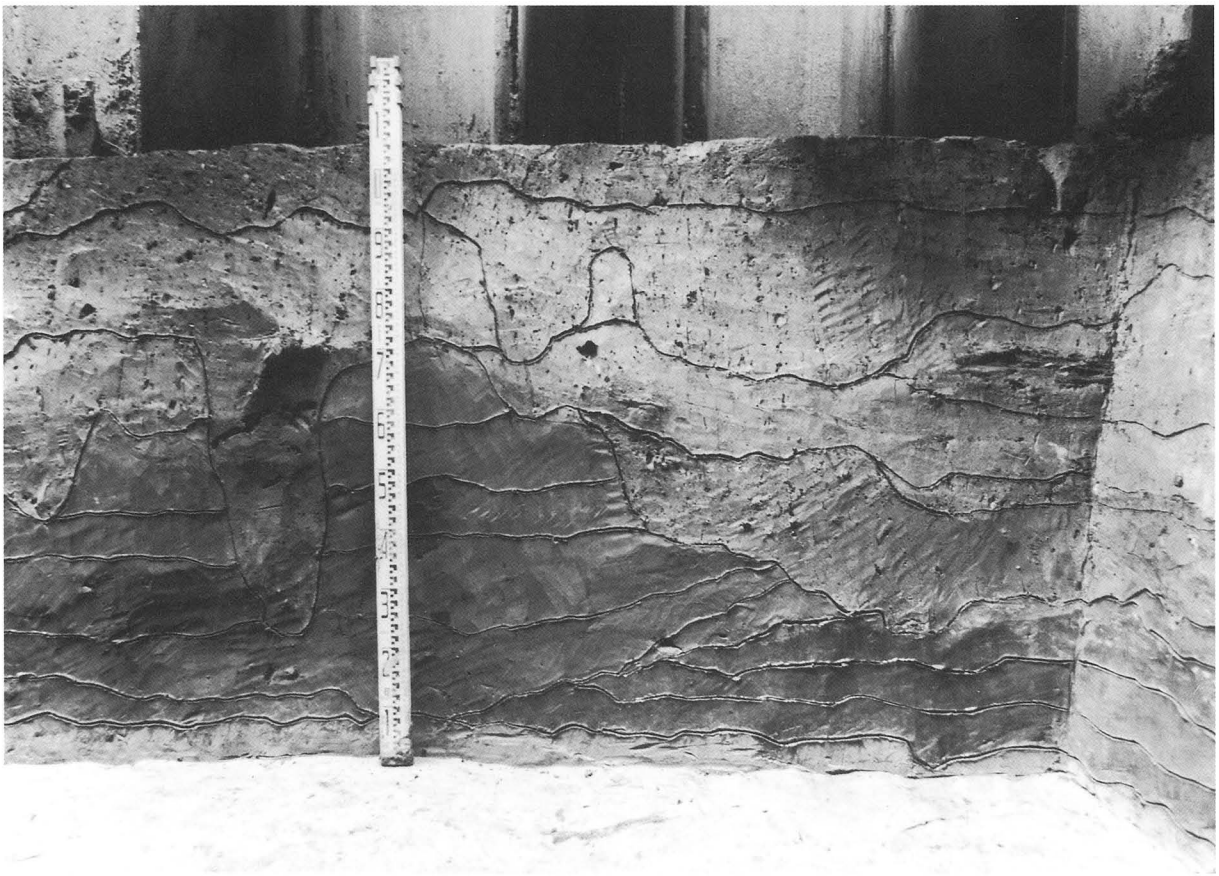


1. 第60次第18層上面　溝19　１地区　北より



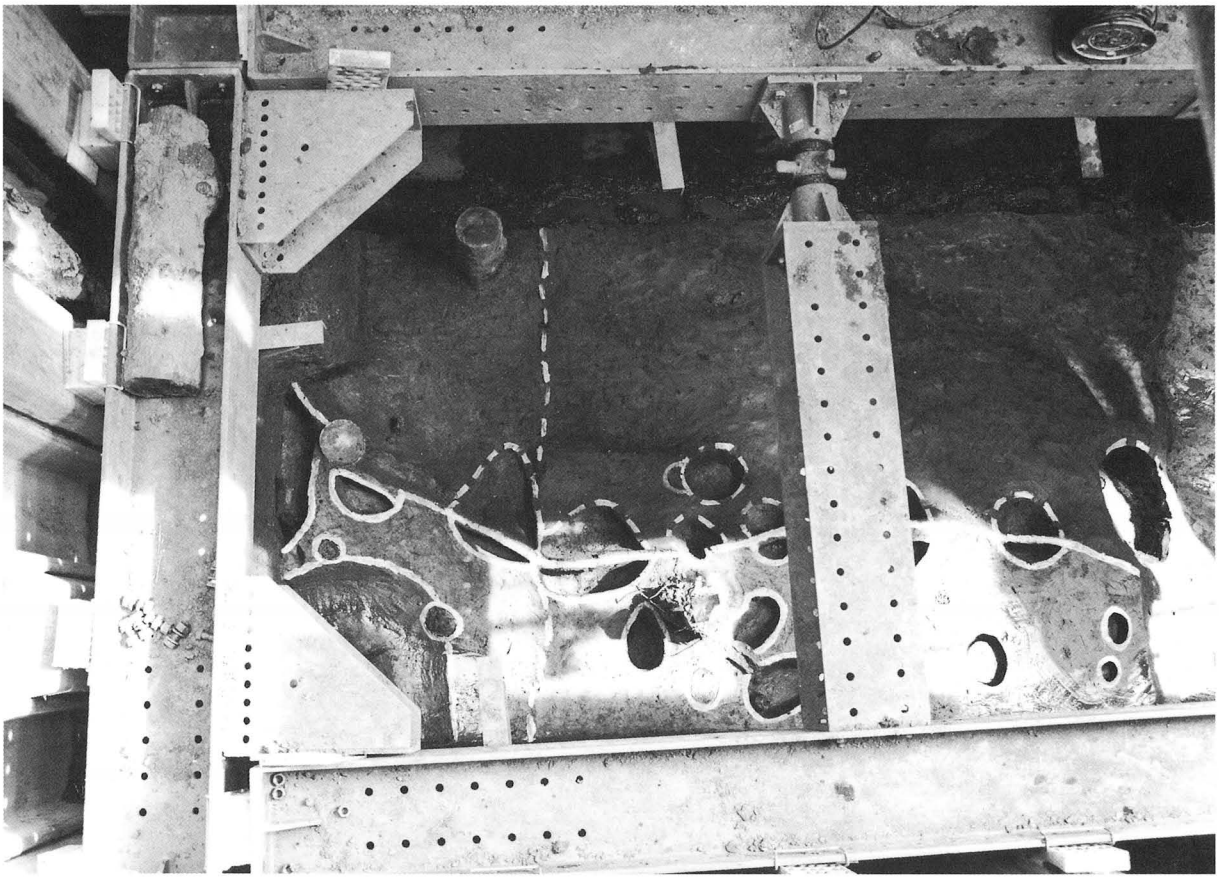
2. 第60次第18層上面　溝19内柄状木製品出土状況　１地区　南より

1. 第60次第16層上面　溝12　1地区　西より



2. 第60次第16層　溝12断面　1地区　東より

1. 第60次第16層上面遺構（1）１～４地区　南より



2. 第60次第16層上面遺構（2）１・２地区　西より